山口剛著

江戸文學研究

癸酉八月於翠連亭

秋艸道人會津題

著者肖像とその筆蹟

「大阪俳歌選」所載西鶴の肖像

近松作「鑓の權三重帷子」

（「國姓爺合戰の紅流しに就いて」參照）

京傳作「新板替道中助六」（「助六の成立とその變形」參照）

「偐紫田舎源氏」卅九編の初稿草稿　（「種彦研究」参照）

題簽　會津八一

序

むかしなにがし寺の名鐘は、大きく撞けば大きく鳴る、小さく撞けば小さく鳴るといはれた。丁度そのやうに山口君も大きく撞きさへすれば、隨分大きいものを書かれたのであらう。此の著述は、君に取つて決して大きい勢一ぱいのものではあるまい。しかしながら小さく撞かれても小さい好い音を出したといふ名鐘のやうに、これも小さいながら美しい立派な著述で、そして大望の君に取つても微笑の種となるべき一種會心の著述であつたであらうと思はれる。

山口君みづからの言によれば、君が窮極最大の目的は、新しい東洋美學の建立にあつたので、和漢の諸方面にわたる博大な蘊蓄は皆その前置の下拵に過ぎなかつたといふことである。さすれば此の一篇は君に取つて決して至善第一善のものではなかつたに相違ない。けれども君が特に江戸文學に執心して博大深

切を極められたことは、自他ともに許したところで、そこから見れば此の著は、君に取つて少なくとも次善であつたであらう。從つて此の著は君が遺著中の最高位を占むべきもので、我々は此の理想的の次善を現實的の一善となし得た事を、せめてもの慰めとすべきである。

此の著は君が亡き後に纂輯されたもので、豫め計畫を立てゝ組織されたものではない。けれども巨匠が折にふれたアト・ランドムは、隨篇玲瓏たる底光を見せて、引きつらぬれば瀨戶內に珠と散つた花彩列島の如き趣があり、のみならず、現はれて見えるのはわづかに花崗の危岩や緣の松をかざした離れ〳〵の島々だけだが、潮をかい干せば、底には無邊の巨大なる風光が隱されて、しかも島々相互の間には、奧深い大仕掛なる連絡のあることを暗示してゐるかのやうにも見える。卽ち此の著はそれ自身獨立しての立派な著述であり、同時に隱れたる廣大無邊を暗示するものとして、更に意味の深い著述なのである。

山口君は蓄ふるに貪つて表すに吝かなる人であつた。その吝かな出し不精の君が、せめて是れだけでも書き殘してくれたのは不幸中の幸で、私はこの一斑

によつて、君が無限量の全豹を偲び得ることを、同人間の大きな悦びと思ひ、同時に我が國文學界の更に大きな悦びと思ふのである。

昭和八年九月九日

五十嵐　力

江戸文學研究　目次

第一篇

第二篇

附錄篇　源氏物語研究

圖版目次

江戸文學研究

第一篇

西鶴好色本研究

一

この小稿はまづ「好色一代男」の考察を以てはじめる。

どんな者があつてのことか今からは知るよしもないが、西鶴の作には、匿名のものが多かつた。「一代男」にしても、西吟の跋文に、鶴翁の轉合書といふ斷りがなかつたら、一應は疑はれて、しかる後にそれと決定されるのであつたらう。或は西鶴署名のないために、その眞作も疑問視せられてゐるのもあらう。またそれとは違つて、西鶴の名が立派に記されてゐながら、時人また後人のさかしらに出づるものも少くなからう。西鶴の署名の存在は、彼の作であるか、ないかを決定する唯一の條件でなかつた。從つて世に西鶴本、西鶴物と稱する中には、疑問の書が多い。わけて好色本に屬するものに多かつた。

西鶴の好色本に就いて、幾分の立言をなす以上は、何を措いても、これ等の疑問を質すことを最先にすべきである。

しかし、書誌學上の研究も十分でなく、西鶴語格の研究の結果も、何等聞くことが出來ない今日に於いて、それを

先にするのは、武斷みづからを快しとせぬ限り、却つて疑惑から疑惑を生ませて、はてしなき迷路にわけ入らせることになる。故にさし當つては、世の西鶴を以てゆるし、みづからさう信じて疑はないもののみを對象とする。その他のものは、機あつて觸るゝあれば、すなはち觸れ、觸るゝに及ぶなきは、後を追はないことにする。畢竟は、どんなに範圍を狹めても、彼が本質に關する所を、二三にせずに濟むと思ふからである。

どんなに狹く限つたにせよ、西鶴の好色本が齎らせる問題は決して少きを苦まなかつた。それどころか「好色一代男」ただ一つを對象にしても、なほ言說の煩にたへざるものがあらう。

いろ〳〵の理由は西鶴の好色本を、西鶴が有する他の諸傾向の作物と切り離して考へることを困難ならしめる。西鶴好色本考察の窮極は、その困難のあるところを鮮明するにあるか、とも思はれる。

西鶴の好色本は、所詮性慾といふことに歸着する。しかし、西鶴がその性慾をどう扱つたかといふ問題が、そこから新に起つて來る。そも〳〵が好色といふ言葉は、直に性慾を意味してゐない。西鶴も好色本を草する場合に、性慾にのみ專らでなかつた。性慾を高調すると共に、それをおぼろにし、それを稀薄にする要素をも用ゐた。それを肯定すると共に、否定するが如き態度をもしば〳〵くりかへした。西鶴が何故にそれ等の要素を合せ有し、それ等の態度を合せ用ゐたか。またそれ等の錯雜交錯から、どんな現象が起るか、西鶴の好色本の考察は、何を措いてもこれ等を念としなければならなかつた。

特に切り離された好色本に對する考察の方法が、町人物に對する態度と區別されねばならぬ理由は、こゝにある。いふまでもない、町人物に於ける西鶴は金を描いて純一なることを期してゐたのである。

何故に西鶴は色に對しては不純に、金に對しては純一であつたか。彼の性慾觀がさうさせたのであらうか、或は好色本著作の日の俳諧から轉じて後、なほ多くの時を經過しなかつたためであらうか。こゝにもまた一問題が伏在してゐる。

以上の諸問題は、要約して、西吟がいふところの「轉合」といひ代へることが、むしろ便利であるかとも思はれる。西吟の「好色一代男」の跋の一節には斯うある

或時鶴翁の許に行て、穐の夜の樂寢、月にはきかしても余所には洩ぬむかしの文枕と、かいやり捨てられし中に、轉合書のあるを取集て、荒猿にうつして、稻臼を挽藁口鼻に讀てきかせ侍るに、婢諺田より閾あがり大笑ひ止す、鍬をかたけて手放つそかし

「一代男」を考察の對象とする時は、まづこの轉合を分析して、其中にくさ〴〵の要素の存在することを指摘し、また諸要素の結合の狀態を吟味すべきであらう。また「二代男」「一代女」「五人女」「男色大鑑」などを對象としては、「一代男」の轉合がどう推移し、變化したかを穿鑿すべきであらう。然る後に、これを綜合して、西鶴の好色本の本質を治定すべきであらう。

この小稿が「好色一代男」の轉合觀を以てはじまる所以である。

しかし、限りある範圍に於いて、果して豫期するところを成し得るか、どうかを知らない。或は說いて轉合の一二を分析するにとゞまるかを、そのはじめから危ぶんでゐる。

二

「好色一代男」の考察はまづ巻一、主人公世之介の七歳の章「けした所が戀のはじまり」の分析を以てはじめる。つまるところは、あまりに多い「一代男」が含む諸問題を、ある程度まで、作者みづからをして限定させようためである。

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の國、かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寢ても覺めても、夢介と、かへ名よばれて、名古や三左、加賀の八などゝ、七ツ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一条通り、夜更て戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又は、たて髮かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし、それも彥七が皃して、願はくば咀(かみ)ころされてもと、通へば、なほ見捨難くて、其比名高き中にも、かづらき、かほる、三夕、思ひ〳〵に身請して、嵯峨に引込(ひつこみ)或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹より、むまれて世之介ト名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし、

「一代男」は、七歳にして戀を知り、六十歳にしてなほ女護島わたりする世之介五十四年の好色の生涯を叙する。それにしてはふさはしからぬ無常哀愁の第一句である。「一代男」は作者また新文體に意があつたといはれてゐる。それがどうして、かぎりありて入佐山などの常套句を用ゐたのであらうか。かた〴〵解し難き起筆であつた。

入佐山は但馬の歌枕である。されば他奇なき「爰に但馬の國」である。但馬の國かねほる里の邊にとあるのは、

生野附近といふことであらうか。生野の鑛山は、天文十一年二月から採掘されたといふ。石見佐摩の銀山の採掘方法が傳へられて以來、天和の頃にもひきつづいて隆盛であつたとのことである。世之介の父がそこの住人であるとすれば、鑛山師を意味するのであらうか。それともたゞ銀山の緣を以て、富豪を示すのであらうか。

父のかへ名は夢介とよばれてゐる。その子の世之介の世は浮世である。卷一、十歳の章には、すでに「浮世の介」ともしるされてゐる。浮世は、その頃の用例としては、まさしく今いふところの現代また現實に當る。その名によつて、父と子に夢と現實との對をなさせる西鶴の肚裏のものが、何であるか、まづ知らればならない。

世之介の母親のたれであるかは詳でない。たゞその比名高き太夫の中なるかつらぎ、かほる、三夕のどれかであつた。西鶴は「此うちの腹よりむまれて世之介ト名によぶ」とのみいつてゐる。西鶴は何故に、どれがそれと明にさしていはなかつたのであらうか。一筆の勞を吝む理由を知りたく思ふ。

西鶴はまた世之介に就いて、「あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」と言つてゐる。果して、彼の言の如くその人あつてこの事があつたのであらうか。その事は存しながら、その人はなかつたのであらうか。西鶴の思はせぶりは、何故であらうか。

西鶴には、ともすれば讀者を欺いて呵々と笑ふ癖があつた。これ等の記事を讀むに當つても、相應の戒心を要とする。西鶴はしるしてゐる、その世之介は七歳になつた。夏の一夜、腰元に手燭ともさせて、しとに起きた。

お手水の、ぬれ緣ひしぎ竹の、あらけなきに、かな釘の、かしらも御こゝろもとなく、ひかりなを、見せまいらすれば、其火けして、近くへと、仰られける、御あしもと、大事がりて、かく奉るを、いかにして、闇がり

なしてはと、御言葉をかへし申せば、うちうなつかせ給ひ、戀は闇と、いふ事をしらずやと、仰せられける程に、御まもりわきさし持たる女、息ふき懸て、御のぞみに、なしたてまつれば、左のふり袖を引たまひて、乳母はいぬかと、仰らるゝこそ、おかし、

西鶴の日に、しるされたやうな早熟の子があつたらうか。成程、西鶴も「是をたとへて、あまの浮橋のもと、まだ本の事も、さだまらずして、はや御こゝろさしは通ひ侍る」と腰元をして思はせてゐるが、なほその腰元をして、「つゝまず奥様に申」させる。しかも「奥様に申て御よろこびのはじめ成べし」とある。世に或は變態早熟の子はあらう。しかし、それを喜ぶ母が世にあらうか。西鶴がこの作にいはんとするものが、何であるかゞ、いよ〳〵考へさせられる。

七歳の世之介は、頻りに戀に責められてゐる。姿繪も集める、比翼鳥のおり居も作る、それを連理の造り枝に結びもする。西鶴は、こまやかに記しをはつて、七歳の章「けした所が戀はじめ」を結ぶ。結ぶに當つて、斯ういつてゐる。

五十四歳まで、たはふれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび、七百二十五人手日記にしる、戯れた女、少人の數の多少は問題でない。西鶴は何故に、さうまで精細の數を傳へながら、世之介の六十歳を、五十四歳といふのであらうか。そこに何等かの作意が伏在するのであらうか。それとも一時の過失であらうか。もし過失であるとすれば、折から彼の心を奪つたものは何であつたらうか。

三

「一代男」が「源氏物語」の模倣であることは、最も明かな事實である。

三十四歳の世之介は、勘當の身を泉州の佐野、迦葉寺、迦陀などに浦住ひしてゐた。そこの女共と舟遊びして、雷雨に遭ひ、一人浪に寄せられて漸く助かつた。間もなく父の訃報を得、そのまゝ家に迎へられて遺產を受ける。こゝに大々々盡となつたとある。すなはち「源氏物語」の「須磨」「明石」あたりの源氏君の行跡をうつし傳へたものであつた。

六十歳の世之介は女護島渡りする。「戀風にまかせ、伊豆の國より、日和見すまし、天和二年、神無月の末に行方しれず成にけり」これが「一代男」の結びの言葉である。すなはち、卷の名のみあつて、その文なき「雲隱」を下に構へての趣向であつた。

かゝる大綱を外にして、中ごろにも「夕顔」をうつした卷四「因果の闘守」あたりが、顯著な事例として指摘せられる。殊に目錄の各條に世之介の年齢をしるしたのが、源氏の年立の模倣であることは、いふまでもなかつた。

かゝる事實を前にして、さきに疑問とした「五十四歳」を見直すと、西鶴の過失の偶然でないことが注意せられる。西鶴が世之介の一代記を書いて、事件を七歳から六十歳までの五十四年に配したのは、もとより五十四帖に擬してのことである。五十四帖意識は彼にあつては強かつた。六十歳の本卦がへりの意識よりも強かつた。その五十四帖の五十四が、ふと六十を過らせたのである。

「好色一代男」を書きはじめる時の西鶴の念頭には、かうまで「源氏物語」があつたとして、改めて「桐壺」を讀み直すと、さきに提示しておいた疑問の幾つかゞ、どうやら片寄せられさうである。

さすがにものゝあはれの權化たる源氏の君の父にふさはしい桐壺の帝であつた。帝が源氏の君の母桐壺更衣に對する纒綿の情を、詳に書いしるしたのが「桐壺」の卷である。この卷には、また幼き源氏の君の聰明に就いても細やかにしるしてある。西鶴は大體に於いて、そのおもかげを取つた。しかもなほ移して精しいものがある。

源氏の君のふみはじめは七歳の時であつた。その聰明は漢學などはいふまでもなく、琴笛にも長じてゐた。「すべて言ひ續けば、事々しううたてぞなりぬべき人の御様なりける」と本文にしるされてゐる。西鶴の日の町人には要なき學藝である。わけて性慾を基調とする作家西鶴である。その聰明を直に飜して世之介の性的早熟とした。言ひ續けば事々しうと原作に避けたのを、具體的にとり戻す時に「戀は闇」となつたのである。

それにしても世之介の七歳は、いかな早熟としてもあまりに甚しい。或は五十四の數を重じてする西鶴が、六十歳から逆算した結果、かういふ無理が出來たのかとも、思はせられる。しかし、その數よりも本文に重きをおいた西鶴は、とくに源氏君の早熟を本文の中に見出してゐた。

御かた〴〵もかくれ給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち解けぬあそびぐさに、誰も〳〵おもひきこえ給へり。

御かた〴〵とは女御更衣をさしていふとのこと、さればお腰元衆といつてもよい。その腰元衆に相應心づかひさせる源氏君のなまめかしさは、恥しさは、七歳の時から見られたのである。西鶴はその事柄をとり用ゐると共に、そ

の言葉をもあだにはしなかつた。こゝはさきに引用しなかつたが、斯うかいてある。

身はへうぶきやう、袖に燒かけ、いたづらなる、よせい、おとなも、はづかしく、女のこゝろをうごかゝさせ――

また西鶴はその次をうけて斯うも書いてゐる。

同じ友とちと、まじはる事も烏賊のぼせし、空をも見ず、雲に懸はしとはむかし天へも、流星人ありや、一年に、一夜のほし雨ふりてあはぬ時の、こゝろはと、遠き所までを悲しみ……

幼き源氏が星合の空眺めて、かういふ詠歎を漏らしたことは、つひに本文には見えない。しかし本文には十二歳の源氏が、心ひそかに藤壺の君を慕ふ旨が語られてある。それが「桐壺」の結びをなしてゐる。

もとの木立、山のたゞずまひ、おもしろき所なるを、池のこゝろ廣くなして、めでたく造りのゝしる、かゝる所に、思ふやうならむ人をすゑて、住まばやとのみ、歎かしう思しわたる。

西鶴は源氏君の惱みを、後の事件から切り離して、たゞ戀を戀ふる心持だけを、七歳の世之介に移さうとする。それには紙鳶遊びが必要である、紙鳶の空から星合の空が必要となつたのである。西鶴が本文にあと附ける見えがくれの態度は大方からであつた。

から見て來れば、少くとも七歳の世之介は源氏君であつた。「むまれて世之介ト名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」とあるのは、本文の「世の人光君と聞ゆ」とある筆意を模しながら、直に源氏君を暗示するのであらうか。しかし、世之介の生涯は必ずしも源氏君をモデルとしてのみ書かれてゐなかつた。ある歳の

世之介には、その頃の人の誰もが、それと名ざすことの出來る實在の粹者を隱したのである。知る人ぞ知るぞかしとは、例の摸索その宜しきに從へとの筆法であらうか。虛と實との交錯、それが西吟のいふところの轉合の一つであらうか。

轉合といへば、「櫻もちるに歎き、月もかぎりありて入佐山」の起句にも、何かありさうに思はれる。この句は、「浮世の事を外にして」の浮世を、原義憂世に戾して、いひ續けるものとも思はれなかつた。この浮世はどうしても生計活路の意と解せられる。それならば、やゝ離れて夢介の夢に應ずるものであらうか。それ等の無常を一切の夢と觀じて、享樂三昧する夢介をよび出すまでの洒落句であらうか。或はその無常感を、六十歲にしてなほ女護島わたりする歎きなく、限りを知らぬ心境に對應させたのであらうか。さきにふさはしからぬと見たのが僻目で、却つて作者の肚を辨へなかつたのであらうか。つひに曖昧極まる一句であつた。

それとも、西鶴が但馬、入佐山の緣を以て、月をいひ、さて花をいひ出すまでの無造作の言葉であらうか。その無造作は、西鶴がなほ歌枕趣味に徘徊してゐることを明示する。ましては、月と入佐山を結ぶのは古歌の常であるが、例歌はまた『源氏物語』の中にも見出される。

　里わかぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる

　あづさ弓いるさの山にまどふかなほのみし月のかげや見ゆると

この「末摘花」「花宴」の二首が必ずしも起句と因緣ありといふのでない。またそれまでを拉し來つて、西鶴と「源氏物語」を結ぶ要はなかつた。たゞ起句が、これ等の古典趣味を背景とすることを知ればよいのである。

この一句が深く考へられた結果であるか、無造作のためであるかは、こゝの問題でない。とにかくに新時代の新文化生活を描きなす「一代男」を、ともすれば古典仕立にする西鶴の曖昧な態度に注目すればよかつた。新と舊との交錯、それが西鶴が無意識にも、また意識しつゝもなした要求であらうか。さうすれば、源氏君と、世之介の關係の如きは、わづかにこの要求の一端に過ぎない譯である。この要求の必然と偶然が何であるかが問題である。

更にまた起句にいふが如き、無常感が古き心ながらに依然として、西鶴に存在してゐたらどうであらうか。或は西鶴が、さもそれを存在してゐるやうに、見せかけてゐたとしたら、どうであらう。これは「一代男」にも、その他の好色本にも極めて大きい問題を成立させる。

またこんな事も考へられる。しるされてゐるやうに、夢介の遊樂ぶりは、まだ〳〵粗野の極みであつた。天和の遊樂を標準としていへば、狂態といはうほどに、一昔以前は粹の何たるを解してゐなかつた。しかし、夢は宜しきに會へば現實となる。現實を名におふ世之介の粹は、畢竟この遊びを露拂にしなければならなかつた。西鶴は父夢介から筆を起して世之介の生涯を叙した。それはおのづから粹の夢が現實化する徑路を說くことになる。說き來りて色道の妙諦に達するまで筆を續けたのである。

しば〳〵繰りかへさるべき「一代男」と「源氏物語」の比較は、飜案のあとを辿ると共に、この色道と、かのものゝあはれのけぢめを、考へることを要求してゐる。

色道の夢が、現實化されるためには、いかなる條件が必要であるかは、「一代男」とよりは、西鶴の好色本全體に亙る問題である。しかし、この「けした所が戀のはじまり」の一章に於いても、すでに、富の重要條件であること

が明示せられてゐる。

ものゝあはれを眞に體得するためには、位司を重要な條件としたのは、平安朝の物語であつた。當代に於いては富がその代りをなしてゐる。西鶴は、世之介のために富を與へようとする。故にまづ夢介を富豪とした。彼を生野あたりに住はせたのは、何も鑛山成金にするためでなかつた。一富豪を拉し來ればよかつたのである。

斯くして「一代男」は、一面當代の理想小說として、富豪の生活を描くことでもあつた。その頃、果して夢介、世之介のやうな富豪があつたか。少くともその頃の人々に、それと推定される者があつたかは、後の問題である。それは町人物と聯關して考ふべきことであつた。こゝには、例の西鶴の轉合を指示すれば足りる。

西鶴は六十歲の世之介が、女護島に渡るに當つて、このやうな事をしたと記してゐる。

ありつる寶を投捨、殘りし金子、六千兩、東山の奧ふかく、堀埋めて、其の上に宇治石を直て、朝顏のつるをはゝせて、かの石に一首きり付て讀り、夕日影朝顏の咲、其下に六千兩の光殘して、と、欲のふかき、世の人にかたられけれ共、所はどこともしれ難し、

古くから行はれてゐる長者傳說の中に、大方長者がいろ〳〵の珍寶を人知れず埋藏したことを傳へる。その寶の所在はつひにさだかでなくして、歌一首が人々の口の端に遺つてゐる。歌の言葉は土地々々によつて、違つてゐるが、寶の所在は朝日さし、夕日輝くあたりといふことになつてゐる。

朝日さし夕日かゞやく木のしたに黃金千盃漆千盃

これが最も多く知られてゐる歌である。世之介の夕日影の歌は、その改作に過ぎなかつた。西鶴は口碑に傳へる長

者までを世之介に結びつける。しかも、さも世にその人あるやうに語つてゐる。こゝにも虚實錯綜する世之介の存在を見る。その錯雜を知る人をして、西吟がいふ娌謗と同じく大笑ひに笑はせるのが彼の計畫であつたらう。

富は粹に到達させる必須の條件であるが、更に重んずべきは、その人である。西鶴はまづ世之介の父を說き、母を說いた。父はともあれ、母を都島原の太夫にしたのは、世之介の極めて好ましい遺傳を有することを語るものであつた。西鶴は何故に母の名を傳へなかつたか。その意、けだし、太夫の階級たることを明にすればよかつた。そのかほる、三夕、かつらぎのどれであつてもよかつたのである。

明曆二年「まさりぐさ」にいふ、

判云先此名不都合也。惣じて太夫天神かこひの名とて、別々にわかちて有る也。然れども亡八文盲成によつて、わが持たる女郎の最屓といひ、又其家につきたる名なども有、よき名といふを幸に、女郎の高下をもわかたず、むりやりに名づくる事也。たとへば

吉野　野風　三夕　葛城　萬重　浮船　初音　唐土　薫　八千代

などいふは、しかと太夫分の名にて、おぼろげの女郎に付べき名にあらず、さるをあやしきかこひ半夜などにも此名有り、痛むべし、悲しむべし。

「まさりぐさ」の作者の言は、いつも山だしの新造のやうな遊女が、野風と名乘ることとの不埒沙汰に發する。西鶴が、特に葛城、薫、三夕といふのは、彼の太夫に於ける尙古趣味に基づく。見るところおのづから「まさりぐさ」と一致する。ましてー篇の趣向から見る時代の關係は、天和より以前のおしもおされもしない太夫名を擧げなくて

はならなかつた。三つの名の選びがある所以である。

さすがに太夫出の母である。わが子が幼くて粋の權化たり、色道の達者たる資格を有することを聞いては、嬉しがらぬ筈はない。西鶴は「御よろこびのはじめ成べし」といつた。少くとも、この發端に於いては、西鶴は斯う解したのである。

されば西鶴は「一代男」の出發に於いて、いろ〱の意味に於ける理想小說を書かうとしたのである。しかもその理想が寫實と密接の關係を持することは勿論である。

四

「消したところが戀のはじまり」の章に見ゆる轉合の要素は多かつた。いづれを先といふことはないが、まづ「源氏物語」の飜案から考へてみる。

「桐壺」に端を發した飜案は、もの〻順序として「帚木」に移らねばならなかつた。「はづかしながら文言葉」がそれである。

「帚木」の雨夜の品さだめの中には、頭中將が源氏君の御厨子から文どもひき出でて讀むくだりがある。その文はこれと書かれてゐない。たゞ源氏君がとかく紛らはしつ〻とり隱し給ひつとのみある。西鶴はその文の一つを極めて具體的に現はさうとした。世之介の從姉にあてた戀文がそれである。

西鶴は、その文を候文體と口語體とをとり交ぜて、八歳の子のらしくする。また細やかに句讀を切つて、世之介

が指南坊に口授する調子を示さうとした。原本の句讀を正しく寫せば斯うである。

今更馴々しく、御入候へ共、たへかねて申まいらせ候　大形目つきにても、御合點有べし、二三日跡に、姨さまの、晝寢を、なされた時、こなたの糸まきを、あるともしらず、踏わりました、すこしも、くるしう、御座らぬと、御はらの、立さうな事を、腹御立候はぬは、定而、おれに、しのふで、いゝたい事が御座るか、御座るならば、聞まいらせ、候べし、

このやうな「源氏物語」の與り知らぬ趣向立をする西鶴は、また別様の筋立をさへとり入れた。兼好の艶書の代筆沙汰であつた。兼好はこゝでは世之介の指南坊である。とんだ嫌疑をうけた彼の法師が「惣じて物毎に、外なる事は賴まれても、かく事なかれ」といふのは、例の兼好の癖である教訓の口吻を模するものであつた。

西鶴はかゝる戯れの中にも、いはゞ一篇の本筋ともいふべき性生活の展開の徑路に就いていふことを忘れなかつた。腰元から從姉へ、多くの性的記錄の示すところの事例が、こゝに見られる。

あれにも、これにも亙る西鶴の用意を合はせ述べることは、ものゝ混亂をおそれる。西鶴の「源氏物語」の飜案といふものは、決してそれの一筋をのみ追つてゐないことを一言して、しばらくは、專らその飜案のあとを辿らうとする。

「帚木」につゞく「空蟬」がまた西鶴の飜案の料となつた。

源氏君は空蟬の宿に忍び行きて、空蟬と軒端荻が碁を打つのを垣間見る。軒端荻の姿が殘るところなく見られる。

「紅の腰ひき結へるきはまで、胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり、いと白うをかしげに、つぶ〳〵と肥えて、

そゞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ口つきいと愛敬づき、花やかなるかたちなり」、『源氏』にいふところはたゞこれだけであつた。西鶴はそれでは慊らなかつた。仲居ぐらゐの女房を素裸にさせる。なほ足れりとしない。「我より外には、松の聲、若きかば、壁に耳みる人はあらしと、ながれはすねのあとをもはぢぬ臍のあたりの、垢かき流し、なほそれよりそこらも糠袋にみだれて、かきわたる湯玉、油ぎりてなん」それだけでなかつた。世之介をして亭の遠眼鏡を取持て、「わけなき事ども」すなはち女が沙汰せられて困る「今の事」を見咎めさせるのであつた。

「一代男」にして、はじめて存在する垣間見であつた。俳諧師西鶴の阿蘭陀流がこゝにも見られる。

行水の女を見咎めた世之介は、その夜忍んでいつた。西鶴がその女に就いてしるしてゐることは極めて朦朧としてゐる。「女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後」しか〳〵とも見える。と思へば、世之介に膝枕されて「よもやたゞ事とは人々も見まじ」しか〳〵とも見える。女と世之介の關係がどうであつたかを明瞭に語らない。

行水の女は、前には軒端荻であり、後には空蟬であることはいふ迄もなかつた。或はこの曖昧も、西鶴がわざとの筆の跡であらうか。事は「帚木」に戻る譯であるが、源氏君がはじめて中川の宿で空蟬に逢うたその夜の關係はどうであつたか。今の「源氏」の讀者は、その夜だけは許した空蟬と解してゐる。しかし、その頃の註家は必ずしもさうのみは取らなかつた。例へば「湖月抄」に引くところも或は實事ありとし、或は實事なしとする。兩說未だ決せざる形をなしてゐる。西鶴の筆の朧ろなるはこれに拘はつてゐるのであらうか。かうも思ひながら、鑿解に過ぎることをおそれてゐる。

五

「袖の時雨は懸るがさいはい」には、十歳の世之介がさる男に衆道心を寄せて、つひに靡かせる顛末を語る。その男には年比命はそれにと思ふ若衆があつた。その人ゆゑに、男はすぐに世之介の心に從はない。と知つた若衆は、さりとはむごき御心入りと、自ら媒して世之介の仲をとり持つて身は外になしたとある。

これをしも、「帚木」「空蟬」に見えたる源氏君と小君との關係と見るのは、前にもまさつて過ぎたる穿鑿であらうか。またそれをおそれながら、「源氏」を讀み直して見る。

「帚木」のをはりにある。

　よしあこだにも捨てそと宣ひて、御傍に臥せ給へり、若くなつかしき御有樣を、うれしく、めでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なか〳〵あはれにおぼさるとぞ。

源氏君は、どうしても空蟬に逢ふことがかなはなかつた。悶々の情は、わづかに空蟬の弟小君を側に寢させてみづからを慰める。小君は源氏の君若くなつかしきを嬉しくもめでたくも見る。さう知つて源氏君は空蟬よりも却つて可愛くなるのであつた。

「空蟬」のはじめには、斯うある。

文は直に「帚木」のをはりに續いてゐる。

　寢られ給はぬまゝに、われはかく人に憎まれてもならはぬを、今宵なんはじめて憂しと世を思ひ知りぬれば、

はづかしうて永らふまじくこそ思ひなりぬれ、などのたまへば涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしとおぼす。てさぐりの細く小きほど、髮のいと長からざりしけはひのさま、似かよひたるも思ひなしにやあはれなり。

前文に於いて、源氏君が念者としての愛を、小君に注ぐやうにほの見せてゐたのは、こゝに至つて極めて明瞭となる。「源氏」の中から男色を見出すの註は、何も萩原廣道の「評釋」を待たなかつた。色道二つに目を配る西鶴は、すぐにそれほどの敏感があつたと見てもよささうである。

「永らふまじく」と歎くのは、源氏君である。「涙をさへこぼ」すのは小君である。小君は源氏君に愛されるをうれしと思ふまゝに、その心の悩みにかぎりなき同情を寄せてゐる。

源氏君は、小君に、「さりぬべき折を見て對面すべくたばかれ」とのたまはされる。小君は、それを「わづらはしけれど、かゝる方にてものたまひまつはすは、嬉しうおぼえ」るのであつた。空蟬の夫紀伊守の留守のほどに、小君は源氏君を案内した。彼が源氏君に對する同情は、おのが源氏君から棄てられるをいとはなかつたのである。この小君の心は、すなはち「袖の時雨は懸るがさいはい」の若衆の情であつた。

西鶴の「源氏物語」飜案に於ける態度は二三でなかつた。必ずしも源氏君を世之介にのみ仕立直さない。形と影の關係は、すべて事の便宜に從つてゐる。これほどの穿鑿は、西鶴に於いては必ずしも過ぎたりといはずものことと思はれる。さう思へば、西鶴がその章の結びに「おもひの中の、中川の橋かけそめて」といつた中川といふ言葉もまた棄て難き一つであつた。

世之介が若衆たるべき齢して、何故に念者を口說き立てるか、それが粉本はついに「源氏」には見出されなかつた。けだし作者の別意より出づる。しかも西鶴として最も重要な條件であつた。後にいふことにする。

世之介十一歳にして伏見の撞木町に遊ぶ。その里一人の貧者を親方とする遊女のもとにゆく。よろづ不自由がちなる中にもやさしき女の心根をいとほしく、その親もとを尋ねる。親は相應の武士であつたのが、今も昔忘れぬゆかしさを見せた。「尋てきく程ちぎり」といふのがそれ。

十二歳の世之介は須磨の浦に遊んで、蜑女のわけもなう磯臭いのに困じた。又の日、兵庫に行つて湯女に戯れた。こゝにもさもしい風俗を見せつけられる。この章、題して「煩惱の垢かき」といふ。

十三歳の世之介は清水八坂のいやしき遊女に戯れた。その家の樣、女のけはひ、いふに甲斐なきものであつた。「別れは當座ばらひ」といふのがそれである。

以上三章、すべて「帚木」雨夜の品さだめのかゝりと見られる。品さだめとは、女を上中下の三階級に分ち評することであつた。馬頭の評言にいふ、「さて、世にありと人に知られず、淋しくあばれたらむ葎の門に、思ひの外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなく珍らしくは覺えめ。いかではた斯りけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心とまるわざなるべき」西鶴はその珍しき人の例を、撞木町の貧しき妓家にもとめ出でたのであつた。世之介がその女ゆかしと見て、侶の瀨平に尋ねる言葉、

此君は何として、懸るしなくだりたる宿に置けるぞ

の品下れるは、西鶴がその據りどころをほの見せたのである。

馬頭の言はまた續けて、「父の年老い、物むつかしげにふとりすぎ、兄の顏にくげに思ひやり異なることなき閨の内に」意外な娘や妹の存在するおもしろさを語つてゐる。その父を逆用して、義ある浪士とし、撞木町の遊女の父としたのが、西鶴の轉合である。この場合はまた西鶴の俳諧ともいひ代へられる。「煩惱の垢かき」「別れは當座ばらひ」共に、雨夜の品さだめにいふ下の下を傳へるものであつた。兵庫の湯女のさもしい風俗を書いしるしたあとで、丹前風呂の勝山に就いていふのも、畢竟は、湯女の中での品さだめである。西鶴が自ら馬頭を以て任じたのである。

六

「一代男」の卷一の八章を、かう見ると、どれもどれも「源氏物語」の飜案であつた。卷二もまた序次を以て「夕顏」からはじまつてゐる。しかも、西鶴は極めて周到の用意のもとになしてゐた。「はにふの寢道具」は一つ一つ本據と看比べて、はじめて、作の意を知り、作のおもしろさを味ひ得る。おもふに、西鶴が本文をゆがめ、ねぢつて、滑稽を横溢させるために、得意の俳諧手段を最もよく弄したところであらう。その點からいへば「一代男」のみか、好色本全體の白眉の章と思はれる。煩はしけれど、より〳〵に全文を引くことにする。

其年、十四の春も過、ころもあらためて、着更る朔日より、袖などをふさぎて、世の人に惜しまるゝも後つきぞかし、

この一節は、たゞ章のをはりに應ずるためである。別に「夕顏」と關はつてゐない。

聊おもふ事ありて、初瀬にこゝろさしける、一人ふたり、召仕を伴ひ、雲井の舎りといふ、坂を上りて、人はいさ心もしらずと、貫之が讀し梅も、青葉なる山ふかく、起誓かけまくも、かたじけなき返事をとる事、いつ迄かとつぶやきけるを聞て、又此度もかなふまでの戀をいのらるゝと、おもふぞかし、

一事一物の解は避ける。「夕顔」と結ぶ關係に就いてのみいさゝかの言葉を添へる。初瀬の一語、文の表はその頃の信仰に繋ぐに過ぎなかつた。しかし、雲井の舎、貫之の梅と一つになりて、かすかに、ほのかに、平安朝の氣分を搖曳させてゐる。「源氏物語」の中でも、わけて聞えたる卷のおもかげであるこの章には、飜案にそれほどの用意を缺かすべきでなかつた。

つぶやく者は世之介、聞いておもふ者は召仕、「いのらるゝ」の敬語は、召仕の言葉であることを明にする。「いつ迄か」の後の言葉は、まだ世之介の口の中にあるその折に、はやくも召仕は、わが主人が古き戀を捨てゝ、またぞろ新しき戀に向つてゐると察したのである。これほどに、早解りする召仕は、すでに「夕顔」にゐた。惟光のもとを訪ふ折に、おん供申した隨身その人である。源氏君は車ながらに、おのれひとりゑみの眉ひらく花を見た。おもはず「をち方人に物まうす」と獨言せられた。隨身はついゐて、「かの白くさけるをなん夕顔と申侍る、花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲き侍る」と申上げた。隨身は源氏の半句を耳にすると共に、その意が白き花の名にあることを知つた。「打わたすをち方人に物まうすわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」の歌は、もとより彼の諳んずるところであつた。西鶴は直にその呼吸をとり來つたのである。

西鶴の文は、本文の會話の輪廓を引くと共に、その內容をも共してゐた。

世之介が「かたじけなき返事をとる事、いつ迄か」といふ「いつ迄か」は、もとよりいつ迄か待たんの意である。その返事を一日も早く手に入れたやと思へばこそ、觀音のおん前にも祈願したのである。それはおもかげである。本據たる源氏君は、藤壺の御方の返事をこそ待つてゐた。「秋にもなりぬ、人やりならず心づくしにおもほしみだること共あり」といふのは、その間の消息を傳へるものであつた。「かけまくもかたじけなき」この一句をおもかげの緣として、西鶴はうつし出したのである。

西鶴は、召仕をして世之介のつぶやきを解して、かたじけなき返事をいつ迄か待たん、待つの要なしと思はせ、さて、又今度もかなふまで戀をいのらるゝと思はせたのも、やはり「夕顏」があるためであつた。

「夕顏」の源氏君は、六條御息所のもとに通はれる。御息所のまだゆるさぬほど、源氏君は限りなき狂熱を寄せる。しかし一度戀がかなへば、熱はとみに冷める。あやにくなのが源氏君の性癖であつた。「六條わたりにも、とけがたかりし御けしきを、おもむけきこえ給ひて後、ひきかへしなのめならむは、いとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり」と本文に見える。さすがは、西鶴である。これを輕く「逢ふまでの戀」に要約してゐる。そこに御息所と藤壺との混亂があるのも、それは咎める必要がなかつた。却つて西鶴の俳諧のをかしさが見られる。

西鶴の筆は召仕が主人の態度に慊らず、また新な戀の使を煩はしとする意あることを傳へる。「思ふ事ぞかし」の一語の重さがわけてさう考へさせる。それにもまた本據があつた。源氏君は夕顏の扇の歌を見て、新しき戀を思つた。惟光に何者ぞと問はれる。惟光は例のうるさき御心とは思ひながら、さうも申されず、「隣のことはえ聞き侍ら

ずなど、はしたなげに聞ゆ」と本文に見えてゐる。

歸るさは、過ぎにし花の思はるゝ、櫻井の里をすぎ、十市、布留の神やしろを、北に詠こして暮におよへは、椋橋山の麓に、かすかなる草の屋に、折しも、麥も穐のなかば、から竿の音のみ、里の童部、ねぢ籠、あまかへるの家などして、塵塚より、なた豆といふ物、いと笑しく、生さがりたる、垣根を見れば、今こそ今と思はるゝ、脇あけの、下人に風情を、つくらるゝもあり、

西鶴は、まづ五條あたりの夕をそのまゝに、「暮におよべば」といつた。きりかけだつ物にはひかゝる夕顔を、塵塚のなた豆の生さがる垣根とした。さては彼のから臼を、から竿に、あやしう打よろぼひて、むね／＼しからぬ軒を、あまがへるの家にうつしとつた。西鶴の細心は、夕顔の花を折る隨身と扇をさし出す女の童のとり合せをも忘れなかつた。

(隨身)このおしあげたる門に入りて折る。さすがにざれたるやり戸口に、黄なるすゞしの單袴、長く着なしたるわらはのをかしげなる出で來て、うち招く、白き扇のいたうこがしたるを、これに置きてまゐらせよ、枝も情なげなめる花をとてとらせたれば云々。

この風情を男色に仕立てるとて、その女の童を、今こそ今と思はるゝ眞盛りの脇あけとし、隨身を下人としたのである。下人はいふまでもない、世之介の召使であつた。

髪結ふけしき常ならず、紙ひほの編笠の樣子、懸る所にはと、尋ねられけるに、此里に仁王堂と申て、京大阪の飛子、しのび宿なると、よろつに付て、我しり貌に語りけるに、

「髮結ふけしき常ならず」とは、句の表には、飛子の色めかす髮の結びぶりを描き出しながら、裏には例の「夕顏」を寓するのである。源氏君は夕顏の宿を見る。「簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えて覗く」けしきを見た。「たちさまよふらん下つ方思ひやるに、あながちにたけ高き心地ぞする、いかなるものゝつどへるならん」と思つた。『源氏』の作者は、外から源氏君の心を推して「とやうかはりて思ほさる」といふ、その一句を西鶴は仕立直して「常ならず」といふのであつた。

「紙ひほの編笠の樣子」とは、夕顏が源氏君に寄せた扇の假用であつた。夕顏の扇は、もて馴らしたる移香、いとしみ深うなつかしう、をかしうすさび書いた歌

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる花の夕顏

をそこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかにゆゑづきてゐる。源氏君はこれを、いと思ひの外にをかしうおぼえなされた。その好奇心は惟光に、あの宿の主人は何人なるかと問はせる。惟光も知らなかつた。あの宿守の男を呼んで尋ねる。

揚名の介なりける人の家になん侍りける、男は田舍にまかりて、女なん若く事好みて、はらからなど、宮づかへ人にて來通ふと申す。くはしき事は下人のえ知り侍らぬにやあらんと聞ゆ。

『一代男』の我しり貌に語る者は、誰であるか、西鶴はつひに示してゐない。たゞこの「夕顏」の下人を拉れ來つて、おもかげのその人が知られるだけである。それでは、「下人のえ知り侍らぬにやあらん」をいかに。これも亦逆用であらうか、とのみは解せられないのは、その一節につゞいてゐる、本文には「さらばその宮づかへ人なンなり、

したり顔に物なれていへるかな」とある。源氏君の思はくをいふ言葉である。西鶴は、そのしたり顔を「我しり貌」に轉用した。源氏君と下人とを一つにして、しかもなほその人を表面に現はさなかつたのである。さきにも西鶴の俳諧は本據を看取して、はじめてその作意が徹するといつた。これは極めてよき一例として考へられる。

今宵一夜と、おもひながら、色なきかたに、舍りはといと、口惜しかりけるに、爰こそ、假寢の夢計よと密に才覺して、かすかなる亭に入れば、あるじそれ〳〵の名をふれける、思日川染之介様、花澤浪之丞様、神島三太郎様、いづれもおもしろ、笑しきさま、兎角酒にして、こんがうの角內、九兵衛を呼出し、よろこぶ物をとらして、後は戯れて盃にすこしは、無理など云懸り、更行まで、月がゆがふたの、花がねぢれたのと、我がまゝつもれば、見合て、寢道具取さばきぬ、よこ島のもめん蒲團にせんだんの、丸木、引切枕、夏をのがれたる、蚊もあればとて、擂鉢にすり糠を煙らせける、烟と思へば、是も伽羅のこゝちして、おのづから近よる程に、ひぜんなをりて、いまだ、間もなき手を、うち懸らるゝも、嬉し悲しく有ける、

馬頭などが、下の品とさだめ慢れるやどりに思ひもよらぬ女夕顏を、見出すのが「夕顏」のおもしろさである。西鶴が讀者に與へようとする興は、そこに意外なる飛子宿を展開することである。一方には「源氏物語」の筋を追ひながら、一方には、現代の興味事項を篏め込むのが西鶴の計畫である。その計畫ははやくから標榜するところであつた。十四歲の章はすでに題して「仁王堂飛子宿の事」といつてゐる。

「狂言役者、男子を遊女屋の女を抱ふる如くに抱へ置きて、藝をし入れるなり。……いまだ舞臺に出でぬはかげまといふ、他國を巡るを飛び子といふなり」と「人倫訓蒙圖彙」にいふ飛子の宿の有様と、飛子の內幕とが、彼の披

露せんとするところであつた。しかもなほ「夕顔」の趣を棄てなかつた。

夕顔の宿は佗しかつた、その佗しさを、飛子宿にうつしたのが「寢道具」である。

夕顔のもとに宿れる源氏君は、その且、やり戸を開けて庭を見る。「ほどなき庭にざれたるくれ竹、前栽の露はなほかゝる所も同じごときらめきたり」その露を、糠の煙に轉じたのであつた。

さて勤なれば、尤愛しく、思はるゝ、すきにし程は、いかなる里、いかなる國〳〵を廻りけるぞ、懸るうへに、つつむべき事も、何ならん、我そも〳〵は、糸より權三郎殿にありしが、笛ふきの、喜八かたにわたり宮島の芝居ずきにさまよい、備中の宮内、讃岐の金比羅に、ゆく事もあり、いづく定ず、すみよし安立町に隱れ家、又は河内の柏原、此里にきて、今井多武峯の、出家衆を、たらし侍る、中にも更に、なさけなきは、八幡の學仁坊、まめ山の四良右衛門とて、無類の此道好、是は飛子の、うき灘を越るがごとし、此兩人に揉れて後、此勤ならざるといふ事なし、或時は片山陰の柴かりて、適〳〵手にふれし、銀子をしてやり、浦人の鹽馴衣を、はだかにして、假にも取ル分別計、情なきは衆道こゝろは、外になりましてと語る、皆うそにしても、僞とも思はれず、

源氏君のつねに知らうとするのは、夕顔の素性である、閲歴である。しかし、夕顔はその問をそらして、殆ど答へなかつた。一篇の作意はそこに存する。西鶴は世之介をして、しば〳〵飛子に、過ぎ來し方を尋ねさせた。源氏君に模するためである。西鶴はまた飛子をして夕顔と逢つて、仔細に身の上を語らせた。これがはじめからの計畫であつた。

「はにふの寢道具」の作意がその轉用をしからしめたのである。

語る飛子と語らざる夕顔とは、轉用以外に他の本據の存在することを便利とする。

西鶴は本據たるものを要めて、謠曲「花月」を得た。花月といふ少年が、七歳の折に天狗に攫はれて行方を失つた。それを出離の縁として、諸國を修行しありき、つひに清水寺にて再會するといふ一篇は、若衆物に仕立直すのに都合がよかつたからである。

談林の俳諧と、謠曲との關係は、依然として、西鶴の好色本の上にも存する。かた〲西鶴はこれを利用したのである。さきに西鶴は「更行まで、月がゆがふたの、花がねぢれたのと、我がまゝつもれば」といはせてゐる。折折は、わざと據るところをほのめかす西鶴である。或はこれも「花月」の花と月とを示す微意でないかを疑はせる。花月をシテとする「花月」は、その父をワキ僧としてゐる。ワキは頻りにシテに問ふことがある。その問答はかうもあつた。

ワキ「御身はいづくの人にて渡り候ふぞ。シテ「是れは筑紫の者にて候ふ。ワキ「扨何故斯樣に諸國を御廻り候ふぞ。シテ「われ七つの年、彦山に登り候ひしが、天狗に捕られて、斯樣に諸國を廻り候ふ。

問ひつ問はれつして、まさしき父子と知つた二人は、相携へて鄕に歸らうとする。去るに臨んで八撥を打つ。これ舞臺の上の約束、謠曲作者の慣用手段であつた。八撥に伴ふ地謠は斯うである。長くとも引かずにはゐられないほど、西鶴の文と密接の關係があつた。

シテ「扨もわれ筑紫彦山に登り、七つの年天狗に、地「捕られて行きし山々を、思ひやることそ悲しけれ、まづ筑

紫には彥の山、深き思ひを四王寺、讃岐には松山、降り積む雪の白嶺、扨伯耆には大山、〳〵、丹後丹波の境なる、鬼が城と聞きしは、天狗よりも恐ろしや、扨京近き山々〳〵、愛宕の山の太郎坊、平野の峰の次郎坊、名高き比叡の大嶽に、少し心のすみしこそ、月の横川の流れなれ、日頃は餘所にのみ、見てや止みなんと眺めしに、葛城や高間の山、山上大峰釋迦の嶽、富士の高嶺に上りつゝ、雲に起き臥す時もあり。

この花月の苦しさを、飛子の惱みに飜す時に、山々は、すなはち、俗にしては學仁坊となり、四右衛門となつた。また山々は飛子宿の所在地となつた。

さて心にそまぬ人に、あふ夜はと尋ね侍れば、譬ば、胝足一代に、齒枝つかはさる人にも、いやとはいはし、それのみ宵より穐の夜の明るまで、とやかく、おもふ儘に成こそ、無念いくたびか、人しらぬ泪にして、

西鶴の轉合は「花月」を飜案してこゝに至つた。飜案と原據と照し合はせる時、誰か笑はずにゐられよう。笑ひやんで、俳諧の妙を嗟嘆せずにゐられよう。

かく年月やう〳〵、程ふりて、くる年の四月には、身自由なると、思ふをたのしみ、心いはゐに然も、明後日より金性の者は、有卦に入まする、年の七年は、仕合と申侍る、金性ならば、廿四の金か、我とは十違ひぞかし、假初にもかゝる一座にて、年せんさくは、用捨あるべし、

西鶴がこゝのはじめに、世之介をして袖とめさせ、人に後つきを惜ませらるとしたのは、この笑ひを強めるためであつた。この事實の笑ひは「夕顏」の悲しい最後と、どこやら通ずるところがありながら、また思ひがけぬ隔りを見出して笑はせる。その笑ひこそ、俳諧の笑ひであつた。

七

「源氏物語」との關係以外に觸れまじとした筆は、西鶴の俳諧に誘はれて、つい謡曲「花月」との交渉にまで及んだ。この筆を舊に戻す前に、も一度「花月」のをはりを考へてみる。

シテの花月はワキの父に連れられて歸國する。「さ候はゞ、あれなる御僧に、連れまゐらせて佛道の、〳〵、修行に出づるぞ嬉しかりける、〳〵」この嬉しい筋を飛子のあさましさに轉じたのが西鶴の轉合であつた。「夕顔」のをはりの方の源氏の君が怪しい女の正體を知つたことと、この世之介が飛子の實状を聞き得たこととの間に、すでに立派な俳諧を構へてゐるところへ、この花月の親子の關係が、十も年上の、親ともいつてよい飛子を買つた世之介の呆れ顔のをかしさを、附け加へたのである。複雑なる西鶴の附合であつた。

二十四歳の飛子の話は、悲慘な感を讀者に與へることなしに、却つて朗かな笑ひを催させる。西鶴の覘ひがそこにあることは確である。さうおもふ時に、ふと胸に浮かんで來るのは「好色一代女」の「夜發附聲」にある、五十九の惣嫁である。

その女を買つた若衆が、そなたは幾つぞと年をたづねる。女はもの靜に作り聲して十七になりますといふ。

　さては我等と同年とうれしがりぬ、闇の夜なればこそ此形をかくしもすれ、もはや五十九になりて十七といふ事は四十二の大僞世の後の鬼がとがめて舌をぬくべし、是も身をすぐる種なればゆるし給へ、

これが屢々悲慘な事實として指示されてゐる。その章はもつと甚しい人生の悲慘の事實をしるしてゐるといふ事で

問題にされる。「一代女」の主人公は六十五になつた。彼女は惜からぬ命、今といふ今浮世にふつ〳〵と飽きが來てゐた。

一生の間さま〴〵のたはふれせしを、おもひ出して觀念の窓より覗ば、蓮の葉笠を着るやうなる子供の面影、腰より下は血に染て、九十五六程も立ならび、聲のあやぎれもなくおはりよ〳〵と泣ぬ、是かや聞傳へし孕女なるべしと氣を留て見しうちに、むごいかゝ様と銘々に恨申にぞ、扨はむかし血荒をせし親なし子かとかなし、無事にそだて見ば和田の一門より多くて、めでたかるべき物をと過し事どもなつかし、暫有て消て跡はなかりき、

をかしくも、恐しくも、讀まれる筆の跡である。今の西鶴の讀者は、この中から表現の誇張をとり棄てゝ、殘る事實だけを凄慘なる人生記錄として扱はうとする。今の世の見解に即していへば然るべきことと思はれる。しかし、西鶴の頃の人々もさう讀んだ、西鶴もさう讀ませるために書いたといふことになると、即座にさうだとは斷りきることが出來ないやうである。

何故に西鶴は臺がたつた飛子では笑はせ、年寄の惣嫁では笑ひを收めさせるか、何故に男には酷に、女にはやさしくするか、女若二道への中に男色の方を輕く見る傾向が西鶴にはあるにしても、この場合もそれであるか、まづそれ等を決定してから、「一代女」の凄愴を承認すべきであらう。それ等に就いて考へるには多くの時を要する。それは最も重要な問題であり、西鶴好色本の本質に關する事である。今はたゞそこの孕女の挿繪には、一脈のをかしさが動いてゐることだけをいひおくことにする。そして西鶴の文と繪との間には、かなりに緊密な關係があるが、

これもその一つであるとのみいふことにする。

西鶴の觀るところ、書くところは變轉自在端倪すべからずとやうにもいはれる。しかしまた、同じ事柄、同じ手法をくりかへす場合も少くない。「はにふの寢道具」の一節と「好色五人女」の「八百屋物語」の一節を合せて見て、一つの例を拾ふことが出來る。「八百屋物語」の吉三がお七の宿に忍んで來て、そこの土間に一夜を凌いでゐる。久七といふ下男が一椀の湯を惠んでやる。

くらまぎれに前髮をなぶりて、われも江戸にをいたらば、念者の有時分じやが、痛しやといふ、いかにも淺ましくそだちまして、田をすく馬の口を取、眞柴苅るより外の事をぞんじませぬといへば、足をいらひて、奇特に胝を切さぬよ、是なら口をすこしと——その悲しさ切なさ齒を喰ひしめて泪こぼしけるに、久七分別していや〳〵根深にんにく喰し口中も知れずとやめける事のうれし、

これは精粗の違ひこそあれ、心にそまぬ人にあふ夜はと世之介に聞かれて、胝足、一代に齒枝つかはざる人にもいやとはいはじと答へた飛子の言葉と同じ筋におちる。八百屋の店前なる故に、根深にんにく喰し口中といつたが、さもなくばやはり一代に齒枝つかはざる口を恐れる久七であつたらう。こんな些細の一例も、飛子と惣嫁に對する西鶴の態度の異同と聯關して考へることを要求する。

西鶴の中に於いて、相似たものを探し出すことは、外に於いて相異なるものを區別することになる。をり〳〵不用意に使つてゐた俳諧といふ言葉を、少くとも蕉風の俳諧と區別しておく必要がある。

瘦骨のまだ起きなほる力なき　史邦

に附けた

隣をかりて車ひき込む　　凡兆

は「夕顏」のおもかげであるといはれる。長患ひの人を源氏の君の乳母大貳の尼と見立てる。病を見舞ふとて車しづかに訪れて來る源氏の君、そこを中宿として夕顏のもとに忍び通ふ源氏の君をあひしらふ。けれどそれを凡兆の心の底に祕めおいて、色ならば匂、音ならば韻とやうに、ほのかに、かすかに見せもし、聞かせもするのが蕉風の體である。談林の俳諧はこれとは違ふ。談林の例はその俳諧を散文化したまでである「はにふの寢道具」の章で事足りる。そこには原據を露はにし、轉捩のあとを明かにして、はじめて傳へられる興趣がある。蕉風にも、其人、其時、其場を以てする附味はある。しかし、蕉風の妙諦は却つて其人、其時、其場をかゝりとして其情感に融合するにある。談林は其情感を輕くして、其人、其時、其場を描寫するにある。西鶴の散文的俳諧は、わけてもこれを興趣の中心としてゐる。

同じ「夕顏」を原據としたものではあるが、西鶴の散文と蕉風の附合では、比較する上にふさはしからぬ節もあらう。同じ散文に於いて見ることにする。

芭蕉は福井に舊識である等裁を訪れた。

市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顏へちまのはひかゝりて、鷄頭はゝきぎに戶ぼそを隱す。さてはこのうちにこそと、門を敲けば、わびしげなる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや、あるじは此のあたり何がしといふ者の方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語に

こそかゝる風情は侍れと、やがて尋ねあひて、その家に二夜とまりて云々。

芭蕉がその家を見て、聯想したのは「夕顔」の卷である。その中にある「昔物語にこそかゝる事は聞け」をさへ轉用して文を成してゐる。しかし、芭蕉が歎んで寫し出したのはその風情だけである。筆の運びからいへば、立派に一つの短篇小説になつてゐるこゝも、その風情の點出にをはつてゐる。等裁の妻は若く、美しかつたらう。芭蕉はそれを隱微の間にほのめかしながら、辭の表にはわびしげなる女とのみいつてゐる。西鶴が書いたなら、決してさうでなかつたらう。事の始終は違つてゐるものゝ、「はにふの寢道具」からも類推されないことではなかつた。

同じ「奥の細道」である。芭蕉は心に野ざらしを期しながら、長途の旅に上る。

彌生も末の七日、あけぼのゝ空、朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそし。

「月は有明にて光をさまれるものから」の辭句は源氏「帚木」の卷に出づる。源氏の君がまだ空蟬の心をとらへかねて悶悶として去る曉の空のさまである。そのわびしさを旅に移し、旅に死ぬかも知れぬのさびしさに轉じだのである。これを「二代男」の「帚木」の飜案に見る。「人には見せぬ所」にも「袖の時雨は懸るがさいはい」にも、このわびしさは見出されなかつた。蕉風と西鶴の好色本との比較も、こゝまで來れば、もうおちつく所におちついた譯である。

これ以上にいはうとすれば、それこそ一辯を加ふるものは無用の指を立つの誉を免れない。

八

「はにふの寢道具」は「夕顏」の俤であつた、つゞく「髮きりても捨てられぬ世」も又同じ卷の俤である。世之介は今年十五歳になる、石山に詣でる。身分ありげの後家に誘惑される。據るところは源氏と六條御息所の關係である。そのはじめには、なか〳〵に源氏の意に應じなかつた御息所を、西鶴は逆に用ゐて、更に誘惑の新手段を說明するのであつた。

その次の「女はおもはくの外」は「夕顏」の俤でも、また「若紫」の俤でもなかつた。また前にかへつての「帚木」である。西鶴が順序を逆轉した理由は何であるか。

岡崎のくら宿に世之介が仲間の男達氣取の不良達と寄り集る。西鶴は彼等を謠曲「小鹽」の前ワキ都人に誘はれて大原野の花見に行く若き人々に擬うてゐる。ワキの名乘りに、「かやうに候ふ者は、下京邊に住ひする者にて候、さても大原野の花、今を盛りなる由承り及び候ふあひだ、若き人々を伴ひ申し、唯今大原山へ急ぎ候」とある。西鶴は季節を晩春とした。そこで「小鹽山の名木も、落花狼藉、今一しほと、惜まるゝ」といふ書き出しにしたのである。

前シテの樵夫は、主の尼妙壽である。妙壽はワキなどに對してくら宿に來る女の素性を說き明す。後シテの業平は世之介である。晝下りの暖さにも、世之介は頭巾をぬがなかつた。仲間の者はいふ、

其方は十六なれば、初冠して、出來業平と申侍る、ほど似合たる、お貌を見む

と無理に頭巾をぬがせる。左の鬢先かけてうたれた疵がある。この場のシテ役、世之介は疵の由來を語る。丹後宮津へ通ひ商する者の留守をめがけてその女房にいひ寄る。諾かない。脅迫する。漸く一夜を約束させる。その夜の事であつた、手ころの割木で此ごとく、眉間を討て、私兩夫に見え候べきかと戸をさしかためて入つたのはと語る。

この貞女は「帚木」の空蟬である。宮津の通ひ商人は、國に下る夫伊豫介である。西鶴はこのやうに「空蟬」を移し來ると共に、同じ卷の指くひ女を移し來つたのであつた。嫉妬のあまりに男の指を噛んだその事を、額に疵つける事にもぢつたのである。指くひ女の話は、いふ所の雨夜の品定めの席上に於いてなされた。すなはち、岡崎のくら宿とは、まことは宮中の源氏の宿直所であつた。

それにしても何故に西鶴は「帚木」の順序をかへてこゝに挿んだのであらう。考へるまでもない。若い男を誘惑する後家と、世に又かゝる女もあるぞかしとの貞女との對照を試みたまでである。配列そのものが彼の俳諧であつた。

こゝにまた蕉風との比較を見る。「猿蓑」の附合に

旅の馳走に有明しをく　　芭蕉

すさまじき女の智慧もはかなくて　　去來

といふのがある。芭蕉の句は、凡兆の「冬空のあれに成たる北颪」に附けてゐる。窓外に木枯わびしい夜を、旅の身のさこそと思うて、枕頭に有明を置く。旅の馳走の一語、このもてなしを心から嬉しと思つた芭蕉の經驗にして

いひ得る。去來はそれを物語の風情でうけた。指くひ女の俤で附けたのである。舊註かくの如き解あるか、くはしくは知らない。たゞ自分はさう解してゐる。西鶴との取材の比較も、さう解しての上である。

指くひ女に、指をくはれた馬頭は、しばらく消息もしなかつた。臨時の祭の調樂に、夜更けて、いみじう霙降る夜、何處にゆくあてはなかつた。「内裏わたりの旅寢もすさまじく」思れはるので、霙うち拂ひながら、彼女のもとに行つた。「火ほのかに壁に背け、なえたる衣どもの厚肥えたる、大なる籠にうちかけて引き上ぐべき物の帷などうち上げて、今宵ばかりやと待ちける樣なり」馬頭はこの馳走ぶりを見て得意であつた。しかし、彼女は家にゐなかつた。その後も二人は和解しない。女は頻に馬頭のすき心を咎めて改めよとのみ責める。男もまた懲さうとして改めるといはない。二人の爭鬪は女の淺い智慧によつてなほ續く。さうかうしてゐる間に、女の歎きのあまりにはかなくなつた。

去來のおもかげ附は、なか〳〵に原據に卽いてゐる。それにも拘はらず、必ずしも其人、其事になづまない。槪念の聯絡に重きをおかない。主とするものはたゞ情趣である。西鶴の俳諧「女はおもはくの外」では主觀の結合、氣分の繫結は問題でなかつた。努めて其人、其事を轉換することによつて興趣を喚び起さうとする。甚しい相異である。

西鶴と蕉風の比較とはいひながら、例は「猿蓑」からのみ引いた。「冬の日」あたりの比較には、幾分の異同がある筈である。煩はしさをおそれて、言及しない。「猿蓑」との比較も、もうくりかへさないことにする。

九

十七歳「誓紙のうるし判」十八歳「旅のできごゝろ」十九歳「出家にならねばならず」二十歳「うら屋もすみ所」みな一様に「若紫」の巻の俤である。斯くして「好色一代男」の巻一も、すべて「源氏物語」の飜案であつた。

今はもういつておいてもよささうである。「好色一代男」一部五十四章、いづれか「源氏物語」の飜案でないものはないと。

「若紫」の源氏はわらはやみを煩うて、北山の聖に加持を受ける。そこに宿れるあくる日の空は美しい、三月もつごもりであれば、山には鳥が囀り、名も知らぬ木草の花も散りまじる。

名も知らぬ木草の花ども、いろ〳〵に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたゞずみ歩くもめづらしく見給ふに、惱しさも紛れはてぬ。

この鹿が、西鶴にも珍しかつたのであらうか、鹿から聯想して「若紫」の舞臺を直に奈良に移した。奈良の町中には妻なるゝ鹿の風情がをかしい。聯想はまた秋の牛の戀をひき出し、やがて戀のたゞ中木辻町を齎らせる。世之介をそこに拉れて行くことは勿論である。

世之介は竹隔子の内から遊女どもを見てあるいた。近江といふ女がゐる。大阪にて玉の井といつた女であることを知つた。

西鶴はこゝで「若紫」の筋にかへしたのである。加持を受けた源氏は、夕暮の霞みに紛れて小柴垣のもとに立ち

寄る。そこにはおひ先見えて美しい女の子の十ほどなのを見た。源氏はゆかしと思つた。「さるは限なう心を盡し聞ゆる人にいとよく似奉れるが、まもらるゝなりけり」その子が紫の上である、似るも道理、源氏が戀ひわびる藤壺の姪であつた。西鶴はその二人の關係を、今の近江、もとの玉の井としたのである。「水の流れも、爰に住む事笑しく」と鞍替の女にしてのけたのである。

世之介は近江を敵方にする。揚屋は佗しかつた、あひ床もをかしかつた。これも北山の宿の俤である。あひ床の客は、明日は國もとへ歸るといふ、馴染の遊女は、二月堂の牛王、西大寺の藥をおくり物にする。客もおかしい男で「古里の山の神見て瘧ふるうたらば是にて落すべし」といつた。客はなほも面白いことなどをいふ。世之介は餘所ながら聞いて、「かかる所にもすれものありや」と思つたとある。二月堂の牛王で瘧を落すとは、いふまでもない源氏の瘧を治す護符をきかせたのである。遊女はすなはち山の聖であつた。「かゝる所にもすれものありや」は紫上を見た時の源氏の述懐であつた。本文にかうある。

あはれなる人を見つるかな、かゝれば此のすき者どもは、かゝる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ、とをかしうおぼす。

源氏は紫上を、藤壺の代りに明くれの慰めに見たいと思つた。强ひてその祖母に乞うて、貰ひうけようとした。幾多の曲折を經て貰ひうけることにした。西鶴はそれをも用ゐてゐる。「夜も明れば互に別れ、戀にのこる所ありて、重て宿によびよせ、近江にさらしの縫しるしなどさせて、かはいがられ、にくからず、かための誓紙、うるし判のくちぬまでとぞ、いのりける」

ついでなればいふ、その祖母と孫娘とを、母と娘として、「宿に似合ぬ大俎板、つぶれ懸りても、かな色あり、昔しは、かくは、あらざらぬ者のはて成へしと、いな所に氣を付て、世之介是非に入聟」、とも一度仕立直したのが「うら屋も住所」であつた。

紫上を二條院にひきとつたあと、源氏が心のまゝに敎へ導くのが、卷三の「戀のすて銀」であつた、これもまた「若紫」の俤である。

幾度か西鶴によつて仕立かへられた「若紫」の北山行であつた。「誓紙のうるし判」で奈良としたのを、「うら屋も住所」では吉野の峯入にした。「出家にならねばならず」では江戸谷中の東、七面の明神の邊の寺住ひとした。すき者の源氏君が、わづかに二日でも三日でも山籠りして、靜に經讀んでゐるのは希有の事であつた。山から歸ればまたの戀のすさびにうき身を窶す。西鶴の飜案はそこを覘つての事であつた。北山にはしば〳〵水の流のおもしろさが書れてゐる。西鶴はまたそれを逸しはしなかつた。「出家にならねばならず」の佗住居のくだりに、

やう〳〵身の置所も爰に、水さへ稀に、はるかなる岡野邊より、筧の雫手して結びおのづから世を見かぎりてひと日二日は阿彌陀經などいと殊勝に見えしが、

とあるのは、それによる趣向であつた。趣向はまた山の源氏が紫上を見出すことによつて、寺に入り込む香具賣をあしらつてゐる。はて知らぬ西鶴の俳諧心の働きであつた。

けれど「若紫」を飜案して、心にくい限りを見せたのは「旅のでき心」であつた。西鶴はあまりに讀者を飜弄する。「好色一代男」と「源氏物語」の交渉を考へる者をして惑はせ、考へない者をも惑はせる。さんざ惑はせて、

擧句のはては高笑ひにすべてを紛らすのであらう。探りそこねもあらうが、とにかく探らずにはゐられない彼の腹黑さである。

十八歳の世之介は江戸に旅立つ。けふ二日目の泊りに鈴鹿の阪の下の大竹屋といふ大座敷について、「水風呂に入もあへず、さて此宿に口きくやさ者は、品定めける、鹿山吹みつとて、此三人共比柴人の、すさみにもうたふ程の女とて、かれらを集め、夜のあくるまで山水の、絶ず飲かはして、さらばの鳥に別れて」ゆくのであつた。「旅のでき心」の章で、「若紫」の俤をうつすものはたゞこれだけである。それも巧みに掠めなしてゐる。

北山に登つて、加持を受けた源氏は、聖のもとを退るとすぐに、後の山に立ち出でて京の山を見る。供の人々は、源氏の心を紛らさうとて、國々の名所の品定めをする。品定めは明石の君の上にも及んで、例の女の品定めとなる。世之介の大座敷はこの後の山であり、宿のやさ者の品定めはこの品定めであつた。源氏は京より迎へに來た人々と酒くみかはした。「落ち來る水のさまなど故ある瀧のもと」であつた。「山水の絶ず飲かはし」の語はこれに基づく。そればかりではなかつた。本文のこゝらあたりには、幾度となく山水といふ言葉が用ゐられてゐる。紫上のゆかりの僧都が、源氏にまゐるところにも、源氏の言葉として、「山水に心とまり侍りぬれど、內裏よりおぼつかながらせ給へる畏ければなむ」とある。「さらばの鳥」と續くのは、これであらう。しかし、西鶴の細心はこゝに意をうけながら、「さらば」の言葉をもそのまゝに持つて來るのを忘れなかつた。源氏が後の山の品定めを終つて後、すぐに歸らうとするのを、聖が今宵はなほしづかに加持など奉りて出でさせ給へと申し上げる。「君もかゝる旅寢にならひ給はねば、さすがにをかしくて、さらば曉に」と宣はれた。さらばの鳥の「さらば」の出所はこれで

あらう。

世之介は江尻に宿つた。その夜歌說經を聞いた。宿のはした女に訊ねる。女は「さればこの宿に、わかさ、若松とて、兄弟の女ありける、其貌書みせましたい其女郎の口まねをして、あれは」と答へる。世之介は見ぬ戀にあこがれた。もう江戶行を忘れて、長滯留する。

彼のはらからの女に馴て、其夜の枕物語、左のかたにわかさ、右のかたに、わか松と召れさむらふぞや、今中納言平さまと、名に立て、都へのぼらば、つれてゆかひではと、抱の人に隙とりて、今切の女手形も、人の情にて立こし、其暮は、ふた川といふ所に、旅寢して、過にし比往來を留めてありつる、物語もおかし、

「左のかたにわかさ、右のかたにわか松と召されさむらふぞや」は直に「松風村雨と召されしより」を思はするさへあるに、「今中納言平さま」とも斷つてゐる。謠曲「松風」が原據であると思はせられる。さう思はせながら、西鶴はそれよりも重く、「伊勢物語」を土臺としてゐる。顧みて、江尻あたりの筆に、「伊勢」の風情も少からず搖うてゐることが注意される。

むかし男は、春日の里に「いとなまめいたる女はらから」を垣間見た、古里にいとはしたなくてあるを見て心地まどうたとあるその女はらからを、わかさ、若松に仕立直したのである。西鶴はまたそれを村雨松風に託してもゐた。「松風」にはゆかりの一本の松がある。西鶴の俳諧は、その松をすぐに、あねはの松に見立てる。さうして「都へのぼらば、つれてゆかひでは」と言ふのであつた。

むかし男はまた陸奥の女に戀をゆるしたことがある。女はすさまじかつた。二度とは通はない。たゞ京へまかる

時に、歌一首をおくつた。

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

歌は女が人がましくないために、連れて行かぬの意を裏に隱してゐる。世之介の場合はさうではなかつた。故に西鶴は歌の正面について言葉を採つたのである。

水無月の程は、蚊の聲、もの悲しき夜は萠黄の二疊つり、次の間に釣懸、はだへみる人もなき物、いつそはだかよと獨事に申せば、其聲につきて、御伽にまいろうかと、それより事調ぬ、又冬の夜は、寢道具を、かすやうにしてかさず、庭鳥のとまり竹に湯を仕懸て、夜深になかせて、夢覺させて追出し、色々つらくあたりぬる、其報ひ、いかばかり今のがれての、有難さよと、

あねはの松に喩へられた女は、そのはじめ、男を戀して歌を詠む。歌までも鄙びてゐた。男はさすがに哀と思つた、その意に從つた。「いきて寢にけり」と本文にある。その筋をうけた西鶴は鄙びた歌說經女に、旅寢の客を誘はせることにした。客はつい御伽にまゐらうかと、それなりに事調ふやうに改めたのである。

むかし男は、いきて寢はしたものゝ、荒凉の感を懷いて、夜深く歸る。女はわびしかつた。

夜も明けばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

と詠んだ。西鶴がその俤をとり、その歌を利用して、鷄をまだきに鳴かす祕法を書いたのが、これである。

俳諧の妙は聯想の絲の細くして、また數多きにある。少くとも談林の俳諧はそれを生命とする。聯想の絲の細さは、配合の奇拔で人を驚かすことになる。數の多きは融通自在で、また人を驚かすことになる。西鶴は「伊勢」を

もぢり、すぢつて、この散文の俳諧を書いて來た。夜も明けばの歌から、鶏を鳴かせ、さて旅客を追ひかへす流れの身の苦しさ、世之介に身請されて、その苦しさからのがれた有難さを書かうとした。鶏、――のがれての有難さ――そこからまた聯想させるものがある。西鶴はおそらくこゝで「盛久」の一節を口ずさんだであらう。さうして

共報ひ、いかばかり今のがれての、有難さよと、いやましに、よろこび侍るに、ひとつの難義あり、いつ音羽の山を見るまで、道すからの、遣ひかねとてもなくて、

と書いたのであらう。

「盛久」は、平家の侍主馬の盛久が囚へられて鎌倉に下りて斬らるべき前夜、日頃信ずる觀世音の靈夢によつて救はれる筋である。

既に八聲の鶏鳴いて、御最期の時節唯今なり、早々御出で候へとよ。

ワキ役の土屋三郎にかう促されて、盛久は足よわ〱と立ち出でて、最期の座に直る。觀音の御名を唱ふれば、太刀取の太刀は二つに折れて段々となる。「末世にてはなかりけり、あら有難の御經や」西鶴はこれによつて、「今のがれての、有難さよ」とわかさ、若松の述懐を書いたのであらう。

しかし、さうのみいふのは、未だ西鶴の筆の運びを解さぬ者であつた。彼は早くから「盛久」を利用してゐた。例の「伊勢物語」と、とり交ぜて書いてゐたのである。「美しくも歸る波かな」「ひしきものには袖をしつゝも」などを聯想させる江尻あたりの文は、また「盛久」の

シテ〽越えては關に清見潟　地〽三保の入海田子の浦、うち出でて見れば眞白なる、雪の富士の嶺箱根山・

を下に踏へてゐた。

世之介は路銀に困じた、いつ都に歸られるか當がない。西鶴がそれを「いつ音羽の山を見るまで」と書いたのも、また「盛久」あるがためである。「盛久」にはシテが京を立つに當つて、淸水寺に名殘を惜しむ心がから書れてゐる。

あら名殘をしや、いつか又淸水寺の花盛　地へ歸る春なき名殘かな　シテへ音に立てぬも音羽山　地へ瀧つ心を人知らじ

それにしても、うるさ過ぎる西鶴の聯想である、謠曲の好みである。さきの本文のつゞき、

遣ひかねとてもなくて、――ふたりの女の、うは氣などをしろなし、芋川といふ里に、若松むかしの馴染有て人の住あらしたる笹葺をつゞりて、所の名物とて、ひら饂飩を手馴て往來の駒とめて、袖うちはらふ、雪かと、見ればなとゝうたひ懸て、火、を焼片手にも音しめの、糸をはなさず、うか／＼とおとろひ、後はふたりの女も花薗山の、しも里に、まことの髪そりて世にすてられ、たのしみし人に、捨られ道心とぞなれる。

芋川の名物饂飩の粉の聯想は雪となり、袖うちはらふの歌となつて、こゝにも謠曲「鉢木」が撮合せられたのである。「ふたりの女の、うは氣などをしろなし」のしろなしは、浮氣すなはち媚としては、やゝふさはしからず思はれる。うは氣の氣は着の假字か、西鶴の用語例にはこれほどの假字をゆるしてゐる。もしうは氣が上着ならば、それも「鉢木」の「人は鶴氅を着て立つて徘徊す」の鶴氅から來てゐる筈である。上着をうは氣にかけたとすれば、それは貞門の俳諧とならう、それから出た近松の洒落とならう。西鶴の意のあるところ、ついに知るよしがない。

西鶴は「旅のでき心」の一章に於いて、「源氏」で惑はせ、謠曲で惑はせ、「伊勢」で惑はせる。「伊勢」かと思へば謠曲、謠曲かと思へば「伊勢」、二段三段の構へして自ら娯むものであつた。煩はしいほどのこの章の詮議立も、こゝで止めたなら、まだ西鶴から揶揄れはせぬかの懸念がある。一事を書き添へる。

西鶴から揶揄れさうなといふのは、饂飩屋の亭主世之介の趣向を、言葉の表からのみ見て「鉢木」とすることである。西鶴の微笑が嫌さに、繫解のおそれを冒してまで、考へておきたいのは司馬相如と卓文君の艶事である。

司馬相如は臨邛に遊んで富人卓氏の女文君の美しいのを見た。思ひのたけを詩にものして、琴に合はせて歌つた。文君は戸の隙間から窺つて、うれしいと思つた。二人は手を携へて出奔した。間もなく遣ひ金もなくなつたはてに、二人はまた臨邛に流れて來た。卓氏の家近くに酒屋を開く。文君は酒の酌をする、相如は犢鼻褌一つで器を洗ふ。卓氏は見るに忍びない。つひに二人を迎へた。思ふ壺に當つた後の相如の身持はよくない。あだし女を娶らうとする。文君は悲痛の情を一詩に寄せた、白頭吟これである。初句に「皚如山上雪」とあり、中に「願得一心人、白頭不相離」とある。相如はこれに感じて、その女を娶ることを止めたといふ、かういふ事が傳へられてゐる。

一心の人を、右に左に女はらからを召す人とし、山上の雪を饂飩の雪としたのが、例の俳諧でなかつたか。「たのしみし人に捨てられ」とあるのも、それと連繫がありはせぬか。とにかくありふれた二人比丘尼の懺悔物の型とどつか違ふところがあるやうに思はれる。

このやうに、西鶴の原據を探し出したのにせよ、まだ〳〵西鶴を博識の士にしてしまふ處はない。ものの至りの淺さ深さは別として、どうしてもこれだけの故事を心得てゐなければ出來かぬるのが談林の俳諧であつた。謠曲は

談林の俳諧からいへば、立派な鼻唄である。「伊勢」や「源氏」にしても、有識故實といふことになると別であるが、むかしの物語としては、常識になりきつてゐた。「源氏」の梗概の書が頻りに俳人によつて成されたのも、その用意のためである。「西鶴の「源氏物語」に對する造詣の程度は詳でない。しかし、筋讀みとしては別に學者畠にひけをとらぬ程であることは認められる。梗概の書からは、とても出來さうもない彼の俳諧仕立である。「白頭吟」のことまた怪しむを要さない。西鶴は「袖の時雨はかゝるが幸」の章にも、蘇東坡の詩を引いてゐる。その類がなほ他にも散見する、尤もそれもこれも貞門の俳諧、談林の俳諧に慣用せられてゐるものに過ぎない。それにつけても、貞享元年、住吉社頭の二萬三千句の大矢數の俳諧が現存しないことが憾みである。一日一夜にそれほどの句を詠むといふのは、畢竟は腦裡の塵を棄てるやうなものである。塵棄場から、そこの料理場の有やうは髣髴される。更に佳肴「好色一代男」などの材料を數へ立てることが出來るはずであつた。なほ今殘る一日四千句の俳諧からも、之を推測することは十分である。

けれど、人生の觀察に於けるほどの鋭さが、源氏讀みの上にも存することは極めて明瞭である。急所々々を取つて押へる手際があつて、はじめて天晴な俳諧が出來るのであつた。まして西鶴がその頃の古典の飜刻、また古典の新註に注意を拂つた形跡はたしかにある。「好色一代男」の成るのは偶然でなかつた。

「旅のでき心」は「若紫」の飜案を尋ねる者をして、思はぬ方にまでそれさせる。複雑なる彼の俳諧は幾度か「源氏」にのみ專らであることを期しながら、旁系の原據を棄てることをゆるさなかつた。たゞ心して、この後は「謡曲」にだけは觸れないことにする。

「若紫」の飜案は「一代男」の中にまだ一つ殘つてゐる。少し離れた卷三の「集禮は五匁の外」である。

「若紫」の源氏君は北山の宿をわびしく思つてゐる。けれど主の僧都は心を籠めてもてなしに忙しい。世に珍しい菓物を何くれとなく谷から堀り出して奉る。源氏君が京に歸る折は唐土將來のいみじき物々をさし上げる。君もまた布施、まうけの物など、さま〴〵に遣はされる。山がつにまで然るべき物を下された。

別の宴は瀧の下で催された。京より迎への人々は歌をうたひ、篳篥を吹き、笙を吹く。源氏君も琴をかいならした。君を見奉る山の人々は、「この世のものとも覺え給はず」と噂する。

僧都も、「あはれ何の契にて、かゝる御樣ながら、いとむつかしき日の本の末の世に、生れ給ひつらむと、見るにいとなむ悲しき」とて目おし拭ひ給ふ。

紫の上も、君の姿を美しと見た。父の兵部卿宮より美しと評した。君の去つた後も

雛遊にも、繪畫い給ふにも、源氏の君とつくり出でて、淸らなる衣着せかしづき給ふ。

「若紫」が「集禮は五匁の外」と交渉のあるのはこれである。

二十五歳の世之介は寺泊の傾城町に遊んだ。揚屋もなかつた。親方の家はわびしかつた。しかし、夜食の膳はよかつた。「先蓋をあけぬれば、小豆食是はおもしろひ、鯖さゞみて、積蓼道合こそ、心にくし」これが僧都のもてなしに當る。壁一重あちらでは、所の若者が、流行おくれのさゝんざの小歌の稽古に夢中であつた。柴垣踊も知らないのである。これが瀧のもとの遊びに當る。

その夜の遊女は限りなき好意を世之介に寄せる。

我江戸にてはじめの高雄に、三十五までふられ、其後も首尾せず、今おもへば惜ひ事哉、この女か、其太夫にて、是程自由にならば、尤おもしろかるまし、昔をおもひ出し、うそ腹たつて、むく起にして、罷歸る、

その遊女が源氏君の姿を美しと見た紫上の俤である。高雄の事は、源氏君の煩惱の種である藤壺のうへを匂はせたのであつた。世之介は同道の人に、付とゞけをよいやうに賴んだ。

あるじに三百口鼻に百、はたらく女共に、貳百、合六百文蒔ちらせば、いづれもおどろき、さても大氣な大じんと、

源氏君が山の人々に遣はした贈物は、かういふ姿となつて現はれた。

近付に成し女郎、袖をかざし、舟ばたまておくりて、互にみゆる内は小手招き、京にて出口まで、送らるゝ心知ぞかし、彼女郎舟にのりさまに、私語しは、こなた日本の地に、居ぬ人じやと申ける、心にかゝれど、今に合點ゆかず、

西鶴は源氏君を評した僧都の言葉をこゝに轉用した。「あはれ何の契にて」と僧都の解さなかつたのをそのまゝに、世之介に「今に合點ゆかず」と思はせたのである。

僧都が解し得ないといふのは、前世の因果に關する事である。別に紫式部に聽くまでもなかつた。世之介をして合點ゆかずと思はせる西鶴の意は何であるか。

西鶴は當面には、世之介の堅藏を暗示することにした。その堅藏が唐人、紅毛人を思ひ出させる。日本に居ぬ人を聯想させたのはそれが爲である。源氏君の美しさ、やさしさは、古い昔の物語の事である。今の好色本ではかう

書かなくてはならなかつた。
これはまた遠く世之介の女護島行の伏線をなしてゐる。世之介が女護島渡りする前年に、長崎に遊んで、唐人紅毛人の遊びぶりを評判するのと同じ心からである。
西鶴の散文的俳諧は、「源氏物語」を前句とする附味の外に、また一部一巻に通ずる心を求める。これもその一例として見られる。

一〇

「一代男」を通じて五十四話、最後の「床の責道具」が巻の名のみある「雲隱」に假託したのを除けば、「源氏」の本文に據るものは五十三話である。それにしては、餘りに多くを「若紫」の飜案に割いてゐる。しかし、それとほゞ同數の飜案は「夕顔」に於いても見ることが出來る。巻二の「はにふの寢道具」はいふまでもない、その他、巻四の「因果の關守」に續く世之介二十九歳の章「形見の水ぐし」以下四章、すなはち「夢の太刀風」「替つた物は男傾城」「晝のつり狐」は一括して「夕顔」の飜案である。
「好色一代男」と「源氏物語」との關係は、明治に於ける西鶴研究のはじめ頃から問題とせられてゐた。特に「形見の水ぐし」と「夢の太刀風」と「夕顔」の關係が顯著なる例證として引かれてゐた。一目瞭然たるものがあるからである。今はもう西鶴常識にさへなり決つてゐる。從つて、こゝに、それに就いて縷説することを避ける。たゞ後の二章は、ともすると、「夕顔」と何等の交渉のないやうに思はれがちである。煩しいが、一應の解說を試みる。

「替つた物は男傾城」に扱はれたのは、御殿女中である。大名の奥方に召つかはれる女中方は男といふ者を見る事も稀に、二十四五迄も、枕繪、一人笑ひを見て、わづかに鬱を慰める。これさへ、結局は辛氣の種となる。その女中の一人が、女中頭から、錦のふくろに包んだ異様な道具を預り、たけはこれより少し長いのをといふ怪しい註文を承つて、堺町邊の細工人のもとに使する。生憎と望むほどの物はなかつた。主に申しつけて歸る途中、ゆくりなく世之介に會つた。當時三十一歳の彼は、江戸にあつて、唐犬權兵衛のもとに身を寄せてゐたのである。女中は便宜を得て世之介に囁いた。

近比指あたりたる御難義に候へども、まづは、御人體を見立、是非に、賴たてまつり候、私は、或御屋敷方に、勤て、奥さま、まぢかくありし身にて候、かたれば長し、親の敵程に存じ候人を、けふといふけふ、見付申候、女の身なれば、及難し、御うしろ見、あそばし、此所存、はらし候やうに

涙ながらの物語に、世之介は即座に承引する。宿に歸つて鎖帷子に身を堅め、同じく鉢卷、目釘竹に心を付て、とつてかへせば、女は急ぐ風情もなく、錦のふくろを出して、是にて我心の程が知れます、御覽といふ、紅の緒を解けば、中には何年かつかひ減してさきのちびた物。興さめてこれはといへば「此形さまをつかふ時には、死入ばかり思ふにより、命の敵にあらずや、此敵を、とりてたまはれと、世之介に取付」世之介は直にその意に從つて、敵といふものを討つてやる。「夕顔」にはもとよりこんな筋のあらう筈がない。例の俳諧の手段とはいひながら、西鶴は何に本づいて、かういふ趣向立てをしたことであらうか。その穿鑿は西鶴がいかに細心に「夕顔」を讀んでゐたかを證據立てる。それよりも、西鶴が「源氏」の中から利用し得られる箇所をいかに敏く捉へ、いかに巧みに利用

したかの一證左と見ることが出來る。

「夕顏」には一挿話として、源氏君と六條御息所の侍女、中將のおもとの交渉が書れてある。霧のいと深き朝であつた、源氏君は御息所のもとを辭し去らうとする、中將は廊の方へ御見送り申す、紫苑色の折にあひたる、羅の裳あざやかに引きゆひたる腰つき、たをやかになまめける姿であつた。いつにてもあれ、機會を逸さぬ源氏君は、見かへりて、隅の間の勾欄に、しばし引きすゑる。中將のうちとけぬものごしが、彼の心を惹きつける。「咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎうきけさの朝顏、いかゞすべき」と源氏君は手をとらへる。もの馴れた中將は驚かなかつた。早速の挨拶とて、「朝霧のはれまを待たぬけしきにて花にこゝろをとめぬとぞ見る」と答へる。いふところは、自らの心をいふにあらずして、おのが主、御息所の上に託するのである。「源氏」の作者は、これを「おほやけごとにぞ聞えなす」としるしてゐる。

西鶴はそのおほやけごとをわたくしごとに轉用したのである。主人の道具を種に、おのが思ひを晴らす奥女中に、その中將を變へ、いひ寄る源氏君を、いひ寄られる世之介にかへたのである。「源氏」の本文には、またそこに、短いながら巧みなユーモアを點出してゐる。

をかしげなるさぶらひ童の、姿好ましうことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花のなかにまじりて、朝顏折りてまゐるほどなど、繪にかゝまほしげなり。

侍童いまだ年少にして、事を辨さなかつた。源氏君の「折らで過ぎうきけさの朝顏」を言葉の表に即して、朝顏を折つてまゐつたのである。本文に於ける笑ひは、これほどの輕さである。それを哄笑に轉じた西鶴の轉合が注意せ

られる。尤も西鶴には、その轉合の中に奥女中なるものを現はさうとする計畫のあることはいふを要さない。「晝のつり狐」と「夕顔」の關係は極めて稀薄である。それは殆ど題目の上に於いての關係であるといつてよい。その章は、老女に一生の中のいたづらを語らせる趣向になつてゐる。語り出づるのは、切貫雪隱、しのび戸棚、あげ疊、空寢入の戀衣、後世の、引入などの、くら事であつた。それが「夕顔」と關係ありとすれば、ついにおのが素性を語らず、過去の戀を明さぬ夕顔の上を、戀のてだて、四十八手の祕密をすらすらと說き聞かす老婆に逆用したまでである。それよりも、源氏君が夕顔をなにがし院に誘はうとする時の問答、夕顔の「なほ怪しう、かく宣へど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐しくこそあれ」に對する源氏君の「げに、いづれか狐ならむな、たゞ謀られ給へかし」の「狐」によつて、世間を誑し謀るくら事と關係づけた名題の方に、重要なる交渉のあることは勿論である。

おもふに、西鶴は古へのもの〻あはれ床しい一部の書を、あらぬ今樣姿に仕立直す計畫に於いて、人々を驚して足れりとせず、更に、各章の飜案ぶりの奇拔、時に原據にひたりと即き、時に原據からさらりと離れて、人々を驚さうとしたのであらう。どうかすると、謎にもなりかねぬ談林の手法を、こ〻にも用ゐたのであらう。少くとも「晝のつり狐」と「夕顔」の關係は謎といひ得る。けれど、この種のものは他にも多く存する。今、ついでを以て、更に奇拔なる俳諧ぶりを見ておくことにする。

卷六に「匂ひはかづけ物」の一章がある。吉原の名物、口舌の上手、太夫吉田の利發の話が書れてある。それに馴染を重ねてゐた世之介は、例の浮氣から他の太夫に移るとて、何かの難を見出して、切れようと心構へしてゐ

た。折も折、吉田は廊下を過ぎゆく時に、とりはづした。世之介も、供も、横手をうつて、「おもしろの春邊やな、天晴、くぜつのもとだて、重而出たらば、座敷が嗅ふて、居られぬといはふ」などとうれしがる。やがて、吉田は衣裝仕替へて、櫻一本持ながら立ち出る。その態度に壓れて誰ものいはぬ時、吉田の方から、「此中の御仕方、惣じて、よめぬ事のみ、はじめよりあかるゝまでとの、御つたへ、成程けふ切に、あきました、御げんも、今より後は」といひ出して、すぐに立ち去る。世之介は裏をかゝれて悄然として辭し去る。この仕なしよからぬ事と沙汰せられて、望みの太夫もついに逢はなかつたとのことである。

これは「螢」の卷の面影である。源氏君が、夕顏と頭中將の間に生れた玉鬘を養つて子としながら、いつかそれに心を焦す仕なしは、たしかによからぬ沙汰であつた。中にも、玉鬘に思ひを寄せてゐる兵部卿宮を、ひき合せて、物蔭から宮の話を立聽く態度は惡かつた。また宮が玉鬘に執心なのは、わが娘と思ふためであらう、よしそれならば、玉鬘の美しさを見せて、一段と思ひ惱ませようと、かねて薄い紙に包んでおいた多くの螢を、突然とり出して、その光で玉鬘をあらはに見せた仕打は更に惡かつた。「源氏物語」の作者は、すでにその態度を評して、「實のわが姫君をば、かくしももていで騷ぎ給はじ、うたてある御心なりけり」といつてゐる。

源氏君は、また機會ある毎にいひ寄らうとする。「思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたぐひなき、不孝なるは、佛の道にもいみじくこそ言ひたれ」ともいひ出づる折もあつた。しかし、玉鬘は「ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかゝる親の心は」と靜に答へる。源氏君はその理に壓せられざるを得ない。本文にいふ、「心はづかしければ、いといたくも亂れ給はず」と。西鶴が吉田の口舌上手に擬する原據はこれであつ

た。

螢を放つの一事、西鶴はまた棄てなかつた。これがその卷の眼目であるからである。

手は野風程書て、然も、歌道に、こゝろざし深し、或時飛入といへる、俳諧師、凉しさや夕よし田が座敷つきと、有に、螢飛入我床のうちと即座の脇、是にかぎらず、毎度聞かれし事ぞかし、

吉田の口舌上手、歌道の志はともあれ、この脇が果してその詠であるか、どうかは、飛入といふ俳諧師が實在の人物なるか、否かと共に、深く考へる要もない。文面すでにその洒落を明にしてゐる。まして、吉田に放屁の事實が存在するか、否かに至つては、はじめから問題にする必要もない。何となれば、西鶴は「螢」を、直に「屁垂」に捩つて、この一章の趣向を立てたからである。

もはや、こゝに至つては、「ほたる」が「火垂」であるとか、ないとかの議論でなかつた。あなむづかしの語原論や、と西鶴はさつさとかういふ轉合に興ずるのであつた。「一代男」の談林ぶりは、「源氏」の卷の名の捩り方と、「螢のつり狐」の名題に於ける「源氏」の本文の附會の程度からも、推測するに十分であると思はれる。

二

西鶴の飜案ぶりの自在にして奔放なる、どの章はどの卷に本づくといつたゞけでは、要領を得ない場合も多い。冗辯やや厭はしきに至つたのは、これが爲である。しかし、以上の數例によつて、ほゞ部分に於ける飜案の略を傳へ得たものとして、問題を大綱の飜案の上に轉ずることにする。

西鶴は「源氏」を飜案するに當つて、まづ「源氏」の大綱を移さうとした。故に「桐壺」「帚木」の序次を以てはじめ、「御法」「幻」を前に据ゑて、「雲隱」を以て筆を收めた。その中軸に「須磨」「明石」を配した。かくしてほゞ「源氏」の輪郭を髣髴させた。しかし、すべての章が必ずしも「源氏」の順序を追はなかつたことは、「夕顏」に據るものを、幾つにも裁斷しておいて、「はにふの寢道具」と「形見の水ぐし」の間に、他の卷々の飜案を混入してゐることによつて明である。現に「形見の水ぐし」の直前にある「因果の關守」の牢屋の原據は、「賢木」の塗籠である。

かういふ順序の變更は、時に「髮きりても捨てられぬ世」と「女はおもはくの外」のやうに、配列の俳諧による場合もある。けれど「紅葉賀」を原據とする「目に三月」を、「須磨」を原據とする「火神鳴の雲がくれ」の前に置いたのは、西鶴が特に考慮を拂つての上の事と考へられる。けだし、「好色一代男」一部の大意はこゝに存する。「源氏」の古註家は、しば／＼一部の大意として、天台の教義を說くもの、また褒貶を寓するものなることをいつてゐる。西鶴の目の「源氏」の解なるものは多くはこれであつた。西鶴は一長篇小說としての「源氏」といふよりは數多の短篇小說の集群としての「源氏」を、古典といふ軌範を離れて味ひながら、また從來の一部大意の解を棄てなかつた。彼は繋いでゐる大筋と、繋れてゐる箇々の事件を飜案すると共に、また一部大意の飜案をもなしたのである。「好色一代男」の大意とは何か。それは「目に三月」の飜案と原據との比較に於いて、明に知り得る筈である。

朱雀院の行幸に先立つて試樂が行はれた。殊更に藤壺に見せようとする帝の御思召による。源氏君は靑海波を舞

はれた。相手の頭中將も容貌用意共に傑れてはゐるが、源氏君と比較すれば、花の傍の深山木であつた。源氏君が舞に合せての詠ずる聲の美しさは、佛の迦陵頻伽の聲ともいふべきであらうか。帝は感に堪へて、涙をさへ落しなされた。藤壺はこれを限りたくめでたしと思ふにつけて、もし源氏君との祕めたる戀がなかつたならば、ましてと夢心地であつた。そのあくる朝、源氏君から藤壺に消息があつた。

いかに御覽じけむ、世に知らぬみだり心地ながらこそ、

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりしこゝろ知りきや

あなかしこ

日比は、御かへりもせぬ藤壺であつた。今は目もあやなりし御樣かたちに、そのまゝには默してゐられなかつた。

から人の袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き

源氏君はこの返歌を見て、青海波を唐樂と知つてゐる藤壺の博識に感じた。その手紙を持經のやうに展げて讀んでゐられた。

西鶴が「紅葉賀」に據るところはたゞこれだけである。まづ試樂を見るとてうち集ふ御方々を飜して、遊山に出づる御所方の上﨟達とした。舞青海波を、上﨟の衣裝の模樣にほのめかした。すなはち、「下には水鹿子の、白むく、上には、むらさきしぼりに青海波」といふのがそれである。さて肝心の青海波の舞を飜す場合には、世之介を頭中將役とし、善吉を源氏君役とした。この轉換に作意があつた。

世之介は七代の大分限者の夢山に供して島原に行く。彼は三十三歲にして、はじめて天下第一の遊廓に遊ぶので

あつた。隱れもなき粹士善吉が案內する。善吉は、この仕懸を見習へと世之介等に揚言する。しかし、善吉はこの里にはしるべもなく、丸太屋の見世のさきに挾箱をおろさせ、腰懸て、內を見やれば、色人許り集り、酒飲んでゐたが、石州は一つうけて、禿に申付て、門に居る善吉に、知らぬ御方様へさしますといふ。是はと二つ飲てかへす、女郎戴く時、善吉、御肴とて挾箱から接竿の黑檀、六すぢ懸を取出し、僕うたへといふ。世之介畏つて、弄齋をうたふ、其聲の美しさ、彈手は上手、さりとては石州が見立と、おの／＼感に入る。女は馴染の方へ、斷りの文遣し、ひたすら善吉と語り暮した。

「目に三月」の主題とするところはこれである。西鶴は斯くして源氏君と頭中將のつれ舞をとり入れた。また藤壺の青海波を解し得た事と、源氏君への返歌を趣向とした。しかも西鶴はこの弄齋の上手の世之介を、作意によつて傷しい目に合はせることにした。善吉が石州に大持に持てたにひきかへて、彼は太鼓女郎にさへふられたのである。彼ははじめて島原の本場の遊びがいかに金を要するかを適切に體驗した。つひに發憤せざるを得なかつた。

世之介は、たいこ女郎にさへ、ふられて、此口惜さ、人に、買てもろうて、遊べき所にあらず、おれも一度は、中／＼、是では、果じとぞおもふ。

斯ういふ世之介を、やがて大々々盡にするのが、次の章「火神鳴の雲がくれ」である。「須磨」「明石」のおもかげを寫して、勘當を受けて、諸國流浪の身の世之介が、父の遺產を貰ひ得たやうに、西鶴は趣向を構へたのである。二萬五千貫目の遺產を繼いだ後の世之介の生活は、急に光輝を發した。粹となり、譯知りとなつたのである。西鶴は世之介の生涯に一線を劃してゐる。三十四歲以前の世之介と、三十五歲以後の世之介との間の一線は、富

まざる彼と、富める彼との間の一線である。また粋に到達せざる彼と、粋に徹する彼とを區別する一線である。富と粋との關係、これが、「好色一代男」一部を貫く大意であつた。

「一代男」の卷四は「火神鳴の雲がくれ」に終つて、卷五は、世之介三十五歳の章、「後には様付てよぶ」にはじまる。世之介が「わけ知りの世之介様」と吉野太夫によばれるほどの粋生活は、こゝから開展する。すなはち、「一代男」一部八卷の中、前四卷は、粋の資格を養ふ世之介を寫し出し、後四卷は好色道の達人、粋世之介を寫し出してゐる。西鶴はかくして、粋の諸條件を一部の趣向の中に、隱微の形を以て數へてゐた。

世之介が七歳すでに戀を解するはその一條件であつた。惠まれたる彼の境遇はこの好き素質を伸びるがまゝに伸すことを得た。腰元から、從姉、隣家の女房、田舍の遊女、京の私娼と、その經驗を重ねてゐた。「別れは當座はらひ」の彼は、わづかに十一歳にして、京の八阪の女に、一つも口をあかせぬ應對が出來るほどの訓練を得てゐた。西鶴は卷一、すなはち七歳から十一歳までの世之介には、性的發展の徑路を叙するに專らであつた。

西鶴はまた卷二、十四歳の後の諸國流浪の生活、殊に親から勘當を受けて後には、到るところの諸遊里の探求、また隈なき戀の種々相を經驗せしむる事に筆を盡してゐた。その好色修行は、三十二、「晝のつり狐」のくら事四十八手を知るに至つた。しかし、彼はついに金を持たなかつた。故にあれほどの素質と敎養とを幷せ有する彼も、未だ粋に到達する最大條件を缺くがために、三十三歳、「目に三月」のはじめての島原遊びには、太鼓女郎にさへふられてしまつたのである。その彼が、三十四歳にして大々々盡となつた。世之介の粋者たる資格はこゝに至つてはじめて完備したのであつた。斯くして西鶴は世之介に譯知りの世之介様といふ尊い稱號を與へたのである。粋と譯

知りとは、語を異にして義を同じうしてゐる。粋はまた水とも書いた、月すなはち野暮に對する汎稱である。

二

粋とは何か、西鶴が考へる粋の本質は何か、これが西鶴の好色本研究の焦點でなければならない。こゝにもそれを中心として說明すべきであるが、今は抽象的解說を避けて、西鶴がどんな構圖の下に、また「源氏」とどんな關係を保ちながら、粋の生活を寫し出さうとしたかの一端に就いてのみ考へようとする。西鶴の粋の研究は、順序として、斯くあるべきことを信ずるためである。

粋を譯知りといひかへることの出來るのは、戀の諸譯を知るといふにあるが、所詮は組織としての遊廓、また職業としての遊女本來性質の理解に歸着する。西鶴の好色本のすべては、遊廓の雰圍氣を搖曳することを期してゐる。當時の文化は、遊廓を中心にして動いてゐる。西鶴の筆は、最も巧みにその時相を寫し出したのである。

小刀鍛冶の弟子がおほけなくも太夫吉野に戀して衷情愍むべきものがある、と聞いた太夫は、その心入不便とひそかに呼入れて、首尾してやる。その日は丁度世之介約束の日であつたが、世之介は事情を知つて咎めるどころか、却つて「それこそ女郎の本意なれ」と褒めそやし、なほ「我見捨じ」と、その夜直に身請の沙汰に及んだ。「後は樣つけて呼」は、筆をこの事に起してゐる。

遊女は一人の私すべきでない。また遊女は一人にのみ身を委すべきでない。傷しいかぎりであるが、遊廓の組織、遊女の職業やむなきに出づる。これが情の道であり、好色の道である。遊女と嫖客はおの〳〵の道を體して、遊廓

なる組織の機能の活動を妨げてはならない。永い間の修養によつて、世之介はくるわと女郎の本意の何であるか知つた。譯知りであり、粹士の稱ある所以である。

情の道を最もよく知る吉野は、最もよき遊女である。しかし、遊女はかなしき身過であり、卑しい職業である。世之介は吉野の遊女として傑出せるを知ると共に、その卑しい職業に從はねばならぬ女の身の上を愍む。さてこそ、その夜伽の身請沙汰となつたのである。遊女は私有すべからず、獨占すべからず、たゞ、かゝる過程に於いてのみ、私有獨占がゆるされるのである。

よりよき遊女資格の第一條件は、必ずしもよりよき主婦でない。しかし、變態なる時代相は、遊廓を以て文化第一の府たらしめ、また遊女の最高階級太夫をして、文化第一の教養ある婦女たらしめてゐた。「後には樣つけて呼」の後半は、身請された吉野がその卑鄙の出なる故に、世之介の妻とすること難しと排せられんとする時、その教養の限りを盡して、世之介一門の衆女を驚し、衆女却つて彼女を推擧する顚末をしるしてゐる。西鶴は實にこの事件を叙すると共に、かねて、當時の太夫が、いかなる教養を有してゐるかを數へる形をとつてゐる。

「一代男」卷五以下、世之介を通じて展開された粹生活の中心をなす遊女は、西鶴當時といふよりは、多くは少し前に溯つた實在の人物をモデルにしてゐるやうである。事實は天和の頃は、太夫の品格のやゝ遞下した時代である。一篇の理想小說に意圖をおいた西鶴は、背景をば今の相としたものの、人物には却つて眼前の者を避けて、巷說にのこれる、より高い昔姿を假りてゐるやうである。

そのモデルの扱ひがどの程度までモデルに忠實であつたかは、今日からはくはしく知ることが出來ない。たとへ

ば吉野にゆめ〲劣らぬ新町の夕霧の如きは、時からいへば、まさしく西鶴も目睹し得た筈の實在の人物であつたが、卷六の「身は火にくばるとも」にしるされてゐるのは、必ずしもその人の實事のみではなかつた。夕霧が世之介と忍び會ふ折柄、まづ火燵の火を消しておく。約束の客が來る早速に、世之介を火燵の中に隱す。さて、不思議のたつやうに、何でもない文を持ちながら、臺所へ逃げる。客が追ひかける、見る見せぬの爭の中に、世之介を戀のぬけ道ぬけさせる、西鶴は夕霧の情をしるすと共に、この利發機轉の一條を傳へてゐる。この一條は、實は西鶴の虛であり、俳諧である。例の「源氏」の飜案であつた。

源氏君の子夕霧大將は落葉宮にいひ寄ることがあつた。さて文を贈る。母御息所が宮に代つて返事を書いた。かねて他意あることを悟つてゐた妻の雲井雁は、とくそれを奪つて見せない。幾度かの押し問答を重ねても甲斐がない。大將は寢處の間に時を過し、わづかに機を得て、とりかへした。

西鶴がこの「夕霧」の卷の一事を彼に轉用したのは、外にも本づくところはあるが、主としては夕霧といふ名の相通による。轉合のあとの顯著なる一例である。

斯ういふ虛も混る西鶴作中の太夫の中に、「後には樣つけて呼」に於ける吉野が、實在の人二代目德子吉野の實事を傳へて謬なきことは、種々の文獻によつて證明せられる。吉野傳の闡明は延いて、彼女を身請したる客の灰屋紹益なることが實證される。彼は京の上立賣の富豪、佐野氏、通稱三郎右衞門であつた。都をば花なき里の歌は、實に彼の詠である。紹益の遺事遺物の今に存するもの少なからず、その人物ほゞ考ふべく、その著「にぎはひ草」一篇によつて、その才識窺ふべきである。

紹益程の教養あつて、はじめて前代未聞の太夫吉野に配すべきである。當時の粋客なる者、事實に於いて大方これであつた。世之介またこれほどの教養のあるべき筈である。西鶴が世之介の性の力と金の力とに多くを說いて、その學識才能に就いて語ることの少いのは、畢竟「一代男」の轉合の書であるからであつた。これなほ「源氏」が多く源氏君の學識を語り、わづかにその經濟力を說くのを逆用した感がある。

吉野が刀鍛冶の弟子を憐んだ一條は有名なる巷說であるだけに、近松もまた「山崎與次兵衛壽門松」の一趣向としてゐる。たゞし、これは遊女の本意に專らでなくして、母と子の人情を中心としてゐる。二者を對比して、兩作者の態度の相異を知ることが出來る。

一三

西鶴は時と所と人と事の間に虛實を配することによつて、「一代男」のをかしさを饒にしようとする。今の吉野の如き、殆ど實に專らなる場合には、前後の關係に於いて、なほ「源氏」の飜案たることを暗示するを忘れなかつた。事多くいふも煩はしい。「火神鳴の雲がくれ」が「須磨」のおもかげであり、「ねがひの搔餅」が「關屋」のおもかげであるならば、吉野の身請はいふまでもなく、源氏君が明石上を京に迎へる事の飜案なるは、極めて明である。

世之介が大盡となつた後、大津の柴屋町に遊ぶ、たま〳〵舊識である京の禿三人が、立派な馬に乘つて伊勢參するのに逢つた。世之介は三人が一所に晝も寢ながら、手づから搔餅燒いて行ける乘物を造つてやつた。この「ねがひの搔餅」が「關屋」を原據とするといふのは、源氏君が石山寺に願果しにゆく途、關山に於いて空蟬等の一族が

常陸より歸京するに邂逅した事件の飜案であるからである。空蟬などの車十輛ばかり、出衣の袖口の美しさを、秃が乘れる三匹の飾馬に擬したのである。

吉野の事が「明石」の俤であることは、廣きに亙つていふべき事であるが、その教養に就いてはなほ狹く源氏君が明石を去るに臨み、明石上の琴を聞いて、その妙手に驚くくだり、「月頃など強ひても聞き馴さゞりつらむと、悔しうおぼさる。心のかぎり、行くさきの契をのみし給ふ。琴はまたかきあはするまでの形見にと宣ふ」などを考ふべきであつた。

西鶴が「源氏」の飜案を事としながら、巧みに粹道を說き得た一例としては、卷六の「全盛歌書羽織」を擧ぐべきであらう。

世之介と傳七が、互に太夫野秋を爭ふ。二人に甲乙がない、野秋はいづれを選ぶべきでなかつた。野秋は隔日に會つて、昨日の噂を今日いはず、今日の事を明日語らなかつたが、後には、「三人同じ枕を並べながら、下卑て首尾する譯もなく、あぢな事共許、前代未聞の傾城ぐるひ」をなすに至つた。一人が遊女を私せぬのが遊廓本來の性質であるとすれば、粹はまさにこゝにまで到達すべきであつた。野秋に果してこの事あつたか、ありとすれば西鶴の筆の誇張はどの程度であつたか、もとより知るすべのない今は、これをも「薄雲」のおもかげと見るのを心易いやうに思はれる。

その卷にある源氏君は、二條院の美しき方々を、とりどりによしと見て、選擇の餘地がなかつた。その時である、君は秋好女御に斯ういはれた。

はかばかしき方の望はさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心の行く事も侍りにしがな、春の花の林、秋の野の盛りをなむ、昔よりとりどりに人爭ひ侍りける。その頃のげにと心よるばかり、あらはなる定こそ侍らざンなれ。唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり。大和言の葉には、秋のあはれをとり立てゝ思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。

女御は秋のあはれをと答へる。源氏君は、また紫上に語つた。

女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに、君の、春の曙に心しめ給へるも理にこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな。公私の營しげき身こそふさはしからね、いかで思ふ事してしがなと、たゞ御ためさう〴〵しくやと思ふこそ心苦しけれ。

この春秋の爭、いづれをいづれと分け難き源氏君の惑ひを、野秋の心としたのが、西鶴の飜案でなかつたか。西鶴は野秋と世之介傳七の粹の遊びをしるした後の筆に、「あはねば知れぬよき事ふたつ有」とて細やかに紹介してゐる事がある。さりとては三人枕を並べて、首尾するわけもない傾城狂ひを傳へる筆に續けるには、ふさはしくない。しかし、粹の境地は、さういふ性の發展を基調にして、そこに微妙なる即離の關係を持することに於いて到達する。西鶴の筆を怪しむことを要さない。西鶴の好色本の妙味は、つひにその關係に歸着する。

好色本の根抵は性慾にある。故に、世之介が床の責道具を好色丸に滿載して、女護島に渡るの趣向は、「一代男」として、當然の結論でなければならない。しかし、それが「源氏」に於いては、源氏君の甍去の悲愁を傳へてゐる

等の「雲隱」の飜案である事を知る時に、西鶴の轉合に心惹れざるを得ない。溯つて、京大阪江戸の女郎の人形を遠い長崎で見せる「都のすがた人形」が、源氏君が紫上の死を悲しんで、その風貌を夢現の間にほの見る「幻」であること、水揚の仰々しい作法をしるした「一盃たらいて戀里」が、紫上の追善供養の儀式の叙述に專らなる「御法」の飜案であることに氣づく時に、誰か西鶴の轉合に笑はない者があらう。「一代男」はその形に於いて、小説ではあるものの、西鶴の意は散文的俳諧を期してゐたのであらう。それならば、何故に原據に「源氏」を選んだか。內容について、多くの理由が數へられる外に、長篇小説にして、短篇小説の集群と見られる「源氏」の組織構造も與つてゐることを忘るべきでない。

一四

「好色二代男」「好色一代女」「好色五人女」の轉合は、すべて「好色一代男」のそれと質を同じうしてゐる、俳諧の手法また相似てゐる。たゞ飜案の原據に至つては、おの〳〵異なつてゐる。

「一代男」の轉合の穿鑿に就いて、やゝ多くを語つた今は、全く態度を同じうする他の好色本の轉合の一つ一つを縷說するを要さないやうに思はれる。たゞ異なる原據との比較の一端を示せば、さしあたつては事足ると考へられる。

「二代男」の世傳は「一代男」の世之介と、都の若後家の間に生れたのが、慶安四年の秋、襁褓ながらに棄てられたことになつてゐる。趣向として、「一代男」の卷二の「髮きりても捨てられぬ世」に聯絡する。しかし、世之介の

六十歳を天和二年として、その事があつた筈の十五歳に溯れば慶安四年に該當しない。けだし、西鶴が「二代男」と「一代男」との關係を割合に輕く見て、飜案の原據を重く見たために、この誤算を生じたのであつたらう。

世傳はさる人に拾はれて育てられたが、十四歳の時に、養父養母に死別したとある。西鶴が特に十四歳と斷つたのは、「源氏」の薫君の行跡の年立に現はれる年齡を轉用したためであらう。源氏君の子ならねど事情あつて子といはれてゐる薫君を主人公とする「雲隱」から後の「源氏物語」、いふところの宇治の卷々こそ、實に西鶴が飜案「好色二代男」の原據であつた。

「二代男」の飜案ぶりは、これを「一代男」に比すれば、更に自由な態度を以てしてゐる。「一代男」が「夕顏」「若紫」「須磨」を原據とする場合のやうに、一卷から數話を構成し、薫以外匂宮その他を主人公に轉用してゐる。ために殆ど原形を認め得ないものさへある。今こゝには事多くいはずに濟みさうな二三の例を拾ふことにする。

卷一「誓紙は異見の種」には遊女の誓紙に關することが多くしるされてある。これは原據にないことであつた。そこにはまた平野橋の源といふ粋客が、新屋の小太夫に、我を思ふといふ誓紙を書せようとしたところが、小太夫はそれほどに思つてゐぬ故に書くことが出來ないといふ、それなら惚れぬといふ誓紙を書けとて書せた事がしるされてゐる。源は老いての後に、その誓紙をとり出しては、惡所狂にもよい程知るべし、惚れませぬと云ふ起請世にない事なれども、これさへ見棄て難く心を盡して通つたものをと手代どもに異見したとある。これは「橋姫」の宇治八宮が、その子大君中君を敎訓するくだり、または八宮の薫君に對する法談のくだりのおもかげであつた。

姫君、おん硯をやをらひき寄せて、手習のやうに書きまぜ給ふを、これに書きたまへ、硯には書きつけざンな

りとて紙奉り給へば、はぢらひて書き給ふ。

いかでかく巣立ちけるぞとおもふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

よからねど、その折は哀なりけり、手はおひさき見えて、まだよくもつゞけ給はぬほどなり。若宮も書き給へとあれば、今少し幼げに、久しく書き出で給へり。

泣く泣くもはねうち著する君なくば我ぞ巣守りになるべかりける

源が小太夫に誓紙書けといつた原據の本文はこれであつた。

「橋姫」にはまた薫君が姫君だちをかい間見るくだりがある。一卷の眼目となつてゐる。

内なる人、一人は柱に少し居隱れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隱れたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば、扇ならでこれしても月は招きつべかりけり、とてさしのぞきたる顏、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし。そひ臥したる人は、琴の上に傾きかゝりて、入る日をかへす撥こそありけれ、樣異にも思ひ及び給ふ御心かなとて打笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。及ばずとも、これも月に離るゝものかはなど、はかなきことを、うち解け宣ひかはしたる御けはひども、更に餘所に思ひやりしには似ず、いと哀になつかしうをかし。

西鶴はそのくだりに據つて、卷一の「詰り肴に戎大黑」を成した。薫君が夜深きに、とみに宇治へ行くやうに、一群の粋客は更けてから島原へ急ぐ。薫君がかくれなき御匂に、寢覺の家を驚かすやうに、また姫君を垣間見るやうに、これは揚屋町の一軒一軒を覗きまはる。薫君が琵琶の音を遠くに聞いたやうに、これには、「此里の夜起の面白

さ、早隣には彈いて投節、河内と聞えた、あれを此方の肴に」といふ風情があつた。さても西鶴は大君の琵琶の撥をどう飜案したことであらうか。彼の轉合ぶりが明である。

悴客どもは太夫まじりに臺所に出でて、料理事をする。そこには形の上から琵琶の撥を見立てた飯貝があつた。

野秋は飯を盛る筈と定めければ、つひに飯貝知らぬとは、或時女院様に杓子を見せ奉りしに、それは飯盛る物よと仰せられたる事もあるに、是非に盛り習ひや、自然鎮籠屋の女房に成らりよも知れぬ浮世と云ふ、此示しは聞き所で御座んす、如何にも盛りましよが、誰やら二階から見さんすものといふ、それこそ任せ、所帶の取付くろめてやらうと、日傘をさし懸けて、上からは見えぬぞ、下の御用心、それ出たわ、いかい嘘の、たしなまんせ、さあ何も出來た、直れといふ。

西鶴はかくして、薫君のかい間見のくだりの、「奥の方より人おはすと告げ聞ゆる人やあらむ、簾おろして皆入りぬ」までを、こゝにとり入れたのである。

西鶴は宇治十帖に據つてかういふ轉合をすると共に、その出發に於いて、更に大なる轉合をなしてゐる。ものの順序から、「一代男」につゞく「二代男」として、宇治十帖に據ることを思はせてゐるところに、その宇治をかゝりにして、も一つの原據として、内容に於いても、形式に於いても、「宇治拾遺物語」を利用してゐた。

「二代男」の序に當る「親の貌は見ぬ初夢」に、世傳が揚屋町の出口の茶屋に腰かけて、朝歸りの客に讃付けてゐるところへ、古狸のくにといふ遣手の開山が來て、諸國の諸分の話する、それの聞書がすなはち「二代男」とあるは、いふまでもなく、「宇治拾遺」の序に、宇治大納言隆國が旅人の聞書をとつたとあるのに據つたことは明である。

西鶴はまた遺手の古手のくにを「橋姫」の老女房、辨君に擬してゐる。女護島の美面鳥またそれに擬したものであつた。美面鳥が傳へ、くにの語る形は、辨君が薫君の素性を語り、また實の父柏木の古手紙を傳へるくだりを假用してゐることは勿論である。

西鶴が「宇治拾遺」を原據としたために、「二代男」は、怪奇談が多くとり入れられることになつた。また「一代男」のやうに、一人の主人公によつて事件を統一しないことになつた。思ふに、西鶴が「宇治拾遺」を選んだ理由は、「宇治十帖」の宇治の名によるだけでなく、むしろ「一代男」のやうな形式的統一を避けて、箇々の事件に就いて、また背景に就いて、叙述と描寫を専らならしめんとする意圖に本づくことであらう。「一代男」すでにそれである。たゞ長篇小説の形式を假りるが故に、之れを蔭にうつしたのである。西鶴はこゝに長篇小説の形式を解體して、「一代男」の蔭にあるものを表に出さうとした。「二代男」が目録にも、たとへば「戀は闇」と題して「腰元に心ある事」とあるのを、これは「親の貌は見ぬ初夢」の章下に、「一女護の島より美面鳥渡る事、一島原の衣裝替り姿の事、一遣手の國が諸分物語の事」と各章各三事を添へて、意のあるところを明にしてゐる。これもまた「宇治拾遺」の體裁に倣ふものであつた。

形の統一を離れて、箇々の事を主とすることは、却つて俳諧の手腕を發揮する上には都合がよい。たゞ「源氏」の一部大意に擬した粹道の俤の如きは、これを隱微の間に寓するも面白いが、あらはに語るも興なしとしない、と思つた西鶴は卷末の「大往生は女色の臺」に於いて、好色道の妙諦を正面から說明してゐる。

世傳は三十三の三月十五日切に、差引なしに、遣ひ棄て、大往生を極めたことになつてゐる。これを世之介が六

十歳にして、なほ女護島渡りすると大なる相異がある。これは薫君の若くして道心の深きを移しなしたか、どうか。その解釋もゆるされることと思ふが、文の表は「是れ世の中の浮かれ男に、物の限りを知らしめんが爲なり」となつてゐる。

二十より内の騒ぎは、此道に入る皆足代と譯知り和尙も說き給へり。それより十年大與に入りて、太夫の難有いところを覺え、四十より內に留る事を覺らずば、揚錢の淵に沈むこと眼の前なり。手前にある程叩き上げて、旣に廻向の金の無い段に、俄かにやめるも見苦し。

世之介の遊びは父夢介の夢幻の遊びぶりを現實化したものといへる。しかし、その富の一面は依然として夢幻であつた。世傳はその點を現實化するものといひ得る。「二代男」の考察が、「一代男」よりも町人物に近く連絡する事を要するは之がためである。「二代男」の粹客も、遊女も、なほ理想化されてゐることは明である。「二代男」に至つてまさしき現實の姿を見ることが出來る。こゝにまた西鶴の轉合を考へざるを得ない。彼が多く現實に就いて語る「二代男」には、却つて非現實の事象、すなはち怪奇の一面を挿むことが多い。これがまた「宇治拾遺」などに據ること勿論である。あらゆるものを利用する彼の腕の凄さに驚くと共に、飽くまで讀者を飜弄する彼の腹の黑さが考へさせられる。「二代男」はまた「新可笑記」などとも參照すべき位置にある。もし作の位からいへば、いふまでもなく「一代男」の下にあらう。しかし、西鶴硏究としては、「二代男」は種々の點に於いて、最も重要なる材料であらう。今は殆どそれ等の諸問題に觸れることさへなくてやむ。たゞ「宇治拾遺」がいかやうにとり入られたかの一例を擧げておく。わざと怪奇から怪奇へと移したものでなく、彼の怪奇をあらぬものに飜した一條を選ぶことと

する。

「宇治拾遺」に「高階俊平が弟入道算術事」といふ章がある。その入道は唐人から算の術を傳受した。ある時、若き女房どもの集りて庚申した夜、一人が入道に何か人笑はせの物語せよといふ。話下手の甲斐なけれど、笑はせるだけの術は心得てゐると答へる。さて算を置きはじめる。女房どもは何をとばかり嘲つてゐたがやがてすゞろに笑壺に入る。はては笑ひ止めようとすれどかなはず、殆ど死なんとする。入道が漸く置いた算を毀つたので、辛うじて笑死からのがれたとある。

西鶴はこれを飜案して、巻二の「髪は島田の車僧」の「物眞似の末社揃への事」とした。生れつき笑ふ事が嫌ひといふ三人の女郎を笑はせる、笑はぬで賭をする。末社どもはあらゆる滑稽を盡しても、女郎は笑はない。身上りの悲しさ、淋しい時の親方の顔色を思ひ出してゐるからである。どうしても京中のをかし仲間が負けと決る時、一人が、「分別して、小石を紙に包み、袖に入れて、耳近く寄りて、さゝやくは、九月の節句も遠いやうでから今の事じや、あとも先も爲手があるぞ、まづ是で忙しういふ拂をしやれと、一包投げ出せば、莞爾と異な事にて笑ひぬ」西鶴はたゞ行くらべといふ點で、謡曲「車僧」を題に据ゑながら、內實は他に據つたのである。例の二重の轉合である。

西鶴が算おきの怪奇を棄てて、かういふ趣向立をしたことは、「二代男」一部の大意からいへば當然である。之れは「一代男」と同じやうに粹客の全盛ぶりと、遊女の氣位の高さを說く一面に、努めて「一代男」の裏をかいて、粹の吝さ、遊女のさもしさの穿ちに力を盡してゐるからである。

一五

「二代男」の別名「諸艶大鑑」の本づくところは、畠山箕山の「色道大鏡」にある。西鶴の好色本の研究に於いて、缺いてはならないのは、この書との關係である。材料と作品との關係である。殊に「二代男」に於いて然り。「一代男」よりも、素材そのものに近いからである。しかし、今は題名以外、説くべき餘裕を有さない。

こゝにまた作者西鶴が闘り知らずして、却つて今日から推測し得る「大かゞみ」の義がある。けだし、「大かゞみ」は「榮華物語」と共に、藤原道長の全盛ぶりを傳へて、なほ「榮華物語」の如く、禮讃のみに專心でなくて、時に忌憚なき批判を以てしてゐる。もし、その異同を借り來つていふとすれば、「一代男」は「榮華物語」と類を同じうし、「二代男」は「大かがみ」と態度を一にしてゐる。よし西鶴は氣づかなくて命名したにしても、その名がおのづから實を示すことも考へられもする。

「二代男」が粹の禮讃に併せて、粹の批判の性質を有することは、廓遊びの裏面を描寫する筆を多くし、また粹客遊客の手管魂膽を穿つ叙述を多くする。これはまたその穿ちを教材とする教訓の一面を隨伴せしめる。

この穿ちと教訓の傾向を助長する時に、「好色一代女」は成立する。西鶴の作風は、好色本と町人物なるを問はず、この本質を同じうしながら、その相は常にある傾向を以て流動してゐる。「一代女」と「二代男」の關係に於いても、それと指示することが出來る。

「一代女」は形式からいへば、「二代男」から溯つて「一代男」に復歸するといひ得る。これは世之介に當る一人の

女を以て主人公としてゐるからである。「一代男」は世傳を以てたゞ聞書をとる人としてのみ扱つた。すなはち「一代男」そのものの編者としてのみ見た。諸國の遊里、遊女、粹客の事蹟を傳へるには、この方が便よいと西鶴は考へたのであらう。

西鶴が源氏君に擬する世之介を以て「一代男」の主人公として、一篇を貫かせたのは、諸國の遊里を紹介し、また戀の諸階段を紹介しながら、島原の粹と比較させる便宜のためであつた。世之介はそれがために、西鶴の傀儡として、大盡たる以前にも諸國の旅をさせられ、以後にも旅をさせられてゐる。大盡以前には勘當をうけたための放浪の旅であり、以後は町人經濟の活動の旅、または享樂の旅である相異はあるにしても、作者の傀儡たる點に於いては同一である。たとへば「異つたものは男傾城」の場合に於いて、西鶴の說かうとするのは奥女中の性的生活であつた。故に彼は世之介をそのためにのみ江戶に拉れて行つた。武家の奥女中との交涉はこの地を最も便よしとするためである。その他に世之介と江戶を結びつける必然性は何もない。世之介の仁俠の如きは、唐犬權兵衛と共に、一種の江戶氣分を出す手段に過ぎなかつた。原據たる中將のおもとの行爲は、それとなく御息所の嫉妬の性格を傳へる重要なる一條件になつてゐるが、飜案せられた女中は、たゞ奥女中なるものを示す以外に、全篇に關する關係はなかつた。

世之介をして隈なき性的經驗を重ねさせる爲の旅の趣向は、その頃の女物には極めて不利である。それならば、西鶴は「一代女」に於いて、何故に都合よき「一代男」の體裁をとらなかつたらうか。何とならば、「一代女」は「一代男」が眼目とする戀の相を、しかも女の立場から說きなす意圖以外に、「一代男」の穿ちにまで入り、かれて

教訓の態度を併せ用ゐようとする態度を有してゐるからである。

西鶴が「一代女」に於いて、一人の女を主人公として、種々の性的事項を貫かしめたのは、それの紹介者たるだけでなく、他に有效な結果を生ずることを思つたためであつた。もとより性的事項の多くに觸れるためには、まづ一代女の性的期間を永くすることを要する。しかし、世之介と同じ趣向を以てすべきでなかつた。そこに男と女との相異がある。西鶴は一代女をして幼きより戀を解させるとて、公卿がたの娘とし、また宮中に仕へさせた。

公家がたの御暮しは歌のさま鞠も色ちかく、枕隙なきその事のみ見るに浮れ聞にときめき、おのづと戀を求し情にもとづく折から、

かういふ公卿生活の概念の上に立てた趣向であつた。またいつまでも若く見せるために、皮薄の小作りの女とした。

ゆく年もはや六十五なるに、うち見には四十餘りと人のいふは、皮薄にして小作なる女の德なり。

この種の記事はところ〴〵に散見してゐる。

一代女の性的經驗はこの永き期間を利用して、それからそれへと發展する、しかも西鶴は、それに一定の順序を與へてゐる。高きより低きに、尊きより卑しき、たとへば遊びがてらの八人藝から、身すぎかなしく、大名の妾となり、やがて太夫となり天神、鹿戀と下り、いよ〳〵下ざまに墮ちゆきては、六十五の老齡にして、惣嫁の勤めをすることになつてゐる。これを世之介の閱歷と比較すれば、彼にはたえず向上の一路がある。すべては粹を目ざして動くからである。これには墮落の一面がある。落ち盡して悲慘の境地に呻吟するより外はなかつた。彼の光明と、此の闇黑と、大なる相異を表はすものは、もとより他に種々の原因はあるものの、飜案の原據の違ひがまた少から

ず與つてゐる。

「一代女」の原據は何であるか、いふところの尼懺悔これである。その頃行はれてゐる「七人比丘尼」「二人比丘尼」等である。

これ等の比丘尼物は、多くの場合、「九相詩」によつて想を構へてゐる。人死して屍となつて骨に化するまでに、九位の變相があるといふ詩の意に據るのである。西鶴はその九位を女の諸階級に當てた。その位相を階級が持つ色調に飜した。この飜案が西鶴の轉合に出づることは勿論である。

比丘尼物の結論は、無常迅速の理を說いて、菩提の道に入るにある。「一代女」また同じ形を以て、いたましい懺悔告白を以て佛道に入ることになつてゐる。しかも、西鶴の說くものは懺悔そのものにあらずして、懺悔の中に現はれる相であつた。「一代男」に於て、しば／＼見るところの懺悔の構圖と比すれば、長短以外、殆ど變ることがない。卷二の「うら屋の住所」の世之介の懺悔、卷四の「晝のつり狐」の老女の告白、と軌を同じうしてゐる。殊に後者の如きは、「一代女」の約を示したものともいひ得る。しかも、好色庵の額うつて、竹葉の一滴に心亂れて常弄し縋ならして戀慕の詩うたふ尼に、どれほどの殊勝氣がある。西鶴の懺悔物、比丘尼物の正體はこれだけでも、それと知ることが出來る。

さるにても、「老女の隱家」の章に於いて、一代女を訪ねる二人の男は、よくもよくも、人を知る明ある者といはうか。西鶴の俳諧はこれにも籠れるやうに思はれる。「古事談」の「燕王好馬買骨事」の一節、

淸少納言零落之後、若殿上人あまた同車、渡二彼宅前一之間、宅體破壞したるをみて、少納言無下にこそ成にけ

れと車中に云を聞て、本白棧敷に立たりけるが、簾を搔上げ如二鬼形之女法師一顏を指出云々駿馬之骨をば不レ買やありし云々

すなはち西鶴は、この淸少納言を貶む若殿上人を、わざわざ里離れた北の山陰まで尋ね入つて、好色道に就いて殊勝な若者二人に書きかへたのである。西鶴にこの案があつたことは、「一代女」の文の中に「枕草子」の語句を引き、その語法に倣ふものの多い事實からも判斷される。ここに一目してそれと知り得るほんの一節を、卷五の「濡問屋硯」から拔いてみる。

見るにおかしげなる貌つき八橋の吉と濱芝居の千歳老、不斷眠れど見よきもの、くだり玉が風俗お裏の御堂の海棠、とうから出來いてかなはぬ物、金平のはつが唐瘡高津の涼み茶屋、夜光て世に重寶、猫のりんが眼ざし杖に仕込灯挑にぎやかに見へて跡の淋しき女、釋迦がしらの久米座摩のねり物、泣てからおもしろうないもの、德利のこまんが床今宮の松の烏云々、

しかし西鶴の轉合はただこれだけであらうか。西鶴の頃には此の駿馬の骨を買はずやの話は、淸少納言の事蹟として相應に信をおかれた話ではあるが、それを持ち出して來たといふのでは、西鶴の例の手法としてはもの足りない。西鶴の俳諧はもつと大きいものを用意してゐたやうである。彼にすれば「老女の隱家」に於ける淸少納言と若殿上人との俤をあしらふなどは、ほんの筆ついでであつたらう。隨分「枕草子」をかうもぢつたことも、あの頃の俳人がよくやつた古典まがひとしてやや人を驚かしもしたらうが、西鶴はもつと意外のものを藉り用ゐて人々をあつと言はせようとしたのではなからうか。その古典は日本のものならぬ支那の古典、「遊仙窟」である。「遊仙窟」は

唐代の傳奇、才人張文成の作である。

書にいふところは張文成と崔女郎との濃艶の情話である。張文成かつて古老が傳へて神仙の窟と稱する中に入つた。人跡及ぶこと罕に、鳥の跡がわづかに通ふばかり。行き行きて崔女郎の家に宿をかりた。主の十娘の美しさは、浮世にかういふ人ありとは思ひ知らぬものであつた。十娘は嫂と住つてゐた。これも亦美にして婉であつた。二人の女は心こめて文成をもてなした。二人と文成とが唱和した詩の數も多い。皆誦するに足りる。席上嫂は箏を彈じた。十娘もまた尺八を吹き鳴らした。樂しい宵も更けて、文成と十娘との契は濃であつた。さ夜中を聲高く叫ぶやもめ鵲も憎く、まだ明けぬ空に鳴きしきる氣違ひ鷄もうとましい。その翌日を文成はなほ夢心地の中に、いつ逢ふあてもない別れ路に立つた。十娘も嫂もいつまでもいつまでも見送つた。涙の雨が六つの袖を濡らした。

この梗概からも知られるのは。張文成が踏み入る道は、二人の若者が梅津川渡つて行く道であつた。文成が見るところの香菓瓊枝は岸づたひの防風莇であつた。その文成を二人の若者とし、その二人を女の二人から取り、女の若さを老と尼とにかへたのである。更にまた作中の人物の一人ならぬ作者文成に擬して、老女と二人の若者の對面を窺ひ見るもう一人の人物を設けたのである。

「仙遊窟」のわが國に渡來したのは遠い以前であつた。平安の貴紳が愛讀して措かず、餘風延いて西鶴の日に及んでゐるとはいへ、或はここにその書と「老女の隱家」との交渉をいふのは、やや突爾たるものであり、獨斷に過ぎるともいはれよう。しかし二者の交渉はその構想以外、別にまた存在してゐることを注意すべきである。「老女の隱家」だけでなく、更に「一代女」のすべてに亙つても見られることであるが、意外な漢語の用法の頻出に氣づくこ

とであらう。その特殊な漢字訓法はどこから出てゐるか。それを溯ればおのづから「遊仙窟」に到達するであらう。たとへば、うつくしげなる當世男のうつくしに當てた阿怜、かほばせなよやかにうまれ付しのかほばせ及びなよやかに當てた面子及び逶迤、常弄しいとすぢのいとすぢに當てた縄などの當、時の訓法から見れば、當然奇矯に失するものの數々は、すべてこれを「遊仙窟」から發見される。「遊仙窟」の平安朝に大方ならず行はれた時、人々は努めてこれを日本讀みに讀みこなさうとした。その苦心は學生伊時をして木嶋明神の社に參籠させ、明神から正しい日本讀みの訓法を授かつたとの傳説をさへ生じたのである。おそらく西鶴が手にしたのはそれであらうと想像される慶安刊行の書は、この訓法を傳へて、一々丁寧に傍訓を附したものである。西鶴はその傍訓に就いて特殊の興を唤るものを拾ひ出したのであらう。その意の何に本づくかはともかくも、阿怜はその文中の阿怜矯裏面の中のウツクシゲナルと訓じたるものにより、面子また逶迤は玉體逶迤人間少疋、輝輝面子荏苒畏彈穿の中に、ナヨヤカニと訓じたるものにより、またカホツキと訓じたるものを少しく改め用ゐ、縄は珠縄絡翠衫に於いてアミキヌともイトスヂとも二様に訓ぜられたものの一つを選んだのである。すでに斯ういふ關係を有つた「遊仙窟」である。西鶴が例の手法もてその文字ばかりか、一篇の趣向を藉り、更にまたそれをいろいろに捻りつ、もぢりつしたことは考へてもよいやうである。

ここに面白いと思はれるのは、さすがの西鶴が上手の手から水を漏らしたやうに、人にはそれと知らせない大事の趣向立の一端を、つい見せてしまつたことである。「老女の隱家」のさし繪には好色庵の座敷に老女が琴を彈いてをり、一人の若者がそれと尺八を合奏し、また一人が緣にゐて之を聞いてゐる有様が畫いてあつた。しかし本文は

決してこの繪と一致してゐない。成程、老女が常弄し細ならして戀慕の歌をうたへる事しばらくなりとはあるが、どこにも男が尺八を吹き合はせたとは書いてない。この繪と文とが一致しないことが、西鶴の頭に「遊仙窟」が動いてゐた證據の一つを加へる。前の粗い梗概の中でも觸れておいた嫂が箏を彈き、十娘が尺八を吹くことが、ふと斯う案をなさせたのであらう。本文には何かの都合で男の尺八を書かずじまひにしたが、その案はゆくりなくさし繪に見せたのであらう。尤もこれをゆくりなくと見るべきか、故意にと見るべきか。そこに西鶴の態度の考ふべきものがある。しかもそれは容易にそれこれと斷じかねる問題である、西鶴の俳諧手法の根本に關することであるから。更にまた「一代女」のさし繪は誰が畫いたのか。畫工その人が他にあつて西鶴が畫いたのでないとしたならば、下繪は彼が畫いたのか、彼は畫かないが構圖に就いていろいろと指定するところがあつたか、今日ではさし繪の畫工としての西鶴を考へることが、かなり彼の生涯を知る上に於て大事なことになつて來てゐる。「老女の隱家」と「遊仙窟」との關係の考察はおのづから問題をこの點にまで波及させる。問題として興味は深い。けれど今はそのままにさし措く必要がある。

一六

西鶴の好色本として折紙附けられてゐるものを渉つて來た今、「男色大鑑」をあとに廻はせば、殘る一つは「好色五人女」である。

「五人女」はいふまでもなく、卷一に淸十郎とお夏、卷二に樽屋とおせん、卷三に茂右衛門とおさん、卷四に吉三

とお七、巻五に源五兵衛とおまんの情話を扱つてゐる。これ等の人物の選擇はそれ等の情事がその頃の流行唄となつて流布してゐることを條件としてゐる。しかも五人の女はすべて遊廓の遊女でなくして世間の女、いふところの地女であつた。「一代男」にも地女に關するものがあり、「二代男」にも無いことでは無い。けれどそれ等の作は、いづれも遊廓遊女に伴ふものを基調としてゐる。殊に「二代男」の如きははじめから名妓列傳といふ格で書いたことを作者みづからも斷つてゐる。「五人女」が地女のみを書いたのと大きい相異があつた。この相異は何によつて生じたのであらうか。廓を舞臺とし、粹を中心としたこれまでの作から、粹を離れた野暮の世間に轉じさせたのは何であらうか。粹を規準として考へる好色の相と野暮の中に動く好色の相とは、どのやうな變化を見せるのであらうか。この事はまた「一代男」「二代男」と「五人女」との中間に「一代女」をおいて考へることを必要とする。男物に於ては遊女を中心としてゐるが、この女物の女は始めから終りまでを遊廓にのみおくりかねる。そこに遊廓の內外の舞臺が必要であつた。從つて「一代女」の舞臺は遊廓は舞臺として重要な條件になつてゐるが舞臺の場數からいへば、むしろ遊廓以外が多い。五人女はつまりその遊廓以外の舞臺を延長したものとも見てよい。これが「五人女」を西鶴好色本の發展に即して考ふべき一點である。

また「五人女」が從來の作と異なることは、群小話をそのままに、或は形だけを長篇めかしたのとは違つて、一に一話を盛つてをることである。分量はさまで多くないので、長篇とはいはれないまでも、中篇としての純然たる小說形態をとることこれである。しかし今はそれ等を注意するに止めて、他の觀點から考へようとする。これまで「一代男」をはじめとして觀て來た例の俳諧手法である。

その點から「五人女」を讀んでみると、まづ第一に考へられるのは、おのおのの卷がどれも同じやうに五段に分れてゐることである。例せば卷一の「姿姫路淸十郞物語」は、「戀は闇夜を晝の國」「くけ帶よりあらはるる文」「太皷による獅子舞」「狀箱は宿に置て來た男」「命のうちの七百兩のかね」より成つてゐる。次に考へられるのは、五つの話の配列である。第一話はめでたい寶船に筆を起して室明神が出現するやうな事などを交へたもの、第二話は樽屋と久七の戀爭ひからひき續いて、思ひも寄らぬ嫌疑をうけた腹立しさからつい心にもない不義を働いてしまふおせんの心のもさくさ、第三話はやさしい、愼しやかなのが、ふとした身の過から圖太く變つてゆく女心を見せたもの、第四話は少女心の一筋に戀ゆゑに心狂うて大罪を犯すこと、第五話は若衆の若僧が、戀なればこそ、あらぬ若衆姿に身をかへて尋ねて行き、つひに女色に墮落させ、はては還俗させた面白い筋である。これ等の內容を或る條件を以て要約すれば、もとより無理もあり、附會もあるが、それも或る特殊な事情――おそらくこれが「五人女」考察の最も重大な條件であり、その無理、附會もそれによつて却つて重要意義を有つことにならうが――によつて許されるものなら、第一話は神であり、第二話は修羅であり、第三話は殊に女の中の女心として女であり、第四話は狂であり、第五話は調伏である。斯うして見ると、この順序はどうやら能の五番立の順序と一致することが不思議である。第一話は神物、第二話は修羅に燃える男物、第三話は葛物、第四話は狂物、第五話は調伏に則する鬼畜物の能の形をなしてゐるやうに見られる。第一話が五段立になつてゐるのもまた能の組織と一致するものであつた。五話の中の第一話を「春の海しづかに寶船の浪枕」とめでたい言葉でいひ起すのも、第五話をめでたい話で結ぶのもまた能の番組の約束とも見られる。わけて五話の中の四つを悲劇の筋でをはらせ、最後のものを喜劇の形でをは

らせることも、またこの約束として見られる。

これ等は偶然の一致であり、暗合であらうか。それとも西鶴のはじめからの作意であらうか。「一代男」にもその辭句を借りる外にその構想を藉りるものも少くない。中にも「七墓廻りに逢ばむかしの」と能の「六浦」との關係の如き、實に奇抜な趣向替へであつて、いつもながらではあるが西鶴の轉合に驚歎させられる。もし此の關係を重く認めると、「五人女」は當然それ等の延長であり、擴充であつたと考へざるを得ない。暗合と見るにしては、西鶴はこれまでに餘りに多くの關心を能に有ち過ぎたといへる。それならば「五人女」の一つ一つの形が、どの程度まで能に藉つてゐるかを檢討する必要がある。五人女の一人づつをシテとしてどの程度に能になり切つてゐるかを吟味する必要がある。漫に能といふよりも、なほ一段と能のどの曲といふことが問題になり、從つて例の「一代男」の「源氏物語」に於ける、「一代女」の「老女の隱家」の「遊仙窟」に於けると同じやうな俳諧手法が明になる筈である。

例として卷一の「姿姫路清十郎物語」を舉げる。

第一段には遊女皆川と清十郎との深い仲が書かれてゐる。清十郎のためには死をも厭はぬ皆川の實意ぶりは、それまで惚れ込まれる清十郎の人となりを說明することになる。全體からいへば此の段は清十郎の紹介といふ格である。しかも清十郎はこの第一話に於いて、シテのお夏に對してまさしくワキである。すなはち此の段に於ける清十郎の行爲は、能の舞臺ならば序段に於けるワキの言葉に現はれる筈である。この段、題して「戀は闇夜を晝の國」といふ外に、「室津にかくれなき男有」といふ小題のあることも考へねばならない。

第二段でシテのお夏がはじめて出ることになる。清十郎のくけ帯から出た女郎どもの手紙を讀んで、かうも惚れられる男はとあこがれ心を懷く少女のやさしさが主となつてゐる。ここの小題には「姫路に都まさりの女有」とある。能であれば、漸く事件發展の緒に就く破の一段である。

第三段でシテのお夏とワキの清十郎とははじめて獅子舞を外に花見幕の中で戀の出合をする。この戀の早業の事件こそ好色本の筋のただ中、西鶴の最も力を籠めるところ。能の舞臺の最高調、すなはち一曲の中心たる破二段に當る。小題にも特にそのよしを明にして、「はや業は小袖幕の中に有」とある。

第四段、事件の筋からいへば、お夏と清十郎とは駈落して大阪への船に乘る。向うに着いたら、ああしての、斯うしてのいづれは床の算用、それも乘り合ひの飛脚の失策から大當違ひになつて二人は追手に捕へられて、清十郎は無實の罪で殺される。小題には「心當の世帯大きに違ひ有」とある。これは事の轉であり、能の破三段に當るものであるが、此の段には室明神の夢枕の出現もあり、また飛脚のをかしさもある。そのをかしさは間の狂言に當る。

第五段、清十郎の死を歎いたはてにお夏は狂氣となり、里の子の謠ふ流行唄につれて踊つて歩く。小題の「世にはやり歌聞ば哀有」とはこれである。お夏はやがて正氣となつて尼となつた。事件はここに終る。急の段、シテの舞ひをさめである。

組織に就いてかういふ神能を求むれば、どれもこれもやや雲を掴む程度に當て嵌まる。しかし引用せられてゐる辭句の多さをたよりに、ある一曲を限つて求むれば、「高砂」がそれかと考へられる。今、しばらく西鶴が例の俳諧

手法で「高砂」の飜案を試みたとして考へたなら、どういふ事にならう。

第一段の清十郎はもとより名告をするワキの神主である。その清十郎が室津から姫路に移ることになるのも、いはば道行の格である。第二段、お夏と清十郎とが思ひ思はれる仲でありながら、人目の關に隔てられるかなしさは、シテとシテツレの老翁老嫗によつて語られる住吉高砂の松のあはれである。二つ松は相生の松と呼ばれながら播磨と攝津と國を隔てて、心ばかりを通はせてゐる。第三段のお夏と清十郎との戀の早業は、シテとシテツレが高砂住吉の松の精の夫婦であることとである。その獅子舞はクセを藉りたものである。この段殊に西鶴は「高砂」の辭句を露はに見せてゐるものが多い。わけてシテの尉に手にするさらへ、また「落葉かくなるまで命ながらへて」を踏へて、「里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ、松露の春子を取など」といふ趣向がへは、西鶴ならではと思はれる。

第四段のお夏清十郎の便船は、海人の小舟に乘つて住吉に赴くシテとシテツレである。その舟は安々と住吉に着く。ワキの神主もまた間の狂言ではアヒに便船を賴む。これも恙なく住吉に着く。ワキはそこに住吉の出現にあひ、その舞を見る。この船の安らかな進みを逆まにして、二人の身を破滅とさせ、また住吉の神の出現を室の明神の夢枕に轉用したのが、西鶴の戯れであつた。第五段、お夏のはやり唄に合はせての踊りは、いふまでもない神の舞の轉用である。それよりも驚かれるのは、

何事も知らぬが佛、おなつ清十郎がはかなくなりしとはしらず、とやかく物おもふ折ふし、里の童子の袖引連て、清十郎ころさばおなつもころせとうたひける、聞ば心に懸ておなつそだてし姥に尋ければ返事しかねて泪をこぼす、さてはと狂亂になつて、生ておもひをさしようよりもと、子供の中にまじりて音頭とつてうたひけ

る、とある中の流行唄の懸合である。またお夏の音頭取りである。これが「高砂」のロンギのうつしとは、けだし思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

しかし、「姿姫路清十郎物語」は、卷五の「戀の山源五兵衛物語」と共に、かなり容易に原曲との關係を看得されるものである。「中段に見る暦屋物語」は中段だけに西鶴みづからも最多く趣向を凝した結果か、ともすれば「誓願寺」の飜案と氣づかせないでしまふ。例として最も恰好とおもふものの、最も多く對照の煩ひを重ねなければならないことを思つて、しばらく話の順序を便宜として、清十郎物語の例を選ぶことにした。

一七

「男色大鑑」をあとに殘した理由は、それが好色本であると共に武家物にも屬するからである。しかし嚴密にいへばこの書の武家物と見られるのはその半ばに過ぎない。全部八卷、その前半の四卷だけである。後半四卷は純然たる好色物といつてよい。それには歌舞伎の世界に於ける事件が扱はれてゐた。この武家の社會と歌舞伎の社會とを區別した前後の二部は、また地理的にも明かに區分されてゐる。武家は江戸詰、歌舞伎は上方である。

西鶴がこの作をなした理由は何であるか。今日この作を讀むものは、ともすれば作者西鶴を離れて、西鶴が扱つた題材の變態性の檢討に重心をおき、それの社會的意義の闡明を考へようとする。しかしそれは西鶴の目に於いては、さまで要なきものであらう。權道は畢竟權道ではあるが、今日の見解よりもずつと正しい色道として認められ

る男色であつた。西鶴からいへば別に深く考へることなくして、輕く材料とすることの出來る人間生活の一現象に過ぎなかつた。ただ狹く好色本の流れに即して考へる時、あの女色物を書き續けた西鶴がなぜ急に方向を男色物に轉じさせたかといふことが、大きい問題となる。

女若二道、これは「一代男」に於いて扱はうとしたものであるが、遊廓の粹の生活を中心とするだけに、男色の若道に就いて多くをいふ暇がなかつた。「男色大鑑」はそれを補うためである。しかも男色に專らにするとて、しばらく男色黨の立場に於いて之を扱はうとした。好色といへば一つであるが、その中に入つて見れば、女に與みする者と男に黨する者とまさに相對峙してゐる。男に黨する者は、おのづから、女を貶まざるを得ない。故にその序文に於いて、女を惡しざまに罵り、女を中心とした「一代男」をおのが作ながら口ぎたなく罵つたのである。いつもの戯れからである。

この序文が後の八文字屋本などによく見うける男色女色優劣の論爭の折の男色黨の典據となるものであるが、西鶴をしてさういふ語調を弄させたのも、つまりは、男色が有つ性質のあるものと調子を合はせようためである。もし西鶴にして女色黨の立場に於いて男色黨を難ずるものを書くとしても、ああは息まきはしなかつたらう。それもこれも彼一流の戯れである。

男色と女色との違ひ、それが有つ特性の相異から、極めて明らかなのは、女色に淡くして男色に濃かな義理と意氣との色合である。西鶴は男色を扱ふに當つて、まづはじめにその義理と意氣とを主眼とした。それには、武士の階級がふさはしい。

武士といへば江戸、かくして前半を江戸屋敷詰の武士に限つて材料を集めたのであらう。その武士生活を中心とするものが、やがてすらすらと延びたのが彼の武家物であつた。「男色大鑑」が好色物と武家物との分岐點として西鶴著作の流れに於いて特殊の位置を占めた。

この義理と意氣とをそのままに、しかも、もつと華やかさを求めるところに歌舞伎の世界がある。西鶴はその華やかさを骨子として後の四卷を成したのであつた。前半に對する心持は、また江戸に對する上方として、その地方的差別を立てたのであらう。ここに「男色大鑑」は「一代男」の續篇「二代男」の女物とまさしく對立の形をとる。「二代男」が名妓列傳であるならば、これは名若衆列傳であつた。

「一代男」の男色に關するものには、すでに「男色大鑑」に於ける義理と意氣とが見られる。それと共に職業としてあさましい歌舞伎の男色稼業があつた。「二代男」には名妓のすぐれた節を傳へると共に、また太夫の口過ぎのかなしい半面を暴露した。しかし「男色大鑑」の若衆の場合にはこれ等をば避けて觸れない。それに作者の用意が認められる。

「男色大鑑」が純なる好色本でないやうに、「西鶴置土産」は好色物と町人物との中間にある。しかもこれは最も多く「二代男」と聯關して考ふべきである。「二代男」の遊びの態度と、これの遊びの態度の相異は、畢竟金と遊びの關係の見方の相異である。この相異は「二代男」で一度扱つた材料をもう一度立場をかへて書き直したものに就いて見れば、極めて容易に明かにすることが出來る。問題は西鶴の齢と共に推移する心境に觸れ、またそれを書きか

へることをあへてする晩年の生活にも及んで來る。極めて興味ある問題であり、西鶴その人を知るためには重要な問題ではあるが、或は好色本といふ範圍内で扱ふべきものでないかとも思はれる。(了)

(昭和二年「日本文學講座」)

「好色一代男」の成立

多分、天和二年の末か、三年のはじめの事でしたらうか、あの「好色一代男」が新粧を凝して、大阪思案橋筋の書林荒砥屋から賣り出されたのは。

奥附にある天和二壬戌陽月中旬やら、本文の中の天和二年神無月の末云々が、ほぼ其の見當をつけさせてくれる。それから引きつづいての秋田屋版、大野木版、さては貞享元年の江戸萬屋版、同四年の大津屋版と重版の蹤を考へると、大方ならぬ賣行の程が察せられる。

作者の名も序文もないが、西吟の跋に鶴翁とあるからは、まさしく西鶴、あの難波談林の阿蘭陀西鶴の筆と知つて其の人に惹かれたためか、其の前々年、「後の大矢數」と共に出版せられた「難波色紙百人一句」の挿繪によつて、西鶴の畵風を見知つて居る衆が、この本の挿繪も西鶴のすさびと興がつたためか。題名冠する所の「好色」は、何時も何處も人を魅了するものではあるが、人は其の二文字に唆かされ、表紙はぐつては、そこに展開せられた好色世界に眩惑せられたためか、獨笑繪を文字でゆく、思ひきつた節々を探し讀むためか。それもあらう、しかし當時の人々は、より多く、主人公世之介が自分と同じ町人生れの町人育ちであること、その棲家たる好色世界は、自

分達にも極の親しみがあることから、此の本を手にしたのでせう。「あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」などと書かれては、世之介もそんじよ其處らに、兎もすると自分の遊び振りが粹法師の筆に載つた樣な擽つたい氣持もしたのでせう。尤も、當の西鶴一味の人々は光源氏の君、さては昔男を、ようも町人世之介にしてのけたと、今更に腕の冴えをもて囃したであらうが。

事實、當時の町人は、此の「好色一代男」を得て、はじめて自分達の生活を如實に反映した文學を所有したといふことになる。印刷術が發達すると、書籍出版といふ稼業が一つ町人の間に殖えたものの、其の書籍は從來の何某の卿が筆寫の勞に代へる物か、さなくば「御伽草子」式の雲上の戀物語か、「徒然草」式の隨筆の教訓話か、和歌を少しひねくつた狂歌振りの滑稽話かにとどめをさして、町人本位の娯樂に加へる所はなかつたのに、これは天下の町人ならでは叶はぬ話の筋であつた。しかし、これを以て直ちに西鶴その人の、町人仲間に於ける功績と見る事は出來ない。それは町人その者が、武士を本位として組織せられた社會制度の下に、幾多の犧牲を拂ひ、幾多の年月を過して、士農工商はただ表がかりの看板、實は町人の天下と成し得た紀念物であるから。遊里のさんざめきは、町人共が經濟的社會組織完成の祝宴であるから。さう思へば、世之介の諸國歷遊もその組織編成のための巡回視察とも見る事が出來ませう。

西鶴は、さしむき、其の巡視慰勞を兼ねる祝宴席上の幇間役にあたる。

「浮世物語」は「一代男」以前の通俗文學書、所謂假名草子中の傑作、萬治寛文頃の出版で相應に持て囃され、天

和元年にも重版を出して居るが、もと「伊曾保物語」の脚色を學んだ教訓物。其の伊曾保に當るのが浮世房です。此の一篇が浮世房をして、兎も角も隨筆の斷片に連絡を取らせたのが、從來の教訓物から見れば小說としての一進歩であり、浮世房の浮世が、浮きに浮いて慰み、手前をすり切るも苦にならず、沈み入らぬ心だての水に流るる瓢簞の如くなるといふ意義であるとすると、當時の教訓物の埒から離れて、浮世之介の浮世生活に近づく。これが此の物語と「一代男」との間に一脈相通ふ所ありといはれる所以です。殊に世之介はありとも知れぬ女護島へ行方知れずになる。浮世房は仙術を習得して蛻となつて去つて了ふといふ結末。もし「一代男」の最後が、「源氏物語」の雲隱れを思はせるなら、これも同じ脚色の脈引くものと見てもよい筈。けれども「一代男」と「浮世物語」とは形の行方が似て居るといふだけで內容は似ても似つかぬものでした。

浮世房の父は武士であつたが、國中無雙の臆病者とて、戰場で腰をぬかして逃げ歸り、かねての貯へを携へて、町人の有德人となりすましました。これを歷史上の人物で考へると、あの慶長五年關ヶ原の合戰のさ中、俄に旗を捲き陣を撤した尾張犬山の城主に當りませうか。彼は東西のいづれが勝たうが負けようが上の空で、兵器を賣り兵糧を金にかへて、京に上つて町人となり、鉅萬の富を擁して落着拂つてゐた。要するに、彼は臆病者ではない、時運の赴く所を見て對し取つた聰明者であつた。其の後代の石川自安は、遺產を相續して、京の分限者として祖父の舊友にて戰を挑んだ。大名の財政逼迫に乘じて高利を以て黃金を融通し、米を以て償却させて時相場で二重儲をせうといふ寸法でした。此の計畫が圖に當つて、石川家の運は愈々開かれる。これを見て、京阪の富豪もこの大名貸の戰に參加した。

さうなると、高利に惱む大名はいやがうへの逼迫、どうにも斯うにもならなくなつた時、「お斷り」の陣構へを以て、其の頽勢を盛り返し始めました。内政改革、從來の役人が退席した。從つてこれまでの協定は無效に歸するといふ口上のもとに、債務を果さうとしない。これには町人の身の情なさ、泣き寢入りとしなければなりません。まさしもの石川家も、この敗軍から分散の憂目に逢つて了ひました。那波屋も袋屋も、高屋も沒落して了つた。まさにこれ、「町人考」いふ所の「武士は計略を廻らし、勝つ事を專らにす、是軍務の戰也。町人はよき程見合せ金儲して殘銀を見切て德分を得んと思へども武士は四民の頭、智謀兼備の役人、中々其の手は見通し、却つてうらをくはせ、先を取つて彼方よりよき程取込、斷を申出す。町人の竹鎗を以て武士の眞劍に向ふが如く相手に及ばず」の體たらくです。これでは甘い奴とて借り倒され、憎い奴とて斬り倒さるるまでで、町人の浮む瀨はない。さうなると、一軒々々の自力で行くから惡い、町人ながら氣心合はせたならばと、町人もおのづからなる合戰工夫です。貞享元祿には確固たる問屋、問屋仲間の組織が出來上る。「一代男」出版の頃の天和にも、すでに其の氣運が動いて、多少の安心があつた。町人また一階級といふ自覺が、心の底に湧いて來た。さうして得た富から、町人は町人生れの町人育ちを、誇り氣に思ふ樣になつたのでした。

寬文の「浮世物語」時代はまださうもなかつた。浮世房、はじめの名、瓢太郎の父親は、自身こそ町人となつたものの、我が子だけは武士に仕立てようと武藝を習はせる。ただ瓢太郎はそれが不得手で物にならず、博奕と傾城に狂ふのみで、父の志に背いたが、後に生活のたつきの爲めに徒步若黨となりました。然し、武藝を以てしたのでなくて、算用方の上手を以て採用せられた。抱へる大名はいふ、今の世に武勇も首勘狀も氏も系圖もいらない、十

露盤を得たるか、田畠のつもりを知りたるか、米の賣り樣、金銀のまはりを心得たるかと。其の條件に叶つた譯です。また瓢太郎が重用せられるのは、知行の米に課役をかけて半分を取り返す分別、領分の百姓の物毎を役にかけてとりあげ、萬事の運上をとる分別を大名に吹き込むためでした。武士と町人との經濟戰對立時代の影と見る事が出來ます。處が「一代男」に於いては世之介の父は生野銀山のほとりの町人と見えてをるだけ、いづれは當時に多い鑛山成金をほのめかしたでせう。世之介の敎養も始めからの町人一點張り、九歲の時には、世を渡る男藝習はではと雨替町の春日屋に銀見習ふために遣はされ、十七歲には商賣の道知らではと奈良晒調へて越前に行商にやられる。これが町人本位の世相でなくて何でせう。

さらでも苦しいのは武士の懷です。百石取の侍にしても實收はまづ六十何石といふぐらゐの薄給、隨分食はねど高楊枝といふ言葉の儘の生活。さういふ武士の世界の瓢太郎の惡賢い手段です。果然、彼は家中の憎まれ者となつて、居たたまらず逃亡する。さうして心に染まぬ道心者となつた、さてこその浮世房でした。京大阪の神詣、佛參り、それも信心柄ではない、ただし狂歌を詠み散らしたり、例の剽輕な氣質から色々の滑稽を演出する爲めの旅とも見られないでない。此の種の人物を假名草子の世に索めれば「竹齋草紙」の竹齋、また「東海道名所記」の樂阿彌を得る事になる。彼等は京めぐり、海道下り、江戶巡りにも、したい三昧の滑稽を演じ、いひたい放題の狂歌を詠み散します。浮世房も傾城町に入り込んで打擲せられた事もあつたが、彼等は隨分道中の赤前垂にも、格子の化姿にも見惚れる。尤もただ見惚れるだけです、その僧形は心の自由、身の自由と共に、また肉からも自由を許されて、この美しきを美しとのみ見る事が出來る傍觀的態度を取るのでした。

人生に對する傍觀的態度、これを遡つて僧ならぬ僧形の連歌師宗祇の徒に於て見る事が出來ます。京の騷亂を避けて少苟を偷む田舍めぐり、孤燈の影ひとり背いて悶雨と相語る境涯にある者は、おのが身をも人の身をも、はては世の一切を離れて見、顧みて笑ふ心を誘ふ。地體連歌そのものが享樂の氣持から産み出されたものであり、滑稽に茶化してかかるを專念の工夫にしたものであるから、一種の樂天的傍觀者が出來上る、それがやがて旅心地です。その心地で、しげしげと田舍の物を見てあるく。都と異るくさぐさのをかしさ、所變る品變る面白さ、これを筆にせずにゐられない。連歌師の狂歌日記は、また旅日記と伴ふことになる。もしこの筆を女の風俗と、女とのいきさつの方に轉じたら、取りも直さず「一代男」が出來る。

世之介の旅心地は、時には十歲の昔中澤の拜殿であつた念友を、十九年あとに最上の寒河江に尋ねさせる事もあれど、大方は身請した伏見の女郎をも、九十九までもの宿の妻吉野をも放り出したなり、ただ一言、六十歲の船出の言葉に「定まる妻女もなし」で埒あけ、後家に生ませた子も六角堂前に棄てさせたきりに、「子はなし」で澄し込む。これは勿論作者に趣向あつての事であるが、かの旅日記の主だち同樣の態度といはねばならない。

ただ一つ大なる違ひがある。世之介は美しきを美しとのみ見ず、千早帶結び下げ薄化粧した縣御子をも、その儘には置かず、其の神姿取おろし、新に女體を現はせるまで、或時、或場合には傍觀的態度を撤します。そこからはじめて「一代男」が生れて來る。まこと、町人の生活は、世間の渦のだだ中を拔手切つて泳ぐにある、眺めてのみゐて、何の埒があきませう。ただそこからさつと切り上げる旅心地、世之介が虛々實々を見よといはねばなりませ

ん。されば其の好色精進の修行の旅は、同じ享樂の態度を持するにせよ、あの連歌師、あの竹齋一味とは消極と積極との差がある。そこに元祿期町人の精神がある。あればこそ六十歳、腎虚して土となるともと女護島渡りをする。世之介は飽くまで町人である。されば西鶴も此の好色修行の旅に町人の金儲を影の樣につき纏はせるのでした。前の越前越中行も商用であれば、十八歳の江戸行も、江戸大傳馬町三丁目絹綿の店ありける萬勘定聞くべしとなつてゐる。よしや商用でなくても、世之介が歴遊した遊里の所在地はいづれか商人によつて成立してゐないのがあつたか。

町人の活動は經濟的社會組織を完成しました。この組織は封建制度の破壞にもなる。大名の居城はつひに其意義を變換した。襲來すべき敵なき世に於て、城はただ政治主權者の所在を示すだけである。殊に商人からは、ただ地方の首府としての城下町の裝飾としか見られない。一藩の物資集散地の目じるしとしか思はれない。彼等には租税として其處に集る米の良否と多少とが問題であり、工業品製作の地として其の生産額が問題である。防備としての價値の如き、もとより與り知らざる所、まして、わざと交通不便の地を選んで巍然たるが如きは、山田の法師と苦笑させるだけでせう。本來戰なくば城主のもとを去つて、其の知行地に歸着して農耕に從事する筈なのを、さもないから城下町も商業都市になつて、町人の蹂躪に委すべき運命に陷る。殊に當時の社會が其の財政の基礎をば米を以てしては、いよいよ其の趨勢を助長する。知行米を受けた武士は、一年の自家用以外を商人の手に渡す。大地主の大名も自藩自給以外は、これを商人の手を經て他藩に貿易する。大阪の藏屋敷に轉送しても結局の始末は商人の

手を待たねばならない、まして年に吉凶ある以上、時相場に變動ある以上米を繞つて、町人活動の範圍は擴大します。

江戸は西の大阪經濟文化の指圖をうけながら東の覇となる。この二つを中心として地方それぞれの城下町、さては驛に港に町人の經濟網が張り渡される、交通網が縱横に擴まる。その二つの中心を、早立六日の三度飛脚が結びつける。江戸の金遣ひ、大阪の銀遣ひ、この復本位を以て價格に變動が出來る。この金相場は米相場と共に銘々の早飛脚を、月の二の日を待たずにさし立てる。かうなると南山不拔の金城も、町人の眼からは蜘蛛巢にからまつた揚羽蝶位にしか思はなかつた。ただ鯱の甍を美しいと見るだけです。加賀米は淀屋の手を經て大阪に廻されたが、其處の藏屋敷の設置と共に運輸は盛になり行くのでした。

江戸は江戸で繁華の加はると共に東北の米を望んで、今迄の不便と危險を除去しようと、河村瑞賢の工夫のもとに信夫郡のは阿武隈川を下りて荒濱、湊、銚子、小湊から三浦三崎、さて江戸灣と運び來り、最上郡のは最上川を下つて、酒田、小木、福浦、湯津、下の關から瀬戸内海、さて大阪を經て江戸、廻しといふ順になる。その大阪との間を菱垣廻船が通ふといふ有様。町人世之介の傳記書たる「一代男」に出羽國、庄内といふ所へ下りて、米など調て、大坂への舟便りもまはり遠く（諸分の日帳）とあるも此のためです。このやうに大阪をこそ天下の臺所とし、當代經濟の中樞とし、江戸を之に亞ぐとはいへ、地方の商業都市の繁昌も一通りでない。奥羽の果の酒田も此の様な繁昌、諸國のつき合、皆十露盤にて年を送る人也、おかたの輕薄、兎角金銀の光ぞ有難きといはれてあり　其處には所言葉でしやくといふて上方の蓮葉女同様ながら客一人に一人宛、或は十日二十日三十日も逗留の中に寢道具の

あげ下しする女が、旅人を見懸けて集る由（木綿布子もかりの世）をいはれてあるのも、皆時運からでした。

商業の取り引も、儲の分わけも結句は色と酒とに埒あいて、飲めや歌へと遊所まで、殊には旅のわびしさも手傳ふからに、兵庫、鞆小倉、下關、寺泊、酒田、最上、大津、堺等の遊所が「一代男」の中に見えて自ら遊里案内の書を形作る。堺と共に特殊の事情の下に發達した自由商業都市たる室が、西國一等の湊、遊女も昔に勝りて風儀さのみ大阪にかはらずと紹介せらるるも、そこに世之介がすぐに身請してやる程の、都恥しい格の女郎に勤めさせるのも趣向さもあるべきです。（欲の世の中に是は又）殊には長崎、我國唯一の開港場、珍奇の貨物の取引の長崎、それを女護島渡りの前につけた西鶴の趣向のほど、勿論それは神仙鄕以來の肉慾鄕に對して、晝夜共に其の藥を飲みては飽かず枕を重ね侍る。日本人のならぬ事は是といふ事をいひ度かつたのであらうが、本來ならば其處から直に支那へ和蘭へ行くべきを、道かへて、女護島とは、世之介よくぞ巧みに鎖國令の網を潜つたといはねばならない。其處は非現實鄕であつて、現實の今の外にあるからです。

「一代男」の脚色の一端もここから出づる如く、何というても交通の發達は町人の手によつて完成せられました。封建制度實施の際とて、やはり關所はある。わざと川に橋架けぬ所もあるとはいふけれど、「新町の夕暮、島原の曙」の駕籠の設備も充分に、「さす盃も百二十里」といふ筋も運んで來る樣にまでなる。禿三人が一所に晝も寢ながら搔餅燒いて伊勢詣でする乘物の工夫も出て來るわけ（ねがひの搔餅）です。斯ういふ時代には田舍に居ながら京の歌舞伎を見る幸福もある。京大阪の役者が收入と藝道練磨の爲めの旅巡業がある。世之介が中津在に藤村一角の旅芝居に出會うて、都にて目を懸けて、羽織などくれし嚴方の庄七といふ役者にたよつたのも（是非もらひきる物出

の譯合からでした。からはいふが西鶴は地方の都市を以て、直に京大阪江戸に對立し得るまでに繁昌してをる、文化が進んでをるとは書きません。飽くまで富の最盛なる都市を以て最も優れたる文化を有する都市と見る。その都市の中にも最も爛熟せる文化を有するを、その都市所在の遊里と見ます。

かくの如きは、階級制度の下に、鎖國令の前に拘束せられた金肥りの町人としてやむなき事です。その遊里の鑿へると否と、遊女の品よきと悪しきとがやがて各都市の位附けを定めます。たとへば歌舞伎にしても旅芝居は畢竟旅芝居、世之介も、着おろしの長袴、足元も定めかね、品之丞が出端の唄に、人並に頭を振つて間に合はせる、(是非もらひきる物)始末です。田舎の文化はつひに都の文化に及ばう筈がない。いかに交通が發達したにせよ、都の流行は直に田舎のすべてに傳はらない。船つき場や遊里や、これが流行唄のさい先をなす所であるに拘はらず、寺泊の傾城町では三國一ぢや、拍子が合はぬのといふ騒、亭主に様子聞けば、此の頃上方から、ささんざと申す小唄が時花來り、爰元の若衆色々稽古致せども、聲が揃はぬと申す、さても世は廣い事を今思合せ、柴垣踊知つてかと尋ねると夢にも知らずと申す、何といふても是ぢやものと、世之介はいつてゐました。(集禮は五匁の外)追分の牢の中で、世之介が唄所望されて花の都のぬめり節、長い刀に長脇差をぼつこんで、おせさ、よいさと唄へど權輿もない顔、是はと様子替へて松原越えてと踊れば一度に手を拍つて喜んだといふ。(因果の關守)西鶴はさう書き載せて、都人の大笑ひの種としてゐます。

わけて都鄙遊女の位違ひの甚しさは、寺泊の遊女によく持成されれば持成されるで、江戸で高雄に振られた昔を

思ひ出してうそ腹が立つ（集禮は五匁の外）といふ程です。「一代男」が齎らす滑稽味の半ばはさういふ都市と田舍の遊廓遊女の比較評價から來る。この比較評價は、江戶には女郎の濶達氣質をはりと認め、大阪には新町の揚屋の整頓を認めたけれど、遂にこれ等を永い文化の系統を有する島原の前に屈服させて了ひます。町人所の大阪生れの町人西鶴が大阪の荒砥屋を版元としながら、殊に町人階級のために氣を吐きながら、世之介をして京育ちの京住ひにさせたのもこの道理。名妓といふ名妓を數へて、矢張り島原太夫を多く書き載せるのもこの事實を枉げよう術はなかつたからでせう。原中の夕立、誰にも濡れのかかるといふ品の低さを以てしては新町を最上位に推す事は、大阪出身の西鶴にして出來よう筈はありません。其の土地で、新らしい趣向故に、一時は人を驚したといふ若衆女郎なども、これもまだ粗野のきらひのある新興の土地柄を語るに過ぎません。扨も繁華隨一の島原で、指折りの太夫の客として譯知りと呼ばれ粹と稱せられるのは、なまなかの修行で出來るものでない。といふて修行の外に缺いてならぬ物がある。「一代男」は譯知りの世之介の身を假りて之を具體的に語つてゐる。

世之介は浮世の事を外にして色道二つに寢ても覺めても夢介と替名呼ばれた里知りを父とし、島原の太夫の名だたるを母として、かの道にかけては申し分なき影響を受けました。之を書きはじめとして、西鶴は其の生涯に四期を劃してゐる。七歲から十歲まで、腰元に燈消させて戀は闇といふ事知らぬかといふ事から、こざかしき十歲の翁の念者口說まですべて彼が早熟を語るのです。十一歲から十九歲まで伏見撞木町をはじめとして京近くの遊所通、または後家、主ある女との關係、皆好色修行の發端を示す。かくて東海道筋や江戶に來ての遊蕩から勘當に至る事

で此の期を結ぶ。二十歳から三十四歳まで、勘當からの流浪の旅は一面誰憚らぬ自由の身として、遊所といふ遊所は、北國奥羽の果まで、女といふ女は縣神子から奥女中に至るまで、各階級各種類に行きわたる好色修行精勵の時期。その功漸く積んで勘當赦免遺産相續に終る。三十五歳から六十歳まで、大々盡として好色世界の歡樂を嘗め盡す當代理想の生活。あの源氏の君が二條院に美媛を集めた樣に、これは名妓を身の廻りによび寄せる。そしてその果は女護島行となる。

ところで、ここに一つの疑問が起る。西鶴は世之介をして早くから遊所通ひをさせ、遊女の身請けをさせながら何故三十三歳まで、遊所隨一の島原に行かせなかつたか。しかもはじめて行つた其の時は夢山といふ大盡の御供であつた。隱れもなき善吉に伴はれて、此の善吉仕懸見ならへと申し聞かされ、畢句の果は當の善吉こそ石州といふ太夫に愍にせられたれ、世之介は太鼓女郎にさへ振られて、人に買うて貰うて遊ぶべき所にあらずとまで口惜がつたのでなかつたか。(目に三月)さては西鶴は鞆の津のちよつとの間に起請書かせ指の血絞らせて名書の下を染めさせた名譽の女郎たらしも(袖は海の肴賣)此の里では甲斐なく、遺傳も修行もそのままでは益にたたぬといふ事を書きたかつたのでせうか。

ところで、一度母から心のままに賚へと、二萬五千貫渡される(火神の雲かくれ)と、世界は激變する。島原の太夫の中の太夫吉野から、譯知りの世之介樣なれば何隱すべきとすべてをうちあけられる身となる。思へば島原はつひに寺泊でなかつた。女に三百、嗅に百、(後には様つけて呼)はたらく女どもに二百合せて六百文撒き散らさせた。さても大氣な大盡と、女郎が舟ばたまで送る田舍ではなかつた。(集禮は五匁の外)高洲の色町で「口きく程の若き人

新町に手あひを拵え、ためて置いて一度に、島原で、遣ひ捨る事尤也」（一日かして何程の物ぞ）とは、よく黄金の都の島原と、洗練せられた文化の都の島原とを説明してをると思ふ。

して見ると譯知りの最大の資格は黄金にありといふことになる。申し分なき遺傳を受け、修行を積んだ世之介にしてなほ然りといふことになる。これを教訓なりとするなら、餘りに平凡なる教訓である。しかし當時の遊里關係の書、譬へば「たきつけ」「もえぐゐ」「けしずみ」の類から見れば極めて放膽なる教訓を受取らねばならない。何故なれば、これ等にいふ所の粹は決して金に物いはすな、女郎の心情を理解せよ、其の悲運に同情せよ、その僞りの間に誠を掬せよといふ品のよさばかりであるから。さればこそ、あの高橋のきつとして氣立も匂はうといふことになる。（其姿は初むかし）また、これは金の事をいひながら「なには鉦」一味の物に比ぶれば、品のよい教訓である。何故ならば、これ等は餘りに穿ち過ぎて一文二文を惜しがる遊女のさもしさを探し出すに忙しい節が多いから。さればこそ、金の世界の島原で金撒いて誰拾はぬといふあの豪遊振り（末社らくあそび）も面白いことになる。勿論「一代男」にも「人のしらぬわたくし銀」に見るやうな遊女のさもしさもある。然しこれは、或る趣向の下に書かれてある事、おのづから別な話です。兎に角さういふ點から見れば、隨筆物の眞面目な教訓は「浮世物語」の道化交りの教訓となり、さては斯ういふあらぬ教訓にまでなりました。これが何も「一代男」を貫く根本義といふのではないが、かういふやうな態度は隨所に見る事が出來る。後の教訓物に轉ずる下地は、すでに見えてゐるといふてもよい。

これといふのも「一代男」の作者西鶴はもはや遊里に於て、色戀に於てそれ自身陶醉の狀態でなかつたからでせう。嚴密の意味でないが、教訓がましい、指圖がましい作意を寫したといふも、つまり、そこから出て居るわけ。これは作者の四十一歳といふ年齡が然させたのか、いな、「一代男」は彼が感興湧くがままに筆執つたのでなく、或る趣向をまづ頭において取りかかつた書籍であるといふことを考ねばならない。今日に於いてこそ無脚色といはれ、斷片的小話の連續といはれるとしても、彼にありては、此の器にいかに多く盛つたかを見て貰ひたかつたらう。よくも斯う纒めた者と褒めて貰ひたかつたらう。今の藝術的統一性を以て評せられる時、彼は惘然として自失するのでせう。其の作意の一つは、世之介の生涯が大方四期に分つ事が出來、また女護島の前に長崎を置いた事でも考へられる。譯知りの教訓も、彼の計畫にしては、ただほんの一部分に過ぎなかつたのでせう。

思ふに彼の計畫は、京を第一として諸國の遊里の案内をなす事、なほ畠山箕山の「色道大鑑」ほどに詳細な叙述をして見たく、その「寛文格」ほどに廓の風俗を紹介し、「寛文式」ほどに廓の作法を教へて見たかつたらう。さては廓以外の賣女の各階級を盡し、すべての女の種々相、戀の類別も擧げ、太夫といふ太夫の事蹟を叙し、手管の數々、譯のどん底もいひたかつたらう。指切髮切りの誠の裏をかへして人を呆れさせ、京の小宿の手段を發いて驚かせたかつたらう。大原の雜魚寢の奇習もいはでやむは惜しく、湯女の起原も遊女の歷史も說明せずに居られなかつたらう。彼は餘りに多くの材料の整理に困じた事でしたらう。しかも彼は「増り草」の作者に惡し樣に罵られた「桃源集」の作者同樣である事はいやでした。というて「增り草」のやうな單なる名寄せで終りたうもない。世之介を拉し來つたのは、畢竟これ等のもつれ糸を捌くに都合がよかつた爲めでせう。八犬士の離合會散の筋立に關八

州の地圖おし展げ、將棋の駒をあちこちさせたといふ馬琴の先蹤を、いつかしてゐたのでせう。

しかも世之介の思ひ附きは光源氏であり、昔男であつたとすれば、あの筋をここに移してなどいふ苦心もまた加はつたでせう。當時漸く出版せられた「源氏物語」の梗概やうの物のあるにつけても、負けじ魂の彼は思ひ惱んだ事でせう。かういふ計畫のために世之介を勘當させ、浮浪させたのは賢き手段であり、大々盡となつた後の世之介をして、粹人の遊びぶり拜見の位置に据ゑたのもやむを得ざる所でせう。金を持ち餘る世之介に「口添へて酒輕籠」の危な業をさせたのも、「身は火にくばるとも」の隱事させたのも、さきのいひたい數々の埒あかせる身としては當然の趣向であり、大々盡の世之介に鬼の遺した小判もがなと、さもしい事いはせるも、大阪屋の奴三笠の意氣地を見せる爲めの、無理を許さねばならない。(喰さして袖の橘)米調への庄内行も、ここからは和州が「諸分の日帳」を見せて、あの假名草子の「錦木」の古風を蹴下す業と見なければならない。譯知りの世之介をしてよからぬ仕しと望みの太夫も會はぬ様にしたのは、吉田の利發をいひたさ故と見ねばならず、(匂ひはかづけ物)さしもの世之介も傳七には相引にするとしたのも、野秋の器量を語りたい爲めでしたらう。(ぜんせい歌書羽織)

この計畫のためには、死んだ名妓をも生かして來る。世之介は三十五歳にして吉野を身請けした(後には様付て呼)とある。しかし、史實の吉野は、寛永八年八月十日には林屋から去つて島原には影もない筈、もし世之介の齡を天和二年六十歳から割り出せば、その年はまだ九歳にしかならない。とても身請話などのあらう筈がない。けれど島原の名妓として支那まで聞えた其の人を、此の里知りの書が逸してなるものか、といふので時代の矛盾を問題とせずに、ここに篏め込んだ。これに「一代男」は紹益の傳記ではない。これは一人の紹益ならで、當時の紹益同様の

多數の粹客をとりあはせた者であつた。

吉野は鍜冶屋の弟子に身を許した爲めに、兎角面倒な取り沙汰となつたのを、かねての客佐三郎兵衛、すなはち紹益といへるが、情深き志殊勝ぞと私に身の代を與へて一まづ親里にかへしてやり、後同捿したのであるが、人々の言葉添へによつて父の許を得て正しき妻に直したのだといひ傳へられてゐる。西鶴はこの紹益を直に世之介とし、太夫の口から鍜冶屋の首尾聞いて、それこそ女郎の本意なれ、我見捨てじと共の夜俄に揉立て、吉野を請出し、奥様とするとして、譯知りの典型とここに見せ、さらに事實あつた通りに、吉野のもてなしに一門三十六人の女子衆に惚れ込まれた筋を見せて居る。あの、新町の高橋を「なには鉦」から拉れて來て、島原の太夫とし、田舍侍を尾張の町人とするなどは、共れから見れば何でもない話です。

かう思はく通りに、斟酌してまで、あれもこれもと取り入れた西鶴には、また一つの工夫がありました。如何にそれ等を配列するかが問題であつた。流浪の時も大盡になつてからも、世之介の旅があちこちと殆ど理不盡であるのも、その配列、續き具合の面白さの爲めである。その土地の變はると共に會ふ女も變はり、その戀の相も變はる。その忙しさもこれであつた。その手際を縮圖にしたのが「末社樂あそび」であつた。棕梠箒に四手切つて出せば、丸屋の二階から大黑惠比須、柏屋の二階から懸小鯛見せる騷ぎ、つづいて出し合ふが砲烙に釣髭、三社の託宣、金鎚、懸燈蓋に火ともす、頭巾着せた佛、釣瓶取、俎板、牛旁一把、猫に大小させたる、干鮭に揚枝銜へさせたる、注連繩張つた炭消、醬油の通帳、烏帽子冠つて頭さし出す、十二文の包錢投げ出す、摺粉木に綿帽子、上々吉墮胎藥、葬禮の道具である。その續き具合を見て行くと、自ら俳諧の變化に合する。「一代男」のおのおのの小話の配列

は、要するに此の西鶴かねて熟練の俳諧の手法を以て取り扱つたといふてもよい。

これはなほ大笑ひの種としてといふ標準を以て全體に臨む。開卷第一の女は三千七百四十二人、少人は七百二十五人がそれ〳〵の好例、而してこれ俳諧、殊に奇抜人の度膽を拔く談林の精神であつた。

當年四十一歳の西鶴は宗因に師事して大約二十五六年を過してゐる。彼れ二度の大矢數に群雀の噪々たるを壓して、談林の旗頭、敵方貞門の士の怖ぢ者でした。西鶴がこの談林調の宗匠であるといふ事が「好色一代男」をなさしめたので、もし貞門の士であつたら、恐らく「源氏十帖」「稚源氏」の類を書くか、「伊勢物語」の註釋を書くのがせめてもの事でしたらう。さなくとも「恨之介」「薄雪物語」以上に出でようとは思はれない。何故といふに貞德の生活は中古隱遁者の模倣、その趣味は堂上風の舊套、その主張は、俳諧よりも連歌、それよりも歌道にあつたから。されば其の徒池田是誰の如きもいうて居る。今より俳道に入らんには、「八代集」「新撰集」「伊勢物語」「狹衣」を常に學び、殊に「源氏」は朝夕の枕言葉なるべしと。これ等に對して宗因はいふ、俳諧は酒前茶後の慰であると、好き事して遊ぶがよし、多分の戲れであると。古典よりも浮世、わびしい自然より華やかな色戀といふやうに題材の種類が町人向きになつたから、宗因の居住地大阪を中心として、流行の波は直に擴まつて行く。まして師よりも放埒を以てまさるといはれる西鶴になると、巾着切も眞綿も、揚屋風呂もどん〳〵百韻中に投げ込んで了ふ。弟子共も下地は好きのところへ御意はよい、百韻の中に四十五句、五十句は遊女の噂、歌舞伎芝居の風情、殘る四十句は博奕業喰物と、當の西鶴を驚かす程になりました。

これといふのも俳諧は表、實は酒と料理、會席崩れの下心といふ段取りがあるからでした。事實當時の俳席は困つた事になりました。料理が出ると一巡よむまでもなく盃の應酬、懷紙はどこへやら、點者に隱し藝の所望といふ亂がましさ、夜更けて通るは俳諧師とはよくもいひ得たもの。翌日は宗匠の禮巡りといへば、俳諧師匠はそのまゝ放蕩師匠であり、幇間である。西鶴も丸持の若旦那の伴して幾度となく揚屋入りをしましたらう。

もとは百韻の內點ある者十、二十なのが、今は無點のもの僅に一二といふのも、客筋の機嫌損ふまじとの呪、一度でも多く、一座させて貰ふ賂であつたらう。西鶴の若い頃は、かような雰圍氣にただ冇頂天の事であつたでせう。しかしその空氣にも馴れきつた後には、ただよその騷ぎと萬更でもなく眺めたか。當時に於ては寂しい土地の鎗屋町までぶらぶらと歸る時、冷かな批評を昨夜の一座の衆に加へたでせう。それが吐嗟の發句となり、それが俳諧の中に出て來る。あの一日四千句、殊に捲線香二寸六分の中に最後の一卷百句をやつてのける放れ業の時など、それ等の中に唯すらすらと出るのは日比の見聞、日比の思はくより外はない。かういふならば大矢數の句はすでに彼のスケッチブックを投出したもの、彼の覺え書きを順序なく拔讀みにしたものと見てよい。

そのスケッチ、そのノートをある構圖の下に、或る脚色の下に取り扱ふとしたら、いや應なしに「好色一代男」が成り立つ。

たしかにこれは吉野と覺ゆる
ひんむすびよりとばつかりが憎い迄

これは「樣つけて呼」に、何か一ケ條書き添へて然るべき樣に思はれるし、

何と亭主變つた戀は御座らぬか
昨日もたはけが死んだと申す

これは藤屋の彦右衛門方であつたらうがと聞いても見たくなるし、

勤の身にて萬事はあはれ
塞翁が馬をつないで大盡様

これは室の香聞き知つた遊女の身の上かと尋ねたい。

傾城屋岩戸の前にてこれを嘆く
今度退治の鬼も十八

これは「戀の捨銀」の中に書き足らなかつたものか。また數ならずとも。

「花ぞかし君うちとけて山の芋」といへる人の句に

春行く水のまさる腎せい

と附けたなど、女護島行の床の責道具の一つを思ひ出させます。

是等はたまたま出版せられて殘るもの、只いひ放ち書き散らした物も多かつたでせう。「一代男」は所詮、これを綜合し、これに作意を加へ、思惟を入れたものに過ぎません。して見れば西鶴自身に於ては「一代男」は天和二年に突爾として書かれたものではない。少くとも二十歳からの永い過程を以て書かれたものと見なければならない。

持を受けて附けるのである。「源氏物語」と「伊勢物語」と「好色一代男」、或は知らず、その心附の工夫を以てしたのではないか。故に「源氏」を知らず、「伊勢」を知らぬ手合であつたら、ただ世之介の身の上を興がらうし、知つて居るものは、それとこれとの附合のをかしさに大笑ひさせうといふ事です。誰しも知つての通り、「形見の水櫛」「夢の太刀風」に「夕顔」を思はせ、太夫品定は雨夜の品定を思はせる類、或は世之介の勘當赦免の前に、和泉の佐野、迦葉寺の磯邊を書いてゐるのは、さながらの源氏君の須磨明石のさすらひ、續く都還り、殊には高浪雷光の趣向などそつくりであり、「心中箱」の島原藤浪執心は「葵の卷」の六條御息所と見るが無理か。夕顏の五條の假宿も、藤の棚にうつせば、榻立てて清酒屋ありて細路地長屋作りの入口を並べる事になる。いな、それどころか一部全篇みな「源氏物語」に據らない何ものもない。

とりわけ五十四の話に書きわけたも、年立したのも、「源氏」の眞似なるいふ迄もないが、もし「源氏物語」の卷數に擬するとなら、何歳を最後にしてもよからう、世之介の强藏がいひたくば七十歳にしてもよい筈。ただ世之介の早熟を示すに七歳が都合よしと、七歳から數へてさうしたのか。私は如何やら西鶴が「源氏」の少くとも「桐壺」の卷は心して讀み、心してその趣をこれに移したものと思ひます。「今よりなまめかしう恥かしげにおはするが、いとをかしううち解けぬ遊種に、誰も誰も思ひ聞え給へり」とあるは、源氏七歳の時であるから、其處から起算して四十五帖の五十四年、さて六十歳の結末といふ段取りでなかつたか。さういへば「世之介十二より聲も變りては」は、「十二歳にて御元服し給ふ」であらうか。これは「其方は十六なれば初冠して出來業平と申侍る」と元服の事が

見えて居るから怪しいとしても、業平初冠を通じて「伊勢物語」の匂ひは否み難い。「源氏物語」では其の大綱だけを移して、源氏の君を世之介としたが、早熟、戀の數々、さすらひ、また美姫に圍れた理想生活といふ「伊勢」の方は、この細部を採つて役立たせて居る、しかも細かい工夫もて。

世を渡る男藝と初奉公させたのは、母方の所縁の春日屋なる事も(人には見せぬ所)「伊勢」の初段なくては興もなく、大角豆飯の茶漬に干鱈毟り喰つて、なほも百錢の日の子算用なる女郎は、手づから飯匕取つた河内女があつて、面白さも增さう。(人の知らぬわたくし銀)江戸下りに、宇津の山邊で三條通の龜屋の清六にあふのは、同じ所で修行者に出會うた昔の影なくてはたはいもない事であらう。また見るまでの印ぞと、岩根の蔦の葉を手折つて金太夫方へ渡す(さす盃は百二十里)といふのは、「蔦かつら茂りて」から思ひ附いた細い工夫である事は必定であるが、みちのくの鹽竈で主ある女を唆して片小鬢そがれた事(口舌の事ぶれ)は、業平が二條后に通うて、鬢そがれて陸奧下りしたといふ傳説、當時の註釋者の用ゐたのを反對にした行き渡つた趣向と考へられまいか。

それにしても、西鶴は何故「源氏物語」にすがり「伊勢物語」を典據にしたらうか。談林といふものが古典から遠ざからうと努力して居るに、少くとも宗因は、源氏より謠曲をと人に勸めたものを、との疑問も起るものの、それはこの古典の取扱ひぶりを見れば、何ともなう合點せられます。「伊勢」の芥川も「彼女を負うて、筑摩川わたりぬ。其夜は、大霰のふりける。くず屋の軒に、つらぬきしは、味噌玉か、何ぞと、人のひもじがる時」(形見の水櫛)といふ樣にいひかへられる。それは家にあればの歌を、椎の葉に栗の飯を手盛に、茄子香の物を貰ひて、ともぢるのと同じやり口、丁度、

見渡せば花よ紅葉よおたい椀
浦の苫屋のあら世帶なり

といふ彼の俳諧の手法そつくりです。もぢる、茶化す、莊重の物を滑稽に轉化する、これ俳諧重要の手段、俳諧の俳諧たる所以です。更に見て行くと、彼が「伊勢物語」を古典とのみ見ず、ものゝあはれの書とも見ず、それをば、ただ淫靡の書、笑ひ本とも見ようとします。或はここにいふのは、別にさすところあつてのことか、或はあらぬ異本であるかは知らねど、とにかく女護島渡りの舟積物の中に、水牛の姿、錫の姿、革の姿の數々、さては枕繪八百などといふいかがはしき品々の中に、「伊勢物語」が二百部載せられてあるといふから。されば「源氏」の「夕顏」でも、「ありしながら打臥したりつる樣、うち交し給へりし我紅の御衣の着れたれりつる」とあの世の契を思ひ出されるいとも哀しい節からも「おれがきる物を、うへにせて、そうしてからと、思ひしに」とひよんな事にさし向けて「肌がよいやら、惡いやら、それをもしらず、惜い事をした」といはねば落着かぬものに變へて了ひます。(形見の水櫛)かうなると假名草子の「仁勢物語」の樣なものとは段違ひです。あれは何處までも言葉の上の洒落が主で、貞德一門の俳諧一流に過ぎません、餘りに原作の言葉に拘はつて居ます。立圃の「新町おかし男」または紀暫計の「伊勢物語ひら言葉」も同樣です。これは飽くまで、談林の風格、奇拔な趣向立でやつて退ける。「源氏」の空蟬の心持は中々に複雜であり、筋にしてもが實事あり、實事なし、兩說などと當時の批評家がいうて居る間に、西鶴は實事なしに片附けて、しかも川原町の小間物屋源介のさつさと留守宅預る女房の貞心は、手頃の割木で世之介の眉間に疵つけさせるといふ世話振りで行つてゐる。彼は決して古典尊重の貞門の衆ではありません。町人の彼に

は、あり來りの教權は絲瓜の皮でした。寒河江の宿の恨の幽靈も、あの挿繪で見る樣に、もの古るした恐しさから脫してゐる位です。(夢の太刀風)畢竟は、表面古典を尊重する樣で、腹の中で貶しみ果つるそれも、彼が自然持つ樣になつた幇間氣質の業でした。

大まかな見方ながら、「一代男」が天和二年に降つて湧いたものでない。それは西鶴が氣附いてして居る事も、氣附かでする事も、生れぬ以前の事もとり交ぜて出來た年數ものである事を考へました。しかし、まだ問題は殘る。都會殊に京阪が、地方の遊里の締括たる如く、その文學はまた地方の文學の總括であるといふ事である。地方は都市の發達からおのがじしの文化を有すとはいへ、それが三都殊に京阪に隷屬し、各地方の遊里は繁昌するとはいへ、三都わけても島原に範を取る事でした。世之介の此評眼は島原の太夫のありやうを標準として之を論議し、斯くして大笑を人に促します。

世之介は九軒町の天神には、床から尻突出して邊に響く程の匂二つまで放つ所を、煙管の火皿で押へたでないか。(今ここへ尻は出物)追分には、山家者の胼胝だけなほした、はたな女を置いて、今も都忘れてをかしと笑はせたでないか。(因果の關守)島原及び之に亞ぐ江戶新町の太夫以外は、ただ譯知りの修行に於いてのみ必要でした。「なんと世之介樣、旅の悲しさをよく、御合點あそばして、京の女郎樣の、御氣に入樣にあそばせ」と高洲の色町で人はいひました。(一日かして何程が物ぞ)畠山箕山が、日本の諸遊廓を敍しながら、格式作法は京のにのみ專であるとて、その序に、何事も先京を手本として皆諸廓の事はそれぞれの作法にて是を辨ふるに難からねばと斷りいひ

ました。これが當代の粹客の行方です。其の行方を以て「一代男」は成つて居るとすれば、ここに俳諧を地方都市農村の文學とし、浮世草子を三都わけて京阪の文學として、相對して考へてよいでせう。殊に「一代男」が談林俳諧の綜合であると云ふ事、作者西鶴がその點者である事を思ふと尙更の問題です。

俳諧は當時に於いては、士農工商の階級を撤して流行して居ました。其の範圍は、廣く都鄙に亙つて居ました。そこでかういふ事が考へられる。都會の文藝は俳諧のみではない。殊に三都の文藝は、古い所で能もあり、新しい所で歌舞伎もある、堅い所で漢文學もある。俳諧のみが都會人の文藝でもなく、娛でもない。所が、田舍にはただ俳諧が文藝としての唯一の物でした。その點から俳諧を田舍の文藝と呼び、浮世草子を都會の文藝と呼んでもよい場合もあらう。浮世草子は都會情調の所產であるが、都會が田舍の物資を待つ樣に、浮世草子の賣行また浮世草子出版の緣の下の力として、田舍の文藝愛好者、俳諧作者がある事を豫想してよい場合もありませう。

それには、何故田舍に俳諧が相應に根を張つたかを見る要がある。連歌師は室町の昔、幕府保護の下に都住して、安樂の生活を送つて居たが、一度騷亂の世となると田舍の旅をはじめました。思ひがけなく、其處には懇なる持成しが待つて居た、それは地方に介在して年を經た武士また豪農の、常に都に憧憬を寄せて居た者が、都人として迎へもし、また歌道の羈絆なく却つて興味ある娛樂教授の志に酬いるためです。

連歌師の過ぐる所、連歌の會はあちこちに催されて、此處にも小さい都を見る事が出來たのでした。此の地盤を借りてなほ盛にしたのが俳諧です。その創始者宗鑑も、日頃は、一面連歌師として都の人々に教へもし、法樂の連

歌の代作をして、生活の資に充てたが、やがて西國遊歴をして、地方同好の士を、やはり豪族豪農の間に殖やさうとしました。これは連歌から見れば規定も難しくなく、思ふままのをかしさを詠めば足るといふので、もて囃される。貞德はまづ之を利用して、その衒らす俳諧の甘さから、段々と連歌、さては歌道へ引き込まうと工夫する。しかし、時勢の要求は却つて俳諧を盛ならしめ、つひには彼をして澁々ながら「御傘」其他の俳書を出版せしめました。其の門下は、頗る多く地方に散在して、「毛吹草」の選集の如き、京、大阪、江戸はいふに及ばず、東海道は勿論、越後の果に迄に及んで居る。つづく選集には奥州、九州の果からも句を寄せ來る者が多く、其の數も八百、九百、はては千を越すものも少くありませんでした。もう地方も豪農、武士にのみには限らず、さまでもない土地持も、町人も之に加はるのでした。これ等の人々には、添刪を請ふために、點者の下に一卷百句に就いて、大方銀三四匁の點料を出さねばならず、もしその句が撰に入れば、撰料として、また銀の數枚を差し出さねばならぬ。その入選も句の巧拙よりも撰料の多少に關するといへば、地方の俳諧愛好者は少からず都住ひの點者の懷に貢ぐ事である。また其の句集を郷黨への自慢旁の配り本に數多く買ひ込むとすれば、また都の書肆によい儲けをさせる事になる。かくも、都住ひの貞門の人々がこの源を獨占してゐた所へ、はじめから教養は付き者の娛樂を標榜して、新俳諧談林を起したのは、大阪の宗因です。

彼は天滿宮の境内の俳盤屋に、向榮庵を結んだ。それは、貞德が宮方から下された恩賜の地に宏壯なる建物して、六歌仙の畫像、また吟花廊の設け、また蘆の丸屋の雅び振りなどに、及びもつかぬささやかなものでした。それは、貴族に幸せられて隱遁者氣取りに復古の道を計る者と、町人の間に潛り入つて新流行を開かうとする者との

相違です。しかし宗因は、その庵室で或計畫を立てました。それは直ちに京なる貞門の根據に迫るのを止めて、地方からとりかかる事です。まづ守武によつて育てられた伊勢の地盤を侵略しようとした。さては、長崎にも、奥州にも、飛彈の山中にも入り込んだ。彼の慧眼は、新興の地、江戸を以て東方策源の地としました。延寶三年の「江戸談林十百韻」の

されぱここに談林の木あり梅の花　　宗因
世俗眠をさます鶯　　雪柴

に見る様に、彼の計畫はよく的中した。彼は愈京の菅谷高政をして、其處の探題とするに至りました。宗因の祝句にいふ。

末しげれ守武流の總本寺

宗因が斯くまで談林の調の擴張に努力する一面は、勿論、彼としての藝術の使命と云ふ事もある。しかし他の一面にさきにいふ如く、總本寺と末寺との關係もあつた檀家から末寺に運んで、更にまた總本寺に運び來るやんごとなき物の存在を知らねばなりません。宗因の「蚊柱百韻」以來貞門との間に開かれたる論戰、高政の「俳諧中庸姿」以來いやましに加はる激戰、其の言葉穢さが已に眉顰めさせるに、尙其の心事の醜さを考へると如何してよいか解らなくなる、他の所得を羨む下司根性が見え透いて居ますから、兎に角に俳諧點者の收入は中々のものでした。百句の點料で一斗餘の米が買ふ事が出來る當時に於ては、從つて點者が輩出する。立圃の「はなひ草」口から四枚も覺えぬ中から、菓子袋に押す樣な印判をこしらへ、軒號にびつくりさせ一句一錢の點取に讀めぬ所は評時なしに付墨

する始末、作者の貧福が作句の巧拙といふ手品遣、內幕知らぬ田舍の俳士こそよい面の皮です。勿論さういふ點者は西鶴の前には頭の上らう筈はない、否、相應の手合でも、銘々の自慢先達、世の中雁も鳩も雀も鶴も同じ物に思うて貰ひともなやと吹かれても御尤と聞かねばならぬ程。從つてその收入の點も彼等と比較にならぬ。其の多額の黃金を半ばは大阪在住の町人の手から出ようが、半は地方からと見てよい。その金が彼が遊里通ひの代となる。その遊里の見聞が句になる。五十韻、百韻となる。その昔、連歌師が行旅の間に胸宇に寄せた自然寂寞の趣は影を薄くする。「西行は何知つて松島の曙、象潟の夕を譽めつるぞ、昨日は新町の暮を見捨て、其目を直に今日島原の朝明、是が唐にもあるべきや」といふと同時に

年貢納むるもろこしの里
或はかね初瀨の寺に聞ゆなる

などもろこし、初瀨といふ遊女の名さへ詠み込む。都會生活の歡樂の事物が、すべて材料となる。さうなると點者に從ふ地方の人々、殊に師匠宗因優りの權威者西鶴の顰に倣ふ手合は、見ぬ都の傾城を夢みながら、現に近い遊里を訪れて、同じ樣な材料を漁らうとします。これがいふ迄もなく「一代男」題材中のものであつた。

西國の大港大阪は諸國咄を居ながら耳にする事も出來るが、また諸國の穴を穿つたためには、斯ういふたづきもあつたでせう。もし此の時、それ等一切を攝取し、更に西鶴その人の遊歷の見聞をも加味して「好色一代男」として出版する時、地方の士は、西鶴の俳諧の註疏の書として、またおのが俳境を擴げる案內の書として、競うて購つた事でせう。江戶の萬屋版も吉原所在の大都としての出版でもあらうが、田代松意や遠藤正友等の蔚然と相集ふ談

林調流行の地としての出版でもあつたでせう。撰集出版に儲けて居た書肆が此の種の出版に鵜の眼鷹の眼になるのは當然、随分と作者にはづんだ事でせう。

もとより當にならねど、「諸藝太平記」に、西鶴が池野豐二郎右衛門から「好色浮世躍」といふ草子三冊を頼まれて前銀三百兩借り、五日の間に南の色茶屋木屋の左吉が處へ打ち込んでのけたといふ事は、少しは參考になるかも知れぬ。

さてまた、宗因の歿したのが天和二年三月二十八日、西鶴の「一代男」擱筆が十一月である所から、この著作は、西鶴が師匠に對して流石に遠慮して居たものといひ、また談林の流行の峠を越したのに見極めをつけた業であるといふ。それはともあれ、談林殊に西鶴の俳諧、あの遊里情調、都會情調の行方は自らここに歸着せざるを得なかつたでせう。これが自然の成行でした。西鶴ほどでなくとも同じ行方をした宗因が、晩年は大方もとの連歌師に歸つて俳諧から遠ざかつてゐた事からもさう思はれます。また梅柳さぞ若衆かな女かなの一句、よく談林との關係を語る頃の文章には、明かに遊里情調、都會興趣に醉つて居た芭蕉が、世にふるは更に宗祇の宿りかな、古き連歌師の行脚の昔に還つて自然の懷抱に入る樣になつた事からもさう思はれます。

田舍の文藝たる俳諧から、かういふ都會の文藝の浮世草子が引き出された事を、あの慶長のはじめ、岩佐又兵衛が大津街道で鬻いでゐた略筆阿彌陀佛、また道化まじりの風俗畫が木版の技巧を中間に挾んで、菱川師宣畫く所の都會趣味の一枚摺の浮世繪となつた事と思ひ合せて興を催す。しかも大阪版の「一代男」の挿繪は西鶴自畫のものであらうが、江戸版のそれは、「大和繪師菱川吉兵衛師宣筆」の署名があるのを面白いと思ふ。まして師宣の一枚

繪から元祿の丹繪、その後の紅繪、吾妻繪と都會趣味の加はる事を　八文字屋本さては洒落本その他のものと交渉させて見て、意味深いことと思ひます。

（大正十一年「早稻田文學」）

好色二代男考（その一）

一

「好色二代男」は「好色一代男」の續篇といふ形で書かれてゐるが、前著執筆のはじめから、西鶴はこゝまで書きつゞける豫定を立てゝゐたのであらうか。それとも「一代男」の意外な好評から、俄に續篇の案を立てたのであらうか。見るところ、後のやうに考へられるが果してさうであらうか。西鶴は、その頃の好色評判の書である「內證論」「まさり草」「白鳥」「遊女割竹集」「太夫前巾着」などが觀察の淺く、推量の多いのを慨して「二代男」を作つたとやうにいつてゐるが、それ等の先書と、この作とはどんな交渉を有してゐることであらう。それ等の先書の中には、現存してゐるか、どうか、未ださだかならぬものも多いが、とにかく「二代男」を考へる場合には、まづ、これを一問題としなければなるまい。

その他、「二代男」を續つて、多くの問題がある。その一つは、時代には前後があり、人物には替名があるが、事件は皆現實なのであるといふ西鶴の言葉を、どの程度まで信憑すべきかである。もし、その言葉をそのまゝに信憑するとすれば、「見及聞傳えしは、松の葉の塵なれば、祇薗齋の跡までも、心の綺麗なる事ばかりあらはし、よしな

きことははき捨る物にぞ」といふ作者の扱ひを、どの程度にまで考慮すべきかである。おもふに、これは最も重要な問題であり、また最も困難な問題である。「二代男」に書かれてゐる事件を、殆ど西鶴の筆によつてのみ知るといつてよい程に、比較すべく、考證すべき資料をほんのわづかしか持合はない後代の讀者、少くとも自分などには、滅多に指を觸れることの出來ない問題である。

「二代男」の奥附に「右全部八册世の慰草を何かなと尋ねて忍ふ草靡き草皆戀草是を集め令開板者也」とあるが、その慰草は、どれ程の意義を有するものであらう。これを「一代男」の西吟の跋にいふ「轉合書」と讀み合はせることに於いて、また一つの問題となる。「一代男」を轉合書といふ條件は複雜である。しかし、その一條件に、「源氏物語」の俳諧化といふ事がある。やゝ重き條件をなしてゐるやうに思はれる。いふところの慰草にも、或は、「一代男」の一條件がそのまゝに繼承されてゐないかと考へられる。それが、「二代男」を「一代男」の續篇とさせたのでないかとも考へられる。すなはち「源氏物語」は「一代男」に於いて、俳諧化されたといふが、なほ「宇治十帖」が手を附けられずに殘つてゐる。「一代男」の成功が、西鶴の飜案をそれにまで及ぼさせたのでなからうか。

もし、さうだとすると、「二代男」に書かれてゐる事件の中には、人名をかへ、時代をかへて、「宇治十帖」のそれをも混淆してゐると見なければならない。或は當代眼前の事件のあるものは、「宇治十帖」中のものに類似してゐるとの理由で選ばれたとも見なければならない。それ等は、「二代男」の中から明に指摘し得られるであらうか。然り、大體の見當がつくであらう、との見解の下に、ものいはうとするのが、この草稿である。「好色二代男考」といふ題はことごとしいが、みづからが限る範圍は狹く且小さい。わづかに、「二代男」研究の豫備の一歩にとゞ

まる。

二

この小稿は、「一代男」が「源氏物語」の俳諧化であるといふ假定の上に書いたのである。世之介の浮世ぐるひのこと、また勘當された後、和泉の佐野迦葉寺などの浦邊に佗住みすること、ゆるされて家に歸つたあと、大盡遊びをすることとの筋立は、源氏の君の色好みから、須磨の浦住み、更に歸京の後の榮華といふ「源氏物語」の大綱を移し來たものであることに論はあるまい。世之介の女護島わたりも、卷の名はあつて、事の實のない「雲隱」の卷に據ることも承認せられるであらう。また、卷四の「形見の水ぐし」「夢の太刀風」などは、「夕顏」の卷の本文と合はせ讀んで、はじめて興趣の深いことも注意せられるであらう。しかし、「一代男」を「宇治十帖」の俳諧化と斷ずる前には、なほ一段の緊密の關係を「一代男」と「源氏物語」の間に見出さねばならない。各章各條、一として關係なきものはないといふことを前提とする必要がある。「夕顏」と「形見の水ぐし」「夢の太刀風」ほどの交渉を、すべてに亘つて承認することが、さし當つての要件である。

卷四の「夢の太刀風」につゞくのは「替つた物は男傾城」である。三十一歲の世之介は江戶にゐた。唐犬權兵衛のかかり人であつた。ふと、大名の奧女中から、親の敵討の助太刀役を賴まれる。江戶の氣風に染みた彼は直に承諾する。鎖帷子に身を堅め、同じく鉢卷、目釘竹に心を付けて、さて敵は何ものと問へば、錦の袋の中に祕めた異様の道具をさして、「此形さまをつかふ時には、死入ばかり思ふにより、命の敵にあらずや、此敵をとりてたまは

れと世之介に取りつく」のであつた。道具は、その女中が女中頭から、餘り遣つて、さきがちびた故、この物賣る店でとりかへて來よといはれた物であつた。枕繪、一人笑ひと共に、奥女中が祕藏するといはれてゐる不思議な道具であつた。

これもなほ、「源氏物語」と關係があるのであらうか。自分はあると考へてゐる。「夕顏」の卷の中には、一挿話として、源氏の君が、六條御息所の侍女中將のおもとに戲れかゝることが書かれてある。秋のひと日、霧深き且であつた。御息所のもとをまかり出づる源氏の君は、中將に送られる。紫苑色の折にあうた羅の裳あざやかに引きゆひた中將の腰つきはなまめかしい。君は「咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎうきけさの朝顏、いかゞすべき」とその手を執へる。喘嗟の折から、なほもの馴れた中將は、身にかゝる私ごとを、公けやうにとりなした。事を主の君御息所のうへに託して、「朝霧のはれまを待たぬけしきにて花にこゝろをとめぬとぞ見る」とのみ答へたのである。

こゝに西鶴の俳諧手法が見られる。中將に挑む源氏の君を、世之介に挑む奥女中にかへ、公けごとに聞えなす中將を女中頭の命を利用して、おのが思ひをはらす女中にかへたのであつた。「替つた物は男傾城」のおもてだけでも、おもしろさはある、その裏にかくれたもの、すなはち本據を知つて、讀みかへせば、更に作者の作意を掬むことが出來る。「好色一代男」の各章各條が、「源氏物語」と關係があるとは、これ等の俳諧ぶりについていふのである。

「替つた物は男傾城」につゞくのは「一疊のつり狐」である。いふところは、切貫雪隱、しのび戸棚、あげ疊、空寢

入の戀衣などのくら事、會合所の祕密である。これもなほ「夕顏」の巻と交渉があるといはうとする。夕顏の住ひの何となく祕密を藏するらしい氣分を、轉用したものと見るがためである。いな、「萱のつり狐」のつり狐は狂言名もあらうが、なほ、「夕顏」の巻の中の、源氏の君の言葉、「げに、いづれか狐ならむを、たゞ謀られ給へかし」の「狐」を踏へてゐることをも見据ゑていふのである。

擧ぐるものは、たゞ二例に過ぎない。しかも、輕い關係のものを選んでいふのは、「二代男」と「宇治十帖」の交渉が大槪この類であると思はれるためである。何故に、「二代男」に重く、「二代男」に輕いか、本據の性質がさうさせたのか、西鶴の扱ひぶりの變化か、これも一つの問題であり得る。

もしも、二例によつて示されたやうな見解が全然誤謬であるとしたならば、以下說かうとするものは、すべて痴人の夢中語であらう。しかし、おもふところあつて、しばらくその杞憂を杞憂としてのみ、言を進める。

「一代男」に就いては、かういふ批評もあつたやうである。さまで學識のない西鶴は、「源氏物語」の名を耳にすることはあつても、おそらく通讀したことはあるまい、よしんば源氏に擬するつもりがあつたとしても、その物語は、光源氏といふ人の一代の情話が逐年的に記してあるものだとのみ信じてゐたのであらう。さう思はれるほど、細部に於いては、彼と此との間に交渉がないといはれたのである。少くとも、今は、さういふ批評の存在、またその種の見解に耳を藉さないことにする。また、西鶴の知識の穿鑿もすまい。彼が讀んだのが原書か、梗概の書であるかも、問はずにおかう。おのづから決するものがあらう。問はうとするのは、何故さうまでして、「源氏物語」に關係づけたかの問題である。尤も、この小稿は、その問題に入る一歩前で踏みとまる筈である。こゝには、例の俳

諸手法が、どのやうな形において「二代男」に用ひられてゐるかを、煩はしいが、その各條について指摘しようとするまでゞある。

三

放肆狂妄とも評したいのが談林の俳風である。その風格をそのまゝにとりいれたのが「二代男」である。かりに、西鶴その人から「二代男」は「宇治十帖」を本據として書いたといはれたにしても、なほ本據をそこと指摘するのは困難であらう。まして、さうあらうの豫想の下に穿鑿するのである。狂者の言にをはらねば倖である。

「二代男」の卷二の第二條の「津浪は一度の濡」には、新町、越後町が出水で普無川となつた時、遊客どもが騒ぎ舟でざんざめかす面白さ、まだどさくさ紛れに、その夜の客の目を忍んで、太夫とある男が、繋ぎ捨てた舟の中でかくれ逢ふことが書いてある。西鶴は、「さても主ある女を宇治川へ連れし古も思出されて、世になき事にもあらず」といつてゐる。この言葉が、「宇治十帖」との關係を暗に語つてゐるやうに思はれた。と思ふと、「浮舟」の卷に匂宮が薫大將の戀人浮舟の君を誘ふて、宇治川を渡るくだりが、想ひ出された。

いとはかなげなるものと、旦暮見いだす小さき舟に乘り給ひて、さし給ふほど、はるかならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに、心細く覺えて、つと著きて抱かれたるも、いとらうたしと思す、有明の月すみのぼりて、水の面もくもりなきに、これなむ橘の小島と申して、御船しばし、さし留めたるを見給へば、大きやかなる岩の様して、されたる常盤木の影繁れり。かれ見給へ、いとはかなけれど、千年も經べき綠の深さを、とのたまひ

て、

年經ともかはらむものかたちばなの小島のさきに契るこゝろは

女も珍しからむ道のやうおぼえて、

たちばなの小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ

をりから人のやうに、をかしくのみ何事も思しなす、かの岸にさし著きて下り給ふに、人に抱かせ給はむは、いと心苦しければ、抱き給ひて、助けられつゝ入り給ふを、いと見苦しく、何人もかくもて騷ぎたまふらむと見奉る。

西鶴のいふところが、これをさしてゐるとは、今もなほ變らぬ自分の考である。しかし、どんな心の狂ひか、「津浪は一度の濡」の全體を、皆、「浮舟」のこのくだりによるものと思ひ込んだのである。なほ又、薫もなつかしく、匂宮も戀しく、去就に迷ふ浮舟の態度を、ある男の情を一度はかなへてやり、二度はゆるさぬ太夫の强い態度にひきなほしたものと解した。匂宮が都にかへつた後、宇治から寄せた手紙を、その男が太夫におくつた手紙にいひなほしたのだとも解した。匂宮の手紙は、これに對する浮舟の心の動搖を示すたよりとなり、男の手紙は太夫の張を見せる手段となる、この變化がおもしろいとも思つたのである。なほ他にも一二の據りどころを明かにしたつもりでゐた。そして、すべてが西鶴の幻術の妙であるときめてかゝつたのであつた。その考を雜誌「彗星」今年の一月號に載せたのであつた。ついに狂者の言、痴人の說をなしたのであつた。

勿論、この條の小見出しの一つを「顯はれわたる宇治の俤の事」といふのであるから、「宇治十帖」に據ることは

明かであり、西鶴また暗に據るところを示す意圖があつたとは推察せられる。たゞ、同じ「宇治十帖」でも、本據を「浮舟」と見たのは當らない。まさに「總角」の巻と見なければならない。漸次、說き來つて、その條に逹した時、訂正を加へようとする。

「二代男」の巻一の第一條、「親の貌は見ぬ初夢」からとりかゝらうとする今、まづおそれるのは、この誤謬をくりかへすことである。誤謬に氣づいた時、また訂正をくりかへすのは、勿論である。

四

二代男の世傳は、一代男の世之介が都の若後家に生ませて、襁褓ながらにすてた子である。早く養ひ父母に死別れ、姥の後見で人となつた。ある年の初夢に、女護島から美面鳥が、父に托された色道の祕傳の巻物を將來したと見た。その時から、彼は色道の逹人となつたのである。その後、彼は仲間を伴うて、揚屋町の出口の茶屋に腰かけて、朝かへりの客共に讃付けてゐる。一人も見違ひはしない。ところへ、古狸のくにといふ遣手の開山が來る、ひき留めて過ぎにし事を語らせる。語り出づる諸國の諸分を聞書して、世傳も、その他の色人も加筆する。これがすなはち「二代男」と成つたのだとあるのが、「親の貌は見ぬ初夢」である、いはゞ本書の序の體をなしてゐる。

これが、もとより「宇治拾遺物語」の序の趣向に據ることはいふまでもない。おもふに、西鶴は、「宇治」といふ名をゆかりとして、「宇治十帖」を本據としながら、また「宇治拾遺」を本據としたのであらう。これほどの戯れは、いつも彼の作に見出される。珍しいことではない。

遺手のくには、「橋姫」の卷の年老いたる女房、辨の君のやつしではなからうか。源氏の君の胤ならぬ薫が、生さぬさきの生みの親の罪の始終を知つたのは、辨の君の說きあかしであつた。それを諸分物語に擬したのではなからうか。辨の君は、また薫のまことの父柏木と母女三宮との戀文のかずかずを薫に渡した。美面鳥またその俤でなからうか。かつて、美面鳥を柏木の友夕霧に擬し、色道傳授の書を横笛に擬したことがあつた。「横笛」の卷に、柏木の靈が夕霧の夢に現はれて、遺愛の笛をわが子薫に傳へたしといふと見て覺めたとあるためである。或は鑿解に過ぎはせぬかの懸念に、みづから忘れようとしてゐる。

第二の「誓紙は異見の種」は、平野橋といふ老粹客が、若い者に、惡所狂ひはよい程にするがよいと意見することが中心になつてゐる。意見の折には、いつも惚れませぬと書いた起請がとり出される。新屋の小太夫に馴染をかさねてゐた若き日の彼は、小太夫にわれを思ふといふ誓紙を書けといつた、それほどに思つてゐぬ故に書くことが出來ないといふ、それなら惚れませぬといふ誓紙を書けと命じて書かせた誓紙が、いふところの意見の種となつたのである。

據るところは何であるか、「橋姫」の卷の八宮の教訓である。この世をあぢきなう思うて、宇治の山里に籠りゐる八宮は、はやく僧にもなりたかつたが、二人の姫の教養のためにのみ、たゆたうて居られる。妻はずつと以前に死んでゐる、念數のひまひまには、母なき姫だちのために、經を片手に持つて、かつ讀みつゝも、唱歌を教へられる。また大君には琵琶、中君には箏の琴を教へられる。作者は、この父の教への片はしを示してからもいつてゐる。大君は、硯をひき寄せて、その面に、手習のやうに書いてゐた。父の宮は硯には書くものでない、これに書くが

よいと、紙を與へられる。大君は、その紙に

いかでかく巣立ちけるぞとおもふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

と書いた。妹の君にも、書けといはれた。まだ幼い筆のたどたどとやつとのことで書いた歌

泣く泣くもはねうち着する君なくば我ぞ巣守りになるべかりける

八宮の教訓が源の意見となつたとしたならば、小太夫に誓紙書けといつたのも、或はこゝ等から暗示されたかも知れない。やゝ拘はりすぎることをおそれはするものゝ。

これも同じ「橋姫」にある事である。薫の君は、ゆくりなく八宮の人となりを聽き知つた。なつかしく、ゆかしさに堪へかねて、宇治を訪ねて、佛法の弟子となつた。機ある毎に通うて、かなりの年を重ねた。ある年の秋の末つ方、薫は、このほどしばらくの無沙汰を思ひ出しては、心慌しく、有明の月のまだ夜深きに、駒の足音しのばせて急ぎ行く。ほろほろと落ち亂るゝ露に衣が濡れた。

「二代男」の巻一の第三條、「詰り肴に戎大黑」の筆はじめ、

東山のあそび、光叔一中まじりに、揚弓の會も詠め暮し、山の端にげし、酒嫌ひを引留め、長座敷になれば、千秋樂を下戸から謡ひ出して、晝の櫻を夜嵐に預けて、此氣遣さは、男ぶりのよき役者を太鼓持にして、女郎に付て置に同じ。夜は何時じや、是から直におせといふ。

といふのは、宇治へ急ぐ薫の俤でなからうか。かれは馬、これは駕籠、かれは柴の籬をわけつゝ、そこはかとなき水の流れをふみしだいて行く。これは廓の最中の揚屋町を通る。同じ筋から驚くべき變化が作られてゐる。

薫は八宮の住ひに近づく。琵琶の聲がかすかに聞え、箏の琴があはれになまめいた聲してたえだえ聞える。山寺に籠りゐる父の留守のさびしさを慰むる大君中君のすさびであつた。薫はしばし、竹の透垣のこなたに隱れて、聞きもし、見もしてゐる。西鶴が

扇屋の長左衛門が門に、立聞すれば、爰も摺鉢の音さえて、三文字屋の戸は、細目にあいて、のぞけば、半兵衛が花鰹などかく、よもや今時分、蕎麥切ではあるまじ、但湯豆腐か、

などゝいつてゐるのは、こゝの俳諧化でなからうか。

「二代男」の遊客どもは、柏屋の妙安に行つて、太夫まじりに臺所へ出て、料理に手を盡す。おのおのゝ役わりに、野秋は食をもることゝなる。

野秋は食をもるはずと、さだめければ、終に飯貝しらぬとは、或時女院様に、しやくしを見せ奉りしに、それはまま盛ものよと仰られたる事もあるに、是非に盛習や、自然旅籠屋の女房に、ならりよもしれぬ浮世といふ。

西鶴が、飯具にやゝ言葉を費した理由は何であらうか。これも「橋姫」をうつしとるためでなからうか。本據には、琵琶の撥に於いていふことが多い。薫の隙見すると知らぬ居間のうちは簾を短く卷き上げて、いとあはであつた。

内なる人、一人は、柱に少し居かくれて、琵琶を前におきて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲がくれたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば、扇ならで、これしても月は招きつべかりけりとて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし、添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかゝりて、入る日をかへす撥こ

そありけれ、様異にも思ひ及び給ふ御心かなとて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。及ばずとも、これも月に離るゝものかはなど、

と語つてゐた。その撥の世話にくだかれたのが、あの飯貝でなからうか。

いよいよ野秋が盛る段になつた。いかにももりましよが、誰やら二階から見さんす物といふ、それこそ任せ、所帶の取付くろめてやらうと、日傘をさしかけて、上からは見えぬぞ、下の御用心、それ出たは、いかいうその、たしなまんせなどの戯れ合ひは、もとより本據にないことではあるが、なほ、薫の垣間見してゐるを聞いて、簾おろして皆かくれ入つた姫だちの、「かく見えやしぬらむと思しもよらで、うち解けたりつる事どもを聞きやし給ひつらむと、いといみじく恥し」と考へる姫だちのおもはくが、西鶴の幻術のたねならずと誰か斷言し得よう。

五

巻一の第四は、「心を入れて釘付の枕」である。吉原の太夫薄雲は、その頃のならはしとて、奴角内の背に負はれてゆく。大門筋の辻越えて、曙の風も冷やかなるに、いみじき薫のわが袖ならずきかれる。まさしく角内の袂から通ふのである。歸つて遣手にきけば、その男常にはさもなく、太夫さま負ひにまゐる時は、むくつけなる下男の、洗ひもやらぬ鬢の匂ひをおきかせしてはの心づかひから、伽羅に身をなすとのことである。なほ不思議に思つた太夫は、その紺染の布子をとり寄せて、絎け目を解くと、垢なれぬ白小袖を中に絎け込んであつた。角内を呼んで、その口から、それが京の太夫高橋のおくり物であること、深くいひかはした仲を裂かれた、勘當の身を、こゝ

に奉公してゐることを聞いた。薄雲は、計らうて京へ歸してやる。なほ、道すがら、ものゝ寂しき寢覺に開け給へといふ。箱根の峠の宿に、釘目を開けて見ると、引出し二つ、上に高橋への手紙、下には金やら、丸藥やら、關の通手形まであつた。角內まことは粋客佐渡屋の源の嬉しさ、涙にくれるばかりであつた。

角內の伽羅の小袖の本據を討ねることは、さまで難くない。「橋姬」の宿直びとの袖の香が、すぐに聯想されるからである。

薰が大君の琵琶彈くのを垣間見た夜のことである。霧深き夜を曉かけて、御簾の外にゐたことゝて、狩衣はいとゞしく濡れた。濡れた袖がいみじくも匂ふ。「うたてこの世の外の匂にやとあやしきまで薰りみちたり」と作者は語つてゐる。薰の名は、生れるやがて、その身に異香の薰ずるがためにおほせられたのであつた。「かくれなきおん匂ぞ、風にしたがひて、主知らぬ香とおどろく寢覺の家々ぞありける」とは、その夜、宇治へ來る途すがらの出來事であつた。

あくる日、京より迎への車が來た。薰は取りにつかはした直衣に着かへた。濡れた衣は、夜前案內して、垣間見させてくれた宿直びとに下された。移り香はかへつて、彼の男を困じさせた。

とのゐ人、かのおん脫ぎすての、艷にいみじき狩のおん衣ども、えならぬ白き綾のおん衣の、なよ〳〵といひ知らず匂へるをうつし著て、身をはたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとに咎められめでらるゝなむ、なか〳〵所せかりける。心にまかせて身をやすくも振舞はれず、いとむくつけきまで人の驚く

句を、失ひてばやと思へど、所せき人の御うつり香にて、えも濯ぎ捨てぬぞあまりなるや。

これがまさしく據りどころであるならば、薫は京の高橋であらう、從つて、宿直びとは角内でなければならない。さても、太夫高橋と粹客源との間に、このやうな戀が、實事としてあつたのであらうか、また薄雲の俠氣が果して實際にあつたのであらうか。今の自分はあつたとも、なかつたとも言ひかねる。たゞなかつたとしては、巧みな飜案であり、あつたとしても、また巧みな嵌め込みであるといふことのみを知るに過ぎない。

釘付の枕もまた、その日の薫の行蹟の終始としてうけとられる。薫は京に歸つた。懸想だちもせぬ文を姫だちにおくつた。宿直びとの寒さうなのを氣の毒に思つて、大い檜破子やうのものを數多與へられた。また、山籠の宮が、僧に下される布施の料にと、絹綿なども多く屆けられた。その日は、丁度宮がおん行果てゝ、寺を出でなさる日に當つてゐるので、寺僧のすべてに、綿、絹、袈裟、衣などを一領づゝおくられた。

この行き屆いた贈物が、品目をかへて、そのまゝに、薄雲が情の釘付の枕の引出しの中に入れられた、と解してもよいやうである。

六

第五の「花の色替て江戸紫」の中心をなすものは、小田原町の中といふ粹坊主が、おのが身請した吉原の小紫を、新三郎といふ男に讓る顚末である。

越中の新三郎は、京の太夫吉野を身請するつもりでゐたところを、はやくも人にしてやられた。涙は袖こそ形

見、太夫が殘して毛縮緬を着せた姿人形を造らせ、名に寄せて、吉野の麓、六田の里に、物いはぬ姿を友として暮してゐた。折しも山の花盛りに、小田原町の中は、小紫を伴うて來た。新三郎の家に立ち寄る。ゆかしい暮しぶりに驚く、なほまた美しい女人形に驚く。驚いて、譯をたゞして、紫を進ぜたし、吉野にさのみ劣るまじき女であると說き、紫にも、とても世に男を持つならば、かゝる情知りをと說きすゝめる。二人は納得する。新三郎はもう用なきものと、吉野の人形を鎚でうち碎いた。西鶴は、一句の評を以てこの章を結んでゐる。

これをおもへば干鮭も、朽木に二度花をやるとかや、人の申せし。

いふところの干鮭とは、新三郎がその後、江戸へ出で北國の魚問屋となつたからである。

はじめ、自分はこの本據をたづねて、今はこの世になき人の大君を戀ひわぶる薰、また、薰がまさにおのれにゆるされてゐる中君を、匂宮に讓つた薰のうへに擬しようとした。おそらく、「宿木」の卷の中、薰が中君に對して、大君戀しさを訴へた言葉、

かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、むかし覺ゆる人形をもつくり、繪にも畫きとめて、行ひはべらむとなむ、思う給へなりにたる、

に泥み過ぎたのであらう。すなはち、大君の人形を作りたやの薰の願ひを、現實に行ふ新三郎と見たのである。かの宇治の山里と、六田の山里とを、あまりに強く太き線で結ぼうとしたのである。今は、その解を棄てゝ、本據を「椎本」におかうとする。

「椎本」に於ける本據は、これを二つに分けていふべきであらう。一は「茶辨當をまねき、湯をまいるのよし、銀

の器取出し、茶杓がないと尋ねるも氣の毒、近くの庵に立寄、軒の吳竹を所望して、茶杓といふものに切といふ、あるじ奥より甫竹がためたる一節に、鹽瀨が不洗を取添、もしかやうの物でも御座らぬか、御用に立べしと出せば、かゝる所にあるべき物ともおもはねば、いづれもかんじて」といふ六田の里の新三郎のあるじまうけに關する。

匂宮は初瀨詣のかへるさ宇治に遊ぶ、薰も來り會する。二人はやがて、多くの供を伴うて八宮のもとを訪れる。ここはまた樣異に、山里びたる網代屏風などの、殊更にいとそぎて、みどころある御しつらひを、さるこゝろしてかき拂ひ、いといたうしなし給へり。いにしへの音など、いとになき引物共を、わざとまうけたるやうにはあらでつぎ〳〵彈き出て給ひて、壹越調のこゝろに、櫻人あそび給ふ、あるじの宮の御琴をかゝる序にと人々思ひ給へれど、箏の琴をぞ心にも入れず、折々かきあはせ給ふ、耳馴れぬけにやあらむ、いとも深く面白しと、若き人々思ひしみたり。所につけたるあるじ、いとをかしうし給ひて、餘所に思ひやりしほどよりは、なま孫王めく賤しからぬ人あまた、王の四位の古めきたるなど、かく人め見るべきをりと、かねていとほしがり聞えけるにや、さるべき限り參りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方に古めきて、よし〳〵しうもてなし給へり。

この思ひの外な風情を、茶の湯道具に假りうつしたのが、「花の色替へて江戸紫」の「かゝる所にあるべき物ともおもはねば」であらう。その吉野の里のくだりには、「里の童の花あらすを、それしばし枝折事はいやよと、江戸のよし原言葉を聞くに猶ゆかしく」とあるが、よし原言葉の主は、小紫であつた。これもまた宇治の宮のくだり、「かの宮はまいてかやすき程ならぬおん身をさへ、ところせく思さるゝを、かゝる折にだにと、忍びかね給ひて、面白

き花の枝を折らせ給ひておん供に侍ふ上童のをかしきして奉り給ふ」とあるに據るものであらうか。果して然るか、いなかは未だ斷じかねる。

も一つは、小紫をゆづる中坊主の心ゆきに關する。匂宮などが河のかなたに管絃のあそびするのを聞くにつけても、姫君だちの身を顧みて、かゝる山懐にひき籠めては止まずもがなと思さる、八宮であつた。もう大君は二十五歳、中の君は二十三歳になつてゐる。まして、今年は、宮にとつて重く愼むべき年まはりである。ひたすら往生の道を念ずべき身も、たゞ二人の處置にのみたゆたうてゐられた。賴みにする者は、薫だけであつた。宮は薫に心細げなる物語をした後、「亡からむ後、この君達をさるべきものゝ便にも訪らひ、思ひ捨てぬものに數まへ給へ」といはれる。尤も、かういふ賴みは以前にもあつた。薫は悦んでこれに應じた。

八宮を中坊主にひきなほすことは正しい、宮は、すでに、世を捨て人の優婆塞であつたからである。薫を新三郎にひきなほすことも正しい。薫もまたはやく世を厭うて、隱遁を期してゐたからである。その薫が、ふと大君を見てから、心のおきてが變つた。「思ひしよりはこよなく勝りて、おほどかにをかしかりつる御けはひども、面影にそひて、なほ思ひはなれがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる」そのなほ思ひはなれがたき世といつた言葉を、世話にやつせば、「干鮭も朽木に二度花」となるであらう。しかし、西鶴が、そこまで原文のあとを追つたか、どうかは詳でない。

以上、五條、巻一をはる。

七

巻二の第一は「大盡北國落」である。江戸の遊客高松三四郎が、勘當をうけて、北國のさる人をたよつてゆく。年ごろ目をかけた太鼓の四天王が、あとを慕ひて供をする。日かず重ねて、しるしの竿は降埋む雪に聲ある里、福井の町に棟高き小林仁兵衛のもとに着く。主の妻は死んで、今日が中陰の日、庭に四十九日の餅搗く音、揚麩の薫、荒和布刻むなど、世の中の無常、時しも參り合うたことを悲しく思つた。しかし、主はまづ心やすかれとて、快く饗應してくれる。あくる日は亭主も精進あげて、月代を剃る。さて旅の徒然を慰むとて、八幅の掛物を壁にかけて見せる、どれも太夫の姿繪に、銘々書をしたものである。とても事に、この君達の昔を物語れといへば、主人は一人々々の上を語る。いづれも、世に亡き人々であつた。語りをはつて、世はかく無常なれば、必ずともに惡所ぐるひをやめ給ふな、たとへ親御は見捨てゝも、今一度天神を買ふほどの身には、必ずひき立てゝまゐらせう、自分も勘當されて、丹後にゐた時、國もとから呼びかへされたのは、かやうな雪の夕暮であつた、おの〳〵吉例にまかせて、一しほ勇み給へ、と酒宴をはじめる、これが、「大盡北國落」の梗概である。

かういふ筋立が、宇治十帖のどこに見出されよう。しかも、なほ、無理にも二者の交渉を考へようとするのが、この稿である。考へ得て、西鶴の俳諧に徹することを念とせねばならない。

これの本據を「椎本」と見ることは、必ずしも無理でないやうである。

八宮はすでに薨ぜられた。宇治の山里には姫君のみがわびしく喪に籠つてゐる。まして、年も暮れて、雪霰降り

しく頃は、今はじめて思ひ入る山住みの心地がする。薫は年新になつたら、一寸は訪ねかねると思つて、雪を冒して訪れる。姫君はうれしかつた、例よりは鄭重に扱つた。いつもは、對面することをつゝましく思つた大君であるが、折角の好意を無にするもいかゞと應對する。薫は宮の思出を語ることが頻りであつた。また姫だちの上を慰むることも多かつた。

八宮の常の居間を見ると、塵は積つてゐる。佛のみが、今も花で飾られてゐる。勤をなさる床もとり拂つてある。薫は胸にせまる悲しさを一首の歌に寄せた。

立ちよらむかげとたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな

日暮れるほど、多くの田舍人が秣を持つて來た。供人がはからうて、薫の庄から運ばせたのである。薫は、その人々に、いつもこの樣に、姫君だちに仕へ申せと、命を下して、京へ歸つた。

かう並べて見ると、事の心は同じで、事の相は全く異つてゐる。事は共に無常である、訪ふ人、訪はれる人、慰める人、慰められる人、主客を顚倒し、佛の教と色里の教を錯綜させてゐる。顚倒錯綜の自在なる、こゝに西鶴の俳諧のおもしろさがあるかと思はれる。

かうして、第二の「津浪は一度の濡」の順序となる。さきの日の豎介の誤謬については、前にいふところがあつた。また本據の「浮舟」でなくして、「總角」であることも一言した。今はその點を、やゝ精しく説くべきである。

新町の出水の暮方、更けゆく月の影を水に映して見ることは、またいつの世にあらうかと、俄仕立の騷ぎ舟。

女郎交りの枕踊、四竹の拍子にあはせて、共比の花遣歌、唐人の戀するは、きつくりきつちやなんどと、分も

なき事のみ。叉小舟に女郎一人、菅笠きせて貌は見へず、太鼓の伊右衛門が聲して、人買舟よとどやく、それは賣物に極まつた女といへば、しらけてぞ歸りける、其後此里の若き者ども、比丘尼舟の仕出し、山伏舟、しらさ海老賣まね、其儘三軒屋川口屋の格子にさしよせ、酒事にして、山市晴嵐西湖の萬景、此一景にきさらんや、

「津浪は一度の濡」が「總角」を本據とするの第一條件はこれである。本據は「總角」の宇治の紅葉舟であらう。十月一日頃、匂宮は薫と共に、多くの人々を從へて、宇治に遊んだ。紅葉の盛りをめでうためである。紅葉の枝を錦の飾のやうに葺いた船に、管絃の調おもしろく響かした。たそがれ時に、岸に船さし寄せて、文を作る。紅葉を薄く濃くかざして、海仙樂といふのを吹く。人々の興酣な騒ぎ舟であつた。

その頃、薫はまだ大君を得ないが、匂宮はすでに中君を得てゐた。その日、姫君だちは、舟の騒ぎを聞くにつけても、さすがに世に重ぜられる匂宮である、何となき遊びにもこれだ、と思つた。「げに七夕ばかりにても、かゝる彦星の光をこそ待ち出でめ」と覺えた。それだけに、とく來給へと下待ちに待つた。思ひは同じ匂宮である。薫も、もとよりさうである。宮は舟の中の人々の心ゆくさまを見ては、「あふみの海の心地して遠方人の怨みいかにとのみ御心」は空であつた。人目さへなかつたら、すぐにも姫のもとへと思つてゐた。薫もまた人々の騒ぎが鎭りさへすれば、姫のもとへ頻りに匂宮と打合はせてゐた。しかし、内裏より、人々が數多來會はせた。二人は絶望をかこたねばならない。心設けした姫だちの惱しさは一方でない。わけて中君の歎きは多い。何故に宮に許したのであらうの悔が、蛇のやうに心の內に頭を擡げる。大君も何故にさういふはからひをしたことぞと、父の遺誡も思出

されて悲しかつた。

「津浪は一度の濡」の騷ぎ舟以下の記事は、この男二人、女二人の思はくをとりまぜて、本據とした。太夫は、客の目を忍んで、自分に焦れてゐる男に逢つてやつた。騷ぎ舟のどさくさ紛れに、繋ぎ捨てた舟の中で首尾したのである。宿の男に吟味にあつた時、巧みに隱し男を庇うて、立派な手管を見せたのである。薫や匂宮がなし得なかつた手段を、ものゝ見事にやり遂げたのである。西鶴は、いにしへの公卿のやさしさを、今の太夫のかしこさに書きかへたのであつた。

さても、太夫の隱し男はいやます思ひに堪へかねた。指を切つて、手紙に添へて太夫に贈る、行末とても變りたまふなといつた。太夫は憤つた、年月戀ひわびて、逢はれぬ身なれば、夢ばかりの情とあるを見棄てかねて、逢ひそめての限り思ひ切られよといへば、この上は浮世に望みなしといつた言葉の下から、あさましい仕掛は何物ぞと、折角の贈物である指を出水の中に投げ込んだのである、中君に、この氣慨があつたら、どうしてあの惱みがあらう、大君に、中君を敎へて、さういふ强い態度をとらせることが出來たら、何の歎きがあらう。平安朝のいにしへの姫君の弱さを、今の太夫の張りにかへたのは、いはゞ火を水に變じたと同樣である。おそるべき西鶴の幻術であつた。その條に於いて、據りどころのない「我指も儘ならぬ事」の一項を添へるに至つては、眞におそろしさの限りであつた。

八

巻二の第三「髪は島田の車僧」は、さし當つては、その題に示されてゐる通りに、謠曲「車僧」を本據としてゐるかとも思はれる。まづそれを考へる。

この一篇の謠曲は、愛宕山の天狗をシテとし、車僧をワキとする。天狗は頻りに車僧を魔道に誘導しとうとする。車僧は持するところあつて、承服しない、シテはさらば行くらべせうと挑みかゝる。シテは笞をふり上げて車を打つ、車は進まない。僧は拂子を上げて虚空をうつ。不思議や、車は牛も無く、人も引かぬに、やすやすと遣りかけて飛ぶ車となる、天狗は、まことに奇特の僧かな、あらたつとや、おそろしや、と魔障を和げ、合掌して失せてゆく。

して見れば、西鶴は、車僧から、笑はせようとする幇間を捻出し、天狗から、つひに笑はせられる遊女だちを捻出したのである、そして、意外な行くらべを案内したのである。

三人の女郎がゐる。客の前でも何かおもしろからぬ顏つき、見かねた幇間の一人が、勤めは泣くと笑ふが第一といふ、三人ながら、生れつき笑ふ事が嫌ひといふ、こりや少し笑はせて見ようと賭事となる。笑つたら、三人の女郎が丸盃持つて出口の茶屋まで行く筈、笑はす事が出來なかつたら、末社殘らず大盡までが赤裸になつて、日中此里ぐるり歩くことゝ定める。三人を上座に直して幇間どもは、下帶に猫を繋いだ猿まはしやら、天狗の面を懸けて楊枝を啣へるやら、珍裝さまざま、一時あまりも騷げど、つひに笑はすことが出來ない。三人は却つて、身上の悲しさなど思ひ出して涙ぐむぐらゐであつた。いよいよ負に極めて、いづれも裸になりかゝる時、幇間の一人が小石を紙に包み袖に入れて、耳近く寄つて、九月の節句も遠いやうでも今の事じや、後もさきも爲手があるぞ、まづ、

これで惱しうい ふ拂をしやれとささやく。三人は「莞爾と異な事にて笑ひぬ」かくて、つひに女郞だちは行くらべに負けてしまつた。

いかにも西鶴らしい落想であつた。「車僧」の型の中に、型を生かして、心ゆくばかり遊女のさもしさを穿ち得たのである。俳諧のおもしろさがつくづくと思はれる。

車をやる、やらぬを、笑はす、笑はぬに轉じさせた趣向は、西鶴ほどの人である、何の造作もなく、案じ出される筈であるが、なほいさゝかの據りどころはあらう。それは何であるか、「宇治拾遺物語」の「高階俊平が弟入道算術事」であらう。

入道は唐人から算おきの術を學んだ、玄妙の域にまで達した。後には師に從つて渡唐さへしようとした。しかし、約を果さなかつた。師は憤つて、彼を呪つた。漸くその術が衰へてしまつた。その後、庚申の夜、若き女房どもの集ひの席に、たまたま入道が參した。夜更けて、人々が、寢ぶくなつた時、入道に、一人が、笑ひぬべからん物語し給へといふ。おのれは口手づつにて、人の笑ひ給ふばかりの物語はえ知り侍らじ、さはありとも笑はんとだにあらば、笑はかし奉りてんかしと答へる。猿樂をし給ふか、いな、只笑はかし奉らんといふ、こは何事ぞ、とく笑はかし給へと責める。入道は算の袋を解いて、算をさらさらと出す。女房どもは、そんなものでと嘲る。いらへもせで、算をおく。置きはてゝ、いざと算の一つを捧げ持つ。何の笑はうぞと女房どもはいひ合つてゐたが、見る見る、誰も誰も笑壺に入る。

いたく笑ひて止まらんとすれどもかなはず、腹のわた切るゝ心地して、死ぬべく覺えければ淚をこぼし、すべ

きかたなくて、ゑつぼに入りたる者ども、物をだにえいはで、入道に向ひて手摺りければ、さればこそ申しつれ、笑ひ飽き給ひぬやと言ひければ、うなづきさわぎて、伏しかへり笑ふ笑ふ手を摺りければ、能く詫びしめて後に、おきたる算をさらさらと押し毀ちたりければ、笑ひさめにけり、今暫しあらましかば死なまし、またかばかり堪へ難き事こそなかりつれとぞ言ひあひける。笑ひ困じて、集りふして病むやうにぞしける。

この高笑ひと、かの微笑みとを讀みくらべれば、比べるほど、西鶴の皮肉は露はであらう。しかし、或はおそる、この一條を、「二代男」の本據と見ることの妄解であることを。或はおそる、これたまたまの暗合であることを。いかにも、この一條が「今昔物語」にのみ出でゐるならば、「俊平入道弟習算術語」と題するそれのみであるならば、自分もさうきめてかゝるであらう。たゞ「宇治拾遺」中にあるが故に、なほ暗合と斷ずることを躊躇する。何となれば、前にもいつたやうに、「二代男」全體の體裁が、すでに「宇治拾遺」に擬してゐるものであるからである。更にまた、「二代男」の中の幾條かが、「宇治拾遺」に基づいてゐると思はれるからである。

さうなると、飜案といはうか、俳諧化といはうか、滑稽化といはうか、とにかく、西鶴の換骨奪胎の態度は、あまりに煩しいともいはれよう。しかもその煩はしい事實は、彼の談林の俳諧の上にも、浮世草紙の上にも、しばしば見うけられる。「二代男」の中の幾條も、「源氏物語」やら、「伊勢物語」やら、謠曲やらを、とり重ね、とり合はせて、さて、さつと一筆、西鶴みづからの作意に書き改めた幾つが注意せられる。そこにこそ、驚くべき猛威を揮つてゐる彼の才氣が讀まれる。特に「髪は島田の車僧」の場合をあやしむことを要さない。

それならば、この一條は、表に「車僧」を見せ、裏に「高階俊平が弟入道算術事」を祕めただけかといふに、そ

れのみではなかつた。これだけは、さすがに、「宇治十帖」から離れてゐるかと思つたが、やはり、さうではなかつた。成程、奪胎の重心は、「宇治拾遺」のそれにおかれてゐるやうに讀まれるが、なほ「宇治十帖」とのゆかりはあつた。細いながら、かすかながらに、二つの間の交渉は保つてゐた。今の自分には、その交渉が保たれてゐるか、ゐないが問題でなくして、交渉が、どうしてかういふ狀態でおかれるがゞ問題である。細くかすかであるにしても、彼此の交渉を保たうとしたのであらうか、「宇治十帖」と絕緣するに忍びかねたのであらうか、最初の意圖を追はうとしたのであらうか。それとも、「宇治十帖」をしかとそこに据ゑながらも、わざと細くかすかな交渉とすることに於いて、却つてみづからのあそびを恣にし得るものと思つたのであらうか、讀者をして、微妙な繫がりを辿らせて、みづから悅んでゐたのであらうか。いづれにしても、問題は、他の多くの例を參照して後に決すべきであらうが、こゝには、とりあへず、「宇治十帖」の中から、こゝの本據を考へておくことが必要であらう。

「總角」の卷は、八宮の一周忌の記事にはじまつて、大君の死、及びその葬後の記事にをはつてゐるが、これを通じて、そここゝに薰と大君の行くらべが見られる。

薰が大君を戀して、深く思ひ惱むことは、すでに「橋姬」の卷に見えてゐる。八宮の薨後、しばしば宇治を訪ふにつけて、戀の心はいよいよつのる。時には思ひのたけを訴へる。大君はその意を知らないのではない、たゞ佛の道を念ずるあまり、すでに世心を棄てゝゐる身ゆゑに、知らぬさましてゐる。事は「椎本」にくはしい。

「總角」になると、薰は幾度となく、大君に訴へもする、迫りもする。なほ、大君は聽きいれない。女房だちは、皆が皆、姬に背いて、薰に從ひ申せと勸める、それどころか、機さへあれば手引もしかねない。大君の心苦しさは

大方でなかつた。ある夜、薫は大君の室にまで入つた。かりそめの添ひ臥ともあれ、大君はつひに薫の意に從はなかつた。さて後、大君は、薫の心を妹中君に轉じさせようと努力した。しきりに、みづから媒しようとした。しかし、薫はうけひかない。薫は考へた、中君のあることが、おのが願ひの妨であると。この妨は、匂宮にゆづることに於いて除かれると。この考へは、かねてから懷いてゐたが、いよいよ實行にかゝつた。計畫は案外すらすらと運ばれた。戀の妨は除けられた筈である。しかも、なほ大君の心は動かない。さうかうするうちに、大君は惱みのあまり、病に臥した。病は日ましに篤しくなりゆく。つひに起たない。薫は悲歎の涙にくれる。葬送の日は過ぎても、なほ憂欝の日を、宇治におくつてゐた。かくして、「總角」の行くらべは薫の負方となつたのである。

女房どもの援けをまで借りて、手を盡す薫の心づくしもさることながら、つひに、從ふことなくて終つた大君の苦勞もなみなみでない。西鶴は、それ等を、幇間だちのいろいろの珍裝珍藝にうつし出し、また女郎だちの笑はぬ工夫にうつしとつたのである。

大君が薫に從はなかつたのは、薫を嫌つたためでない。一意たゞ佛を念ずるためであつた。すなはち、戀の魔道に墮さうと企む大天狗薫が、つひに、大君の道心の前に屈したのである。題の「車僧」は、その一點に重きをおいたものであらう。

九

「髮は島田の車僧」に於いて、「冗辯やゝ煩はしいものがあつた。第四の「男かと思へば知れぬ人さま」に於いて

言葉を吝しまうとする。それはまた多きを要さない。本據が前條に聯關してゐるためである。「二代男」のどの條もさうであるが、これも、一、よし原正月買の事、一、さん茶呑んだ程しる事、一、女の女に馴初る事の三つから成つてゐる。「宇治十帖」と交渉のあるのは、その最後のものである。

年のほどは二十六七の優形男が、頭巾深く忍び笠、玉鬘といふ女郎を思ひそめ、假の枕を並べた後、間もなく通つてくる。かれこれ一年、なほ一度もわけを立てたことがなかつた。

人こそしらねいつとても、上帶もありのまゝ床に入て、しめやかに手迄はしめて語るに、かりにもいやしき言葉なく、御袖の留木さへ常ならず、次第に女郎の身はぢらいてありける、秋も最中の十三夜の月待暮に、御歸りを引留是非に、其情あれかしと戯れしに、あいそめし時しらせ申とをり、二世とおもひし妻におくれ、いまだ其悔み事やむ事、其姿に貴樣が似てあれば、過にし思ひ晴しに、責ては仇な枕をならぶ、かくて春にもならば、誠ある情を互にと、哀なる物語、

さうして歸る客を、訝しむ玉鬘は、ひそかに、しも男して、跡をつけさせた。客はある水茶屋に入つた。そこで着物を着かへた、若後家姿になつて駕籠に乘つて、いづこかへ去る。茶屋で訊せば、さるところの奥様であるが　御つれあひに別れて後、世にもかはつたおん物數奇をなさるとのことであつた。

つれあひに別れたといふ事の類似を、「總角」に求めれば、大君の父の喪に籠ることである。「御袖の留木の香も常ならず」も、大君が薫と添ひ臥した後、中君の側に寢るくだりの、「所せき御移香の紛るべくもあらず、くゆりかゝる心地すれば、とのゐ人がもて扱ひける思ひ合はせられて」といふを思はせる。さうまでゞなくとも、少くとも、

薫その人を聯想させるに足る。しかし、西鶴はさういふ節々よりも、薫が大君と添ひ臥しながらも、事なくてをはつたこと、少くとも、彼の浮世草子の世界では、摩訶不思議と思はれるこの事件に多くの興味を有つたのであらう。大君とのみか、中君とさへ同じ態度をとつた薫の心情は、女が女を買ふと見ないかぎりは、解しかねたのであらう。さういふ飜案ぶりをわれながら、よく成し得たりと思はなかつたらうか。

薫が大君と添ひ臥した居間には、み佛が据ゑられてゐる。日比もさうであるが、喪に籠る今はなほ更に名香の薫が高い。薫の亂れ心はおのづから制せられる。

名香のいとかうばしく匂ひて、樒のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりけに、佛をも思ひ聞えたまへるみ心にて煩はしく、墨染の今更に、折節心いられしたるやうに、あはあはしう、思ひそめしに違ふべければ、かゝる忌なからむほどに、このみ心にも、さりとも少し撓み給てなむなど、せめてのどかに思ひなし給ふ。

事の趣は、表裏の差こそあれ、男姿の若後家が、春にもなつたらと言つたことゝ、相應に太い絲が繋いでゐると見られ得よう。

とにかく、このやうな考から、事なく止めた、薫はまた別樣な思ひから、同じ態度をくりかへしたのである。その後、薫は老女房の手引で、ひそかに大君の寢間に入る。妹と共に寢てゐた大君は、けはひを聞きつけて隱れてしまつた。薫の失望はいふばかりもなかつた。居殘れる中君を美しと思はぬではない、更にまた隱れた人に對する面當てにと思はないでもないが、さうしたが最後大君から「うちつけに淺かりけり」と思はれるのもつらい。尤も、何事にせよ、前世の緣は免れ難いものゆゑに、後の事はともかくも、今は、「この一ふしはなほ過して」と、亂

れ心をおさへて、たゞをかしく、懷しく、一夜を語りあかしたのである。その曉、手引した老女房は、薫から、事の次第を聞いて、大君のあまりなる心强さに、むしろ反感をさへ催したのであつた。

一〇

卷二の第五「百物語に恨が出る」には、客をおくり出した女郎どもが、うち集ひての茶ばなし、どうせ寐られぬ夜半であるから、百物語して、何が出るかためして見ようと、いろいろ語つたが、その甲斐はなかつた。噺は變つて　身の上の悲しさ、人を騙した事などを語り出す。客といふ客に對して、あるほどの金はなくさせる、世にある身は捨てさせる、しかも、一度零落したと知るや、申しかはした入墨子も、今の勤めの邪魔と艾で燒きすてるなどゝ語つてゐるうちに、女郎どもは心の鬼が凄くなる。一人一人涙に沈みて、歎き入る時、天井の裏板響き、屛風襖も鳴りわたる時、噂の主だちが現はれ、日比の僞り返すぞ、放ちた爪、黑髮、日帳もいらぬといふ。おそろしく、いろいろ詫びても、姿は消えない。賢い女郎が考へて、おのおの揚屋の算用のこりはと高聲にいふ。

現にも世中は、借錢程すかぬ物はなきにや、此聲聞と、化したる形消えうせけるとぞ、

またしても、西鶴のもの凄い穿ちが現はれてゐる。もとより、この種のものは、平安朝の物語のどこにもあらう筈はない。西鶴は、「宇治十帖」のおほどかなるものゝどれに對比させるために、この筆を執つたのであらうか。

匂宮はすでに中君を得た。宇治に通ふことも繁く、おもふ心も深かつた。しかし、もともと色好みの君である、さうまではつゞかなかつた。宇治の山家には、漸く憂愁がたち罩めて來た。まして、匂宮と薫の紅葉舟の、すぐそ

こまで來ながら、つひに寄らで過ぎたことが、殊に、その折の事情を知らぬ人々に、堪へ難き悲歎をおぼえさせた。

姫君はまして、なほなほしき中にこそは、けしからぬ心あるもまじるらめ、何事も筋ことなる際になりぬれば、人の聞き思ふことつゝましう、所せかるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり。

とさへ思ひ入つた。そして、父の八宮が聟にとまで思はなかつた匂宮を、いかに薫のはからひがあつたにしても、妹にゆるしたのは、自分の罪であると、思ひ惱んでゐた。煩悶は心を蝕んで、つひに病に臥すやうになつた。

匂宮が六君と結婚したことが、いつか宇治の人々の耳に入つた。姫だちはいふまでもない、女房どもゝ、恨めしく思つた。大君の病はいやましに重る。はてはては父君とく迎へたまへと念ずる。念ずるにつけても、「斯ういみじくもの思ふ身どもをうち棄て給ひて、夢にだに見え給はぬよ」と思ひ續ける。折も折、中君は姉にむかつて、故宮の夢に見給へる、いと物思したるけしきにて、このわたりにこそほのめき給へれと語る。妹の夢に見えて、わが夢につひに見られない。亡せ給ひて後、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らね、と大君は、これも罪の深さを泣く、姉の言葉に中君もいみじく泣く。時も時、匂宮から文が來た、細々と情のほどを籠めてゐる。またしても僞りごとかと、大君の心には、匂宮に對する恨みがまさる。

「百物語に恨が出づる」の本據らしいものを「總角」の中から拔けば、ほゞ、これに盡きる。騙す男と騙す女郎、恨む女と恨まれる女郎、その人をおきかへ、事を入れかへて、情趣全く反するものを現出するのは、西鶴の慣用手段である。この趣向も、さまで珍しくはなからう。

夢に八宮の見えたのと、現に、落ぶれ客の現はれたのと、さすがに、ゆかりのあとも殘つてゐるが、それにーも、「揚屋の算用殘」一言は、西鶴ならではいひ得ざるものである。けれど、これにも、或は據るところがありはせぬかと思はれる。

それは、もう「宇治十帖」ではなかつた、「宇治拾遺物語」である。はじめに、斷つてゐるやうに、この稿は、「二代男」を解きほどいて、「宇治十帖」との關係だけを考へればよい筈である。「宇治拾遺」などは、いはずしてもよい譯である。それをいはねばならない程ならば、他にも當然擧げて然るべき書もある。それなのに、何故に、「宇治拾遺」に據るものを指示しようとする。「二代男」の體裁をいふについては、どうしても、それに觸れねばならなかつた。それをいふ以上、また「髪は島田の車僧」の「車僧」が有つ意義を考へる以上、「宇治拾遺」を避け難かつた。更にまた、「髪は島田の車僧」の本據として、「高階俊平の弟入道算術の事」を擧げることが、ともすれば妄甚狂甚の斷に過ぎる謗もおそろしかつた。少くとも、もう一つの例を引いて、旁證としておく必要がある、こゝにまた「宇治拾遺」に言及するのは、その理由による、後には、もう必要もなからうと思ふ。

「宇治拾遺」卷四に、「藥師寺別當の事」がある。藥師寺の別當僧都といふ者、別當はしてゐるが、殊に寺の物も使はずにひたすら極樂に生れることを願つてゐた。さて年老い病して、死に近づいた。一時危篤に陷つたが、少しく快くなつた。弟子を呼んでいふ。

見るやうに、念佛は他念なく申して死ぬれば、極樂の迎へいますらんと待たるゝに、極樂の迎へは見えずして火の車を寄す。こはなんぞ、かくは思はず、何の罪によりて地獄の迎へは來たるぞといひつれば、車に附きた

る鬼共のいふやう、この寺の物を、一とせ五斗かりていまだ返さねば、その罪によりて、この迎へは得たるなりと言ひつれば、我言ひつるは、さばかりの罪にては、地獄に墮つべきやうなし、その物を返してんといへば、火の車を寄せて待つなり、されば疾く疾く一石誦經にせよ。

さう命ぜられた弟子どもは手惑ひして、いふがまゝに、米一石を誦經の料にした。誦經の鐘の聲のするをり、火の車はかへつた。しばらくして、別當は、今こそ極樂の迎へがと悦びつゝ死んだ。

この事を書きしるした「宇治拾遺」の作者は、言を添へていふ、

さばかり程の物使ひたるにだに、火の車むかへ來る、まして寺物を心のまゝにつかひたる、諸寺の別當の地獄の迎へこそ思ひやらるれ、

こゝに、「百物語に恨が出づる」の結びの句を、も一度かきつけてみる。

現にも世中は、借錢程すかぬ物はなきにや。

書く意味は、類似を思ふためでない、相異を明かにしたいためである。

「二代男」の卷二は、こゝにをはる。(完)

（「文學思想研究」第九卷）

この稿に、筆執るはじめ、「二代男」の卷八までの各條に亙つて、かゝる解を試みたいと思つた。饒舌、事多くして、課せられた紙數は盡き、しかもわづかに豫定の四が一に達しただけである。辯を好んだのでない。西鶴の俳諧の自由は、これはあれに據る、あれはこれに據るといつただけでは、つひに意を盡し得ざるためである。なほ、後の六卷に對して、この誌上に、稿をつゞける機のありや、なしやを知らない。

好色二代男考（その二）

一

巻一つ隔てた第九巻所載のものに書き續ける。前稿は「二代男」と「源氏物語」の關係、くはしくいへば「二代男」が「源氏物語」の「宇治十帖」の俳諧化であることを、各卷各章の次を逐うて說かうとした。しかも、わづかに卷一と卷二の解を終へただけで筆を止めた。自分ながら冗漫と思はれる說明がその結果を齎したのであつた。この卷でも卷八に達し得ようとは思はないが、とにかくにその後を承けて卷三の第一話からはじめる。

しかし、卷三の第一「朱雀の狐福」と「宇治十帖」との關係を考へるに先だつて、一事の訂正を前稿に加へておきたい。卷二の第三「髮は島田の車僧」とその原據の謠曲「車僧」との交涉である。

またくりかへすのも異な事であるが、その章では、幇間と遊女の賭事が主題となつてゐた。幇間だちがをかしい限りを盡して遊女どもを笑はせようとする。遊女どもは笑ふまいとする。笑はせたら、笑はなかつたら勝、笑つたら、笑はせなかつたら負、遊女の負にはこれこれの賭、幇間の負にはそれぞれの賭と約束堅く爭ふ。遊女どもはおのが身の上の悲しさなどを念じて、目前のをかしい戲れを物の數とも思はない。かくて幇間方の負となりさうな時、

その一人が小石の紙包みを金めかして遊女に渡して、これで節句の拂ひをしやれとさゝやく。三人の遊女が一様ににこと笑つて、たうとう負となつた。

これが、愛宕山の天狗が車僧を魔道に誘導しようとして、さまざまの所作をしても、車僧は堅く道心を持して墮ちず、天狗はついに行くらべに負けて去つてゆくといふ筋の謠曲「車僧」を原據としてゐることは、「髮は島田の車僧」とある題のうへにも明である。けれど、さうのみ見ることに難のあるのは、西鶴の意が、そのシテワキの關係よりも、ワキの車僧とアヒの狂言の關係に重きをおいたと思はれるからである。ワキとアヒの間には、つひにシテとワキとの間に見られない滑稽戯が存してゐる。謠曲の本文に即いて「車僧」を考へるよりは、舞臺の演出に即いてその能を考ふべきであつた。前稿を訂正しようとするのはこの事であつた。

「車僧」のアヒの狂言は特に溝越天狗の名で呼ばれてゐる。

斯樣に候者は愛宕山太郎坊に仕へ申す溝越の天狗にて候、只今罷出ること餘の儀にあらず、爰に車僧と申して貴き人の御座候。此人いにしへは高位の人なれども、妻におくれ悲しみの餘り、髻切り遁世して、其名を車僧と申す。

かう語り出づる溝越天狗は、車僧の人となりを說き、車僧と太郎坊の行くらべを說く。また太郎坊が車僧と問答して一まづ退散したことを語る。

太郎坊是を聞いて、兎角こは者なり、さりながら、斯程まで思ひ立つて、我道に引入れずは、無念なる事と思ひながら罷歸られて候。されば、我等が如き小天狗にも罷出で、車僧の目前にて、何事につけても、をかしき

事を申し仕り、かの人を笑はせよ、少しなりとも笑はれたに於いては、その散る心をたよりにして、魔道へ引入れうずるとの御事にて候間、まづ是迄罷出でた。急ぎあれへ參り、車僧の容體を見申さばやと存ずる。扨かの車僧はどこもとに居らるゝ事ぢやまで、さればこそ、あれにつゝくりとして居らるゝ。やがて青葉を掛けうと存ずる。

溝越天狗は車僧の側へ行く、

なうなう車僧、車僧。

と呼びかけて、又退いて、

是はいかな事、彼奴は聾さうな、聾ならば最前の樣に問答はせまい事ぢやが、何とぞして、ちと笑はせて見よう。

といひながら、側へ行く。いろいろと戲れかゝる。

車僧、車僧、車僧、車僧。

と呼ぶ。ついてゐた竹の杖の中ほどを手に持つて、

車僧を笑はせう。車僧、車僧。お笑やれ車僧、車僧の鼻の先を、

といひかけて、杖持ちながら、兩の手を後に廻はし、

鼠が子を負うてあなたへはちよろちよろ、此方へはちよろちよろ、ちよろちよう、やちよろやちよろ。

と彼方此方へ行きもし、また飛びもする。

お笑や車僧、車僧。

飛ぶこと三度、なほ車僧の笑はぬに倦んじはてゝいふ。

鹿の角を蜂がさいた程にもない。何とせうぞ、惣じて人間の身は、こそぐる程をかしい事はないと申す。是からちと操つて笑はせう。

いろいろの所作と共に、

車僧を笑はせう、操らうぞ車僧、くつくつ、やくつくつ、ぱくつくつ、やくつくつ、お笑やれ車僧、車僧、ぱくつくつ。

といひいひ、左手を車僧に當てる。車僧扇で打つ。天狗退いて、

あいたあいた、扨々おそろしい人かな。今の程色々の事を仕れども、終にことともせぬ、剰へ拂子を以て某を打擲した。是も定めて禪法でがなあらう。兎角禪法は痛いものと見えた。なかなか某が分ではなるまい。急ぎ此よし太郎坊に申聞かせばやと存ずる。いかに小天狗共たしかに聞け。某かの僧に向ひ、いろいろさまざまに興を盡せども、少しも笑ふべき氣色も見えず、その上車僧の法力の強き事、なかなか千頭の牛の力も及ぶまじくと存じ候間、いかにも然るべき分別をめぐらし、急ぎ太郎坊に御出であれと申し候へ、その分心得候へ、心得候へ。

かうして、天狗は舞臺を離れる。この引くところを以て、幇間どもの戯れるくだりを讀めば、西鶴の着想の端を明に見ることが出來る。前稿たえてこの事に觸れず、最も憎むべき忘却である。

西鶴がその浮世草子の中で謡曲を俳諧化することは、すでに「一代男」にはじまつて、はるかに後年の作に及んでゐる。しかも、「一代男」と「二代男」の間には、「謡曲」に對する態度に於いて、著しい相異がある。どうしても太い線で區劃せねばならぬほどの大いけぢめが見られる。成程「一代男」にも謡曲の構想をそのまゝに寫し、脚色をさながらに移したものもあるが、どちらかといへばその節調を負ふ場合が多かつた。たとへば卷四の「目に三月」の章の起筆、

げにげに花の都、四條五條の、人通り

の如き、その點に於いて、最も多くを教へるものであらう。「げにげに花の都」は「東北」の「色めく有様はげにげに花の都なり」に據り、「四條五條の人通り」は、「熊野」の「四條五條の橋の上」に據つたのであらう。この短き句を二つの謡曲の文句によつて仕立てる西鶴の筆の運びは、やゝ考へられなくもない。西鶴はまづ都の殷賑を書かうとする、往來の女どもの美しい装を書かうとする。その時、ふと彼の頭を掠め、はからずも口の端にのぼるものは、「東北」の一節であり、「熊野」の一節であつたらう。前に引いた「東北」の一句を更にくはしくいへば、

出で入る人跡かずかずの、袖をつらね裳裾を染めて、色めく有様はげにげに花の都なり。

とある。また「熊野」の一句も、更に後をつゞければ、

四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣袖を連ねて行末の、雲かと見えて八重一重、さく九重の花ざかり名に負ふ春の、けしきかな

とある。二つが二つながら都の賑ひ、都人の装の美しさを謡つてゐる。西鶴の聯想はさもあるべき事である。わけ

て謠ひ馴れてゐる節は、要約された形に於いて、あの起筆の一句を構成させたと見てよいやうである。或は知らず、西鶴は楮上にその一句を書きしるすと共に、みづから節附して、朗々と謠ひ出しはしなかつたか。「日に三月」のはじめの方、

げにげに花の都、四條五條の、人通り、むかし見し、山の姿もかはり、長明寺も、こゝへひけ、川原おもての石垣、

の如き、すべて謠ひの節附のゆるされる文の調でないか。起筆用ゐるところの謠の調子をそのまゝにつゞけつゝ筆を執つたとも考へられる。まして、「川原おもて」の一句は、「熊野」の「川原おもてを過ぎゆけば、急ぐ心のほどもなく東大路や六波羅の地藏堂よと伏し拜む」の一節中のものであらう。それならば、西鶴の心はまづ「東北」と「熊野」とを合せ考へ、次に「熊野」にのみ傾いたといへる。

こゝに如上の言をなすのは、西鶴の創作心理を檢討するためでない。「一代男」がいかに多く謠曲の節調を取つてゐるかの一例を擧げようためである。

ところが、このやうな場合は、「二代男」では案外少い。無いのではない、その數に於いて、遙に乏しい。その代りに、能の舞臺面を寫し出さうとするものが多くなつたのに氣づかれる。すなはち西鶴をして、やがて散文能「五人女」を書かせる意圖は、すでに「二代男」にほの見られる筈である。「髪は島田の車僧」はその點を考慮して解すべきであつた。前稿たまたまその考慮を逸したのである。惜むべき忘却でなくして何であらう。

「車僧」に就いて、一つの逸話が傳へられてゐる。ある時、ある所の演能の折のこと、狂言が今日こそきつとワキ

を笑はして見せうといひ出した、ワキは決して笑ひはせねといひ切る。傍の者はたゞの勝負では面白くない、賭けにするがよい、飲まして貰はうといひ出す。かくて、その日の舞臺は觀客よりもむしろ舞臺裏の人々の視聽を萃めさせた。果然狂言の活躍は目ざましかつた。けれど、ワキは笑はない。狂言は何とかして頽勢を盛りかへさねばならない。靜にワキに近寄つて、耳もとで囁いた、買はねばなるまい、酒をと。ワキはにこと笑つた。ワキが笑へば囃子方までが笑つた。わけ知らぬ觀客はなほ高らかに笑つた。ワキはつひに嚴しく所課をおはせられた。

この逸話は甚だしく「髮は島田の車僧」に類似してゐる。西鶴の着想はこれからだとも斷じたい。たゞ西鶴以前の出來事か、西鶴以後の出來事であるかを詳にしない。この時所の不明がさういふ斷言を躊躇する。よし、またその時も西鶴の頃であり、所も西鶴の見聞に入るほどであるとしても、更にまた西鶴がその逸話をとりいれたことを明にしても、なほ「髮は島田の車僧」を一所因に歸することを躊躇する。西鶴の手法は二段の構へ、三段の構への手强さを以て趣向の裏を見せないことが多いからである。やはり前稿でいつた「宇治拾遺物語」の「高階俊平の弟入道算術の事」を一所因と見る。しかも、あの逸話を考慮の外におく今は、なほ更、あの遊女誹間の賭事を、笑ふまいとする女房、笑はせようと算術の妙手を盡す俊平入道の爭ひに交涉させるものと見る。どうしても、さうせねばならぬ程「二代男」の底を「宇治拾遺」が流れてゐると思ふからである。いな、西鶴の全作品を通じて「宇治拾遺」があれにこれに姿を現はしてゐることを注意すべきである。

二

以上を前置として卷三の第一「朱雀の狐福」に入ることが便宜でないかと思はれるぐらゐに、これもまた「宇治拾遺」と交渉を有つてゐる。

「朱雀の狐福」はお龜屋店由來記ともいはゞいへる。踊子の師匠お龜九兵衛が時雨の野道を急ぐ時、七十ほどの老婆の濡れ惱むのを見て傘を貸してやる。老婆はお禮心に、島原遊女の祕密を敎へる、見通しのいろいろを聞かせる、更にまた噂町の日記と上書した手帳を與へる。九兵衛は島原へ往つて、その祕密を素破拔いては口留の物をしてやり、噂町の日記を種として人を脅して物をせしめる。

ほしき物をとつて、此所の御髭の塵を取やめて、白川の流れの末に、萬代を祝ひの水、お龜酒屋となる事、日比上戸のたのしみ。

これが結びの言葉である。その老婆とは何人、實は島原狐であつたといふ。「朱雀の狐福」と題する所以である。島原狐の名往々にして文獻に見えてゐる。お龜酒屋の名また見るところがあらう。或はお龜酒屋繁昌の由來にはかういふ噂もあつたらう。おそらく西鶴がその巷說をとつて趣向を構へる時に、「宇治拾遺」の「利仁薯蕷粥の事」の輪廓を假り用ゐたのであらう。

正面から見れば、「朱雀の狐福」と「利仁薯蕷粥の事」との間には別に緣もゆかりもないやうである。しかし、例の捻轉の手段。俳諧の手法よと考へながら、少しく斜に、やゝ横におし曲げて見ると、交渉の跡の幾筋かを數へられよう。九兵衛が意外の幸福を得ること、かの老婆がさまざまの遊女祕密を話し、いろいろの見通しを語り聞かせるがその一つである。

といふ時、はるかなる草村より、まだらなる小狐の、彼人を見て、にげさらずよろこびなす、姥目の色かはり、それとつれて、むかうの穴に入て跡なし、さては兼て聞つる、島原狐なるべし

と狐の正體を見せるのもその一つである。話を時雨の野道、老婆との邂逅にまで導く新隱れ里の記事。人あつて龜九兵衛に誘はれて、上京の人々の遊山所、新隱れ里と呼ばれてゐるさる方の黑谷の下屋敷に行く。昨日の遊び騷ぎのあとの座敷のかなたには、御酒機嫌で縛られた女小姓がゐた。その人は直に縛を解いてやる。その人は案內されて御內證間に入る。八疊敷の四隅に炬燵を四つ切り、同じ色の蒲團を懸けて枕を一ところへ寄せて噺をするやうな構へになつてゐる。火のあるのを幸にその人は九兵衛と枕近寄せてもの語る。そこへさき程の女小姓が薄茶などを運んでもてなしをするといふのがその一つである。

九兵衛は突然その屋敷の主に命ぜられて、急な文づかひで島原へゆかねばならなかつた。時の鐘に驚いて、人々に暇乞ひもせず走りゆくといふのもその一つである。かの九兵衛が島原狐に逢つたのは、急ぐ途中の出來事であつた。

以上は「狐」「容赦」「見通し」「煖もり」「急使」「突然の出立」および「意外の恩賚」の幾つかに要約される。そのやうに要約したものを「利仁薯蕷粥の事」に索めることは極めて易い。

利仁は芋粥を飽くまで食べたやと私語する五位を誘つた。ほんのそこそこと思ひの外、京から敦賀までといふ意外の旅であつた。五位はもとより供もなく、利仁もわづかを具するばかりであつた。こゝに「突然の出立」がある。三津の濱に狐の走り出たのを見た。利仁はよき使が出て來たと追ふ。

利仁狐押しかくれば、狐身を投げて逃ぐれども、追ひ責められてえ逃げず、落ちかへりて、狐の後足を取りて引上げつ。乘りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、いみじき逸物にてありければ、若干も延さずして捕へたる所に、この五位走らせて息つきたれば、狐を引き上げていふやうは、わ狐、今宵の中に利仁が家の敦賀に罷りていはんやうは、俄に客人を具し奉りて下るなり。明日の巳の時に、高島邊に男ども迎へに馬に鞍を置きて二疋具してまうで來といへ。もしいはぬものならば、わ狐只心みよ、狐は變化あるものなれば、今日の中に行きつきて言へとて放てば、荒凉の使かなといふ。よし御覽ぜよ、罷らでは世にあらじといふに、早く狐見返り見返りして前に走り行く。能く罷るめりといふに、あはせて走り先立ちて失せぬ。

こゝに、「狐」と「容赦」と「急使」があつた。

その翌朝巳の刻、敦賀の家の者どもが利仁を途に迎へる、二疋の馬も牽いて來た。その中の一人が、昨宵北の方に狐が憑いて、主の命を傳へたのだといふ。こゝにやゝ形をかへた「見通し」があつた。

その夜五位は利仁の家に宿る。寢所には綿四五寸ほどの直垂があつた。自分の薄綿のにひきかへて、その暖さ氣のぼせもする程であつた。そればかりか、肉障ともいふべき人さへ侍つてゐた。こゝに様かへた「煖もり」があつた。その朝芋粥のもてなしがあつた。五石ばかりの釜五六に滿ちてある芋粥に、五位はほとほと飽いた。彼は逗留月餘、樂しさの限りを盡し、數々の贈物を得て都に歸つた。こゝに「意外な恩賚」があつた。

このやうな比較は、わたくしをして「朱雀の狐禍」が「宇治拾遺」に關係することを斷ぜさせる。けれど、まだこれだけては、牽强の辭を弄する嘲を免れないかとも思はれる。それならば、「二代男」の他の章と「宇治拾遺」の

他の章との幾つかを比較すべきであらう。その比較に就いては前稿すでに幾つかを擧げてゐる。後章また幾つかに觸れもしよう。しかし、それだけでは依然として認められない内輪話とも聞かれよう。「二代男」を離れて、西鶴の他の作品に、「宇治拾遺」の意識が強く動いてゐる例證を指示すのが恰好であらう。

「本朝二十不孝」の卷二にそのものがある、「人はしれぬ國の土佛」である。伊勢の國鳥羽の鍛冶屋の一人息子藤助は、親の諫も聞かずに船乘となつたが、大風に吹流されて異國に漂着する。おそろしい奇獸横行の域であつた。また風荒れて遙なる磯邊に流される。磯には敷詰めたやうに玉が光つてゐた。人々は下り立つて拾ふ、社人が纇はれて、拾ふな、早く舟に乘れと諭す。人々は敎にまかせて舟に乘つたが藤助のみはなほ玉を拾ひつゞける。その時急に風が起つて舟はかなたへ走り　一途に伊勢の國に歸つた。事の始終を聞いた藤助の親の悲歎は甚しい　やがて二人ともはかなくなつた。さてまた一方、島に殘つた藤助は數多の唐人に圍まれて、鐵門の堅い家に入られ、銅の柱に逆樣に吊揚られて、手足の筋をとり、生油を絞られた。弱れば生藥を與へて、生けつ殺しつする。日數を經るうちに日本から渡唐の僧が來た。昔の態は失せて眼ばかり動く藤助は、右の小指をくひきり、左の袂に、自分は伊勢鳥羽の藤助といふ者、こゝに流され來ての憂身かなし、この所は纐纈城とて懼い國なれば命をとられ給ふなと書きつけて見せる。僧は驚いて立退き、他所で修業して歸朝した。鳥羽の里に來てこの物語をした。聞く人が皆藤助不孝の罰といつた。

こゝに見える纐纈城は「宇治拾遺」の「慈覺大師纐纈城に入り給ふ事」の纐纈城である。渡唐の僧はその慈覺大師を假りに用ゐたやうである。

慈覺大師佛法を習ひ傳へようと唐土に渡る。折から唐の武宗は佛徒を殲滅しようとする。大師は他國人の故に、わづかに赦されて追放された。他國へ逃げた大師は、築地高く廻らした門内に入る。ずつとの奥の方で人の呻吟する聲が聞える。內へ入つてみると、人を縛つて吊り下げて、下の壺に血を滴し入れてゐる。大師はそこに横つてゐる痩せ衰へた人々に訊す。そのうちの一人が、木の切で土の上に、こゝは纐纈城、こゝへ來たる人には、まづ物言はぬ藥を喰はせ、次に肥ゆる藥を喰はせる、その後高い所へ吊り下げて、所々を刺し切つて血をとり、その血で纐纈を染めて賣るのだ。食物の中に胡麻ほどの黑い物があつたら、捨てるがよいと書いた。大師は敎に從つた。さて佛を祈願した、靈犬來つて門外に導き、辛うじて身を全うすることが出來た。

もと佛法の奇特を骨子とした話を、不孝の懲戒を主題とした話に仕立てなほしたればこそ、筋も趣も少しは異なるものゝ、とにかく、西鶴がこれを利用した痕跡が明瞭であらう。「二代男」の場合も同じ態度であるが、たゞ俳諧化の度が少し多いために、わたくしだちは一寸迷はされるのでなからうか。

三

「二代男」と「宇治十帖」との關係を主題とするこの稿としては、ふさはしからぬほど「宇治拾遺物語」との關係を說いた。けれどさうした結果は、「朱雀の狐福」から「利仁薯蕷粥の事」の分子をおし退けて、「宇治十帖」の分子の所在を容易に見せることにならう。その分子はたゞ一つ、「橋姫」卷以來頻りにくりかへされるもとの女三宮の侍女、八宮の老侍女、尼となつた辨のおもとである、これが島原狐の老婆と關係を有つだけである。これだとすれ

ば、あの九兵衛は「宇治拾遺」の五位であると共に、「宇治十帖」の薫大將に當るわけであらう。尤も、その辨はすでに卷一の「親の貌は見ぬ初夢」で古遺手のおくにとなつてゐた。西鶴が原據の一人を二人にかへ、三人にかへ、二度用ゐ、三度用ゐる例は多い、別に不思議はないやうである。

薫は辨によつて實の父を知つた、自分の悲しい運命を知つた。また薫は辨が保管してゐた實父と母とのいたましい戀文を手に入れた。「親の貌は見ぬ初夢」では、その手紙が諸國諸分の聞書となり、こゝでは噂町の日記となり、また手紙としてその面影を殘してゐる。九兵衛が持參の手紙から話は女郎の封じ文の由來話にまで及んでゐる。

この推定は「二代男」が「宇治十帖」の俳諧化したものであり、少くともどこかで相觸れてゐるものとの前提に於いてのみ成立する。さもない限り、原據を討ねるなら、「宇治拾遺」で十分な筈である。殊に重かるべき「宇治十帖」との關係が、も一つのものに比して輕いのが怪しまれもする。しかし、これも西鶴の癖のやうである、彼が作品に對して、ある意圖を有つとすれば、その一部の首尾の部分では強く、他の部分では弱い。殆んど彼の方程式だともいへる。これもまたその一例として見られる。それはそれとして、今いふが如き前提の許されるか、許されぬかを問題にするのは、あまりに遲く、あまりに早い。前稿のはじめに於いていふべく、或は章を逐うて全部を果して後にいふべきであらう。勿論いさゝかの言は前稿の冐頭でいひもした。たゞ「一代男」が「源氏物語」の俳諧化であるとの前提に立つて、その前提の許容される所以に就いては殆んど及ばなかつた。今もまた依然としてそれを問題としない。しばらく一挿話を以て一時の辨にかへる。

去年の夏、所用を信濃に果したわたくしは一夜を汽車の中に過した。搖られ搖られて夢も結びあへぬ曉がた、ゆ

くりなくすぐ前の寢臺に村岡典嗣君のゐるのを見た。久濶を叙するの後、君は尾崎紅葉が「源氏物語」を讀み耽つてゐたこと、讀んだ本は「日本文學全書」であること、欄外には朱筆縱橫或は評語を附し、或は感想を錄してゐることを語られた。この章を讀んでゐる時、窓外に日淸戰爭の捷報の號外の聲が喧しなどとも書いてあるとも語られた。君は紅葉手澤の書を手に入れられたのである。君はまたその結果あの「多情多恨」が作られたのだとも語られた。汽車は新宿に達して、二人は別れねばならない。君は仙臺に歸られたのである。後月餘「河北新報」を贈られた。「紅葉山人と源氏物語」と題する文が連載せられてゐた。わたくしは更に蒙を啓くことが多かつた。

測り難きは作者の心である。「源氏物語」の作者は「長恨歌」を前に据ゑて「桐壺」の卷を爲り、「平家物語」の作者は「桐壺」を下に構へて「小督」を爲り、紅葉はまた「桐壺」に興を得て「多情多恨」を爲つた。三者枝を連ねて、花葉とりどりの趣をなす。讀む者はその關係を忘れて、その趣のみを愛さうとする。紅葉と「源氏物語」、その間の消息を知らねばこそ、「多情多恨」と「桐壺」との關係を、去年の夏まで氣づかなかつたのである。愛妻に死別れて明けても暮れても思ひ惱むあの主人公が、更衣にさき立たれて歎きに沈む桐壺の帝から出てゐることを夢にも思はなかつたのである。迂濶千萬なみづからを嗤ひながら、わたくしは何處かに西鶴手澤の「源氏物語」がないだらうかと夢のやうなことを考へる。幾多の問題はそれによつて解決されるからである。

「源氏物語」も種彥の「田舍源氏」、また紅葉の「多情多恨」ぐらゐに飜案されたなら、彼此の關係に就いて、とかうに惑はずにも濟まう。けれど、西鶴が飜案する段となつたら、どうしてそのやうな素直な手口を見せよう。捻りつ、曲げつ、もとの姿をかへて喜ぶ俳諧心のうへに、古典といへばとかくに偏びがちな貞門に楯つく談林心の持

主の彼であつた。一部始終の長篇を避けて、短篇の構成に專念する彼である。或時は一卷讀餘の感をとり、或時は一節一條の事に託し、一部の作意を光みし、ずたずたと分裁して、勝手に仕立直さうとする。讀む人がそれに氣づくもよし、氣づかぬもよし、氣づけば原據と照して俳諧的技巧を見るがよい、氣づかねばその上に見せた現實描寫の腕を買ふがよい、とでもいふのが彼の肚であつたらうか。わたくしは、と見て「二代男」と「宇治十帖」の關係を推定する。と思うて推定の自由を心掛ける。

考へれば考へるほど厄介なのが俳諧の手法である。「炭俵」の「梅か香」の卷に

奈良通ひおなじつらなる細基手

といふがある。細基手が小資本を意味することといふまでもない。奈良の地に物産が多い、小資本の商人、奈良に仕入れて賣り、賣つてはまた奈良に仕入れに行く。奈良通ひとはその義である。この句は、前句

娘を堅う人にあはせぬ

に附けてゐる。二句のかかり、彼奴もわいらも同じ程の小商人なのに、お姫様ぢやあるまいし、彼奴、娘を人にあはせようともせぬと噂し合ふ體であらう。して見ると、奈良通ひの語の前句を承けたのは、必ずしも奈良に仕入れに行くだけでなく、何とはなしに戀のけはひを點じたのであらう。ふと戀を思はせて、あらぬ活計の趣に轉ずる。そこのかすかな動きにさやめきに興を寄せたのであらう。しかも、奈良通ひの言葉に戀を託するのは、その頃の淨瑠璃の外題にさへ見ゆる河内通ひの聯想があるためである。俳人の心の細やかさは、この通ひを緣として、「伊勢物語」を原據とする戀物語を想ひ起させようとする。これは蕉風の世界のことであるが、貞門にもそれがある、談

林に於いては殊に甚しいものがある。その手法を縱横に弄する西鶴の轉合書に於いて更に激しいものがあらう。「一代男」「二代男」と「源氏物語」の關係に於いて、その手法が頻りに用ゐられてゐよう。

筆たまたま「伊勢物語」に及んだ。筆ついでにかいつける。「一代男」にも、「二代男」にも、その他にも、西鶴はしばしば「伊勢」を題材としてゐる。例の俳諧化の手口を見せてゐる。しかも、「伊勢」の構成の章がもともと短篇の集りだけに、西鶴は殆どそのまゝに用ゐてゐる、從つて轉用のあとは極めて瞭(あきらか)に見うけられる。それでも、時に氣づかずに濟す場合もあらう、たとへば、「好色一代女」卷三「妖孳寛濶女」の一節、

自は生國大和の十市の里にして夫婦のかたらひせしに其男日、奈良の都に行て春日の禰宜の娘にすぐれたる艶女ありとて通ひける程に、偖に胸動かし行て立聞せしに、其女切戸を明て引入、今宵はしきりに眉根痒ぬればよき事にあふべきためしぞと、恥通風情もなく細腰ゆたかに、靠りをる所をそれはをれが男じやといひさま、かねつけたる口をあいて、女に喰つきし

が、あの業平河内通ひの原據である、風吹けばおきつ白波と詠んだもの妬みせぬ女の俳諧化であることを、十人が十人ながら受けいれてくれないやうである。あの「伊勢」でさへさうだとしたならば、まして「源氏」の俳諧化を討ねて、夢中語をなさなかつたら、それこそ僥倖であらう。

四

「二代男」卷二の第二「欲捨て高札」は吉原の太夫西尾に就いて語つてゐる。持參金は欲しい、しかも西尾ほどの

女であつて欲しいとて、仲人商賣の嬶を驚かす男のことがまくらになつてゐる。そこから、話は西尾の美しさと、欲の世の中との二筋に伸びてゆく。その欲の世の中に、客が殘した紙入やら、何やかやを高札に書いて、持主を探す殊勝な舟人がゐた。客は金よりも中の遊女の手紙に執着があつて請取りにくる。舟人は客の問にまかせて、われもとは宇都宮の者であるが、西尾を慕うて通ふこと二年まだ首尾せぬうちに、勘當うけてこの始末、せめて、廓に通ふ人の姿を眺めて思ひも晴し、また行人、待人の心を思ひやつて舟を早めて漕いでゐると語る。客は西尾の馴染客、それを聞いて是非戀の仲立せうと告げる。さうして乘り出す隅田川の舟の中、雷雨に波荒るゝこと一しきり、漸く靜まる水の上に遊女の幻を見る。西尾の姿であつた。客は言葉をかける、幻の西尾はそ知らぬ顏してゐる。舟人はわが思ひ入りのほどを見せうと招けば頷く。笑へばあひをする。そして姿を消した。客の大盡はいよいよ憐を催して、太夫に舟人を引合はせる。

西尾が萬事のこなし、かたじけなさも、とうとさも、うれしさも、ひとつにからげて皆男泣にぞこの話の中心は西鶴の作品に於ける類型的のもので、早く「一代男」卷五の「後は樣つけて呼」に見えてゐる話の筋である。たゞ彼に缺けて、これにのみあるが、怪異分子である。

わたくしは前稿では努めて「二代男」と「宇治十帖」との關係に專らであらうとした。たまたま筆の他に及んだのは、どうしても避け難きものにのみ止めた。あれに擧げた外に、なほ幾つかの原據がある。しかし、この稿はまづはじめに「宇治十帖」以外のものを指摘して、それを片寄せることに於いて、おのづから「宇治十帖」關係のものを露はさうとする。おのづから前稿に於ける態度と異なるものがあらう。

「欲捨て高札」を讀み下すやがて、幻のやうに現はれるのは謠曲「隅田川」の舞臺である。そこには人商人に誘はれた獨子梅若丸を尋ねるシテの狂女がある。それに同情して舟に乘せてやるワキの渡守がある。舟は彼方へ着く。ワキはシテを介抱して梅若丸の墓の前へ案内する。シテもワキも念佛を唱へる。ふと墓の中でも念佛の聲が聞える。シテは聞えたといふ、ワキも聞えたといふ。シテはワキに母御一人念佛を申せと勸められて、南無阿彌陀佛と唱へる。墓の中で、子方の梅若丸が南無阿彌陀佛と唱へる。唱へながら、子方は墓の造物の中から出る。

地「聲の內より、幻に見えければ、シテ「あれはわが子か、子「母にてましますかと、地「互に手に手を取りかはせば、又消え消えとなり行けば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ隱れつする程に、東雲の空も、ほのほのと明け行けば跡絕えて、

墓の前に歎きしをれるシテの姿のみが殘る。

この幻の舞臺から、も一度西鶴の本文にかへれば、シテワキを一人に合はせて、また二人に分つたのが舟人と客だとも見られる。梅若の幻を西尾にかへたのだとも考へられる。その南無阿彌陀佛の聲をば、

水押に立あがりて聞ば、歌うたふやうにもあり、正しく初山が上調子の聲とも聞え、市川流の琴かとうたがはれ、

といふ音曲唱歌にかへたのだとも思はれる。

「隅田川」の幻影を一まづ拂ひ去つたあとに、なほ「舟辨慶」の幻影も殘らないのではない。たゞこれは「隅田川」に比してほんのかすかな幻影に過ぎない。こゝには問題にしない。

さて、また現はれるのが薫の大將の俤である。底意は必ずしもさうでなかつたが、とにかく中君を匂宮に讓つた態度からいへば、隨分慾捨てゝ高札を掲げかねない人とも見られる。すなはちあの舟人から薫の俤が髣髴させられる。それならば、西尾はさしむき中君でなければならない。では、あの客は匂宮であらうか、となるといさゝかの疑念が起る。匂宮がいつ中君と薫とを引合はせたらうか。しかし、さう考へるのは、餘りに素直に「宇治十帖」の筋を迎へるわけ、餘りに俳諧のない往方と首傾けられる。その時ふと胸に浮ぶのが「早蕨」の巻一節である。

薫は思ふところあつて、中君を匂宮に讓つた。中君は迎へられて、宇治の山里を棄てゝ京の二條院に住ひしてゐる。薫はをりをりこれを訪づれる。ある時のこと、薫はしばらく匂宮と語らうて後、中君の居る對の方に參る。女房は御簾の外に褥さし出して薫の席を設ける。女房はまた中君に向つて、薫を疎々しく扱ひなさいますな、今日しも日頃の厚意の御禮を申しなさるやうにと勸める。中君はなほ人傳ならず話しかけることを遠慮してゐる。ところへ外出姿の匂宮が見えた。匂宮は何故薫を他人行儀で扱ふかと中君を咎める。薫の以前の後見ぶりは氣にかゝる筋であるが、なほうち解けて昔話しをするがよいともいつた。

などか、むげにさし放ちては出しすゑ給へる。御あたりには、あまりに怪しと思ふまで、後やすかりし心寄を、わが爲はをこがましき事もやと覺ゆれど、流石にむげに隔多からむは、罪もこそ得れ、近やかにて昔物語もうち語らひ給へかし、

といひながら、匂宮はなほ中君と薫の間に疑念を挿んでゐる。

さはありともあまり心ゆるびせむも、又いかにぞや、疑はしき下の心にもぞあるや

と匂宮がくりかへしいふのには、中君もほとほと困じはてた。

薫と中君と匂宮の三人を繞る微妙の心理を、「早蕨」の末節に示して、それがどう發展するかは、けだし「宇治十帖」の讀者の最も興味を惹くものであらう。けれど、西鶴の興はそこにはない。筋をどう利用するか、趣をどうかへるかにある。從つて、何の遠慮もなく、匂宮を西尾の馴染客にかへ、「後には樣つけて呼」の世之介の態度を持つ粹客に仕立直させることが出來、また中君を早速に舟人を迎へる西尾にかへて、吉野と同じく女郎の本分を果す名太夫に飜すことが出來るわけであつた。

「欲捨てゝ高札」と「宇治十帖」の關係はこれであらうと思ふが、それならば、あの西尾の幻は、「隅田川」からのみ來て、「宇治十帖」には交渉のないことであらうか、さうは思はない。同じ「早蕨」に、薫が中君を見る度に、今は亡き人である大君を思ふことの頻りであることをいつてゐる。相似るふしが多いからである。そこから匂宮に譲つたことを悔いる下心も起るのであつた。中君のまだ宇治にゐるほど、薫は、

いみじく物哀と思ひ給へるけはひなど、いとよう覺え給へるを、心からよそのものに見なしつると思ふにいと悔しく思ひ給へれど、かひなければ、その世の事かけても言はず、忘れにけるやと見ゆるまで、けざやかにもてなし給へり、

といふ事もあつた。後の卷々にも、同じやうな事がくりかへされてゐる。なほ、さきに引いた「早蕨」の一卷の中にも、中君また賴む人として、薫を大君に擬する意のあることをいつてゐる。

かの人も思ひのたまふめるやうに、古の御かはりとなずらへ聞えて、かう思ひ知りけりと見えたてまつるふし

もあらばや

かういふ筋から幻の想を構へるのが、西鶴の俳諧の慣手段でないかとも考へる。

五

第三の「一言聞身行衛」は五音の占を聞いては萬の事見通しといふ伊勢の座頭右望都が、抜參りの娘の五音を聞いて、あの少女は行すゑ必ず遊女となると語つたといふ話にはじまる。つぎに新町のわびしい方面の女郎と客との話になる。この描寫が作者の最も力を籠めたものであらう。最後にまた右望都の話にかへる。伊勢の彥六大夫が右望都と同道して新町に遊んだ。その夜の遊女はあの折の少女であつた。少女はあの時座頭の語るのを聞いて、旅なればこそかうもあるが、國元の親は人の三十人もつかふ有德人なのをと腹立しく思つたが、人の身の上ほどわからぬものはないと話す。彥六は今更に右望都の五音の占の上手に驚くと共に、その女を氣の毒がつて身請してやつたとのことである。

一章の中心である新町の描寫は、「二代男」に於いて、極めて重要なる要件であるが、しばらく片寄せて五音の占をのみ問題とする。西鶴の作品にはこの種の話が多い、盲者の耳根神徹して、眼ある者の聞かぬものを聽くことに興味を持つのは、西鶴その人の上に聯關して甚だ興味あるものであるが、その理由に就いていふことを避けて、まづ「宇治十帖」とどんな關係があるかを考へる。

「宇治十帖」には一人の盲者がなく、五音の達人がない。表面の關係はつひに見出し難い。尤も、この占を易術に

かへたほどの話は「宇治拾遺」の「易のうらなひして金取り出したる事」に見出される。易術の上手によつて、富める家の娘が貧しさを續け、また易術の巧者によつて貧しさから救はれる話である。西鶴の筆と相似てゐることが多い。わづかながら、二者の交渉を思はせられる。

易の上手が旅の宿を求める、やゝ荒廢した大い家である。家には娘一人がゐた。翌朝出でゝ行くのを、娘が留めて負債千兩を拂つてゆけといふ。易者の從者どもはあざみ笑ふを、彼はおしとゞめて、しばらく易の占をする。さて娘に御身の親は易をせられたかと問ふ。易か何か知らないが、そのやうな事はしたといふ。また、どうしてわたしに千兩の貸があるといふかと問へば、娘は十年の後の今月今日、こゝに宿る旅人に千兩を貸しておいたから、拂つて貰へとの親の遺言を守つて、貧しさを忍んでゐたといふ。易者は娘の親が易の上手で、十年後に自分がこゝに宿つて、隱してある金の在所を娘に教へる運びになることを悟つてゐたことを知つた。そして彼はその在所を娘に教へてやつた。

この話はもと「晉書」に見えてゐる隗炤の故事に基づく。從つて「宇治拾遺」以外にも載せられてゐるが、前にもいつた理由で、この話が西鶴の據りどころであるならば、その據りどころを「宇治拾遺」に歸すべきであらう。「一言聞身行衛」から「宇治拾遺」關係のものを除いたあとに、殘るのは「宇治十帖」關係のものでなければならない。西鶴は「宇治拾遺」關係のものに何を撮合せて、あの一章をなしたのであらうか。占にもせよ、易にもせよ、それ等と結びつくべき何を見出したのであらうか。わたくしは「宿木」の卷の中君の豫想的中といふ事件でないかと思つてゐる。

父八宮に別れ、姉大君に別れた後の中君は宇治の故宮にわびしくも住ひしてゐた。わづかに戀人匂宮と戀人ならぬ賴もし人薫の訪問のみに慰められてゐた。大君の喪も過ぎたなら、京へ移るやうにと匂宮は勸める。薫も同意する。しかし、中君には行末の懸念があつた。匂宮の邸に移り住むがために、却つて世の笑ひぐさになることもと思へば、はかばかしくその用意にとりかゝらなかつた。

二月の朔日頃とあれば、ほど近くなるまゝに、花の木どもの氣色ばむも殘りゆかしく、峰の霞のたつを見棄てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寢にて、いかにはしたなく人笑はれなる事もこそなど、萬につゝましく、心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。

けれど周圍の事情は移住を決行させる。わたましの夜七日の月影ほのかなる京への途は遠い。車ながらに思ひ悩むのはまたしても行末の不安であつた。

ながむれば山よりいでゝ行く月も世にすみわびて山にこそ入れ

さまかはりて、つひに如何ならむ、とのみ危く、行末うしろめたきに、年頃何事をか思ひけむとぞ、取返さましきや

事は「早蕨」に見えてゐる。京にはこの不安を裏切るもののみがあつた、限りなき匂宮の熱愛であつた。けれどそれも束の間、中君は匂宮と六宮の仲を耳にした。事は「宿木」に入つて、豫想の的中にのみ運んでゆく。六宮との結婚はつひに成立した。中君の心には悔恨の蛇が幾つとなく頭を擡げる。何しにこゝには移つたらう。何しに父宮の仰せを守らで、宇治を離れたらう。今更に思はれるのは、薫にも許さなかつた大君の心のゆかしさのみであつた。

されればよ、いかでかは數ならぬ有様なめれば、必ず人笑へに憂事出で來むものぞとは思ふ思ふ過しつる世ぞかし、あだなるみ心と聞きわたりしを頼もしげなく思ひながら、目に近くては、殊につらげなる事も見えず、哀に深き契のみし給へるを、俄にかはり給はむほど、いかゞは安き心地はすべからむ、たゞ人の中らひなどのやうに、いとしも名殘なくなどはあらずともいかに安げなる事多からむ、なほいと憂身なめれば、つひには山住に歸るべきなめり、など思すにも、やがて跡絶えなましよりは山賤の待ち思はむも人笑へなりかし、

西鶴がこれを「易のうらなひして金取り出したる事」に結ぶものは、今引くところの初句、「さればよ」に籠る心を重く見るためであらう。そこに彼一流の手品を弄んだのであらう。わたくしはかういふ見解を以て、「一言聞身行衛」と「早蕨」「宿木」との關係に對する。尤も、あの遊女が身請された後のわびしい住ひ——杉の門をさしこめ、小女に物讀おしへて、色も情も、魚類の味もしらぬ身となりぬ、是もましなるべし——をも、中君が宇治にも歸らず、さりとて匂宮の寵を專にしかねる結末から來たとまではいはうとしない。

六

第四の「樂助が靱猿」は島原の薫の替衣裳が主題になつてゐる。女郎どもが伊勢講を結んで百二十末社の集る中へ、巾着あるきり明けてやる大盡があつた。なほも羽織はいふまでもない。脇差は引舟に、印籠は禿に、着物は男どもに取らして赤裸になる。遣手は緞子の下帶にとりついて守袋にすると引ほどくほどの亂騷ぎ、さて袖の小い裾の長い借着も思はしくなく、中京まで取りにやる間も見苦しがる時、今まで軒端の花眺めてゐた薫が禿に囁いて御

紋付の着物、羽織、中脇差まで持參させて、もとの大盡姿にさせる。薫は外に二人の客があつたが、どれにも替衣裳を拵へおいて、自然の御用に合はせたといふ。

この話は題に「靭猿」と銘うてばこそ、それと解せられるが、さもなければあの狂言を聯想しさうもない。それを聯想せよといふのが、西鶴の要求である。或は、外の場合では西鶴は要求することなくして、勝手にこれ程のあしらひをしてゐよう。いふところの俳諧的態度であり、俳諧的手法であらう。もとより、こゝにも狂言の原形をそのまゝにとり入れない、一轉し一捻して用ゐてゐる、俳諧の實がそこに見られる。

大名が猿曳の猿を見て、その皮で靭を拵へたくなる、猿曳に生皮をよこせと命ずる、猿曳は泣く泣く殺さうとして、殺しかねる。さすがの大名も憐愍を催して赦してやる、赦してやるどころか、はては扇をも與へる、着てゐる物までも與へる。この狂言の原の形に見る大名が大盡か、猿が大盡か、猿曳が薫か、それと決しかねるところに、捻轉がある。あれとこれとを置きかへ、入れかへたところに、變轉がある。俳諧とはこの謂である。

しかし、それだけでは西鶴の藝としては、いつもの癖としては少しあさ間に過ぎる。前の「髪は島田の車僧」の如き、「車僧」の看板は掲げながら、中には立派な僞りがあつた。こゝの「靭猿」またそれでなければならない。「宇治十帖」との關係の潜在がゆるされる理由である。

「宇治十帖」に於いて、惜しげなく物を呉れる大盡の原形があらうか。匂宮に戀を譲る薫か。隨分一事から二三話を仕立上げる西鶴であるが、こゝでは聊うるさ過ぎる。他に討むべきであらう。おもふに大盡の方でなくて、衣裳をさし出す太夫の方にあらう。しかも、その人は依然として薫、あの太夫と名を同じうする薫の君である。

「宿木」の薫はいつしか中君を戀ひ慕ふやうになつた。それの道ならぬ事を辨へ知るだけに、その心を抑へて、もとの後見人としてのわれにかへらうと努力する。と思ふほどに、中君に伺候する女房だちの衣の萎ばめるのをわびしく思つた。早速に母女三宮のもとに參つて、何か用意の衣類をと所望する。白いのはあるが染めたのはない、すぐにも染めさせうといふのを、態々染めなくともと斷つて、係の者にいひつけて、女の裝束幾くだり、淸げなる細長など、まだ染める絹綾などもとり揃へて中君のもとに贈つた。中君自身の料には、薫みづからの料に當てゝおいた紅の擣目に、白い綾を數多重ねたのを贈つた。何にせよ、匂宮は身分が身分故に、中君を思ひながら、かう細かい事にまでは氣がつかない。それを思ひやつて、斯うする薫の心は有難く珍らかな事であつた。わけて六君に壓されがちの今の中君である。召使ふ女の童の身なりの鮮かさでないのを折々見るにつけ、六君方の花やかさに比較されるのを心苦しく思つてゐた。それを推察して薫は衣を贈つたのであるが、わざと仰々しい特別仕立にしなかつた、並々でない用意であつた。

中納言(薫)の君はいとよく推しはかり聞え給へば、疎からむあたりには見苦しくくだくだしかりぬべき心しらひの樣も、侮るとはなけれど、何かは事々しくしたて顏ならぬも、なかなか覺えなく見咎むる人やあらむと思すなりけり、

薫は又あらためて中君に衣類を贈つた。今度は小袿を織らせ、綾を織る料をも贈つた。もと薫も匂宮に讓らぬ貴公子、それがかういふ優しい心を有つやうになつたのは何故であるか、畢竟八宮の感化であつた。

この君しもぞ、宮にも劣り聞え給はず、樣殊にかしづきたてられて、かたはなるまで心傲もし、世を思ひすま

して、あてなる心様はことなければど、故親王（八宮）のおん山住を見そめ給ひしよりぞ、淋しき所の哀さは様ことなりけりと、心苦しう思されて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情をもならひ給ひにける、いとほしの人ならはしやとぞ

西鶴はこの薫の君の心用意を、廓の世界に移して、太夫薫の替衣裳としたのである。さて、西鶴の文は次の一節を以て結んでゐる。

一切の女郎萬事は男次第也、物をやらぬのみか、物日をさへろくには勤ず、なしみもないのに節句を賴むの、庭錢はやめにしやと、ありきたりたる祝儀も、そこそこにして、さりとはおかたとをもひも末にはならぬ、人皆かしこ過たる世也。

いふところは太夫薫に替衣裳の用意あることを稱揚すると共に、薫をして、女郎をしてさうさせる者は遊客の心がらである。遊客は宜しくその心を持つがよい、しかも、昔はあつた、今はないとの咏歎である。知らず、西鶴はこれを引くところの「宿木」の一節、薫中君に衣を贈る條のをはり言葉、作者の感想から誘導されたのであらうか。もしさうだとしたならば、彼と此との行儀の着眼點の相異が面白く讀まれる。果して然るか、いなかを知らない。

七

卷五「敵無の花軍」は花揃卯月八日の吉田屋の大寄に就いて語る。集る者太夫職二十人、かりそめにもこまへな事の嫌ひな越後の竹六の催であつた。ずらりと並べた花桶には、野田の藤、生玉の若楓、佐太の芍藥、淺澤の杜若

御堂の白牡丹、野里の美人草、玉造の二重芥子、木津の大手毬など數知らぬ花の中に、さし合ひの茶引草、身上り草などいふも交へて、釋迦誕生の花園もかうかと思はれるほどであつた。竹六は宿の主をつれて舍利寺に參詣にゆくから、相手なしの中間遊びをするがよいと云ひ棄てゝゆく、その後の座敷の女郎どものさもしさ、話すことは身過のかなしい事ばかり、さては客の譏訴、どこに太夫の氣品があらうかと驚かされる。

この梗概からでも、「敵無の花軍」といふ題に二重三重の意味の籠つてゐるが知られる。敵は「一代男」に「てきもをかしき奴」とあるてきである、客を意味する廓詞である。この題では、花軍の緣によつて、しばらく仇敵の義に用ゐてゐる。花軍といへば、すぐ唐の玄宗の風流陣が思ひ出される。こゝの文の中にも、「彼花軍は見ぬもろこしの事」と見えてゐる。西鶴にこの用例が多い。「大矢數」にいふ「花軍敵も味方もから詞」の唐詞によつて、依つて來る所は、おのづから明であらう。「日本永代藏」の「國に移して風呂釜の大臣」の章、これに趣向を假りたものがある。「玄宗の花軍をやつし、扇軍とて、數多の美女を左右に分て其身は眞中に座して汗しらぬ姿を兩方より金地の風に扇ぎ立てられ風つよきかたの女になびきまけたる方の扇は、撮取て池にうかめ扇ながしを慰の一景」とあるのがそれ。西鶴捻轉の一例、俳諧化の一例を示すと共に、花軍の意義を更に明に見せてゐる。

花軍といふ言葉が聯想させるのはこれだけでない。その頃の人々が、唐土の風流にのみ心惹かれ、唐土倣ひの「國姓爺合戰」の舞臺にばかり興を覺えて、能の舞臺の「花軍」を等閑にしよう筈はなかつた。くねる姿の女郎花が白菊に對する反感から、牡丹をはじめ數々の草花が戰ふのを、伏見の翁草と呼ばれた白菊が和睦させる趣向の下に、女郎花の精、白菊の精、牡丹の精、菊の精といり亂れる舞臺の上は、さすがに絢爛なものであつた。花軍の一

語、或は唐土の風流を忘れて、これだけを考へる人も多かつたらう。西鶴はどうであつたらう。

「花軍」の爭ひは、伏見の里に來た京人が、白菊のみを愛でゝ、女郎花を折らぬことに端を發する。京人の伏見に來たのは花の會の生花を尋ねるためであつた。舞臺ではその人がワキになつてゐる。ワキの名宣はかうである。

これは都方に住ひする者にて候、扨も洛陽に於いて、遊樂の景煙つきせぬ中に、殊に此頃弄び候ふは花の會にて候、今日は伏見の深草にわけ入り、草花を尋ねばやと思ひ候。

して見れば、「敵無の花軍」の花の會も、またこれと交渉がないわけでなかつた。すなはち題にいつてゐる花軍には二重の意の存在することが知られる。西鶴の俳諧二段の構へのあるわけである。

果して二段の構へであらうか。西鶴がその章の眼目とするところを考へれば、二段の構へでなくして、三段の構へであることが、直に頷かれるであらう。その第三意は何であるか。けだし、西鶴の寓意であらう。敵無しの花軍の敵は嫖客、花は太夫天神の義、客なしの名妓くらべと解すべきである。しかも、それ等の名妓に何ほどの事がある。その日の嫖客竹六の去つたあとの彼女等の亂れがましさはどうであらう。何處に名妓の實があらう。西鶴はその醜態を暴露することに一點の容赦をしなかつた。彼はまた、この里の太夫にかつてこれ等のさもしさなく、今の太夫にこの淺ましさのある事を歎いてもゐる。「二代男」の目錄の例、各章を三條に分ち、各條に小見出しを附してゐる。西鶴は意あるところをこれに託するわけである。「女良は陰の間に心有べき事」この章の第二の小見出しである。「此里の太夫以前の形はなき事」第三の小見出しである。しかも、第一には「九軒に夏の名花集事」といつてゐる。何等の皮肉であらう。題の表面は妓の名花を離れて、草木の花にのみ即いていふのであつた。かうなると、

九軒の里の妓、西鶴の前に何の顔ばせかある。なほ、これを「二代男」の標榜するところと相照し見れば、皮肉の度は更に一段の甚しさを加へるものがあらう。云ふまでもないが、西鶴が「二代男」でいはうとしたのは、其里其女郎の美の表彰にあつた。

見及聞傳へしは、松の葉の塵なれば、祇薗箒の跡までも、心の奇麗なる事ばかりあらはし、よしなきことははき捨る物にぞ

とは巻一の首章「親の貌は見ぬ初夢」に見える言葉である。「二代男」の本名を「諸艶大鑑」といふ、その諸艶は諸の名妓とも、また準へて、諸の名花ともいふべきほどの言葉であつた。さういふ標準のもとに選ばれた名妓列傳の中に、あのやうな太夫どもを擧げるといふのも、所詮は對照して他の美をいよいよ發揮させるためであつたらうか。それはともかく、草木の花には、ことごとしくその所その名を書して、太夫にはわざとその名を知らさぬほどの用意を具しながら、題にはさりげなく「敵無の花軍」といふ。心憎さ測り知られぬものがある。して見れば、花軍の第三の義は明瞭に反意を籠めてゐると見られる。

一語の俳諧の解は大方からである。一章の俳諧、「宇治十帖」との關係はいかやうに解すべきであらうか。もし人あつて、漫然と「宿木」の巻を通讀したならば、花を折る記事をそこにもこゝにも見うけるであらう、つひに「源氏物語」の他の巻には見られないことであらう。

帝は女二宮を薫に與へようと思つてゐた、碁の賭物に託してその意をほのめかした。薫は碁に勝つた。帝は「ねたきわざかな」と仰せられる。さて、

まづ今日はこの花一枝ゆるすと宣はすれば、御答聞えさせで、降りて面白き技を折りてまゐり給へり、

世のつねの垣根ににほふ花ならば心のまゝに折りて見ましを

と奏し給へる用意あさからず見ゆ、

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな

と宣はす

薫は帝の意を忖度して、この歌を詠んだのである。これ花を折るの第一。

明くる年の四月朔日、女二宮は薫の三條の邸に移られる前日、主上は藤壺で藤の宴を行はれた。いと面白い遊びであつた。薫は藤の花を折つて帝に奉る。冠に挿し給ふ料のためである。薫の聞え上げた歌、

すべらぎのかざしに折ると藤の花およばぬえだに袖かけてけり

作者はその歌ざまを評していふ、うけばりたるぞ憎きやと、これ花を折るの第二。或は西鶴が大寄を、その折の盛んなつどひの俤と見るべきであらうか、くはしくは知らない。

時は溯る、藤の宴の行はれた前年の秋、薫は亡き世の大君をおもひ、中君をおもうて、まどろまず明した。その曉、霧の籬に朝顔のはかなげに咲いてゐるのを見た。やがて中君を訪づれるとて、車を命ぜられた。まづ庭に下りて朝顔を折る。

朝顔をひき寄せ給ふに、露いたうこぼる、

けさの間の色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花と見る見る

はかなと獨ごちて折りて持給へり、女郎花をば見過ぎてぞ出給ひぬる。

薫はその朝顔の花を中君に贈つた。

折り給へる花を、扇にうち置きて見居給へるが、やうやう赤みもて行くも、なかなか色のあはひをかしう見ゆれば、やをらさし入れて、

よそへこそ見るべかりけるしら露のちぎりかおきしあさがほの花

殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持ちたまへりけるよと、をかしう見ゆるに、置きながら枯るゝけしきなれば、

消えぬ間にかれぬる花のはかなさにおくるゝ露はなほぞまされる

何にかゝれるといと忍びて言もつゞけず、つゝましげに言ひ消ち給へるほど、なほいとよく似給へるかなと思ふにも、まづぞ悲しき。

朝顏の花をかごとに、薫と中君の微妙の心理はうつし出されてゐる。これ花を折るの第三。

あの藤宴の行はれた年の秋、薫は宇治の古宮を訪れた。蔦の美しいのを見て折りとつた。中君のもとに贈る。折から匂宮も居合はせた。宮はをかしき蔦かなと召し寄せて見る。その意すでに多少の疑ひを挿んだのである。作者は「たゞならず宣ひて」との一句を添へてゐる。宮は蔦に添へる文をも見る、それから何事をも掬みとられなかつた。わたしが居るのを承知で、何げなく書いたのだらうよと宮はいふ。かくてまた作者は「少しはげに然やありつらむ」の一句を書き添へてゐる。作者はまた筆をつゞける。

女君は事なきをうれしと思ひ給ふに、あながちにかく宣ふをわりなしと思して、うち怨じ居給へるおん様、萬の罪もゆるしつべくをかし、返事書い給へ、見じやとて外様に背き給へり。

中君はあまえて書かざらむもあやしとて、文を認める。

三人の複雜な心的關係をあざやかに示す蔦の一枝、これをも花と見る。即ち花を折るの第四。

四つが四つながら、事件の運びとして重きをなす花の枝である。「宿木」一巻の通讀から、この事は最も深く印象づけられる。西鶴にして、「一代男」と「宇治十帖」とを、ともかくも聯絡させるとしたら、それ等の印象を綜合した形に於いて、あの花揃の趣向を立てるといふことは極めて容易に考へられる。さういふ類例が極めて多いからである。

「敵無の花軍」と「宿木」との關係はこれだけにとゞまらない。花桶に名花多く並べ揃へるくだり、

釋迦誕生ましますも、かゝる花薗にての事とや。いづれの女良衆も、たとへ月がしらに、歯黒を呑たまふとも、とまるべき時はとまるべし、脇の下からもあぶなし、口からうみたまへ。

といふのは、彼の竹六が遊女にむかつての嫌がらせの言葉であつた。四月八日の花揃の席上としては、折にふさはしい惡態である。聯想として甚だ自然だといへる。

それが「宿木」のどの點に於いて、交渉を有つのであらうか。ここには遊女の避姙と出産とがあり、あれには中君の姙娠と出産とがある。二つのものが趣を異にしながら、事は甚だ似てゐる。けだし、西鶴が俳諧的關係を以て二つを結び合はせた結果であらうか。

中君の姙娠と出産とは「宿木」の筋のうへでかなりの重要性を帶びてゐる。從つて卷中にはいく度かくりかへされてゐるだけに、通讀の印象からいへば、相應に深いものがあらう。花を折るの場合と、いづれがいづれともいひかねる。西鶴は、さういふ二印象を撮合はして、あの趣向を構へたともいはれなくはない。

花と出產、この二つを撮合はせようとならば、誰にしても、すぐ灌佛を聯想するであらう。まして西鶴のあの頭の働きである、何の造作もなく、すらすらと案を立てたところは、想像するまでもなからう。

西鶴のこの構想に就いては、深くいはない。たゞ、他の作家の同工異曲のものを擧げて旁證とする。近松の「用明天皇職人鑑」の一齣「さんろ玉世の姬道行」これである。さんろは山露、實は戀ゆゑに身をやつされた花世親王である。玉世の姬は親王の戀人、親王の胤を宿しゐる。その繼母は墮胎させようとする。道行は姬が繼母に誘はれて、秋野をあけゆく悲しさを謠ふ。草づくしの技巧を凝してゐる。

——草ばし刈るな笛をふけ、後に二人が悔み草、毒の草をも身のうへと知らぬ手もとの哀さには、燈臺草を思ひ出す、思ひ出でずや有し夜の亂れ合ひにし枕には甍草をぞ思ひ出す、彼のほのほのの仄暗き、たそがれ早く寢し時は、蚊帳釣草を思ひ出し、人目思はず肌觸れて起きつまろびつさゝめして、相撲取草思ひ出す、通路遠き獨居の班女が閨の淋しさは茶引草をも思ひ出し、心細しや糸薄——

勾欄には山路と姬の人形が顏を見合せ目を合はせるいぢらしさを見せる。間に咽ぶけうな哀音はつゞく。繼母は山路に五種の草をとつたかと問ふ。その煎汁がわが胤を墮させる藥と知らぬ山路はかうも答へる。

さん候仰にまかせ刈り候、あかりもとは燈心草鼠尾花は溝萩、末つむ花は紅の花、廿日草とは芍藥牛膝とは狗

兒槌、何れも仰に任せ今宵滿月の露なから、刈り調へ候

繼母は悅喜して、その汁を無理無體に姬の口に注ぎ込む。姬は忽ち腹痛の、さては驗のあつたかと思ひの外、玉のやうな若宮を生みおとす。若宮は後の聖德太子であつた。變毒爲藥の佛法、不可思議の奇瑞であつた。

「職人鑑」に於ける山露の事は、いふまでもなく舞の本へ「烏帽子折」の挿話に據ることであるが、道行にいふ墮胎と出産とは、つゆほどもそれに見られない。近松は何によつてこの想を構へたのであらうか。考へられなくもない。畢竟は聖德太子の誕生を釋迦の誕生に擬するためである。日東佛法開基の君をそれに附會することは、自然の聯想であらう。草づくしをいひ、また五種の花をいふのも、釋迦降誕の花園の聯想を下に踏へた案であらう。果してさうだとすれば、西鶴が四月八日の花の會、また遊女の月がしらの齒黑飮みをいふのも、花園と降誕による趣向であつたらう。たゞ、彼は佛法の奇特に專に、これは太夫祕密の暴露を念としてゐる、それが異曲ではあるが、つひに同工といはねばならない。この比較が西鶴の俳諧ぶりを脇から闡明させる。もとより、この場合に、近松と西鶴との間に直接の交渉があるか、ないかは相應の問題であらう。二者の間に幾多の交涉があり、模倣沙汰のあることは理まさに然るべく、事また然るを知る。しかし、わたくしはこの場合までを同じつらに扱ふことをば、なほ躊躇する。再考を俟つ。

「二代男」の卷三をはる。

八

巻四の第一「緣の抓取は今日」は江戸の吉原の話。無法者の武士が鑓長刀を拔持つて、わが戀を仕かけた女郎に町人の自由の床入惜し、と町人に迫る。叢に隱れると、鑓先耳をこする危さ。その町人が命からがら、供の太鼓の新作つれて揚屋へいつて、命拾うた祝ひとて大寄の大騷ぎとなる。末社どもに目隱して取あてた妓がそれぞれの緣ぞといふ。中にも猪首で跛で、白目がちで、あたまは六筋右衛門何一つとり得がない新作が、一人の太夫を捉へる。太夫はわが身は親の日じやというて放して貰ふ。激しく追ひ立てられた、も一人の太夫は緣の下に隱れる。折からのうち水に袂も裾も濡れそぼちて、其まゝ座敷に上りかねる體たらく。新作はそれほど嫌はるゝ君を捉へても詮なしとやめる。

はじめの叢隱れは島原になく、新町にない廓近みの殺伐を示すことによつて、吉原の地方色を見せると共に、緣の下隱れに對照されたのであらう。西鶴の意はそれにあつて、それ以上に出てはゐなかつたらう。一章の主題とするところは、新作を嫌ひぬく太夫の心意氣にあつたらう。「數年此町の、諸事を見分、聞知る程にもなき事なり、うるはしき衣裳付のすたるをかまはず、只新作が手に入事を、情なくおもはれて」といふ太夫の態度を承認するのであつたらう。

このものは直に「宇治十帖」との關係を討ねてよいやうである。それならば、どの巻に、これほどの醜男があつたらうか、また醜男を嫌ひぬく美女があつたらうか。あらう筈がない、あればいづれもやんごとなき御方だち、たゞ美しさとけだかさのみが存する。どうしても會はじとなれば、そこに止み難き深い事情があつてのことであらう。それをさらりと切り上げて、美しいのを醜くも、けだかいのを卑しともするのが例の俳諧の手法、かう思ふ時

に、髣髴として現はれるのは、中君と薫の俤でなからうか。

これも「宿木」の卷であつた。匂宮の心が六君に傾くのを見る中君は、つひに宇治の山里に歸らうとまで思ひ入る。その事について相談しようと、ひそかに文して薫の訪問を待つ。このほど道ならぬ事と知りながら、中君の戀しさ懷しさに惱める薫は飛立つおもひで、簾ごしに對面する。今日は廂の間の御簾のうちに入れ申して、母屋の御簾に几帳を添へて、中君は少しく奧の方に引込んでゐる。薫はそれだけでも嬉しかつた、日比の隔てがとり除かれたからである。中君はさすがに匂宮に對する妬しさはいはなかつた、世の中のもの憂さに、しばし宇治に籠るやう計つてほしと賴む。薫は自分一存でもゆかぬこと、よく宮と相談してと答へる。答へながらも、薫はどうしてこの君を宮に讓つたのであらうかなどと思はれて、悔恨の胸迫るにつけて、心のほどをほのめかす。やうやう暗くなつても歸らぬを、中君は懸念せられて、心地惱しと內に入らうとする。薫はまた話しかける。答へる聲のらうたさに、堪へかねて、簾の下から手を出して袖をおさへる。

女、然りやあな心憂と思ふに、何事かは言はれむ、物もいはで、いとゞ引き入り給へば、それにつきていと馴れ顏に、半は內に入りて添ひ臥し給へり。

薫はあれこれと怨みつらみをいふ。中君は返事をしようとも思はない、ふと胸に湧く憎しみを、漸くおさへて、「思ひの外なりける御心の程かな、〻人の思ふらむ事よ、あさまし」と辱しめて、泣きさうにする。薫は少しは道理と思つて氣の毒がるもの〻、なほ思ひのたけをいひつゞける。女はたゞたゞ困じ果てた。

なかなかむげに心知らざらむ人よりも、恥かしう心づきなくて、泣き給ひぬるを、こは何ぞ、あな若々しとは

いひながら、言ひ知らずらうたげに心苦しきものから、用意深くはづかしげなるけはひなどの、見し程よりもこよなくねびまさり給ひにけるなどを見るに、心から餘所人にしなして、かく安からずもの思ふこと、と悔しきにも、またげに音は泣かれけり。

中君も泣けば、薫も泣く、泣く心のうちは違ふものゝ、苦しさにかはりはない。男は悔恨に追はれ、欲望に韃たれながら、さすがに抑制を忘れなかつた。

男君は古を悔ゆる心の忍びがたきなども、いとしづめ難かりぬべかめれど、昔だに有りがたかりし御心の用意なれば、なほいと思ひのまゝにもてなし聞え給はざりけり。かやうの筋は細かにもえなむまねびつゞけざりける。かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出で給ひぬ。

「昔だに有りがたかりし」とは、宇治の一夜、薫が中君に添臥はしたものゝ、實事のなかつたことをいふのである。こたびまた悶々の情を懐いて、彼は悄然として去つたのである。この後姿を、「それ程嫌わるゝ君を、取へてからおもしろからずと、是迄とやめける」といふ新作の侘びしさと合せて考ふべきであらうか。さまでではないにしろ、この筋をあの筋に變更へすることは、西鶴としてはあまりに易い筆のすさびであつたらう。さてこそ、この一原據から、また別樣の一章をなしたのであらう。次の章を、その見解の下に讀まうとする。

九

「心玉が出て身の燒印」の話の筋はほゞ三條に分れてゐる。「緣の抓取は今日」と原據を同じうするといふのは第二

條である。第一條と第三條とは共に遊女の身過のかなしさをいつてゐる。西鶴のうがちの冴えの最も鋭き現はれではあるが、話の興味からいへば第二條が中心をなしてゐる。また「宇治十帖」との關係に於いても、これが主體である。第一と第二とは今しばらく扱はない。

扇屋の長左の座敷には今日が嘉祥喰とて、さまざまの食物があつた。けれど、太夫の權式は氣まゝに手を出させない。それを末社の一人が「太夫樣達も喰たひ蟲は鳴ども、身すぎとて、かんにんづよひ事や」などと素破ぬく。その中の太夫の一人は、葡萄一房をと思ひ寢の手枕に、鼠一疋袂からとび出でてそれに喰ひつく。鼠は追はれて火入の中にかけ込み、また袖口の中に入る。人々が不思議のおもひをしてゐるほどに、太夫は目覺めて夢を語る、二三人であれを追ひまはるので火に入ることも構はず逃げたといひながら、脇腹を見れば燒所ありありとある。附者の女郎がさきのことを囁くと、太夫涙をこぼして、「我一念に一房を思ひ入、鼠となりし夢見しが、さてもあさましや、勤の身程いや成事はなしとありのまゝ申されし心中かんじて、世間へは沙汰する事なし」

これが「宿木」と緣があるといふのは、葡萄への執心を、中君への執心の俳諧と見るがためである。西鶴は薰を新作に擬し、今は太夫に準ふるのである。さういふ見方が許されるなら、西鶴の俳諧のすさびは、それからそれへとどう移りゆくか、殆ど端倪すべからずといつてよからう。これほどの事は彼は常に一話の組立の事でしてゐた筈である。二段の構へ、三段の構へなどゝいふのも、畢竟、話の成立の前後の區別で、內質には少しも相異がないからである。

もし、この話が「一代男」の中にあつたなら、わたくしは「葵」の卷の六條御息所の生靈が葵上を苦めるくだり

を原據とするともいひもしたらう。更にまた「一代男」の巻六の「心中箱」と原據を同じゅうするともいひもしたらう。さういふのは、御息所の生靈が葵上の病床に近づいて、修法の芥子の香を現身の衣に感ずる、すなはち「あやしう我にもあらぬ御心地を思し續くるに、御衣なども芥子の香にしみかへりたり」といふことを、太夫の焼所を見るがためである。隨分西鶴の俳諧の筆には、さういふ案もあつたらう。けれど、やゝ考へ直すことに於いて、その解を棄てるであらう。「葵」を原據とする解を廢する理由が、「宿木」を原據とする解を支持する所以である。いな、この話が「一代男」にあつたならばなどゝ考へることが、すでに無用の業であつた。どの點から考へても、この話は當然「二代男」に於いてのみ成立すべき性質を具備する。さう見るべき一つの配列の順序があつた。この章では殊にさうであるが、今それに就いて、殊更の辯をなさない。

戀の執着を食の執着に擬すほどの諧謔や俳諧は、西鶴が絶えずくりかへすことで別に據るところを要さない。さう知りながら、なほも「宇治拾遺」の「狐人につきてしとぎ食ふ事」を撮合はせたのでないかの疑ひを有つ。疑ひは疑ひとして、假りに西鶴がその意圖によつて筆を執つたとしたならば、どんな事になるであらうか。

女にものゝけが移つていふ、自分は通りがゝりの狐であるが、腹が減つたので、ふとこゝへ來た。食べたらすぐに歸るほどに粢をくれと語る。粢を前に出すと少し食べて、あなうまや、うまやといふ。一座の人々は、おそらくこの女が食べたくつて言つたと思つて憎み合ふ。狐がまた、持ち歸つて、老女や子どもにもやりたいから、包み紙を貰ひたいといふ。大きな包みをやると、襟に入れる。では罷り出でうといふ時、驗者が追へ追へといふ。女は立ち上つたと思ふとばたりと仆れ伏した。やゝあつて起き上つたら、懐のものは無くなつてゐた。「宇治拾遺」の怪異談

はこれである。西鶴はこの偶然のもの丶けを、自巳の執念の怪としたことによつて、一段の興を醸し得た。單なる女を遊女に轉ずることに於て、遊女の身過ぎに深刻のうがちを成し得た。もう世間並みの話になつてゐる狐憑きを、鼠にかへたところに、愛嬌も添へ得た。西鶴の俳諧ぶりの巧みさが考へられる。かういふ考へ方は果してゆるされるであらうか。西鶴が「宇治拾遺」を讀んで、この着想を得たといふのなら、もとより問題にする値はなからう。西鶴に遊女の身過ぎに關する作意があつて、そこへ、筆の戲れが――然り、彼としては重要な戲れであらうが――「宇治拾遺」に是非とも觸れさせうの案を立てさせたといふならば、問題の性質は變つて來るであらう。前の疑ひとは、この意味の上に於いて考へる疑ひである。尤も「二代男」と「宇治拾遺」との關係を通覽するの結果は、殆ど疑ひを挿むことなくして、直にこの俳諧を承認させる。わたくしはさう思つてゐる。

「二代男」のこの章が、かりに「一代男」に在つたとしたなら、六條御息所の事件として考へられはせぬかといふのは、脇腹の燒所を趣向の焦點と見るからである。その考へを棄てさせる一つは、燒所よりも鼠が葡萄へ喰ひつく一事を重心と思ふためである。題して、「心玉が出て身の燒印」といふもの、必ずしも西鶴が作意の中心を示したものでなからう。彼の題の立て方にこの種のものが多い。それに拘はるよりは、俳諧に表裏ある事實を重く計算すべきであらう。この計算はもとより、此項に於ける「宇治十帖」と「宇治拾遺」の關係の本末に就いても應用される。

一〇

第三の「七墓參りに逢ば昔の」は、二度まで幽靈に逢ふ怪異の談である。細かい廓のうがちを附帶すること「二一

代男」に散見するものゝ常格である。

親仁の手前八十三度の詑事も元の木阿彌、祖母智にまで捨てられた。せん方なしに坊主になつて墓めぐりする或る者が、ある夜老坊主の幽靈に逢つた。幽靈から三升入の吸筒に執着がある、それを手向けるやうに傳へてくれと頼まれる。また或る夜は炭俵を手に提げ持つ遊女姿の幽靈に逢つた。その炭俵に不寀をうつて尋ねると、遊女の身過ぎのくるしさを語り、此炭俵の口を開けずに死んだ存念故に今も手をはなしかねると語る。その時さまざまの女の首が飛んで來て、遊女の身に喰ひつく。是は情なし、おのおのゝ亭主のたわけはわが身の知つたことでなしといへば、首はぱつと消え失せる。

これも勿論「宇治十帖」との關係を保つてゐる。しかし、それを檢討する前に、他の關係に就いて考察しなければならない、しばしばくりかへされた謠曲との關係である。原據は二つから成る。一つは老坊主の幽靈に關する。もう一度そのくだりに就いてくはしくいへばかうである。

有時吉原の墓より、酒のかほりふかく、六十餘のせい高坊主出て、我佛體を得ながら、浮世に思ひ殘すは、三升入の吸筒有、是を手向よと、御しらせ給はれといふ。御身いかなる人ととへば、葉箒葉箒と、賣聲ばかりして消ぬ。

謠曲の中に、かゝる酒好きの坊主ありやとならば、直になしと答へよう。三升入の吸筒に取材したものありやとならば、また早速になしと答へよう。たゞ西鶴の俳諧的手法の飜案といふことの前に、これありやとならば、言下にありと斷じよう。「木賊」すなはちこれといひ添へよう。

「木賊」のシテは信濃園原山のほとり、伏屋の森近く住ひなす老人であつた。ワキは老人子松若を伴ふ旅僧である。旅僧だちはシテの家に宿る。そこに、はからずも親子の對面をする。趣向は一篇のうき世語であつた。こゝに要あるは、シテがワキをもてなすくだりである。

シテ「いかに御僧たちに申し候。餘りに夜長に候ふ程に、酒を持ちて參りて候。ワキ「御志はありがたけれども、飮酒は佛の戒にて候。シテ「飮酒は佛の御戒はさる事なれども、かの廬山の惠遠禪師、虎溪を去らぬ禁足にだに、陶淵明が志にて飮酒を破りしぞかし。ましてや我が子の翫びし、舞曲の酒宴の戲にて、老生を慰む志をばなどかあはれみ給はざらん。地「廬山の古を思し召さば、心の底までも汲みて知る法の、眞水と思しめして、飮酒の心とけて一つきこしめされよ。

辭退する旅僧に頻りに酒を勸めるのは宿の老人であつた。それを酒好きの老坊主としたのは、シテとワキを一人にした西鶴の俳諧であつた。「木賊」ははじめに行方知れずなつたわが子に對する老人の愛着に專らであるが、それを三升入の酒筒の愛着に飜したのが西鶴の諧謔であつた。誰も西鶴の奔放な趣向をよしとするであらう。

さすがに西鶴であつた、この一節は讀者が原據を解かぬかぎりは、興趣を滅却することを心得てゐた。さればこそ、その老坊主の名を葉箒といはせたのである。「木賊」のワキがまだシテの宿を訪はぬほど、途にシテに遭つて、伏屋の森の箒木に就いて問ふことがあつた。園原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かなの歌に詠まれた箒木の所在とその歌の心を尋ねる。シテは御覽候へ、梢に一木うすうすと見えたるこそ箒木にて候へ、箒草に似たる木にて候により箒木と申しならはし候、これは寄生木にて候と答へる。西鶴はその箒木をすぐに葉箒としたの

である。またあの木賊を刈る老人を薬籠賣としたのである。轉合を弄するうちに、しかとその據るところを、知る者は知れとばかりにほのかに示したのである

酒筒と薬籠の解がかうだとすれば、炭俵の如きも、また容易に類推される筈である。いな、西鶴はこれにも原據を隱微の間に教へてゐた。

能の「六浦」は今の舞臺では殆ど行はれてゐないらしいが、西鶴の頃には、しばしば舞臺の上に演ぜられてゐた。ワキは旅僧、シテは前シテ里女、後シテは楓の精である。ワキ三人は相模の國六浦の里の稱名寺に詣づる。あたりは紅葉の錦を晒せる中に、木立餘の木に勝れて、唯夏木立のやうに一葉も紅葉せぬ不思議な楓を本堂の庭に見る。前シテはその由來を語る。

げによく御覽じとがめて候、いにしへ鎌倉の中納言爲相の卿と申しゝ人、紅葉を見んとて此處に來り給ひし時、山山の紅葉いまだなりしに、この木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば、爲相の卿とりあへず、いかにして此一本にしぐれけん、山にさきたつ庭のもみじ葉と詠じ給ひしより、今に紅葉を停めて候。

ワキはまた何故に爲相の卿の詠歌によつて紅葉を停めたかを問ふ、シテは答へる。

げに御不審は御理、さきの詠歌に預かりし時、此木心に思ふやう、かゝる東の山里の、人も通はぬ古寺の庭にわれ先だちて紅葉せずば、いかで妙なる御詠歌にも預かるべき、功成り名遂げて身退くは、これ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ、今に紅葉を停めつゝ、唯常盤木の如くなり。

ワキはさうまで此木の心を知れる御身はいかなる人と問へば、ワキは此木の精なるが御僧貴くいませば現はれたり

と答へて去る。

後シテ現はる、ワキは草木國土悉皆成佛の、この妙文を疑ひ給はで、なほなほ昔を語り給へといふ。シテは情懐を歌に寄せ、また舞に託す。かくて

所は六浦の浦風山風、吹きしをり吹きしをり散るもみぢ葉の、月に照り添ひてからくれなゐの庭の面、明けなば恥かし、暇申して、歸る山路に行くかと思へば木の間の月の、木の間の月の、かげろふ姿となりにけり。

地の謠ひと共に舞臺を下る。佛果圓滿を得たのである。

これを西鶴の本文に比較すれば、いふまでもなく紅葉せぬ楓は、口切らぬ炭俵である。炭の赤くなることは、すぐに紅葉に見立てられる筈である。楓の精は遊女の幽靈である。たゞ精の語るところと、幽靈のかこつことゝ、何といふ相異であらう。幽靈のかこちはあまりに哀しく、あまりにさもしい。

はづかしや我、新町に勤めしむかしは、太夫とはよばれながら、內證のくるしさ胸に火宅をはなれず、此苦しみのやるせなきを、せめては分知の御方へ語申すべし、

とて語り出づることは、太夫ははじめ二年が間、毎日伽羅二燒、奉書五枚中折半帖、封じ紙三枚、のへ紙五折、楊枝三本、月に雪駄一足、草履三足、蠟燭、悉の仕出し迄もと細かい算用であつた。なほ二年過ぎて銘々さばきの身となれば肴類の外は手ものとなつて、色あげの染賃、糊の錢までのと苦しい勘定をもの語る。炭は「過ぎつる十二月雪の夜に相果る迄、此炭の口をあけずに、浮世に殘すを惜まれし一念の、手はよごれてもはなさず」とも語る。さきにかう語らすことに西鶴らしさがある。「六浦」とくらべ見ることに於いて西鶴の實がいよいよ明に知られる。

西鶴が原據を隱微の間に敎へてゐるといつたのは、「七墓參り」によつて、「六浦」を示してゐるからである。「六」と「七」の對、西鶴の俳諧にはこれほどの輕い洒落もかなり多かつた。
「七墓參りに逢ば昔の」に於ける謠曲の二原據を考へて、もう一度その本文を見ると、本文そのものが、最も明に謠曲の體で書かれてゐることが知られる。はじめに七墓參りの僧の身の上に就いていふのは、いはゞワキの名宣であつた。六十餘の高坊主の幽靈は前シテの格である。炭俵持つた遊女はいふまでもなく後シテの格であつた。その前シテと、後シテとの間にどんな關係があるか。共に赤くなるからである。炭も燃えれば赤く、酒も飲めば赤くなる。二者の關係はたゞこの一點のみ。能幾番のこのやうな構想を有つものが果してあらうか。西鶴はまた遊女に喰ひつく女の首をも舞臺に上せて、こゝに奇想天外より落つるともいふべき一修羅物を作り上げたのである。末尾の一節、

ぱつと消て、禮場の朝風茂りの草ほうほうと、石佛はありしまゝにて立歸る、あらこはやの

は謠曲の約束に從ふのである。西鶴はつひに三番目物の「六浦」と四番目物の「木賊」を合はせることに於いて、新に二番目の修羅物を改作したのである。世にまたこのやうな變態能があらうか。この變態能が更に一轉した時に「好色五人女」が成立する。その事については前にいさゝか觸れておいた筈である。
冗漫厭ふべきであるが、とにかくこの章から謠曲關係のものを除き去つた、殘る「宇治十帖」關係のものは何であらう。あゝまでに謠曲に據りながら、まだ別關係のものをおき得るのが、西鶴の餘裕である　そのよい惡いは別として、俳諧の痴ものといひたくなる。

「宿木」の卷を讀んで、氣づかれるのは、執拗と思はれるほどに、大君に對する追慕の情の横溢してゐることである。中君も今は亡き人の大君を忘られず、薫まして忘るゝ折とてはなかつた。あの一卷に現はれる事件で、その情感に觸れない何ものがあらうか。尤も、かくして、事は浮舟のもの語に發展する。作者のはじめからの企圖である。

薫の大君に對する追慕は二重に動く。直接にその人を想ひ、間接に中君を通じてその人を想ふ。彼の眼に映つる中君のうしろにたえず大君を見るからである。薫の戀を拒める大君は、おのれに代へて妹中君を愛したまへと薫に願ふ。薫は中君の存在が、おのが戀を妨ぐるものと解した。とくその障礙を除かうとして、中君を友匂宮にひき合はせ、强ひてその中を結んで、大君の意に背いた。しかも病める大君はあの世の人となた。薫の心に悔恨のやゝ蟲くものがあつた。事はすでに「總角」の卷に見える。「早蕨」の卷となると、もはや薫は中君を中君としてのみ見ることが出來なくなつた。中君また大君を想ふことなしに薫に對面しかねてゐた。大君の喪はてた折の對面の折の記事に、最もよく見られる。

いと心恥かしげになまめきて、また此度はねびまさり給ひにけりと、目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見え給へるを姫君は面影去らぬ人のおん事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いとあはれと見奉り給ふ。

その時には、中君はすでに匂宮のもとに、京に移るやうに豫定せられてゐた。薫は中君の近く住むやうになることを喜び、中君はなほ宇治の宿に心のこることをわびしがる。

ところどころ言ひ消ちて、いみじくもの哀れと思ひ給へるけはひなど、いとよう覺え給へるを、心から餘所の

ものに見なしつると思ふにいと悔しく思ひ給へれど、かひなければ、その世かけても言はず、忘れにけるやと見ゆるまで、けざやかにもてなし給へり。

御前近き紅梅の色も香もなつかしいのに鶯までも見過しがたげに鳴く、まして「春や昔」のと大君を思ふ二人のあたりには堪へがたき悲哀がたゞよふ。中君の歌、

見る人もあらしにまよふ山里にむかしおぼゆる花の香ぞする

薫の歌、

袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる

かういふ二人の思ひは、「宿木」の巻に至つては、いよいよ亂れがちである。薫は帝が女二宮をゆるされるにも意は進まなかつた。大君に對する追慕の念の深いためである。

なほ飽かで過ぎ給ひにし人の悲しさのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、うたてかく契深くものし給ひける人の、などてかは流石にうとくては過ぎにけむ、と心得難く思ひ出でらる。くちをしき品なりとも、かの御有様に少しも覺えたらむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香の烟につけてだに、今一度見奉るものにもがな、とのみ覺えて、やむごとなき方ざまに、いつしかなど急ぐ心もなし。

薫は匂宮が六君と結婚することを知つた。今更の心の悶えに目ざめがちな夜をのみ過した。さては、大君が今はの際に、中君を薫にと思つたのを裏切られたことだけが、この世の執着といひ殘した言葉をおもつた、おのが責任を思ひ、おのれみづからも大君ゆゑに隱遁の初志に背いた愚さを省みられた。

今はとなり給ひにし果にも、とまらむ人を同じ事と思へとて、萬は思はずなる事もなし、たゞかの思ひおきてし様を、違へ給へるのみなむ、くちをしう怨めしき節にて、この世には殘りぬべきと宣ひしものを、天翔りても、かやうなるにつけては、いとゞつらしとや見給ふらむ、などつくづくと人やりならぬ獨寢し給ふ夜な夜なは、はかなき風の音にも目のみ覺めつゝ、來しかた行くさきの人の上さへ、あぢきなき世を思ひめぐらし給ふ。

六君の事あつて、匂宮の愛を專らになし得ないと知つた中君は、薫と寢もせで明した宇治の一夜を思ひ出す折もあつた、あの御方と世を契るやうなこともあつてもよい緣だと思ふ折もないではなかつた。

女君も怪しかりし夜の事など、思ひ出で給ふ折々なきにしもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへの、人に似ずものし給ふを見るにつけても、さてもあらましをとばかりは思ひもやし給らむ、

さういふ思ひを以て對面したことが、はからずも「緣の抓取は今日」の原據の一條を醸し成したのであつた。

中君はよく薫の苦衷を掬むことが出來た。薫が女二宮の聟となつた後も、なほ大君を忘れかねてゐるのを知つた。さては、せめて大君世に在らば、大君の夫として見ましものをと思ひ、またさうであつたら、或は大君も自分と同じ様に女二宮の事で身を怨むこともと思ふにつけて、大君のつひに薫に從はなかつた重々しさを今更にゆかしがる。薫もまた折にふれ、事につけて、身も世もなく大君をなつかしがる。中君の若君の白く美しい顔を見ては、これがわが子であつたならと思ふ心が、自分をして遁世させないのだと省み、また大君がこの子をわが子として殘しておいたならばなどと夢のやうなことを考へる。決して女二宮にこの事あるのを願ひはしなかつた。

要は中君の悔恨である、薫の悔恨である。また想像される大君のこの世に殘す執着である。これ等の鬱積した混沌の中、おのづから形態をなさせたのが「七墓參りに逢ば昔の」の一章であつた。

その章の蕩兒が心にもなき僧形となつて、七墓參りをすることは、前に書きしるした原據の筋からでも考へられる。よしそれが裏切られがちにもせよ、薫に隱遁の志あることはをりをり見えてゐるからである。わけて、「宿木」には次のやうな一節さへある。薫はかつて大君ゆゑに隱遁の初志を飜したことを中君に語り、またその人に死別れた心の苦しさから再び幽居の意あることをも語る。その言葉の一ふし、

思う給へわびにて侍り。音無の里もとめまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔覺ゆる人形をもつくり、繪にも畫きとめて、行ひ侍らむとなむ、思う給へなりにたる。

西鶴のいつもの手口から推せば、こゝからだけでも、容易に捨坊主一人を爲り上げて、あの「六浦」の旅僧「木賊」の旅僧に附會するであらうことは想像するに難くない。

二

第四「忍び川は手洗(たらひ)が越」は吉原の妓花月を主題としてゐる。「武藏の爰に生如來」といはれてゐる名太夫を見染めた薪屋の手代が、花月を請出して向島の下屋敷に榮華を盡す幻影をみづから描き、またその費用の勘定に樂しい幻影をみづから破つてゐる。折から旦那殿の代參として高野山詣をいひつけられ、その金で大盡に仕立て、花月のもとに行つて心のほどを語る。花月は不便に思ひついて、飛脚を仕立てゝ高野山に代參させ、その間を花月が身あ

がりして手代を揚げつゞける。それから程經て、花月は男としめし合はせて出奔する。堀をば手洗に細引付けて向ひの岸にのき道をつけたのである。こつが原のほとりで追手に迫られる。辛うじて難を免れて立ちのく。

花月のやうな俠氣に富める女、また膽の据つた女は、吉原の太夫としてふさはしい。西鶴は江戸の地氣を示さうとしたのであらう。いふまでもない、「宇治十帖」にはそのやうな女のあらう筈はない。あれば心の弱い、優しい者でもあらう。それならば、この花月はせめて大君ほどの心の持主の俤であらうか。いな、火を以て水とするのが俳諧の常の手段であるならば、弱い者を強い花月に轉じたところに、西鶴の工夫が見られよう。弱い者とは誰であるか。浮舟その人であらう。花菖蒲、村蘆押分けて、細引で向ひの岸に寄せた手洗は、橘の小島の木々の影を亂して彼方の岸なる家に急いだ小舟であらう。手代と花月の駈落は、匂宮と浮舟の忍び出であらう。すなはち此の章の原據をば「浮舟」の卷の中に索むべきであらう。

「宿木」の末ほどに、薰は中君によつて、その異母妹浮舟を知り、またその姿を見た。東屋においては、二人の仲は結ばれてゐた。薰はそれを宇治に住まはせた。西鶴が薪屋の手代をして、向島の下屋敷の幻影を描かせたのは、これに據つたのであらう。たゞ隅田川のほとりと宇治川のほとりと似通はせてゐるといふのは、やゝなづみ過ぎはせぬか。それにしても、

道は繁かりつれど、この有樣はいと晴々し。河のけしきも山の色も、もてはやしたる造りざまを見出して、日頃のいぶせさ慰みぬる心地す

とあるほどを、

物の靜なる、向ひ島に下屋敷、二百人前の淺黄椀、三町ばかり牡丹畠をこしらへ、我うちの自由は、花車に乘てありきて、月代も人にかませ、月代も夢見て居てそらせ、油火見ずにと捻し出すのが、例の西鶴のをかしさであらう。さう見るならば、高野山の代參を何と見よう、代參の代參を何と考へたらよからう。しばらく匂宮の變裝と見る。

とてもかなはぬ戀を花月にかける手代のやうに、匂宮は道ならぬ心を、薰のおもひ人浮舟に寄せる。人して宇治の隱れ家を探り得た彼は、ある夜更たけて行く。忍びやかに格子を叩く。侍女が誰ぞと問ふ。巧みに薰の聲づかひして、「道にて、いとわりなく恐しき事のありつれば、怪しき姿になりてなむ、火暗うなせ」といふ侍女は火を彼方に取りやる。「我人に見すなよ、來たりとて、人驚かすな」といふ。導かれて女君の居間に入る。

女君はあらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。——初よりあらぬ人と知りたらば、聊いふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうやうその折のつらかりしこと、年頃思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよいよ恥しく、かの上の思さむ事など思ふに、又たけき事なければ限りなく泣く。

夜明けて侍女も事のさまを知つた。そして人に知らすまいの心づかひも並々でなかつた。心弱き女君は薰のなつかしさもさる事ながら、いつとはなしに靡きそめる。

高野山の代參のまた代參を身がはりとのみ解すればからである。けれど、それではまだもの足らぬふしの多い。すなはち「浮舟」の中のあるくだりを忘るべきでない。

匂宮が薫に假裝して來た翌日は、浮舟が石山詣に豫定してゐた日に當る。別れ住む浮舟の母のもとから迎へが來る約束になつてゐた。侍女の心惑ひも無理はない。やがて迎へが來た。侍女は浮舟に斷りの文を書く、理由としては月の障りになつたからといふそら言であつた。

よべより穢れさせ給ひて、いとくちをしき事と思し歎くめりしに、今宵夢見さわがしく見えさせ給へれば、今日ばかり愼ませ給へとてなむ、物忌にて侍る、かへすかへすくち惜しく、物の妨のやうに見奉りける。

西鶴のもの丶扱ひぶりは放膽の中に、細心が存する。これもその一つの例として見られる。高野山參詣はかすかながらも石山詣に緣をひいてゐる。

迎への者は歸へる。匂宮はまぎる丶事なき春の日をしめやかに語らふ。匂宮の眼には、さもない浮舟を六君よりはるかに美しと映つた。浮舟は匂宮を薫より淸らなりと見た。匂宮は

硯ひきよせて、手習などし給ふ、いとをかしげに書きすさび、繪などを見所多く畫き給へれば、若き心地には思ひも移りぬべし

若き心地とは浮舟をさしていふ。彼女はつひに花月ほどに粹を知らず、心意氣のない女であつた。あるものはたゞ若さと弱さとのみであつた。

匂宮は程經てきた宇治を訪ふ。人目のつ丶ましさに、河の彼方のゆかりある家に率て行かうとする。夜更くるほどに供人はかなたの用意を調へて迎へに來る。浮舟は何とはなしの恐怖に襲はれる。

いとはかなげなるものと日暮見いだす、小き舟に乘り給ひてさし渡り給ふほど、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れた

らむ様に、心細く覺えて、つと着きて抱かれたるも、いとらうたしと思す、この舟が堀越す手洗に擬はれたものであらう。

舟は彼方に着く、匂宮は抱き助けてその家に拉れ行く。明くる日もそこに暮らす。供人は「いとおそろしう占ひたる物忌により、京の内をさへ去りて愼むなり、外なる人寄すな」といひ聞かす。

人目も絶えて心やすく語らひくらし給ふ。かの人のものし給へりけむに、かくて見えけむかしを思しやりて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやむごとなくてもち奉り給へる有様なども語り給ふ。

匂宮がおそるゝのは廓の追手でない、薫である。浮舟の心のまた薫に傾くことである。薫との以前の仲を怨むのも、薫が二宮に對する熱愛を語るのも、みな薫に對する牽制の手段であつた。けれど、心弱い浮舟はなほしかと決し得ない。匂宮は窓外の雪を見て、京から寒さを冒して來た昨夜の心づくしを語る。

峰の雪みぎはのこほりふみわけて君にぞまどふ道はまどはず

匂宮のこの歌に答へて、迷ふ心のほどをいひ出した浮舟の歌、

ふりみだれ汀にこほる雪よりもなかぞらにてぞ我は消ぬべき

浮舟はかう書いて消す。その「なかぞら」を匂宮が咎める。女も「げに憎くも書きてけるかな」とはづかしくて引き破る。

こんな心弱い浮舟を、氣強い花月にかへたのが西鶴の趣向でなからうか。廓から忍び出た花月の危きに堪へたる心丈夫は追手の脇指で突かれても、なほ聲を立てず、一緒に隱れてゐる男にも痛みを知らせずに、立ち退いたので

ある。吉原に花月といふ遊女のゐたことも事實であり、駈落したのも事實であらう。しかも、この間の消息を誰が知つてゐよう。知るものは西鶴一人でなかつたか。彼が俳眼を以て、「宿木」を讀んだためでなからうか。わたくしはさういふ考で「忍び川は手洗が越」と「宇治十帖」の關係を解さうとする。

三

第五「情懸し春日野の釜」は、木辻鳴川の情景とそこの遊女きさの聰明を語る。色里に遊んだ翌日、末の秋の二日、洞の紅葉見にゆく。「かすり井も朽葉に埋もれ、袖垣の森のあたりは櫟狩の折ふし、所の人の手馴し振捎を打掛ばらりと落るは、袖に時雨の音のみ」枯葉の束原に廻敷かせて酒の後の亂れおもしろく、歸るさは春日野に入つて、きさが茶の湯出した以前の跡を尋ねる。

それよそれよ唐蔦のかゝりし、岩を目覺にたづねければ、石の割目に其時うつて、竹花入掛し折釘殘りて、むかしを今に、やれなつかしや其女、是なる梢より鏁をおろし、釜掛て、そこに袋棚、爰に懸物。

殊に想ひ出されるのは、其の女の機轉であつた。

神無月のはじめの四日、霜は日かげに消ず、奈良草履のはきかへも、いかにと思ひしに、挟箱より大杉原を取出し、何束かかりの飛石にならべて、客を通せし事、世に聞ふれて、大和屋が狂言の種ともなりぬ。

そのあけの年の二月森五が七日の能を見に來て、ふときさに思ひつき、五日ゐつゞける。ものゝ見事にふれども仕かたが悄くなかつた。能を見果て明日は歸らうとする夜、「ゐて いぬ男に是がなる物か」と黒髪を切つてなづむ。

あけの日留て、若紫といふ野あそびに品替への美々しさ、面白さ、「都にてもなるまじき、旅おくりにあひてかへる。業平も是にはよもや」

これと「宇治十帖」との關係は極めて稀薄なやうに思はれる。據るところは「宿木」の卷、薫が八宮なく、大君なく、中君なき宇治の古宮を訪ねるくだりであらう。

薫が宇治の古宮を訪ねたことは數多いが、その中の一つ。九月二十日餘りのほど、心すごう荒ましげなる水の音のみ宿守にて、人影も見えぬあたりに、辨の尼と語らふ。まづしてもこぼるゝものは涙である。薫はもとの寢殿を壞ちて、寺に改築しようと思つた。昔ながらの家の姿を見るのもこれを限りと思へば、あちこちと見めぐる。懷舊の情のみ胸に迫る。かくて夜をこめて、また尼の昔物語を聞く。大君を想ふこと頻りであつた。

故姬君のおん事どもはた盡きもせず、年頃の御有樣など語りて、何の折何とのたまひし、花紅葉の色を見てもはかなく詠み給ひける歌がたりなどを、つきなからず、うち戰きたれど語るもこめかしく、言少なるものから、をかしかりける人のみ心ばへかなとのみ、いとゞ聞きそへ給ふ。

さて歸らうとする朝、薫はまたなつかしさに庭に下り立つ。

木枯の堪へ難きまで吹きとほしたるに、殘る梢もなく散り敷きたる紅葉を、踏み分けたる跡も見えぬを、見わたして、とみにも出で給はず、いとけしきある深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ殘りたる。こだになど少しひきとらせ給ひて、宮へと思しくてもたせ給ふ。

あの「敵無の花軍」の一原據、蔦の紅葉はこれであつた。

これを、この章の原據と斷ずるにしては、あまりに關係が稀薄に過ぎるとの難があらう。それはしばらく措くとしても、折角原據が「宿木」を終へて「浮舟」にまで進んだものを、何故にまた「宿木」に戻したかの疑ひが起る。この疑ひは當然何故に「浮舟」に入る前に、「東屋」に據らなかつたかの疑ひを導き來るのであらう。そのては、「二代男」と「宇治十帖」との關係にも疑念を挿ませるであらう。これが「一代男」であつたら、別に事はない。あれと「宇治十帖」以前の「源氏物語」との關係は、原據の順に配列されてゐないからである。「二代男」は違ふ、これまでのところ、多少の動きはあるにしても、ほゞ「宇治十帖」の卷々の順になつてゐる。いさゝかの辯を要しはせぬかと思ふ。

これも、西鶴創作の方程式の一つと考へられるが、他の作に於いても然るやうに、「二代男」のおのおのゝ說話は、ある意圖によつて配列されてゐるやうである。即かず離れず、ある距離とある聯絡とを保ちながら、一定の方向を期して趨つてゐる。まづ俳諧的配列といへばいへる。西鶴はこの意圖を重じて、原據の卷々の順列を輕んじてゐる。彼の原據に對し、古典に對する態度はみなこれである。「源氏物語」だけの、また「宇治十帖」だけの問題ではない。

即かず離れぬ配列とは何であるかといふことを、抽象的に說くよりも、事實に於いて見る方が早い。さし當りの必要からも卷四を例とすべきであらう。

第一の「緣の抓取は今日」は、身は泥に汚れても、嫌な男から逃げようとする遊女の話である。第二の「心玉が出て身の燒印」は、食べたいけれど、さうも仕兼ねる慾心が鼠と化して葡萄を食べた遊女の話である。共に欲を中

心とする、しかも一は欲を避け、一は欲に着して反對な方向をとる。即かず離れずの配列とは、この狀態に於ける聯絡をいふのである。第二の食べたいものを食べられないのが哀しい遊女の身すぎであつた。その遊女の身過ぎをかゝりとして、第三の「七墓參りに逢ば昔の」に聯絡する。しかも執着する物の相異が、葡萄と炭俵の變化が、二つのものを即かせない。生きてゐる遊女と死んだ遊女の相異が、一應は離れた狀態におかせる。第四の「忍び川は手洗が越」には、身上りして、貧しい手代を呼びつゞけた遊女がある。これが第三の炭俵一つの妄執をのこす遊女に對する。こゝに即離の關係が存する。第四と第五との離れぬ關係は、第四の遊女と第五の遊女が機轉を同じうすることに於いて見られる。しかも一は刀刄危急のそれ、一は茶の湯風流のそれ、機轉の相は全く異なつてゐる。これが即かぬ關係である。

おもふに、西鶴は「宇治十帖」を讀んで、ほんのさらりと讀んで、たまたま頭に殘つた影象から、或はある一節に心惹かれて讀直して、新に濃厚にした影象から、いくつもの說話を構成した。そのおのおのを、ある方向によつて配列する。いな、筆執る時はその配列を頭において書きつゞける。これが西鶴の常手段であつた。尤も「二代男」の場合には、原據の大綱を殘して、おのおのゝ說話は原據の順序を離れて配列し、二代男の場合では、原據の大綱を棄てゝ、やゝ原據の順序に從つて配列した。「二代男」の或ものが原據の順序から離れたものがあるにしても、怪しむまでもない。配列を即離關係においたまでのことである。第三が「宿木」、第四が「東屋」を一つおいて「浮舟」、第五がまた「宿木に」かへるなどは、その配列の本質からいへば、當然の順序だといつてよい。

こゝに前に殘した問題、この章と「宇治十帖」の關係が稀薄過ぎる理由にかへつて考へねばならない。もとより

原據との關係がほんの一端に觸れただけの例も多い。これもそれまでの事であらうが、それならばそれなりに、いつもの手法のやうに、他に何かの原據を藏してはゐなからうか。よもや、これだけが一段の構へでもあるまい。さすが霜どけの佗しき折、挾箱から大杉原をとり出し、何束かゝりの飛石にならべて客を通したこと、世に聞ふれて大和屋が狂言の種となつたと文中に見えてゐるのは、いづれ大和屋甚兵衛の演出であらうが、その舞臺が何等かの形式でこゝに現はれてゐるであらうことは想像するに難くない。現にこの章のさし繪が、どことなく舞臺面を髣髴させてゐはせぬか。たゞ、その脚本がどんなものであらうかを知り得ぬ今は、それを西鶴二段の構へといふことが出來ない。求めるなら、他にあらう。いな、求めずともこの章を讀みゆくにつれて、あれにもこれにも「伊勢物語」の匂が鼻を掠めはせぬか。「伊勢」の、幾章を練り合はせ、捏ね合はせたる香の高さを聞くであらう。それともわたくしの錯覺であらうか。さうだとすれば、憎むべき、笑ふべき獨斷である。獨斷か、獨斷でないかをさておいて、いさゝかの思ひよりを書いつけてみる。

その一つ、木辻の色里に橋姫といふ遊女に逢ふ一節、

爰に薫の屋かすかに、ともし火の消がてに、誰すむともしれぬ所へ、此里の化たる人にそゝのかされて行に、……大坂にて盃の間を賴みし事も有つる女也、爰に名を替而、橋姫といふ、共儘鬼にして、かみころされたくもありて、共夜は闇を幸に、よねまじりに揚屋さがし、

これを「伊勢」の芥川の章のおもかげと見る。わびしい薫の屋を、「あばらなる藏」、鬼にかみころされてもを「鬼はや一口」のおもかげと見る。尤も橋姫といふのは、「伊勢」を離れた別の方向からの命名であらう。その中での小

さい二段の構へとして見るべきであらう。その二つ、洞の紅葉見のくだり、櫟狩といひ、宗益が吹矢の小鳥狩、これを「伊勢」の初冠の章のおもかげと見る。「春日の里にしるよしして狩にいきけり」の「狩」を敷衍したものと思ふからである。この章はまた末の旅おくりの據りどころとなつてゐるやうである。

若紫といふ、野懸あそびに、品替て、

また

又都にてもなるまじき、旅おくりにあひてかへる、業平も是にはよもや

これ等をあの殘象と考へてのことである。これがその三、

その四、きさがこの前茶の湯出したところを尋ねて、「それよそれよ唐嶌のかゝりし、岩を目覺」にあれこれの名殘りを見出すのは、「伊勢」の

梅の花盛りに、去年をこひて、いきて、立ちみ居てみ見れど、去年に似るべくもあらず

のくだりの梅を紅葉にかへ、東五條の西の對のおん方を遊女きさにかへたのであらう。

更にまた注意されるのは、

十四日の薪を見果て、明日は大坂にかへる夜、ゐていぬ男に是がなる物か

の「ゐていぬ」である。「ゐていぬ」の義は「率て去ぬ」であらう。「伊勢」の武藏野は今日はな燒きそのくだり「女をばとりてともにゐていにけり」に見える「ゐていに」であらう。この一用語の一例も、たまたま西鶴の「伊勢」に對する關心を示すものでなからうか。これはさきの四事例と合はせて、作者が「伊勢」のおもかげ、實に言葉通

りに漠たるおもかげを念としたことを證し得るものであらう。すなはちこの章もまた二段か三段かの構へであると見るべきであらう。

西鶴の頭の動き方からいへば、いつもの癖で何の不思議もないが、かういふ「伊勢」の影の徂徠は、殆んど同時に、「伊勢」に據る謠曲「井筒」の影をも伴つたらしい。明にそれと指摘せられる。しかし、それをいへばやゝ煩瑣になる、こゝには言及せずにおく。

この「ゐていぬ」と「ゐていに」との交渉は、ゆくりなくもまた溯つて、前章「忍び川は手洗が越」の一趣向、花月がこつが原の野末に麥こなしたる藁の蔭に隱れたこ との據りどころを考へさせる。據りどころとは、「ゐていに」の語の用ゐられてゐる武藏野のくだりをいふ。こゝに改めて引くまでも ないが、引かねば說明の筋もどうであらう。

昔男ありけり、人の女をぬすみて、武藏野へゐて行くほどに、盜人なりければ、國守にからめられにけり、女をば叢の中に隱しおきて逃げにけり、道くる人、この野は盜人あなり、とて火つけむとす。女わびて

武藏野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

と詠みけるを聞きて、女をば取りて、ともにゐていにけり、

これを西鶴のこつが原の事件と比較する。

――日本堤より手分して、追かけけるに、こつが原の野末に、うれしやといふ、人聲するはと、いそぎしうち

に見うしないける。折ふし秋も入て、麥こなしたるわらを重置ける所、もし此中も心にくしと、大脇指ぬきて、あらましつきさがしてかへる。花月股つかれながら、聲をも立ず、いたむ所を、二布にて血をとめて男には何ともいわずして、又立のき行、追手かへりて、鞘に血のかゝりしを不思議と、二たびたづね行に、はやしれがたし、

もし果して、西鶴が彼によつて此を案出したのであるならば、火を脇指にかへ、女の歌詠む聲を花月の沈默にかへ、女の捕はれたことを、花月の逃げおほせたことにかへたのである。いつもの俳諧的手法である。その手法を用ゐる目的は、前にもいつたやうに、江戸の地氣、吉原の氣風の顯彰にあつたらう。この態度もまた西鶴が常に持するところである。さういふ點から考へれば、これのみを特に西鶴の飜案に非ずといふ理由はなささうである。

「忍び川は手洗が越」には、もう一度同じやうな「伊勢」の俳諧化があるかと思はれる。手代が花月を盥に乘せて堀を越す趣向は、「伊勢」の芥川で昔男が女を負うて渡ることから出てゐなからうか。すなはち西鶴はその盥を「浮舟」の舟から得たと共に、その盥の繩ひく手代を、昔男から得たのでなからうか。「伊勢」のその章が、西鶴の心のうちにあつたことは、すでにいつたやうに「鬼はや一口」が「情懸しは春日野の釜」の中にも見えてゐることからも明であらう。

さうして見ると、西鶴が「忍び川は手洗が越」を書いて來て、その末近く「伊勢」をとり入れた。ほんのつまほどに輕い趣向としてとり入れた。その「伊勢」を今度はやゝ重く扱つたのが、次の章「情懸しは春日野の釜」であつた。かういふ態度は、彼の筆のつゞきに於いて最も多く見うけられる。これも、その一例である。つまりは、西

鶴が頭を掠めたものを追ひすぎるためである。あまりに聯想に趨り過ぎるためであらう。その辯が、ともすると原據の第一義を二の町にさせる。「情懸しは春日野の釜」にしても、その原據「伊勢」を當面に扱ひ過ぎたので、却つて「宇治十帖」を蔭にし過ぎる結果を將來したと見るべきであらう。尤も、その章が「二代男」の中程にあるといふことにも關係する。おそらく、初めか、終りにあつたら、斯うもなかつたらう。原據を有する作であつたならば、「一代男」のやうな作風のものであつたならば、きまつて第二義的を輕くして、第一義的を重く扱ふ。これ實に西鶴の方程式であつた、この事は前にもちよつと觸れておいた筈である。

少しうるさいと思ふほど「情懸しは春日野の釜」の原據を漁めて、西鶴の二段の構へ、三段の構へに就いて考へた。もう、そんな穿鑿は止めたい、と思ふにも拘はらず、西鶴の筆のあとは、どうしても止めさせない。少くとも「一代男」の卷二のうち「誓紙のうるし判」との關係だけは、そのまゝにしておかせない。

「誓紙のうるし判」は世之介の十七歲の事件、木辻町に遊び、近江といふ女を買ふ。ところの風俗のさびしさ、禿もなく、女郎の手づから燗鍋の取まししするのも、をかしい。明けて別れた世之介は、戀に殘る所あつて、重て宿によびよせて、かための誓紙、うるし判のくちぬまでと祈つたといふ始終である。これの原據は「若紫」の卷、源氏君が北山に祈禱に入つて、幼き紫上を見ることにあると思はれるが、その筋はもとより、「情懸しは春日野の釜」には關係がない。しかし、二者の文辭に、かなり多くの類似點が讀みとられる。「誓紙のうるし判」に

其後近江といへる女、是から見れば、たしか大坂にて、玉の井と申せしが水の流れも、爰にすむ事笑しく

とあるのは、「春日野の釜」に、

太子の御傳記を、つゐ讀て居面影見るに、大坂にて盃の間を頼みし事も有つる女也、爰に名を替帝、橋姫といふ、

とあるのと殆ど同じである。彼に見えた揚屋のわびしさを見せるとて、

みなと紙の腰張に、あしからぬ手にて、君命、われは思へどなどゝらく書のこし侍る

といつたのは、これの、

素人書の襖に、石竹は戻ふ、柳はみちかく、鷺の足に、水搔あるもおもしろく

とあるのに、少なからず似てもゐる。そればかりか、これのきさも、彼の「折節志賀、千とせ、きさ、など、盃計のさし捨」といふ中に見える名であつた。そのきさを特に擢でて、近江にかへて、一章の主人公に仕立てたのが「春日野の釜」である。と見れば、二者の關係も相應に緊密なるものがあるといふべきであらう。

なほ「誓紙のうるし判」には、「商賣の道を知らではと春日の里に、秤目しるよしゝて」などやうに「伊勢」を引くものがある。それと、この章の「伊勢」の仕立との間に、特別な交渉を考ふべきであらうか。いな、おそらく奈良といふ舞臺がさせた聯想のあらはれとして、輕く見てよいかと思はれる。

以上、「二代男」卷四をはる。

(「文學思想研究」第十一卷)

「近代艶隱者」考察序言

寛永三年、北條團水が先師西鶴十三年忌に際して刊行した追善句集の「俳諧心葉」に、

物語あまた書れたる中に風流なる名を取りて

蘭の香や名は埋れぬ艶隱者　　萬　海

といふのが見えて居ますが、之が證左となつて、西鶴の署名の序文に、西鷺軒橋泉と名乘る旅姿の法師が殘してゆける書といふことわりがあるに拘はらず、貞享三年刊行の「近代艶隱者」を以て西鶴の著作であるといふ說が成り立ちます。さうなると、西鷺軒橋泉は實在の人でなく、西鶴が作り出した人になります。「俳諧心葉」の句に氣づいた柳亭種彥も、かくあれば此の書も實は西鶴の作歟と疑問の意を附するに留めました。更にこの書の內容を檢して、「好色一代男」または「日本永代藏」及びその他の諸作と比較すると、根本的な相異に驚かされて、依然たる西鷺軒著作を考へ、その架空の人物に非ざる事を考へる。「西鶴名殘の友」に見ゆる備前の西鷺を同一人と考へようとする。或は西鶴の挿畫の眞蹟の攷究から出發し、また他の刊行書の版下や挿繪と比較して、「艶隱者」の版下は、挿繪と共に、皆彼自らの筆に成つた事が解り、また題簽に冠する所の「扶桑」の文字から元政の作、「扶桑隱

逸傳」に摸した努力の書である事が解つて來ると、いよいよ西鶴著作説は確定する事になりますが、これにはまづ他の作の暢達自在なる文辭とこの書の生硬蕪雜なる筆致との相異を、題材の關係から謹嚴を求めて、その度を過した爲めと斷じてゐる內容方面の西鶴否定の論を排する事を要します。內容を專一にする方から考へると、決して西鶴の作にあらずといひきつて、時には西鶴署名の序に對してさへ疑惑を懷いて、なす所あらんとする者の奸策といひ立てたい位ですから、當時の出版界の事情から見て、さういふ事もある筈です。

斯ういふいきさつの間にあつて、なほ內容に即して、西鶴説を肯定するとしたら如何であらう。少くとも西鶴らしい傾向を指示するとしたら何があるだらう。天和二年、貞享元年の「好色一代男」「二代男」及び二年の「大下馬」に踵ぐ述作と見、三年の「好色五人女」「好色一代女」「本朝二十不孝」と年を同じうして出版せられた書として見る事を許さるる何ものかが求め得られ、これ等は皆索めるに値せずといはれ、索めても甲斐なしといはれたものでした。それをまたここに懲りずまに見なさうとするのです。

「近代艶隱者」は五卷から成つて居る。前二卷は東の濱の靈山の靈窟の中に、神靈のみ旨を奉じて、草庵ひき結んで居た頃、窟の前にとぶらひ來た人々との對話、さてはそこから見聞した人々の言行をしるす事に擬し、後の三卷は、窟中を出でて心にまかせた行脚の道すがらに、耳目に觸れたのを記す事に擬して居る。敢て、擬するといふ。これは序にいふ所をそのままにうけいれての事です。「世を深く忍び、遠くのがれて、隱德の有人、風流男女にかきらず、名を埋みて住しを、其國其里に見しに、境界殊勝におもはれ、あらましに、書うつして、土產に迚包籠たる物を明れば、名所紙のあるにまかせて、かさね捨られし」とは序にいふ所ですが、またからもしるされてあ

ります。「ひとり〳〵名のなき人を尋ねしに、皆世に傳へし人也、其身の取置きに氣を付て見しに、いはでそれとは隱れなし、窟中に有て見しと書しは、死去し人也、行脚に寄て書くは、世にある人と云々」して見ると花葉の翁も、朝覺の翁も窟の前に來て相語うたといふ事は、明かに虛構であり、西鷺軒が袖の湊で菊の翁と邂逅したといふも、ただ生者たる事を示す手段に過ぎない。西鷺軒の窟中の修行も、行脚も、さういふ譯であるとしたなら、西鷺軒その人をも必ずしも實在の人物とのみ見るを要さない。そこから彼を西鶴その人の傀儡とも、また分身とも見る事が許されます。

「艶隱者」の書は勿論ある種の隱者の列傳であるから、單に「扶桑隱逸傳」の體裁を以てしただけでよい譯です。それがどうして、あらずともよいと思はるる西鷺軒を拉し來つた事でせうか。「一代男」は「大下馬」の一名「近年諸國咄」の如く、なほ「諸國遊里咄」と命名してもよい筈ですが、一面「源氏物語」の趣向を世話化するがために、世之介を活躍させてもゐます。しかし、西鷺軒に何の活躍する所がありませう。その點に於いて、西鷺軒は「二代男」の世傳と類似して居る。世傳は世之介の遺子であるが、肝心の「二代男」の中には、ただようも諸國の諸分覺えたと驚かさるるくにといふ遺手の長話を聞き書し、加筆する役目をなすに過ぎません。「二代男」に於いて作者はいふ。「世傳が二代男、近年の色人殘らず、是に加筆せし、されど替名にして、あらはにしるしがたし、此道にたよる人は合點なるべし、其里其女郎に、氣をつけて見給ふべし、時代前後もあるべし」即ち「近代艶隱者」の「いはでそれとは隱れなし」と近い行き方を以て、ここに嫖客遊女の列傳をなしました。西鷺軒と世傳、並にくには、西鶴の傀儡たる點に於いて同一に視なければならない。もし西鶴の分身であるといふならば、質を異にする

これ等も、皆西鶴に於いて渾然たる一に歸するといふ事になります。

或は知らず、この三者のみか、三者によつて傳へられた嫖客、まきた隱者がまた西鶴の分身でないかといふ疑問も起ります。さういふ考へは果して許さるる事でせうか。

くる年は本卦にかへるほどふりて、足弱車の音も耳にうとく、桑の木の杖なくてはたよりなく、次第にをかしうなるものかなと歎きながらも、浮世遊の君、白拍子、戯女見のこせし事もなき身を、また女護島へ渡つて摑みどりの女せしめようの意氣に燃えて、好色丸の船出したのが「一代男」の世之介でした。色に殉ずといふか、色に徹すといふか、歡樂の極みを貪つて饜く事を知らないのが、あの頃の人々の心であります。犢牛程の黑犬を黑燒にして、山家の作り言葉になりて狼の黑燒はと賣りあるいて、多分の代を騙り取つたのは「日本永代藏」の京の才覺男でした。初瀨觀音の戸帳の時代渡りの唐織なる事を知つて、古びて破れたり、新しいのを寄進につかうと、とりかへ歸りて、大事の茶入の袋、表具切に賣りて分限者になつたのは「永代藏」の質屋の主人でした。利のためには人を瞞かさうが、欺さうが、神や佛をだしに遣はうが構ふ事はない、その才覺を發揮して長者になるがよし、もし才覺を持ち合はさぬ者は仕方がないから、長者丸を日夜に服用して、吝嗇と笑はれようが、ぶち叩かれようが、氣にもとめずに一途に致富成功の端を開けといふのが、その頃の人々の心であります。道義の抑へるものもなく、因襲の遮るなき町人は、かういふ樣に色と慾とに驀然と突進しました。

伊丹の酒屋の惣領が島原の風にしみて、目前の極樂とは爰の事、寢た間は佛と、三つがさねの蒲團の上に樂枕し

て吉野太夫と一つ二つものいふ時、隣の床の客のもとに急ぎの手紙が來る、これは目出たい金銀抓み取りの內證、關東筋大風ふいて、米があがるといふ、これから大阪にくだり西國米買込みあがり請けたらば太夫を根引にするぞ、夜が明け次第に爰を立つぞと今すこしの別れを惜み、床をはなれかねたのを、伊丹の客は首尾かまはず急ぎかへり、其の日の四つ前に大阪の北濱へついて米大分買ひ込むに、晝からあがつて、ただ一時に三十八貫目丁銀にてまうけ、この思ひ入れに油買込み、又四十四貫目あがりを請けて親に小判の山を見せるといふ話が「織留」に載せられて居ます。これは色を以て利にかへた者でした。けれど、彼はただ利のために利を逐ふものでなく、利を得て後に更に大なる色を得ようとするのでした。ひとり彼のみならずその頃の町人は皆この勇猛心をもつて居ました。彼等はいふ、世の人々が業に苦しむのは、儲けて色に遊ばんため、色に遊ばぬ長者に何の價があらうぞと。彼等はその言葉さながらに生きもし、生きようともしました。この生活を肯定して、更に語を加へて、人生の意義、實にここにありと斷ずるのが西鶴の浮世草子であります。彼は彼等に示してかういふのでした。人は十三までは辨へなく、それより二十四五までは親の指圖をうけ、其後は我と世をかせぎ、四十四五までに一生の家を固め遊樂する事に極まれりと。その遊樂の極こそ「一代男」「二代男」に現はれたる粹であります。

斯くも現實に立脚し世間に沒頭して居る西鶴の諸作を見終つて、さて西鶴の作とも作にあらずともいはるる「近代艶隱者」に對せば如何。そこにはまづ出世間の色調の橫溢せるを見る。

若き男が來ました。彼は我が父の家を忍び出でて遊里に通ふに、行きには後のうれひを忘れ、相會ふに一生の前後を忘れ、歸るに父母の心のほどを思ひわづらふものでした。このまよひを解て、たのしみの一言を授け給へと請

ふ。請はれた風人は斯う答へる。「足下爰にとどまり、今家にかへらん事を恐る、其心ひとへに愁をもとむるにあり、夕の行はゆふ興の時を得るもの也、今、歸るは行時の順なるもの也、時を得て順にかへるは物の常也、何をかおそれ何をか歎かん、人のおもひは限なし人の命はかぎりあり、限ある命をもつて、かぎりなき思ひを愁ふ、愚なるにあらずや、限有命を樂むに誰をかおそれ、誰をか憚らん、夫人は後に悔むを至愚といふ、時を得るにもたのしみの時を失ふをも、樂むを風人といふ、風人は行て遊ぶ時内をおもはず、遊ぶに外をはからず、是非をとがめず座とともに利して悅びをなし、人をたのしめて己を安んずる也、歸るに愁をおもはず、人の嘲をあづからず、是を風人と云、愁喜は我にありて天にあらず、此心を樂まば、たのしみをしらんと。若い男は家に歸つて後、富貴は身をいかすにたらず、財はこころをたのしむ物にあらず」とて、家を弟に讓る事として、自分は花作りとなつて世を送つたといふ。これは「近代艶隱者」の一話です。

他の二十三話の人物も大方この風人の徒でした。なほ「扶桑隱逸傳」の「其隱而遯者。大而不切。乃今採其顯而可見者。而近求之於本朝。始不論緇素。凡有逸迹者皆收之」の類でその人々の行迹は同一ではない。されば前の風人の艶に遠ざかるに異なつて、財に一心を汚さず淸富にして淸貧にも劣る事なく、遊民となる事を恐れて、世俗を離れず、内外の分を定めて此里に引込み、氣を養ひ性を樂しむ。栖興盡れば都に出でて舞妓にたはれ、舞童と遊ぶ。されど愛を請ふる心なく、富貴に奢る心なく、ただ彼と共に遊び、彼と共に慰むといふ嵯峨の風流男もあります。之を要するに、宛たる老莊者の所謂道人の持つ所であつて、その言葉もそのままに老莊の書から借り來た事の多いのを認めます。娘の病死、つづいて母なる妻の自殺、その間にも、朝に起き夕は臥するはつねの變、永く臥し永く

起るは生死の變といつて、靜に七絃の琴を撫して樂しむ人の所行はすでに莊子が範を示してゐます。「艶隱者」の一人、永代島あたりに箪瓢をふく若道心の庵室を窺ふと、棚には老莊の二書があるといふ。「扶桑隱逸傳」は何といふても佛道から出發して居ます。故に大隱より更に大なる者は佛なりといひ、「空有難見。隱顯叵測。湯々乎無名焉」を讃して居ますが、それとこれとの間におのづから色調の相異を認める。

今、ここに老莊の哲學を說かうとはしません。けれどその復歸道の思想、逍遙の思想の中に後の享樂思想を産み出す素質を有する事を認め、その大なる厭世觀は一逆轉すれば、大なる樂天觀をなす機を藏することを認めます。漢代紈素の貴公子の遊蕩も、この書によつて、自らの意義を悟り、晋代竹林の七賢士も、この理から出發して、その遁世となり享樂となつた譯でした。眞人の思想から不老不死の神仙思想を派出した事も、更に肉慾沈醉の歡樂鄕を岐生した事も、曲解され誤解されたにせよ、また老莊と相聯關してゐます。世之介の渡つた女護島の考の如きも、一縷の繫る所があると見られます。かういふ譯ですから、多くの隱遁者を檢討してゆくと、隱遁のための隱遁か、はた享樂のための隱遁かの別に迷ふ者が多い。それならば艶隱者どもは如何、かういふ點から見ると、どうやら享樂のため隱遁者といふべきものが數へられます。艶隱者とは實は享樂的隱遁者なりといひたい。

享樂、この一語を下す時、それは島原の遊びも、山林の遊びも皆一つに見る譯ですが、その中に入れば嚴然としてそこには世間的と出世間的との距離を存してゐます。わたくしどもは西鶴を以て世間的享樂を主張するものと見てゐます。彼の生活から顧ても、さうあるべき筈と思ひます。そこから「近代艶隱者」の西鶴作否定說も成立つ譯

でした。文化文政度に於ける遊蕩者輩は老莊の同讀をなして、自分達の行爲を辯解する資に供しました。西鶴の場合も果してさうでしたらうか。「近代艶隱者」もさういふ點から作られたものでせうか。それとも老莊思想をとり入れねばならぬ必然的のものが、西鶴の中に存して居たのでせうか。

日本の文藝思想史に於ける老莊思想の消長は、さておいて、西鶴に近き時代に何ものがあつたらう。

閑臥義炎。高潔慕商皓。鞠頑得道遲。帶病傷秋早。聲急蟬辭枝。影微螢依草。既與造物遊。騁懷忘衰老。

これは「覆醬集」に見えた石川丈山の詠懷の詩である。老莊の色合の濃さが見られます。彼の遁世は人生そのものに對する悲觀から來たのでなく、人生の拘束羈絆に對する不平不滿から來ただけに、それから離るるや、眞に野鶴のおもひを以て生を樂むのでした。彼は「弊廬煎藥叉猥芋。髣髴江湖一病翁」と自らを斷じながらも、東山に數奇を凝らして支那の隱者の居に倣て樂み、詩仙臺を作つては三十仙、また一詩仙を加へる事を考へて樂み、また同じ隱者なる歌の昌俊、讃の松花堂と居を隔て住み、時に相圖の烟を揚げて互に往來して樂みました。これ實に艶隱者とよぶにふさはしいものではありませんか。果して「艶隱者」の作者は之を作中に取り入れました。獨の老人跡より美童を伴ひ、彷徨として來り、其體仰ぎ見るに、布の單なる物を頭にかぶり右の手に藜の杖を突き、ひだりの手に杜氏の詩を持ちたりといふ花葉の翁がそれです。翁はいふ、一生妻といふものなければ、彼に着する事もなく、子孫なければ、後名を煩ふ事なしと。そこへ手に艶書をたづさへ、女の童に三筋の絲かけたる曲器をもたせて來た朝覺翁はこれを駭して、愛を斷捨て其もとに復るかとおもふに、邪に小童を寵し、變を見てはおどろき斷袖の思ひ

をのべて着心追悼の詩を作し、春風泪を乾かしかね、是よりして其罪少からずといふ。ここに。はしなくも、西鶴作中に、よく女道男道の位爭ひがあるのを面白いと思ひます。それは兎も角、丈山のこの思想は當然漢詩人として傳統的にうけ取れるものが、境遇の上からその强さを加へたものと見られます。もし西鶴にして、老莊に共鳴する所がなかつたなら、それは何處から來た事でせうか。

老莊の思想は詩賦を通じてそのままに奈良平安の貴紳の間に傳はり、今、五山を經て、丈山その他にまで來ました。ここに他の一脈がある。兼好その他の遁世者は、それを佛教と混じてしかも和げたものです。「徒然草」が享樂的厭世思想より成る事は明かなことです。それは連歌師の手を通じて、俳諧師にまで及びました。「徒然草」が今日にまで殘つたのは、連歌師間に傳寫せられたためであり、これが刊行せられたのは連歌俳諧流行の機運に會した爲めであることを考へねばなりません。連歌師宗祇を産んだ時勢と、老莊を産んだ時勢との間に、幾多の共通點が存在して居る。その時勢の變轉は、宗祇等の心と行とを承ける者をして、おのづから異なるところあらしめました「竹齋物語」の竹齋の洒脫な態度や「東海道名所記」の樂阿彌の飄逸な行動がそれを代表します。假名草子の發生のあとを顧る時、どうしても、それ等の脈が西鶴の作中にも强く搏つことを思はなければなりません。諸國咄の形式をとること、前にいふが如く、また「武道傳來記」にも附題して「諸國敵討」といふが如きは、大阪が諸國廻船の港たるが故に、聞書に都合がよかつたといふ見方のみではなく、これ等の系統を逐ふためと解してもよい。

この見方が、西鶴の俳諧師たる事實と結びつく時、彼が旅行の人として、足跡いづこに及んだか、また「我戀の松島はさぞ初かすみ」名所を居ながらにして戀ひ憬れてゐたかは、しばらく措いて、なほ十景の名を域内の所々に

命じた丈山を、心の行脚者と見る意味に於いて、さきの西鷺軒橋泉を西鶴その人の傀儡と見る事にとどまらず、その分身として許さなければならなくなります。なほ一つを加へる。西鶴の俳諧の談林は漢詩の影響を受くることが多い。その成句を借用して我がもの顔をする場合も多い。その例を擧ぐる煩しさに、ただ「二代男」の中から二三を摘出します。

御紋附の傘、角助かさし掛、肩で風切つて、ちらしぬる粧は、玉雨枝なき白梅落と詩人などの詠むべき所なり、御室の名木咲て、酒幔高楼寺前の花と、あちの人の眺めしも、爰程にはあるまじ、乳房隱す女より、胸あけ掛て見せたる、和朝の風俗增すべし、

斯ういふ所から類推して西鶴が必ずしも漢詩に緣遠からず、從つて、老莊そのものに觸れる機會のないでもなかつた事を考へる。しかし、これだけを以て「近代艶隱者」の西鶴著作を許すわけにはゆかない。何故ならば西鶴ならずとも、他の談林系統に屬する作家の筆になるといふ事もいひ得る事ですから。また「徒然草」の影響を受くる事多き「好色三代男」かつては西鶴の作と信ぜられたが、今日に於いては唯一人信ずるもののないもの迄も、西鶴作と認める事になりますから。

兼好の無常觀は人生をいみじきものと見る事になります。死があり、破壞があればこそ、われ等の生を樂まうとするもののあはれが、かくて成立するといふのです。その厭世思想と享樂思想とは相背反する事がない。彼は閑寂を愛し、つれづれを愛します。また彼は破れたる戀を愛し、逢はぬ戀を愛します。これも一切空といふ所から、す

べては一に歸すといふ見地からいふのでせう。否、それはひとり道と佛との思想から來るのでなく、平安朝の風流男女の體驗によつて知り得たものを加へてゐると考へられます。平安朝人は戀の情趣を貪り味はうとする。戀の苦しさは盲目的に昂る事によつてはじまる事を知りました。熱情の炎の中に冷靜の水を滴すことによつて、戀の一切は樂しきもの、うれしきものとなるの理を解しました。互に技巧を弄するだけの餘裕、その技巧を洞察するだけの落ちつきを持つ者のみがいみじき戀をなす資格があると悟りました。たえ間なきほどに經驗する戀の飽和は、自ら胸に湧く熱烈の情に節制の水を注いで、かういふ斷定を導き來りました。故に戀を得た共のうれしさのただ中に、これを失ふ時の哀しさを考へよ、泣けよと兼好もいふ。

かういふ遊戲性の戀愛が、あの道義のやかましい江戸時代にも許されました。それは廓に於ける戀愛です。廓の戀愛にして、この制限がないとしたら、廓は成立せず、廓の興趣は空なるものとなつて了ふ。徒然草はその意味に於いて恰好な廓通ひの風流男の敎訓書となります。あの「たきつけ」「もえぐゐ」「けしずみ」は、ただそれを繼承したのに過ぎない。その文章をそのままに踏襲し、その意ある所を敷衍したに過ぎない。しかも、これが後の浮世草子「好色一代男」の先驅者でありました。人は西鶴を粹法師といふ、彼は俳諧師といふ傳習のもとに僧形であつたから、この名は當然ですが、彼はまたそれによつて、雙岡の法師ともならび稱せられるものです。ただし、後の法師は前の法師の所說を口うつしにするものではない。わけの聖たる實に彼みづからの體驗から來て居ます。

廓に入りびたりの彼は、よく廓の眞相を解し遊女の眞相を解しました。その理解を筆にしたのが彼の好色本です。彼は女郎の髮切り爪切の裏面を知りました。死人のそれを買つて、眞のものは手管の男に遣はして、外の五七人

の大盡へは貴様故に切るといふて、僞のものを遣るのです。これを「一代男」にも書いた彼は「二代男」に於いてはなほ立入つて、その指は我儘には切らせず、親方に斷りいうて、手管の男でない實證を示してから切る次第を書きました。揚屋町の北口より南の門まで、太夫ぬめり道中百九十六足の所から、太夫の太帳遣帳から決して笑はぬと賭け事をした女郎を笑はす上工夫は、耳近く寄つて、節句も今ぢや、まづこれで拂をしやれと、小石の紙包を投げ出すにある事も書きました。女郎の勤の暇の百物語が嵩じて男をだました心の鬼の物凄き時、話しの當人共が幻に顯れて恨たてる、その時にある女郎が各揚屋の算用殘りはといへば、借金ほど好かぬものはないのか、此の聲聞くと共に姿は消え失せたとも書きました。さういふ様に委曲を盡した所から、粹の叙述がはじまります。

尾州の傳七と世之介とが野秋を中にしての爭ひを、粹に捌いて、一日はさみにあひぬ、昨日の噂を今日いはず、今日の事を明日語らず、そなはつての利發人、文つかはしけるにも兩方おなじ心をつくし、起請もお二人より外は書ぬといふ仕なしとなり、さては不思議の出合、此時和談して三人同じ枕をならべながら、下卑て首尾する譯もなく、あぢな事許、前代未聞の傾城狂といふことにまでなりました。妬みは野暮の皮、恨もまた不粹の基です。實はそれほどに存ぜねばと起請の斷りいふ小太夫に、それなら惚れぬといふ誓紙を書けといふ客の譯知り、老いての後に子供手代にその誓紙取り出し、惚れませぬといふ起請、世にない事なれど、これにさへ見棄て難く心を盡したほどに、今の世智賢き女郎の僞誓紙とつて喜ぶはあさましい、惡所狂はほどがよいといひきかすこそ、粹な異見ともいふべきでせう。

このやうな粹の窮る所は何ぞ。曰く道。かう胸に浮んだ時、はしなくも「近代艶隱者」の岡崎の市隱の言葉を思

ひ出します。

色より至道に入こそ誠の道なれ、此道のいたりといはば、色におぼれ情にひかれ遊をことと成にはあらず、漸入ては人のこころばせを知、世のままならぬ常をさとり、契しかねことの夢なる事を思ふは此はじめたり、初春の朝我閨に曙の鐘を哀み、宿の軒端に霞を見るもおかしく、秋の初夕、佛前に魂まつる業、物すごき暮の冬も、月を見るこころとなつて、其色里の便きかぬ事も還てたのしむは、至道に入の門たり、形は外をかさらず美人の色をわすれ、心を懐て靜にし、自默して言をやむるは心をゆたかにせん爲也、ゆたかなれば色心動ず心うごかねば形を勞せず、形安ければ心悅ぶ、こころ悅時は常に色有て樂足り、いまだ逢見る逢見ぬをいふにあらず、此境にいたれば、形うるはしく老に至る事遠し、是より物と相さかはず、知を捨て愚に入時は色道の至極となる、

これを讀むものは、「徒然草」の一節を思ひ出さざるを得ないでせう。それはともあれ、「一代男」より「二代男」に至つて、西鶴の遊里の裏面、遊女の實情の穿鑿が漸く微に入つて、あの穿ちといふ位にまでなつて居る事から、また「一代男」の結末は女護島渡りであり、「二代男」のは女色の臺の大往生であるといふ相異から、「一代男」「二代男」さて「近代艶隱者」とに展開をあとづける事は許されないものでせうか。

切らせた指を百八の珠に繫ぎ、是を後世の種となし、三十三の三月十五日限に、さし引なしに遣棄て、大盡大往生を極めける、これ世の中の浮れ男に物の限りを知らしめん爲なりといふのは世傳の最期でした。一代の遺緣の文積重ね、煙の中に手を合せ、眠れる樣に臨終の時、日比撒きおきしを種の一步小判の花降り、世を先立ちし太夫ど

もが諸の菩薩に姿を變へ、八葉の小布團に救ひ取る臨終は、是死んでの德、無心いはれず、五節句構はず、常住不斷の上首尾、頭北西面の樂床、限りを知らず贊歎を受くるに値します。かくてもなほ、これを色より至道に入る者の前提として考へる事が出來ないのでせうか、題名の「艶隱者」の「艶」は單なる享樂でなくて、やはり色の享樂を事とする譯ですから。

「好色一代男」を「一代男」と「艶隱者」との中間において「艶隱者」の西鶴述作の可能性を見出さうとすると、巻頭の「我化て死し、又化して生じ」もさてはとおもはれ、または「重箱に飯入れとあへ物一つ瓢箪の酒も樂みは同じ、絹幕括枕の見透くに、風呂敷引張し中に、入子鉢の明空を枕にしたも、夢幻の春じやもの、恥ぬべき事にもあらず」、といひ、また「大鵬は九萬里駈り、周の穆王の乘れし駒を」といふのも、もしやと思はれます。もしそれ「曉風殘月夜の凉、今朝思へば夢」のごとき語句にあひ、「和國の内外の濱、松前の島渡り、人家離れて、枯野の薄分けて行くに、入海三里の氣色、蝦夷が千島の松しやれて、岩自然の美形、浪に數寄る花貝、紅雪紫蘭の眼を奪はれ、夕日磯に落ちて八色の玉を洗ふ、古木青龍動かず、洲崎の金烏人を見しらず、」の如き筆法を見ると、もう「艶隱者」とは同一步武にありといはうとします。

西鶴の浮世草子を讀むと、世之介も、世傳も、世傳及びくにによつて傳へられた粹客も、皆彼の分身である事が合點せられる。艶隱者どももまたその分身といひ得る。

西鶴もかつては耽溺の人でした、今はわけの聖です。彼は當時の町人どもが階級制度に對して半意識、半無意識

の中に感ずる憤懣以上のあるものを有してゐた筈です。町人の憤懣は廓によつて和げられる。彼の憤懣もまた廓によつて和げられもし、形も變へられもした。さうして現はれたのが談林であり、浮世草子であります。彼は談林の俳諧師であり、浮世草子の作者でありました。故に彼は廓に遊ぶ富豪に陪して、その興をたすくる幇間でもあつた。當時に於いてはやむを得ざる所でせう。洒落本の京傳もまた十八大通などの腰巾着であり、幇間であつた。

そこに二人の差をおもはねばならない。京傳は屈從し、西鶴は傲慢であると。その西鶴にして幇間は遊女と共に哀しき身すぎであり、淺ましき職業であると思つた事が西鶴にあつたらうか、面白をかしく笑はせておいて、後ざまに老獪の舌を永く出す折がなかつたらうか、その姿を、われながら嘲る瞬間がなかつたらうか。幇間たる彼は理に於いて客より以上に廓を解し、廓の作法に通じ、廓の表裏を知るべき筈です。この客に對する優越の感、極言すれば「徒然草」にいふ自讃、また俳諧者流が好んで用ゐる自讃の感は、客のいたらぬ仕うちを憎みもせず、罵りもせず、冷然として笑つて濟ませる。たまたま親切氣の起つた時にのみ、教訓の態度を取らせる。笑ふべき事象に對する時、彼にはかなり複雜な笑が胸に迫る。ただそれが、人に反射すると、單なる大笑ひとなつて、笑はれたその人も一緒に笑ふ樣な、罪なき諧謔となつて表はれる。進んで渦中に投じて共に泣き共に悶え、共に憤るといふ樣な態度を取る事なしに、その泣くものを泣くままに、悶える者を悶えるままに手を觸れで見て居り、變動窮りなき相をおもしろしと思ふだけです。よその戀が成らうが破れようが、面白みにかはりなし。人の家が榮えようが、分散せうが、人の息子が勘當受けようが、許されようが、この世の樂しさにはかはりはない。身は境遇と共に變はらうが、それをも面白しと觀ずる事が出來るほどに、心を流水行雲ならしむるのが、この夢幻の世に善處する所以であ

ると考へてゐました。

これを艶隱者の一人に代言せしむると、我はつねに四時のうつり替りをたのしみて、飛花落葉に無常を觀じ、變化の境をおどろかす、老病を元天利と明し、貧富の分を忘れて爾じとして暮すといふ事である。されば七日のうちにと調伏した驗は、忽ち親仁眩暈心にて倒れたのを機に、不孝息子が毒藥咬んで素湯で飲まさうとして、却つてその毒に當つて空しくなつた事も、表面は「本朝二十不孝」の序文通りに教訓と解しても、底意は親仁が蘇生して子の死んだを歎くをかしさにあると考へられます。「好色一代女」にしても、放浪の女の身のかなしさをかこつのでなしに、浮世に揉まる相のをかしさを樂しむのが作者の肚と思はれる。「一代女」のをはりにもいうてゐる、「たとへ流を立たればとて心は濁りぬべきや」と。

幇間の西鶴が廓を出でて家に歸ると浮世草子の作者西鶴と化する。錦屋町のさびしい住ひは昨宵の一座の面白さを覺え書にする西鶴をして、かかる遊興の究極を考へさせ、「開ける梅曆に春を覺え、靑山かはつて白雪の埋む時冬とはしられ」といふ「一代女」の好色庵に思ひ至らせた事でせう。彼の棲家は、自然の岩の洞、靜に片庇をおろすものではないにせよ、「宵は時雨して、軒ちかき板屋に冬を、はじめてしらす、――枯野につれて、人の心も次第に山の眠るが如し」といふわびしさの中にあつたらう。かういふ風情が俳諧師傳統の住居でした。少くとも俳諧師はさういふ幻影の中に住んでゐた。彼の師宗因は俳諧師たる自らをかへりみて、身はいやしくて、四の民に交らず形は釋氏に似て精舍にも住せず、心は山林にありながら、塵裏にはしるしれ者といつた。西鶴を以て同じ考を持するものとしたならば、「近代艶隱者」の序にいふ如く、世の中を思ふに何か珍しからず、鳥に嘴あり、羽あり、

鳴も飛も心にまかすべし、人ながら人ほどかはりたるものはなしと、無常を隣に、夢を我宿に語る時が實際にあつたと考へられないでせうか。さう考へ來つた時、醉うても、醉ひきれぬ我は何ぞ、傍觀下瞰、ただ冷に笑うて濟す我は何ぞと自分に問ひはせぬか。問はれた自分の答ふる所は、艷隱者どものいふ様な言葉を以て答へた事でせう。今更に愕然として驚いた西鶴は、今更に俳諧の傳統を思ひ、教養を思うて老莊にまで遡つてはじめて解する所があつたでせう。師の宗因もいふのでした。

老莊の胸より空の霧はれて
　よしや吉野の花も候べく

そこに彼の見る世の一切の樂しみを許す理が存すると考へた事でせう。私は西鶴がどれ程の老子莊子の書を讀みこなす事が出來たかを疑問とします。ただ彼の生活、彼の環境はその意のある所を掬むことに於いて、他の讀書生より早からうといふ事は領かれます。彼は一方には自分の胸中に徂徠する心のあるものを誇張化する事によつて、老莊のいふ所にまで近づけようとしました。さうする事は悪い事と思はない、自らを高きにおく所以と考へてゐる事でした。永い俳諧の傳統はなほ西鶴をして此の念を抱かしめた。彼はこの思ひを筆にしようと思つた。しかし、日頃の題材と異なるために筆の勝手が違ふ、それはよしとしても、老莊を高しと見る一念はそれから離れる事を難くさせ、老莊に熟せざるそれは、離れて即くの工夫にうとくさせました。その成句をそのままに用ゐざるを得なかつたのもこれがためでせう。彼は彼が知り得るかぎりの支那古典の文辭を用ゐました。さうして出來上つた「近代艷隱者」が彼の苦心の作であり、彼の得意の作であるが、それだけに空虛な作、失敗の作となつたのでせう。

斯ういふ様に西鶴を見、「近代艶隱者」を見る事は、つひにゆるされない事でせうか。この推測をゆるされてから、更にとりかかる細微な穿鑿が、西鶴著作を確める事になりませう。

けれど、西鶴は遊里に出入する人であり、座裏にはしる人であります。雲を樂む仙でなくて人を樂む人でありす。然し、その心の底にはこの隱遁を以て高しと見るおもひがあります。日頃はただ心の一部を占めるに過ぎず、みづからもその存在を忘るる程のものでせうが、その存在が彼の全創作をして意義あらしむるものでした。「近代艶隱者」は實際以上に理智的に構成したものですから、そのままに彼の心として受取る事は出來ないにもせよ、彼の藝術の本義を考へる時に、對比せざる可からざるものと考へます。

もし後の八文字屋本に魂なしといふとすれば、また西鶴模倣の作に西鶴らしい點なしとすれば、つまり、西鶴をして「近代艶隱者」を捏ち作らせ、得意がらせるあるものを缺くがためといふ事になりませんか。私は、「好色五人女」の八百屋物語の終りに附した「さてもさても取り集めたる戀や哀や、無常なり、夢なり現なり」も、そのあるものが、そのままに迸り出でたものと解します。鹽賣の樂助がただ鹽賣のままの姿と、心して「緘留」の中にしるされたのは、西鶴が彼を市隱を以て呼ばうといふ成心を離れ、隱遁趣味になづまざるためといはうとします。そこから考へて來ると、「近代艶隱者」は西鶴そのままの形でなく、幻である、その艶隱者は現實の形でなく、理想の影である。影なるが故に薄しともいはれる。けれどこれは未だ西鶴作を確定するものではない。その確定までは、別途の考察の順序を履む必要があります。

それにしても

浮世の月見すごしにけり末二年

淡々乎として生涯を一句に纏めた彼の辭世を何と見ませうか。

仙皓西鶴

先師の墓碑にただこれだけを銘した團水等の意は那邊にあつたでせう。

（大正十一年「早稻田文學」）

國姓爺合戰の紅流しに就いて

——黒木勘藏君を追想す——

一

近松門左衛門の國姓爺合戰以前、すでに鄭成功の事蹟を題材とした淨瑠璃があつた、錦文流の國仙野手柄日記これである、しかも二者の間には極めて緊密な關係がある、といふことは今日に於いてこそ常識になりきつてゐるものの、今から十數年前は必ずしもさうではなかつた。錦文流に其の作のあることすら知られないほどであつた。それなのに、わたくしが割合に早く共のものを讀み、また近松の作との交渉を考へることの出來たのは、一に亡友黒木勘藏君の斡旋があつたからである。君の淨瑠璃作品に博く通曉してゐたことは今更縷言を要しない。邦樂年表の編著裕にこれを示してゐる。懶惰の性、流布普遍のものすら眼を通さうともしないわたくしが、柄にもなく奇書珍籍に寓目することは君の慫慂によるものが多い。國仙野手柄日記の如きも、まさしくそれであつた。

國仙野手柄日記の解說及びそれと國姓爺合戰との關係に就いては、說いて精しくないまでも君の書きのこしたものがある。これもまた此の事を常識化するに與つて力あつた一つであらう。これをここに寫しとるにも感多少。君

はとみに病んで遽しく世を去つた。音容いまだあざやかなるに、時は早くも流れて、また君と別れた悲しい秋の半ばとなつたのである。

此作（國姓爺合戰）より前に國姓爺を題材として作られたものに國仙野手柄日記といふのがある。錦文流の作で、山本飛彈掾座に於ける信濃掾、岡本今文彌の正本である。著作年代は明かでないが正本の終りに、山本彌三五郎受領手づま太夫山本飛彈掾太夫今文彌正本とあるのによつて見れば、彌三五郎が飛彈掾を受領後間もない頃のものであると考へるが、彼の受領は口宣案によれば元祿十三年十一月廿五日である點から推すと、此作は同年末か翌十四年春頃の作と考へてよいと思ふ。雲南の龍明王が韃靼王の爲にその居城を圍まれたので、皇女梅だら女は圍みを脫して日本に渡り、智勇兼備の士を語らひ父王を助けようとして、御影の沖に船がかりし高樓に遠目鏡をすゑて往來の武士を目利し、ここに鷲尾遠矢之助氏照、同矢柄之助輝景の兄弟を得る。兄は色事師、弟は大力無雙の勇士である。二人は彼地に渡つて奇計と武略とを以て韃靼軍を敗つて龍明王を救ひ、その功で兄の遠矢之助は太子となり、弟の矢柄之助は國姓爺となつたが、本國からの迎があつたので別れを告げて歸國し、兄弟が多年父の敵として狙つてゐた大友彈正を討果すといふ筋である。水からくりなどを盛に用ひた荒唐無稽のものであるが、近松の國姓爺より先にかういふ作のあつた事は注目すべきであり殊に彼の梅だら女と此の栴檀皇女とは頗る類似して居るし、又これの第五段の吳三桂の山蜂を入れた竹筒の計略は旣に彼の手柄日記に用ひられて居るなど、兩者の間に多少の關係はあつたとも見られるので、今日迄餘り

世間に知られて居ない作である故玆に一言して置く次第である。

これは昭和二年に日本名著全集の近松名作集の解說として執筆されたものであるが、その時は二者の間に相應な關係があるとはいひながら、まだ改作とも飜案ともいはれなかつた。それを明かに斷言したのは翌三年、日本文學講座の近松時代物研究に於いてであつた。おもふに此の二つの作品の交涉のあとは、どちらかといへば其の跡の著しいものである。わたくしなどは讀下直に飜案呼ばりをしたのに、君の愼重な態度はなほ其の決定に多くの時をおいたのである。さいはひに此の事は君の裏書があつて獨斷の誚をうけずに濟んだとはいへ、輕卒わたくしの如きはまさに愧死すべきである。

二

近松が國仙野手柄日記をどういふ態度で飜案改作したかといふことは、彼みづからの言葉から知られさうもない、しかし作中を摸索すれば多少の手がかりも得られよう。現に黑木君の文中に擧げられてゐるものからも求められる。

國姓爺合戰の第五段の軍評定で、吳三桂は韃靼勢を鏖にするとて頻りに祕策を說いてゐる。其の一案、山蜂を數多く入れた竹筒を士卒に持たせ、これを敵前に捨ててわざと逃げ退せる。韃靼勢は食物と心得て筒の口を拔く、山蜂は賊兵を毒痛させる、そこをとつて返して攻めつけると說明しながら、彼は筒の口を拔いて見せる。數多の蜂が

鳴羽ぶいて飛んで出た。彼はまた言葉をつづける。賊兵どもは竹筒を淺はかな謀だ、燒捨てて恥かしよと積み重ねて火をつけるのは必定、其の時筒の底に仕懸けた火藥が一時に爆發して敵兵に殘る者とては御座るまいといひながら、火繩を筒にさしつける。亂火の仕懸がぱつと飛び立つた。しかし國姓爺は尤な計略と頷きつつも、其の獻策を採用しない。韃靼王を母の敵と目ざす彼は、無二無三に之を討つてとることを欲するからである。全篇の中樞第三段の終始である。しかし、それは表面の理由である、他に裏面に之に託するものがある。

竹筒から山蜂の飛出でて賊兵を惱ますこと、また竹筒を燒いて猛火爆發することは、國仙野手柄日記にすでに見えてゐる。演出の場は相應の舞臺效果を擧げて喝采を得たやうであつた。國姓爺が吳三桂の策を退けたのは、畢竟近松が飛彈掾座の舞臺の工夫を襲用するを欲しなかつたためである。其の面影を吳三桂の試みにほの見せて、事を他に轉じたのである。それならば近松は國姓爺合戰にあつて事理の到徹のみを期して、舞臺の變化を念としなかつたかといふに、決してさうではない。むしろ飛彈掾座などの企て及ぶべくもない變幻の工夫を凝した、しかもなほ手柄日記が有つ荒唐無稽を排除したのである。此の二方面の成功が並行したればこそ、十七箇月の連續興行を贏ち得たと共に、其のテクストは手柄日記が殆ど散佚されたのに拘はらず、淨瑠璃中の最大傑作を以て今に讀みつづけられるのである。

近松の飜案ぶりの一端は、また梅だら皇女と遠矢之助兄弟の渡唐を小むつと梅檀皇女の道行に移したことからも推知される。小むつが變裝した男姿、撫付鬢の大たぶさ、朱鞘木刀眞紅の下緒、花の口紅雪のおしろいとは、これぞ女蕩しの遠矢之助の名殘ともいへばいへる。すなはち近松は錦文流の趣向の輪廓をさながらに殘して、內容を全

く改めたのである。小むつの若衆姿の如き、渡唐の後は夫國姓爺と共に戰場を馳騁するためにはなつてゐるが、なほ他にもつと重大な條件として扱はれてゐるやうである。其の條件の一つは神功皇后の事蹟を藉りて、日本武勇の精神を代表させることである。皇后は三韓を征伐するに當つて、髪を水に垂れて吉凶をトし、分れた髪を其のままに男のすなるみづらに結うて出陣されたのであるが、今の小むつのなす所に先後の違ひはあるものの、男裝することと、吉凶をトすることにかはりはない。假用のあとの歴然たる理由である。故に小むつが住吉の神に就いて語る言葉の中にも、神功皇后と申す帝、新羅退治の御時などともいふのである。此の事或は近松の筆の辷りであつたらうか。

小むつと梅檀皇女の道行はまた住吉の神の奇特を語る筋合でもあつた。さきに第二段の千里の竹に、伊勢大神の威德を示し、ここには住吉神の神祕を見せる。一は夫の身を守り、一は妻の身を護る、いづれにしてもいやちこな日本神明の稜威である。作者近松が國姓爺合戰の全篇を貫かうとするものは日本精神の發露である。唐土を舞臺としたのも、隨分共の發露を鮮明にする手段でないかの感をさへ懷かせられる。道行の條に謠曲白樂天を引用したのも、尊き日本のおん神の前に唐土の人の何するものぞの意をしかと見せたのであつた。

唐土の舞臺なるが故に、日本の精神を日本の舞臺よりもまざまざと見せられるといふことは、和藤內が父を唐人とし、母を日本人とするがために、なほ日本精神の具體的人物としての效果を十分にすることの出來るのと軌を同じうする。しかしここに日本精神といつたが語感はやや過ぎる、さうまでの思想的意義を有つのではない。たとへば延平王國姓爺の龍馬の原の本城、陣幕外幕錦の幕、滿目ただ唐風の舞臺に、勸請されてゐる伊勢兩宮のおんはら

ひ大破廉を見ては、ぬかづくほどの觀客の心意氣をいふのである。竹本座の大衆の日本精神とは、けだしそれほどのものであつたらう。近松は最もよく其の間の呼吸を心得て國姓爺合戰の筆を執つたのである。

三

それにしても面白いのは此の道行である。うち見には美しい男と女との常の戀の道行と見られる。詞曲にさうと取れば取れる文句もある、勾欄にはそれらしい振もあつたらう。しかも二人の思はくはさういふ艶な筋ではない。さりとて哀しいわびしい常の道行でもない。渡る唐土に對する二人の胸の思はくは全く違ふ。此の胸の相異は其のままに二人の服裝に現はれてゐる。一人は日本の若衆姿、一人は唐の女姿、世にこのやうな珍奇な打扮の道行があらうか。

國姓爺合戰の舞臺を通じて考へれば、唐と日本の服裝には相應な條件があるやうである。服裝の變化には必ず何等かの意味が伴ふ。千里の竹で唐人の雜兵どもの頭だけを日本風にする場合などはさておいて、まづ注意されるのは和藤內の父老一官の服裝の變化である。たとへば第二段もろこしぶねの場で日本の服裝をしてゐるのは、梅檀皇女の唐人姿を存分に奇異の感を懷かせるためである。其の老一官をして渡唐の船中で唐服に着かへさせたのは、古鄉へ歸る唐錦と表面に釋いてはゐるが、眞意は樓門また奧殿の場に、母親一人を日本姿にするためであらう。――和藤內の服裝ははじめから和ならず唐ならぬ異體の服裝である、そこにも作者の意圖は見えてゐる――それは樓門の場はともあれ、奧殿の場で存分に日本精神を發揮させるためであつたらう。

奥殿で和藤內は唐服に着かへる、和唐混淆の衣を脫して、純然たる唐人姿となる。母の日本姿はいやが上に目立つ。さうして母は自害する。日本精神は十二分に舞臺の上に發揚される。

和藤內はすでに唐服を着用して延平王國姓爺となつて三軍を指揮する。然る後に彼が行ふ軍法戰術は悉く日本流である、ここにも和にして唐、唐にして和なる和藤內の實が唐服と相俟つて明かに見られる。

小むつと栴檀皇女の道行、いへば吳越同舟ならぬ和漢同舟の道行の異裝も、おのづから見る目珍しい外樣だけのことでなかつた。ただ此の場合は外の場合ほどに內容との關係を深くしてゐない。時に象徵的なといひたいほどの外の場合から見れば、やや珍しい點に工夫があつたとも思はれる。國仙野手柄日記の和唐服裝の關係は、大方はこの道行の場合ほどの淺さのみである。手柄日記と其の飜案改作の國姓爺合戰の相異はここに見られる。まして服裝以外の和唐舞臺の變化と內を貫く事理の關係を廣く合はせ考へれば、其の相異はいよいよ顯著なものになる。

四

道行の文は、

唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和もろこし打ちまぜて、さしもならはぬ旅立やにはじまる。此の句は舞臺の人の姿をただにうつし出したに過ぎない。しかも說く者はいふ、

此文句うはべは何事もなけれど、底意にふまへたる故事ありて書出でし也。莊子に蝸牛の角の上に國二箇國有り。左の角の上なるを蠻の國と名づけ右の角の上なるを蜀の國と名づく。此の左右の國互に爭うて戰ふと云へ

り。此の語の心をふまへて、中昔の前句附の笠に、かしらの上に國が二箇國といふ題ありしを、加賀笠の下にさしたる薩摩櫛といふ句を付けて、勝句となり、世上の人の語り草となる、此の道行の出の文句、また是れをうつしたる也。唐子わげには和國のさつま櫛、和國の島田髷にはもろこしの唐櫛とやまともろこし打ちまぜてといひかけて、梅檀女と小むつと打ちまじりての旅立をことわる也云々。

說く者は、國姓爺合戰の要句などを解釋した難波土産の著者穗積以貫である。以貫と近松との交涉は甚だ深かつた。近松の藝術に傾倒せる共の人の解釋には聽くべきものがある。また近松の造句には以貫がいふやうな手續によるものが多い。今の場合必ずや以貫が指示する如きものであらう。殊に唐土を舞臺にする作だけに、語句の彼の詩文に據ることの外に、趣向に彼の故事を踏まへることも常よりは多いやうに思はれる。花いくさが天寶遺事にいふ鬪花の故事により、九仙山の仙客圍碁が知られたる斧柯爛盡の故事により、第五段、一官の人質のくだりが漢楚の戰記による如きこれである。しかも日本に關することどもには、今牛若といひ、先例吉野の碁盤忠信といひ、やや說き明しの心持があるのに引きかへて、彼土のものに就いては殆どそれを斷ることがない。花いくさの條、わづかに同じ天寶遺事所載の風流陣の一語を漏したのは、むしろ顧みて他をいふやうなものである。作者は何故にさういふ態度をなすのであらうか。やや考へねばならない。

それはそれとして、難波土産の著者が道行の起筆を解するやうな往方で、わたくしは第三段の紅流しの場が紅葉傳情の故事に本づいてゐることをいはうとする。此の事の始終がおのづから日本の故事を明かにし、唐土の古事を蔭にする態度を明かにすることにもならう。

和藤內は父の一官と母と相伴うて義兄甘輝の獅子城の門前に立つ。韃靼一方の將たる甘輝の妻の錦祥女は和藤內の異腹の姉である。父の一官は其の二歲の折に日本に渡つてゐたのであつたが、二十年後の今、祖國大明のために援兵をまだ逢ひも見ぬ聟の甘輝に請ふとて、ひそかに娘をたづねて來たのである。錦祥女はたえて久しい父親との對面に心は躍れど、夫は留守なり、他國人を城內に入れるなとの韃靼の國法は嚴重なり、つひに父を內に招くすべはない。此の時囚人ならば咎めはあるまいと、母はわれとわが身に繩かけて貰つて門內に入らうとする。夫に代つて繼娘から聟に說いて貰はうためである。錦祥女は門外に待つ父と異腹の弟にいふ。

此城の廻りにほつたる堀の水上は、みづからが化粧殿の庭より落つるやり水の、末は黃河の川水とながれ入る水筋なり。つまの甘輝が聞入れておん願ひ成就せば、おしろい溶いて流すべし、川水白く流るるはめでたきしるしと思し召し、勇んで城へ入り給へ。またおん願ひかなはずば、紅をといて流すべし。川水赤く流るるはかなはぬ左右と思召し、母御前を受取りに、門外まで出給へ。善惡二つは白妙と唐紅の川水に心を付けて御らんぜよ。

斯うして奧殿に入つた母親は、折から歸つて來た甘輝に逢うて願のほどをこまごまと語る。甘輝はさた唐土丈夫の意氣で、女房の緣にひかれて味方したといはれるのが口惜しいと錦祥女を殺して、さて舅と姑の願をうけひかうとする。母は望みのかなふのはうれしいが、繼娘を殺させては繼母の義は立たないと、身まづ死なうとする。錦祥女は事のつひにならぬを見て、約の如く紅を流した。

瑠璃の鉢に紅とき入れ、これぞ親と子が、渡らぬ錦中たゆる、名殘は今ぞと夕波の泉水にさらさらさら、落ち

たぎつ瀬のもみぢ葉と浮世の秋をせきくだし、共に染めたるうたかたも紅くくるやり水の、落ちて黃河のながれの末、

巖頭に立ちつづけて、吉凶いかにと待つてゐた和藤内は、憤怒のままに早速城內に亂入する。甘輝と鬪はうとする。錦祥女はおしとどめて、あの紅こそはおのが胸の血であると襟を開いて傷所を見せる。死を以て夫に親と弟との望みをかなへてやるやうにと哀願する。夫も涙ながらに聞き入れる。母もまた娘一人は死なせはせじと自害する。國姓爺合戰の中の眼目第三段を縫ふ紅流しの始終は斯うである。これを今更に書きしるすのもをかしいが、依憑のものと比較しようとする今は、一應拔き出しておくのが順序であらう。

紅流しの囚つて來る紅葉傳情の事、またよく知られてゐる。しかし比較の前には、亦書きしるすべきであらう。唐の禧宗皇帝の代、于祐といふ青年が宮城の近みを逍遙した。時は秋、流れて宮墻を出づる御溝の水に浮べる木の葉の色とりどりなる中に、一きは紅燃ゆる一葉に、何やらん文字のやうなのが見ゆる。怪しんでかい寄せて拾つて見れば、一首の詩が讀まれた。

流水何甚急　　深宮盡日閑
慇懃謝紅葉　　好去到人間

于祐は此の詩を誦して其の詩の主をおもつた。いづれは九重の宮居の外の風なつかしがる美しいおん方のすさみぞと推しはかつてゆかしさに堪へない。おのれも二句を紅葉に題して御溝の水上に浮べた。此のもの流れ流れてみ墻の中に入つて、あの詩の主の手に拾はれよと祈りながら。其の句にいはく、

曾聞葉上題紅怨　　葉上題詩寄阿誰

于祐の曾聞葉上題紅怨といふのも、さきに其の事があるからである。本事詩に斯う見えてゐる。

唐の詩人顧況かつて一二の詩友と宮苑のほとりを逍遙した。水に浮び流れる梧桐の大葉にものの書かれてあるのを拾つた。書かれたのは一首の詩であつた。

一入深宮裏　　年年不見春
聊題一片葉　　寄與有情人

況讀んで其の人をゆかしみ、翌日一首を題した一葉を上流に投じた。

愁見鶯啼柳絮飛　　上陽宮女斷腸時
君思不禁東流水　　葉上題詩寄與誰

宮女春愁の詩がたまたま顧況の手に入つたのは偶然である。況が和酬して上流に投じたのは其の偶然を再びしようとするものである。斯くの如きことは果してこれを期待されるであらうか。況が題葉を投ずるの後十餘日、人あつて苑中に游び、また題詩の一葉を拾ひ、これを況に示した。

一葉題詩出禁城　　誰人酬和獨含情
自嗟不及波中葉　　蕩樣乘春取次行

これによれば況の期待は達し得たのであつた。祐が二句にこめなした願ひは況が捉へ得た偶然をおのれにも分けまへしようとてのことであつた。しかも祐は惠まれないやうである。祐が題詩の紅葉を水に浮べて後、ついにそれ

が宮中の人の手に觸れ得たしるしを知るよしがなかつた。斯くて空しく年を經た。

惠まれないのは于祐其の人の身の上である。彼はいくたびか試に應じて登第することを得なかつた。世をわびしくも貴人韓詠の門下生となつてゐる。其の頃帝が數多の宮女を下して人に嫁がせられたことがあつた。韓詠は祐の不遇を愍れみ、宮女の一人を媒した。其の者は富み且美しかつた、韓夫人といふ。夫人嫁して後やや時あつて祐の書笥に題詩の紅葉が藏せられたのを見た。驚いてこれぞおのが戲れにものしたものと夫に告げる。夫はこれを拾つたこと、また別に題詩の紅葉を浮べたことを語る。夫人はさきに其のものを御溝に得て今に秘め持つてゐると書笥から取り出して示した。二人は相顧みて宿縁の深きを喜んだ。夫人は其のよろこびを一詩に寓した。

一聯佳句隨流水　十載幽思滿素懷
今日卻成鸞鳳友　方知紅葉是良媒

まこと于祐は惠まれたのである。さきに羨んだ顧況の偶然をおのれのものとするばかりか、ついに此の佳配を得たのである。風流の話柄世に大に行はれた。ただ其の行はれた結果、傳聞漸く其の實を轉じて諸書の記載必ずしも一つではない。或は人の名を異にし、或は時と所を異にするものもある。今しばらく太平廣記の敍するところに從ふ。おそらく近松は其の書によつて之を知つたのであらうと思はれるからである。いな、近松ばかりか、其の頃の人々は其の書によつて之を知るものが多かつた。元祿十四年刊の諺草の中の紅葉の媒の條下また太平廣記を引用してゐる。

この紅葉傳情の雅談と紅流しの趣向との間に飜案といふことをおいて考へようとする者は、御溝のほとりにおの

が翩和の句を浮べて後の幾日を、何かのたづきや得ると水の面眺めてくらす于祐を、吉凶いかに赤白いかにとやり水の末を見詰める和藤内に書きかへたのであると見る。水上から紅を題した紅葉を流して前の詩の主の手に入れかしと念じながら、あゝかなる戀の望みをさへかける于祐を、胸の血を流しながら、これを紅と見てはいかに父と弟が歎かうぞと悶え苦しむ錦祥女に轉身させたのであると見る。一片の紅葉よく宿縁を全うさせる于祐夫婦のやさしさを、義のために飽かず飽かれぬ仲を死に別れる甘輝夫婦のかなしさに變らせたのであると見る。斯うまで彼と此とを變轉させることに於いて、近松ひそかに會心の笑みをもらしたのであらうと推測するのである。さう推測することに於いて、近松が竹本座の大衆のためには舞臺の上の效果をあまで存分に扱ひながら、なほ几上にかうまでおのが感興を縱にする技倆に驚くのである。此の二面の働きがあつて、はじめて傑出の一篇國姓爺合戰を成し得たのだと斷じようとする。國仙野手柄日記がついに側にも寄り近づきかねる理由の一半をこれに歸さうとする。

最も世に知られてゐる事をことごとしく引用するのもいかがなれど、南水漫遊に斯う見えてゐる。

最明寺殿百人上﨟といへる院本、おほけなくも靈元法皇叡覽ましまし其頃歌人の聞えある公卿を召させ給ひいづれも秀才なりと雖も、近松とやらんには劣れりとて、彼院本を取出し給ひ、最明寺が道行ぶりに蝶の翼のおしろいをこぼして、梢には鶴の霜毛をぬぎかくる、雪は花より花多きと書けり、是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出し書ける所、石曼卿が雪を詠ぜし詩に、蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉といふ句を和語にうつせしならずや、かかる才智を以て和歌を詠じなば、秀逸數多ありぬべしと御感あらせけるとなん。

近松の作中に法皇の讃に値するものは數多い。しかし此の紅流しほどの鮮かさで飜案したものが他にあらうか、

わたくしはつひに其の例を見出すことが出來ない。わたくしは法皇が此の飜案を知ろしめされたなら、いかに絶大の辭を以て評されたかを考へる。

五

斯ういひ來つて、今更に紅葉傳情の故事を紅流しの夫婦別れに飜案したのだといふ推定が果して正しいか、それが獨斷でないか、ともう一度たしかめる段になると、ややたじろがねばならない。これも亦國仙野手柄日記と國姓爺合戰の關係のやうに、しかとした證據を持ち合はせないからである。近松の言葉として傳へられたものがなく、難波土産また觸れるところがない。然らばこれも作中を摸索するより外に途はないやうである。

これぞ親と子が渡らぬ錦中たゆる、名殘は今ぞと夕波の泉水にさらさらさら、落ちたぎつ瀨のもみぢ葉と浮世の秋をせきくだし

此の落ちたぎつ瀨のもみぢ葉とは渡らぬ錦の緣を以てのみいつたのであらうか、紅になぞらへてのみいつたのであらうか。どうもさうとばかりは取りかねる。それならば作者はここに意識してか、意識せずしてか、據るところの片鱗を見せたのではなからうか、とも考へられる。しかしそれを證として飜案と斷ずるのは理由として餘りに薄弱である。別に求めねばならない。求めて國姓爺合戰以外の近松の作品の中にこれを得た。鑓の權三重帷子の下の卷の一句である。

橋はさながら紅葉のまれに逢ふ瀨の敵と敵

橋とは伏見の京橋である、敵と敵とは女敵の鑓の權三と女敵討の淺香市之進である、橋はさながら紅葉とは市之進すでに權三を斬る、流血淋漓として橋上を染む、其の狀を形容したのである。さて紅葉のまれに逢ふ瀨とは、其の意を釋くべく、此の語句に對すと何かしら下に構へ、下に踏まへるものがありさうである。其の故事はとなるとどうしても紅葉傳情の艶話より外にはないやうである。わたくしはさう解釋してゐる。世の註家すでに其の故事を引用してゐるのであらう。

鑓の權三重帷子は享保二年の作であつた、國姓爺合戰は正德五年の作であつた。正德は六年で改元して享保とい ふ、すなはち近松は重帷子の二年前、一度用ゐた故事を再びここにくりかへしたわけである。さう思へば其の假用の方法に就いて、もう少し立ち入つて考へねばならない。

市之進が女敵權三の行衛をたづねることは時やや久しきに亘る、まれに逢ふ瀨とは其の義に於いていはれる。言葉のおもては筋の運びと共にさうなつてゐる。しかし此の一句はかねて市之進と女房おさいの上にも係つてゐるやうである。作者執筆の際、肚に其の想ひが潜まつてゐたのであらう。

おさいの最後はいたましい。殿の御供申して江戸詰となつた夫市之進と別れた後のおさいは、三人の子の養育に力を致してゐる。もとより絕えず夫を懷しうも慕はしうも思ひつづけてゐる。しかも不圖した事のはづみは戀ならぬ戀の惡名を負うて家出しなければならなかつた。これもまた戀しい夫の名譽のために、いつの日にか討たれようとの覺悟からであつた。時久しうして其の夫に邂逅した。われを討たうとする夫に、なう懷しやとすがり寄る心根のほど、思へばしほらしい。けれど片手なぐりの夫の刀はくわらりずんと腰の番を斬り下げた。不義の相手權三の

血によつて紅葉の橋となつた伏見の京橋はたゞ一入の色に染めなされたのである。

相別れて年を經て、しかも事情は左右なく逢ひかねるだけになほいやます夫戀しさは、なう懷しやの一語に壓搾されたのであるが、夫もまた妻に逢ひ見るすなはち哀しい夫婦の別に胸は張り裂けようとする。作者はまた簡明の筆でこれを叙していふ、帶引きつかんでつら引上げ見れば子供の不便さと悋し悋しの恨みの涙、胸に浮むを打拂ひずんと斬下げ云々と。

この京橋橋上の出來事と紅葉傳情の事との關係は、事の運びこそ違へ、彼の鸞鳳艶美の談を分鏡悲痛の筋に轉ずることに於いて、紅流しの往方と變はりはない。手法全く相同じい。つまり重帷子の一場は紅流しに於ける轉換の手法をさながらに襲用し、其の終始を要約し、更に人生凄慘の度を强めたのである。

鑓權三重帷子は國姓爺合戰の後二年に作られたとはいふものの、それはたゞの二年ではなかつた。竹本座にはずつと引き續いて上演された二年であつた。作者近松からいへば眼前に其の舞臺を展開されてゐるだけに、つひに記憶の新な舊作である。さういふ舊作と今度の新作重帷子との間には幾多の交渉があるべき筈である。たゞ素直に關係づけるものが少く、わざと方向をかへたものが多いだけにうち見にそれと勘づかれないまでである。此の京橋の筋などは最も素直に最も見易い一つであつた。

紅葉傳情の事によつて、近松が想を構へ、辭を修めたものが他にもありやなしや。わたくしの檢索の疎漫はまだ之を盡さない。このやうな時に黑木君がゐたならば、何かの解決を得ようものと、今更にわびしい。まして紅流しの趣向をさう解釋することが、獨斷でないかを君に質さうとするにも、幽明相隔つることをいかにもし難い。

紅葉傳情の世にもやさしいゆかしい物語は、彼土の詞客文人これを傳へて詩に文に藉り用ふるものが多い。戲曲にもこれを題材とするものが少くない。王伯良の題紅記の如きは其の早い頃の作の一つである。あの還魂記の中で旦の杜小姐が春に因つて情を感じて沈吟する臺辭の中にそれに關するものがある。そのむかし、韓夫人が于祐の君にめぐり遇はれた事の始終は題紅記に見えてゐる。人目をしのぶあのお二方がやがて晴れての緣を遂げなされたのに、わが身一つは若草のねよげの春を外にするとは、などといつてゐる。

題紅記は傳つてゐない。從つて其の略をも知ることが出來ないが、杜小姐の臺辭から推せばいはれてゐる紅葉傳情の事よりは結構に於いて多少の複雜を加へてゐるやうである。題紅記、今日すでになく其の以前の作、紅葉記また傳はつてゐない。紅葉傳情の事を題材とした戲曲の容易に讀まれるものを求むれば、すなはち雙珠記であらう。

支那南曲の例、毎齣のをはりに下場詩がある。登場の俳優これを吟じて其の齣の要を示すことである。ただし第一齣にはさういふ下場詩に代つて全篇の梗概を要約した句をおくことになつてゐる。雙珠記の大體を知るためにはそれを引くのが便宜である。下場の句にいふ、

王濟川從軍受謳　　郭小艷鬻子全貞
慧姬女寓詩賜配　　九齡兒乘職尋親

王濟川とは王楫である、家は貧しいが學識があつた、今年會試の歲に當り、上京して之に應じようとしてゐた。

折から急に徵されて遠く隕陽に去ることになつた。軍に從ふとはその事である。

郭小艶とは共の妻の郭氏をいふ。夫に從つて隕陽に行く。一子九齡時に年四歳、これもまた伴はれて行つた。隕陽の營長李克成は正しからぬ男であつた、部下王樨の妻の容色を喜んでこれを挑む、もとより貞淑な郭氏はうけひかない。事はいつか王樨の耳に入つた。王樨は克成を責める。克成はつひに事を構へて之を獄に投じた。王濟川從軍受誣とはこの事である。

王樨はいろいろと辯解しても赦されない、罪はついに死に決した。王樨は妻との別を歎きながら、せめては共の身の立つやうにとて、自分の亡き後は獄吏某に嫁せよと命ずる。郭氏の悲しさはいやます。しかも夫のために獄囚の例として相應の金を要することから、九齡を人に賣り、共の金を夫におくり、みづからは淵に身を投げる。ついに死んだ、けれど神は眞心を愍んで之を蘇生させた。郭小艶鬻子全貞とはこの事である。

慧姬女は王樨の妹であつた。兄が隕陽に去つての後、選ばれて宮中に仕へることになつた。折から朝廷は邊戍の士におくるとて宮女たちを命じて纊衣を縫はせた。纊衣とは綿入れの義である。慧姬はほんの輕い戲れごころからちよとの思ひを詩にものし、之れを書き認めた紙を綿と共に入れた。この纊衣がゆくりなくも兄の友陳時策の手に歸した。時策は王樨と共に試に應ずべく準備してゐたのに、運命これを許さずして當時邊戍一方の將となつてゐたのである。共の詩は艶にやさしかつた。これを讀んだ時策は大に喜んで幾度か誦する餘、これを節度使に告げた。事はつひに朝廷に聞した。帝は共の詩の心をゆかしとて、詩の主を探し出して之を時策に賜ふことになつた。斯くして慧姬と時策とはおもひもよらぬ良緣を得たのである。慧姬女寓詩賜配とはこの事である。

さても四歳で賣られた九齢はすでに十六歳となつた。學を好んで試に應じて狀元となつた。考試第一の成績を擧げ得たのである。直に官を授けられた。しかし九齢は心に樂まなかつた、實の父と母に逢ひたさゆゑであつた。つひに父の行所を尋ねるとて官を棄てて旅路に上つた。たまたま戰功によつて官を得た父が慧姫と共の夫時策と同伴して京に上るのに邂逅した。親と子は相抱いて泣いた。九齢兒棄職尋親とはこの事である。

主要人物四人によつて繫がれた事件の間に王楫の母が別れるに當つて郭氏と慧姫とに分ち與へた雙珠の一つ一つが轉々することから、奇遇邂逅の緣をなしてゐる。雙珠記の題名の本づく所以である。

雙珠記の全體に亙る事件は大方からうであるが、紅葉傳情の事に交涉のあるのは、慧姫女寓詩賜配の一條である。どの程度の交涉を有つたか、どんな飜案ぶりであつたか。さきに同じ題材に關する日東傳奇作者の態度と手法とを檢討した以上、まづ之を知ることを欲する。

第二十七齣、宮女うち集うて纊衣を縫ふ。初更、二更と針の運びが急しい。三更、蟲の聲のやるせなきを聞きつつなほ縫ひつづける。四更、鷄は鳴いてもなほ止めない。五更、ほのほのと空は白けて、衣は漸く縫ひ上つた。他の宮女だちは疲れのままにいつか寢入つても、思ふこと多さにつひに寢ねがての慧姫であつた。兄と嫂とに別れ、母に別れた孤獨の身を、宮墻の幾重嚴しく閉されて空しく處女の日を過さうとするはかなさが考へられる。今、斯う縫ひ上げた衣をどんな若い勇しい丈夫の君が召すことぞと思へば、何とはなしに胸は躍る。共の心のをさめがたさに、一首の詩をものした。

沙場征戍客　寒苦若爲眠

戰袍經手作　知落阿誰邊
蓄意多添線　含情更着綿
今生已過也　重結後生緣

これを紙に認めて衣の中に縫ひ込んだ。そのむかし、紅葉心あつて韓夫人に此の世のつれあひを得させたとやら此の衣にも心があつたなら、わたしの後世のえにしを結ぶよすがともなることか、などと獨語した。

斯くの如くして、作者沈鯨は其の據るところを露はに示したのである。

第二十九齣、陳時策は邊境の冬の寒い折柄、恩賜の纊衣を得て頻りに喜ぶ。とりわけて外のものより綿こえたのが嬉しいとまさぐる指さきに紙があつた。縫目をおしあけてとり出せば一首の詩があつた。之を誦して、此の詩は立意溫醇措詞雅麗、其の人は才女子と思へば思ふほど懷しく、せめては一目見たやと心あこがれて升天縮地の術の無いことを歎く。紅葉に句を題したことから良緣を得たためしもあるものを、纊衣の詩に佳偶を得とれぬこともあるまいぞ、などとも述懷する。

第三十一齣、纊衣の詩を得てから、見ぬ戀にあこがるる時策が、たまたま赦免された王棵に遇ふや、まづ語ることはあの詩に就いてであつた。其の詩の主が妹慧姫であることを知らない王棵はしきりに推賞して、此の詩句甚だ新に意甚だ厚し、以て韓夫人の故事を追踪すなどといふ。作者はこれ等によつてますます據るところを明にする。

第三十四齣

纊衣に入れた詩がどんな人に讀まれることかと慧姫は心を惱ましてゐる。一夜鳳と鳳の鳴きかはし舞ひつれる夢

を見た。何の夢じらせかと人に聞けば夫妻諸遇の象とのことであつた。そこへ内官が見えて纊衣に詩を入れた者は誰人かとただす。慧姫はわたくしにこそと申し出でる。心ひそかに罪せられることを期する。内官は聖上が其の意をめで其の志をいつくしまれて詩を得た軍士に嫁ぐことを許されたものであると告げ知らす。慧姫の眼に感激の涙があつた。

第三十六齣、慧姫は軍校に送られて時策がゐる劍南の地に赴く。勅命はかしこく、宿縁はゆかしい。心ややおちつかぬ旅であつた。慧姫うたうていふ。

自分終淹宮壺誰期勅賜連姻雲山此去知遠近依稀是夢中身、

第三十七齣、劍南の軍營に論功の事がある。王梆と時策と共に將軍に任ぜられた喜びの折から慧姫は來着する。慧姫は時策に逢つた。また思ひもよらず兄の梆にも逢ふことを得た。下場詩にいふ。

勅降仙姫下九重　笑啼交集敍行踪
今宵各把銀釭照　猶恐相逢是夢中

第三十八齣、結婚の場、うち集ふ人々は祝賀の辭をいひかはす。紅葉良媒、紅葉緣などの言葉がしきりに人々の口の端に上る。

紅葉傳情の事に據る趣向は雙珠記の中に斯く點綴されてゐる。其の後まれに人の言葉の上に現はれるものはあるが、事件として展開されるものはない。これによつて考へれば雙珠記の作者が彼の故事を藉りる意は國姓爺作者の意と全く表裏をなしてゐる。これは彼が所據を蔭に隱すのにはひきかへて、努めて明かに示さうとする。明かに示

すことに於いて風情を添へようとする。肚の藝でなくして、手さきの藝であつた。

第三十六齣、慧姫劍南に赴く途中の場、述懷の臺辭にいふ、

偶寓纊衣詩、竊比題紅葉、紅葉締良緣、衣亦成姻業、物雖不爾同、先後均一轍、感沐君恩深、皇圖願如結

此のたまたま纊衣詩を寓してひそかに題紅葉に比すといふもの、事は慧姫の身のうへに就いていふものの、おのづから作者沈鯨の紅葉傳情利用の態度を明にするものである。作中の人物にはひそかにといはせながら、作の讀者にはわざとあらはにするのである。國姓爺合戰の作者には此の事がなかつた。ここに二者の大きい距離が存する。

おもふ、近松にして彼の土の作者であつたならば、或は沈鯨と共に同じ態度をとりはしなかつたらうか。近松も我が國の大衆の最もよく知つてゐるものに對しては、わざと之を露はにして今牛若といひ、先例吉野の恭盤忠信といふこともあつた。沈鯨またあまりに多く人口に膾炙された故事なるが故に、蔽すまでもなくかへつて之を明かにし更に之と對比させることに於いて新趣を釀し出させようとしたのであらうか。戲曲の性質が海を隔ててなほ此の二人に同じ態度をとらせたのであらうか。

七

紅葉傳情の事を擁しての兩作者の距離は、作の讀者觀客の相異によつて決せられた態度の距離であつて、作技の優劣に關はるものでない。從つて二つの作の意圖またおのおの異なるものがある。

雙珠記の作者の最も努めるものは、題名すでに然るが如く、雙つの珠を繞る人々の離合の不思議を叙することで

ある。奇遇すなはちこれである。續衣の詩の趣向も紅葉傳情の艶麗の趣を移すにあることは勿論であるが、それもまた奇遇の感を强めることに於いて、一段の用意があつたやうである。慧姬が續衣詩によつて逢ふことが出來た夫は未見の人ではない、兄の舊友である。また其の舊友の陳時策一人ではない、おもひも寄らぬ兄にも逢ふことが出來たのである。ここに傳へられた于祐韓夫人の談と異なるものがある。

第三十八齣、結婚の場にうたふ、歌、

續衣若不藏詩句、那得相逢慰所思、猶恐音容眞夢裡

前の一句は慧姬これをうたひ、後の二句は慧姬と王楫との合唱である。作者の意の在るところもほぼ忖り得られる。

作者はまた續衣の詩による良媒を宿緣あつて然ることをいふ。紅葉傳情として語られてゐるものにも、もとより其の意が籠められてゐる。作者の新しい工夫ではない。ただ作者は一人の相人をおいて之を豫言させ、其の豫言の的中に於いて宿緣の宿緣たる所以をやや聲を大にして說かうとした。そこに原話に對する新しい作意が見られる。

第三十八齣、結婚の場の下場詩にいふ、

談玄術士決將來　妙應於今豈狼猜
萬事不由人計較　一生都是命安排

詩意は作の發端に遡ることに於いてはじめて解される。王楫のなほ鄕にある頃、試に應ずべく學に努めてゐた。友人陳時策と孫綱また行を共にすることを約した。たまたま人を相して誤ることのない袁天綱の其の地に來たこと

を知つて、三人は未來の吉凶を鑑て貰つた。天綱は王楫を視て、やがて遠く去つて骨肉と別れて苦しみ、更に罪に陥つて艱み、然る後に立身するといつた。孫綱を見ては考試登第して高官に上ることをいひ、時策に對しては軍士となつて勳功を立て、更に事によつて佳配を得るといつた。其の佳配を得るとは慧姫を得ることであつた。結婚の場に於いて知られる豫言の的中は、其の事がさうであつた。王楫の身上に關するものがさうであつた。すなはち楫と時策と相顧みて袁天綱を想はねばならなかつたのである。

作意すでに奇遇を重じてゐる、故に作中にくりかへすことが多い。

王楫夫妻が鄕を出でた時、母は嫁の郭氏に身の寶としてゐた雙珠の一つを與へた。形見として持つてゐてたもれといふばかりでなく、雙珠ふたたび相會ふ日の早かれと願つてのことであつた。慧姫の宮中に入る時、母はまた殘る雙珠の一つを與へた。郭氏に與へた同じ思ひを罩めてのことであつた。雙珠は手を離れ、子と嫁が去つた後の老母のさびしさ、そこへまた安祿山の騷動が起つた。母は妹の韓姨娘と共に子の友人陳時策、孫綱の二人に護られて難を避ける。けれど兵火の混亂は一行をしてちりぢりにさせて、母一人いたいたしくも荒野を辿る。憂さつらさの折も折、嫁の郭氏に邂逅する。奇遇であつた、まさしく神によつて惠まれた邂逅であつた。

さきに郭氏が李克成に挑まれたことから、夫王楫は牢獄の人となつた。之を歎き、また貞操を全くするため泗に投じて死んだ。神は之を憐んで蘇生させた。郭氏は神の導きによつて母に遭つたのである。二人は相携へて京に上つた。京に上つて、また韓姨娘に逢ひ、また袁天綱に逢つた。天綱の計らひによつて、王楫は赦免されることになつた。

王榑は劍南に行つて、そこに軍士となつてゐる時策に逢ひ、奇遇に驚く。その時策は纊衣詩の緣によつて慧姬に逢ひ、慧姬はまた兄に逢つたのである。奇遇と奇遇といよいよ重なる。

慧姬が宮中を出でて劍南に赴く途すがら、肌身離さぬ珠を落した。從者はひそかに拾つて私した。從者は都に歸つて後、韓姨娘のもとに持つて行つて酒に換へようとした。其の時韓姨娘は姉と郭氏と共に酒を賣つて生計をたてゐたのである。三人は其の珠によつて慧姬の劍南にあること、また纊衣の詩の出來事を知つた。

郭氏が身を淵に投ずるに當つて、九齡を人に賣る、姑から貰つた珠を形見として持たせてやつた。其の後十餘年を經た。此の少年は聰明好學、京に上つて考試に應じようとする。其の途中孫綱に遭ふ。綱もまた試に應ずるとて京に上るのであつた。九齡の貌は甚だ父に似てゐる。父の舊友孫綱は之を怪しんで問ふことから二人は名乘り合つたこれも亦奇遇である。かくて二人は共に試をうけて登第した。王榑が孫綱となした往年の約は其の子によつて果されたのである。

九齡すでに官人となつた。さきに慧姬の珠を拾つた從者は宮府の命によつて九齡に附隨する。一日九齡がさきに自分が拾つた珠と同じ珠を所持することを怪しんだ。之を九齡に告げる。九齡はここに祖母と母と大叔母とに逢ふことが出來た。奇遇の一つである。

母に逢ふことが出來た九齡はいよいよ父戀しさの念に堪へない。つひに官を棄て旅に上つて其の行衛を探さうとする。漸く手がかりを得て劍南へと向ふ。劍南にゐた王榑は妹慧姬と共の夫時策と共に上京の途にあつた。漢中の嘉陵驛に宿した。月明き夜である、王榑と時策とは心も輕く逍遙する。そこへ九齡が來かかる。時策は目敏く共の

少年の貌が王桿に似てゐることを見つける。それがきつかけとなつて三人相語る。九齡はもとより父を知らず、父も九齡であることを知らない。九齡はただ王桿等の劍南にゐたことを聞いて、それならば纊衣寄詩の事を御存じであらうと問ふ。事は奇遇に屬して人皆喜んでものがたる、お身のおたづねもやはり其のわけかと時策が答へる。いや、此の宮女とわたくしとは聊かのゆかりが御座るのでおたづね申したので御座いますと答へる。話は漸く細やかになる。九齡は珠をとり出して身の上を語つた。ここに父と子とは名乘り合ふ。奇遇の最も大きい筋であつた。これ第四十五齣、下場詩にいふ。

浩蕩風塵阻雁魚　　相逢骨肉共欷歔
眼前跋涉勞無怨　　膝下從容樂有餘

第四十六齣、大團圓である。京に王氏一家の者みな會合する。親と子と夫と婦と相抱いて哭する。雙珠また母親の手にかへる。これを捧げ、これを受けて人々は拜しまた哭する。合唱の歌のくりかへしにいふ。

雙牧合骨肉重逢悲喜集感蒼穹

折から勅使來つて聖旨を傳へる。母と子と嫁と孫といづれも孝忠貞を賞せられて恩命極めて篤いものがあつた。紅葉傳情の故事と國姓爺合戰の紅流しの關係を考へることから、つひ雙珠記の中に迷ひ入つた感がある。しかしばらく迷ふがままに迷ひゆけば、また二つの作の間を繋ぐべき筋合のないのではない。國姓爺合戰また想を奇遇に構へる節も少くないからである。

第二段のもろこし舟の條、海の遠きを隔てて梅檀皇女と老一官の君臣の邂逅の如き事すでに奇である。第三段樓

門の場、別に證據といふ證據なくして、月下の鏡中照し照される貌と貌とによる親子の名乘、事は更に奇である。奇を以ていへばはるかに嘉陵驛月夜の邂逅にまさつてゐる。けれど樓門の場はただ事の奇を以て作意をいふべきでない。漸く相逢ひ得て直に別れる、しかも咫尺の間に父と娘が相見る折もなく、樓上樓下、しかも月明りにうち見る面影をせめてものおもひやりとしなければならない本意ない、はかない邂逅、世にもまたかかる痛しい邂逅があらうか。かかる邂逅はつひに雙珠記の中にたえて見ることのかなはぬものであつた。そこを一篇の眼目とする國姓爺合戰は全く雙珠記と違つた範疇に於いて考ふべき作品であつた。奇遇二三の類似があるだけに、其の相異はなほ著しさを加へる。しかもまだ其の相異を作の構想の焦點の相異に歸して、作者の技の優劣に關はらせようとはしない優劣はむしろ他の點から考ふべきであらう。

八

奇遇の貿は事の變化があつてはじめて得られる。故に奇遇を數重ねることは事の變化を縱横にすることである。奇遇また奇遇、讀む者をしてひた呆れに呆れさせて、しかも一篇を緊張の中に讀みおほせさせるのは、凡手の及ぶところでない。支那の戯曲に奇遇を以て想の骨子とするものは多い、事の支離滅裂にならず、讀者の興趣索然とならないで濟むものは少い。雙珠記の如きは、其の中で最も傑出した作である。作中沈鯨の手腕のほどは此の一篇によつてよく證明される。

沈鯨の成功は畢竟一篇の組織の整正に歸さねばならない。結構布置の妙を以て稱すべきである。彼の土の評者が

ある。

通郎細針密線、共の穴を穿つて照應するの處、天衣の無縫なるが如く、つぶさに巧思を見るといふのは其の意である。

斯くの如く雙珠記の妙を構造において考へる時に、まさに合はせ考ふべきは國姓爺合戰一篇の組織である。國姓爺合戰は場を分つこと十二、其の景情の變化統一最も妙を極めてゐる。其の變化は舞臺の效果となつて現はれて、竹本座の觀客の興味を十七ヶ月の久しきに亘つて繋いだのである。しかし其の變化を舞臺の上にのみ活して、散漫以て事理を殺す國仙野手柄日記のたぐひとは違ふ。其の變化はまた理を以て統一される變化である。變化がいやますほどに其の奥の統一の線は緊しさを加へる。この二つのものの關係の絶妙が此の一篇をして近松の時代物の最大傑作たらしめ、全淨瑠璃作品の壓卷とさせたのである。

此の變化と統一とはまた九仙山の景事のやうに世の俗眼俗耳に投ずるものと、紅流しの飜案のやうな文筆淸鑑のためにするものとの聯絡に於いて考へられる。其の他變化の事象と、これを統一する工夫とをあとづけて說くべき多くがある。今、しばらく省略に從ふ。また雙珠記の構想との比較を試みることの要をおもひながら、これもさておいて、ただ近松の手腕つひに沈鯨の上にあることをいふ。

事は內容の上から雙珠記が現實を主としながら非現實に陷ることが多く、國姓爺合戰がもと非現實に出發して却つて現實の果を全うすることにも關してゐる。しかしそれにも觸れることなく、近松の構想の妙が形態の約束に基づくことの多い點のみに就いていはうとする。

それは何であるか、十二場が單なる十二場でなく、五段に要約される十二場であることこれである。五段の段中

のもの相分れるものがおのおのの機能の下に動いてしばらく十二場となり、これが使命を果しておのおのの所属の段にかへる時、五段に還元される。內容の變化と統一はかういふ形態の約束から案外容易に誘導される。國姓爺合戰を此の關係に即いて讀下すれば、作者の細微の工夫はおのづから明瞭になるのであらう。ここに煩はしく分解し綜合してみる必要もないやうである。

しかし、一篇の淨瑠璃が五段の組織を有つことにおいて、大きい效果を遂げてゐることは、實は國姓爺合戰だけの手法でない。近松の時代物を通じての手法である。近松は其の手法をあの題材に適應して存分に作の妙を縱にしたわけである。いな、馴れ切つた手法によつて易々と舞臺の內と外との成功を贏ち得たのである。國姓爺合戰が構造において雙珠記以上のものをなし得た所以である。

それならば、近松は此の淨瑠璃の五段の組織を何によつて案出したのであらうか。其の以前の淨瑠璃はすべて六段であつた。それが五段となつた。それがおのづから形に於いて完全なる劇詩たらしめたのである。近松を考へ、淨瑠璃、少くとも其の時代物を考へる上に極めて重要な問題であつた。しばしば問題となつて、解決に暇どる問題であつた。或は西洋の劇詩の五部の影響であるなどと一西洋人によつて說かれ、一時はうかうかと其の言葉に乘つたこともある問題であつた。

しかしそれも今はもう解決されてゐる。解決した人は黑木勘藏君であつた。君は世の人の氣づくべくして、つひに忘れてゐた竹豐故事の一節から其の鍵を得たのである。これを緻密な淨瑠璃組織解剖の檢討に於いて正確に證したのである。其の詳說はさいはひに君の筆によつて世に殘されてゐる。日本文學講座載するところの近松時代物の

研究の中に見えてゐる。ここに其の要節を引用する。

君の學界に貢獻したことは多い。しかも天君に假すに十年の齡を以てしたら、この近松五段組織の解の如き重要事、なほ幾つかを世に示して教へるところのあつたらうにと、今更に愛惜の意に堪へない。秋風蕭殺、歳一年を經て、祥月命日は數日に迫つた。此の稿、筆おのづから君に及ばざるを得なかつた。君の文を引くのも、これを讀む人にせめては君の記憶を新にし、君の業績を考へて貰ひたさゆゑである。合掌。

九

君の文にいはく、

「淨瑠璃は最初から五段組織であつたかといふにさうでない。彼の寛永二年版の「たかだち」の五段であるのは全く一つの異例に過ぎずして、延寶寛文以前の所謂古淨瑠璃はすべて六段であつた。例の「六段物」といふ稱呼が古淨瑠璃の代名詞の如くにさへ用ひられるのは之が爲である。然るに寛文年間に至つて上方に於て初めて五段組織の作があらはれ、天和貞享以後に於ては上方には殆んど六段物は跡を絶つに至つた。但し江戸に於ては金平物は勿論、土佐節の正本もすべて六段であつて、元祿以後迄もこの組織が行はれて居た。

私の見た範圍では、五段組織としては井上播磨掾の正本と思はれる寛文二年版の「四天王高名物語」が最も古い。次いで「釋迦八相記」（寛文九年刊）「善道記」（寛文十年刊）「賴光跡目論」（寛文年中？）「花山院后諍」（延寶元年刊）「日本王代記」（延寶三年刊）等いづれも井上播磨掾の正本と思はれるものが五段組織になつてゐる。尤も播

磨掾の正本には六段物が多いが、その中に寛文の末に至つてかういふ異例を見るのである。そして播磨掾よりは稍々後れて、延寶より天和に至つて京都で一流を語り出した山本土佐掾や宇治加賀掾の正本に至つては、延寶以降の刊行にかゝる彼等の正本中現存のものには六段物は一篇もないのである。かくして丁度近松が作者として世に出た延寶天和に至つて六段物は上方に於て漸くその跡を絶ち、五段物が之に代つて行はれる事となつたのであつて、近松の作は、その初期の推定作に至る迄すべて五段組織であつて、六段物は一篇もない。而して淨瑠璃の五段組織と六段組織とは、その體制上に於て新舊を區別する一つの目標とさへもされるに至つた程に重要なる形式上の相違である。尤も五段組織が行はれ出した當初には六段物との間にそれ程の截然たる差違があつたとは見られ得ないが、近松の手によつて五段組織の淨瑠璃の形式が完成されるに至つてはその作品は古き六段物とは全く面目様式實質を異にするに至つたといつて差支ないと思ふ。

然らばその相違は如何にして生じたものか、淨瑠璃の六段組織は何故に五段組織に改められたかといふに、これについては今日迄未だ明確な解說は下されて居ないやうである。併し乍ら淨瑠璃一篇を六段に分つのは例の「十二段草紙」の十二段を半減して六段に緊縮したものであるのに對して、五段に仕立てるのは能の番組に倣つたものであるといはれる處に注目すべき暗示があると考へる。

蓋しお伽草紙の脈を引く十二段草紙以下の古淨瑠璃は、よしそれが人形の所作に合せて語られるものであつたとしても、その形式に於ては純然たる叙事文式のものであり、物語風であつて、嚴格にいへば戲曲としては取扱ひ得ない形式のものである。之に對して能の番組に倣つて五段に改めたのは劇的表現を主とする樣式に改めたものであ

ると私は見ようとするのである。尤も本來が非情の木偶を操つて複雜なる人生の葛藤波瀾を聽衆觀客の前に展開せしむる爲の詞章であるから、其の文中に叙事的誇張的乃至抒情的の部分の加へられるのは免るべからざる制約である上に、一篇中には景中、物盡し、道行といふやうな音樂的伎倆を發揮し、又舞踊的場面を重んじる章齣が加へられる約束になつて居る淨瑠璃劇の詞章が、俳優による科白本位の劇詩の形式を論ずる標準を其の儘適用し得ないのは言ふ迄もないが、併し私は五段組織の完成された淨瑠璃を以て立派な一つの劇詩と見るに躊躇しないものである。

而して謠曲の素養があつたといはれる井上播磨掾の正本に初めて五段組織が現れ、次いで最も自覺的に謠曲のあらゆる長所を淨瑠璃の中へ取入れようと努力した宇治加賀掾及び同時代にして藝風に共通點のあつた山本土佐掾の正本がすべて五段組織であるのは決して偶然の事とは考へられない。のみならず「竹豐故事」に

淨瑠璃を五段に綴るは能の番組に同じ、初段は脇能、二に修羅、三は葛事、四は脇所作、第五は祝言なり、大體是に表せる物なり。

とあるによつて、淨瑠璃の完成期に於ては、その五段組織が能の番組に倣つたものであるといふのは、定說であつたと見て差支ないのである。

「玆に於て當然起るのは、然らば能の番組は劇的であるかといふ問題である。元來劇詩殊に悲劇がその形式として、事件の發端たる動機から葛藤を經て最後の解決に至る三大過程を取り、而してその葛藤の中には更に葛藤の昻進と最高潮と轉向とを要し、結局五段（五幕）より成るとの說は、獨り西洋の劇詩に於てのみ見らるべき形式では

なくて、これは各國各民族の間に於て劇の進歩に伴うて自然に作らるべき劇本來の一典型であつてそれは必ずしも因果の關係にあらずして並行の發展たり得べきものであると信ずる。故に我が國に於ても外來劇の影響を認めずとも、此の形式が夙に現れて居るのは怪むに足らぬ。即ち能樂がこの五段の形式であつて、それについてはその大成者たる世阿彌によつて既に論じられて居るのである。世阿彌に從へば一番の能は序、破、急、の三體より成り、更にその破に又序、破、急の三段があつて結局五段から成るといつて居る(能作書)。かく能一番を序、破、急に分つ事は、恐らくは舞樂の曲と舞とが序、破、急より成るその構成法から想を得たものかと推察する。自然これを謠曲の組織として考へる場合には、音樂上の過程を示すものと見られるが、これが舞臺に演じられる能として取扱はれる場合には、この五段は劇的展開の過程を示すものと見てよい。即ち能の序、破、急は單に音樂的のみでなく、劇的の意味もあると解釋して差支あるまいかと思ふ。

「淨瑠璃の五段組織は能の番組に倣つて、それによつて劇的表現を效果あらしむべくつとめたものであるが、併しその體制は必ずしも能の如く神、男、女、狂、鬼といふ標準を忠實に遵守したものではない。前に擧げた「竹豐故事」の言は淨瑠璃五段組織の實質を述べたものではなくて、その典據と形式的の標準とを示したのに過ぎないと解釋すべきである。處で五段組織の淨瑠璃の代表作たる近松の圓熟時代の時代物などに見る段取りとその內容とは大抵次のやうに運ばれて居るものが多い。先づ第一段は事件の動機發端、又は後の活劇の伏線等を示すが、その大序は壯麗なる大內や諸侯の邸などの場面である事が多い。そして第二段より第四段迄に亙つて葛藤を描く。その內

第二段は後の大葛藤への誘因を扱ふのであるが、全篇の筋の上から見れば、忠臣節婦などが、悪人の迫害を受けて落魄しつゝも義に殉じようとする忠烈悲壯なる場面を描き、第三段はその後を承けて葛藤の最高潮を示す條で、全篇の山がこゝに設けられて居り、事件は悲劇的に展開され、身替りとか懺悔の自害とかいふやうな趣向が取扱はれる場合が多く、こゝに解決への豫想を示し、第四段は轉じて大抵は夢幻的超現實的の場面となるが、その裏に解決への曙光を示し、第五段に至つて解決を告げるのである。而してこの解決は時代物に於ては必ず悪人滅びて善人世に出で榮えるといふ因果應報的の結末であるが、古風のものでは、神佛の力によつて光明的の大團圓となるといふものもある。そして更にその跡に華やかな節事舞踊などの添へられて居るものも少くない。而してこの第一段より第四段までは、大抵前に言つたやうに口中切、即ち世阿彌のいふ序、破、急に當るべき三段過程を踏んで居る。その中で最も眼目とすべきは三段目の切であつて、こゝは實演に際しては、一座の最も優秀なる太夫の持場と定まつてゐる。故に竹豊故事にも「第一太夫の重んずる所の役と謂はば大序の三段目の切」とある。大抵の作ではこの場だけを取出して見れば純然たる悲劇になつて居るのであつて、演奏者が力を注ぐ通り作者もこゝを山として力を入れ、又見物も最も興奮する場面である。

例へば「國姓爺合戰」の第三段目は、(ロ)獅子が城樓門の場、(中)紅流し、(切)和藤内の母自害、甘輝和藤内提携と、かう大きく三場に分れて居り、そして錦祥女と和藤内の母との死といふ悲劇的の場面を眼目として居るのである。

「併し乍ら近松の時代物を見るに、その五段に亘る全編を一貫して、よし有機的と迄は行かずとも、兎に角各段

の間に相當の聯絡照應を保つた作は、形式上から見ては比較的佳作の部に屬すべきものであつて、多くは各段殆んど獨立したものであるのを、ある世界ある人物を中心として一篇に仕立て上げるといふ必要上からして無理に連絡關係を保たせたやうに思はせるもので、言はゞオデンの串ざし式の感じがする。自然全篇に亘る主人公も明かでなく、各段別々の人物が中心となつて活躍し、全篇を貫く筈の人物は却つて隱れて居るやうな作柄が多い。この傾向は近松の作に於ても年と共に甚しくなつたやうに思はれたが、これが後に宗輔、出雲等の技巧本位、目先本位の作者の跋扈となり、又合作の風を生ずる誘因ともなつたと見られると思ふ。
能の番組に倣つて五段に仕立てる事を本體とした淨瑠璃の長所と短所とはこゝにあつたのである。」

（昭和五年「綜合世界文學」）

近松の宵庚申に就いて

東に豐竹座、西に竹本座と操興行の腹の探り合ひいそがしく、各座の作者紀海音と近松門左衛門との筆の鎬のけづり合ひたゞならぬ享保七年の四月五日、丁度宵庚申のその日、大阪に一つの心中事件が起つた。新靱町の八百屋の養子と姬の夫婦心中である。半兵衛とお千代の浮名がまだ大阪三鄉の隅々までゆき亘りもしない翌日六日にはもう海音の「心中二腹帶」は豐竹の勾欄にかゝる。二十二日には近松の「心中宵庚申」は竹本で御見得の運びとなる何せい、十六日の立ち遲れである。勝利はつひに東のものとなつた。されば心祝やら何やらで千日の墓所へ石碑を建てゝ供養する。さなくとも快からず思つて居た八百屋ではこの仕打を怒つて、夜分に石碑を座の木戶前に運びかへした。翌朝表方が取りのけうとした時、その儘にするがよい、却つて景氣にもならうぞとの座元越前の計らひは、うまく圖に當つて、その評判に東はまた一しきり、大入を占め得たといふ。「心中二腹帶」が果して一夜の作であらうか、或は道行だけを出物にしたのであらうか。或はその興行日のほどもおぼつかないが、兎に角に、兩座の競爭は凄いものであつたらう。

座方の競爭のかゝる狀態であるに拘はらずあやしいのは、兩作者の作意の一致した事である。これと彼ともとよ

り睨み合ひの姿であれば相談せう筈もないのに、これはまた談合づくかと思はれる程の實說振替が暗合したのである。兩作共に八百屋の姑の善人なのを惡人に、舅の惡人を善人に書きかへたのである。

その實說なるものは、例の西澤一風によつて傳へられて居る。

大阪新靱町の八百屋半兵衛、嫁お千代と心中情死したるを、すぐに宵庚申として出せしは、誰もよく知りたる事にはあれど、予幼少の時、新靱の老人の話に聞きしは、實說も淨瑠璃の如く、たゞ違ひあるは八百屋の姑婆は蟲も殺さぬといふ程の人なり。伊右衛門といへる老人もあながち惡人ならねど兎に角若い女好きにて下女雇女を孕せる事度々にて、嫁お千代を口說く事甚しければ、姑に是を告ぐれど、まさか男の半兵衛には此事もいひかね、年月をすごすうち、半兵衛は用事あつて遠方へ行き、ながらく留守中なれば、舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか、晝夜とも透間さへあれば嫁を口說く。老婆これを氣の毒に思ひ、常盤町の伯母の方へ預け、世間の人の問ふ時には連合の惡性によりとはいはれず據所なく娵の身持家風にあはぬ故預けしなど答へけり。半兵衛歸宅の上は仔細なくお千代を呼戾せしが伊右衛門ますます煩惱の犬の如く、人目を憚はず口說き、聞き入れざるを根にもちて、養子聟半兵衛すこしの仕あやまちを仰山に罵りけるにぞ、老婆もいろいろと諫言しけれど、伊右衛門は猶逆立物いひの絕ぬ故、義理に迫つて暇を出し、宵庚申の夜つひにはかなき情死をしたりとぞ。

この老人の言に信をおくならば、二つの作意の一致は、作者の意圖に出たのでなくして、共に姑が苦衷の宣傳が囚をなせる世評に忠なるためと解すべきであらう。二つの作に事件の共通なものがあるとすれば、それも當時の世

評に據つたためと見るべきであらう。さもないかぎり、立ち遲れながら、なほ敵の作意を追つて改めようともしない近松の愚さを何と評したらよからう。

二つの道行には、共にわが戀ぢはいとなき三味よの小唄を攝取した。それによつて、その小唄の流行が推せられる。それと同じく二つの作をくらべて見て、この事件のとり沙汰がどうであつたが知られる。

半兵衛が遠州濱松の武士の出である事。彼が生家にかへつた留守中にお千代の姑去りにあつた事。半兵衛が旅先からお千代を連れかへつて他所に預けおいた事。その後半兵衛から改めて離縁した事。そのはての心中、その死姿の見事さ、寺の門前に緋毛氈を敷いて二人共に刃に倒れる、しかも男は腹帶して切腹した上に、潔く咽喉を突いて死んだのが、武士のなれの果をしのばせる事、女もまた身持に腹の帶をして居た事。

二人の作者は、この巷說に基いて各想を構へた。きく所同じうして、二人のおもふ所は相異る。ゆくりなく取材を同じうした事が、また二家の作風の相違を明にする。

「心中二腹帶」は筆を結んで「花すぎ頃の若綠、この下闇は青物や、町人なれど、古の武道の燈かゝげたる末に名をこそてらしけり」といふ。海音は半兵衛の死姿に着眼した。その腹帶に着眼した。何故に腹切つてから腹帶したかさて後に咽喉をついたか。海音はすべてを半兵衛の武士出身である事に歸した。半兵衛は劍難の相あるために、特に主命によつて町人とされたものである。故に彼はなほ主君をおもふ者であり、武士道を念とする者である。武士道と心中と、それはもとより兩立すべきものではない。武士の氣質を今も持する彼は、心中を陋とする。彼の脇差は主君より拜領したものである。彼はおもふ武士の刀は忠義を旨とし、町人は又禮義にさす。大切の一腰を武道

にも用ゐず、禮義にもかゝはらず、穢しき兩人が最後に計りつかはん事、勿體なし冥加なしと。即ち、はじめに腹きつたのは主君への追腹、故に武士の眞似してひき廻したのである。半兵衛の身は一つ、死様は二つ。武士としての彼は斯うして死んだ。殘るも一つの死は町人八百屋半兵衛の最期である。彼は斯うしてお千代と共に心中した。

海音は半兵衛の死を斯う解釋した。しかし、半兵衛の心中の對手は決してお千代ではなかつた。その對手は義理である。武士道武家の道徳の形をかへた冷き義理と心中したのである。それと心中させたのは實に紀海音その人である。

半兵衛はお千代を愛した。けれど、義理をおもふ時、彼はその愛をも否定する。「兎角二人が腐り合ひ、切られぬ緣を恨むがよい」ともいふ。それならば何故に、お千代を殺しもし、また同じ枕に死んだか。彼は世間の義理に迫られたのである。世間は女房を去るに七つの法則を立て、さらぬに三つの教をなした。半兵衛はこれ等の去る去らぬの法則軌範の間に苦悩せざるを得なかつた。七去の法則の中にも親の氣に入らぬ女房に添ふを不孝尤とす。女房お千代の派出好み、奢ぶり、ともすれば賣女と見あやまれる風情は、もとより姑が蛇の様に嫌ふところである。さらば離緣しようとするに、お千代の家はあまりに貧しい。三不去の法則の中にも、いに所なき妻を去るを不義の大なるものとする。暇をやれば孝行の道は立つ。というて去るに去られぬ教をどうしよう。お千代いとしのおもひより半兵衛はこの二つの道の妥協を念とした。念々おもうてやまず、つひに彼は死を決した。おのれ死した後に、いに所ない妻の處置、それのあはれさにはじめて死の道連れとした。即ち海音の半兵衛は愛に殉じたのでなくして義理に殉じたのである。

近松とても義理を重んずる。しかし、彼は義理のために義理を重んずる事、海音の如きものではなかつた。その義理の尊重は人情のためにする。義理の石の重みに虐げられる人情といふ小さい草の花のあはれさ。近松のねらひはまさしくそこにあつた。ましてその世話物は、「曾根崎心中」から「二枚繪草紙」のやうに段々と義理の色合が濃さを加へる。「心中宵庚申」はその最後の作である。義理の色いよ〳〵濃きものがある。今また武士出の半兵衞について語るの人の世界にも、いかに主從の關係が武士のそれに追隨して來たかを語つた。「女殺油地獄」そこには町である。義理についていふところ多かるべき筈である。

近松の半兵衞も七去三不去の法則を重しとする。彼が心中決行の理由を數へた四つの一つ、世間の義理とはこれである。他の一つは女房の親への義理である。お千代はすでに二度嫁入りして出戻りの身の三變目の嫁入であつた。それがまた、何といふ事なしに、合性の惡さ故に姑から嫌はれた。富める家の主、病める父親は、この末娘の身の上をひたすら案ずる。彼は淚して娘の行末を半兵衞に托する。半兵衞はつひに終生去らざる事を約する。けれど、半兵衞はその約を果す事が出來なくなつた。何となればその約を守らうとすれば、姑の惡名を去るよしがないためである。彼が死因の一つ、養親への義理は斯うして彼の身に迫り來る。姑去り、その事が世間にパットなつた時、人々は一樣に姑の暴狀を責めたてるであらう。子としてどうしてこれを視すごす事が出來よう。まして養ひ子の義理は、なほ更に姑を庇はねばならぬ。武士の家に生れた義理堅さはなほ一段の努力を要求する。養親への義理は、つひにお千代の離緣を口づから宣告するより外はない。さすれば女房の親への義理はどうなる。ここに於て彼は死をおもはざるを得なかつた。

死因三つ。斯くてなほ一つをあます。殘る一つが、つひに海音の作中に於て見出し難きものである。「女房の親と我親と世間の義理と恩愛と、三すぢ四すぢの涙の綠。」その恩愛がそれである。近松の半兵衛は、最後までお千代との愛を否定し、呪咀するものでなかつた。彼は義理を重んじた。重んずれば重んずる程お千代可愛、いとしの情にたへなかつた。

つらいめ計りに、日を半日心をのばす事もなく死ならとせしも以上五度、恨ある中にもそなたに緣ぐみ、せめてのうさ晴せしに、それさへそはれぬ樣になり死ぬる身になりくだる。よしない者につれそうて半兵衛が身の因果、そなたに迄ふるまひ、在所の親仁姉御にも悲しい事を聞すと思へば、此胸にやすりをかけ、肝を猛火で炒る樣な。

彼はお千代と死する時、たゞ愛の火のみに燃え立つ。死灰の如き義理の加はる餘地はなかつた。その辭世の「古をすてばや、義理もおもふまじ」といふのは即ちそれである。水の中火の中でも先の世までもこな樣と夫婦と成てゐる所を見立て死んで下さんせといふお千代の言葉はまた半兵衛の胸の中にも潜んでゐた。

半兵衛の死因の義理は皆この恩愛を裏となし表となしてはじめてその働をする。半兵衛がお千代の父に堅い約束をなしたのは、單なる義理でなくして、その娘おもひの心根に感激したためである。お千代は夫が緣きらぬといふうれしさに、病める父を見棄てゝつれ立ちかへらうとする。父はこれを咎めずして、却つて娘のために泣く。「半兵衛これ見や此しどなさ、歸らんといふ嬉しさに親の病をかとも言はず悦ぶ顏を見る親の心の内の嬉しさを叶はゞ見せて禮いひたし。」この恩愛強い力にうたれたためである。半兵衛の胸裏皆これである。

義理を恩愛からひき離さうとするところに、形式化された武士の道德がある。義理を恩愛もて裏うちするところに、武士もまた法則軌範の傀儡たる事を免れる。海音はその道德に專念して、武士としての半兵衛を描いた。近松は武士町人のけぢめを離れて人間としての半兵衛を描いた。「心中二腹帶」は元祿の時代相を見るべく、「心中宵庚申」は永遠の人間性を見るべきである。武士の道德を理想として仰いだ時代には、なほ海音の作をもよしとしよう。武士の生活を過去のものとする今日にはもとより近松の作をよしとするであらう。二作これを比べ來れば海音つひに近松に一籌を輸さゞるを得なかつた。

二つの作共に上の卷に於て濱松を舞臺として、半兵衛の武士生活を髣髴せしめる。海音は弓術に柔術に飽くまで武士の名殘を示し、近松は念者裁きに、料理の計らひに、武士と町人の間をゆく相違はあるも、今日に於てはいづれもあらずともよし。何となれば、二者共に時代相にのみ即したためである。

聾者看技

聾のわたくしは時々こんなことを考へる。補聽器を使はなくつてもよい芝居が見たいなと、いふ意味は別に役者に聲張り上げてくれと要求するのではない。補聽器ぬきとは、片言一句聞きもらさじと身構へせずに濟むほどの芝居が見たいといふことだ、二と二で五であり、三であるやうな芝居が見たいのだ、二と二で四である芝居、それを

セリフで運んでゆくやうな責苦めの芝居は、甚だ以て聾に向かない。そんな芝居には、どうしても補聽器を肉附にしなければならない。二と二で五となり、三となることが許されるなら、勝手に聽きもらしてもよい筈、聞えないところを氣儘に補つてもよい筈だ。それはセリフだけの話でない。耳の芝居だけのことでなく、目耳心のすべてに亙る芝居に就いてのことである。芝居が結局劇から離れて、お芝居に近づいて貰へればよいのだ。

聾のわたくしが補聽器をほんのちよつとの間はづしたとする。もう舞臺のセリフは相應に走つてゐるらしい。慌てざまにまた補聽器をあてがふ。そしてさきに聞いたあとを續ける。聞きもらしたのは、書抜の五六行に過ぎなからう。それなのに、もはや後のセリフは前のセリフに接續しない。接續しないどころか、肝腎の筋がわからなくなつたのだ。それほど片言一句も重要性を有つてゐるのが今の芝居だ。

どうでもいいや、とわたしは補聽器を棄ててしまふ。今度は役者の所作と口の動きをしをりに、勝手なセリフを自分が作つてあてはめてみる。觀客のわたしは即席に創作家になつたわけだ。幕が閉まるまでに、もう一幕物が出來る。出來上つた自分の脚本と、眼前に演ぜれた脚本とを、あとから比較してみる。十が十、向うの作がよいとはいひきれない。己惚ではないが、自分の方が上出來だといひたい場合もある。だから劇場に舞臺を見ながらいつも創作をしてゐるなどの不所存は懷かない。努めて舞臺の作を尊重するつもりだ、それにも拘らず、舞臺の理責めはどうかすると創作の易きをおもはせる。

これは新作のつい讀んでないものの舞臺にのみ限らない。たとへば大近松の作でも、その昔はさうでもなかつたらうが、今の演出では、理責めの演出の前には、やはり同じことだ。なほ悪いことは、なまなかのうろ覺えの文句

が聾者をして自由な創作、また自由な改作を許してくれない。たとへば、こんなこともある。このほど觀た雁次郎一座の「心中宵庚申」の上田村の場。

姉のおかるは、また嫁入さきから追ひ出されて來て父の勘氣に觸れてゐるお千代をいろいろととりなす。とゞのつまり、お千代を床の中の父親のもとにおしやつておいて、やつと安心したとやうに、中仕切の障子のあちらで頻りに胸を撫でおろす。そして、障子の此方ではお千代が靜に屏風を立て廻はす。あの淨瑠璃の文句をうろ覺えながらに心得てゐればこそ、かうも合點がゆくのであるが、でなかつたら、この聾者は隨分と、さてはあの女があとから尋ねて來た若い方の女を年寄りに取持つたのだな、それにあの若い女は年寄にぞつこんなのだな、などと改作をやらないとは保證が出來なかつた。そんな改作は惡い耳の全要求であらうか、それとも舞臺に穴一つあけまいとの緊密がさせるのであらうか、とかく聾者は一切を聾で埒あけることをおそれる。その責任の半ばを演出の方にも負擔させたがつてゐる。

わたしは半兵衛がそこへ來合はせた段になつての舞臺を見て、自分の耳にひきくらべて、つくづくと半兵衛やおかるの耳のよいのに畏れ入る。いや、半兵衛役者おかる役者の耳の聰いのに驚かされる。父親平右衛門は半兵衛にあてつけて、わざとお千代に平家物語を讀ませる。おかると半兵衛は共に障子のこちらで聞くことになる。これを舞臺で見ると讀む人と聞く人との距離があまりに甚しい。驚いたり、畏れ入つたりするのはそれがためである。原作では、決してああまでの距離を考へてはなかつた筈だ。原作では、たしか、おかるは半兵衛を捨てても立たれず、障子の傍に立ち寄つて、ここに仕事しながら障子隔てて聞きます、といふのであつた。半兵衛は半兵衛で不あしら

ひなる氣をかねて、詞を留め折を待ち、共に摺り寄り聞きゐたるといふのであつた。その障子一重を棚にするのが原作の舞臺だ障子一重を隔てにする四人の席と席とが近いほど、あとにも先にも萬事舞臺の呼吸がよく、效果もあがる筈であつたのを、何故にああいふ行方をするのであらう。萬事が理責めの今の舞臺にこれはをかしいと考へれば、おおそれそれ、みんな耳の聰さがなす業であつたらう。

また、わたしはかういふ事も考へる。お千代が平家物語を讀む。うつむいたままずら〳〵と讀むやうだ。せめて口の動きでも見せてくれたならば、と聲は外の觀客が思ひもつかぬことをいひ出す。ところで、あの平家物語の讀み聲を大夫の方で語る約束の、いな、語るより外には途のない人形芝居であつたら、どんなことになるのだらう。わたしが考へるといふのは、其の事である。勿論人形の口は動かずとも、首のかしげ樣や、わづかばかりの手の動しやらで、口の言葉どころか、心の言葉そのものさへぢかに聽きとれるのでなからうか。やはり、人形芝居で出來てゐるものは、人形芝居でなければ收さまらぬものがあるらしい。一體耳の方々が、あの朗讀から何ものをうけとるのであらうか。果して、お千代も、おかるも、平右衛門も興奮するほどのものを、受けとり得るのであらうか。

原作では、多分父親平右衛門が飽くまで半兵衛を見殺しにするといふの態度で、極めて冷かな言葉しかいはなかつたと思ふ。たゞ言葉のうらには、半兵衛の衷心を解して、彼をして自殺を止めさせる工夫を敎へてゐたと思ふ。ところが、舞臺で見るのはどうもさうでないらしい。けれど、聾のわたしはいかに父親の口もとを見詰めても、原作通りか、改作の區別を知ることが出來なかつた。わたしは當惑した。そして退屈した。ふと、やつぱり能がいいなアと思つた。

しかし、能に七分の心を傾けながら、やはり芝居に三分の未練が殘る。すると孔尚任出現以前の支那のお芝居が頭を掠める。作者の臺辭は少つて多くは役者が舞舞の上に勝手にしやべり立てる。役者のまゝにしてならぬのは聲高にうたふべき歌詞だけであつたとか、何といふ氣易さであらう。わたしはそんなお芝居がいゝナアと考へる。

けれどさういふ事は何本の制度がある今日ゆるされないのなら誰か黃表紙式の輕い脚本を書いてくれないかと甘えて見たくなる。日月は燈、江海は油、風雷は鼓板、天地人は一大の劇場、堯舜は旦、湯武は末、操莽は丑淨、古今來許多の脚色と殿上の柱に書いておかれた大清康熙帝の見識やらたわ言やらで、押してゆく脚本はないのであらうか。

たとへば夢茶羅國のお頭、夢魂道人の夢の狂言の楽じの樣な楽じをする人はないのであらうか。夢魂道人は黃表紙「盧生夢魂共前日」の主人公である。もとより戲作者の筆になつた代物ではあるが、とにかく滑稽詼謔の間に宇宙の大を弄ぶといはゞいふ事も出來よう。今の劇作家はあまりに宇宙とやら、人生とやら、何とやらの前に堅くなり過ぎる。誰かこれを矯めるべく、また聾者が補聽器の手を折々休すべく筆を執る黃表紙式狂言作者はゐないか、その出現をしん以て祈る。

（大正十五年「テアトル」）

淨瑠璃の五段物

一

わが浮世繪の海外に流出せること日久しくその數甚だ多い。しかも歐洲の諸博物館の藏して誇りとするものは、大方僞板であつて、眞板なのはわづかに二の町のものに過ぎないとのことである。

西人の浮世繪研究に關する書籍は少なからず刊行されてゐる。その中また聽くに足るもの、聽いて教をうくるもの、もとより乏しくない。しかし、浮世繪の玄味に至つては、彼等果して解し得たるか、いなかを詳にしない。浮世繪は江戸三百年の鎖國の生活が產めるもの、わが國の傳統が傳統として、他からの刺戟なしに守りおほせられた時代の影である。その形を理解なしに、その影のおもしろさがどの程度までいひ得ることであらう。浮世繪の色とにほひとひゞきとは、眞僞の板に於いて雲泥の差を有つてゐる。西人の研究にして、博物館藏するところの僞板に禍されるなくば倖である。かういふ考は何も浮世繪に就いてのみ抱かれるものではなかつた。

二

もう今では誰一人信じさうにない說であるが、ずつとの以前、一西人によつて、わが近松の淨瑠璃の五段組織は、西洋劇の樣式の影響の下に完成されたと說かれたことがあつた。珍しい說として、わが國人の間にも隨分承認されもした。けれど間もなくこれを訂正する說が生じた。基づくところは十二段草子との關係である。

十二段草子、くはしくいへば淨瑠璃十二段草子は牛若丸と矢矧の長者の女淨瑠璃姬との戀物語である。小野お通の作といはれてゐるが、未だ確證を得るよしもない。淨瑠璃の名またよつて起るといふも、未だ信憑を寄するまでになつてゐない。とにかくに淨瑠璃節の詞章中に於いて現存せる最古のものである。

十二段草子の名は、理由はともあれ、十二段に分れてゐるところから命ぜられる。太夫がその十二段を語るには、あまりに勞れ過ぎる。漸く複雜になつた淨瑠璃の詞章は、これを折半して六段とするを便宜とし、後また一段を減じて五段としたのであるといふのが訂正說である。要は太夫の聲量の問題であつて、西劇の與るところでないといふのであつた。

十二段草子の流行の後に、六段の淨瑠璃の存在したのは事實であり、その後五段の淨瑠璃の盛行したのも事實である。しかし、この訂正說は、五段を、また六段を、一人の太夫が語るといふ誤謬の上に成立してゐる。興行當時の番附の太夫名を一瞥しただけでもこんな事のいひ得る筈はなかつた。無理からも西人の誤謬を排せんとするの餘、またこの妄說をなしたのである。しかも、一時は中々信ぜられてもゐた。

六段の淨瑠璃が十二段を折半したといふことはなほ認めてもよい。五段もまたその六段より出づるといふに至つては、認めらるべきでない。何となれば、五段と六段物とはおのづから發生の途を異にしてゐるからである。

けだし、淨瑠璃の五段物は能の五段の番組によつて創まつた。能の五段の番組とは、初段の脇能、二段の修羅能、三段の葛事能、四段の脇所事、五段の祝言をいふ。

この五段組織はまた一番の能の中にも存在してゐる。能樂の理論と實演とを通じて第一人者、いな能樂の完成者である世阿彌は能を序、破、急の三體に分ち、更に破を序破急の三部に分つてゐる。かくして、一番の能は五段から成立してゐる。淨瑠璃と能樂の關係の緊密の度は今こゝにいふまでもない。新しい淨瑠璃作者は完備せる能の様式に準據して、淨瑠璃の五段物を創めたのである。すなはち單純なる十二段草子式の叙事詩の域を離れて、漸く綏急遲速の律度宜しきに從ふ劇詩の境に入つたのである。世話物の三段組織の如きは、序破急の三體をそのまゝに移して、未だ破に三部を分たざるものであつた。世話三段物の精粋は序を棄て、急を棄てゝ、破の三部によつてのみ成立してゐるといつてもよい。

淨瑠璃の五段物と西劇の様式との關係の說を訂正しようとしたその頃はまだ世阿彌の名も單に謠の節附の人としてのみ知られてゐた。あの世阿彌十六部集の如きも、未だ世に出でず、出でゝも、世に讀まれてゐなかつた。從つて、能と淨瑠璃が密接な關係のある事を十が十まで承知してゐる國人も、つひにこの一條件から、西人の妄說を打破するには至らなかつたのである。言葉こそ違へ、劇の存在する以上、序破急の三體なからざるべからず、また東西古今を通じての普遍の法則のみ、との見を以て、西劇の五段組織と能の五番組立とまた淨瑠璃の五段様式の關係を說いて、西人の誤謬を訂すまでにゆかなかつたのである。彼の意見を聽く前に、あまりに多く我の知識を缺いてゐたのである。

能樂そのものゝ價値をさへ、浮世繪の鑑賞と共に西人に教へられて、はじめて蒙を啓いた時代も、さうまで遠い過去でなかつたのである。

三

能の五番組織の談はゆくりなく西鶴の「好色五人女」を想ひ起させる。「五人女」はこれを「一代男」「一代女」に比較すれば、各篇が整然たる組織を有してゐると評される、なほそのまゝに西劇の五段の展開にも當てはめることが出來るといはれてゐる。ともすれば統一なく、中心なき彼の好色本中の異彩であるとは衆評の一致するところである。

その言はまさしく當つてゐる。しかし、そこまで考へるとならば、何故に一部が五篇より成り、一篇が五章より成る組織にまで立ち入らないのであらうか。

巻一の「姿姫路清十郎物語」巻二の「情を入し樽屋物語」巻三の「中段に見る暦屋物語」巻四の「戀草からげし八百屋物語」巻五の「戀の山源五兵衛物語」の排列は、おのづから能の五番組織である。これ等の五の物語はおなつ、おせん、おさん、お七、おまんの五人の女を主人公としてゐる。おのおのは女をシテとする一番能であつた。その一番にまた序破急の五段を有してゐることは、例を擧げて說くがほどもない。一讀極めて明瞭である。

西鶴が何故にこの散文能を作つたか、おもてに小說を裝うて裏にこの戯れをなす動機如何、事は漸く西鶴の好色本の本質に關し、彼の藝術の本質にも關する。たまたま能の五番組織から迷ひ入つた今は、その縷說を避くべきで

あらう。いつかの折にゆづる。

（昭和三年八月「英學塾學報」）

能樂そのもの〻價値をさへ、浮世繪の鑑賞と共に西人に敎へられて、はじめて蒙を啓いた時代も、さうまで遠い過去でなかつたのである。

三

能の五番組織の談はゆくりなく西鶴の「好色五人女」を想ひ起させる。「五人女」はこれを「一代男」「一代女」に比較すれば、各篇が整然たる組織を有してゐると評される、なほそのま〻に西劇の五段の展開にも當てはめることが出來るといはれてゐる。ともすれば統一なく、中心なき彼の好色本中の異彩であるとは衆評の一致するところである。

その言はまさしく當つてゐる。しかし、そこまで考へるとならば、何故に一部が五篇より成り、一篇が五章より成る組織にまで立ち入らないのであらうか。

卷一の「姿姫路淸十郎物語」卷二の「情を入し樽屋物語」卷三の「中段に見る暦屋物語」卷四の「戀草からげし八百屋物語」卷五の「戀の山源五兵衛物語」の排列は、おのづから能の五番組織である。これ等の五の物語はおなつ、おせん、おさん、お七、おまんの五人の女を主人公としてゐる。おのおのは女をシテとする一番能であつた。その一番にまた序破急の五段を有してゐることは、例を擧げて說くがほどもない。一讀極めて明瞭である。

西鶴が何故にこの散文能を作つたか、おもてに小說を裝うて裏にこの戲れをなす動機如何、事は漸く西鶴の好色本の本質に關し、彼の藝術の本質にも關する。たまたま能の五番組織から迷ひ入つた今は、その縷說を避くべきで

あらう。いつかの折にゆづる。

（昭和三年八月「英學塾學報」）

虛實皮膜の間

近松門左衛門の言葉として、穗積以貫が、その著「なにはみやげ」に傳へてゐる

藝といふものは、實と虛との皮膜の間にあるもの也

は、近松がみづからの藝術觀を最もよく說き得たものといはれる。彼の淨瑠璃がまさしくこの見解の下に作られてゐることは、彼の作品の實際に照して知られる。この言葉は、藝を寫實とし、自然模倣とする主張に對する反駁であつた。寫實を主張とする者は、例を歌舞伎にとつて、立役の家老も眞の家老に似せよう、大名も眞の大名に似せようと努力するのが、今日の實狀である、今日の藝はさうなければならないと說いた。これにも理由はあつた。空想の跳梁を極端にまでゆるして、荒唐無稽の作のみがあり、思ひきつた寫實ばなれの藝風のみが行はれてゐた歌舞伎界に、來るべき反動が來たのである。この主張はそれを代表するといひ得る。近松はもとより寫實を肯定する。ただ寫實に專らであつて、寫實以上といはうか、以外といはうか、とにかく寫實に加へる或一事の存在を忘るべきでない、いな、絕對に缺くべきでないとの主張の下に、かの反駁の言葉をなしたのである。

近松も、また例を歌舞伎にとつていふ。立役の家老は眞の家老の身ぶり口上を寫すといふが、眞の大名の家老が

立役のやうに、顔に紅脂白粉をぬりはすまい。眞の家老は顔を飾らぬからとて、立役がむしやむしやと髭は生なり、あたまは剃なりに舞臺へ出て藝をしたなら、どこになぐさみがあらう。虚でなく、實であつて實でない、その間にのみなぐさみが存在する。近松はかういつて、前言、「藝といふものは、實と虚との皮膜の間にあるもの也」に自註を加へたのである。

「なぐさみ」がいかやうな意義を有するか、どの意義の「なぐさみ」が藝と最も重い關係を有するか、考ふべき問題である。しかし、こゝに輕く、歌舞伎の觀客が舞臺鑑賞による美の享樂と決定する。さうだとすると、近松のいふ藝術は、自然模倣にさきだつて、まづ觀客に享樂させる美を準備するものでなければならない。現實を美化し、理想化したものでなければならない。

種々の條件のために、おのづから峻別すべき性質を有するとはいへ、近松の藝術觀と世阿彌の藝術觀とに、一脈の通ずるものを見る。いな、自然模倣と美との交渉を、かういふ狀態におくことが、傳統の然らしめるところであつた。能と歌舞伎また淨瑠璃との本來の相違は、近松の考へる美と世阿彌の考へる美とを必ずしも一致させはしないが、なほ傾向を同じうさせるのが、二人の上に働く傳統の力である。

「なにはみやげ」に傳へられた近松の言葉が、いつの年に語られたかは明かでない。晩年の言葉であらうことは、ほぼ推定される。この推定から、近松の藝術觀は、さういふ傳統を承けると共に、現實の事象を最も重く扱ふべき世話物の創作の經驗より出てゐるものと考へられる。世阿彌の言葉に、「誠の冥途の鬼よくまなべば、おそろしきあひだ、面白きところ更になし」とあるが、近松の描き出すものは、誰も見たことのない冥途の鬼でなく、眼

前の社會事象の眞實でなければならない。なほそれを醜からず、面白く、美しく描き出して、なぐさみを民衆に與へるものでなければならない。近松の世話物の成功は、それ等を巧みにしおほせた點にある。成功は、また世阿彌のやうに美を幽玄にのみ限定しないところにある。近松に於いては、虛實の關係はずつと複雜である。實に對立するために、種々の內容を有する虛の存在を必要とした。

虛の一內容に善がある。殊に近松その人の性格との必然的關係から、彼はしばしば現實の社會事象に道德的解釋を加へる。なぐさみは美と共に善から得られる。わけて、當時の竹本座の觀客には、缺いてはならない虛の手段であつた。

今宮の戎の森に心中があつた。日野絹一反を松の木に懸けて、男と女が縊死を遂げてゐた。松の木の下に男の足袋が脫ぎすててあつた。何故に脫ぎすてた足袋か。たかが滑つて攀ぢにくいためであらう。しかし、近松はその眞實であらうと思はれるものに、虛を加味する。其の虛は道德的內容を持つ。男は木に上らうとしても踏み滑る。早くも上つてゐる女は、をなごの身でさへも上るもの、こりやどうぞいのと手を引く。男は淚をはらはらと流す。アヽ主の罰のおそろしや、此の足袋の片足は旦那のお古、常はともあれ、此の時は頭にも戴く筈、土足にかけしその咎お許しなされて下されといつて、足袋を脫いだ。松下の足袋がそれであつた。かうまで主人おもひの男が、どうして心中をするのか。近松は溯つて動機を考へる。かうして、條理整然として虛が貫く一篇の淨瑠璃「今宮の心中」を成立させた。ここに觀客聽衆は同情の淚で、二郎兵衛おきさの人形の動きに眺めいる。舞臺は濟んでも、人々は

快い悲しさに醉つてゐる。

美のために、善のために、實に配するに虛を以てする、虛實皮膜の間を覘ふ、といふ點に比べると、輕くも小くもあるが、忘れてならない別樣の虛も存する。題材が現在の事件で、關係者がそこここにゐる、といふのに、わけて、竹本座といふ人氣渡世のために筆を執るのである。あれこれに氣がねする結果、やむなきに出づる虛を加へる例も、しばしば見うけられる。彼の懷抱する愛が、すべての人物を惡人にさせなかつたのはその一面で、他にかういふ一面もあつた。

しかし當時の觀客は、事實の眞と作品の虛とを比較することに於いて、作者の企圖を考へてやつたらうか。ほんの少數者はともあれ、大多數はさうではなかつたらう。たとへば、「心中宵庚申」で、半兵衛の姑は惡人であり、舅は善人になつてゐるが、「傳奇作書」の實說によれば、事實は反對であつた。この場合に於ける近松の變更は、一に作の趣向によることで、當事者に對する氣がねからではなかつたらうが、もとより竹本座の觀客は、變更された筋の運びをのみ面白しと見て、その手續を考へもしなかつたらう。近松も、また考へて貰ふことを期待しなかつたらう。ところが、井原西鶴の浮世草子の場合になると、作者も、讀者も、その手續を興がつてゐなかつたか。

寫實を旨とすること、西鶴の如きはない。現實の生活をさながらに描くこと、彼の如きはない。美化、理想化、道義化よりは、むしろ、醜化、不道義化を念とするかと思はれるほどに、現實暴露をあへてしてゐる。その作者

が、なほ現實の關係を利するとは何の謂であるか。彼がつねに讀者の笑ひを求めるために、誇張の筆を弄すること、たとへば、「好色一代男」の世之介が、一代に會つた女と少童を數へて、女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人といふが如きをさすのではない。これは直に虚であることが看破される。實らしい虚、虚らしくなく見せかける虚、たとへば、今の男女の數を正しいものと見せるために、「手日記にしる」といふやうな態度についていふのである。なほいはば、架空の人物世之介といふのを設けながら、「あらはに書きしるす迄もなし、しる人はしるぞかし」とさも實在の人物めかす態度をさしていふのである。讀者ははじめ、西鶴の筆に魅せられてさう信ずる。漸くにして欺かれたことを悟る。悟つて、さて、作者の趣向を知る。手腕ありてとして喝采の聲を上げる。作者と讀者は相顧みて笑ふ。おもふに、西鶴は、かつて俳諧の一座に參ずる者が、すべて、その輩、その夜の氣分を同じうするが如く、一部の浮世草子を中にして、作者の肚を理解し得る讀者のあることを期待したのであらう。

多くの場合に、西鶴は個々の事象の描寫に於いて、實を以てし、その配列に於いて虚を以てする。また、個々の事象に實を以て充てながら、その一部に虚を殘す。たとへば、事と處に實があれば、人に虚があり、人と事とに實があれば、處に虚のあるが如きである。もとの事實を悉く知らぬ者は、讀んで悉く信じ、その中の一虚事を見出したものは、他の事實に對しても、輕い疑ひを有つ。信すべきか、信ずべからざるか、その惑ひの中に、をかしさ面白さを味ふのであつた。當時の有識の讀者には、かういふ感を抱くものが多かつたのであらう。

時の隔りは、西鶴の虚實を全く混淆させてしまつた。今は多く、西鶴の筆を信じて、書かれたものを、みながら

に實とのみおもはせる。作意を露はに見せなかつた町人物になると一段とさうである。西鶴が猶ゐたならば今の讀者にどんな苦笑を以て對するか、推測するに難くない。

「好色一代男」の主人公世之介のあまりなる早熟と、六十歳の女護島渡りとは、はじめから、誰も作者の趣向として、世にその人ありとはすまい。ただ、世之介を活躍させる背景と、また對手である遊女とを實と見るであらう。殊に、遊女が聞えてゐる太夫であるならば、なほさらさう思ふであらう。勿論、西鶴はさう思はせるやうに筆を執つてゐる。吉野が小刀鍛冶の賤しい弟子の戀慕をいとほしがりて、願ひをかなへてやつたので、とかくの惡沙汰となつたのを、世之介が身請したこと、世之介一門が吉野を妻とするのを承服しないのを、吉野が一門中の女達を招いて、上手に應對して、すつかり氣に入られ、それ等の取なしで、正妻となることが書かれてある。これを後人の考證と比較し、先人の記載と參照して、ある程度の信をおくことが出來る。吉野の情深く、聰明で女藝のかずかずに達したことは、まさにこの通りであつたらう。ただ、世之介は實在の人物でないが、吉野にその人らしい者があつた。灰屋紹益がそれであることも證明されてゐる。紹益が法華信者で、また吉野も法華信者となつたことは、「後の世を願ふ佛の道も、旦那殿と一所の法花になり」の一句もあだには讀むことが出來ず、更に、吉野愛翫のぜんまい仕掛の蠻の盃の遺物のあることから、「土圭を仕懸なをし」も據り所あるかを思はせられる。さすがに、知られてゐる吉野だけに、西鶴も正しきをそのままに傳へてゐたかとも考へられるが、なほ一應の疑ひを、作者の例の手法に

かけてもよい。大體が實を以て通つてゐるだけに、どこぞに、虚がありはせぬか。ことによると、虚が最も大きい條件であり、根柢をなすものでないか。まづ眉に唾してかかる必要はなからうか。

この章の重要な條件と思はれるのは、小刀鍛冶の弟子の事件であるが、このものは果して眞實であつたらうか。諸書これを傳へてゐるが、或は却つて憑據を「一代男」におきはしないか。以前の書には、たえてこの事が見えなくはないか。前にいふところの先人の記載とは、畠山箕山の「色道大鑑」のことであるが、それには、ただ「寛永第八辛未年、就鹿客而有訴論、因玆難不充年季、同年八月十日年廿六而還舊里」とのみある。この鹿客が果して小刀鍛冶とはどうして斷じ得られよう。或は、同じ吉野を原據としたとおもはれる近松の「山崎與次兵衛壽門松」の貧しい難波屋與平に、却つて、もとの俤が遺つてゐないと誰が保證し得よう。吉野が世之介一門の女達の應對ぶりも、この章のやまではあるが、これも果して事實であらうか。世之介の身請、實は紹益の身請が、「色道大鑑」の記載からは、作者の趣向であることが明かである如く、この一段も、傳へられてゐる吉野の聰明の事々を、綜合するための趣向であるかも知れない。

太夫が、わざと賤客に會ふの話は、西鶴にあつては、一つの類型をなしてゐる。人により、處によつて、事をかへてゐるだけである。これもまた考へねばならない。また、吉野の寢起姿が、却つて他の太夫だちの盛裝を壓したことは、また箕山によつて記載されてゐる。西鶴は、わづかに周圍を變更することに於いて、そのままに「好色二代男」の中に用ゐてゐる。しかも、「色道大鑑」とも、箕山ともいはずに、「日の好き時素法師が語りぬ」といふところに、例の手法が見られる。これもまた參照すべき一事であらう。

「好色一代男」に「源氏物語」の俤があること、いひかへれば、「源氏物語」を現代化したのが「好色一代男」であることは、最も明かなことである。一篇の結構がそれに基づくだけか、個々の事件も、彼を翻案したものが多い。三十五歳の章にさきだつ三十四歳の「火神鳴の雲がくれ」の如きは、一目して「須磨」の巻のおもかげである事が知られる。けれど今の吉野の章になると、あまりに明白な實のために、西鶴の虚である「源氏物語」翻案の筋はどこぞに逸してしまつた感がある。しかも、なほ依然として、その筋を追つてゐる西鶴ならば、彼の虚實は皮膜の間に逍遙する幻術を、心にくしとしなければならない。實に西鶴はその幻術を巧みにしおほせてゐる。彼が現實描寫の筆を彼のまことのあらはれといふべくば、これはまた、驚くべき彼のあそびの發露でなければならない、然らば、その章は「源氏」の何に基づいてゐるか。

源氏は須磨の浦から移つて、明石の館に住ひする。館の主の入道は、はやくから姫を源氏に奉りたさに心は苛立つ。漸くおもひはかなうて、源氏は明石上のもとに通ふやうになる。源氏はおもひもよらぬ浦邊にかういふ君もあつたかとゆかしがる。愛の心は頻りに動く。けれど源氏にもままならぬやるせなさがある。京なる妻紫上の妬みをおもへば、さうは姫のもとに通ふことが出來なかつた。その中に、源氏は都に召しかへされる。その喜びはさることながら、明石上との別離も悲しい。

「須磨」の巻につづく「明石」の巻にはかういふ事件が書かれてある。それにつづいて、明石上の妊娠、また姫君の誕生、源氏が永い焦慮の後に、その誕生を紫上に告げることが「澪標」に書かれてゐる。その後の巻ではあるが、その姫と母が京に迎へられることが書かれてある。西鶴が、この巻々の筋立を、いかに巧みに吉野事件に結ん

だかは、直ちに讀むことが出來る。小刀鍛冶の弟子の惱みと入道の惱み、源氏の明石上の京迎へと世之介の吉野身請、一門の故障と紫上の嫉妬と、一々對照される。

吉野事件に即すれば、殆どすべてが事實、「源氏物語」に即すれば、あらゆるものが翻案、二者を合はせ考へれば、虚實配合の妙、西鶴はかういふ三段の構へで讀者に對してゐたのであらう。讀んで實事とするのを下の讀者、飜案とするのを中の讀者、虚實の妙を見てくれるのを上の讀者と、彼はひそかに思つてゐたらう。當時に於いては、上の讀者も相應の數に上つたのである。彼の浮世草子は、決して竹本座の觀客ほどに民衆的ではなかつた。

ここに引いたのは、最も著しい一例である。これは「一代男」にとどまらず、他の作に亙つていひ得ることである。「好色二代男」は、遣手婆に諸國の諸分を語らせて、聞書した體裁をとり、なほ、「世傳が二代男、近年の色人殘らず是れに加筆せし、されども變名にして、露はには記し難し、此道に賴る人は合點なるべし、其里其女郎に氣をつけて見給ふべし、時代前後も有べし」といつてゐる。もとより人そのままの實事もあらう、それと共に、彼はすべての章に於いて、「源氏物語」の「宇治十帖」の翻案を企ててゐたのである。

近松が藝を虚實皮膜の間にありとするのは、主として美のためであつた。西鶴が同じ態度をとるのは、をかしさのためであつた。そのをかしさを、求めるのが、俳諧の傳統であつた。近松が據つて立つた傳統と、西鶴が守る傳統との間に、どんな交渉があるか。近松が觀客に重きをおくなぐさみと、西鶴が自己を中心とするたぐさみと、どうして違ふか。問題は却つてこの後にあらう。前言おそらく用なきものを縷說したにちかい。

（昭和二年「理想」）

怪異小説研究

一

「世間化物氣質」が增谷大梁、牛井金陵の合著として、明和八年に刊行されたことは、二樣の意義を有つものとして解し得らるゝ。氣質物の流行のため、即ち、息子、娘、親仁などと類を分ちて、その間に細やかなうがちを見せようとする八文字屋本の作風が一世を蓋うて、長者、旗本、俳人、學者、出家さては茶人、妾とおの〳〵分野の奇拔を競ふあまり、終に化物などといふ人の意表に出づるものに到達したものと考へられることが一つ。怪談物の流行のため、すなはち、寬文六年の淺井了意の「伽婢子」をはじめとして、「新御伽婢子」「宗祇諸國物語」これに踵ぎ、更に寶曆、明和に於いて陸續として出でた幽靈變化の談の盛行を追ふものと考へられることが一つ。

すでに化物が存在して、何等かの行動をなすといふ以上、その生立に從ひ、その境遇に應じて、氣質の變の存在が說かるべき筈である。職業により、階級により、嗜好によつて、類を分つたのが人間の氣質物であるならば、氣質物の中また化物氣質の存在することは、決して異とするに足りない。しかし、大梁、金陵の期するところはそれでなかつた。彼等の化物とは、狐狸の類、また山氣林靄の怪をさしていふのではない。士農工商の四民を離れ、何

の活計もなく、無爲にその身を治める遊民、もとより戯作者もその中の一つである者共をさしていふのであつた。「世間化物氣質」とは世間に多いこれ等の化物どもが、いかやうに化けもし、化かしもするか、いかやうに世人を欺瞞するかの手段を寫し出したのであつた。作者等ははじめから、この作意を序文に於いて明かにしてゐる。

遊民の一人が、ある金持に勸めて下屋敷を買はせた。妖怪がしば〳〵出現して、化物屋敷のとり沙汰が高くなる。遊民の一人が退治して見ると埋められてゐた黄金の精靈であつた。小判を掘り出すと共に怪異は息んだ。金持の慾心は漸く深く、度々彼に勸められて化物屋敷を買つた。その都度彼は退治してゐた。けれど事實は彼が惡企みで怪を出現させ、また小判を埋めておいたのである。擧句のはてに、この怪のみは退治することの出來かねるの口實の下に、大きい屋敷を貰ひうけて、おのが住ひにしてしまつた。題して「角屋敷をのみこのんだ妖怪の計」といふ。巻一の第一章である。作者が傳へようとする遊民人を欺瞞するの手段は、大方この類である。

怪異小説の目を立てることが、江戸小説を扱ふ上に、どれほどの便宜を齎し得るかを知らない。またその目を立てねばならぬ理由に就いて、くはしくは知らない。怪異小説の名の下に、どれほどのものを包容するが正しいかをも辨へない。故にしばらく世の稱するまゝに從ふにしても、このやうな作品が、その名によつて分類すべきでないことは明かである。しかもこの書の存在そのものは、怪異の書の流行を裏書するものである。

二

嚴密にその義を限ることなく、漫にいはれてゐる義を取つて考へれば、怪異小説なるものは、寛延あたりを界と

して、前後の二期に分つべきでないかと思はれる。その盛行はどちらかといへばその後期にある。寛延から寶暦明和また安永と序を以て刊行の數の高まつてゐることが認められる。

數多き作品が世の流行に從ふにあることはいふまでもないが、作者はおの〳〵の作に、何等かの新しい意義を加へようとする。題言また序文にとりどりの言葉を多く加へてゐる。

釋迦文尊者の大德大いなるかな、上智をさとすに不可說微妙の間に大悟を得、下愚に至つては、三世因果をもつて惡をこらし、善をすゝむ。衆生濟度の法便仰ぐべし、尊ぶべし、是將怪にあらずしてなんぞや、怪の大なるもの也。近世風雲の僧ありて遍參の間、傳聞或はまのあたり見る處の怪說をかたる。川崎氏書とゞめて五冊と成る。是將怪の小なる物也、大いなる物は大益あり、小なる物もまた小補なくんばあらじ、この事を得て梓行して世に弘るの理、是によつて省悟すべし。

これは明和七年の「近代百物語」の序である。この類ひが最も多く書かれてゐる。佛によると、儒によるとの相異はあるにしても、敎訓を以てすることは一である。寶暦二年の「寶物語」の序の如きは儒を藉りるものであつた。

君子は怪を語らず、小人は怪を好む。天下の人、其心を依るや尊き有り、卑しき有り、數ずべきの甚しきなり。今此の一篇は予にひとしき小人をして、是よりいたらしめて是を語らざるの高きに至らしめん一助ともならんと梓に盛す。

怪異の談の流行は、たゞに事の奇を傳へるだけでなく、漸く文辭の綺麗を爭ふの風を生じた。それを誇負するものはともかく、さもないとすると、おのづから一言の辯なきを得なかつた。明和九年の「怪談記野狐名玉」は序文一

篇の外に更に言葉を添へてゐた。その言葉にいふ、

　　午憚口上

一、此著者古今より品々の百物語怪談のよみ本多く御座候得共、其外々の珍敷事不思議あやしきを聞にしたがひ、かずかず書集し草稿の中より撰出して五巻の草紙に合し候へども、何か山川の主咄しも古めかしくおぼしめしさふらはんやと楽じわづらひ、亦は春夏秋冬の御伽慰にもならんかと存たてまつりしかば、こつて思奚にあたはずといひ傳へし古人の教にまかせ、聞とどめしあらましを怪談記野狐名玉と稱し、ひらがな繪入全部五冊と興行なし、彼書林の乞に任す。又は何某何某としるせしも近代の事多ければ、世間をはゞかり名をあらはさず、おの〳〵よく聞き侍ひ給へ。

怪異小説の作者の態度が、必ずしも怪異に精進してゐない時に、寶曆五年の「化物判取帳」のやうなものが存するのは、別に怪しむまでもなかつた。

三足の烏、米を舂く兎も、御てんとうさまが正直を聞けば、天狗は星の名、火の雨は氷雨、火車といふ婆々ア、すつぱのかわといふ世智も見ると噺とは遊里の畜生獸にあらず、鬼ころし銘劔にてなきが如し、しかれば土蜘といふもすまひとり、化鳥と呼ぶ俳諧師、是にて不殘相濟申候以上、

としるされた序文からも、內容の性質を推するに難くない。

王子の社の闇まぎれに、狐どもが何やらひそ〳〵と話し合つてゐたと見たあとに、怪しい手帳が落ちてゐた。牛一疋、切首五つなどと書いてあつた。「狐の手帳」にこの怪を錄したあと、作者は更に實說なるものを記してゐる。

手帳は芝居の道具帳であつた。狐と見たのは芝居の作者が人目を避けて道具方と相談するために、わざと寂しい所を選んで會つてゐたのであつた。

「一眼の靈符」といふがある。邪心なき者がこの頃から毎夜の遊行、いつか瘦せ細つて、一目小僧一目小僧とのみ口癖に呟いてゐる。さる人が靈符を與へる。奇病はとみに癒える。作者はまた事の裏を告げていふ博奕に凝り固つた彼は、たゞ一の目の骰斗をのみ張つてゐた。運拙くしていつも負けつゞいた。田畑までもなくしてしまひ、それがもとで病となり、あのやうに一目小僧一目小僧を口にするのであつた。靈符とはさる人が遣はした博奕を止めよとの申渡狀に過ぎなかつた。

「化物判取帳」の十六條、みな事表に幽恠の影なく、趣向に機智の痕のみが見える。このやうなものもなほ怪異小說として扱ふべきであるか、いなかを知らない。たゞ「世間化物氣質」と共に、怪異小說の流行を前提としてのみこの書の存在の意義が解し得られる。

三

出板年月日は明瞭でないが、「化物氣質」「判取帳」よりやゝ溯つた年代にあるかと思はれる花洛誹林雲峰の「怪談御伽櫻」も、また怪異小說の一異體として考へられる。

中には前の二書に見るやうな怪の名を揭げて怪の實に背くものもある。たとへば「丹波の山猿」の章の如きがそれである。丹波の龜山近き里に化物屋敷がある。化物は劫經た猿であるといふ話を聞いた浪士が、生捕つて賣物にし

ようと考へた。猿は友をよぶ性質があるとて、みづから猿の皮を纏ひ、猿さながらの姿で忍び込む。果して怪物がゐた。ひつ捕へようとする折、怪物どもに手籠にされる。これも猿を生捕りに來た者どもであつた。いかにいひ譯けしても聽かれず、つひに大阪の道頓堀の見世物小屋に賣られてしまつたとの話である。殊に注意されるのは、章末に於ける「木戸口かため、鎖を付、丹波の國鎌田村の化物、纔三文で前代未聞の咄の種、さあ〳〵錢は戾〳〵」といふ一句である。事件がすでに怪を離れてゐるところへ、この結句がある。全章ために諧謔にをはらうとする。これが怪談を以て標榜する作者の意圖であらうか、疑なきを得ない。

怪を傳へながら、結句に洒落をする、諧謔を弄するのが、「御伽櫻」の各章であつた。たとへば「猫の色里」の章の如し。

京の男が石山寺に詣る途上、おもひも寄らぬ室の色里に來てしまつた。しかも、擁して眠らうとする妓は全身の毛である。妓はいふ、こゝに來た者は皆殺して決して歸さぬことなれど、われ御身の家近くの飼猫たりし頃、雖を救はれたよしみがあるから、敢へて助けよう、とひそかに逃してくれる。後から多くの猫が追ひ迫つて、頻りに砂をなげかける。辛うじて歸ることが出來たが、その砂のかゝつたところは、猫のやうに毛が生えて醜さいひやうもない。詮方なしに嵯峨の奧に隱居する。「三尊來迎をまつのとほそ、この世からの安樂世界と悟りて、只他念なく、にやんまみだ佛〳〵」これが例の結語である。

また「戀慕の遠目鏡」にはわざと狐に瞞されたふりして、一緒に茶屋に遊び、それに代金をおしつけて去る狡猾な人の話がしるされてゐる。瞞しそこねた狐は、まことの姿を顯はして、やつとの思ひで奧山に逃げかへつた。こ

の類の話はしば〳〵怪異小説にくりかへされてゐる。とりたてゝいふが程はない。しかし、他に見ること少いのは、例の結句である。「扨己が住家に歸り、右の次第を語れば、友だち狐共あつまり、肝をつぶし、扨も〳〵人間程、おそろしいものはないと、みんなこんくわいして入にけり」

怪談は必ずしも晦冥陰森の談を意味するものでない。さりとてこの「怪談御伽櫻」の態度はあまりに明るきに過ぎる。作意のあるところを察知することを要する。

「御伽櫻」の一瞥は少なからず西鶴の怪談物を想ひ出させる。或は二者の間に直接の交渉があるかとも思はせられる。雲峰は西鶴を模して怪異の間に多少の諧謔を寄せようとする、たゞ技倆の乏しさが西鶴の辛辣を移し得ないで、わづかに結句の洒落を得たに過ぎないかとも思はせられる。かういふ聯想は「御伽櫻」の外、をり〳〵浮世草紙型の怪異小説に於いて起される。

西鶴の創作意識が怪異に動いたのは「好色二代男」にはじまる。もとより「好色一代男」にもその動きは見られるが、これは西鶴自らしたのでなくして、原據である「源氏物語」中のものに惹き動かされたのに過ぎなかつた。巻六の「心中箱」には、太夫藤浪に切らせた髱が四方へ捌け、延びては縮み、二三度飛揚つた不思議、また世之介が夢に藤浪が來て縮緬一卷を呉れたと見て、覺めた枕がみにそのものゝある不思議がしろされてゐる。これは「葵卷」に六條御息所のもののけが葵上の前に現はれるくだりを移しとつたのである。源氏君から事の始終を聞いて、われも思ひあたるふし深く、つひに伊勢に去るのが御息所であつた。西鶴はこれをもまた翻して、藤浪をして、わが心寢ても覺めても世之介樣に心通はすためか、それならばもうその勤めせんなしと出家することにしてゐ

る。

西鶴が「二代男」に於いて、特に妖怪味を加へたのは、その原據である「宇治十帖」が怪をしるすこと、「源氏物語」の前の部分より多いだけではなく、その「宇治」をかゝりとして「宇治拾遺物語」に據ることが多いためである。「宇治拾遺」はわが志怪の書の古きものゝ一つ、また怪異小說に心を寄する者の、いつも好箇の資料としてゐたものである。

西鶴ほどの者が、何故にその頃の怪談作者の後塵を追はうとしたかの理由は考へられなくもない。「二代男」の方は當時の文壇に強く脈搏ちながら、まだ人々の意識するに至らぬ諸傾向をいちはやく承けて、鮮に示現したためであらう。「二代男」の妖怪味は同じ態度に於いて、時の流行である怪談を利用したのであつたらう。西鶴の作には、獨自の地を踏み固めながら、なほ常に左右の動きを注意してゐる細心のあとが認められる。これもその一特相として見るべきであらう。

しかし、西鶴はつひに西鶴である。どのやうに「宇治十帖」の不思議を移し、「宇治拾遺」の怪談を翻すにしても、貫くものは現實の色調である。舞臺を遊里にしたといふだけでなく、すでに彼の態度によつて決せられたのである。

年明前の女郎どもが百物語すれど、何のしるしもなく、噺は次第に變りて、身の上のおそろしさ、さては人を腦した思出を語つてゐると、その人々のあさましい姿が幻に顯はれて恨みかける。思ひ〳〵に詫言すれど、家の內の荒るゝことはやまなかつた。その時に一人の女郎が、おの〳〵揚屋の算用殘りは、と高聲に申すと、借錢ほど好か

ぬものはないのか、化した形は消え失せた。これが「二代男」の巻二「百物語に恨が出づる」にいふところである。依然として、西鶴は幽界の事を明界に轉じ、遊里に轉じ、たゞ事の奇構を假りて、意外のところに嫖客遊女の心理を穿つてゐた。これは「二代男」の怪異の事件に於けるどれにも當てはまることである。

四

「二代男」ではまだ從位を占めるに過ぎない怪異が顚倒して主位を成せる西鶴の作に、「大下馬」「懷硯」がある。怪異小說は多く短い話を集めた形をとつてゐる。編次の方法は一ではないが、大方二つの系統が認められる。殊に前期のものに於いて著しい。一夜人々相會して怪談をする。その百に滿つる時、必ず奇しき事の起るといふのが百物語である。これに擬して怪異の話を纏めるのが一つ。淺井了意の「伽婢子」はこれである。旅客の諸國に於ける見聞に託し、さなくも話を諸國に配する形式をとるのが一つ。「宗祇諸國物語」がこれである。「懷硯」「大下馬」はまたこれに屬する。「大下馬」の如きは、一に「西鶴諸國ばなし」とも題してゐる。

「大下馬」には諸國に傳へられた怪談がさながらに載せられてもゐる。しかし、必ずしもそれによつて諸國の地方色を明かに示さうとはしない。いな、漫りに某の國、某のところを假りて、諸國ばなしの格を保つことも少くない。「大下馬」巻二の「殘るものとて金の鍋」をとつて、その一證に當てることとする。

俄に時雨て生駒の山も見えず、日暮に平野の里に歸る木綿買が、道を急いで、昔業平の高安通ひの息つぎの水といふ所まで走つて來た。あとから八十ほどの老人が負うてくれとの賴み。一里ほどもいたはり行くと、日和があが

る。老人はひらりと下りて、さぞ草臥れたらう、酒一つと、息の中から手樽一つ、黄金の小鍋幾つかを吹き出す。なほ酒の相手をと、十四五の美女を吹き出して、琴琵琶を掻き鳴らさせる。その中に老人は女の膝を枕に寢入る。女は隱し夫に逢ふことおゆるしと木綿買に斷つて、十五六の若衆を吹き出して、手を携へてどこやらに行くことしばし。やがて歸つて來て、若衆を呑み込む。間もなく老人も目を覺して、女を呑み込み、道具を呑みしまひ、金の小鍋一つを殘して商人に取らす。日も那古の海に入れば、相生の松風謠ひ立ちに、老人は住吉の方へ飛び去つた。里に歸つて、この事を語ると、生馬仙人といふのが、毎日住吉より生駒へ通ふとのいひ傳へ、多分それであらうとのこと。

「續齊諧記」はこれに類する一話を傳へてゐる。東晋陽羨の人、許彥一日綏安山を過ぐ。一書生あり、足を傷めてゐた。許彥が負へる鵝の籠の中に入れよといふ。書生すなはち籠に入つて鵝と並び座す、鵝も驚かず、負ふも重きこともなし。樹下に息ふ時、書生出でて、共に酒を飲まうといひながら、口中より一銅盤を吐く。盤中山海の珍味を盛つてゐる。酒數行にして、一美女を吐く。宴すること暫くにして書生は醉倒る。女彥に對つていふ。われに外心あり、一男子を呼ぶと。口中より齡二十三四の美しきを吐き出す。その時書生の睡が覺めようとする。女子は驚いて、一の几帳を吐いて書生を掩ふ。女子また眠る。後の男彥にいふ、この女情あれど未し、他の女と逢はうと思ふ、泄し給ふなと。年二十ほどの美女を吐き出す。燕酌嬉遊すること程經る。やがて睡れる二人が目覺るとて、吐くところの女を口に納める。そこへ書生が吐くところの女が來て、さきの男子を口に納めて、靜に彥と物語る。書生も起き上り、もう日も暮れたと、銅器を殘らず口中に納め、大銅盤一つを彥に與へる、後、彥は蘭臺の令となり、

盤を侍中張散に贈る。散よつてその銘を見れば、實に漢の永平三年に造るところの古器であつたといふ。

「懐硯」と「大下馬」に支那の怪異談の翻案せられるものの少なからぬ事から、二者の間に直接の關係を認めるのは、失當でないと思はれる。

西鶴は彼の複雜を簡單にした、漢の古器を金の鍋にした。そこに用意は見える。更に大きい用意は、業平の息つぎ水までをとり出し、那古の海の入日までいひ立て、住吉までを持ち出して、諸國ばなしの一つに收めようとした點にある。生馬仙人の稱の如き、もとより生駒の山の附會に過ぎなからう。他の作者の諸國咄型の怪異小說同様に、必ずしもその國、その地に緊密を要とせざるものであつた。

姥火の話は河内の國に傳へられて名高く、戯曲小說の資料たる處の多いものである。「大下馬」またこれを載せてゐる。

卷五の「身を捨て油壺」にしるされてゐる事は、巷說といさゝかの相異を見ない。平岡の里の姥が、世を渡るかせぎに木綿の糸を紡げど、燈油に事を缺き、明神の燈明を盜みてたよりとすること夜毎に重なつた。一夜宮守ども弓長刀を用意して警めるほどに、また忍び寄る。弓の上手が雁股番へて引いて放せば、姥の細首切つてとる。首はそのまゝ火を吹き出して天に上つた。その魂魄消えることなく、火はそこゝを飛びめぐり、これに肩を越された者三年と生き延びたのはないとのことである。この場合には、西鶴は西鶴らしいものを添へずにはおかなかつた。

ひとりすぎ程、世にかなしき物はなし、河内の國、平岡の里に、むかしはよしある人の娘、かたちも人にすぐれて、山家の花と、所の小歌にうとふ程の女也。いかなる因果にや、あいなれし男、十一人迄、あは雪の消る

ごとく、むなしくなれば、はじめ戀れたる里人も、後はおそれて、言葉もかはさず、十八の冬より、おのづから後家立て、八十八になりぬ。

何をか西鶴らしいといふ、十八までに十一人の男に逢ひ馴れたといふ事である。巷說に聞かざるところである。西鶴はまた文の結びに、姥火に肩越された者の間もなく死ぬることを記したあとに、一事を加へて、文の結びとしてゐる。

今五里三里の、野に出けるが、一里を飛くる事目ふる間もなし、ちかく寄時に、油さしといふと、たちまちに消る事のおかし。

この「油さし」が「二代男」の「百物語に恨が出る」の「おの〳〵揚屋の筭用殘り」と脈を引いてゐる。それもこれも作者はこの「おかし」を焦點として作をなしてゐる。すごさ、恐しさはさまでの要求ではなかつたやうである。

「大下馬」のうち、殊に西鶴らしさを見せたものは、卷一の「傘の御託宣」であらうか。まだ傘といふものを見たこともない肥後の山奥で、傘を神體として祀ること、その傘に性根が入つて美しき女を供へよと託宣することをしるしてゐる、西鶴の西鶴らしさは、里人によつて決定された白歯の女が、我々が傘とてもあるべきかと、傘の神姿の異な所に氣を著けること、みづから進んで身代りに立つた色よき後家が、よもすがら何の情もなしと、傘を握つて、思へば身體たふし奴と引き破つて棄てたことに於て見られる。

世にありふれた常の物をも、はじめて見た人が、怪しみて神に祀るをかしさは、怪異小說の中に、しばしば記さ

れてゐる。信濃の山深く、旅人が落しゆける鹽鰤を祀つた事さへ見えてゐる。傘を知らぬ者がこれを神とするのもありさうな事であるが、それよりも西鶴に白歯の娘や色よき後家にあらぬ思ひをさせる傘の形に興味の中心をおかうとした。されば傘を神體とする正面の理由も「この竹の數をよむに正しく四十本なり、紙も常のとは各別なり、忝くもこれは名に聞きし日の神內宮の御神體」といふに止まる。

この事は直に「化物判取帳」の傘の見立に比較することが出來る。息子が夜あそびに出かけるとて、床の中に藥鑵を冠せた傘をさし込んでおいたのを、さうとは知らぬ親達が天狗になつたとおそれ悲しむ「夜閒天狗」では、例のあとから裏を聞かせる必要上、鼻は七八寸、骸は六十本の骨、翼をさつと開けばあたりを蔽ひ、收めれば小兒の身よりも細い異體などと書き立ててゐる。この作者の要求はたゞこの一點にとゞまるためである。こゝに重きをおくものを、輕く扱つたところに西鶴の作意が明かにされる。かういふ作意を眞似て、しかし眞似そこねたのが、あの「御伽櫻」である。「御伽櫻」はまた「好色二代男」が有つ章末の結句の輕妙を學んで得ず、つひに駄洒落に墮ちてしまつたのである。

五

世の流行につれて、怪奇小說を試みた西鶴の筆が、やはり、彼の眞面目である好色ぶり、浮世ぶりであることとは、さまであやしむに足りない。彼が典型とした怪異小說そのものが、すでに怪異にのみ專らでなかつたからである。

江戸時代の怪異小說が「伽婢子」にはじまることはいふ迄もない。尤もその以前に怪異をしるしたものはある。たゞ因果物、懺悔物の形式をとつてゐた。もとよりこの場合の怪異は懺悔を導き、因果を說く手段に過ぎなかつた。それが「伽婢子」に至つて、因果應報の羈絆から離れて、怪異を怪異とする獨立性を保ち得ることになつたのである。少くとも「伽婢子」に書かれたものは、そのやうに讀まれる。しかし、作者の標榜するところは必ずしもさうでなかつた。

作者淺井了意はみづからの態度を序文に於いて明かにしてゐる。彼はまづ儒教、佛教、神道の三教が、各の靈理、奇特、怪異、感應の空しからざる事を敎へて、その道に入らしむる媒をすることを述べ、世間にこれ等の書が甚だ多く、またわが「大和物語」「宇治拾遺物語」などもその類であることを述べた後に、「此の伽婢子は遠く古を取るにあらず、近く聞き傳へし事を載せ集めて記し著はす物なり、學智ある人の目を喜ばしめ、耳を灌く爲にせず、只兒女の耳を驚し、自ら心を改め、正道に赴く一つの補ひとせんとなり」といつてゐる。

彼はこの書を儒佛神三教に入るの媒としなかつた。けれど兒女を善に勸むる所以なりとした。一切が教訓を第一義とする啓蒙期に於いては、興趣は怪異そのものにあるとしても、佛教因果のためにするのでなくとも、なほかゝる文辭を卷頭に揭げざるを得なかつたらう。これが當時の假名草紙のならはしである。「伽婢子」もとよりその一つとして書かれたのである。

因果應報を說くためにはまづ怪異感應の實在を說くのが懺悔物また因果物であるが、今教訓を標榜する以上、怪異を勸懲の手段たらしむる以上、どうしても怪異の現存を信ぜさせねばならない。「伽婢子」の序は結ぶに次の言を

以てしてゐる。

月を貴びて耳を信ぜざるは、古人の賤しむ所なり、陰陽五行天地の造化は廣大にして測り難く、幽遠にして知り難し、時而見ざるを以て、今聞く所を疑ふことなかれと云爾。

讀者に信を要める彼が、すでにみづから信じて疑はないかといふことは疑問である。その疑問は疑問としても、彼の序文の中には、決してそのまゝに請けとり難き一節がある。

彼は近く聞き傳へた事を載せたといつてゐる。すべてが我が國の出來事として書かれてある。しかし、事實は支那の小說また怪異の雜錄を飜案するものが大部分を占めてゐる。遠く古を取るにあらずと、過去を避けたのも、より多く讀者の信を迎へるためであつたらう。その期待はつひに一語をして飜案飜譯であることに觸れしめなかつたのであらう。彼は飜案飜譯以外に世に知られてゐる恭談をも混じてゐる。譯者のかつて聞くところをゆかりとして、未だ聞かざるところにも信をおかせるためであらう。

「伽婢子」よりはるか前、江戸時代に入るにさきだちて、天文の頃にこれに類する志怪の書「奇異雜談集」があつた。「今昔物語」「宇治拾遺物語」あたりの體裁に倣つて、その頃の口傳を錄すると共に、「太平廣記」などの飜案を載せてゐる。しかも飜案であることを斷つてゐないこと「伽婢子」の場合と似てゐる。たゞ「剪燈新話」から選んだ三篇に對しては、飜案をなさずに、飜譯をなしてゐる。何故に「廣記」と「新話」の扱ひに於て異なるものがあるかといへば、前者は讀まれてゐること久しく、今更の飜譯でもあるまいが、後者は渡來日淺くして未だ讀まざる者が多いと考へたためであらうか。「金鳳釵記」「牡丹燈記」「申陽洞記」を「姉の魂魄妹の體をかり夫に契りし

事」「女人死後男を棺の內へ引込ころす事」「弓馬の德によつて申陽洞に行き三女をつれ歸り妻として榮花を致せし事」の題下に譯した三篇のはし書に、「新渡に剪燈新話といふ書あり奇異なる物語をあつめたる書なり、今二三ヶ條を取つてこゝにのするなり」といつてゐることからも注意せられる。

「伽婢子」の飜案の原據にして、最も多きを占むるものは、この「剪燈新話」であつた。その頃は日東渡來の後久しく、もう活字版にもまた、整版にも飜刻されて、かなりに廣く讀まれてゐた。世にはその飜案のあとを見て、直にこれと指摘することの出來る人も少くなかつたと思はれた。

新渡ならぬがために、特にその飜譯することも、また原書名を揭げることをも要さない今は、わけて序文にいふが如き企圖の下に、他の唐代の傳奇、その他の雜纂によるものと同樣、つゆほども漢臭を遺さぬやうに努めねばならなかつた。

「伽婢子」の態度はかう決した。

「剪燈新話」は全部に於いて二十篇、その中飜案されたのは十八篇。しかも、一篇をそのまゝにとると共に、その一部を割りて數條に仕立て直したものさへある。それなのに、どうして「富貴發跡司志」「鑑湖夜泛記」の二篇を漏したかといへば、或は飜案に無理が生ずる事を虞れたのではなからうか。人の貧富禍福を支配する發跡司を、道教の興味なしに移し來ることの困難、また織女星を繞る傳說の乏しいわが國に、彼の星の辯を齎して來ることの困難が推測される。

了意の飜案は爲にするところあつて、この苦心をなしたが、なほみづからの感興からいつても、更に苦心を重ね

ねばならぬことがある。

「剪燈新話」の作者瞿佑は事の奇構を傳へると共に、文の綺麗を誇らうとしてゐた。了意は奇構を移すと共に、その綺麗にも倣はうとしたのである。單に教訓のためにのみするのは、彼の好まなかつたことであらう。彼は「渭塘奇遇記」を飜案して「夢の契り」とした。しかし後年の作者其鳳が「月華通鑑」中に加へた「渭塘のゐにし」の冒頭の辭の如きはむしろこれを陋としたのであらう。いはく

和漢同一情とは男女最愛の實にして一度契りを結びて再信を違へずうしろひもよりのいひなづけに諸白髪の末を見とゞけ、垣間見のよすがに偕老の言葉淺からず、袖のふり合せ軒端のあまやどり、いづれわりなき媒となれるも婬うかるゝの事にもあらず、昔より貞烈の女子少きにあらず、されば我日の本の故事は誰々も聞なれ見なれしまゝにしばらくさしおき唐土の名女劉氏の列女傳以後の名高きをかぞふれば云々。

また了意は其鳳の譏文が原文の詞藻の美を恣に切り捨てたことを慊(こゝろよ)しとしなかつたらう。「渭塘奇遇記」と「夢の契り」との比較は、その苦心のあとを明かにする。

王生といふ金陵の美少年が舟路渭塘を過ぎ、酒肆のあるのを見て寄つた。家は富み娘は美しい。娘と生とは相見て戀々の情の動くをの覺えた。舟に歸つたその夜、生は娘の室に迎へられて歡謔を極めたと見た。家に歸つた後も同じやうな夢を見てゐた。或夜の夢に娘の紫金碧甸(へきでん)の指環と生の水晶の雙魚扇墜をとり交はしたと見た。覺むれば指環は手にあつて、おのが持てる扇墜は見當らない。生は大に奇として、元稹の體に效ひ、會眞詩三十韻を賦した。明歳また渭塘を過ぐ、酒肆の主人に迎へられて、娘の室に入る。あたりの光景すべて夢中に見るがまゝであつた。

生が別れて後の夢ものがたりをすれば、娘もまた同じ夢を見たことを語る、娘が扇墜を出して示せば、生も亦指環を出して見せる。二人はつひにこれを神契として夫婦となつた。

瞿佑はこの事を傳へるに、美辭のかぎりをなしてゐる。渭橋の酒肆を叙するところ、これを書下せばかうである。

靑旗簷外に出で、朱欄曲檻縹緲として畫けるが如し、高柳古槐黑葉交墜ち、芙蓉十數株、顏色或は深く或は淺く、紅葩綠水上下相映じ、白鵝一群其間を游泳す。生、舟を岸側に泊し、肆に登り酒を沽うて飲む。巨螯の蟹を斫り細鱗の鱸を鱠にす、果は即ち綠橘黃橙、蓮塘の藕、松坡の栗。花磁の盞を以て眞珠の紅酒を酌みて之を酌む。

了意の苦心はこの綺麗をさながらに移さうとする。渭塘を淀の川のほとり橋本に擬して、そこにふさはしいけはひを出さうとする、また書きならべられた馳走の品々のおどろおどろしさをも取り入れようとする、すなはちいふ、

亭の西の方には古りたる柳枝垂れて紅葉に交はり、嵐に散り落ち、下葉移ろふ萩が露枝もとをゝに重げなり。秋を哀しむ蟲の聲尾花が下に弱り行き、籬の菊は咲き匂ひ、袖の香を誰ぞとも、仇にゆかしき心地ぞする。北の方を見渡せば、淀の川波浮き沈む鷗の聲は遠近に遊ぶ心ぞ知らまほし。楊枝が嶋も程近く、渚の院も叐なれや、水野を過ぎて山崎や、うど野に續く三嶋江まで、只一目にぞ見渡さるる。主杯出し酒勸めて、是れは松江の鱸魚にはあらねども、彼の玄惠法師が庭の訓へに名を譽めたる淀鯉の鱠とて取り供へて出したり、又これは吳中の蓴菜には侍らねど、貫之が詠めつみたる水野の澤の根芹にて侍るなど心ありげに歡待しければ云々、

瞿佑はまた王生夢に酒肆の女の室を見るのくだりを叙して、精細である。

窓間一雕花籠を掛く、籠内に一綠鸚鵡を畜ふ。人を見て能く言ふ。軒下に小木鶴二雙を垂る、線香を啣んで之を焚く。案上に古銅瓶を立て、孔雀の尾數莖を挿む。其傍に筆硯の類を設く。皆濟楚を極む。架上に一碧玉簫を横たふ。女の吹く所なり。壁上に金花箋四幅を貼り、詩を其上に題す。詩體は則ち東坡の四時の詞に效ふ、字畫は則ち趙松雪を師とす、何人の作る所なるを知らざるなり。

一讀直に支那ならざるべからざる狀景を、了意はどのやうな國ぶりに飜案したか。「夢の契り」の一節は彼の巧妙と才筆とを語つてゐる。

軒には小鳥の籠一つ懸けて、焚きしめらかしたる香の匂、心も強く焦るらん。机には美しき菊の花少しくさして硯箱あり。牀には源氏伊勢物語、其の外面白く書きたる雙紙を積み重ね、壁に寄せたる東琴は思ひを陳ぶる慰めかと、目とまる心地して云々

原文には前に引ける後をうけて、金花箋四幅の詞を載せてゐる。了意は巧にそれをそらして、源氏、伊勢、その他の雙紙に代へたのである。「剪燈新話」の例文中往々詩詞を點綴することが多い。彼に於ける傳奇體の小說の常である。了意は時にこれを和歌に移し、時に文の叙述の中にその意を籠めようとする。要はその形に囚へられずに、その氣分を活かさうとするのである。「渭塘奇遇記」中の詩詞は、こゝの四詞の外、また會眞詩がある。了意はその三十韻を一首の和歌としてゐる。

君にいま逢ふ夜あまたの語らひを夢と知りつゝさめずあらなむ

原詩はあまりに長い。こゝに引用することを避ける。

了意の苦心は、前にいつたくだりを「渭塘のゑにし」のと比較すれば、なほ一段と明瞭であつた。筋の運びにいそがしいこの譯文は、酒肆のくだりを、たゞ「種々の肴をそろへ眞珠の美酒を出してすゝめければ」といふだけであつた。また娘の室のくだりには全然觸れることなく、會眞詩に就いていふところがなかつた。

六

「伽婢子」の基づくところ、「剪燈新話」最も多く「剪燈餘話」これに次ぐ。「餘話」もまた「新話」の如く明代稗史の雄篇であつた。選者李昌祺は瞿佑の「新話」があまりに詞藻を重んじて、勸懲を輕んじてゐることを遺憾として、この著作をなしたといつてゐる。然らば敎訓を標榜する了意は、むしろこの方をとるべきであるに、なほ多く「新話」に據つてゐることが、おのづから標榜以外に意のあることを示してゐる。

しかし「餘話」の措辭の美、また詩詞の點綴は「新話」と異つてゐない。この點に於いて、了意の飜案の苦心は、彼此の間に相異を見ない。その他の態度もまた同じことである。今「餘話」の中から引くのは、了意の苦心に關する他の方面を、しばらく「新話」以外に求めるといふだけのことである。

崔英は妻王氏を携へて、舟路任に赴いた。途中英は舟人のために水に沈められ、王氏は囚へられて、舟人の次子の室たることを強ひられる。王氏辛じて逃れて一寺に入つて尼となる。ある日寺に畫芙蓉一幅を施す者があつた。これ英の筆で、舟人に奪はれたものである。王氏屛上に一詞を題した。その屛が轉々して舊の御史大夫高公の館に

入つた日、偶、英が來合はせて、妻の作なることを知つて泣いた。水練に熟せる彼は、水を潜つて難を避けた後、あちこちと放浪してゐたが、この日丁度館に書を賣りに來たのである。公はまづ夫人をして李氏を迎へさせ、髪を蓄へて初服に返らせる。而も、英に知らさない。公はまた謀つて賊を囚へ、英を舊官に復せさせた。英の赴任別宴の日、はじめて王氏と會はせて、今生の緣を全うさせた。夫婦は遠く去つた。任滿ちてまた公を過れば、公すでに薨じた、夫婦號哭して、施餓鬼を行ふこと三晝夜であつた。

これが「餘話」載するところの「芙蓉屛記」の梗概である。篇末また一長詩を載せてゐる、畫芙蓉屛の歌といふ。飜案「梅花の屛風の事」では、翟英を山口の大内家に身を寄せる公卿の一人中納言とし、英の赴任途上の難を陶の亂に遭つて京上りする途上の出來事とした。また畫芙蓉を畫梅花に移した屛風が緣をなしての夫婦の邂逅には、高公のわざとの計らひがなかつた。これは翟英を公卿とし高公を室の武人とした身分の相異による。かういふ小異を外にして、了意のなした改作の大なるものは篇末にあつた。

原書の篇末に於ける高公の死を、翟英に當る中納言の薨に代へた。また北の方も程なく死ぬことにした。さて篇を結ぶに、中陰のはての日、二つの塚より白き雲立ち昇り、西をさして行くかと見えたが、異香すでに山谷に充ち滿ちたとの記事を添へることにした。すなはち畫芙蓉屛風の歌に代へるにこの怪異を以てし、原文の現世の奇遇以外のものを補つたのである。更にまた了意は原文が詩詞を缺くところに、二首の和歌を加へてゐる。かういふ添加の場合は、しばしば見うけられる。了意の苦心もそこにあり、「伽婢子」の意圖もまたそこにあつた。

了意の怪異小說は「伽婢子」の外に「狗張子」がある。「餘話」に據るものが多かつた。また「新話」に據るもの

も少くないが、これは一話の全部を取るよりも、分裁した一部を仕立直したものを多く認める。しかし、飜案の態度は全く「伽婢子」のそれと同じであつた。改めてこゝに說く必要がないやうである。

「狗張子」は了意の遺稿であつて、入寂の翌年元祿五年の刊行に係る。刊行せる者は京の書肆林九兵衛である。彼は伊藤仁齋の門人であつて、相應の學識あり、また文才があつた。怪異小說「玉櫛笥」「玉箒木」の作があつた。みづから「伽婢子」及び「狗張子」の續集を以て擬することをいつてゐる。各話の支那の志怪の書に基づくこと、また努めて漢臭を遺すまいと、心掛けてゐること、ほゞ了意のなすところ似てゐる。たゞ了意が原文の措辭の美をも合はせて移さうとする努力は、これを缺いてゐた。

「伽婢子」「狗張子」の作風を嗣いで、怪異の書を出すものが段々と多くなつた。隨分これ等のものを奪胎して、したり顏な者もゐる。しかし、溯つて了意の據としたものに基いて、新な飜案を試みる輩もあつた。たとへば都の錦の如きがそれである。

この作者の「御前おときほうこ」の序中にいつてゐる。「かの一向の粹僧が剪燈新話の拔書を恨み、頭から御前の威を借て、漸に殿樣風を吹せ、御伽御坊を招寄、あの世とこの世の境目を滅法界の法事にして、詰る處は此方の負」いふところは「伽婢子」を模倣しながら、なほ異を樹てて、幾分の新樣を期せんとするにある。

「御前おときほうこ」と了意の作との間には、もとより原據を同じうするものが多い。たとへば「狗張子」卷七の「細工の唐船」と「御前おときほうこ」卷四の「芝崎藤藏竹田近江がからくりを見て遁世したる事」の關係の如し。しかし、一は世話の世界に、一は時代の世界に、おのおの趣向を構へただけでなく、なほ原據にない事件を前

後に加へることによつて、どうかすると兩者と原據の關係を忘らせられる。

かういふ現象は了意と都の錦の作中にのみ見られることでなかつた。怪異小說の全般に於て認められる。いはゆる怪異小說が頻りに類話をくりかへしつつ、驚くべく大數に到達した理由の一半は、この點から解釋されるかと思はれる。

怪異小說の作者はその態度を一にして、わづかに取材の範圍に於いてのみ、また飜案の趣向に於いてのみ新奇を競はうとする。されば地方に傳へられてゐる口碑をさながらに寫しもする、または飜案にからませもする。或は「今昔」「宇治拾遺」の如き、わが古き志怪の書からも飜案の資料をとる。しかし、原據の多くは支那の書であつた。了意以來おのづからの傳統となつたのである。

「齊諧」は今傳はることなく、從つてその實を知ることが出來ないが、支那には古くから怪異の書が多く存してゐた。寓言の書、またこれに伴つてゐた。漢代の小說と稱するもの、多くは六朝の作に係るが如きも、眞僞の辨はこゝに要がない。とにかくに、これ等怪異の小說は、唐代の傳奇と共にわれに渡來して、わが文學に影響するところが多い。宋代小說また室町時代に讀まれて、わが作者の資料を輔けるものさへあつた。特にそのはじめ頃から支那の典籍を重んじてゐた江戶時代に於いて、西鶴がまた新旗幟を揭げない以前、室町時代の小說が漸く御伽草紙の名のもとに刊行されてゐる頃に、少しく奇構を以て人を驚かさうとする作者は、どうしても材料を支那の怪異の書に仰ぐことを便利とした。範圍は廣く所謂漢代のものから新渡の明代のものにまで及んでゐる。

ひとり、話の趣向を彼から學ぶばかりでなく、編述の態度もまた彼に倣ふものが多かつた。「伽婢子」「狗張子」

の作者が序文に於いて標榜するところは、もとより作者その人に、この意あるとはいへ、まづは「剪燈新話」また「餘話」の序の口眞似と見るべきである。

わが怪異小說が多く範を支那の書に寄せたのは、支那の文化、支那の典籍とさへいへば、これ尙べるその頃の常ではあるが、なほ考へてよいのは、その時の人々には、支那そのものが未知の世界であり、幽遠の鄕土であつて、そこから傳へられた不思議には、たやすく現實の分別智を以て律し得ざる心情を懷いてゐたといふ事である。

貞享三年の「百物語評判」は怪異事に關する山岡元隣の評論である。或はその子元恕の筆も混じてゐるやうではあるが、大方は元隣の文として讀むべきである。評論の標準はともすれば怪異圈外を出でて、現實理を共するにあつた。卷五の「而慍齋化物ものがたりの事」の中に、

某こそ化物多く見候ひて、此の事を恐れ申しはべる、其の次第を語り申さん。まづたゞ今は世に儒學はやり候故、我人ともに少し文字を讀み候へば、髮頭異樣に衣服きら〳〵しくつくろひ賢げにもの云ひ、年よる人を侮り露許りの學問に高ぶり、利慾は常の人に十倍して、口には見事に云ひなせども、實の律義露ばかりもなきは俗儒腐儒など云ひて儒者の化物なり。

といひ、なほ僧侶、傾城、役者の例を擧げて、人を誑すの化物なりといつてゐる。殆ど「世間化物氣質」の態度と擇ぶところがない。彼はまた仙術を信じなかつた。その意儒敎に專らであつたためである。故に飛行昇天をば「二程全書」の人は陸につきて生るる者なれば決して其の理なしの言を引いて否定してゐる。卷五の「仙術幻術の事」に見えてゐる。しかし、彼もまた悉く怪異を排しはしなかつた、理由は支那またそのものありといふに歸する。た

とへば絶岸和尙が肥後にて轆轤首を見たと聞くや、必ずしもその事を疑はなかつた。「博物志」「捜神記」「輟耕錄」を引いて、昔より多く南蠻の地にありとし、さて

天地の限りなき造化の變に至りては、水母の目なく、蝙蝠の逆に懸り、梟の晝盲ひたる類、一應の見識にて計り難し。されば肥後にもあるまじきにもあらず。いかさまにも都方には稀にも聞き及ばず、すべて怪しき事は、遠國にある物なりと思ひ給ふべし。

といつてゐる。彼何故に支那の怪を信ずるかといへば、「怪しき事は遠國にある物なり」といふ遠國の殊に遠きものとして、支那を見るためであらうか。これがまた當時の怪異小說作者たちの支那觀であるとも考へられる。

その頃、種々の條件から支那の典籍に親しまうとする人々は自己が扱ふ當面の問題以外に、怪異小說作者たちと共に、未知の世界である支那の怪異に興味を寄せてゐた。悅んで彼の志怪の書を讀むだけでなく、更にこれを飜刻し、訓點を附し略註を施し、或はこれを飜譯し、抄譯して、一般の人々にもその面白さを頒たうとした。これもまたこの頃の啓蒙運動の一手段であつた。果して林羅山の著であるかは疑はしいことにしても、羅山子また林道春の名を以て、元祿十一年に刊行された「怪談全書」の如きは、「太平廣記」「古今說海」に據り、時に「剪燈新話」中のものをもまじへて、支那の怪異の談を紹介してゐる。この類、他に二三を數へることが出來る。

了意の著作中にもこの種のものが存してゐる。「新語園」これである。然らば了意は支那たることを要する人には、この書を與へ、必ずしも支那たることを要せざる人々のためには、殆ど漢臭を脫離した「伽婢子」「狗張子」の飜案をなしたのである。

かゝる了意の二種の用意を一書の中に混じてゐるのが「御前おときほうこ」である。前言すでに觸れるところがあつたやうに、これは多く和漢志怪の飜案で、殆ど原據の色調から離れてゐるものである。しかもその中の「太平廣記に瘤の中より猿の出るよし書し事」といふ一章は、すでに表題に明かであるやうに、「太平廣記」の一項の飜譯である。作者都の錦は飜譯を加へた理由に就いて、特に斷りをいつてゐる。「太平廣記を開いて見るに、奇異なる雜談多き中に、ふと思ひよりしまゝ、其心を和て書付侍る」とも、「日本のはなしに唐流を打込ば、米に砂をまぜたるやうなれど、怪奇なる事のおかしさに書とゞめければ」ともいつてゐる。けれどこれは表面の理由に過ぎなからう。實はこの書が諸國ばなしの形式をとつて、「是は大阪」「是は近江」とやうに各話に題してゐる關係上、「是は唐土」の一話を加へたいためでなかつたか。勿論それもあつたらうが、眞の理由は更に奥深く、彼の胸底に存してゐたらう。彼の性癖は支那の原據を明かに示して彼の學識を衒つて見たかつたのであらう。支那の典籍に通ずる、通ぜぬが、その頃に於いて學殖をはかるさしあたつての標準であつた。彼はまた原據を明すことによつて、全くの日本ばなしに仕立直した腕前を識者の間に認めさせるものと思つたらう。西鶴何する者ぞといふ例の文才の誇りを見せたかつたのであらう。たまたま「太平廣記」の一話の飜譯が挿入されてゐることは、或は嚢中の錐鋒であらうか、臆斷なほゆるさるべきか都の錦その人の作風であつた。

七

寛延あたりに一線を劃して、江戸の怪異小説を前後二期に分けることは、畢竟「古今奇談英草紙」の出現を重視す

るためである。書は近路行者の作寛延二年の出板に係る。この頃怪異小說盛行の機運の著しく動き出してゐるところに、この書の投げた影響は大きかつた。そこに明瞭なる相異が前期のものとの間に起つた。「英草紙」もまた「伽婢子」「玉櫛笥」「御前おときほうこ」と共に、支那の怪異談の飜案を旨としてゐる。しかも、彼等と相分つ理由は一には飜案の態度である。二には飜案の原據の相異である。

こゝに至つては、もう了意のやうに「伽婢子」「狗張子」と「新語園」とを書きわけ、また都の錦のやうに、「御前おときほうこ」の中に飜案と飜譯とを盛りわける必要がなくなつたのである。飜案には必ずしも漢臭を避けることを念とせず、むしろ漢臭三分の遺存を期待してゐたのである。

俳諧的手法を弄しながら、隈なく現實生活を描寫した西鶴の好色本、町人物は、すでにその極に達して、その後を承けた共碩の如きは、徒に模倣を事として、たゞ抉剔の度を加へるに過ぎなかつた。それもやがて讀者に倦かれたはては、事件の變化によつて興味を繋がうと努めて、淨瑠璃歌舞伎の小說化に專らであつた。浮世草子作者の態度の推移、やゝ寫實を離れようとする傾向に乘ずるものが怪異小說の擡頭であつた。すでに相應の流行を見せてゐるところへ、なほ得手に帆をあげざるを得ない。支那の傳奇の類は以前よりずつと飜案せらるべき情勢となつた。しかも、飜案は怪異の事件を移すだけでなく、時に支那の情調をも伴はうとした、支那らしいものを抑へて、強いて日本の氣分を出すことを要せざることは勿論である。舞臺の變化、背景の變化、これまた讀者にとつての新しき興味であつた。飜案者みづからの好みとのみ見るべきでなかつた。

飜案の巧は彼此の轉換に於いて、彼を失はず、此は損はざる點にある。さすがに近路行者にはその用意があつ

た。たとへば「喩世明言」の「鬧陰司司馬貌斷獄」と「紀任重陰司に到て滯獄を斷る話」とに於ける斷獄の事件のさしかへの如きがその一例である。しかし、こゝにはこれ等に就いていふよりも、むしろ彼が「支那」に寄せる執着の度を考へることにする。

彼は「警世通言」の「莊子休鼓盆成大道」を飜案して「黑川源太主山に入て道を得たる話」を作つた。南華山と金華山、莊子と源太主などのやうの地名人名の相異の外は、殆ど原作のまゝであるが、事件はどうしても日本のものとして讀まるべき性質でなかつた。彼はこれをさへ厭はなかつた。

彼はまた同じ「通言」の「兪伯牙摔琴謝知音」を飜案して、「豐原兼秋音を聽て國の盛衰を知話」を作つた。これには多少の鹽梅をなすとはいへ、原作に於いてやゝ煩はしいまでに書かれてある音樂論は、わづかに和樂の一條を添加しただけで、ほゞその全體を譯出してゐる。これは他の方面からも考ふべきであるが、さし當つては原作尊重の意に於いて見られる。

近路行者の原作尊重は「英草紙」の後篇として出した「繁野話」の「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」の冒頭に於いて證せられる。彼はまづ江口の色里に就いて、說くことやゝ多きに亙つてゐる。原作である「警世通言」の「杜十娘怒沈百寶箱」にはこれに當るべき遊里の記述がない。あるものは燕京建都の盛を謠ふ詩一章とその由來である。飜案者は飜案の勝手からその都を江口の色里に改めながら、なほ原作冒頭の氣分を保存することを忘れなかつたのである。

かういふ心づかひは飜案を讀む者に、まづ原據を明にしておくことになる。「英草紙」に於いてもさうしなかつた

が、「繁野話」「莠句册」の場合には、序文の中についてゐる。「繁野話」「莠句册」また草官散人の名を以てせる「垣根草」は共に近路行者の作である。

「繁野話」の序中にいふ、「手束弓の故事に任氏の傳奇を繋ぎ、邪色の人を蕩すことを覺す、白菊の卷は白猿梅嶺の舊趣を假り、占卜の前數に因る事を說き、女敎の名實全からんことをはげましむ」、またいふ「江口の始終は杜十娘を飜して俠妓の偏性を加たり」といふところは、「紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話」は唐代の傳奇「任氏傳」と、わが「今昔物語」の「人妻化成弓後成鳥飛失話」とに據り、「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は、唐代の傳奇「白猿傳」に據るとのことである。江口は「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」、杜十娘は「通言」の「杜十娘怒沈百寶箱」のことである。

「莠句册」の序にいふ、「求塚の後の卷には三つの所を倶に男となすを經とし、神代の事のしら絲に黏して緯をとり、蘇小狻娘の巧令を潤色とす」、またいふ「吉野猩々は徐渭が四聲猿を襲ひ云々」蘇小狻娘とは「醒世恒言」の「蘇小妹三難新郎」をいひ徐渭の「四聲猿」とは明代有名の戲曲をさしていふのである。

近路行者が自ら示すところはこゝに盡く。しかしこれだけでもその原據に於いて、了意等の知らざるものが加はつてゐることが明瞭に認められる。ましてそれ以外のものを考へると、更に劃然たるものがある。諢詞小說が新に加へられたことである。

近路行者が最も多く原據とした「醒世恒言」「警世通言」「喩世明言」すなはち「三言」の名によつて總稱せられる明代の小說、及び「拍案驚奇」は諢詞小說である。諢詞小說とは平話俗語で書かれた小說の義である。

「剪燈新話」「剪燈餘話」の類は、駢儷華麗の體を以て書れてゐる。わが漢文に熟する者には讀むことを難しとしない。諢詞に至つては、おのづから特殊の學習を要する。了意等は未だこれを學ばなかつた。近路行者に至つてこれをよくしたのである。

近路行者は都賀氏、名は庭鐘、大坂の人、儒醫を以て世に立つた。さきの四作の外、「耆婆演義」の譯註の書「通俗耆婆傳」の著がある。彼が諢詞を誰から學んだかは、知るよしもないが、なほこれを當時の流行に歸することが出來る。岡嶋冠山、岡白駒、松室式部、陶山尙善等の先學が途を拓いて、諢詞の小說また戲曲の類が頻りに讀まれてゐたのもその頃である。「三言」から拔萃して、訓點、註解を施した「小說精言」「小說奇言」などが出板され、また「水滸傳」の辭書、或は特に小說を讀む者のためにした諢詞の辭書も編纂されたのもその頃である。中には會話も、書牘もすべて諢詞を用ゐて、支那人氣どる新人も少くなかつた。また支那舶載の書を購求して讀書人に提供した木村蒹葭堂の如き人さへあつた。庭鐘も亦その恩惠をうけた一人である。上田秋成も亦彼と交際淺からぬ一人であつた。まこと、その頃の、京坂の文人等が支那の新文藝、明淸の戲曲小說に寄せた熱愛の詳細は、怪異小說の開展を知る上に、缺くべからざる重要事である。今は輕く言及するにとゞめる。

八

庭鐘の作品四部四十話の中、最もよく彼の飜案の態度を示すのは、「警世通言」の「王荊公三難蘇學士」と「英草紙」の「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」、「芳句冊」の「猥瑣道人水品を辨じ五宮の音を知る話」及び「玉林

道人雜談して回頭を屈する話」との關係である。

輕薄才子の蘇東坡は、動もすればおのが才を負うて、人を嘲る癖があつた。彼は黃州の菊花が落瓣することを知らないで、王荆公の詩句「吹落黃花滿地金」を笑つた。また彼は王荆公から瞿塘三峽の中峽の水を託されながら、下峽の水を汲み來つて欺かうとした。彼はまた「如意君安樂」の故事を知らないで、荆公のそれに對させた句「竊已啖之矣」を意義なしとした。王荆公は一々これを難じて、彼の誇りを折いた。これ「通言」に見るところである。庭鐘は荆公が菊花落瓣を見せるとて東坡を黃州團練副使に左遷した第一難を、後醍醐帝が藤房を武藏に遣して逃水の實際を見させられる事に飜した。中峽の水の第二難を、帝の信佛を諫めて却つて拆かるる事に飜した。如意君說の第三難を千里馬及び沈魚落雁の出典にゆき詰る事に飜案した「英草紙」の第一卷の第一篇はこれである。卷頭に据ゑたのは、或は彼がひそかに得意を感じたためであらうか。得意は彼の話の輪廓をとり來つて我が史上のものに換へおほせたといふ點であらう。しかし、慢に支那の異聞に興がる彼は、また黃州の菊花落瓣の一事から一話を仕立てざるを得なかつた。

西風昨夜過二園林一　吹落黃花滿地金。王荆公の詩句はこれである。秋花不レ比二春花落一　說二與詩人一仔細吟。

東坡の難じて續けたものは是である。「玉林道人雜談して回頭を屈する話」に於いては、荆公の句を玉林道人の歌に譯して、

けさ見れば垣根に敷ける黃群濃は昨日の風に散りやそめつる

東坡のを回頭和尙の歌に譯して、

霜のうちに咲て拱く秋はあれど嵐の庭にちる花はなし

といつてゐる。なほ和尚をして菊は散るものに非ずの論をなさしめ、更に道人をしてこれを說破させる。說破する言葉の中に、「此一句は楊州の菊花こそ散りて地に落つる王荊公が作を、歐陽が知らで難ぜしか知りても難ぜしか、已に其說あり云々」すなはち原據をほのめかしたのである。

道人と和尚の間になほ「如意君安樂否」の對句及びその解についての問答がある、これは原文を殆どさながらに譯したものである。

瞿塘三峽の水の件に據るものは、「猥瑣道人水品を辨じ五官の音を知る話」であるが、瞿塘は宇治川、そこにまた三峽の別を立てる。その頃の煎茶好事の徒の言に從ふものであつた。庭鐘もとよりその一人であつた。煎茶は以て支那の雅遊をしのぶの閑技として考へられたのである。尤も原文にも茶を烹るの事がある、この色によつて三峽の別を捻するためである。宇治の三峽の差が茶の色を分つことは、庭鐘等によつては必ずしも異とするに足りない。故は庭鐘に道人をして釜に滴る水の聲をして、そのけぢめを聞かせる事にしたのであらう。

原據の一話から多くの話を案出することは決して珍しくない。了意の前例なほこれにまさるものがある。たゞ支那の事物、支那の氣分を惜しむもの斯くの如きものはなかつた。こゝに庭鐘の飜案ぶりに於ける別方面の態度、二話を以て一話を作りなすものに就いて考へる。「拍案驚奇」の「褻私怨狼僕告主」と「英草紙」の「白水翁が賣卜直言奇を示す話」との關係を例とする。

その原據は、本文とまくらに當るものの二話から成つてゐる。尤もその本文の方の輪廓によつて、「垣根草」の

「山村が子孫九世同居忍の字を守る事」が作られてゐることを忘れてならない。しかし、今はそれをさしおいて、「英草紙」中のものをのみとつて比較する。

「襲私怨狼僕告主」ははじめに一條の議論を据ゑてゐる。要は湛湛靑天不レ可レ欺、未ニ曾擧一レ意已先知、善惡到頭終有レ報、只爭ニ來早與ニ來遲一の詩意に歸する。次にこれを證するがために一話を說き出してゐる。

蘇州府の富人王甲と李乙とは世讎の間であつた。ある夜王甲は不良の徒をかたらひ、みづからも變裝して李乙の家に亂入し、つひに彼を殺した。李乙の妻は牀下に隱れて事の始終を見極めて官に訴へる。王甲は直に獄に投ぜられてまさに斷罪されようとする。しかし、彼は獄中ひそかに策して一人の訟師と諜(しめ)し合はせて放を謀る。南京の官吏に賂して、李乙殺害の犯人が他にあつたと言はせたのである。彼は赦されて家に還つて門に進む。そこに怪を見て氣死した——方纔到ニ得門首一、忽然一陣冷風、大叫一聲道、不好了、李乙哥在ニ這裡一了、驀然倒レ地、叫喚不レ醒、霎時氣絕——原作者がこの將眞作假的を書いたのは、將假作眞的の奇話を誘ひ出すためであつた。

溫州府の人王杰ある日言葉咎めから薑賣を毆打した、ところがその者は痰火病が持病なので、氣絕した。王杰は驚き慌てて介抱する、やつと氣がつく。陳謝百方御馳走をしたり、物を與へたりしてかへす。程經て渡守が來て、渡船の中で薑賣が死んだこと、また臨終の際、王杰を官に訴へてくれと賴まれたことを告げる。渡守が僞を構へて彼を脅迫するのである。とは知るよしなき王杰は狼狽して彼に金を贈つてその死骸を匿させる。渡守は辻褄を合はせるために河流れの死骸をひき上げておいたのであつた。王杰の一僕も命ぜられて、渡守と共に事にたづさはつたが、その僞を看破することが出來なかつたのである。

その後、僕は事を以て王杰を怨み、彼かつて人を殺せりと告訴する。王杰囚へられて自白し、やがて處刑せられようとする。妻の劉氏の心勞は一方でなかつた。そこへ偶然殺された筈の薑賣がたづねて來る。彼は所用あつて久しく郷里に歸つてゐたのである。劉氏もとより文墨に通じてゐる、事の仔細を認めて官に訴へ、官は直に彼此對問して、渡守の詭計、また僕の主に背くの非が明白になる。彼等は刑せられて、王杰は赦される。

原作者が此の公案を以ていさゝか世の獄を斷ずる人のためにしようと考へたのであらう。しかし、飜案者にはその要がない、その奇趣を借ればよい。奇趣なほ足らずとして、更に奇構を重ねた。二話の奇話をとり合はせて、換骨奪胎を行つたのである。貞淑の二人の妻は「英草紙」に於いては、姦夫と謀つて夫を殺す不貞の妻である。主を訴へる僕は、舊主のために姦夫姦婦を訴へる忠婢である。その他一々對比すれば、庭鐘の作意おのづから明瞭である。しかも、原作にはわづかに王甲が李乙の幻を見ただけの怪を、これには殺された者の言葉と姿を詳に寫してゐる。注意に値する。單なる異聞を怪談に飜案したのである。他にもこの例がある、また時の流行に從つたのであらうか。

九

森羅子はその著「古加良志草紙」の序に於いていふ。「剪燈新話同じく續話の二部を國字に譯て御伽婢とし、古今小說、今古奇觀、警世通言、拍案驚奇の四部より拔萃して、英繁の二書とは爲ぬ。此三篇の書は御伽册子の父母にして、作意の奇、作文の妙、見る每に新なる如く、讀人手にして飽く事を知らず云々」、「古今小說」とは「喩世明

言」の別名である。「今古奇觀」とは「明言」「通言」「恒言」及び「拍案驚奇」より拔萃して編述した書である。最も多く我國に讀まれたものである。わが怪異小說と最も多く交涉を有する書である。

英繁の二書また「莠句冊」「垣根草」の譚詞小說に負ふものは多い。しかし、また譚詞小說以外の奇の影響を受けることも多かつた。この頃の譚詞の流行はともすればそれ以外の影響を忘れさせる。たとへば「諸越の吉野」の作者の如きは、上田秋成の「雨月物語」の「夢應の鯉魚」の原據を推して、「醒世恒言」の「薛錄事魚服證仙」であるといふ。その誤謬であることは勿論であるが、序文をも譚詞もて書きなす程の「諸越の吉野」の作者は、たまたま「古今說海」の「魚服記」の存在を閑却したのである。

おもへば譚詞と譚詞ならぬものを問はず、了意また庭鐘を先達として、支那の小說の讀まれたことは驚くべきものがある。その結果飜案されたものの數も大方ならぬものがある。飜案はたゞ彼の趣向を移すにとゞまらず、その取捨に於て漸く彼に囚へられざるものがある。原作に對して相應な批判をも加へるものさへある。庭鐘の書中すでに之れを見る。ただ多くは隱微の間になされてゐるが、中に安永四年の「中世二奇傳」の如きがある。その一つは唐代の傳奇「柳毅傳」の飜案であるが、結末に於いて原作と異なるものがあつた。これは我が俗に從ふためでなくして、原作を正すの意を以てなされてゐる。書に加へられた評言は、明白にこれを語つてゐる。

原作にあつては龍女の難を救つてやつた柳毅は一度は龍女の叔父の勸婚を斥けながら、つひに結婚することになつてゐる。飜案の書では毅に當る淸人が最後まで婚を拒みおほせることになつてゐる。淸人が龍女の叔父の言を破する一段に對する荳蔻老人の評註にいふ、

此一段心ヲ用テ書タルト覺ユ。吾朝唐土ノ文ノ作法ニカナヘリ、此詞ヲ合サントシテ末ニ淸人ノ妻トスルトイハバ、一傳ノ本意ヲ失フベシ、一傳ノ本意、信義ヲ守ルヲ主トスレバゾ、此ノ傳ノ柳毅傳ニ勝シハ、此一傳有ルニヨリテゾ云々

この見識をどれほどの高さに評價すべきかを知らないが、この種の考を具する飜案者はその頃に於いて少くなかつた。それほどわが怪異小說と支那の小說傳奇とは密接の關係を保つやうになつた。しかし、怪異小說の作者がすべて彼のものに熟してゐるとはいはれない。浦邊椿園のやうな多く讀み、また多く譯し、多く飜案する者もあるが、中には何でもない奇聞怪談を强ひて支那に結びつけるために苦む作者もある。たとへば「唐詩選」の句を假りて話を仕立てる「俗談唐詩選」のやうなものもあつた。「世間化物氣質」の存在は、怪異小說の流行を裏から證し、この「俗談唐詩選」の存在は、怪異小說に於ける支那小說の盛行を橫から語るものであつた。

一〇

さういふ怪異小說の間に於いて、最も傑出し、また最も高い獨自性を有するものは上田秋成の「雨月物語」である。怪異小說はこゝに至つて、その實を現はしたといふべきである。

漫に「雨月」と支那小說の關係を見れば一部すべて其の影響の下に在りといはれる、しかしみな直接の關係があるかといへば疑問である。「夢應の鯉魚」の「古今說海」收むるところの「魚服記」に於ける、「蛇性の婬」の「西湖

佳話」の中の「雷峰怪蹟」に於ける「菊花の約」の「喩世明言」また「古今小說」の「范巨卿雞黍死生交」に於けるものは直接の關係だと斷じ得る。殊に「菊花の約」の如きは全く飜譯といつてもよいが、其の他のものになると支那小說と「雨月」の間に「伽婢子」「英草紙」の類を介在させた間接のものとして考ふべきである。

「淺茅が宿」は「剪燈新話」の「愛卿傳」に據る「伽婢子」の「藤井清六遊女宮城野を娶る事」より出で、「吉備津の釜」は「新話」の「牡丹燈記」に據る「伽婢子」の「牡丹燈籠」より出でてゐる。彼が飜案の上に立つて、更に飜案を重ねるが爲めに、いよいよ「支那」を遠ざかつて、「秋成」に迫る便宜がなる。「雨月」の光彩は一にこゝを基準として發する。單なる流行に動かされてなした「雨月」ではない。彼の全心全靈がこれを成し得たのである。彼の數奇の生涯、彼の狷介の性格、彼の幽怪の信仰が相寄つてこれを成したのである。

おのおのの原據を通じて見たる了意の飜案と秋成の飜案には、どれほどの相異があるか。たとへば「牡丹燈籠」と「吉備津の釜」とを比較すれば、彼はほゞ原話の奇異の趣向を移せば足れりとするのに、此は凄愴の度を加へるために、却つて原話を離れた自由を持してゐる。「菊花の約」の原據と「英草紙」の「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知るの話」の原據「警世通言」收める所の「兪伯牙摔琴謝知音」とは類作の關係にあつて、着想ほゞ相似た義兄弟の死を以て約を重ずる話であるが、庭鐘と秋成の原據の選擇に各々好みが著しい。庭鐘は原作の中の音樂論に多大の興味を寄せてゐたらしいが、秋成はそれとは別に幽靈の出現を中心とする原據を取つたのであらう。二家の相異が極めて明瞭に認められる。

秋成が直に支那の原話に據つた「夢應の鯉魚」と「魚服記」の關係は、飜案といふよりはむしろ飜譯といふのが

ふさはしい。所と人の名をかへただけといつてよい。しかし、秋成はその間になほわづかの加筆によつて、驚くべき効果を擧げてゐる。原文には鯉と化して遊ぶくだりには、たゞ「三江五湖、騰踏將遍」とのみあるのを、これには琵琶湖をめぐる名所をこまやかに叙して、道行ぶりに仕立てゐる。才筆誦すべきものがある。けれど、それほどの用意は庭鐘も往々これをなしてゐる。例を前出のものから求めれば、「王荊公三難蘇學士」に於いて、東坡が巫峽を過ぐるくだり、「東坡看二見那峭壁千尋、沸波一線一想三要倣二一篇三峽賦一、結構不レ就、因二連日鞍馬困倦一、憑レ几構思、不レ覺睡去」とのみある原文に據つた「莠句冊」の「猥瑣道人水品を辨じ五官の音を知る話」がこれである。こゝには引用しないが、巫峽に當てた宇治河南岸の景物を叙して、細やかなるものがある。しかも、この場合に於ける秋成を以て庭鐘の上に置かうとするのは、庭鐘が土地の風物に專らなるところへ、秋成はかねて鯉になりきつた心ざまをも寫し出してゐるためである。人か鯉かはた秋成か、三者三にして一。この心また「雨月」の幽靈と秋成とを分つことがない。碌々たる怪異小説に於いて拔頭たる所以である。人が河伯の御意によつて鯉になるところ、原文にはたゞ「於是」とのみある、都の錦の「御前おときほうこ」中の「五條通にて水無瀬文治といへるもの死て魚に化し事」には、「こは淺ましやとうち驚きながら、すべきやうなく、水の上を游めぐる」の語句を加へてゐる。秋成もまた加へてゐるが、これは「あやしとも思はで、尾を振り鰭を動して、心のまゝに逍遙す」といふのである。二者の間に截然たる區別が有する。鯉の心を會得した秋成の興義にして、はじめて鯉を描いて神妙に達し、畫けるものを湖に散せば紙繭を離れて水に遊戲する怪異をなす筈である。都の錦の書はついにこの事に與るべきでない。彼また原文の結び以外に出でなかつた。

「蛇性の婬」と「雷峯怪蹟」の關係、またわづかの添刪を以て効果を擧げてゐる。西湖を熊野、雷塔を道成寺の蛇塚に飜した爲めに、おのづから起る異同以外、彼が原據を改めた効果は、すべて怪異の念を高めることであつた。秋成は原文の事件の屈折を努めて避けようとした。原作者は白娘子が許宣に執拗なることを示すとて、幾度別れてもまた逢ふことにしてゐるのを、これはその度數を減じ、また邂逅の狀に變化あらしめる。白娘子が怪を現し、本性を現はす度をも少くして、たまたまの示現に驚愕の情を大ならしめる。最も重要なる相異は豐雄が娶つた富子に、眞名兒の靈の憑ることである。眞名兒は原作の白娘子である。この事は原文になくして、全く秋成の創意に係る。原文は許宣が姉の夫李幕下に未だ妻を迎へずといつてゐるところへ、白娘子が突爾として來りて、恨みつらみをいふことをいふことだけがある。

李幕事即發語道、兩次官司、我也曾出些氣力、叧叧儞好無情、怎娶了妻子在外、不通個喜信兒與我、是何道理、許宣道、我並不曾娶妻、姐夫此話、從那裡說起、正說不了。只見姐姐同了白娘子靑靑、從內裡走出來道、娶妻好事、何必瞞人、這不是儞妻子麽、許宣一見、魂不附體、急叫姐姐道、他是妖精、切莫信他。白娘子因接說道、我與作做夫婦一場、並無虧負儞處、爲何反聽外人言語、與我不睦、我婦人家既嫁了儞、却叫我又到那裏去、云々

妖靈が現身に憑るの怪は、怪異小說中つねに見るところである。しかし、秋成はこれを平安朝の物語に見ること多いもののけから案を得たのである。若き彼は、支那の小說が新しい刺戟を與へると同じほど、またそれ以上に、わが古き物語から新しい興趣を掬しはじめたのである。「雨月」は丁度彼が心を國學に向けそめた頃の作である。事

は同じ怪異小說「漫遊記」「西山物語」の作者建部綾足とを合はせ考ふべきことであらう。

「雨月」に於いては、また謠曲との交渉をも考へねばならない。「白峯」の「松山天狗」に於けるの外、題號の雨月すでに謠曲「雨月」に基いてゐるかをおもはせる。序文に「雨霽月朦朧之夜、窓下編成、以畀梓氏、題曰雨月物語」といふのは、例の文人人を欺くものであらう。「雨月」は西行法師をワキとする曲である。さしあたつては、「白峯」とのかゝり、全體に於いてはその曲が具する幽玄味、これ秋成が期するものでなかつたか。

「英草紙」「伽婢子」また支那の原書との比較はどれもどれも秋成が一切のものを秋成化せずにやまざるものを見せてゐるが、「青頭巾」に至つては、殊に秋成魂を明示するものでないかと思はれる。

「青頭巾」は明和五年の「怪談とのゐ袋」と交渉を有する。秋成は別にこの書の「伏見桃山亡靈の行列の事」と「伽婢子」の「幽靈評諸將」を合はせて「佛法僧」を成してゐる。「とのゐ袋」の「青頭巾」に緣があるといふのは「禪座を以て怪を伏す奥州の禪僧」また「魔佛を以て一如とす悟道の聖人、附りすたれし寺を取たてし僧の事」の二章である。

こゝに考へておきたいのは、「とのゐ袋」にも支那の奇談からの飜案が多いことである。今の「魔佛を以て一如とす悟道の聖人の如きも、實は「剪燈餘話」の「武平靈怪錄」の飜案であつた。たゞ作者臥仙子文坡がこれを直に「餘話」にとつたか、或は「狗張子」にとつたかは遽に斷じ難い。了意の「狗張子」にもこれを飜して「塩田平九郎怪異を見る」といふのがあるからである。

秋成が「とのゐ袋」を參照したことは、彼此の比較に於いて、領かれるが、「狗張子」を參照したことも、一段

と明かである。

詳細に述べてゐるよしなき今は、まづ卷三の「蛇川親當逢亡魂」の女の幽靈と「靑頭巾」の僧の幽靈とを繋ぐ絲の連絡があるとのみいふ。また卷五の「蛸蟲祟をなす」の孫四郞と僧宥快の男色、また孫四郞との中をさかれた宥快の死及びその妄執と寵童に死別した僧の妄執とを繋ぐものがあるといふ。更にまた僧の怪を鎭めてすたれた寺を興した快庵禪師が里人に語る鬼神の說と卷五の「杉谷源次附男色辨」の間に何とはなしに繋いでゐる絲を認めるとのみいはうとする。

おもへばおそろしい秋成の力であつた。秋成を繞つて纒れてゐる絲の幾筋は、一度秋成の指先にさばかれて、あまで堅く太くより合はせられたのである。怪異小說中またかゝるけざやかな手業を見せたものがあらうか。

しかし、「とのゐ袋」と「雨月」との關係は、秋成の獨自性を考へさせると共に、なほ「諸道聽耳世間猿」「當世妾形氣」の八文字屋本に於ける關係のやうに、流行に動かされてゐる秋成の一面を示すことになる。「靑頭巾」のみならず、この事は「雨月」の全體に就いていはれ得る。かくて流行やら怪談の好みやらを脫ぎすてて、全く赤裸の秋成を語る「春雨物語」が別途の硏究の對象となつて來る。

「雨月物語」の「佛法僧」と「春雨物語」の「目一つ神」は怪奇の筋立からいへば、大方相似てゐるものゝ、趣は全く相異つてゐる。彼には强ひて人を恐怖に誘はうとする巧みが底を割つてゐるのに、此は幽冥の筆靜に、更に諧謔の一抹をも加へてゐる。若者が怪しの山伏の金剛杖にとりすがつて歸るくだり、

神は扇とり直して、一目連がこゝに在りて空しからむやとて、若者を空に扇上ぐる、猿と兎と手打ちて笑ふ笑

ふ、木末に至りて待ちとりて、山伏は飛び立つ、この男を腋に挾みて飛びかけり行く。法師はあの男よあの男よとて笑ふ。

かういふ怪しき者の笑ひは、つひに「雨月」のどこにも見出すことが出來なかつた。また「血かたびら」の章に於いて、藥子の死を叙して、怪異の一事に及ぶ、

この血の帳かたびらに飛び走りそゝぎて、ぬれぬれて乾かず、猛き若者は弓に射れどなびかず、劍に打てば刄缺けこぼれて、たゞ恐しさのみ增りしとなむ。

いふところはこれのみ、却つて藥子の執着が現實のものとなつて來る。まだ怪談の型を出入してゐる「雨月」に於いては、到底期し難きものである。

「樊噲」の章の今存するものは前半に過ぎない。後半を見ないで推測することはいかゞであるが、秋成の說くところの大旨を察せられなくはない。すなはち「世間猿」が扱つてゐる事件の類ひであらうか。果してそれであるならば、彼に於いて、まだ事件のおもてに興がつてゐたのとひきかへて、此に於いてはいかに事件の底を流れる力に意を寄せてゐるかが考へられる。秋成の怪異は現實を踏へること、愈强くして、愈加はるのである。

秋成が赤裸々におのれを語るといふのは、たとへば「目一つ神」の章に於いて、神が京に師なく文なく物知りなきことを說き聞かせるやうなのをさしていふのである。作中の人物と秋成とが合體する狀態に就いていふのである。なほ貫之を罵倒するがために「海賊」一章を成すが如きものこれである。「雨月」に「貧福論」がある、傾向やゝ相通ふものがあるとはいへ、未だ全くおのれを表白するに至らなかつた。「海賊」にわづかに存する趣向は、

或は「英草紙」の「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」の前半から得たのであらうが、つひに單なる知識の興味を以てするかの音樂論とこの貫之論との間に存する差異の甚しきを思ふべきである。

「春雨」を以て秋成特殊の研究の對象にするといふ意はこれ等のためである。秋成のこの態度はまた支那の稗官者流の態度である。秋成は當時の支那摸倣者のなすところと途を異にして、おのづからこゝに達したのであつた。

（昭和三年「日本文學講座」）

第二篇

京傳黃表紙に關する一小論

——江戸生艶氣樺燒の續編と駿河二丁町——

一

京傳の黃表紙中の當り作、「江戸生艶氣樺焼」が天明五年に出てから五年目、寛政元年に、「碎文谷利生四竹節」が出版された。それには冠して「二代目艶太郎」といふ、即ち艶氣樺燒の續編である。おなじ續編とも見るべきものに、「通言總籬」がある。これは洒落本であつて、二年を溯れる天明七年に出版せられた。斯樣に黃表紙から洒落本に亘つて、同じ筋合がくりかへされるのも、畢竟艶氣樺焼が世に迎へられたためであるが、事は「總籬」の凡例に於て知る事が出來る。

艶次郎は青樓の通句也。予去々の春江戸生艶氣樺燒といへる冊子を著してより已恍惚なる客を指して云爾。因て以て此書に假て名とす。氣之介志庇共に彼の冊子に出づる所の名也。

艶次郎の名は世間に流布して特種の意味を有し、その挿畫に見えた獅子鼻は後には京傳鼻とまで呼ばれて人の口の端に上る。作者京傳の得意おもひ知るべきであらう。四竹節の主人公、二代目艶太郎のうぬは勿論總籬のうぬぼれに出づる。初代艶次郎と二代目艶太郎の生涯はどう似てゐるか、違つてゐるか。いひかへれば、艶氣樺燒と四竹

節との趣向の間にはいかなる關係がある事だらうか。たかゞ黄表紙の似たりよつたりの趣向とはいへ、その世界としてはなかなかの問題であらう。似通つて居る間に大に異つて居る持味を寄するところに黄表紙作者の苦心があつたらう。

京傳は艶太郎を親同様の醜男とする、また生得の浮氣者とする、たゞ親を千萬兩分限の獨息子としたのに、子を貧困の孤兒とする。更にあはれな二代目艶太郎を急に美しい男となし、金に不自由なき身となし、親が千金を散じて贏ち得たる假の浮名をやすやすと實の艶福に轉ぜさせる、さうして不思議を仁王尊の利生に歸着せしめる。要するに作者はかつての艶氣樺焼の評判をなほ逸する事なく、なほも當時の碑文谷法華寺の仁王尊の流行をとり入れて再度の喝采を迎へようとしたのである。

艶太郎は貧と醜とによつて好色の願ひのかなはぬ情なさを碑文谷の仁王尊に訴へる。金を授けたまふか、色男にして下さるかと七日絶食の祈願を籠める。仁王尊も金は厄介であると斷つて、訥子生寫しの面を與へる。面は肉附の面となつて、艶太郎はうつて變つた美男となる。すぐ様、金持の一人娘に惚れられて入婿となる。親譲りの浮氣の性は頭を擡げて、女中といはず乳母といはず近所の娘といはず、片端から手なづける。地色に飽いて吉原へと乘り込む。駕籠舁も男色にめでゝ駕籠賃をとるまいとする、遣手も心あつて祝儀を斷る、わけて相方の惚野屋の惚野に至つては揚代は勿論一切を貢ぐ。これはすべて親の艶次郎が金の力によつて眞似形だけをして貰つたものであつた。さうなると、うぬ太郎がうぬになつて行くのを誰が咎める事が出來よう。艶太郎が家にかへると女房が嫉しさ、口惜しさに胸ぐらとつてひきずりまはす。これもかつて艶次郎が遊所から歸つてやき手がないと張合なしと、高い

給金でやくを專門に抱へておいた妾にして貰つた所作であつた。何というても、それは假、此は實の相違がある。女房のこづき方は餘りに激しかつた。面は落ちる、艶太郎はもとの醜い貌となる。さうすると女房は遂ひ出すし、傾城惣野は愛想づかしをする。こゝに艶太郎はある悟に達する。もとよりその程度は親艶次郎が、日限きつて特にさせて貰つた勘當の間に、なしたぶまな數々から會得したそれと同じものであつたらう。

二

京傳のこの趣向は「呼繼金成植」に於ては、あと戻りの形をなす。それには艶次郎は未死なずに居る。家もさまでに逼迫して居らない。

爰に世に知れるところの浮氣屋の一人息子の艶次郎は御存じの通、生得浮氣にして持地面も有金も皆つかひ果して二萬兩位の身代となりけれども、やつぱり浮氣はやまず、此節養子をせんと色々尋ねけれども、相應の者もなく、惡い志庵ときたり喜之助を呼んでいろいろと艶次郎二代目の浮氣者を工夫する。

斯ういふ書き出しの黃表紙は四竹節出版の翌年、即ち寛政二年に出でた。作者名は時鳥館主人、畫工文橋、序歌には山東京傳と署名してある。

艶次郎等は相談の結果、金鷄といふ者に話をきめる。朝寢が好きで、野暮な事が嫌ひで、女郎買が好きで、酒がえてもので、金を持たぬ性といふのがその資格である。當時金鷄は駿河の二丁町に流連して、三增屋の小の原といふ傾城に深く馴染んで居た。そこへ志庵、喜之助が迎へにゆく。小の原ははじめから金鷄を悅ばぬ、しかし、別れ

の折とて、わざと實意を見せて癪に惱む眞似をする。流石は艶次郎の跡をつぐ金鷄である、そのうぬは嵩じて、小の原と心中を見せかけ、駿府中へ浮名を立てようと、五百兩にて小の原をかりきり、その以前艶次郎が向島でした狂言をそのまゝに安倍川河原でくりかへさうとする。

金鷄小の原は安倍川に、しめし合はせた志庵喜之助の二人の追手の來るのを待つて居ると、一天俄にかき曇り、お梅久米之助、梅川忠兵衛、おはつ德兵衛などの古の心中の亡靈共が數知れず現はれ出でゝ、もう二人を在世へかへさじ、戻さじと迫る。そこへ、志庵喜之助がやつと駈けつけて散々に詫び入り回向金として千兩を贈る事とし、二丁町の酒樂の所で渡す約束をする。釋迦と閻魔王とが請取に來る。金鷄は危きところを漸く逃れ得て、江戸へ旅立つ。しかし、性來のうぬはやはり艶次郎と同じやうな所行を道中にくりかへさせる。宿々。飯盛りを二分づゝでやとひ、色男が通るからとて泣きながらおひかけさせるなどの馬鹿を盡して養父のもとに乘り込む。

金鷄といふ名は、これよりさき、一年前に京傳作「嗚呼奇々羅金鷄」の主人公として見えて居る。その金鷄は上州一の宮邊に生れ、風流を好み、和漢の文章に眼をさらし、江戸に出でゝ名ある先生達に交はり、文章を見飽きて狂歌師となり、歌修行、むだ修行何やかやをこめて出かける。西行にして金があり、芭蕉にして男が好すぎる旅はういものとはいひ條、金さへあれば何の苦勞もなく京に上つて都の狂歌師を詠みやぶり、また江戸を志して下る途中、駿河の二丁町の酒樂のもとへたづね行き三增屋の小の原に馴染んで、日をくらす。そこに大金を費つて江戸にかへる途中、道に迷つて、とある家に一夜の宿を賴む。この家には美しい娘が居た。三庄太夫の息女である。五に戀風身にしみて、契を結ばうとする折柄、三庄太夫が立ち出でて金鷄を一うちにとふり上る刀の下に娘は忽ちひ

き拔いて鷄の姿となる。われこそ、まことは淀屋辰五郎が所持せし金の鷄の精靈なり、汝の名にめでて女と化し、そちが色におぼれて風流を失はぬ悟道を授けん爲に現はれたり、この上は色にそみて風流を失ふべからずといふかとおもへば、家もなく、三庄太夫もなく、たゞ金の鷄のみが殘る。金鷄は江戸へ歸り、その鷄を家の寳とし、うき世の悟をひらき一首をよむ、その歌にいふ、

人心皆はちす葉のつゆなれや丸うなつてもうはすべりして

作者がこの狂歌師に淀屋の寳物を以てしたのは、金鷄といふ名に因緣を附けたにすぎなかつたらう。作者はすでに金鷄をしていはせて居る。「おれが名が金鷄だから、そこで作者が淀屋の寳物に三庄太夫とお目にかけたな。」その鷄の精の所作に對しては、作者はまた金鷄の人となりを說いて、癖として歌舞伎を好み濱村屋㝡屓ともいうて居る。

それにしても「呼繼金成植」の金鷄とこの金鷄とはいかなる關係を有するのであらうか。二者を同一人物と見るならば「嗚呼奇々羅金鷄」には風流を主とし、「呼繼金成植」にはうぬを主とさせた理由は何うであらうか。

三

世にも知られて居る通り、艶氣樺焼は京傳が空に憑つてのみ作り爲したのでなく、事實の存するものがある。艶次郎は國學者岸本由豆流の父親を粉本にしたものである。今日こそ由豆流の名は相應に知られて居るとはいへ、これを當時に於ける父の名のきこえに比すれば、所謂月鼈もたゞならぬ事であらう。

由豆流の父を榮次郎といふ、その父を八郎次といふ。八郎次はもと金座の手代であつたが、引負をして金座を逐はれ町人となり塗師方御用栗達本兵庫の手代を勤めて居る中、主人に代つて「明和伎鑑」著述の罪をうけて、刑に處せられ、榮次郎はその代償として多額の黄金と、弓弦御用達岸本大隅の株を與へられた。榮次郎はその金を恣にまき散らし、深い中でもない吉原の傾城瀬川を身請するなどの愚しい、しかも自らは得たりとする數々を行つて當時を驚した。京傳は早速にその噂を利用する。榮次郎を知らぬ者は世にも斯樣ならぬはあるまいものをとをかしがり、知る者は榮次郎の俤をおもひ偲んで興がつた事であらう。榮次郎はまた讀めもせぬ書籍を山積して得意がつて居たといふ、艶氣樺燒の最初の一枚、艶次郎が鼻うごめかして、浮氣の本ども讀み散らすうしろに重ねられてある本箱の蓋にしるされた古典の名を見るものは、扮本たるその人を聯想して微笑を禁じ得なかつたであらう。

これにひきかへて、「嗚呼奇々羅金鷄」の金鷄は和漢の典籍に讀み耽る人、文章をよくする人となつて居る。京傳はそこに何等かの對比を考へたのであらうか。その對比はまた江戸生と上州生のうへにも及すべきであらうか。上州生の江戸通人、故に京傳譯は冠らして淀屋寶物、江戸名物といふ。

奇々羅金鷄は實在せる知名の人である。否、艶次郎の如く名を知られようと努力する人である、たゞ異るところは艶次郎と賣名の方面が違ふだけである。金鷄は本名畑秀龍、字は道雲、七日市の藩醫、まさしく上州一宮附近の人である。上毛の三山中白雲金洞のみはきこえて金鷄は聞えず、故に金鷄と名づけて、他日學業大成の日にあたつて、金鷄山をして白雲金洞と肩を並べさせたがよいとの平秩東作の勸によつてその號をなした。彼は早くからこの名を高うするに苦心した。狂歌師として橘洲の門に學んで、いかに天下知名の士と交ある事を誇つたであらう。そ

の人々に贈るの辭幾篇を刊行していかに得意であつたか。またその人々から序跋をその書に加へて、いかに有頂天であつたか。艶次郎を嗤ふべくはこれも亦哂ひ樂つべきであらう。「嗚呼奇々羅金鷄」の畫の第一葉、悠然として山に對し、菊に對するその姿は直に彼が蝸廬記に於て見るべく、その第二葉、西行もどきの風流修行の姿は、やがて致仕して後、江戸にまた京に諸名家を訪ねあるいた彼の姿であつたらう。最後の畫、淀屋の金鷄を飾つた前に傲然と構へた姿は、淺草橋場の草庵に於けるをさまり振さながらであつたらう。

彼はある時一つの旅硯を手に入れた。さうして作つた旅硯の銘文の一節にいふ、われ汝を得て東行の具すでにとのへり、汝必ずしも我行脚の體を輕んず可らず、ちぎれたれども、居士衣、さびれたれども鐵笏、痩せたれども金鷄先生なり云々。これをその行爲と合せ考へる時、誰か單なる諧謔の言葉としてのみ讀む事が出來ようか。さうした時、口もとに浮び來る笑は、「嗚呼奇々羅金鷄」を展げゆく時の笑と一つになるであらう。

四

さても京傳は、どうして彼を粉本にしたのであらう。彼は榮次郎に於ける艶次郎の如く考へてしたのであらうか。それにしては奇々羅金鷄の名はあまりに露骨すぎる。また粉本にせられた金鷄はどういふ心持で京傳に對したのであらう。彼は決して京傳に怨みがましい念を持たなかつたらう。寧ろ手段をえらばぬ賣名の前にはひたすら感謝にたへなかつたらう。彼の贈山東京傳文の京傳禮讃はその心持のひきつゞきでなからうか。或は馴れ合ひ話し合ひのうへのそれでなかつたらうか。

時鳥館主人の何人であるかを知らぬわたしは、こゝに一つの想像を恣にする。それは「呼繼金成植」が「嗚呼奇奇羅金鷄」の一年後に出版せられた事、また京傳の序歌として駿河二丁町金鷄名殘を載せてある事から、勝手に時鳥館主人を金鷄とする、或はまた金鷄同臭の徒とする、さうしてどうせ黄表紙種になるなら、いつそ世間に知りわたつて居る艶次郎の後をうけようまでと、あの艶次郎養子の趣向立をしたのであらうときめてかゝる。さうして京傳をしてさきに奇々羅金鷄その人から聯想したあるものを考へ出させて、くすぐつたい思ひをさせたらうともきめてかゝる。

二つの黄表紙に見える酒樂志庵がいふところの田舍通は實在の人であつて、安永再興の二丁町の細見には吉野庵酒樂の名で序文を書いて居る事を知り得る程度に於て、實在の人金鷄が二丁町に於ける遊びぶりを知り得る手段はないのであらうか。三增屋小の原といふ遊女が實際に居たか居なかつたかを知るために天明の末年寛政の初年の二丁町の細見を手にする機會はなからうか。片々たる黄表紙から起る問題はつひにかゝるはかなごと以上に出づる事が出來ない。

よしそれを明にする事がかなはずとも、二丁町は何というても賓遊廓二丁町である。そこの揚屋、女郎屋、女郎藝者幇間はたまたま殘つて居る幾種の細見を照合してそれと推すべく、そこの賑はひは、やゝ後年のものではあるが「膝栗毛」があつてやゝくはしく傳へられて居る。また馬琴の「羇旅漫錄」はその見聞を叙する。

おもふに膝栗毛がその繁昌を傳へながら、その鄙びた樣を叙するにいそがしく、また吉原の作法と異なる點を擧げてをかしさをいひ立てるのは、その書の性質の然らしむところである。何となれば江戸と田舍との對比から滑稽

をとり出すが、作者の主意とするところであつたから。二丁町の遊女をして、仰々しく地方語をいひ立たせるも、畢竟はそのをかしさを欲するためである。

然らば、この二つの黄表紙が二丁町をいかやうに取り扱つたか。また何の要あつて二丁町を舞臺としたか。その何の要あつてこの問は當然金鷄の二丁町に於ける遊びぶりを詳にするを要する。しかし、それを外にしてなほ考へる事が出來ないでもなからう。

「呼繼金成植」の金鷄はいふ、「そんなら艶さんの養子にしよふと云つしやるなら、江戸でまた工夫を廻らせて浮氣をしやせう。實は江戸には秋風だから此方へ來たのさ。」

金鷄が花の江戸の五丁は飽きたといふ言葉をそのまゝに聞き棄てずに、これを洒落本の趣向の變遷の上に合せ考へる。寛政の初年、もうそこには洒落本の世界も、吉原から深川へ、深川から他の岡場所へ、さうして遠い田舍の廓へ、そしてそこの變通を面白しとするほどの變種を交へそめる。これがやがての膝栗毛などへの中繼をする。この二丁町もまた同じ傾向のうへにありと解して然るべきであらうか。

然らば作者はこの二丁町をどう取り扱つたか。「嗚呼奇々羅金鷄」には附記していふ、「此作者は二丁町不通と見えて、女郎の言葉がやつぱり吉原てやつさ。」

作者は別に二丁町の特異の色合を明にする事に努めなかつた。「呼繼金成木」に於ては、わづかに女郎の言葉のみ吉原と違はせた小の原の言葉は斯うである。「金さんが養子にいかずいかずといひなさる。艶さんとやらは、あの草子に出た人であらうずや。その草子を皆がお見といふから見やしたらね、貰つて來た程の鼻だが、あれでも江戸で

は色男だアヤ、江戸には色男はないげで、あんな人に惚れらあや、志庵さん、ぬしもいゝ思案の出る時もあらずやア。」膝栗毛がこの點を特に强くいひ表はすと、また大なる距離を有する。三馬の潮來の遊廓をうつせる中本ともまた一方ならぬ徑庭を有する。これはその樣式の相違と共にまた年代の相違であらう。勿論作者の作意はそれを中心にして居なかつたゝめである事は認めながら、なほ二丁町を舞臺とする黄表紙の存在を意味するものと考へる。

五

こゝに三馬が潮來のあなを穿つほどのゆき方で、二丁町のあなをうつし出すものがあつたらどうであらう。それと膝栗毛とこれ等の黄表紙とを比較したらどうであらう。膝栗毛のかいなで振、黄表紙のゆきずりざまもなほ瞭にならう。幸にその書がある。未刊の洒落本、題して「阿部川の流」といふのがそれ。雨雪軒谷水の作、文化十年に成る。谷水は江戸の遊客であるが、二丁町に出入して、よくそこの風習に通じ、人情を曉つてこの著をなしたのである。序あり、まづ二丁町の輪廓を語る。

抑駿州府中二丁町といつぱ江戸吉原の源にしてその賑ひ、又江戸に勝れり。通ふ數重なるにしたがひ情の深き事東妓の能及ぶ處にあらず。奇遊の趣向といつぱ、たとへば客五人あれば一人の分量三百孔出し、銀二朱の新造一人を揚げ、その餘はつけとなづけ、何人なりとも座敷へ來り飽くまで食ひ飽く迄飲で歸る事またまた外國にあるまじく物日節句の大波なく三會目の頭痛もなし。若い者といふなく皆遣手の差配たり。茶屋附は御無用たるべし。其地に住で夜每すけんに足を勞せば思ひの外なる事出來て、一文いらずの花魁貫ひあり、また外の

妓樓に友達遊び居る時に、我相方を伴ひ他座敷へ行く事苦しからず、後入お初尾などいふ色男の秘事はその處に至て知るべし。花魁揚代一歩なり、二朱あり、悉く極秘を現はすに至つては事長うして筆に盡し難く、知る君子に問ふべし云々。

本書はまづ信濃屋、奥州屋、丁字屋の三章にわかたれる、おのおのゝ特色を示さうためである。またこれ等を通じて五つのあなを數へる、二丁町の通書たる所以はこゝにある。その第一穴にいふ、早歸りの客あれば、そのあとへ間夫をいるるなり、尤内證にても知つては居れど大目に見ておくなりと。これはそのあり樣を寫し出した後の割註である。第二穴は女郎が客をおき去りして間夫との忍び合ひ、第三穴は阿部川の涼み、例の割註にいふ、そこ等の木竹などとり集め河原にて火を焚き烟をなし、肴とり開げ飲みかける、これ又第三穴也、此趣外國に未聞かざるところなり。第四穴駕舁のうがち、駕籠舁が百姓故日が出れば野良仕事に出掛けるので、客のもとめに應じられない事。第五穴は丁字屋から川なべといふ所へ人目にかゝらずに出られる間道。これ等の穿をところどころに挿んで二丁町の紹介につとめる。全體の色彩はもとより吉原ならずして、岡場所叙述の洒落本に類する。悪ふざけ、悪おち、やゝ色合は濃かにすぎる、勿論そこに二丁町があらう。膝栗毛もさう敎へて居る。

丁字屋の章から以下の三章につゞいて、女郎菊之助と客馬植が通つた筋をなして居る。馬鹿は江戸から來た府中詰の侍、それが二丁町通ひにうき身を窶して、ともすれば江戸に殘した妻子をも忘れてしまふ始末、それが募つて借金に首も廻らず、つひに邸を逐轉して近在へ身を隱す、またある時は江戸の妻の歎きの文に思ひを碎いて菊之助と切れて江戸へ行かうとして、それもかなはず、菊之助も同じ思ひに惱みくるしむ顚末、いはゞ谷峨の作風といは

うか。作者谷水はいかなる人であるかを知らねど、或は谷峨に私淑するものであらうか、谷水の谷字の相通によつてさう思はせるばかりか、作風の模倣からもさう考へさせらる。

全編はまだこれで終つて居ない、作者は卷末に附記して、後編ならびに、若松屋、三増屋、伏見屋など末あらはさゞる世界追々述作仕候というて居る。その三增屋の章を見る事が出來たなら、よし年次の相違はあらうとも、前の二つの黃表紙と讀み合はせて得るところもあらうと思ひながら、未手にする事が出來ない。それどころか後編といふものが果して書き續けられたか、どうか、これさへ知る事が出來ぬ。たゞこれ等を知りもし、讀みもする機會の日の早かれとのみおもひわづらふ。

二丁町の細見については、馬琴の羈旅漫錄に安永九年の春吉野や洒樂といふ者はじめて撰み板行す。その後つひに行はれず、前後一板なりと見える。馬琴が駿府に六日の間逗留したのは享和二年である。故にその言を信じて、寛政初年度のものを索める望をたつべきであらうが、そこの細見は必ずしも一板でなかつた。はかない、或は寛政初年のものやあると、なほ望を繫いで居る。この拙き一文の如き、世の知れる人の敎を乞ひたさのみに草したともいふべきである。

（大正十五年六月「新小說」）

黄表紙の本質

一

こひねがはくは江戸氣分の皆様、敵討の堅みをやめて、喜三二春町傳來の青本にくだけ給へと「〓訓歌字盡」に敵討物の流行を罵る三馬はまた同じ文化二年の「親讐胯膏藥」に御江戸の名物たる戯作の道を既に澆季に及んだりと歎聲をもらしてゐる。しかし、その「胯膏藥」にしたところが、敵討物に青本の趣向を混ぜあはせるといふだけの代物、何にしても敵討物ならでは夜も日も明けないその頃の黄表紙の世界であつた。上方に起つた奇異小說の脉をうけつぐ讀本の堅みが浸潤したための結果と考へられる。その流行の魁は知られてゐるやうに、文化から享和、更に溯る寛政七年の南杣笑楚滿人の「敵討義女英」であつた。讀本でいへば「いろは醉故傳」出板の翌年、「高尾船字文」出板と同年のことである。

楚滿人にあつては、これは敵討物の筆はじめでなかつた。十二年以前の天明三年にすでに「敵討三味線由來」の作があつた。それが散々の不評判であつたことは翌年に眉壽亭の「復讎二葉松」といふ追隨の作があるのをせめてもの見つけものといはねばならぬ程であつた。その「二葉松」が文化三年に、「敵討春告鶯」と改題して返り咲きを

した。丁度「腭膏藥」出板の翌年に當る。黄表紙の變態の流行がさうさせたのであつた。
寛政七年にはあゝまで喝采を博したこれと同じ型のものが、どうして天明三年には顧みられなかつたのであらうか。要は十二年前の黄表紙の世界は「金々先生榮花夢」の傳統を嚴守し、十二年後には安永四年この方の江戸氣と、輕みとを忘れたためであつた。最聞えたものを例とすれば「長生見度記」「啌多雁取帳」出板の年、「御物好茶臼藝」「太平記萬八講釋」の前年、「江戸生艶氣樺燒」の前々年には、あんな堅みが受けいれらるゝ筈はなかつた。當時に於ては迫害と慘虐に遭ふべき切支丹黄表紙ともいふべき「敵討三味線由來」であつた。

二

黄表紙は例として半紙半截形の五枚を一卷とする、それが卷を重ねること三つ、即ち十五枚より成る。「三味線由來」に書れた復讐の顚末はかうであつた。
三味線の元祖中小路に從つて祕曲の傳授をうけた名人石村は門弟にこれがと思ふ者がないところから、手筋のよい娘のいとのまだ十歳の幼きに拘はらず、亂後夜、中島の祕曲を敎へることにした。それを門弟戸村八十丸が盜み聽く、そして露顯に及んだので、師匠石村を殺害して逃亡する。妻のおれいは悲歎の餘りに琴曲の想夫戀を三味線にうつす、これが弄齋の曲であつた。そのうちに母は病死する、今はたよるところもない娘は、江戸の廓に勤めする身とならなければならなかつた。その頃江戸にはまだ三味線が稀であつた。おいとの淺妻が朋輩に敎へてから、大に行はれ出した。淺妻はまた投節を作つた、それが店すがきに彈れて廓の名物ともなつた。東國方のある大名

の若殿が淺妻と馴染を重ねる。淺妻も勤はなれた誠の契を結んだ。間もなく若殿は國もとへ呼びかへされる。戀慕の闇に迷つたはては盲目の身となり、廓にゐることもならず、乞食となつてさすらひ歩いた。俠氣の角田川の船頭にひきとられて、三味線の藝で身を立てることになる。所々の御邸へあがるうちに、特に贔屓にあづかる御方のところで、思ひがけなく秘曲亂後夜を聞いた。それを手がゝりに敵戸村をつきとめる。戸村は菊崎丹下と變名してその邸に抱へられたのであつた。淺妻は御邸の殿の後立によつて讎を討つ、その孝心によつて程なく兩眼は癒えた。長谷の觀音の利生によることとであつた。御邸の殿は以前の若殿の御一家であるところから、仲人に立たれて、こゝに良緣を全うする。たゞ名家石村あとが絕ゆることをおそれ、三味線をよく作る柏屋の某を養子にする。

楚滿人の叙述は北尾政美の繪を作つてゐる。これは黃表紙の約束に從ふことであつた。黃表紙が他の小說の樣式と區別せられる第一條件は、文と繪が同じ位置にあることである。時には繪が主位にあることである。馬琴は「膂沸西遊記」に草雙紙は繪を君とし、文を臣とするといつてゐる。三馬は「式亭三馬腹之內」に作者を太夫に見立て、畫工を三味線ひきに見立てゝゐる。さういふ黃表紙の「三味線由來」に於て政美の繪は楚滿人の文とどのやうな關係を保つてゐることであらうか。「三味線由來」の價値はその關係如何によつて決することである。

政美描くところ、序の半丁を除いて、十四丁半、一丁一圖、半丁一圖のいろいろをとりまとめて、十七圖であつた。

第一圖、石村が娘に三味線を教へてゐるところ。第二圖秘曲傳授を戸村が緣下に潛んで盜み聞くところ。第三、戸村が石村を殺して逃げてゆく。第四、母親おれい淚ながらに弄齋の曲をおいとに教へてゐる。第五、おれいの病氣、おいとの看護。第六、おいと淺妻となつての全盛ぶり。第七、淺妻朋輩に三味線を教へる。第八、若殿との睦

しい姿。第九、家老の諫言。第十、淺妻盲目となる。第十一、淺妻の乞食姿。第十二、船頭の宿にひきとられる。第十三、ある御邸に三味線を彈く。第十四、淺妻が秘曲に耳を澄してゐる。第十五、御邸の主に訴願して戸村を吟味して貰ふ。第十六圖、仇討。第十七圖、若樣との婚約のところ。

かういふやうに繪柄の連續をしるして、さきの筋とひき合はせると、繪と文とが極めて緊密な並行をなしてゐることが知られる。その緊密な程度は黃表紙中のものならずして、合卷の性質を具備すといふ方が解釋を早くするやうにさへ思はれる。

あらためて說明するまでもない、合卷とは黃表紙の後身であつた。黃表紙が五枚づゝの每卷に一々表紙を附け、貼外題を附けてゐたのを、五卷を一冊とし、それを前後の二卷に分つやうになつての稱呼である。この形式の變化はすべて製本上の便利から來てゐる。さういふ三馬の考案を要するほどに、文化三年前後の黃表紙は分厚なものになつてゐた。勿論內容の推移がさうさせることであつた。敵討物のやうな筋を主とするやうになり、筋の統一を尙ぶやうになつたからである。筋の統一はともすると作柄を味なきものにしてしまふ。そこから事件の複雜を肝要なことゝする。統一と複雜とのふた途をかけるために、敘述は勢細やかになりがちである。合卷も文と繪とが同じ位置にあることは黃表紙とかはりはない。たゞし、合卷の繪は文の敘述の進行の鈍さから、さう繪組の變化を速にすることが出來ずに、停滯がちであつた。連續してゐる畫面を辿りさへすれば事件の推移を解し得ることである。「三味線由來」はすでに合卷の性質を具してゐた。といふよりは、この物こそ合卷樣式を治定した最初のものであつた。即ち黃表紙らしくない多くの要素を備へてゐた。

黄表紙は近くは赤本から出てはゐるが、系統を遠くまで溯つてゆけば繪卷物のむかしにまで還らねばならない。繪卷物が物語草紙の上に立つて成立する時は、その題材が源氏であらうが、住吉であらうが、すべてを取つて繪にする必要はなかつた、繪になるところだけを選んで前後にそこの文を配すれば事は足りた。それを毎葉必ず繪といふ原則を守つてゐる合卷は、物語のすべてを繪とせねばならなかつた。よしんば合卷作者が細心な注意を繪組に拂ふにしても、繪の變化を少くして、興味を淺くするの不利から脱れることが出來なかつた。

廣いところからいへば合卷の繪組は變化の甚しいものである。世間に目まぐるしい變化を草雙紙式といふのは、多くはこの合卷を意味することではあるが、その總名草雙紙といふ狹い範圍の中でものをいふとなると、合卷の繪の變化はつひに黄表紙と日を齊しうして語るべきでなかつた。黄表紙は合卷の不利を伴ふことなく、むかしの繪卷物の特長を十分に發揮する都合のよい位置にあつた。黄表紙の繪の連續はどうしてもそこの文を讀み合はせなければ、事件の推移、筋の運びが理解されないやうに描れてゐた。繪面のおのおのは麓を傳ふことなく、直に一躍して登る山の頂である。繪と繪との連續は峰づたひといふよりもこの頂からあの頂に飛びうつることであつた。黄表紙の叙述には首尾の統一はさまでの問題でなかつた。書かれたるところはみながら叙述の山である。すなはち黄表紙一篇の文の山と山との連續であつた。この繪の頂と叙述の山とが一致する、それが黄表紙であつた。傑れた黄表紙とはその一致の程合のぴたりとすることに於ていはれる。しかも、繪と文とは燃ゆる情愛をうちに秘めて外目にはさりげなくもてなすほどに餘裕を持つ二人の中であつた。この夫婦中は、また連俳の興趣を假りて說明するが更に適切であるやうに思はれる。ある一葉に於ける文と繪との關係は前句と附句のそれであつた。前句と附句は不即不

離の態度を以て相對すべきであつた。たえては續く蓮の絲の細いゆかしい味は書かれず、描かれぬ二句の間に潜んでゐる。讀まずして、その全斑を見盡す繪の面に何の微妙があらう。「三味線由來」のは畢竟、笑のしをり、細みを解せざるものであつた。當時の俳莚から逐はれるを誰がひきとめてやる者があらう。散々の不評はそのところであつた。

黄表紙の繪がすでに本文の圖解でないとすれば、本文以外の本文として讀まれる適例を擧げなければならない。黄表紙の傑作といふほどの傑作ならばどこにも見られることが、こゝには「金々先生榮花夢」の一つに就いていふことにする。あれに描れた金々先生の通人となつてからの三種の服裝によつて、「當世風俗通」の上の令子風、中の息子風、また異體の一つの長々しい說明が讀まれることであつた。安永四年の人々は繪を見ると共に、これを讀んでそこに書いてこそなけれ、作者の眼目としてゐるうがちを裕に理解したことであつたらう。

黄表紙には地の文の外に、言葉書がある、圖中の人物の會話また獨語の書き込みである。これの由來も辿つてゆけば遠いところにあつた。はじめに繪の前後に配した本文を畫面に收めまた會話、獨語をもちらし書してその中に收める繪卷物は、鎌倉末期から存在してゐるとのことである。繪卷物から假名草紙、浮世草紙には一縷の絲があるが、その絲を傳うて、浮世草紙の挿繪には少なからず、その種のちらし書が見られた。しかも作者は相應な技巧を凝してゐた。その結果は地の文から離れ、描れた人物の行爲に即かぬちらし書を得て、本文通讀の以外のをかしさを作り成すに至つた。こゝにも地と繪と言葉書との間に一定の距離の存在を必要ともする。赤本を中に隔てゝ、黄表紙はその浮世草紙のちらし書の洒落を起用し、また一段と活用した。その一例をまた「金々先生榮花夢」から借

りて來る。金々先生が和泉屋の主人にひき合はされるところに腰元の言葉書がある。獨語の形に於て書れてあつた。「今度の若旦那はとんと雷子がもの草といふ格好だ。」安永二年の五月のもの草の狂言、「十帖源氏」の筋は當時の讀者にはまだ新な記憶であつたらう。嵐三五郎の京屋雷子の舞臺姿はまだ人々の目の前にあつたらう。いはゞ棄白ともいふべき腰元の言葉は、遠見に描れたそこの座敷と共に、人々をして市村座の舞臺を髣髴させるに十分であつたらう。芝居ならばワッと來るほど、繙く者を感心させたことであつたらう。「三味線由來」にも勿論言葉の書込みはあつた。そのどれが不即不離の妙を得てゐたであらう。すべては繪と共に地の文に即き過ぎたもののみであつた。

三

「三味線由來」には序がある、それも黃表紙の約束に從つてのことであつた。「本朝の絲調は天鈿女命の庭燎の琴歌より起りて琴瑟箏琵琶にかぎりたり、しかるに人皇百七代正親町院の御宇永祿二年琉球國より蛇皮二絃の樂器渡り、和泉國中小路大和國長谷の靈夢によつて一絃を絲加して三味線と號、門人石村妙手にして今此點の工なる來由實事を尋て兒女出精の便にもと草紙ならしむ。」この序はさながら讀本か、また讀本の影響を多く受けた合卷の態度を示してゐるとしか思はれない。篇中にまた弄齋の歌詞を擧げ、二十一曲八秘曲の名目を擧げてゐることも、ますますその態度を裏書してゐた。しかし、書れた三味線の由來は史實でない、その假托に出づることは勿論であるが、その假托をわざと史實であるやうに見せることが惡い。卷尾に「此一條未書には見當らずといへども、好ける道にて聞きおぼえしあらまし書き述べ侍れば必ず描きをそしり給ふべからず」とある斷り書がさらに惡かつた。序

中の「兒女出精の便にも」といふのはなほ一段と惡かつた。

黄表紙本來のをかしさは子供の赤本の輪廓をそのまゝに、中に似ても似つかぬ浮世の通を盛りなすことであつた。手にする本は十歳の翁といふところである、またそれを讀む者は十歳の稚氣を失はぬ老翁である。これ等は江戸時代の變體的文化を背景として解せられるべきをかしさであつた。そのをかしさを髓腦とする黄表紙には史實や考證は禁物であつた。もしそこに史實考證があるとすれば黄表紙の世界に限定とせられた「繪草紙年代記」、「億說年代記」の類でなければならなかつた。

しかし、三味線の由來や、考證は絕對に黄表紙種にならないといふのではない、「三味線由來」には黄表紙にならないある物を缺いてゐるために、黄表紙の正統から外道視せられるのであつた。黄表紙作者はそれが過去のものであらうが、現在のものであらうが、事實に對してある距離を隔てゝ立つことであつた。事實に即いてものをいへばいふほど、その距離を嚴守するのが彼等の態度であつた。さういふ場合には事實を誇張し、或は反對のことを述べることによつて、その距離を保つた。黄表紙の趣向といひ、案じといふのは、つまりはその距離を外の言葉でいひかへたことである。黄表紙は精々諧謔と、諷刺に分類せられることではあるが、それは距離の伸縮から來ることでなくして、距離を守りながら、わざと近よる眞似をしたり、わざと遠ざかるふりをする思はくからの相違に過ぎなかつた。二つの區別は距離を活用する手段、また態度によつて決した。その二つのいづれが優つてゐるかなどとは、もとより問ふべき筋合ではなかつた。要は不即不離の妙諦を得たものを傑出の作に推せばよいことであつた。

田沼事件から樂翁侯の改革にかけては數多くの諷刺の作があつた。その中の「時代世話二挺鼓」は田沼意知を將門に、佐野善左衛門を藤原秀郷に見立てた。一篇の趣向は意知の紋どころ、七曜紋から出でゝ、叙述はそれの由來話に收まる。そこの繪には首を切られた將門の骸から七つの魂が飛び出す。將門には六人の影武者があつたからである。これが七曜星の見立であつた。本文には將門を祭つて神田明神とする、その頃神田に夜な夜な七曜の星の光を放せしはこの將門の魂なりとある。田沼邸の神田橋にあるは當時誰知らぬ者はない筈であつた。黄表紙の諷刺もこの處に繪趣向をも旨としてなされたのであつた。作者は文と繪に於て趣向を弄すればもう滿足する。諷刺の結果をどうするのが問題でなかつた。諷刺された者の白眼を趣向の蔭に避ける手際、危い趣向の綱わたり、作者と讀者の興味がそこにあつた。これはまた赤本の傳統をこのまゝの教訓物の場合にもあてはめることであつた。通笑の教訓物の工夫は教訓の堅みをいかにして和くするかにあつた。故にこれはある程度まで認められ、その工夫を缺く「三味線由來」はつひに顧みられなかつた。

四

繪と文、本文と言葉書、これから對象と作者との間に見出される距離はまた作者と讀者との間にも存してゐた。黄表紙の中に作者みづから顔を出すものは、數に於て少くない、春町の「其返報怪談」以來、喜三二にも、京傳にも三馬にも、一九にも、鬼武にも數へ來れば、どの作者にもあり、中には「芝全交夢寓言」のやうな他の作者に就いていふものさへあつたが、それ等は皆そこにおのれを語るとよりは、却つておのれの中に住しつゝ、おのれから

離れるケレンの見せどころであつた。それがまた讀者にとつては、その趣向を喜びながら、作者の面影を見るうれしさとなつた。讀者のこの心持は、假扮して舞臺に立つ役者なにがしの技に恍惚としながら、樂屋裏のその人に限りなき親しみを寄せてゐる江戸の觀客の心理にもたとふべきであつた。つねに樂屋を見たがる芝居好のやうに、黄表紙の讀者には作者の趣向の種の由來を知らうとするばかりでなく、黄表紙そのものゝ作られる順序をも知らうとした。

讀者と作者間に於けるこの關係は、直に作者同志の關係とも見ることが出來る。黄表紙には模倣、踏襲が公然とゆるされてゐた。燒直し、染直しは當然のことであつた。何となればこれ等は剽竊でなくして換骨奪胎の妙であり、原作に即いて離れる腕の冴えの見せどころであると作者は信じてゐたからである。作者と他の作者との附合の味ひどころと解してゐたからである。

「敵討三味線由來」にすがつて言をなせば、わづかにこの様なものをなし得るに過ぎなかつた。しかも黄表紙の本質を說いて徒に空漠の感をなすことであつた。それは說明に繪を伴つてゐないといふことが原因の一つであるやうに思はれる。

（昭和二年四月「國語と國文學」）

黄表紙の一特質

一

摸倣やら、蹈襲やら、いつも同じやうな趣向をくりかへしてゐながら、それが却つて觀客の興に投じたといふのが、江戸時代の歌舞伎の世界の不思議であつた。同じ不思議が、その頃の小說の世界に展開してゐる。殊に草雙紙に於いて甚しい。目先の新しさを念とする黄表紙にさへ隨分多かつた。二番煎じはいふも愚なこと、三番煎じ、四番煎じほどのものも少くなかつた。讀者は摸倣するものを知つてゐる、摸倣されたものも知つてゐる。その相互關係を知つてゐる。さうしてその關係をおもしろいと喝采するのであつた。故きを溫ねて新しきを案出するものとして、作者の腕並を禮讃した。この事がなかつたら、殆んど摸倣專門の黄表紙作者式亭三馬の如きは、とうに葬られてゐた筈である。

さういふ中にも、注意せられるのは、京傳の黄表紙「嗚呼奇々羅金鷄」と同人の作「福種笑門松」の關係である。前者は寛政元年の板、後者は二年の板、繪だけは、その頃かなり多い改題本と思はれるやうに、どちらも同じものであるが、そこに京傳の手品があつた。踏襲を裏切る嶄新があつた。その手品の手際よりも、手品の性質が　京傳その人の藝を離れて黄表紙の特質を暗示するやうにも思はれる。

二

「嗚呼奇々羅金鷄」には次のやうな叙がある。

何方か鬼の宿と定めん、假宅も己が住家に立歸る。頃しも例の書肆(はんもと)が、戯作の催促はや三度目、ちよつと捻た床花は、わづかに二部の青表紙、其初文にじり書、手の無い所は京傳が、名代新造の未手いらず。趣向にとりし客人は、今を盛の風流士(たはれを)にて、廓に奇々羅金鷄鳥、模様に縫ひしきぬ〴〵に、いつ來なんすの艶言は、またの御げんをきめ頭巾か

すでにこれにも見えてゐるやうに、この黄表紙の主人公は奇々羅金鷄である。彼は狂歌師として、行脚に上つた。その途中の出來事が題材となつたのである。

ものゝ順序として、梗概をしるさねばならない。しかし、「福種笑門松」との比較のためには、繪組を伴つて、說明することが必要であつた。

第一圖、金鷄は案に凭つて、悠然として前辯に對してゐる。彼は上州一宮の人、早く江戸に出でゝ、名ある先生だちに交り、文章を見飽き、今はあぢに捻つて、狂歌師となつた、圖に就いてかういふ說明がある。第二圖、金鷄の行脚姿。彼は狂歌修行のために旅に出たのである。第三圖、金鷄は公卿衆と伍して、狂歌を詠んでゐる。彼は京都に逗留して、京の狂歌師を詠み破つたのである。第四圖、駿府二丁町彩霞樓に於ける金鷄の流連。金鷄はそこの遊女小の原になじみを重ねてゐる。第五圖、同じ廓に於ける金鷄と寺十の一座。寺十といふ富豪が金鷄の高名を慕

つて一座したのである。第六圖、金鷄狂歌千枚書の會場表。彼の高名は二丁町で揮毫責に遭遇したのである。第七圖、同會場內。こゝに金鷄の狂歌の三首が紹介されてゐる。第八圖、行脚姿の金鷄が宿を乞うてゐる。彼は江戸に歸る途中路踏み迷うて、由良の湊に出で、三荘太夫の家に、一夜の宿を賴んだ。娘おさんは、金鷄の風流の姿にめでて、父に隱してゆるさうとする。第九圖、おさん閨のうち。おさん金鷄に惚れて、閨に引込む、三荘太夫が立聽してゐる。第十圖、同じ閨のうち、三荘太夫刀を拔いて金鷄を斬らうとする、おさんは鷄娘の身ぶり。鷄娘のおさんは金鷄にいふ、われこそまことは淀屋辰五郎が所持せし、黄金の鷄の精靈である、汝が女色に溺れて風流を忘るることを惜しみかくは姿を現はしたといふかと思へば、おさんも、三荘太夫も消えうせて、黄金の鷄のみが殘つてゐる。第十一圖、金鷄は黄金の鷄を飾つた床脇に、おさまりかへつてゐる。

三

京傳が趣向として、三荘太夫の世界に結びつけたのは、金鷄の名をかゝりとして、しば〳〵歌舞伎淨瑠璃にくりかへされる三荘太夫の娘おさんの鷄娘、すなはち、父の非道が禍して、おさんは鷄のやうに、羽ばたきをする、ときをつくると云はれてゐる事を利用した爲めである。それを又淀屋の寶物の金鷄に托したのであつた。京傳はその趣向を明にすべく、第十一圖の金鷄をして、おれが名が金鷄だから、そこで作者が淀屋の寶物に、三荘太夫とおめにかけたなどいはせてゐる。そして、外題の角書に、淀屋寶物東都見物と据ゑたのである。

四

角書の淀屋名物はそれでよいとしても、東都見物は、一應の說明を要するやうである。考ふべきは、實在の人物としての金鷄である。彼はどんな素性の者であつたか。淸水濱臣撰の墓碑文は傳へて正しきものがあらう。その略にいふ。

彼、氏は平、名は秀龍、字は道雲、金鷄と號した。世々上毛七日市の藩に仕へ、醫を以て聞えてゐた。しかし、彼は若い時から風流に心を寄せ、殊に狂歌を好んでゐた。行脚の志深く、つひに三十六歲にして致仕した。京に月を重ね、三河に年を經て、さて江戶に寓した。はじめは市中に住んだが、後橋場の里に風雅の居を營んだ。文化六年正月二十一日四十三歲で歿した。上毛高尾村の長學寺に葬つた。醫道の著書に金鷄醫談がある。狂歌に關する書は十種に及んでゐる。

これによれば、「嗚呼奇々羅金鷄」の中の京都逗留も、あとなき事ではなかつた。して見れば、二丁町の小の原となじみの話も事實であつたらう。尤も、小の原事件は、寬政二年の黃表紙、時鳥館主人の「呼繼金成植」にも見えてゐる。この書は一名を「駿河町二丁目金鷄名殘」といつた。これには序として、京傳の唄が載つてゐる。

金鷄は度々一宮から江戶へ出たやうである。彼は京に上るの前も江戶にゐたが、京から下つてからも江戶に滯留してゐた。しかし、また、永住の意は決してゐなかつたらう。そこで京傳は、角書に東都見物としるしたのであらう。もし、永住ときめた後なら、とてもそれで滿足する彼ではない。おそらく、彼は東都名物と書くことを強要し

たらう。それほど彼は賣名に焦慮してゐた。

金鶏の號がすでに、賣名の徒道雲を揶揄して、これを命じ、道雲はその意を解しないで、誇りかに、自分に附したのでなかつたらうか。彼が祭平秩東作文の一節にいふ。

不佞少年のころ、江城に遊學して、業を牛門の巴人先生に受く。東作子もまた先生に隨つて遊ぶ、一日講説のむしろにして、東作子予をかへり見ていはく、足下の郷上毛に三山あり、一を白雲といひ、一を金洞といひ、一を金鶏といふ、しかるに白雲金洞は人のよくしる所にして、金鶏の一山は、世人これを知らず、足下ために金鶏をもつて號とすべし。しからば則ち足下の學業大成の日にあつては、金鶏山また白雲金洞と肩をならべんは、おもしろきためしなるべきなど狂じければ、先生もげにと笑ひしより、社友みな是に同じて、終に予をして金鶏と呼り。

とはいふものゝ、これは鑿解に過ぎはせぬかのおそれがある別に、彼が自負と賣名のあとを、彼の著、「金鶏醫談」から引くことにする。

我州近日多出名士、蓋古來所無也、兼山山氏荻原藤丘之於經學、藤子虎之於文辭、西野河翁菅氏伯美之於詩、九峰山人河孔陽無幻道士之於書、歙浦子良瀛州和尚之於佛、儘田重明石井宗澄之於和歌、樋口生之於擊劍、生方生之於俳歌、町田翁梶山翁茂木氏之於好事、皆其傑然爲者也、聲名藉甚海內無不知焉、獨以醫見知者誰、金鶏一顚生而已、甚哉爲仁者之少也。

これとてもまともから解すれば、必ずしも賣名の實を示すものでなからう。しかし、彼の戯文集「燭夜文庫」の著

に至つては、彼もまたいひとく術があるまいと思はれる。朱樂漢江、平秩東作、唐衣橘洲、四方眞顏、山東京傳、蜀山人などの當時の歷々の序跋を附して、出したこの集は、決して世の鑒を期するに足りなかつた。さすがは橘洲である、彼は序文に於いて、褒めるもつらく、貶すも惡いその瀨戶際を、上手に逃げてゐた。さうして、幾分彼を庇護してゐた。

金鷄は天下の人を醫するの志がある、しかし、また文雅の癖があつて、歌文を好んでゐる。たゞ巧拙に拘はらず、また多く滑稽を雜へてゐる。その歌も文も意を用ゐないが、おのづから豪放見るに足るものがある、世の彫蟲する者と逕庭がある。この篇の如きは金鷄の本色でない。もし金鷄の金鷄たるところを見たいものは、彼の醫術を觀るべきである。

これが橘洲のいふところの大體である。

五

さういふ金鷄を、京傳がどうして麗々しく提燈を持ち、お太鼓をたゝいたのであらうか。くはしい消息は勿論知るよしもない。金鷄に贈山東京傳文がある。禮讃のかぎりを盡してゐる。彼は銅脉、也有、白墮落先生、風來山人、蜀山人等の狂詩狂文、俳文を擧げたあと、戲作者に就いていふ。

その世戲作者をもつて鳴るものは、喜三二萬象全交春町がともがらともによくなる、今や山東子の世に鳴る、實になりものゝ一枚看板にして、白笑が上に出る事しんぬまさに三千丈、嗚呼それなりものゝ親玉なるかな、な

るは瀧の水、なるはたきのみづ、絕へずとふたり、たへずなつたりなつたりなつたりと頓首再拜。

まさかに、京傳ほどの者が、この辭に酬いるために、あの黃表紙を作らう筈もない。この文は例の「燭夜文庫」に收められてゐるが、その成るの日が「嗚呼奇々羅金鷄」といづれが速いか遲いかも知られない。想像は金鷄が辭をひくうし、禮を厚うして、京傳に自家の宣傳を賴んだことにまで及ぶ。京傳はさも廣告の文でも書くやうに、やすやすとひき受けたことにまで及ぶ。隨分その位のことをしかねない京傳である、その時、金鷄は、板元蔦重に入銀をしたか、しないか、したならどれほどの額であらう。そんな事は、今日から知られやう筈はない。知られるのは、たゞこの黃表紙が散々の不評判でをはつたことである。それが江戶で知れ渡つた人でもあるなら、別であるが、奇々羅金鷄の名に、どれほどの魅力があらう。金鷄が當時賣れッ子の京傳の黃表紙を利用して、自分のために圖るとすれば、江戶の讀者には、また讀者としての選擇權を有してゐる。流行の與奪は一にその權によつて決せられてゐた。

六

流行の榮譽を與へられない黃表紙の板木は、馬棟の呵責に逢ふことが少いだけに、線も點も崩れてはゐない。蔦重に對する義理合上、いづれ「嗚呼奇々羅金鷄」の出板に對して、蔦重に難色があつたと思はれるだけに、京傳は何とかその板木に就いて考へなければならなかつたことが考へられる。京傳は、その本文丈を削つて、歌麿の繪を殘し、新に本文を書きそへるの案を充てた。彼はこれを以て死中活を得るの妙案と思つたらう。燒直し、樂直しは

世上いくらもある。二番煎じ三番煎じも數多い。しかし、かういふ燒直し、二番煎じはどこにある。何だ去年の板の二度の勤かと、馬鹿にしてかゝる讀者がゐたら、まあ本文を讀んで御覽じ、舞臺は同じでも、役者もかはれば、芝居もかはつてゐますとやり返すつもりであらう。そして、その讀者になる程な、これは面白いと手を拍たせる仕組であつたらう。さうするためには、題を改めても、新板らしくせぬがよい。去年の板木の廢物利用であることを露はにするがよい。中の人物の金鷄なども、そのまゝに羽織の紋所に金の字をつけておくがよい。繪の中に書き込んだ言葉も殘しておくのが、却つて面白からう。慾せきのところでない限り繪には手を入れまい、との方針から、少しばかり物を消したり、人を消したのは、わづかに二圖に過ぎなかつた。

さうして出來た「福種笑門松」には、序に於いて、事の始終を明にしるしてゐる。

夫種あり、人の心の種をまきては言の葉草となり、櫻木の種をうえては、よし野を花の山ともなす、さりや化之介も種のなきしなだまは遣はれぬとこそいへり。物として然らざるといふことなし。今や何某笑ひの實をとらん事を思ふ是にも咄のたねなくてはと、その種を乞うて、二冊のうちにまきつくし、とんに題して、笑ふ門なる福の種といふ

山東京傳述

七

「嗚呼奇々羅金鷄」には、とにかく主人公金鷄があるだけに一篇を貫く筋を有つてゐた。今度の「福種笑門松」で

は、その筋を捨てたが、また別の筋を立てなかつた。從つて、十一の圖は、何の聯絡もない獨立した十一圖となる。その一圖一圖に、獨立した一笑話一笑話をあてはめたのが京傳の工夫であつた。

金鷄が前篇に對する第一圖には、繪師と題するものが、金鷄の行脚姿の第二圖には、山家と題するものが、當てはめられた。以下同じやうに、第三圖には色紙、第四圖にはすみがね、第五圖には咄、第六圖には鯨、第七圖には子僧、第八圖には旅僧、第九圖には小むすめ、第十圖にはからとし、第十一圖にはたばこと題するものが書きかへられてゐた。

一二の例を擧げる。第一圖の繪師の題下の話、

大名の床の間に鷲をかきたる繪有しを、畫師見て大きに笑ひ、さても下手な繪かな、かんじんの鷲のかたちはひとつもない。我等が家のさぎは、又かふした物ではないと、自慢してゐる所へ、庭の泉水へまことの鷲をりしかば、そばなる男、そんなら、あのやうな鷲でござらうといへば、イヤまだ〱あのやうなものでもないのさ。

第九圖、金鷄が宿を乞う圖にあてた旅僧といふ題の話、

枝折戸の外に、旅僧が立つて、どうぞ一夜の宿をねがひますといへば、内より十六ばかりの娘立出で、ひとり旅はとめられませぬとつこどなくいふ。内の主、そのやうに邪見にいふな、弘法さまだも知れねえ、旅僧これを聞いて、しすましたりと、南無三、露はれたりといへば、主、さても〱もふとい坊主めだ、弘法様の氣になつて、いゝくらゐな事をいふと叱れば、南無三又あらはれたさうな。

この二つの例話ばかりではない、その他のも多くは、當時ありふれた話であつた。京傳は話そのものゝ興を問題にしないのではないにしろ、要はもとの筋を離れて、新に別話をとりいれたことを、問題にしたのであらう。その話の陳腐は深く咎めずに、その工夫の新しいのを誇りにしたのであらう。

しかし、京傳だけあつて、その話を話すところは話してゐる。第十圖、三莊太夫が刀を拔いて金鷄を斬らうとし、おさんが鷄娘の身ぶりで庇ふところに、あてはめた「からとし」と題するものに、それが見られる。

三莊太夫が內に安壽姬、つし王丸今は柴刈り、しほ汲みとなつておはしけるが、習はぬ下職故、人並に出來ねば、太夫大にいかり、正月なれども、からとしをとらせんといふ事を、所の山がつしほくむ蜑、いたはしき事に思ひ、からどしとあれば、定めて何も食はずにゐるであらうとて、皆々餠など燒きて持ちゆきしに、二人ながら何か食つてゐる故、何をくふぞときけば、アイきらずさ。

八

「福種笑門松」の出板事情もさうであるが、この「からとし」の話と、さし繪に於いて、最も明に黄表紙のある種の特質が示されてゐるやうに思はれる。

黄表紙繪趣向推移の一樣式

一

「心學早染草」は「江戸生浮氣樺燒」と倶に山東京傳が黄表紙述作中の雙璧と稱せられる。この作一度世に行はれて以來、その趣向はいく染めかへし、染め直して、模倣ものが相踵いで出た。京傳みづからにしても、「堪忍袋緒〆善玉」を出す際には、さすがに、二番煎じが氣になると見え、本屋に强請せらるる場面までつけ加へて、辯解を盡しながら、なほ早染草後編第三編と銘うつて綴らざるを得なかつた。「早染草」が、さばかりの流行を釀成したのは、その骨子たる心學話、教訓話そのものの流行によるとはいへ、所詮は、人心に於ける善惡二方面を滑稽化したる善玉惡玉の趣向にある。善の文字また惡の文字を、さながらに、目鼻立に擬した小い子供等の活動ぶりのをかしさにある。否、その子供等の裸姿にあつたらう。第二編「人間一生胸算用」の口上にいふ。

東西東西、高うひかへました上ならず、裸にて失禮の段御用捨下されませう。さて去年、私共よりあつまり、不調法なる狂言とりくみ、御覽に入ましたる所、殊の外御評判なし下され大慶仕りましてござります。

この不調法なる裸狂言の繪趣向が殊の外に評判せられた譯であつたらう。何といふはかなごとであらう。けれど、

黄表紙の面目は却つてこゝに存する。

京傳の讀本「優曇華物語」は、その挿繪が喜多武清の目なれぬ唐風なるために散々の不評にをはり、「櫻姫全傳曙草紙」は、歌川豐國の今様ぶりなるために、好評はまた一段を加へ得た。挿繪の價値は、繪を離れて文に專なるべき讀本にして、なほこれ程の重きをなして居る。ましてや黄表紙に於てはいはずとの事であらう。京傳が、これを淨瑠璃に譬ふれば畫工は太夫の如く、作者は三味線彈に似て居るといふのは、決して豐國に對する一片の御世辭でなかつた。江戸の民衆の胸中にわけ入る事深く、また畫工政演として永き經驗を有する以上、おのづからこの言をなすべきであつた。馬琴またよく事を解す。その作「臍沸西遊記」に於ていふ。くさ双紙は繪を君とし文を臣にすと。「心學早染草」が作意より寧ろ繪組に於て、善玉惡玉の裸姿の繪趣向に於て、江戸の人々の賞讃を博し得る、そこにこそ黄表紙の面目は存する。

京傳はこの善玉惡玉の裸姿を、喜三二の作、「天道大福帳」から思ひついた。造物主を意味する天道様を繪に現はすために、丸を描いて日輪に象り、それを首として、また天道をきかすために淨衣を着せたのが、喜三二の工夫であつた。その工夫を蹈襲して、逆に淨衣を剝ぎとり、顏に善また惡の文字を書いたのが京傳の新工夫であつた。大福帳は天明六年の出板である。それが、善玉惡玉物流行最中の寛政六年に再板を出したのは、この繪趣向の繰りかへし、盛りかへしと關係して居なからうか。

作意、繪組のすべてが、燒き直し、染めかへされるのが、黄表紙の常である。「盧生夢魂其前日」の序に於て、古きをたづねて、新しく書きかゆるが、即ち趣向の新しきといふものとことわる京傳は、日輪より出立して、二つに

分裂した善玉惡玉をば、いつまで裸姿の古きにおかせた事であらう。またいかなる衣裳を着せかへ、脫ぎかへさせた事であらう。こゝにその趣向の新しきを討ね、また善玉惡玉の繪組のうつりかはりをあとづけよう。

二

善玉惡玉の裸身に人形遣の衣裳を着せる。すると善玉は、人形遣の佛となり、惡玉は鬼となつて、一切衆生の一心から出る因緣の絲をひく事となる。たとへば口返答する女房の絲をひく鬼はいふ。

　このかゝァは口がゑらいから、唇にも絲をつけておかねばならぬ。

亭主の絲をひく鬼はいふ。

　あんまり小面が憎い山の神だ。さらば手の絲を引て横面を見しらせくりやう。

鬼が手の絲を引くがまゝに、亭主は擂子木をふりあげて、ぶち打擲する。他の場面に一人の按摩が通る。これは佛が絲をひく。繪解の詞にいふ。

　さきの世の因緣により、たとへ盲目に生るゝとも、心さへ正しければ、佛樣が請合、どぶへ落すまい。犬の糞を踏づけさせまいなどと目明とちがひ、殊の外心を付て絲をひき給ふ。

かゝる趣向によつて出來たのが、「煩惱即菩提料理四人詰南片傀儡」である。もとより南京あやつりをきかしたものである。

　この人形遣の衣裳を着せる事は、「廬生夢魂其前日」の夢づかひの衣裳のくりかへしである。この作者も夢の衣裳づけには、大分手こずつたさうですといふ、その衣裳の工夫を蹈襲した。

「南片傀儡」の因緣の絲は過去に繫がり、未來に繫がる。その傀儡の絲をたちきつて、たゞ三世因果の道理をしめし、彼幕無の戲場の如く過去未來現在、即ちこれのべつゞけの狂言と見るところに、「忠臣藏前世幕無」の作意がある。忠臣藏中の人物の前生を示して、奇拔をきはめて居る。討入の義士は前生、夜商人、甘酒を賣つた人はあまとよびかけ、細川うんどんを商ひし人はかはと答へるの類である。しかし善玉惡玉の本系の外である。

三

善玉と惡玉とは、また衣裳を脫ぎすてゝ裸形となる。文字を目鼻とせずに、頭の上に、丸の中に、酒と書き、餅と書いたのを戴く。餅の神が善玉の變身であり、酒の神が惡玉の變身である。酒の神もはじめのほどは、惡うはない。まづ一杯二杯の酒を飲む間は、酒の神は、家に塵埃となつてちらばつて居る愁を玉箒で掃き清めてくれる。結ばれて居る氣の紐を解いて吳れる。けれど、その杯を重ぬるに從つて、段々にわるさをする。はては、人の心の錠をはづして、仁義禮智信の寶をも奪ひとる。

酒飲みが一合から三合、さては一升、二升とあとをひく樣を繪に現はす京傳の巧みさは、裸形の酒の神の、頭の酒の文字に代へるに一合、三合、五合、一升、二升を以てした。それ等が順に手をひき合つて、一列をなす。さあさあ、皆の衆、手をひきやつて、あとをひきやれとかけ聲をする。また一人の酒の神は、拍子木をうつ。それをきつかけに廻道具で家を廻して見せるためである。また一人は眼のさきへ蠟燭をつけて、扇をあふぐ。眼をちらちらさせる爲である。二人の酒の神が駕籠を舁いでゆく。劒菱と鰹のさしみを迎へにゆくためである。「酒神餅神鬼殺心角樽」

のをかしさは大方かうである。

四

餅と酒との對立にまで變化し來つた趣向は、またもとの善と惡との對立にかへる。けれど裸姿でない。また單なる二人でなかつた。對立は頭だけである。一身にして善惡の兩頭を具する畸形である。京傳はこの作に題していふ。

「兩頭筆善悪日記」と。

一莖に二つなれる桃の實の、一は甘く、一は辛きを食つて產める子は、世にも珍しき兩頭である。一の首は惡相にして、芝居の惡方そつくり、一は善相にして、實方さながら。惡は酒を嗜み、善は餅を好む。さて、この者の心に惡念起る時は、善の首は睡り、心に善念起る時は、惡の首睡る。この兩念互に爭うてやむ時がない。つひには二の首は不和となり、一が飯を食はうとすれば、一人は髮を結ばうとする。一人が寒いというて、袷を着ようとすれば、一人は暑いというて片肩を脫ぐ有樣。ところがある夜の事、二つ頭が二人前の夢を見た。その夢の中に、地藏菩薩は善の首を極樂につれゆかうと手をひき、鬼は惡の首を地獄につれゆかうと手をとる。つひに地藏と鬼と奪合ひながら、地獄極樂の境にまで來る。閻魔王來つて、この舌を拔かうとするが、何分一身の事とて詮方なく、かりに娑婆に歸る事を許す。惡の首は、この夢から一念發起して、鎭鬼道人の敎をうける。道人は小槌を以て惡の首をうつ。いつかその首はしなびおちて、善の首は益々誠の道に入る。

京傳はその序に於ていふ。一身にして二心ある人、若これを繪にうつさば、兩頭雙首の禽獸にひとしく見にくき

形容ならんと。けれどその醜態を示す事によつて、教訓めかし、心學めかすのは、彼に於ては、畢竟附燒刃に過ぎなかつた。彼は、一身にして兩頭の相爭ふ姿のをかしさを描けばよかつた。要は綺組の面白さにある。こゝにさう斷言し得る理由は、「善惡日記」をとりて彼の十二年前の作「一對分身扮接銀煙管」と比較の上である。

五

「扮接銀煙管」の畸形兒は男女の兩頭である。名を小野篁歌字盡から案じ出して娚之介とよぶ。獵師の妻が、みる目かぐ鼻を呑むと夢みて産んだものである。これが後に、半夏にうまれたからとて、男を半兵衞、女をお夏と改名する。江戸へ來て、男は聲色づかひ、女は長唄の藝者となつて暮して居る程に、半兵衞にはお千代といふ女が出來、お夏には清十郎といふ男が出來る。二つの首は相談づくにて、一夜がはりにおのが戀人に遇ふ事にきめる。けれど、半兵衞が我儘で、自分一人逢瀨を樂しむ事からお夏の腹立となり、喧嘩となり、つひに心がわかれわかれになり、乘合舟の氣取にて不自由な身となる。かくて二つの首は、いつそ死んで未來は閻魔王にお願ひして二つの體にならうと、お千代、清十郎共々相談して、體は三人、首は四つの道行となる。半兵衞の肩にはもとより毛氈がかけられて居る。いざ心中といふ折から、長崎下りの和蘭流の首つぎの名人が通りかゝり、その死をとゞめて、療治をする。半兵衞の首を切つて死人の體につぐのであつた。こゝに、半兵衞とお千代、清十郎とお夏の二組の夫婦が出來上つた。

この趣向は、男女と善惡の區別こそあれ、綺の上では殆ど同じものである。善惡日記に於て、閻魔王が、兩頭の

者を見た時の詞書に、みる目かぐ鼻が見たなら養子に欲しいといふであらうとある。そのみる目かぐ鼻を、夢に見て娚之介を生むとある。しからばその思ひつきは、すでに十二年前に存して居た。またその繪組を見ようか。お千代が半兵衛の手をひき、淸十郎がお夏の手をひく場面は、あの地藏と鬼とのそれである。二人のつかみ合ひの喧嘩は、さながら同じ様に、また不和となつた二人の、一人は飯を食はうとし、一人は手拭を持つて居る形もそのまゝである。

して見れば、京傳は、善玉悪玉の趣向をいくくりかへし、いく染め直ししたその果に、この舊作をとり出して、かつては、お千代半兵衛、お夏淸十郎の浮氣話なるが故に喝采を得た趣向を、今流行の心學話に染めかへたものであつた。十二年以前に自ら作り、自ら畫いた舊作の繪組のいくつかを、そのまゝに、重政の手に渡したのであらう。いかに、善玉悪玉の趣向が、流行した事であらう。流行の前には何事をもなすをいとはぬ、そこに黄表紙の面目が存する。

六

銀煙管の娚之介は小野篁歌字盡から案じ出したといふのを知つて、さて式亭三馬の作「一人娘二人婿娚訓歌字盡」の題を見る時には、誰も二者の間に何等かの關係の存在する事を考へるであらう。

お千代半兵衛、お夏淸十郎は、これにあつては、おそめ久松であり、お梅久米之助であつた。おそめは伊勢の者、お梅は日向の者、同時刻に死して冥土にゆく。お梅はまだ命數盡きぬ事とて、娑婆に歸される筈なのを、早くも親

達が火葬にしたために、おそめの死體を借りて蘇生する。久松の喜びは大方でない。しかし姿こそおそめなれ、魂魄はお梅なるために久米之介を慕うてやまぬ。漸く事情がわかつて飛脚を日向に立てる。久米之介も來る。お梅の親夫婦も來る。その歸るさに、親同志、戀人同志の體爭ひ。つひに日向者が、悄然と去つてゆく時、お梅の一念は、その首に凝りかたまつて、自然と伸び出して久米之介と共にゆく。

日向に歸つた人々は、どうがなして、お梅の體をひきとらう、それには、病氣にして伊勢人を困らせるがよいと考へて、無闇に飲み食ひをさせる。けれどその考はあさまであつた。伊勢の體も苦しめば、日向の首も惱み出した。伊勢は伊勢でなほ焦つてその首ひきとりの工夫をする。氣轉の醫者竹齋といふがある。それの工夫によつて、鐵分の藥を日向に送つて、口に啣へさせる。さうして、磁石を尻におしあてる。日向の首がするすると伊勢の胴をさまつた。日向からは、とり戻しの訴を殿樣に聞えあげる。その殿樣のお判きは斯うであつた。油屋のお染が魂は茶屋のお梅なり、又茶屋のお梅の體は油屋のお染なり。お染はお梅に體をかし、お梅はお染に魂をかしたれば、双方かし借の出入なし。油屋夫婦、茶屋夫婦しめて四人、いづれも親にまぎれなく、久松も夫なり、久米之介も夫なり、以來は一ケ月を二つに割り、上十五日は油屋分、下十五日は茶屋夫婦を親となし、久米之介を夫となし、双方入れかはりの輪番持。當分に中よくしたらば、家内安全、まめ息才、お商も御繁昌と殿樣みづから仰わたさるゝぞ有難き。

何といふ馬鹿馬鹿しさであらう。これ、三馬が、教訓物に反抗して、その序に貞女兩夫に見えず、忠臣永々の深編笠、倶に一對の馬鹿律義にして、獨娘に婿八人の譬を知らぬ昔々といひ、また敵討物を排斥して江戸氣の皆樣、

敵討のかたみをやめて、喜三二春町傳來の青本にくだけ給へと一部の大意に斷つたその筋立であつたらう。
お染のお梅は、久米之介と心中しようとする。久松もあとおひかける。おそめとお梅が二役つとめた同行三人の道行。道傍の石の閻魔王の告げにて、女のすべてを半分とし、その半身を左甚五郎に誂へ、また竹齋の妙藥にて繼目を補はせる事となり、お梅とお染と各一人前の體となつて、あらためての婚禮に、めでたく、事はをはる。
これは「銀煙管」の燒直しでなくて何であらう。その「四人道行戀淵もやいの首丈」の淨瑠璃は、これには、「古小袖比翼三紋」とかはつたに過ぎない。磁石の首なほしは京傳作「狂言末廣榮」の模倣でなくて何であらう。首の繪組の幾枚かは、殆どそのまゝに借り來つたものである。然も三馬は狡猾である。明の李卓吾が山中一夕話を見るに桐城女の條下に至り、ひとつの趣向をたくむに、我邦梅塢散人が婦人やしなひ草に見えし伊勢や日向の物語に彷彿たり。和漢一變の奇々怪々、おもしろく覺ゆるままに、是を淨瑠璃のお染久松、お梅久米之介が事蹟にひるがへし、又八文字屋の竹齋物語にまじへて例の草紙につゞる云々と陽にことわりながら、つひに一言半句の末廣榮、また銀煙管に及ぶものがない。何等の狡猾であらう。
しかし、善玉惡玉の趣向の變化をあとづける時、この作はまた重要なる位置を占める。いふまでもなく、それは繪工夫を主としての言である。今、これ等の關係を圖を以て示すと斯うである。

a　新建立忠臣蔵　天道大福帳　天明六年

b　大極上請合賣　心學早染草　寛政二年

c　煩惱即席菩提料理　四人詰南片傀儡　寛政五年

d　酒神餅[illegible]　鬼殺心角樽　寛政八年

e　一體分身　扮接銀煙管　天明八年

f　兩頭筆善惡日記　寛政十一年

g　一人娘二人婿　[illegible]訓歌字盡　文化二年

一事の加ふべきものがある。三馬はこれより先、享和二年に「自先達御吹聴綿温石奇效報條」を作した。直にe、fに踵ぐものである。要は綿温石の效能から一體八身の赤子の誕生の趣向である。京傳の模倣作である。しかも、最後に

於ける八身の分離の如き、勿論、京傳の繪工夫を襲ふに過ぎなかつた。

七

寛政八年、京傳は「人心鏡寫繪」を出した。これも例の心學物に屬するもの。彼自ら解していふ。或は照り、或は曇り、鬼も佛もうつせばうつる、胸の鏡の善惡邪正を竹の筒から振り出す、譬喩方便の靈液より思ひついたるのべ鏡、出して寫して讀本より手がるくわかる稗史となし、人心鏡寫繪と標題する事しかりと。この作の趣向は、其人の言行と、その心とに表裏ある事を示すにある。虱が鳴いたら、外聞の惡い事であらうが、鳴かねばこそ事は濟む。人の心もその樣が胸の鏡にうつるものなら其體はあさましからうが凡夫の眼には見えないので事は濟む。しかし神佛や、天道のお目からは善惡邪正、此の繪のやうにあきらかに見えるといふ、その繪とは、たとへば、金を借りる人の胸のところに鏡を示す小判形の輪の中に、地藏の姿が描かれ、返しに來たその人のには閻魔が描かれ、貸主のには、小判の母が小判の子を産んだ樣が描かれ、茶を運ぶ下女のには、船を漕いで居る姿が描かれて居るが如きものである。善玉惡玉の對立は、今や人と心との對立となり、その趣向は一傍系をなす。さるにても鏡寫繪の末葉に於ける繪組こそおもしろい。机の前に坐して扇パチパチと鳴らすは京傳。その鏡には、煙草入賣る店がうつる。その繪解の詞にいふ。

京傳が胸の鏡には煙草入店の體相がうつり、當年は別して新物品々ござりますから、何卒相變らずお求め下されませうといふ口上をのべ、どうぞ煙草入を一つも餘計賣つて親兄弟を心よくはごくみたいといふ手前勝手な

姿がうつる。

京傳の黄表紙の例として、卷尾に附する廣告が巧に利用されて居る。けれど、京傳のまことの鏡にうつるものは、それではなからう。かゝる繪組を案出し得たといふ自慢の鼻うごめかす姿であらう。ましてや、明德の鏡、方便の砥の粉、正直の水銀をもつて、胸の鏡を磨き、惡しき姿をうつすべからずなんどの戒の文句は、たゞ鏡の外なるあだ文句であらう。傍系に屬する鏡の影物の一類の如き、皆が皆まで繪の趣向もて繋ぎ合つて居る事はいふまでもない。

八

人と胸との對立は、やがて虛と實との對立となる。寛政九年の作、「虛生實草紙」がそれである。男が、女の酌でいゝ氣持になつて居るその後には、襷掛の女の一人は劒をふりかざし、一人は斧をふりかざして居る。これは女は男の命をたつ斧なり、身をきる劒なりといふ意を繪に現はしたものである。けれど、「實草紙」に於ては、また因緣因果の姿をも繪に現はす。定九郎には、天道が雲の上から禍の玉をつるし下げ、勘平には五十兩の福の玉をつるし下げる。しかも、勘平が切腹せねばならぬ理由を示すために、佛が、因緣の絲車をめぐらして居る如きは其一例である。互に見かはす若き男と女との足もとに纒る赤き紐を月下老人の結び合はして居るが如きは、其一例である。

かゝる善惡表裏の姿、また之れ等のよつて來る譯の姿はまた新しき工夫を得れば、影繪にうつる姿と變る。翌十年の作「見訓影繪喩」にうつし出されたものが、それである。

さきに、斧や劍をふりあげた女姿を見た男女歡會は、影繪としては、女の骸骨姿がうつり、胸の鏡に地藏と閻魔をうつした借りる人と返す人とは影繪に於ても同じ姿がうつる。定九郎の影繪には、燈と蜻蛉とがうつる。飛んで火に入る蟲の心である。みえ坊の藝子狂ひの影繪には、無間の鐘うつ姿がうつる。

京傳は、この繪趣向をば、いかに仰々しく、心學めかし、古典めかした事であらう。いはく、天道の明なる燈をもつて照しうつすときんば、人間萬事の異形をあらはすべし、豈怖れつゝしまざらんやと。またいはく、莊子齊物論に罔兩と景との問答を載たり。罔兩は影のうちにまたかげの如く薄きものあるをいふ。今予があらはす影繪の喩へも是に相似たり。世の人善惡表裏のかげひなたある事を示めす而已と。

影繪喩の影繪は、各右の上の方に一寸餘と二寸足らずの欄內に描かれてある。この繪組をそのまゝに踏襲したのが、其翌年の作「京傳主十六利鑑」である。これは欄內に、阿羅漢の像を描き、これを人間の世のいとなみに翻したものである。しかも、尊者の文字を代へて損者とした。損は損得の損ですべて人は一心の持ち様にて一生のうちには大なる損のある事十六をかき集めて、それでは損者、これでは損者と耳ぢかく子供衆にもわかる樣に、たとへをとりて、その理を知らしむるなりと作者は說く。

欄內には爪に火を燃して居る阿羅漢が居る。慾連損者である。欄外には、藏前に老人が番をして居る。その前には、女房、息子、娘、番頭が居ならぶ。皆一樣に異樣な盜人頭巾を戴いて居る。慾深くして今もなほ金の番をして居る老人の眼には、これ等はすべて盜人とのみうつるのであつた。欄內には酒の通を手にして眺め居る阿羅漢がある。借越損者といふ。欄外には淵の中に身を沈めて居る夫婦が居る。淵は借金の淵である。借り越し者のうき目を

示すのであつた。その他、悋氣損者、邪見損者、遊者損者、短氣者損者の類これである。

かゝる繪趣向は享和三年の「人相手紋裡家算見通坐敷」に於て、またくり返された。たとへば、欄内の掌に筋めかしてムり升スと書いて、狂言の筋と題し、欄外に芝居小屋の光景を描くが如きがこれである。馬琴の作「世諺口紺屋雛形」も同じ趣向に屬する。衣裳雛形をかき、それに無地情なし木綿、紋所ひつこひの抱のぼりと題した欄内に對して、藝子に抱きついて居る野暮客を描くの類である。しかし、今はこの類の趣向に關するものを見すてゝ、また鏡の影物なる一類にかへる。

九

「假名手本胸之鏡」は「十六利鑑」と共に十一年の作。この繪は丸形であつた。その鏡を示す丸の中に描かれたのが假名手本忠臣藏の狂言の姿である。序にいふ。この草紙は狂言を鏡の表とし、その道理を鏡の裏とし、それを繪にうつし、表裏合せて、其本意を知らしむと。かういふ作意はいくくりかへしされた事であらう。定九郎の如きは、何かといへば利用されたものである。して見れば、忠臣藏を通じて、丸形の鏡の中にをさめた點に於て、繪組の新しさを賞すべきであらうか。

かゝる鏡の工夫は、一轉して、目鏡の工夫となる。「假名錢神問答」の放蕩息子目前屋理兵衛は遊錢窟に於て、古錢人共にあひ、錢の遠目鏡をかりて、錢の德の貴さを知る。目鏡にうつる所は、すべて夢の圖の樣に、理兵衛の胸から廣がる。否胸から廣がつたのでなくて、胸にをさまる事、會得した事を示したものであらう。そこに描かれた

旅人は錢を穿いて行き、初鰹も、飛行船の樣に、錢の羽根あつて飛ぶ。短氣な人も金で面を張られて、腹を立つなく、鬼の樣な姑も、持參金を鼻にかけて居る嫁にはお給仕をするのであつた。

理兵衛は、「心學早染草」の理太郎と同じ者であらう。理兵衛が金錢の德を悟つた後の藏の前の圖には、小判が小判を產んで產湯をつかはして居るところが描かれて居る。圖は「人心鏡寫鏡」の金貸人の胸の鏡にうつれるものを廓大したに過ぎなかつた。錢の鏡にうつる本藏の貯財の姿は、「假名手本胸之鏡」に於ける利慾の鏡にうつる姿そのまゝであつた。

何といふ燒直し染めかへしの趣向であらう。

錢神問答出板の後三年、「裡家算見通座敷」出板の同年、享和三年には「分解道胸中双六」の作がある。その發端にいふ、顏かたちは同じ樣に見ゆれども、高きあり、賤しきあり、智慧あるあり、愚なるあり、よき人あり、惡しき人あり、すべてこれ同じからず、もし人の心に道中記あらばはづかしき事ならずやと。それならば、この作、何故に題して分解道胸中道または胸中案內といはないのであらう。「貧福兩道道中之記」または「人間一代悟道迷所獨案內」と同じ樣な命名をとらなかつたらう。しかもなほ双六といふ理は如何。卷末に附した賣込土間双六また人間萬事道中双六の如きは、ほんのいひ譯に過ぎない。作者は、明に其理由を說いて居る。此双紙の畫は胸の鏡のやき直しにて、双六煎餅が腹につかへ、双六齒磨の袋を腹掛にした樣な名なれど、たゞこじつけの名所舊蹟が此双六の御馳走さ。

名所舊蹟のこじつけとは、小田原をもぢつたむだ腹のくだりに、

むだ腹をたてるはさりとはういらう名物なり。猫にひかれて鰹のたゝきのめしあつくなつて顏は梅づけも賣るなり云々

といふたぐひである。繪の燒き直しとは胸の鏡の鏡に代へるに、双六繪の一つ一つを以てするのである。鰹をくへて逃げる猫おひかける男の胸から腰へかけて、例のういらうの店前を見せた小田原のむだ腹の圖がある。この繪の趣向は八年目にして、またくりかへされたのである。しかも、なほ人々は、この趣向をふる臭しといはで、新しと喜び、珍しと興がつた事であらう。黄表紙なるもの大方斯くの如きである。「堪忍袋緒〆善玉」の發端に於て、京傳が早染草の三編を出す事の不可なる由をいふ時、蔦屋の主人がこれを駁した言葉こそ、きくべきものであつた。

先生未天地の大いなる由を知らず、ゆく川の流はたえずして、しかも昨日の見物は、今日の見物に非ず、高麗屋が幡隨長兵衛、訥子が賴豪、半四郎が七變化、政太夫が鬼一法眼、幾度しても大當せしなり、なんぞ不可なりとせんや。

かゝる理由のもとにくりかへし、染めかへし、燒直さるゝ黄表紙の一端、喜三二の「天道大福帳」から出でゝ、つひに三馬の「鸚訓歌字盡」に終る一類、また「心學早染草」から分岐して、「人心鏡寫繪」から、「分解道胸中双六」に至る間の鏡の趣向の一類を繫ぎ來れば、まづ斯うもあらうか。もし更にまた、鏡の趣向、影の趣向を逐うて、一轉化したもの、或は京傳の作の埒の外に出でゝ他の作者が案じたるもの、たとへば、馬琴の「陰兪陽珍紋圖彙」の類の系統を討ねるには、あまりに煩しきに過ぎよう。ましてや、一々に繪を伴はずして、繪の趣向を說くの煩しきに堪へ得ないであらう。

（大正十四年四月「版畫禮讚」）

山東京傳と黄表紙

一

「日本文學聯講」の既刊の分が、どれも國文學ラヂオ講座の講演を基礎としてゐたのに、今度の分だけが、ラヂオと無關係だといふことは、わたくしの題目にとつて甚だ都合がよかつた。黄表紙といふ以上、作者が京傳であらうが、春町であらうが、また一九、三馬であらうが、その作の全内容を耳からのみで傳へられる性質ではない。さし繪があるのが江戸時代の小說の刊本の常であるにせよ、黄表紙となると、どの頁にも繪があるといふよりは、文章は繪解だといつてよい程に、文章とさし繪が主從關係を顚倒してゐる變態な、別格な代物である。されば、黄表紙よりも、もつと、繪と繪との關係が緊密な聯絡を保つてゐる合巻、すなはち黄表紙の後身、例せば種彦の「偐紫田舍源氏」のやうなものになると、しばしば說明附きの活動寫眞にさへ喩へられてゐる。この比喩が甚だ巧だ、となると黄表紙はさしむき幻燈だ。さういふ性質を所有する黄表紙であるから、その說明に當つては、ラヂオより幻燈の助を藉りることが、どうしても恰好だと思はれる。

現に江戸時代にも、黄表紙全盛のたゞ中にも、そこに着眼して、赤本、黑本、靑本の變遷から黄表紙の推移に就

いて説明した岸田杜芳の繪草紙年代記があつた。天明三年の出版である。

しかし、この書は單なる繪草紙――赤本、黒本、青本、黄表紙、合卷の總稱、一に草雙紙ともいふ、尤も草雙紙に廣狹の二義がある、これは廣義の場合。狹義の場合は合卷をさしていふ――の歴史の書でない。そのものがすでに一編の黄表紙、小野小町と四位少將の戀物語を主題とした戯作であるが、その筋のはじめを赤本の畫風と、赤本作者の口調で書き起し、漸次黒本から青本へと筆をすゝめ、更に黄表紙の畫風文調に進み、最後をその頃の流行畫家政演の畫と、杜芳みづからの地の筆癖でをさめる。丁度、幻燈式説明で繪草紙の變遷を具體的に示したわけである。その政演といふのが、實は京傳の畫名であつた。京傳はまづ黄表紙の畫家として世に立ち、後に黄表紙の作をなすやうになつても、永く畫家と作者とを並行させてゐたのである。

「繪草紙年代記」は趣向としては、なかなかに面白い。たゞ難は繪草紙の變遷を說いて未だ精しからぬ點にある。そこで、増補やら、模倣やらを一纏めにした式亭三馬の「又焼直鉢冠姫稗史億說年代記」が出版された。享和二年のことである。この題材は角書にすでに明であるやうに、鉢冠姫の物がたりである。それが杜芳の原作と違ふだけで、全體の考案は全く同じである。尤も二著の間に繁簡の差のあることはいふまでもない。

これ等の書にいふところは、今日から見ればこそ、幾らかの誤謬も指摘されるが、兩著者の態度はかなりの眞劍味を有つてゐた。それならば、何故にその說明にこの戯作の體裁を藉りたのであらうか、あの趣向の上に立てたのであらうか。具體的說明といはゞいふものゝ、或はこの趣向のために、體裁のために、どうやら說明が散漫になりはしないか。それどころか、それ等の日の黄表紙の讀者だちは、あの戯作の蔭になつてゐる兩著者の研究發表を氣

づかずにしまはなかつたか。今ならば、眞正面から繪草紙變遷史とか草雙紙史とか銘うつてかゝらうものをと、いさゝかの疑問が起る。疑問はその頃の悠長な世相、少くとも黄表紙讀者圏に於けるのんきな空氣を承認することから、いつとはなしに解決される。

今日ならば、此の態度がどうの、あの手法がかうのと、歯に衣着せずに價値評價をするであらう黄表紙批評家は、一々役者の評判記に擬うて、位附を定め、その言葉辯で月旦をしてゐた。研究も、穿鑿も遊びの中で發表しようとする悠長な世の相は、この一事からでも推測されよう。

江戸時代の文學は、時に多少の變化はあり、推移はあるにしても、悠長とか、のんきとかゞ中心になつてゐる。この中心點を忘れては、とても理解される筈がない。いかなる種類の作品も、今の世のせゝこましさ、テンポの早さを標準として考察さるべきでない。とりわけ黄表紙の場合がさうである。これこそは悠長、のんきを考察の第一條件とする必要がある。いな、黄表紙こそは、江戸時代の悠長、のんきそのものゝ象徴であり、權化である、と見なければならない。

それならば、黄表紙を貫く悠長の性質、のんきの程度はどんなものであらうか。それを考へるに當つて、極めて便利な參考資料が、近頃の新聞小說のさし繪の中に現はれてゐると、少くともわたくしは注意してゐる。たとへば、谷崎潤一郎氏の「蓼食ふ蟲」に於ける小出楢重氏のさし繪、十一谷義三郎氏の「一時の敗殘者」に於ける木村荘八氏のさし繪、田中貢太郎氏の「旋風時代」に於ける河野通勢氏のさし繪には、從來のものに一寸考へられない特相があるかと思ふ。どこか廣い意味でいふ草雙紙趣味ともいふべきものが漲つてゐる。といつて、泉鏡花氏の「山海評

判記」に於ける小村雪岱氏のさし繪とは勝手が違ふ。雪岱氏のは狹い意味の草雙紙すなはち合卷のさし繪、或はこれと幾分の交渉を有つて、多少の變化がある人情本のさし繪のあるものと見るべきであらうが、楢重、莊八、通勢氏等のは、合卷より溯つた黄表紙の味と見なければならない。まづ一例をいへば、「旋風時代」のさし繪に、一本の樹を描いて、その枝葉を本文の文句のちらし書きで現はしたのもあつた。どうしても末期の黄表紙の繪組を聯想せねばならない。そればかりか、畫家がさし繪の餘白へ、いや、餘白どころか畫を書きつぶすといつてもよい程のところへ、歴々しく小說の原稿の屆き方が遲くつて困ると書き込んだり、かういふ記事では、人物の動きが少くつて、繪が描きづらくつて困ると書き入れたりしてゐる。あの黄表紙の中に、作者と畫家との樂屋ばなしをさらけ出して愛嬌にしてゐるものを、今の洋畫家が立派にやつてゐるのだ。作者と畫家と板元との魂膽ばなしを、そのまゝに作の趣向にまですることを許すのが黄表紙の特徴の一つであるのを、これ等の人々は板元を新聞の編輯局と呼びかへたまゝで、昭和の今日に於いて行つてゐるのだ。何がさうさせるか。さうさせるものが黄表紙の發生と發達の裏に、うしろにあつたものと交渉を有つてゐるか。わたくしは相通ずるものがあると考へてゐる。

これ等の畫家が作者との間に私的交際のあることも、畫家がたゞの畫家でなくして作者氣分を多分に有つてゐる畫家であることも、さうさせたのであらうが、より多くそれ等の作とさし繪が載せられるのが、同じ新聞紙でも夕刊であるといふことに、多大の原因がありはせぬか。夕刊は朝刊に比べると、やゝ悠長味が伏在してゐるやうに思はれる。その悠長味が、この畫家の戲れを許容するのでなからうか。

それにしても、夕刊はつひに新聞である。今朝の朝刊を承け、明日の朝刊を控へ、明日の夕刊にさきだつもので

ある。依然として、今の世の慌しさがあり、スピードがある。畫家がいかに黄表紙氣分を出さうとしても、自らの制限がある。これがせめて、月刊の雜誌であつて、畫家が作物を讀んで、その中からさし繪の構圖を案じ出す餘裕と、組版にいろいろの注文を與へる餘裕とが、時間的にゆるされるとしたならば、決して今のやうに、小說の一欄に一圖のさし繪といつた風な雜風景でをさまるわけでなからう。こちらの隅に見おくる人物を立たせ、中ほどに背景を見せ、あちらの隅に見かへる人物を現はして、その間に活字を組み込むといふほどの工夫を見せるであらう。よしんば、繪の筆つきと、今の活字の字形との間の不調和に難はあるにしても、さうした結果が、はじめて通勢氏等の期待するものに近づかう。そして、いよいよ黄表紙らしくならう。

そこへゆくと、黄表紙時代はのんきだ。明日の編輯もない、印刷もない。黄表紙の出版は毎年の春のはじめだ。出版までに、ほゞ一ヶ年の餘裕がある。畫家と作者との相談はどうにでもなる、印刷の上の工夫はどうにでも附く。しかも、黄表紙の場合では、さし繪の案までが作者によつてなされた。作者は下繪を描く、畫家はたゞそれを淨寫すればよかつた。さうでなくとも、畫家は作者の指定に從つて描いてゆけばよい。たまたま作者の工夫のつかぬところを、その賴みによつて描き足してやればよかつた。この作者が畫家を兼ねるといつてよいほどの條件が、なほ黄表紙の文と繪との關係を複雜にさせ、繪の趣向と作の趣向とを錯綜させた。その錯綜がますます悠長味を發揮して、讀む者、見る者をして、ふんだんに笑を催させたのである。この點はどうしても今の夕刊新聞の小說欄からは受取られる筋合でなかつた。

しかも、それ等の日の黄表紙の讀者は、この作者が來年はどんな趣向を凝すだらう、あの作者がどんな傾向に趨

るだらう、どんな笑を將來するのであらう、と心靜かに一年を待ち構へ、待ち詫びた。どうしても今日からはしかと考へられない程ののどかさであつた。

そののどかさの最も甚しい例を、京傳の黄表紙から拾つてみると、さし當り「飛脚屋忠兵衛假住居梅川奇事中洲話」などが恰好のものであらう。これは中洲の假宅を舞臺にして、荻野八重桐と三浦屋高尾の中洲に縁ある話を、梅川忠兵衛に絢せたのが、筋になつてゐる。ところが本筋に入る前の見開き三丁の繪は、まづ梅川忠兵衛の記憶をよび起すための道具になつてゐる。たとへば、屛風の中には梅川が忠兵衛に寄添つてゐる、屛風の外には八右衛門が忠兵衛の紙入から印判を拔いてゐる、さし繪の書き込みは、すつかり讀者の心持で出來てゐる。「どれ見せな、おつな本だの、此屛風のうちにゐる男は高麗屋に似てゐて忠の字が付てゐるから、大方飛脚屋の忠兵衛さ、こちらの女郎は濱村屋といふもので、梅といふ字が付ているからたしかに梅川さ、早くその次ぎを開けな」とか、「そんなら此敵役はさしづめ中の島の八右衛門でござりやせう。色男の紙入を盜んで、中の印判をせしめ、うまいうまいといふ顏をしておりやす、憎らしいね」と書いてゐる。また書き込みは讀者の階級をほゞ豫定してかゝる。「これ見な、此女郎はいつそ、いやらしくしてゐるわな」「此色男はいつもお口へまゐる小間物屋に似ております」これはお邸の女中方としての言葉である。

京傳はもとより讀者をお邸の女中にのみ制限してゐない。梅川忠兵衛道行のところ（第一圖）の書き込みが、他の讀者階級の豫想を明にする。

どつこい、こゝは梅川と忠兵衛が道行だ、こいつは富本の淨瑠璃で誰も知つてゐるところだ。廿日餘りに四十

兩つかひ果して二分殘る、かれも霞むやはつせ山、とはよく書いた文句さ。この淨瑠璃は豐前がよく語りましたよ。この時分から見ると、高麗屋もめつきり年が寄りました。これさ、もしお孃さん、そんねへに唾を付てお開け遊すと、あとがおつかひ物になりませぬ。一寸およし、およし

讀者の階級はいづれにもせよ、作者は、それ等を作中にとり入れてしまつたのである。丁度その頃見物席をそのまゝに舞臺に延長する芝居があつたのと同じ事である。

それならば、今の新聞小說のさし繪の傾向は、それ等の歌舞伎とある點に於いて一致してゐる新興劇の或舞臺だ。そこには觀客をそのまゝに舞臺の群集と見る場面が、しばしば演ぜられてゐる。

二

これだけの話を前置にすることを必要とする京傳の黃表紙である。黃表紙といへば、どれも同じやうな悠長そのものであるにしても、その中へ入つて見ると悠長の度合の關係から、作風に少からぬ變遷推移が見うけられる。ところで、京傳の黃表紙は黃表紙の歷史の上からは、やゝ悠長味を缺き來つたといふ點に於いて、緊張味を加へ來つたといふ點に於いて、彼みづからの位置を保つと見てよい。黃表紙の洒落が洒落だけで承知が出來ない、何かしら後に或ものを含ませないと、物足らないといふやうな時代になつて來た、そこへ、彼の性癖やら、好尙やらが合體した。いひかへれば洒落の合理化が、彼の內と外とに動いて、彼の黃表紙の特相を確定したと考へてもよいやうである。京傳と黃表紙との關係はといふ題目の下には、まづこゝのところを說明しなければならない。それには、何を

おいても、黄表紙といふものを内容的に決定した「金々先生榮花夢」に就いて、一瞥を拂ふ必要がある。

金平淨瑠璃の筋書めくものやら、お伽ばなしやらの繪解本はかなり早い頃から行はれてゐた。半紙を半分に裁つた大さで、五枚を一冊とする小本が、赤い表紙をかけたので赤本と呼ばれてゐた。それから黑表紙にかはる、黑本と呼ばれた。內容は赤本と大した相異がない。その表紙が萠黄色になつて靑本と呼ばれた享保の時分から、話の筋も大人らしくなり、材料も當世がゝつて來、さし繪もやゝ精緻の筆つきになつて來る。當世の洒落もちよいちよいと書き込みに見えて來た。その當世風がそのまゝの姿となつて出現したのが、あの戀川春町の作「金々先生榮花夢」である。時は安永の四年、表紙の色も萠黄から黄色に轉じて黄表紙と呼ばれる頃であつた。これを手にした人々は、今までの春の忍び足に氣づかずに、突爾として眼前に咲き出でた洒落の花に驚歎したのであらう。もう當世の繪草紙どころか、立派な通人のものと持囃したことであつたらう。おもへば步みの遲い繪草紙の洒落であつた。天和の頃の赤本からやつと安永の黄表紙に到達したのである。そこにものんきさがある。黄表紙になつても、なほ半紙半分ほどの大さである、その紙も依然としてすきかへしの粗末なもの、また冊數を重ねる自由はあるにしても五枚一冊の單位を守つてゐる。いや黄表紙から合卷に移つても、なほ、この約束を守つてゐる。草雙紙の世界といはうか、江戸時代のならはしといはうか、とにかくに、悠長な相が見られる。

「金々先生榮花夢」が當世通人の讀み物、見ものだといふなら、さも洒落の生粹のやうに思はれるが、在りやうはませてはゐるが、子供のあどけなさの脫けきれないといふ程度である。尤も、その點が安永度の黄表紙の生命であつた。

「金々先生榮花夢」上下二冊、十丁のうちに十二圖がをさめられてある。

1、目黑の粟餅屋の前に旅姿の金村屋金兵衛が立つてゐる。金兵衛は江戸で一稼ぎするつもりで田舍から出かけて來たのであつた。2、粟餅屋の店さきで、金兵衛は夢を見てゐる。夢の中に駕籠の迎へをうけてゐる。金兵衛は粟餅の出來る間を一寢入りしたのである。夢の中の迎へとは金持の和泉屋から養子に望まれたのである。3、和泉屋の廣座敷で、金兵衛は親子主從の對面をしてゐる。4、通人姿の金兵衛は酒宴に興じてゐる。金兵衛は今は幇間どもから金々先生ともて囃されるのであつた。5、金兵衛の吉原通ひ。6、金兵衛の吉原に於ける豪遊、節分に豆がはりに金銀をまき散らしてゐる。7、金兵衛の深川通ひ。8、深川の遊女が茶屋の女と話をしてゐる。話は金兵衛を茶にしてゐるのであつた。9、怒る金兵衛を皆々がひきとゞめる。金兵衛の怒りは漸く遊女の仕打を知つたためであつた。10、わび姿の金兵衛が徒歩でする品川通ひ。もう金に窮した金兵衛は、とても四つ手でおさせる力もなくなつたのである。11、金兵衛の勘當、昔の旅姿で泣きながら、和泉屋を去つてゆく。12、以前の粟餅屋の店前で金兵衛は伸をしてゐる。夢から覺めた金兵衛は、人間の榮華が粟餅一炊の夢に過ぎないことを悟つて、すぐに在所に歸る。

この趣向は「枕中記」に見えてゐる邯鄲の夢のはなしによることはいふ迄もない。しかし、春町の據りどころは、「枕中記」でない。「枕中記」を藉りた能の「邯鄲」であつた。3のところには、「邯鄲」の文句を殆どそのまゝに用ゐてもゐる。しかし、春町は別に能の氣分で統一しようとは考へない。現にそこの廣座敷は新しい流行の浮繪で描いてゐる。それがまた歌舞伎の舞臺面を聯想させもする。しかも、そこの給仕の女中の言葉に「今度の若旦那はと

んと雷子が物ぐさといふ恰好だ」とある。いふところは「榮花夢」出版の前々年、市村座上演の「十帖源氏」で、市川雷子の役名物ぐさ太郎をさすのである。かういふ能がゝりと歌舞伎がゝりが、何とはなしに調和するのが、この作の持味だ。いな、能と歌舞伎だけでなく、いろいろの異分子が融合するのが、この作の後しばらくの黄表紙の特徴だ。そのゆとりが見られなくなつたのが、京傳時代の黄表紙の特徴である。京傳時代には大間な往方では承知出來なくなつたのである。

「榮花夢」の繪は春町の自畫であるが、どちらかといへば、省略された筆であるに拘はらず、急所急所は逃がしてゐない。たとへば第三圖の吉原通ひのところにしても、向うの屋根と土手の片端とで、その場所を示した手際を考へるがよい。また、金兵衛の風俗にしろ、その頃の息子風俗の上の部と評價されてゐるものを、巧みにとり入れてゐる。脇差にしても、羽織ばかりの時は落しさしといふ格を守らせてゐる細かさ、また龜屋頭巾を冠らせたのにも、繪の趣向が見られよう。この省略と細緻との關係が、京傳時代の黄表紙の繪には、一寸見られなくなる。相照し合はせてかなりの推移のあとを認めねばならない。

文の說明にしても、さらりとしてゐる、それでも通言や流行唄だけは上手にはめ込んでゐる。それにまた文と繪との關係が、相應の距離を保ちながら、どこかしつくりとなつてゐる。この大味は、或はのんきの限り、悠長の極みともいふべき安永として、はじめて見られるものであるかも知らない。

「榮花夢」の後をうけて、黄表紙がどのやうに推移したか。春町の後にどんな作者がどんな作風を以て出現したか。その一々を考へるのは、こゝには餘裕がなさすぎる。今は「榮花夢」と最も緊密の關係を有するとよりは、むしろ

類作であり、摸倣の作であると見る方がよい喜三二の「榮花程五十年蕎麥價五十錢見德一炊夢（みるがとくいつすゐのゆめ）」をとつて、「榮花夢」との差を考へ、兩作者の作風とよりは、後の作の出版された天明元年と前の作の出版された安永四年との時の距離がどのやうな作風の相異を將來してゐるかを考へようとする。もとよりほんの一わたりの考へ方に於いて、たとへば春町その人にも「榮花夢」の類作があるにも拘はらず、參照しないといふぐらゐの程度に於いて。

「一炊夢」は三冊、十五丁、從つて繪の數も多く二十二圖になつてゐる。

1、蘆の屋の店、息子淸太郎が眠氣さましに蕎麥を食べるとて、小僧を誂へにやる。2、榮華屋の店さき、二人の客が邯鄲の枕を借りてゐる。この店では値段に應じて、いろいろの夢を商ふのである。3、二人の客の夢、三十二文の客は舟饅頭の夢、十六文の客は芝居一ト切の夢。4、一人の客の夢、四文錢一本で吉原遊びの夢。5、銀百匁の夢、祝言の體と女中を口說いてゐる體。祝言してまだ枕もかはさぬうちに嫁に死なれ、女中を口說いて忠明を約束し、約束を果さぬうちに夢が覺める。6、淸太郎が千兩の夢を買ふところ。それで五十年の榮華を見ようとする。7、二十歲の淸太郎の江島遊び。8、淸太郎が京の祇園の白人を大勢剃下奴にして踊の趣向をしてゐる。9、二十六歲の淸太郎江戶三座の役者を京に呼び寄せてゐる。10、三十一歲、長崎で唐人に書を學んでゐる。11、三十七八歲、唐土で美女の酌で酒を飲んでゐる。12、四十歲、江戶での遊興。13、俳人の集ひ、淸太郎は俳諧に凝つてゐる。14、五十歲、淸太郎の道成寺の舞姿、素人狂言に凝つてゐる。15、同じ邯鄲のシテ姿、能に凝り固つたのである。16、茶の湯遊び。17、七十歲の淸太郎杖にすがつてゆく。わが家懷しく舊宅を尋ねるのである。18、蘆の屋の舊宅の法事。淸太郎が行方不明となつたので、家督を讓りうけた手代代二が淸太郎のために五十年の法要を營ん

だのである。19、蘆の屋の座敷、大勢が代二に向つて金の催促、總〆百萬兩、みな淸太郎が遊興費である。20、その百萬兩のために破産となる、人々が取分を計算してゐる。やつと家に歸つた淸太郎は恐縮してゐる。21、淸太郎代二二人の坊主姿と、夢覺めて帳場の手代を見てゐる淸太郎の呆れ顏。22、蕎麥屋の出前持「もしお賴み申します、今お誂への蕎麥が參りました」

趣向がいかに細かくなつて來たか、筋が複雜になつて來たかは、「榮花夢」の荒筋との比較に於いて、やゝ明であらう。こゝにはさし繪を省略したが、それがあつたならば、いかに寫實的になつて來たかゞ、一目瞭然たるものがあらう。

「見德一炊夢」の出版當時の評はよかつた。蜀山人の作と思はれる「繪草紙評判記菊壽草」の位附では、立役の部の極上上吉になつてゐる。その書は天明元年出版の黃表紙四十七部を、役者評判記の體裁に依つて批評したものである。批評は時に評者の好みに偏することもあらうが、これを通じて、當時の讀者がどの點を悅んでゐたか、作者がどの點を覘つてゐたかの概略だけは知ることが出來る筈だ。すなはち當時の黃表紙觀の一端だけは考へられるわけだ。「見德一炊夢」のどこが、役者ならば市川團十郎といふところに格附けをさせたのか、「菊壽草」の評言に聽くべきであらう。

いふまでもなく、批評の重要點は頭取の言葉となつてゐる。主としてそれを拔いて見る。

此度蘆の屋淸太郎の役、先幕明にむかしの事なれば、うそかしらねどとのいひ分出來ました。次に淺草並木、榮花屋夢二郎、邯鄲の枕を貸して、半時の夢十六銅より、五十年の夢金千兩までの書付、古今無雙の大出來々

々々、團左衛門の若黨、三十二文で船饅頭の一時の夢、草履取折內も十六文で芝居の夢一トきり、中にも武左衛門が夢は、一ヶ月銀百目とあれば、各別實がありて面白いとのせりふ、諸見物はらを抱えます。扨清太郎千兩の夢を見んとて、三つぶとんの上に座したる見への繪よし、夫より江の島かまくら京都やまとめぐり、遊興遊藝のおごりの所おもしろい事。

清太郎故鄉へかゑり、番頭代次が代になりて、百萬兩のつかい道算用たちがたく、かし方も百萬兩二分六匁七分、二分何がしはまけてやらうのせりふ、こまかい事。ついに發心して、五十年の榮花の夢さめて、二八のそばのあつらへ、けんどん箱の角からすみまで、つるつるつた屋の大門口をひらいて初笑、今にはじめぬ氣さんじな夢物がたりの夢よりは、ちと實があつて大當り〳〵。

これにはいさゝかの註が必要である。先慕明にむかしの事なれば云々とは、「むかしの事なれば、うそかも知らねど、淺草茅町の邊に蘆の屋清右衛門とて百萬兩分限とよばれたる大のはらふくれあり」といふのが書起しだからである。半時の夢十六銅より云々の書付とは、2の圖、榮華屋の店に於ける値段づけをさしていふのである。その値段づけは甚だ細かい。一かんたんの枕ゑいくわの御ゆめ値段の定　一半時之夢、代拾六銅、一壹時之夢　代三拾貳銅、一壹日之夢　代四百銅、一壹夜之夢　代金貳朱、一十日之夢　代金三步、一半月之夢　代金壹兩、一壹ヶ月之夢　代銀百目、一壹ヶ年之夢　代金貳拾兩、一十ヶ年之夢　代金貳百兩、一五拾年之夢　代金千兩、右之外御望次第　月日、これである。清太郎が五十年の夢を千兩で買つたのは、この値段附に從つたのである。

これにしても、「菊壽草」は缺點を指摘しなかつたかといふに、さすがにそれをも忘れない。尤も、いふところは

たゞの一ヶ所である。わる口の言葉として「ろせいは夢さめての所で、夢がさめたと思つた」といつてゐる。15の清太郎が「邯鄲」の能をつとめてゐる所の書込みに、「盧生は夢さめて、盧生は夢さめて」とあることをいふのである。書込みは、もとより、謡の文句をそのまゝに挿んだのであるが、それが趣向の結末に入つたことを豫想させる。けれど、事實はさうなつてゐない。難はその點に於いていはれたのである。

褒貶はすべての微細な點を問題としてゐる。黄表紙の作者といひ、讀者といひ、よくもかうまで遊びに眞劍になり得たものと、たゞたゞ驚歎される。その眞劍味は何處から生れたか、皆時代の心である。いな、その時代の江戸の都會人の心である。それは何故にといふことになれば、また別な問題である。こゝでは、そのものが遊びの筆を藉りて黄表紙に最もよく現はれてゐるといへばそれでよい。尤も、黄表紙の世界では、「榮花夢」の趣向を踏襲するものを、次を以て擧げて、いよいよ細かさを覘つてゐることゝ、また覘ひの的になる材料がさまざまの情勢によつて變化することを言ひ續くべきであらう。殊に、「京傳と黄表紙」の題下には、少くとも京傳の黄表紙「盧生夢魂其前日」または「榮華夢後日話金々先生造化夢」を擧げて、細かさを覘ふだけでなく、これを貫く統一性を求めたことをいひ、そして何故に然るかを考へねばなるまい。また遊戯心の活躍の半面に、教訓の精神が甚だ露骨に動いたことを考へ、更にその理由を考へねばなるまい。殊に、後の教訓といふ點からいへば、「榮花夢」そのものをさへ、教訓ものとして見直さうとした時代であることをも注意せねばなるまい。丁度、「造化夢」の出版された寛政六年に、同じ板元の蔦屋から、「榮花夢」の第三版の出版されたのは、「造化夢」の教訓と聯絡を保ち得るものとの意圖の下になされたことが明であるから。

けれど、これ等はしばらくさし措いて、黄表紙の作者京傳その人を考へ、どうしてさういふ教訓を書いたか、また時代の教訓精神を迎へるやうになつたかを考へる方が順序だと思はれる。

三

北尾政演畫と署名した黄表紙は安永七年出版のものから見うけられるが、京傳作と銘うつたのは同九年がはじめのやうである。九年出版の「娘敵討古郷錦」は畫工としての政演の署名の外に、「京傳戯作」の方印が見られる。まづ京傳黄表紙の處女作と認めてよいやうである。二十歳の時の出版だから、その前年、十九歳の折の作と考へられる。

敵討物といへば、いづれ堅くなるのが、當の事ではあるが、これよりも少し寛いだ、ゆとりのある作は、これまでも見うけられる。あの才人京傳にして、どうしてかゝる他奇なき筆を執つたかと怪しまれる程の堅さだ。

草木何ぞ心なきに有べきや、こゝにある御大名御秘藏ありし名木の櫻有しが、此櫻時の吉凶を告ぐること妙ありて、少しも違ふことなし、故に殊の外大切にし給ひしが、大殿すぎ給ひしかば、則枯れたり。此度若殿世を繼ぎ給ひしより、もとの如くに榮え、花いよいよ見事に咲きけり、まことに妙なる名木世にたぐひなし。

かういふ讀み本めく筆を以てはじめる一篇の脚色も亦、單純過ぎる。悠長の氣分がなくて、たゞ緊張の形のみがある。

1、若殿がその櫻の盆栽を澤之丞に預ける。2、澤之丞一家はその盆栽を大事に保護してゐる。3、澤之丞の家

來伴介が主人の妻しがらみに横戀慕をして口説立てる、拒まれる。4、伴介その櫻を根元から切つて逃亡する。5、櫻の一大事から若殿御前の評定、かねて澤之丞の首尾よさを妬める作左衞門の讒言。6、澤之丞上意によつて切腹。7、しがらみと娘およしとの立退。8、乳母のもとにゆく途中、しがらみの病氣、そこへ伴介が來かゝる、9、伴介又しがらみを挑み、聴かぬに業をわかして殺す。しがらみの魂、およしを導いて逃がす。10、およしの乳母の家にたどりつく。乳母夫婦の慰籍。11、若殿の廓ぐるひ、作左衞門伴介に金を與へて、殿を歸館の途に殺させようとはかる。12、伴介忠臣斧之介を若殿と見違ひて斬りかゝつて懲さる。13、劍術師匠流水の子息四郎九郎およしを見染める。14、四郎九郎およしを娶ることを父に懇願する。15、客分となつたおよし四郎九郎に敵討の話をする。16、およし劍術の稽古、上達。17、父母の魂魄敵の在所を教へる。18、敵討。19、祝言、そこの言葉書、「これほど目出度、嬉しいことはござんせぬ」、「此巻ものは父流水の秘密の書じや」とある。

筋立の簡單なばかりでなく、筋を追ふ繪の立方も、またあまりに簡單である。文と繪の關係に於いては、前に數へ來つたので、ほゞ考へられるやうに、あまりに即き過ぎてゐる。文と繪の關係が即いて離れないのが合巻、離れて即くのが黄表紙と、草雙紙の世界では大概決めてかゝつてよいとすれば、この作はもう合巻式だといつてよい。それだけに當時の黄表紙の好みから見れば、當然篩にふるはれる代物だ。

この作の優劣は深く問題にしなくつてよいと思ふが、どうしても考へておかねばならないのは、この作風に京傳その人がそのまゝに現はれてゐるといふ事だ。少くともわたくしはさう考へてゐる。これにはいろいろな説明の上でなければならないが、京傳のあの才氣潑溂は決して天成のものでない、むしろ訓練の結果だ、地は案外理屈ぽい

男、それも程度問題だが、本來は洒落氣のさうまで豐でない男だと推定されさうである。その地がはつきりと彼の黄表紙の處女作に現はれたのだと、わたくしはこの不洒落を解してゐる。

京傳黄表紙の出世作は「手前勝手御存商賣物」である。蜀山人の黄表紙評判の書「稗史評判岡目八目」では總卷軸に推されてゐる。作の趣向は、青本——その頃は、その後にも以前の名をそのまゝに、黄表紙を青本と呼んでゐた——の當世ぶりを上方下りの浮世草子やら、また赤本黑本などが妬んで、楯つかうとする、しかし最後には罪を悔いて謝り入る筋で、一切を商賣物の本や繪の世界で埒あけてゐた。別に梗概を述べるまでもなく、「岡目八目」の評言を引くことが、大體を推測されるばかりか、喝采を博した理由も合せて知る便利があらう。頭取の言葉、「寅歳のゑざうし、總卷軸、作者京傳とはかりの名、まことは紅翠齋門人政演丈の自畫自作、ごぞんじの商賣物の本づくし、中にも一枚繪が柱かくしの娘になれそめ、黑本が青本のやきもちを燒くとはおかしい事。一枚繪がざうり取、百に三十二枚の男も出來ました。附立の書付に、此本何方へまいり候とも、御かへしとは細かい〳〵。東錦が座敷にて、鸚鵡石が聲色、いろはたんかの夫婦いさかひを、どうけ百人一首がとりおさへ、源氏物語唐詩選の異見にあひてあやまり入、黑本赤本下りの本の本退治、一番目の大詰まで古今の大出來々々々。畫なら作なら、お綺にかなぼんとは惡い地口云々。」

蜀山人の評はやゝ褒め過ぎてもゐよう。しかし、處女作と比較すれば、上達のあとに驚かされる。この人の性癖であるが、たえざる努力がこゝにまで到達したのだと考へられる。蜀山人の好評は大體趣向立に就いていはれてゐるが、たしかにその趣向立は整つてゐる。それを粉本である春町畫作の「辭鬪戰新根(ことばたゝかひあたらしね)」と比較すると、一段と趣

向立の整齊に於ける價値を明にすることが出來る。おそらく春町にいはせたら、安永七年から天明二年までの三年間の黄表紙の變遷が、竪子京傳の名を成させたのだと斷ずるのであらう。江戸時代の文化相は大同中に於ける小異の流行を重要視せねばならないが、黄表紙は最も多く小異の流行を生命とした小説であつた。

京傳の「御存商賣物」を出世作とさせたものは、もとより黄表紙の內に動く流行の相であるが、それと共に、彼の好尙の壺に當つたのである。すなはち「辭闘戰新根」に乏しくつて、「御存商賣物」に多い趣向の整齊、作柄の統一性を二重の意味に於いて解すべきである。

も一つ考へておきたいのは、「御存商賣物」を總卷軸に推した蜀山人の肚である。言葉のおもてには云つてゐないが、どうやら彼の江戸贔屓が實際以上に京傳の作を評價したのでないかと推測されなくもない。といふのは、京傳の趣向が赤本黑本と青本とのいさくさにあるといふよりは、むしろ赤本黑本との陰にゐて、それ等を煽動した八文字屋の讀み本及び行成表紙の下り繪本と青本との爭ひ、つまりは江戸の地本の青本が上方本を壓倒することにあつた。されば、黑本赤本に對しては、青本に刄向ふ根性を綴ぢ直してから、もとのやうに繁昌するなどとの結末をとらせたのである。何にしても、黄表紙を江戸生粹の流行本と見て、上方の古風の本の上位におからとすることは、當時の江戸人にとつて當然の氣持であつたらう。蜀山人の態度は、たまたまそれ等を代表したのに過ぎなかつたらう。

この推測の當不當はともかく、當時の江戸人が京傳と共に、黄表紙といふものに多大の關心を持つこと、また赤本黑本から黄表紙への推移に少なからぬ興味を寄せてゐたことだけは、裕に京傳の趣向からうけ取られる。彼等は

黄表紙に對して漸く回顧的、反省的態度をとつた。また現在の黄表紙が草雙紙の傳統に於ける位置の意識を強く把持した杜芳の「繪草紙年代記」の作も、「御存商賣物」の翌年の出版であることを考へねばならない。かういふ情勢に面する黄表紙の作風が、奔放自在を期し難いことは當然である。いひかへれば、すでに黄表紙に型といふものが成立したのである。「御存商賣物」の成功も、京傳がその型を最も正確に守りおほせたことに歸着すると見てよい。「御存商賣物」の要素を分析すると、その頃の黄表紙の要素と同質のものを見出すことが多く、またそれ等の綜合狀態が黄表紙の一般共通性であることも、最も容易に指摘することが出來るからである。

四

京傳の才氣はいち早くも黄表紙の型を心得て、立派な成績を「御存商賣物」に擧げたもの丶、いつも同じ定石のみは打てない。型に入つて型を出る工夫も必要だ。その工夫に出來、不出來があるのも當然だ。その後にあまり薫ばしくない「不案配即席料理」「天慶和句文」などの作のある所以である。京傳の聰明は、また新しい工夫を凝した。工夫はつひに從來の型以外に、新型をさへ創り出した。天明五年版の「江戸生艶氣樺燒」がそれである。今日京傳の黄表紙といへば、誰しもこれを擧げるであらうほどに、世に聞えた作である。

京傳畫作のこの黄表紙は三冊、二十二圖である。1、仇氣屋の息子艶二郎が新内節の正本を讀んでゐる。どうがなして、それ等に謠はれてゐる人々のやうになりたいと羨しがる。2、艶二郎と近所の道樂息子北利喜之介、輪留井思庵の對坐、二人は頻りに艶二郎を惡遊びにそゝのかす。3、艶二郎は腕などに刺青をしてゐる。これが浮氣の

はじまりと思ふからである。4、艶二郎のもとへ駈け込むやうに、思庵が金で藝者に頼んでゐる。艶二郎が浮名を廣める工夫の一つである。5、頼まれた藝者が駈け込む、家の者どもが呆れてゐる。6、その事を板にして讀賣に賴んで賣らせる。7、仲の町茶屋に艶二郎が喜之介思庵と一緒にゐる、女郎買で浮名を立てようと考へたのである。8、艶二郎浮名屋の浮名を買つてゐる。9、艶二郎妾を抱へる、女郎買から歸つても妬手がないと張合ひがないとて、妬くのを條件としての妾である。10、艶二郎は思庵の名あてで浮名を上げ詰めにして、自分は新造買で逢ふ、間夫の氣取りである。11、艶二郎、新造や禿を賴み、大門口で引きづられて行く。12、艶二郎妾に勢一杯妬かせて恐悅がつてゐる。13、提灯屋の店前、喜之介浮名と艶二郎の紋を比翼にして提灯を注文してゐる。回向院道了のお開帳に奉納しようといふ艶二郎の賴みゆゑに。14、艶二郎仲の町でわざと地廻りに毆つて貰ふ。15、艶二郎親に勘當を懇願してゐる。艶二郎世間が金づくでさせてゐると噂する事を聞いたためである、母親のとりなしで七十五日限りの勘當をゆるされる。16、藝者の裸足參詣、艶二郎に雇はれての勘當御免の祈願である。17、艶二郎が扇の地紙賣りとなつてゐる、浮氣な商賣と考へてのことである。18、艶二郎浮名の僞心中の支度、浮名を身請しておいての狂言である。19、二人驅落する、素直な身請では色男でないとの考へから。20、心中の場所ときめた三圍の土手、二人は泥棒に遭つて眞裸にされる。21、二人裸の道行、道行興鮫肌と題した新內節の歌。22、艶二郎浮名を拉れて家にかへり、父親から意見されてゐる。泥棒とは實は父親と番頭の業であつた。艶二郎は改心し、浮名も艶二郎の醜男を諦めて夫婦となる。

この作を黃表紙の新型だといふ一つは、誇張から來る滑稽の裏に、まざまざと見せた寫實が强いうがちとなつて

ゐる點である。もとよりうがちは黄表紙の缺いてはならぬ要素になつてゐるが、かうまで細かくはつきりしたのは少い。それがためにモデル說さへ起つた。艶二郎は京傳が空想から生れた人物でなくして、實在の人物であるといつて、國學者岸本由豆流の父親か、または太申の名で知られてゐる和泉屋甚助がその人だと傳へられもする。眞疑は別として、さういふ推測もゆるされる程に、寫實性に富んでゐることは事實である。

更にまた新型の新型たる所以は、この構成が從來の黄表紙の型にない洒落本の重要要素をそのまゝにとり入れたことである。いな、それを骨子としたことである。要素とは何か、半可通の滑稽である。遊里の事なら何でも知つてゐるといふ氣取りの己惚れの男が、見る見る遊女にふりつけられるをかしさである。洒落本の洒落に滑稽といふ意義もあるとするならば、當然この點に於いていはれることであるが、京傳はそれを黄表紙の約束の下に誇張したのである。故に一度誇張を洗ひ落したなら、現はれ出づるものは立派な洒落本の型であらう。しかも、抽象的な、一般的な洒落本といふよりは、やゝ具體的に、限定的に、それの作、それの書とさへいはれさうである。

京傳はこの作出版の一年を隔てゝ、洒落本「通言總籬」を出した。天明七年のことである。これには艶二郎、喜之介、思庵三人の名がそのまゝに見えてをり、「浮氣樺燒」の中にちよいちよいと見えてゐた吉原松葉屋が全篇の世界になつてゐる。京傳がこれを前作の黄表紙と關係させた理由は、その凡例で明にいつてゐる。

艶治郎ハ青楼ノ通句也、予去々春江戸生艶氣樺燒ト云冊子ヲ著シテヨリ已忱惚（ウヌボレ）ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス、氣之介志庵共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也。

つまりは、「浮氣樺燒」が大に行はれた餘勢を負ふといふのである。實に、その書の行はれたことは己惚客を艶

治郎と呼ぶ通言が出來たといふ以外に、醜さの象徴として描かれた艶治郎の鼻が、また京傳鼻と呼ばれたのでも著しい。しかし、さうのみ考へてよいのであらうか。わたくしは寧ろ京傳が洒落本のものを洒落本に返したのだと考へる。黄表紙にとり入れはしたものゝ、それでは言ひおほせられぬものを、本來の形に於いて縱橫にいひをなさうとしたのだと考へる。

さういふことを考へさせるのは、同じ凡例の中の、も一つの個條である。

此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス、蕊總籬ト題セルハ、流行ニ後タル古句ノ雜光ヲ以ッテ也。

「浮氣樺燒」には艶二郎の已惚筋が本筋になつて、喜之介、忠庵はたゞのとりまきになつてゐる。しかし、「總籬」では、艶二郎の已惚筋は餘程緩和されて、そのかはりに、あとの二人が殆ど對等に主人公艶二郎と共に活躍してゐる。この個條書は、作者がその點を特に覘つて書いたことを明に見せる。

ところで、洒落本側からいへば、半可通と生息子の二人づれ、しかも、生息子が持てゝ、半可通が振られる滑稽は、殆ど通り相場になつてゐる。そこへ新機軸を現はしたのが、天明に近く、安永も末頃に出來た秩都紀南子の「驛者三友」である。必ずしも、三人型のはじまりだとはいはないが、これまでの三人型が假托の人物であつたのを、生世話でゆき、なほ題名にまではつきりさせる程度に至つたのはこの書である。この書は一名を、「新宿穴學問」またの名を「馬糞夜話」といふやうに、新宿を世界としたものであつた。驛者の驛はそれに基づいてゐる。また驛者三友は「論語」にいはゆる益者三友のもぢりである。京傳が「通總」に藉り用ゐた損者三友の對である。

「驛者三友」の三友とは、雷尾、無有および露時雨のことである。三人はよく新宿の遊びに就いて語り、よく話す

が中に、雷尾と無有は一ッぱしの通先生氣取であつた。彼等は頻りに息子株の露時雨を通に仕立てゝやらうと努力する。しかも、半可の通先生だちが味噌をつけて、露時雨のみが大もてにもてたのである。

露時雨のもて方も無理はない、あの色男だ、あの氣立だからといふことが、當時の洒落本の愛好者の中には考へられたらしい。露時雨の名は、この洒落本以前の作、安永六年版の「妓者呼子鳥」のおしもおされもせぬ色男の名として知られてゐた。尤も、「呼子鳥」は田螺金魚の作であるが、それの評判のよいところから、他人の紀南子が勝手に自作に聯絡をとらせたのであらう。今日からは怪しくも思はれるが、當時としては別に珍しくもない融通であつた。

この三人遊びの趣向をそのまゝに、また新宿の世界を吉原にかへ、更に滑稽の度を増すために、その色男を醜男の癖に己惚の強い者に仕立直したら、何になる。わたくしは、「浮氣樺焼」の成立を、この順序で考へてゐる。であるから、京傳は「浮氣樺焼」の筋を、黄表紙から本來の洒落本にかへした時に、やゝ明に「譯者三友」の手法にかへり、またいはでもよい損者三友などの言葉を凡例に漏したのであらうと推測してゐる。

更にまた京傳はその三人仕立を、「總籬」の喜之介女房おちせで仄見せた筋にまでとり入れもした。それが「總籬」と同じ年に出版された洒落本「古契三娼」であつたと考へる。「總籬」の三人で、三人三樣の氣立の相異を、これは吉原、深川、品川の地方色を示すとて古手の三遊女の相異にかへたのである。この洒落本の題名はもとより虎溪三笑のもぢりであるが、まだ「譯者三友」とかすかな聯絡のあることも注意すべきでないかと思ふ。

當り作でさへあれば、他人の作でも平氣で自分のものにとり入れることが許容されてゐる世に、自分の當り作を利用しないといふことはない筈だ。本來からいへば當然ではあるが、「浮氣樺燒」の好評をうけて、洒落本と畠違ひの續編「通言總籬」を出した京傳である以上、黄表紙の方面でも、何か續編がありさうなものだ。そのものがある「二代目艶二郎碑文谷利生四竹節」だ。

五

艶次郎の二代目、艶太郎は生來の醜男でどうしても戀を得られぬかなしさ故に、時の流行佛、碑文谷の仁王尊に祈願する。何事も願うてかなはぬ事のない此の佛の威德は、艶太郎に美男の面を授ける。面は肉附の面となつて離れない。さうなると、多くの女の憧憬の的となる。しかし、餘りにいゝ氣になつて、色に憂身を窶したはては、いつか佛に見離される。面は脱けおちる、もとの醜さにかへる。もう誰一人寄りつく女とてはない。彼はこゝにつくづくとおのが身の程を考へる。悟りは四竹節に身の上を謠ふことになる。

黄表紙は江戸の小説の中でも、最も多く時の流行を題材とする。流行でありさへすれば、神佛でも、風俗でも、また政治上の事件でも同じ扱ひをする。碑文谷仁王尊の流行はたしかに、もう一度「浮氣樺燒」の趣向をくりかへさせるに都合がよい。京傳としてはかゝる方法で、自分の當り作を利用すべきであつたらう。

しかし、この作が寛政元年の出版であることを考へ、そして初代艶二郎の作から四年の隔りがあることを數へて見ると、かなり間のあることを怪しまねばならぬ。その黄表紙のテンポは、世相の變化に伴うてもう少し早くなつ

てゐる筈だ。流行の尖端をゆくのが、これ等の小冊子の特相であるならば、これはまた自ら流行遲れの標本を作ることになる。或は「四竹節」以前、「浮氣粋焼」の續編が、すなはち黄表紙としての第二編がありはしなかつたか。勿論その物があつた「四竹節」の前年、天明八年の出版「會通己恍惚照子」である。

尤も、この黄表紙の趣向は「浮氣粋焼」を直接に承けてゐないが、いろいろの點に於いて、その續編であることが考へられる。更にまた「通言總籬」とも多少の聯絡のあることも注意される。

これには艶二郎ではないが、例の牡丹鼻の主、京屋傳二郎といふ息子株が主人公である。もとより京傳その人を匂はせてゐる。「今廿六の春、男一疋といふ盛りをたゞ父の脛のみかぢり」といふ廿六歳は、まさしく京傳その年の年齢であつた、さても、ある日傳二郎は客人大明神からうぬぼれ鏡を授けられる。鏡の照し出すところ、吉原の人情、通人の心意ことごとく現はれるといふ靈物であつた。傳二郎は早速その鏡を北の方に照してみる。一人の通人が行く。

小袖はちときた奴なれども、羽織は仕立おろしと見へる、八丈の羽織無性に前下りばかり長き仕立、あとをつけて寫し見れば、友達のところと見え、表から里町さんうちにいなさるかと訪るれば、内より小女出でゝいゝえ出ました。といふ、こいつはしまつたといふ顔附にて、又その先の黑格子のうち、くだ簾を扇であけて、内へはいる。内には通が二三人話してゐて、くわきやうさん大ぶお奇麗ね、丼

問はれた通人は女郎から貰つたと答へる、それなり直にひつかへして家に歸る、たゞ羽織を見せたいばかりの所作であつた。うぬぼれ鏡は漸次にかういふ心いきを寫し出す。

「總籬」と交渉があるといふのは、この一節である。引くところの前文は、「籬總」の次の一節と參照することに於いて、はじめて京傳の意圖を明に知ることが出來る。

伊勢町の新道に奉公人口入所といふ箇板のすぢむかう、いつでも黑格子に蘭の鉢植の出してあるは、芝蘭の友を旦那と稱す江戸がみの北里喜之介が住居、鮑魚のいちぐらに同じ門口、くだ簾の外に仇氣のひとり息子艶次郎

京傳はさつと「總籬」を掠めておいて、「浮氣樺燒」と「總籬」の骨子であるうぬぼれのをかしさを、新しい鏡の趣向で展開したのである。鏡は一人の美男の意休を大勢の助六がとり捲いてゐるところを照し出す。うぬぼれの世の中とて、助六ばかり多くなつたためである。また遊女が文を板行にするところを照し出す、色男がる客人に皆日文日起請をおくらねばならないからである。新造がはづして客を晝三に逢はせるところを照し出す、客が新造買で晝三と忍び逢はうとするために、新造は三分、晝三は一分の値となつたのである。鏡はまた醜男が喜ばれて色男が嫌はれる世界をさし寫し出す。そこで傳二郎がはじめてわが世來れりと勇み出し時、客人大明神がまた姿を現はして、うぬぼれの非なることをお諭しになる。

今、この黃表紙を「浮氣樺燒」「總籬」と「四竹節」の間において見ると、うぬぼれを或る一人の身に負はせた筋を、ばらばらにほごして吉原遊びの一般の相としたのが「已恍惚照子」であり、「已恍惚照子」の客人大明神を仁王尊にかへ、またその分裂を一個人に統一させたのが「四竹節」といふことになる。して見ると黃表紙の正しい系統からいへば、「四竹節」は依然として「浮氣樺燒」の二代目であり、「已恍惚照子」は兄貴分ではありながら、旁

系といふ格になる。

尤も、それほどの旁系を物色するならば、「已惚怳照子」の外にも、そのものはある「三筋緯客氣植田」がそれだ「總籬」と同じ年の天明七年出版だから、その洒落本とどちらを兄、どちらを弟と區別は出來ないが、血は立派に通つてゐる。

この黄表紙の第一圖は、三人の息子株の對坐してゐるところである。繪柄は殆ど「總籬」のさし繪そのまゝである。三人は互に、どうがなして世間と違つた吉原遊びをして見たいと考へる。上冊はその中の一人梅枝の遊び、中冊八重次郎の遊び、下冊松太郎の遊び、皆世にも馬鹿々々しい變態遊興である。

梅枝は當年五歳の伜を拉れてゆつて、おいらんを買はせ、自分は新造買でをさまる。しかし、さういふ遊びのはては、勘當の身となつて、家を立退かねばならなくなる。

八重次郎は馴染の女郎に死なれることによつて、客としての名を世間に知られようと考へる。人相見を同道して行つて、その年の秋あたりに死にさうなといふ女郎を探し出し、毎夜毎夜通ひ詰める。さて追善の河東節やら、荻江のめりやすやらの弘めをしようと準備する。さては辭世を當時の流行書家東江に書かせて石塔に彫りつけるどころか、自分は坊主になつて、女郎の死を待つ。けれど、いつまでも健かな女郎は、間夫を拵へて、廓を驅落する。八重次郎のみは準備萬端の費用に、家屋敷をも手ばなすことになる。

松太郎は何の手もない地のまゝで、氣の合つた女郎と馴染を重ねたが、身請しても家へ拉れかへらず、そのまゝに女郎屋へ預けておく、自分も八十八、女郎も七十五になつてもなほ通ひ詰める、家督の悴は世間を憚つて無理に

勸めて、女郎を家にひきとつて祝言をさせる。

この梗概によつて知られるやうに、「客氣植田」は遊びの馬鹿々々しさを、「浮氣樺燒」から繼承し、三人の遊びの型を「總籬」と共に創り成したのである。

「客氣植田」が「總籬」との交渉を露はに見せてゐるのは、殊に中冊であつた。その一二を拾ふと、中冊の第一圖賣名のために短命の女郎を貰ふ案を立てた八重次郎が机に倚つて、脂下つてゐる。そこの書込みに「丁字屋だとはてなといふ場だ」とある。「總籬」は重な女郎屋の通言を解說すると共に、例の三人の會話の中に頻りに使用してゐる。こゝの「はてな」も彼に於いていはれてゐるものであつた。第二圖、女郎屋の格子前、通り行く禿二人の會話「さゝのどん、こんたあどけへいく、」「長崎屋へいくは」は、「總籬」の中でも禿同志の言葉としてそのまゝに見られ、また、同じところの、遊客の一人の言葉「さつきいの字伊勢屋にいさしつたのは、慥ときやうさんだよ」は「總籬」のおす川の言葉「いの字伊勢屋にときやうさんがいさつしやるから、おれが言ふとつて、よくお出なんしたといつてきや」と同じ筋である。この點からいへば、京傳は一方では洒落本「總籬」を書き、一方ではその繪解本「客氣植田」を作つたともいへる。

しかし、黃表紙は何といつても滑稽仕立で通さねばならない。滑稽をつまとして、通を旨とする洒落本とは自ら性質を異にする。その相異は、同じ材料をどう扱つたかの次の場合に於いて、最も明に讀みとられる。

「總籬」の中に、思庵が爪彈で三味線を彈いて、京傳の作のめりやす「すがほ」をうたふところがある。喜之介が聞いて、「京傳」がいつぱいにうがつた文句だ」といふ。之れがきつかけになつて、めりやす話となる。「浮氣樺燒」

のはじめにめりやすの名を幾つとなく列擧したのと、多少の聯絡がないのでもない。

艶二郎がいふ、「かなやの白妙が追善のめりやすは何とかいつたつけの」思庵「それは夏衣さ」おちせ「花ぐもりは四代目の瀨川だそうだねへ」

この追善めりやすの材料を、そのまゝに用ゐた「客氣植田」では、之れ等と共に茶かしを件ふことを忘れなかつた。馴染の女郎の死を豫想して、追善の音曲を案じてゐる八重次郎が、こんな事を思つてゐるやうに書かれてある。江戶節の方は水調子も古いから、ちや調子とでもつけよう。文句は京ばしに賴むつもりだ。めりやすは何といふ外題にしたもんだらう。四代目の瀨川が追善は花ぐもり、かなやの白妙が追善は夏ころもだから、破れごろもとでもせうか。しかし、それは櫻姫の追善を見るやうだの

「客氣植田」のこゝのところでは、荻江藤次の言葉として「いづれ私の方は泰琳に相談仕りませう、文京さまも此間すがほといふめりやすを長崎屋でお弘めなされました」と書いてある。いつてゐる事は、「總籬」のおちせの言葉「モシそのめりやすが此頃弘めのあつたすがほとやらかへ」思庵の言葉「泰琳が妙に節をつけたよ」に聞かせてゐる通であるが、主旨はむしろそれ等を片寄せて、破れごろも、ちや調子の戲れにあることはいふまでもない。

「浮氣樺燒」の一當りが、黃表紙の內にも外にも、かうまで聯絡をとりながら、それからそれへと發展してゆく。しかも、發展は京傳みづからの著作の中にとゞまらず、他の作者にも幾多の模倣の作を出させた。燒直し、染直しのはては、殆ど原形を失ふほどに至る。それが、その頃の作者道德に於いて許容されてゐた。いな、作者は相身互にさうしてゐた。現に京傳の作さへ、その例が幾つかある。たゞ彼の手際がよく一寸見には氣がつかぬほどに様子

をかへさせてゐた。

こゝには、京傳以外の作者の「浮氣樺焼」の模倣作に就いていふべき筈だ。けれど一々いふのは煩はしい。といつて焼直し染直しのあとを指摘しない限りは、名を列ねただけではどうであらう。むしろ、京傳みづからが「浮氣樺焼」からあらぬ方へまで押しすゝめた二三の例を擧げる方が都合がよいやうである。

「浮氣樺焼」から「客氣植田」へと進行したあと、「客氣植田」から「己恍惚照子」へと聯絡する絲の一筋に、京傳その人を作中に露はに出す一事がある。前にもいつた格子前のところの女郎の言葉、「私どものとこへお出なさる客人が去年一夜千兩といふ草雙紙をお書きなさりやしたが大笑ひだ」「政さん今夜はでへぶ綺麗でおさんすね」の一夜千兩の作者、また政演をにほはせた政さんが、京傳をさしてゐることは勿論である。さういふ京傳がもつと表面に出現した時に、「己恍惚照子」の京屋傳二郎になる筈だ。その名も艶二郎と脈をひきながら、誰でもそれを知るやうに、京傳を明瞭にしたのである。

京傳を作中にもつと露はに見せたものゝ中で、著名でもあり、また早い頃のものであるのが、寛政二年すなはち「四竹節」の翌年、寛政二年の「京傳憂世醉醒」同三年の「世上洒落見繪圖」だ。

「憂世醉醒」では、京傳が眞崎のほとりで厄介仙人から仙通丸を授つて、仙術を得、いろいろの榮華を盡す。深川遊び、品川遊び、芝居から吉原の居續、妾ぐるひ、さては大名の姫君との色事、それが露はれて繩目の苦勞、邸へひかれるところを、旦那寺の和尚に救はれ、詫び事のために坊主となる、と思つたのは夢、いや夢ならぬ眞崎狐の仕業であつた。京傳ははじめて浮世の榮華のはかなきを悟つた。

「洒落見繪圖」では京傳が今の世の洒落過ぎたいろいろを書かうと、草雙紙の筆執ることにはじまる。京傳は役者の日常生活を見せる芝居、狐の化けて來たのを知りながら、平氣で客にしてゐる女郎、血の道の藥を飲む男、水炊を食ふ下戸などを書いて得意がつてゐる。ところへ、天帝が訪ねて來る、京傳は天帝に案內されて、世の通人どもの洒落過ぎて、しやれからべになつたのを見せられる。それどころか、いつの間にか自分までも半分しやれかゝつた。京傳は彌勒彿に救はれて、もとの姿となり、これから後は世の常道を心がけるやうになつた。

この梗概からでも注意させるのは、いかにも教訓の色合が强く見えることである。少くとも「客氣植田」よりははつきりと見うけられる。共に、望むべからざるものを望み、止まるべきに止まらぬ事の非を敎へる形になつてゐるが、實はその頃の時運が將來した敎訓物の流行に從つたまでゞ、骨子は依然として、「浮氣樺燒」その他を貫く行過ぎのをかしさにある。して見れば、京傳の黃表紙は、目先だけをかへながら、いつも同じ所を彷徨してゐるのであらうか、いな、これは京傳ばかりでない。黃表紙の作者が皆さうなのだ。いや、黃表紙だけでない、江戶の文學が殆ど皆これだ。要は江戶時代の生活內容の停滯といふことに歸する。あの目まぐるしい流行も、その停滯を一時欺瞞する手段に過ぎない。その理由は今の問題でない。問題は黃表紙作者を代表する京傳が、どのやうに目先をかへたかである。そこに、遲緩と匆忙とを錯綜させた黃表紙の進行を見ればよい筈だ。

六

京傳が黃表紙に於いて、最もよく目先をかへ得たのは寬政二年出版の「大極上請合賣心學早染草」だといはれてゐる。白

川樂翁の政治の變革から來る世の動きを、いちはやく見てとつて、この敎訓物を書き出した手際は極めて鮮だと評される。作の出版は丁度「憂世醉醒」と同じ年、「洒落見繪圖」の前年に當る。

成程、「早染草」が、あの趣向と、この繪組で出現したことは、突爾の感を與へるに足りる。しかし、「浮氣樺燒」がその後にいろいろと變形し、變質したことを逆に考へれば、趣向に於いても、繪組に於いて、「早染草」以前すでに多くの「早染草」のあつた事を考へねばならない。

それには、まづはじめに「早染草」の輪廓を知つておくことが便利であらう。

1、天帝がシャボン玉を竹の管で吹き出すやうに、人間の魂を作つてゐる。2、日本橋の目前屋理太郎誕生、惡魂その皮肉に入らうとするのを、天帝が遮りとめる、善魂が入る。3、理太郎の利發、これは善魂がゐる故である。4、惡魂の評議、何とかして理太郎の皮肉にわけ入らうと工夫する。5、理太郎元服。6、十八歳の理太郎轉寢の隙を伺ひ、惡魂どもが善魂を縛り上げる。7、理太郎惡魂に手を曳れ、腰をおされて吉原土手を行く。8、理太郎吉原の遊興。9、理太郎床入。10、女郎屋の廊下で理太郎歸らうか、歸るまいかとうろうろしてゐる、善魂と惡魂が兩方の手を引張つてゐるために。11、理太郎帳場で帳合をしてゐる、善魂が入つてゐるからである。そこへ惡魂女郎の手紙の中に入つて來る、善魂それを見せまいとする。12、惡魂女郎の手紙の中に入り來て、理太郎をそそのかす、惡魂善魂を殺す、13、惡魂、善魂の妻子を追ひ出し、理太郎を吉原に流連させる。14、理太郎惡魂に勸められて、親の土藏の家尻を切る。15、理太郎追剝となり、道理先生にとつて押へられる。16、道理先生の居間、理太郎の改悛、善魂その機に乘じて父の讐の惡魂を斬る。17、理太郎家督を嗣いで、親孝行をする。

書中いふところの道理先生は心學の大家中澤道二である。作者はその頃流行してゐたとはいひながら、とにかくに硬いところの心學の説と、黄紙表にとり込んだのが味噌であつた。さればこそ、序の中にも「繪草紙は理屈臭きを嫌ふといへども、今その理屈臭きをもと、一ト趣向となし云々」といつてゐる。

この黄表紙に先づ一年、京傳に「孔子縞于時藍染」の作があつた。もしも江戸時代の戲作者氣質を忘れ、また京傳に何らかの政治的意見があつたかと見て、この二作の關係を考へもしたならば、それこそ説明の出來かねるものがあらう。何となれば「于時藍染」はいふところの寛政の治の揶揄したものと見られ、「早染草」はその方針に迎合するものと考へられなくもないからである。しかし、京傳の黄表紙に就いて、そこを問題とするのがすでに誤りだ。むしろ戲作の趣向として、二つの作の間に、どんな聯絡があるかゞ問題だ。

「于時藍染」の世界には、頻りに漢籍を考究する乞食がゐる。まして世間一般の人々はすべて道徳家となつて、不義の利を輕んじ、努めて金銀を人に與へようとする。その結果、漸く金銀が邪魔扱ひせられる。女郎は旅人の客なぞと見ると、すぐ大金をおつつけたがる、才覺な男は燒味噌を燒くと金が逃げるとて、燒き立てる、商人は大高賣仕候の看板を出す。往來には巾着切られが徘徊する、大音寺前なぞには追剝がれが出る。天もまた感通して金を降らす、人々はいよいよ難儀するといふ有様。

この作が寛政の治を滑稽化したものだといふことは、この荒筋からも見られる。しかし、諷刺したものとは、原作を讀んでも、見てもうけ取られない。それどころか、天明六年の作「江戸春一夜千兩」と同一趣向だと思はせる方が強い。

「一夜千兩」の趣向は、ある金持が家内の者に大金を與へて、一夜の中に費つてしまへ、費つてしまつたら、倍の褒美を遣るといひ渡す。人々は金を貰ひたいばかりに、いろいろと苦勞する、しかも中々費ひきれない。人々ははじめて有難すぎては結局面白くなし、生かして金のつかはれぬといふ事を辨へ知るといふのである。

つまり、過ぎたるは及ばざるが如しを理の標準として、過ぎたるくるしさ、をかしさを見せたのが、この二つの作である。過ぎたるは及ばざるが如しとの意は、短く行過ぎといふ言葉でいひ現はされる。一度行過ぎといふと、そこに行過ぎのをかしさを書いた黄表紙のいくつかゞ想ひ出される。中に最もをかしいのは「浮氣樺燒」でなかつたか。その後をうけた「客氣植田」もさうでなかつたか。もし、行過ぎといふ中心思想――餘りにも仰々しい言葉ではあるが、――を以ていへば「千時藍染」もまた「浮氣樺燒」の正統ではないまでも、旁系として見るべきものでなからうか。

政治と遊興との世界の相異が、「浮氣樺燒」と「千時藍染」との連續を躊躇させるなら、しばらく「復讐後祭祀」に就いて考へるのがよい。作は「千時藍染」の前一年、すなはち「己恍惚照子」と同年の出版である。

父を殺した仇はすぐ、ひつ返して來て息子の手にかゝつて死ぬ。息子要太郎は主君から御褒の言葉を戴き、早速家督を相續する。しかし、要太郎の意は慊らない。昔から復讐といへば、さまざまの憂苦勞を經てはじめて願を達するのを、これはあまりにさらさらと事が運び過ぎたと、特に主君に申出でて、復讐の苦勞をしに出かける。乳母のもとに行つては、無理に病氣にならうとし、乳母の娘を遊女に賣らせるなど、世間の復讐の話をそのまゝに行はうとする。虛無僧となり、袖乞となる。そのはては實の乞食となり、苦しがなしくいよいよ死なうとする時、舊主

に救はれる。舊主はかねて乳母にいひつけて娘を賣つたことにして、實は自分の手もとにおかれたのであつたが、要太郎をもとの武士にとり立てると共に、その娘を妻にさせた。要太郎は父と仇の亡靈のために、復讐の場の形式で祭をする。之れがあとの祭だといふのが趣向である。

この趣向から考へると、要太郎はさしむき艶二郎といふところである。要太郎の太郎も「四竹節」の艶太郎の太郎と緣がなくもない。殊に要太郎の主君は、艶二郎の父親といふところがある。この行過ぎの黄表紙は、隨分「浮氣樺燒」の二番煎じだともいはれよう。

行過ぎから出る滑稽を種とすることは、京傳の黄表紙の定石であるが、行過ぎの持つてゆきどころ、當てどころは何でもよかつた。して見ると、「後祭祀」に於ける態度が、それと同じ年の作「時代世話二挺鼓」に於ける幾分かの政治事象の興味と合流する時に、翌年の作「干時藍染」の行過ぎ黄表紙を出すことは何の不思議がない。その翌年、寛政二年に、その後編として「藍返行義霰」また同じ覘ひの「玉磨青砥錢」の作が出たが、殊に「青砥錢」に於いて「浮氣樺燒」に近い趣向の少なからず見うけられるも怪しむを要さない。

今、あらためてそれ等を年次を以て順序立てゝ見る。

天明五年「浮氣樺燒」同六年「一夜千兩」同七年「客氣植田」同八年「後祭祀」「已恍惚照子」翌寛政元年「干時藍染」「四竹節」同二年「行義霰」「青砥錢」「早染草」

あの硬い筋の「早染草」が案外の大當りをとつたのは、時の教訓物の流行もあらう。また、今日からは推測が出來かねるほどに、よくも無理なこなしをなし得たものだとの樂屋筋の評判もあつたらうが、まづ一般の受け方は、

あの繪柄のおもしろさ、善魂惡魂の裸人形の工夫にあつたと想はれる。

その工夫は、喜三二の作、天明六年版の「天道大福帳」から出てゐるといはれてゐる。領かれる話である。「大福帳」では、天道様が善人に福を與へ、惡人に禍を與へる。人間の一切の行爲は天道様の指圖に從ふ天人どもが態手のさきの働きをかりるわけである。その天道が淨衣をつけた日輪といふ姿で描かれたのである。京傳はその天道と天人とを一つに合はせ、その天道の姿を善惡の魂の姿に利用したのである。しかし「大福帳」から突然「早染草」の繪の工夫が生れたといふことになると、いさゝか疑問である。いつもの事であるが、京傳にはすでにその下地があつた、準備があつたと見なければならない。

一體「早染草」の要素の中で、こゝに必要なものからいへば、重い輕いは別として、天帝、靈魂及び善惡の對立の三つがある。その中で天帝と善惡の對立はすでに「大福帳」に見られるが、靈魂だけは之れに關係がない。

京傳の黄表紙の靈魂の要素の始めて現はれたのは、天明八年の「時代世話二挺皷」かと思ふ。形は極めて簡單だ、丸の中に玉といふ字を書いただけだ。尤も、この作では、魂はさまでの働きをしてゐない。それがやゝ作の趣向となつたのは、「延壽反魂談」にはじまる。

天帝は人の死生を司る、人の命がをはると帳面の名前に點をつける、天帝ある時名前を消し違ふ。消された男の魂は忍びの者に奪ひ去られる。魂のなくなつた男はたゞぼんやりとしてゐる、人相見に見て貰ふと來月三日に死ぬといふ、男はすつかり死支度をする、地面家作をすべて金にかへ、いろいろの遊びをして費つてしまはうと苦勞する。まだ殘つてるのも寺の祠堂金に上げてしまふ。つひには女房をも尼にする。ところが、その日になつても死な

ない、そこへ友達の男、實は琴高仙人が來て、魂を持つて來てくれる男は元氣を恢復する、また富に當つて金持になる。

この「反魂談」の趣向は、いふまでもなく「客氣植田」の八重次郎のはなしと同案であり、また「一夜千兩」とも類想であるが、殊にそのはじめのところが、「大福帳」との關係の淺からぬことが見られる。更にその部分がそのまゝにずつと後の享保二年版「御誂長壽小紋」の卷頭にまで持越したことが注意せられる。

「反魂談」の魂の形が火焰に類してゐることは、少しく考へておいてよい。「反魂談」の同年の作「三河島不動記」と多少の交渉があると見てのことである。作は三河島の不動尊の流行を當込んだものであるが、不動尊が炭團の精と戀仲になるをかしさが趣向となつてゐる。それには炭團の精を火焰の形として描いてあつた。すなはち京傳は火の玉を一方には魂として扱ひ、一方には火の精として扱つたのである。

その火の玉の形の魂を、やゝ複雜にした作が、翌寛政二年に出た「山杜鵑蹴轉破瓜」である。それには靈魂重要な趣向の材料となつてゐる。德三郎といふ男と重次郎といふ男が、共にお竹といふけころを買ひ馴染む。けころは間もなく吉原の女郎となる、名をから竹と呼ぶ。二人の男は負けじ劣らじと通つてくる。そのはては德次郎は旭如來に祈り、重次郎は九郎介稻荷に祈つて、から竹を一人占めにしようとする。つひに旭と九郎介の達引となる。トドのつまりはから竹の體は、縱割に分けられてしまふ、しかもから竹の魂魄は二人の男を慕つて、さ迷ひ歩く時、九郎介は魂、旭如來は魄を拾ふ。九郎介と如來はから竹の體の半分づゝを、作り物で補ひ、それに一方は魂を入れ、一方は魄を入れて、賴んだ男のめいめいに與へる。彼等は凡夫のかなしさ、さうとは知らずに恐悅がつてゐる。

からなると、殆ど「早染草」だといへる。作は「早染草」と年を同じうしてゐる。「早染草」だといふのは趣向だけでない。繪に於いても魂といふ字を書き、魄といふ字を書いたものを、人間の形にし、それを善惡の字に書きかへれば、もう「早染草」だといふのである。尤も、趣向としては、二つの作の間には大きい相異がある。相異は魂、魄、如來、稻荷、重次郎、德次郎とに分れてはゐるが、その間に善惡の觀念の伴はないことである。「大福帳」から脈をひいてゐる善惡の對立の見られないことである。それならば京傳に於ける善惡の對立は「早染草」にはじまつたのであらうか。いな、その以前にある「早染草」の前一年、寛政元年の「早道節用守」がそれだ。

おぎやの花おきの客に、幸二郎、惡二郎の二人がある。女は幸二郎に惚れて、惡二郎を袖にする。惡二郎は何とかして女を廓から盜み出さうと考へる。それには韋駄天の守が必要だと思つて、さる所から盜み出す。その守がいろいろの奇瑞を現はしたはてに、幸二郎は花おきを妻とし、惡二郎は支那の地で殺される。「節用守」では別に善かどうだといふ事はないが。惡が滅ぶといふ點に於いて一種の敎訓物になつてゐる。

して見ると、「早染草」は「于時藍染」から一轉した趣向をとると共に、これ等の要素を一つに纏めたわけだ。「浮氣樺燒」が縱にも橫にも擴がりを有つてゐたやうに、これにも、縱橫の聯絡が存在してゐたのである。何も、この二つの作に限らない、京傳の作のどれもかういふ徑路を踏んでゐる。いな、作者の誰彼の別なく、黃表紙が皆それである。それを見ないなら、いつそ、黃表紙は千篇一律の語を以て蓋うてしまふのがよいやうだ。

七

「早染草」の出現は京傳、の著作の傾向からいへば、隨分自然の推移だといはれないこともないが、彼としてはなほ一つの試みであつたらう。あゝまで喝采されたのも、或は案外であつたらう。しかし、案外だと思ひながらそのきつ掛けを逸す京傳ではない。早速後編を書き出したのが翌年の「人間一生胸算用」だ。これは筋を前編のよりやや複雜にし、更に善と惡とを心と氣にいひかへた、心學の色調を一段とはつきりさせるための工夫だ。後一年をおいて、第三編を出した、「堪忍袋緒〆善玉」だ。これまたもとの善惡にかへつた。通つた筋でなく、いろいろの場合に、善魂惡魂の爭ひをさせることが、趣向になつてゐる。

更に、寛政八年には、馬琴は「早染草」の第四編と銘うつて、「四遍摺心學草紙」を出版した。これは玉の數を多くして、善惡の外に首、金、若、涙、生根、膽、屁、手などの玉の名を舉げてゐる。とにかく、どこまで續く善魂惡魂の趣向であらう。黄表紙に於ける流行性がつくづくと考へられる。さういふ流行性を有つ時代の心が怪しくも不思議にも考へられる。

今いつたのは、善魂惡魂物の正系に屬するものである。一つの當り作があれば、正閏おのおの、統を立てゝ、それからそれへと擴がつてゆくのが、黄表紙の常。殊に京傳みづからは絶えずみづからの作の中でそれを行つてゐた。であるから、善魂惡魂がどんな形に變化しつゝ、彼の黄表紙の間に出沒してゐたかを、一應檢討する必要がある。

「胸算用」と年を同じうする「盧生夢魂其前日」が最も早く現はれた變化物の一つである。これは善魂惡魂を外題にもいつてゐるやうに夢魂とした。善魂惡魂が人間の善行惡行を操ることを、夢魂が人間の夢に見せることにし

た。すなはち趣向の筋としては、「早染草」の天帝に當る夢魂の司、夢魂道人が夢魂どもに命じて、盧生邯鄲の夢の狂言の支度をすることである。京傳は自分の「早染草」の趣向に、古い「金々先生榮花夢」の趣向を撮合はせたのである。

けれど、當時の黃表紙愛好者の悅ぶところは、その趣向でない。やはり善魂惡魂の對立が面白かつたらしい。之れがまた善魂惡魂を復活させて、「緖〆善玉」を書かせた理由であらう。

京傳はまた「共前日」の工夫をそのまゝに棄てなかつた。彼は巧みにその中のあるものと、善魂惡魂の工夫とを一つに混ぜ合はせて「四人詰南片傀儡」を書いた。善魂惡魂は鬼と佛とにかへられ、「共前日」の夢魂の狂言方は、これでは南京傀儡の絲づかひにかへられてゐる。すなはち人間の善行惡行その他は、ことごとく鬼と佛が絲を操つてさうさせるのだといふのが趣向だ。丁度「緖〆善玉」と同じ寛政五年の出版である。

善惡から佛鬼に移つた趣向は、七年には「貧福道中之記」の貧福の對立となり、八年には「鬼殺心角樽(おにころしこころのつのだる)」の酒餅の對立となつた。

「心角樽」は角書に「酒神餅神」とあるやうに、酒神が段々と人を醉はして、しまひには心の錠をはづして、仁義禮智信の寶を奪ひ去るのを、餅神が頻りに妨げようとする爭ひが筋立になつてゐる。第十圖はまだ飲みはじめの者を、酒の神がさいなむところ、槌で頭を撲つて頭痛を起させ、胸を八人春にし、額の筋を出し、また丹を溶いて顏を眞赤に塗つてゐる。この酒餅の對立は更に翌年の「虛生實草紙(うそからでたまことのさうし)」の虛實と聯絡を保つてゐる。このやうに、趣向は變はるが、貫く教訓の精神には變はりはない。時の流行が教訓物にあつたといふにしても餘り度が過ぎはしま

いか。それには理由がある。教訓物の流行を誘導する力が、特に京傳の身の上に働きかけた結果である。

さうでなくてさへ、黄表紙の洒落が理に墮ちかけたところへ、例の寛政の治が齎す風紀振粛だ。戯作者どもは持前の洒落氣分で、もとよりそれ以上の政治關心でもなく、それ以下の社會興味でもなく、たゞ漫然たる洒落氣分で諷刺らしく茶かし、冷かしはじめた。たとへば、古今の大當りをとつたといふ喜三二作の「文武二道萬石通」などの類である、神經過敏な當局は直にそれ等に絶版を命じた。風紀振粛で戯作の種が乏しくなつてゐる上に、戯作の取締だ。それ等に反抗する氣力は、生憎と戯作者共に持合はせがない。いな、その必要もない、それよりも彼等は戯作取締令下に風紀振粛に苟合するのが身の安全でもあり、時の動きに乘ずるものである、と考へて教訓めいた作を出さうとする。中にも、さういふ點に機敏なのが京傳だ。彼は試みに「早染草」を出した、それが豫想以上に時好に乘じたのである。これだけでも教訓物に專念すべきを、まして、京傳には處分問題があつた。黄表紙の洒落をもとにかへす元氣さへなくなつて、教訓を標榜せねばならなかつた。

京傳が處分を受けたのは、時事の諷刺のためでない、禁を犯して洒落本を書いたためである。あの小心な京傳が、どうして、そんなおほそれた事を仕出來したかといへば、永い間の關係はあり、氣は弱いし、旁板元蔦屋の懇請を斥けかねたものらしい。とにかく寛政三年には手鎖の刑に處せられたのである。

でなくても、京傳はその前年に戯作を廢めるといふことを蔦屋に申出した、事は三年版の「箱入娘面屋人形」の序に見えてゐる。序は版元蔦唐丸の言葉となつてゐる。――拙作者京傳申候はたゞ今までかりそめにつたなき戯さく仕り、御らんに入候へども、かやうのむゑきの事に日月および筆紙をついやし候事、さりとはたわけのいたり、

殊に去春などは世の中にあしきひやうぎをうけ候事ふかくこれ等をはぢ候て、當年より決して戯作相やめ可申とわたくし方へもかたくことわり申候——　といふのが、その一節である。そこへ處刑である、京傳は餘程考へたらしい。しかし、版元からはせつかれる、戯作を廢めては活計が立たない。洒落本を絶つた彼はおそる恐る黄表紙の筆を進めた。翌四年の作がどんなに黄表紙らしくない代物であつたか。「唯心鬼打豆」のやうな敎訓はいはずともあれ、「天剛垂楊柳」「梁山一歩談」のやうな「水滸傳」の筋書、でなければ「霞之偶春朝日名」のやうな古い滑稽本の焼直し。それどころか、「桃太郎發端話説」のやうに、赤本のむかしに還る氣持と、讀み本風の文章でゆかうの心持を一つにした至極安全の作ばかりだ。彼が最も得意とする黄表紙に洒落本をとり合はせる作風はもう見られない。洒落本の洒落も、黄表紙本來の洒落もすつかり洗ひおとされた形である。

しかし、才人京傳のことである、洒落本の洒落が黄表紙から封ぜられたところで、また例の細心な工夫から何かかはりになるものを案じ出さずにはゐない。敎訓物のぱつとしないもので押すなら押すで、何かしら、目を娯ませる手段を工夫する。わけて彼が畫家であるといふ强味は、敎訓物の黄表紙に他に眞似の出來ない畫趣向を創めさせた。寛政八年あたりの「人心鏡寫繪」などから、その作風が見え出した。九年の「虚生實草紙」「三歳圖繪稚講釋」十年の「百化帖準據本草」「兒訓影繪喩」「化物和本草」十一年の「假名手本胸鏡」「京傳主十六利鑑」など、皆それである。

「鏡寫繪」もまた一面心學物であつた。「早染草」から分岐した系統に屬する。これには別に纏つた筋はない。ただ人の心との間に表裏があるといふことを、いろいろの例で示したのであるが、その裏の心を、胸のあたりの小判

形の鏡にうつる姿で表はすのだ。その鏡の繪の趣向から、事の表裏やら、事と事の因やらを繪で對照的に示した「虚生實草紙」の趣向が生れる。さてはその虚實を影繪で示さうとする「兒訓影繪喩」が作られる。こゝに例として舉げた二圖の中、第十一圖は風の荒くなつたにも拘はらず、釣に有頂天になつてゐる人の危さを、劍の上を渡る影繪で示したのである。第十二圖は金を借りる人と返す人の心の中を、地藏と閻魔の影繪で見せたのである。

この繪の趣向を形そのまゝに傳へたのが「京傳主十六利鑑」である。外題が兆傳主十六羅漢のもぢりであることはいふまでもない。たとへば。第十三圖の借越損者はとかく物を借り越すのは損じやとの洒落、下の圖は借金の淵に陷つて苦しむさまを見せたもの、また第十四圖の貧須盧損者は貧をするのは損じやの洒落、下の圖はいくら儲けても足らぬ心を燒石に注ぐ水で見せたのである。他の十四損者も皆この趣向で出來てゐる。

このやうな趣向は、前に舉げたもの以外、なほいくつかゞ數へられる、一つ一つを舉げるのは煩はしい。要するに、それ等は何等かの形に於いて「早染草」の脈をひいてゐることが注意せられる。更にまた繪の形の類似してゐるのを合はせる趣向が强く働いてゐることも注意せられる。その方が教訓の側から離れて獨立したのが、「化物和本草」の類である。尤も、それは純粹な黄表紙ではないが、教訓と類似の繪模樣を合はせた「教訓繪兄弟」が基本になつてゐる。勿論、京傳の作、寛政七年の版である。

京傳が筋を離れて、ばらばらな繪の趣向を眼目にしてゐる黄表紙に專念してゐる頃は、また筋を通す讀み物を、他の樣式の小說で書かうとして苦心してゐる時だ。洒落本といふ武器を奪はれた彼としては、當然の考慮だ。他の樣式の小說とは讀み本のことである。彼はそのはじめに此二樣式を書き分ける事に工夫を凝したやうであつたが、

やがて無益な努力であることを知つたらしい。むしろ、その調和をと考へ出したのが多分享和元年頃ではなかつたらうか。二年出版の「通氣智之錢光記」「呑込多靈寶縁起」「賢愚湊錢湯新話」「枯木花大悲利益」が內容に於いて、別に聯絡のないにも拘はらず、春夏秋冬の名の下に一部のものらしく見せかけたのも、幾分かその氣味がありはしないかと想はれる。しかし讀み本の「安積沼」を出した享和三年には、黃表紙のすべては相變らぬ斷片的繪趣向であつた。けれど、翌文化元年版のものになると讀み本と黃表紙は完全に調和し出した。「江戸砂子娘敵討」「五人切西瓜斬賣」にしても、皆筋を主とした讀み物である。繪はその筋を追ひ、文の影身に添ふ形になつた。同二年版の「復讐煎茶濫觴（はじまり）」にしても、「花土（えど）自慢名產杖」にしても、その傾向は一段と明瞭になつた。天明八年の「復讐後祭祀」の繪をやゝ剛く描き直し、文章にもいさゝかの變化をつけ、題を讀み本風の「殘燈奇談案机之塵」に改めたのもこの年であつた。その翌年の「敵討兩輛車」「敵討孫太郎蟲」になると、冊數も多くなり、また前後に卷を分つやうになつた。もう、かうなると合卷といつてよい。なほこれを黃表紙といふのは、單なる體裁の上の區別に過ぎない。四年版のものになると、新しい形の合卷型となつて、京傳の作は黃表紙と關係を斷つたのである。

かうなると、京傳の黃表紙の末期のものは、おのづから彼の處女作の主題にかへつたことになる。またもとの無洒落に復活したわけである。なほ、中間の敎訓物が勸善懲惡の形になつて、敵討事件に溶け込んだとも見られる。そして局部々々で洒落をふりまく、つまりはこれまでの彼の傾向を綂べ合せた形だ。轉んでもたゞは起きない彼の悧巧がつくづくと考へられる。

京傳が黃表紙と絕緣した頃は、他の作者も同じ行方をしてゐた。たゞ彼等の多くは、京傳より早く敵討物にとり

かゝつてゐた。彼等は京傳の如く、綺の趣向に迷ふことなく、驀然と讀み本風の筋書のもとに、合卷へと向つたのである。その點からいへば、いつも黄表紙の流行に先じてゐた京傳は、かなりの流行おくれとなつたことになる。何故に迷つてゐたか、何故に流行おくれとなつたか。京傳が黄表紙の型に對する執着がさうさせたのである。つまりは彼の性分、たとへば石橋を敲いて渡るほどの性分だからである。その性分が、かつては一つの當り作があれば、それを繞つて、細かい工夫から、幾つかの當り作を成させたのである。今はかへつてそれが邪魔をしたのである。しかし、さすがは京傳である、これならではと見込がついて、敵討物にうち込んだ時、やはりまた敵討物の覇王となり、更に合卷作者としておしもおされもせぬ者となりきつたのである。かくして春町、喜三二以後の黄表紙は、どこまでも京傳によつて代表されねばならなかつた。

（昭和五年四月「日本文學聯講」）

黄表紙から合巻へ

一

どこまでも春町喜三二の傳統を守つて、今の流行に與せじと意氣ごんでゐた三馬も、いひわけたら〳〵「親讎胯膏藥」を書かねばならなくなつた。出板は文化二年、板元は本材木町の西宮であつた。敵討の草紙とは倶に天を戴かずとひねくり浮世を惡くすねて、二三年休んで見たが、形勢おのれに非なり、つひに此方から板元の御機嫌を伺つたやうに本文に書いてあるのは、わざと裏から、横からものをいふ戲作者一流の洒落に過ぎない。事實はやはり、「式亭雜記」のおのれ三馬敵討の草紙は嫌ひなりしが、西宮のすゝめにまかせて、始めて敵討繪草紙を編み云々といふにあつた。

「老寶製法滑稽妙劑」の角にも、「うちまた膏藥」の表題にも明白である妥協の看板を今更に掲げねばならぬ程、その頃の黄表紙世界は敵討物が全盛であつた。その形勢も三馬のあの作から聽いて見たい氣がする。

近來敵討の草紙のはやること夥しく、いづれも同じ趣向にて、男道の意氣地、女色の執心、劒術の仕合、角力の勝負より事起り、或は親をうたれ、或は兄弟をうたれ、艱難辛苦して、つひには敵を討ちおほせて、許嫁の婚禮お

定りのめでたしめでたしと舞納るまで、皆ありか〳〵の事なれば、歴々の作者頭を割つて魂膽を碎き、新しき敵の打ちやう、珍しき人の殺し方、あはれなる尋ねやう、危き逃げ方をたくまんと寢る目も寢ずに、よき趣向をつけねらふと雖、わが朋友たる南仙笑楚滿人がお家の株には及び難し。數年來の老巧一時に洒落を拋きて、世の中敵討の草紙に一統した事は、これ楚滿人の手柄といふべし。

楚滿人が「敵討三味線由來」を出版して、不首尾に終つたのは天明三年であつた。「敵討義女英」を出して好評を博したのは寬政七年であつた。その十二年の間に於ける黃表紙の世界には大なる推移があつた。寬政七年から今年文化二年まで、九年の間、「義女英」の模倣追從を馴致した理由は、黃表紙の內外に亘つて、多くが數へられる。

その據つて來るところは、別の問題とするにしても、さし當つて考へねばならぬことはその流行の結果である。「合卷」といふものが成立したのであつた。合卷の成立は、何も敵討物のみでない、いろ〳〵の條件による事ではあるが、直接には敵討物が最も多く關與してゐる。敵討物には、はじめから一貫せる筋がなければならぬ、複雜なる事件も必要であつた。黃表紙の約束として、五丁一冊が一單位であるが、もう在來の二單位、三單位ほどでは、その要求を充せさうもない。單位を重ねることは隨意であるが、製本の不便がそこから起る。これも黃表紙の約束として、一單位每に、表紙裏表紙をつけて獨立した一冊とするからである。合卷とは畢竟その不便を除くために每冊の表紙を省いて、數冊を一卷に綴ぢ合はせるとの義であつた。文化三年板元西宮から出版した三馬の作「雷太郎強惡物語」は、十冊を前後二編に分つてゐた、即ち二冊に綴ぢ合はせたのである。これが合卷のはじめである。三馬の工夫に係る。

三馬はその翌年以來合卷が流行して、黄表紙仕立が廢つたことを大に自慢してゐる。ことし文化七年に至れど、今に合卷流行す、相撲取おのが勝たる咄ばかりするに似たれど、合卷繪草紙を世に流行させしは、予が一生の譽と思へば、老後の思ひ出いさぎよく侍りと文化七年の手記「式亭雜記」にいつてゐた。

五丁一冊の單位の重ね方が少ければ少いほど、輕い洒落が存分に振舞ひ、多ければ多いほどいふ所のまじめに落ちつくのが、その頃の繪雙紙の第一條件であつた。三馬が合卷を工夫したり、その流行を悦ぶのは、おのが尊しとする春町喜三二に弓をひく事になりはしなかつたか。どうでもよさそうな書冊の形式が、案外重い力となつて內容を規定するのが江戸文藝の常である。三馬の新工夫はつまりおのが嫌ひな敵討物、またそれに準ずるものゝ流行を助長させることになる。それにしても、その頃の社會の事情、また小說界の趨勢は三馬がおのれの矛盾に氣づかうが、氣づくまいが、年々に合卷の流行の度を增して、餘勢はるかに明治の初期にまで及んだのである。もし三馬がそれを見てゐたら、「式亭雜記」に何と書き添へたのであらうか。ついそんないらぬ事まで考へられる。

二

老實と滑稽との二途かけるといふ「親讐うちまた膏藥」の表題の中には、もう一つの洒落が隱されてゐる。敵討物の中にまた敵討の趣向があるといふことである。まづ過去の世の敵討が上卷と中卷にしるされる。現世の敵討が下卷に書かれてゐる。二つの敵討は因果の關係をもつて繫ぎ結ばれてゐる。三馬は京傳の「忠臣藏前世幕無」から、この趣向を得たのである。またその趣向を繪の上に示さうとする。すなはち喜三二の「天道大福帳」を粉本とした。

いはゞ敵に身を寄せてなほ敵を謀らうとする此作には、こんな苦しい思案をしなければならなかつた。いつもの模倣癖からだけではなかつたらしい。

それから見ると、京傳の「復讎後祭祀」の趣向はすら〳〵と樂に運んでゐた。黄表紙に於ける京傳三馬の腕のちがひもさる事ながら、周圍の事情がさうさせたのである。作は文化二年から十七年前の天明八年出版であつた。

元龜年中、濱松の家中瀬間井横藏が廣居與太左衛門を殺す。一旦逃げ延びたが、みづから與太左衛門の一子要太郎のもとに名乘り出でゝ討たれる。要太郎は早速に父の讎を討つたので、殿のおぼえもめでたかつた。

二丁半に書れた「後祭祀」の發端をかい摘めば斯うである。作者は筆をあらためてまた書き出した。「これ作者の大べら坊め、今時こんなまじめな敵討の趣向が見られるものかとは愚々、細工は流々、仕上げを御覽じろ」

楚滿人は敵討物流行の開祖ではある。しかし、敵討物の元祖ではなかつた。赤本にこそ少けれ、黒本にも、青本にもずつと見出される敵討は、黄表紙に於ても、「三味線由來」以前數多く世に行はれてゐる。たゞまじめな筋合がぱつと受けないといふだけで、絶える事なき一脈であつた。作の趣向がいづれも似たり寄たりであることは當然である。京傳はその古めかしいものをひきうけて、目先の變はつた代物に仕立て直さうとしたのである。

要太郎は考へた、世の敵討は皆艱難辛苦の限りを盡した後で目的を果するのに、自分のはあまりにあつけなさ過ぎる。敵討に艱難が附隨の條件であるならば、時の順序はどうでもよからうと、改めてお暇を頂戴して苦勞しに出かける。まづ乳母のもとを尋ねる、乳母の娘に色をしかける、毒を食べて病氣を求め酢を飲んで痩を欲する。乳母の娘を身賣させる。虚無僧ともなる、遊里通ひもする。揚句には非人ともなる。すべて敵討物に書かれたほどのも

のを實行した。いよ〳〵眞の艱難に入つて、飢餓に陷つた要太郎が、今度はほんに死なうとする時、主君が通りかかつて救はれた。主君はこれまで要太郎の影身について、するがまゝのたわけを盡させたのである。乳母の娘お山の身賣も、廻者を遣はして買ひとつたのである。主君はたわけとはいへ、孝行の眞似である、賞すべしと褒められ、またお山がたわけの道具になつたのも、深き緣なればとて二人を夫婦にさせる。

要太郎は主人の情にてもとの武士にたちかへり、父與太左衛門と敵横藏が亡靈を神に祀り、主人へ願ひて、御城下へ三十間四面に竹矢來を結び、白木の萬燈を造り、白裝束にて祭禮を行ふ。今まで要太郎が盡したるたわけは、皆あとの祭故、今の世までも、これをあとの祭といひ傳へける。

かつて、一度京傳はこの趣向を手かけたことがあつた。すら〳〵と樂に書いたやうなと見られるのも當然であつた。三年以前に大當を得た「江戸生艶氣樺燒」の色男株を敵討に讓つたまでゞあつた。要太郎は即ち艶次郎、お山は即ち浮名、主君は即ち艶次郎の父親であつた。あの心中の狂言までをしたたわけ男の滑稽は、ゆきすぎから起る。こゝの主君も、最後に要太郎に「とかく萬事ゆきすぎると此通りだぞよ」と仰せられてゐる。二者全く同趣同案であつた。

三

飽くまで洒落で固めた此作が、十七年の後、たま〳〵「膀膏藥」と時を同じうして、歸り新參をする。題も改めて、「殘燈奇譚案机塵（つくゑのちり）」といふ。表題を讀本めかしたのは、いふまでもなく、今の好尙に應ずるためである。內容も

とより幾分の訂正を必要とした。

訂正の一つは筋の變化を需めることであつた。横藏が要太郎に討れる。本文に註して、「此うち始終くらがりにての事なり」とある。後の伏線であつた。後の事柄はかうである。主君は要太郎の難を救つて、もとの武士にとり立て、かねて買ひとつたお山、今は奥方附の腰元になつてゐたのと夫婦にする。さて殿は仰せられる。

まだ汝が膽のつぶれる事あり、見る」べしとて一間の襖を開かせ給へば、亡父與太左衛門敵横藏たち出でける故、これは幽靈か夢かと要太郎又膽をつぶすは理なり。與太左衛門がいふやう、汝もの毎にゆきすぎたる生れ故に親の慈悲にて、その心を直しやらんと密に御主君に願ひたてまつり横藏殿を頼み、口論と僞つて、横藏殿に害されし體をなし、汝が眼をくらませしは、芝居で聞ゆるのり紅の血しほ、張子の首皆暗闇のしな玉なり。果して汝ろく／＼に念も入れず、迂濶にゆきすぎのたわけを盡すこと斯くの如し。

これが祭禮のくだりに代つてゐる。

訂正の一つは、武家物らしくすることであつた。「後祭祀」の要太郎はどうがなして路用をなくさうと、拳の稽古にうき身を窶す。世間の敵討ならけん術を習ふ場を、術といふ字をぐつとぶん流すのであつた。「案机塵」の要太郎は、眞實の劍術を習ふ。下手なために相弟子になぐられ、怪我をしては療治に錢をとられてゐた。訂正のこの方針は言葉だけを改めたが地の文は同じであるに拘はらず、廓遊びの三つ蒲團の繪をば、土手八丁の景に改めたのである。その他拾ひ立てれば數多い異同であるが、要は洒落味の稀薄といふ一點に歸する。

さすがは京傳である。かう堅苦しく仕立直した改版にも、最後に一つの洒落をいひ忘れなかつた。

昔から敵討の本澤山あれど、此草紙のやうに、怪我のない無事な敵討は外には御座りませぬぞ。こいつは類拔と御評判御評判、さき〴〵の御評判。

四

この洒落をそのまゝにうけて、更にまた一段と仕立直したのが、一九の作「敵打先程御笑草」である。めでたいづくしの春なれば、おとし玉にも流行の敵討は氣がつまると、ひねくりまはして出放題、めつたに口を叩きうちと洒落たるは、ほんにこれがお笑ひ草と、はし書にしるしてある此作には、もとより京傳の改版物に於ける窮屈のあらう筈がない。もとの「後祭祀」にかへらうとする趣向立とも見られる。

筋はたわいもなかつた。一人の武士が同じ家中の者に、すりこ木で敲かれる。敲いた方は至つての臆病者故、後難をおそれて逐轉する。敲かれた方は武士の意地から、すりこ木で切腹しようとする。子は父を諫め、代つて敵討に出かける。すりこ木で敲きかへすといふだけである。怪俄ははじめからない約束になつてゐる。敵のあり所は直に知れた。けれど早く敲打を濟しては手がなさ過ぎる、孝心も薄い譯と、例のいらぬ辛苦に骨身を碎く。いろ〳〵の經緯あつて、二人は對面する。年來の父の敵とすりこ木で敲きのめす。相手はすかさぬ男で在り合ふ鍋を冠つてしまふ。瘤一つ出來はしない。これにて敲打ざつと相濟みめでたい〳〵一つうつてくれ、しやん〳〵〳〵と手を打て左右へこそ別れたとある。父の悦びは勿論のこと、殿の首尾もよかつた。父は悦びの餘り、相手のために歸參を

も願ふ。斯くて二人は和睦して兄弟分となつた。

一九はもと〳〵三馬のやうに草雙紙斯くあるべし、春町喜三二の傳統を忘るゝ勿れなど考へて、これを作つたのではなかつた。彼はこの作のどれ程のものであるかは、人からいはれないさきに心得てゐる。さればこそ、餘白がありさへすれば、今年出版の滑稽本の廣告をしてゐる。それどころか、「さて〳〵面白くもなき事を御覽に入れまして御座いますその代り」として、また滑稽本の廣告を卷末の口上に述べてゐる。

文化十二年、すべて黃表紙を離れて、合卷になつてしまつた今、一九は種が種だけになほ黃表紙の心持でゆかうとしたまでである。十五丁物にしたのも、「於六櫛木曾仇討」以來合卷の約束の口繪を形だけにして、「わざと口繪之圖」と題したのも、それがためである。しかし、表紙の錦畫仕立なのや、勝川春亭のさし繪の役者顏やら、合卷も合卷、おしも推されぬ代物であつた。そこに形式に於ける混亂が見られる。

文化十二年の草雙紙の世界には、安永天明の細み輕みは、どこを探してもありさうもない。さりとて寬政、文化初年とは全く色合を異にしてゐる。その間に於て、一九の計畫はうまくゆかう筈がない。むしろ、滑稽本にかへたなら、まだしもの事であつたらう。事實、その類はとうの以前に、草雙紙の範疇以外で存分に活躍してゐたのである。滑稽の內容としての混淆が、また此作に於て見られる。

とり立てゝいふには恥しいほどの「敲打先程御笑草」も、精々「復讐後祭祀」「殘燈奇譚案机塵」との間に細い一線をひいて見ると、どうやら、草雙紙推移のあとを辿るたしにはなりはせぬかと思はれる。あの何千部とある小冊子の一つ一つは、よしんば甲斐ないものであるにしても、すべてを網の目として、一つ殘さず結び合はせたな

ら、一々摸倣のあとを追うて、整理し、分類し、進化退化の實蹟を明白にしたならば、何かの意義を見出すことが出來よう。いつも同じやうな草雙紙概論、これもほんの片はしを讀んだだけの臆測をくりかへさずにも濟む譯である。さりながら、讀破するだけでも何千部はあまりに多い。紙魚は遠慮なくこの大切な資料を荒してゐる。

五

考察の範圍を小説の歴史の中に限つていへば、黄表紙から合卷への推移は、多く讀本の影響の下になされたのである。讀本の特質は、いふところのまじめである。洒落を忘れた黄表紙は、そのまじめを介して讀本に接近する。さては二つの者の違ひは、內容の繁簡と、さし繪の多少に歸する場合もあつた。讀本にも特に繪本といふのがあり、合卷にも續物の長編がある。その境はいよいよ區別することが出來なくなる。しかし、どこまでいつても草雙紙は草雙紙、讀本は讀本であつた。區別は作者の態度によつて決せられる。

京傳が文化三年に出した讀本「善知安方忠義傳」は古く歌舞伎淨瑠璃にも見えた平將門の遺孤良門の事蹟に、謠曲善知鳥の趣を撮合せたものであつた。しかし、京傳は前編だけしか書かなかつた。將門の臣善知安方の子千代童が母の錦老熊を打ち、孝行の德によつて源家の臣となり、富貴を極めること、また善知鳥と化した安方夫婦が、忠義貞節の功德によつて、天堂に生れ、歡樂を極むることなどは、後編の豫告の中にいつてはゐるが、つひに筆にするに及ばなかつた。ところが京傳は文化七年に、合卷「親敵うとふの俤」を出した。一部六冊、これを二冊の合卷とした。叙述の順序に少しく違ふことはあるが、全編は「忠義傳」の繁を省き、要を摘んだだけで、筋の上に異な

るところがない。梗概をとり來つて繪解本にしたといつた方がわかりが早い。うたふの俤といふも、或は善知忠義傳の俤の義であるかを思はせる。たゞこれは親敵うとふといふだけに、後編に於てはなさるべき千代童の敵討その他をいはねばならない。最後の半丁に、ほんに附錄といふほどにこの結末をつけてゐる。丁度、新聞小說の續物がまだ完結に至らぬ中に、芝居なり、映畫なりは、いち早く結末を見せてゐるのと同じ譯であつた。それはともかくも、作者は讀本を重く、合卷を輕く見てゐたのである。

京傳は「忠義傳」の繪に就いて、このやうにいつてゐた。「繪を加ふるはもと童の目を慰るのみなれば、畫人の意を枉げしめ、今様の目なれたる樣に畫かしむ。さるうちにもたま〳〵古に基くもあり。故に本據の圖目を記して、古き新しき畫風をわかち知らしむ。」さうして、源賴光土蜘蛛退治物語繪、十界圖、法然上人行狀繪卷物、百鬼夜行圖、蘭人解體圖、土佐光信變化圖、などの目を擧げてゐる。

「忠義傳」のさし繪の中で、これ等の古圖を參照して、大に趣向を凝らしたのは、大宅光圀相馬古御所に見る怪妖の圖である。さま〴〵の姿が五丁に亘つて畫かれてゐる。それが合卷には省れてゐる。合卷の方では白猪婆々の立廻りなどが變化を示して、三丁に亘つて畫かれてゐる。何故省かれ、何故加へられたか。加へられたのは、今の芝居の舞臺姿である。省かれたのは、むしろ好事の人にのみ見て貰ひたい凝り方である。正面切つては、童蒙のための讀本といひながら實は大人に讀んで貰ひたい、見て貰ふつもりであるのが「忠義傳」の作者の腹であつた。「うとふの俤」の方は、これこそいふ所の童蒙相手の今様ぶりを專一としてゐたと思はれる。

京傳の意見をさし繪の上から當て推量するよりも、もつと手短なのは、春水が合卷「假名讀八犬傳」に就いてい

つた言葉である。余がこの假名讀八犬傳は欲する處、一筋に婦幼の愛に媚るをもて、唯捷徑を旨とすれば、其眼の人は嘲りて龍宮の門護てふ海月ならねど是も又骨なき策子と言はれやせん云々。こゝにいふ「假名讀八犬傳」と原書「八犬傳」の關係は、直ちに合巻と讀本の全體の關係として見てよいやうである。

けれど皆が皆「假名讀」の態度ばかりでなかつた。文政、天保の頃には隨分と「忠義傳」負しの繪趣向の凝りやうを見せたのも多かつた。讀本の作に緣少くて、合巻に力を盡した種彥等の作にその特相を知ることが出來る。そこに合巻の中に於ける推移變遷を知ることが出來る。

六

剽竊とか摸倣とかいふ言葉は、迂濶にいひかけられないのが戲作の性質であつた。實はそこに趣向がある場合が多い。據るところが明になつて、はじめて附會の趣向がわかり、洒落が活躍するのであつた。今なら剽竊せられたとて咎め立てをし、摸倣であると貶むところを互に笑ひ合つて、古きを新しきに燒直し、染直す腕自慢を黃表紙作者ばらはするのであつた。されば一々趣向の原據を斷るものさへ少くない。三馬の「𩿎訓歌字盡」などもこれである。

「脐膏藥」と時を同じう春町喜三二の傳統をふりかざす態度を同じうするこの作にしては、あまりに野暮くさい卷頭の「一部の大意」であつた。

頃日よくばりのひまを得て、明の李卓吾が山中一夕話を見るに、桐城女の條下に至り、一つの趣向をたくむに、

我邦梅揚散人が婦人やしなひ草に見えし伊勢や日向の物語に彷彿たり。和漢一雙の奇々怪々、おもしろく覺ゆるままに是を淨瑠璃のお染久松お梅粂之介が事蹟にひるがへし、又八文字屋の竹齋物語にまじへて例の草紙に綴る。是則虛をもつて實に傳へ、實を以て示すの戯作者だましひ。趣向の種をあからさまに語るは、放下師の小刀の仕様を教ゆるに似たれどちかごろ敵討の草紙に滑稽の名をうばはれ、三年筆を執らざれば紋切形をうしなひたる作者が筆の手まどひなり云々。

今更に注意せられる讀本の影響である。それでもなほ作者は春町喜三二の昔にかへれといふのである。あの輕みはとても求められさうもない。こじつけるの、燒直すの、染直すのといふのは、もう禁句らしい。むしろ讀本作者の合じるしである飜案といふ語を以てする方が當を得てゐるのである。こじつけと飜案と、歸するところは一つであるが、その語に伴ふ感じには大いに違ひがある。讀本と黃表紙とはその感じを標準としても區別せられる。

合卷もまた讀本と共に飜案に伴ふ語感を享有することを許されてゐた。讀物となるとなほ更であり、まして支那の稗史小說を假りるものになれば當然であつた。例としては傾城水滸傳もふさはしい。しかし、今はまがひといひ、みたてといふ草雙紙言葉を用ゐてゐるのを、面白いとして、「漢楚賽擬選軍談」を引くことにする。

智者は自適して、流行の先達たり、庸才は自適せず、人の遊ぶ所に遊びて、流行を追ふものなり。果敢なき冊子物語も時好に愜へば行れ、愜ざれば行れず、書林永壽堂、こゝに見るよしや有けん。傾城水滸に伯仲すべき新著もがなと予に請へり。されば、唐山の稗史は西遊水滸の二書の外に、又飜案すべきものなし。よつて漢楚の闘戰を賴朝義仲兩雄の確執に綴易て、もて這物の本を作れり。抑清盛の秦始皇に似たる、賴政の陳涉に似たる、賴朝の漢高

祖に似たる、政子の呂后に似たる、時政義時の諸呂に似たる、牧子の呂須に似たる、義經の韓信に似たりしよしは、前輩聊評論あるを、讀書者の話柄にすめり。只是のみあらずして、義仲の項羽に似たる、覺明の范增に似たる、巴の季布に似たる、兼光の鐘離昧に似たる、伊東祐親入道の田横に似たる、廣元善信が蕭何曹參と相似たる、成敗異同ありといへども、亦その趣なきにしもあらず、啻頼朝の臣時政の壻に樊噲の如きものなく、功成名遂て身退きたる、張子房の如きものなく、智辯敵を欺くに足る食其陸賈の如きものなく、諸呂を誅して漢室を全くせし陳平周勃の如きものなし、その無ものは些許似つかはしきを撮合して、一人なるを二人の事とす。譬ば下邳の圯橋の張良は牛若ならねば不可なるが如し。蓋漢楚の興亡は史記漢書の正史あるを演義にも亦綴たり。そを又譯せし通俗の漢楚軍談さへあるを、婦幼はなほも見まく欲せず。讀むといへども、解し易らぬ異邦の軍記なればなり。夫江南の橘の江北に栽られて、枳となるものは、便是風土の妙也。かゝれば漢楚演義の一書も予が架上に措ときは變じて本邦の軍記となれり、又是風土によるものから、實は時好に推當たる作者の手津間としりねかし。

婦幼のために、異邦の軍記を飜案するといふことも、合卷の性質を知る上には、忘れてはならぬ一節であるが、それよりも賽擬選と重ねて題名とするだけに、また表紙に和漢撮合と銘うつてゐるだけに、さすがに工夫を凝らしてゐた。同じ賽を名に負ふにしても、文政十二年のこの作は、文化六年の「敵討賽八丈」の比ではないのである。

これを「金々先生榮花夢」の飜案ぶりに比べればどうであらう。謠曲「邯鄲」に據りながら、わざと「枕中記」などの支那物から來たやうに見せてゐる序文の手品は、あまりに見え透いた藝當であつた。

文に曰く、浮世は夢の如し、歡をなす事いくばくぞやと。誠にしかり金々先生の一生の榮花を邯鄲の枕の夢も

ともに粟粒一炊の如し、金々先生は何人といふ事を知らず、おもふに古今三鳥の傳授の如し、金ある者は金々先生となり、金なき者はゆふでく頓直となる云々。

切り口上の眞面目な中に、金々とか、ゆふでくとか頓直とか、いふ言葉を挿んでそこからをかしさを生み出さうとするのが作者のはからひであつた。金々とは當時の通言で生粋の客をいひ、ゆふでくは田舎者をいひ、頓直は惡客といふことであつた。この序文の態度は即ち全篇の趣向に見られる。本邦風にせし、世話風にし、洒落ぶりにする飜案は、もとより「漢楚賽擬選軍談」のかゝはり知らぬところであつた。

馬琴の漢楚軍談を見立てる場合には、見立てから來る洒落を全然期待してゐなかつた。彼は見立た後も、なほ眞の一致を缺くことを虞れてゐた。義仲を項羽に見立ても、その勇悍膂力項羽に及び難く、項羽は忠信義仲に劣つてゐることを氣づかつてゐる。粟津の敗に義仲には奮戰の氣力がなかつた。垓下の敗に、項羽はなほ漢の十將軍を殺魔けた。かういふ二人の相異はあるものゝ、彼が虞氏と訣れる愛惜悲歌の趣と、此が松殿殿下の姫との別の趣と相似たることに、飜案者は一段と力瘤を入れるのであつた。原書を重じ、彼我の相違を大く見る馬琴は、みづからこの飜案ぶりに慊らなかつた。たゞ「童蒙何をか知らん」の合卷の氣易さ故に、讀本ほどにやきもきはしないだけである。

讀本には種々の要素があるが、その中でやゝ重い位置を占めてゐるのは、あまりに常識沙汰ではあるが、勸善懲惡の思想である。とかく童蒙婦女のためといふ目安を立てゝゐる合卷には、讀本の上越して、この要素が存在せねばならない。合卷には、それと全く異なる要素、それを裏切る數々があるにしても、先づ正面からはさうなければ

ならなかつた。まして馬琴の作にはそれが多い。

「風俗金魚傳」の第五編の序は例として引くに足りる。

予が戯に著したる風俗金魚傳の四編、一十六卷にして未盡さず、今亦茲に四卷を綴りて五編となして、局を結べり。其事すべて唐山（からやま）なる金翹傳の飜案なれども、間亦作者の新意をまじへて、もて勸懲を正しくしたる、就中此編には增補せしもの尠なからず。金翹傳なる徐明山を下野の太郎に飜案（かんがへ）しは、彼は草賊烏合の頭領、是は將帥名家の子孫、その起る所も、霄壤の差別あり。かくて翠翹は無双の孝女薄命にして、百切千磨の苦艱はありとも、これをもて草賊の妻となす時は、皇天照給はぬに似たるべし。作者の用心こゝをもて、勸懲の意を明すに足れり云々。

「金翹傳」は支那の稗史の常として、勸懲の裏に潜む淫猥と殘虐が多かつた。馬琴は努めてそれ等を除いて、なほ勸懲の意を强めてゐる。「金翹傳」は早く寶暦の頃に譯されたのである。たゞしその譯文は原文に拘泥し過ぎる。そこで馬琴の飜案となつたのである。童蒙兒女はなほ解し難き文體を見たからであつた。

こゝに於て書賈がいへらく、此書も傾城水滸の如く、胎を奪ひ、骨を換、本邦の事に綴り易（かへ）なば貌に誇り、才を負み遂にその身を愆といふ世の女等の誓ともなりなば、徴善の一端ならんと請こと屢なるによりて、疎鹵なる事はこれを添へ諄々しきはこれを削りて、云々とある初編の序は、二重の意味に於て合卷の特質を説明するものであつた。

七

讀本合卷の飜案の對象には、支那の稗史小說ばかりでない、わが歌舞伎淨瑠璃がある。先蹤は早くから八文字屋本に於て見られる。それだけでない、草雙紙發生の一つとして忘れてならぬのは、歌舞伎淨瑠璃の片鱗を見せた赤本の存在である。黑本靑本となると、筋も少しはくはしさを加へて來た。黃表紙となると、もう目眩しさに堪へないほどの曾我物、忠臣藏物である。當狂言の品さだめ、名ある役者の褒めたゝえ、それからそれと煩はしい。敵討物までが、その大方は歌舞伎の脈を受けてゐた。かゝる傳統があるところへ、人物を役者の似顏で畫かうとするのであつた。合卷の天下を三分して、その二を保つのが歌舞伎物といつてよい。

書替狂言とはさても怪しいものである。古い狂言を綯ひ交ぜにし、さし込みにして、そこから新しい狂言を案じ出すのである。見物は却つておのが古い知識がおもひ寄らぬ新しい姿となつて出現する變化をのみ悅んでゐた。獨創を缺くことを非難しなかつた。丁度、黃表紙などの燒直し、こじつけを嬉しがるのと同じ事であつた。さういふ不思議な現象を生み出す當時の社會にはどんな特殊な事情があるかは、最も緊要な問題で、また此小稿では觸れてはならぬことであつた。筆を擱くきつかけを失ふからである。草双紙が歌舞伎と結びつく時に、草双紙の作者は、いよ〱歌舞伎作者の手法をも合はせて、換骨奪胎の工夫を掟にし、書替狂言を紙の上にあつてする結果を生じたといへば、今の場合はよささうである。そうして、その一人の例として種彥を擧げれば足りるやうに思はれる。

種彥を擧げれば、まづ作品の例としては「正本製」の名を揭げなければなるまい。けれどあまりに知られてゐるそれを、さしおいて「昔々歌舞妓物語」をとることにする。それにまた初日「夕ぎり藤のうら葉」二日目「怪談三島お仙」の二つの序文だけをあげて、說明を省くことにする。短い序文の中からも種彥の好みをしかと見きはめる

ことが出來、「正本製」と遠つた趣向を知るに足るとおもふからである。

初日の序にいふ。たゞしそこには一人の口上いひが幕外にゐる。いふまでもなく、作者を見せた譯である。

偖初編といたさず、初日と記しましたるは、近年正本物語、芝居ばなし、又三題穴さがしなど名づけ、落し噺しの連中にて、道具建をかまへ、鳴物を入、かぶき狂言を其まゝ見ますやうにいたされまする名人がござりますれば繪やうもそれにならひましたる故にござりますなれども、末々まで、私の化物のやうな顔で身振をいたして居ります繪では、御輿にもなりませぬから、當時の役者似貌にかきくれますやう賴みまして、諧人國丸の隨意につかまつりました。初日より七日目まで出しつゞけて賣出しまするの間、あるひは百年五十年むかし〳〵のかぶきばなしを御聞あそばすとおぼしめされ、おんもとめの程を願ひあげます。

二編即ち二日目の序文は斯うであつた。

又野暮なる口上を申し上げまする。初日には坂田藤十郎藤屋伊左衛門の狂言を申し上げましたところ、近曾の怪談が流行いたすところから、なんぞ化物の出るものがよからうと、御見物の御好にございますが、こはだ小平次、四家雜談の類は、昔の狂言ではござりませず、新に作りましては題意にもはづれます、又作りましたるところが、今名人の噺のやうには書とれませず、漸水木辰之助餞振舞と題ますを見いだしまして、申しあげます。これは辰之助江戸くだりの節、都萬太夫座名殘狂言、作者は近松門左衛門にござりますが、百三十餘年の昔となりましたれば、時好のたがひましたところは例の愚作を加へまして申上げます。

（昭和二年十月「早稻田文學」）

洒落本の本質

一

洒落本が單なる通の生活の描寫や叙述でないことは、その流行のはじめの日に呼ばれてゐた通書の名が間もなく影を潜めた事實からも考へられる、通といふ意義にも用ゐられれば、滑稽といふ意義にも用ゐられるのが洒落といふ言葉である。通と共に滑稽をも重き要素とするそれ等の書は洒落といふ名を冠らすことによつて、明確にその實を示すことになる。洒落本の名が通書の名に代つて呼び榮えられたのはそのためである。同じく通といつても、滑稽といつても、內質に於て程度に於て、樣々のちがひがある。まして二つの要素の結合する狀態にもちがひがある。洒落本のいろいろの相はそこから起つて來る。

黃表紙の中にも通と滑稽を經緯とするものが少からず見られる。それと洒落本とをどう區別するかは形式のうへでは殆ど問題でない。黃表紙には每丁に繪があり、洒落本には挿繪が一葉、多くても數葉といふ見やすい標準が存してゐる。

洒落本の多くがほゞ一定した書式を有つといふことは、また黃表紙とのちがひを明にする。書式は對話を大く、

地の文を小く、大概の場合は二行に割つて書くことである。狂言本の體裁を摸倣したといはれる。對話を大く書くのは對話を重く扱ふため、對話によつてその人も、人の心の動きも、その人に關するすべてを表はすことが出來るとまで重く扱ふためである。つまり狂言の臺辭の役目を勤めさせるのである。洒落本が狂言本の書式を摸倣するのはそれと性質を同じうするものがあるからであつた。さういふ譯で洒落本が狂言本であるとすれば、黄表紙は繪入筋書といふことになる。

二つのちがひを斯う認めるにしても、内容の異同を定めるにはもとより一應の考慮を拂はねばならい。京傳の黄表紙「江戸生艶氣樺燒」は種類を異にする二つの續編を有つてゐる。形式の目安はすぐに、「碑文谷利生四竹節」を黄表紙との見分け、「通言總籬」を洒落本と見分けさせるにしても、色男でないのに色男めかし、通でないのに通らしく振舞ふをかしさを筋だけで考へるとなると、どれも同じことになる。しかし、一應の考慮から、黄表紙と洒落本にはをかしさの演ぜられる世界に廣狹の差があることを見出す。黄表紙では廣く世間に亘つていひ、「通言總籬」では狹く吉原に限つてゐる。「總籬」の吉原は洒落本の全體から見て、深川を籠め、岡場所をふくめて、遊里とまでいひ代へられる。隨分遊里へ行く途上もしるされてゐるところから、遊里を中心とする世界ともいひ直される。とにかく、場所の限定が洒落本を黄表紙と區別する一條件をなしてゐる。

それよりも大いちがひは作者が通を扱つてゐる態度である。黄表紙の作者は、こゝにも通を廣い世間の一現象として見る。通と流行佛と、政治の變動日と、米の相場の間に區別をおかない。一木一草と何のけぢめをなさない。おし曲げ、ねぢ曲げ、或は誇張し、或は顚倒して滑稽の具とすることは通といふ當世の尊いものに對しても容赦は

しなかつた。ところが洒落本作者がいつさういふ態度で通の威嚴を冒したか。作者の誰も誰も鞠躬如として通の前に畏み申してゐる。洒落本のどこに通を滑稽扱ひにしたものがあるか、もしあつたとしたら、それは通の實德なくして通の虛位を擁する者に對してである。「通言總籬」の主人公は、作者も讀者も實の通の淨玻璃鏡で照してゐると知らずに、鼻蠢かして半可通をも行つてゐるのがをかしいのであつた。洒落本の滑稽は半可通を點出することに於てはじめて得られる。

二

洒落本は江戶のものとして榮えたが、發生の日は上方がさきである。寶曆七年の「異楚六帖」は江戶の洒落本の祖といはれてゐるが、その以前に大阪に數種のものが存してゐる。それが揃ひも揃つて漢學者流の手に成つてゐることがまた洒落本に纏綿する滑稽味の問題に觸れて來る。事は「好色一代男」にまで溯る。西吟はそれに跋して、娌謗田よりかけあがり大笑ひ止まずといつた。性慾に關するもの、それ自體が笑を伴ふことであるのに、まして西鶴はわざとこれを迎へもした。今の西鶴を讀む者は西鶴の滑稽を以て性慾の嚴肅を妨げるものとして、彼の轉合書を憎々しく思ふのであらうが、當時の見解はまさに西吟の言の如くであつたらう。これがために「一代男」は持て囃されもしたらう。しかし、浮世草紙の作者は漸く西鶴の高笑ひを封じた。あまりに粹を尊び重んじたはては、粹の中にゐて、笑ふほどの餘裕を持ち得なかつたのである。後の浮世草紙の笑には、きまつて粹に囚へられた苦しさがつき纏うてゐた。その苦しさから脫れて。忘られてゐる昔の高笑にかへらうとするのが當初の洒落本である。そ

れには漢學者は極めて都合のよい地位に立つてゐる。遊里の粋を遠く離れるために、修身齊家は町人の才覺よりもずんと役に立つ。粋と漢學、この對照だけでも随分と笑はせるに足りるのを、支那文物流行の世は、彼等によい舶載の武器を與へた。支那の艶史は西鶴の好色本の與り知らぬ戰法を以て笑をとつて押へた。漢文で島の内の景情をうつし出し、孔釋老の三聖を白樂天に坐敷を持せて李白の揚屋で遊ばせたのも彼等であつた。支那ばかりでなく、わが古典から六歌仙をも拉れて來て、「支那の客子路の亭主役をさせるのも彼等であつた。斯ういふ行方は江戸の「異素六帖」にも見られる。遊里の通をいひ立てながら、漢詩と和歌とをあしらつての滑稽がそこにある。この洒落本發生當時の滑稽の手段は終に洒落本の終にまで繼續した。題號に於て、序に於て明にそれを見ることが出來る。上方當初のものに板橋雜記の類が引かれてゐることは、こゝにいふまでもない。今は寛政の「部屋三味線」にもこの事あるを知るためにその一節を拔いて見る。

近來淸人の著す所の艶史多く渡り妓戸娼門中國に蕃衍し、蠻豹に及を知る。其書を閲に異域も本朝も人の情といふものは更に變る事はなけれども、蓼くふ虫も好々の感はあるなり。明の世には北里に金陵といふ公の花街ありて廓妓の風俗衣冠正として、我軍方今の芳原の如く、又金陵につゞいて、一箇の外場所あり。是は風俗伯人に同じうして浮花川の妓兒に似たり。

支那に艶史のあるのは、もと詞人風雅文墨の戯に出づるとのことである。洒落本のはじめの頃の作者は皆その心を以て筆を執つてゐた。そこからは樂しい笑が聞かれる。しかし艶史の作者には、諸謔の間に隱れて慷慨の氣をもらすものもあるとのことである。それをわが國に索れば風來山人のたぐひであらう。山人が戯作に筆を染め、また

細見に序を書くのは、世に用ゐられぬ不平の日のすさびである。鋭鋒はおのづから現はれて凄い諷刺となる。その頃に山人がしばしば通書の根元と名ざれてゐるのは、洒落本には、諷刺はなくてかなはぬ要素であつたからである。野暮の罵倒、半可通の諷刺これが洒落本が有つをかしさである。山人の白眼がいかに青通を睨めつけたかは、述作の上に明かに知ることが出來る。

三

江戸の洒落本の形式内容は遊子方言によつて治定したといはれる。それには半可通の一人が最も活躍する。彼が活躍すればするほどをかしさは加はる。彼が通を說き立てれば說き立てるほど、後から化の皮の現はれるをかしさの度が增す。作者はそこに二重の計畫を考へてゐる。一つは滑稽のためである。一つは通そのもののためである。その者は身に通を體し得ねばこそ、半可通ではあるが、口耳の學としての通は若い息子を敎へるに十分である。洒落本は滑稽を重い要素とするにしても、通を離れて成立するものでない。洒落本には趣向があれば、必ず、通の叙述をいかにして全くし、さて、どうして滑稽に收めるといふ企圖であると見てもよいことであつた。たとへば「伊賀越增補合羽之龍」は深川仲町の世界に伊賀越事件をとり入れたものであるが、作者歸橋は、その趣向のうちに大通の服裝をいひ出でゝゐる。世を忍ぶ身の政五郎は醫者通庵から大通散を買ひ求めようとする。通庵の功能の說明は斯うである。

まづ此大通散を一服呑むが否や、佐倉炭の如き兀も鼠の尾に似て艶を出し、巖石にひとしき菊石も一つによつ

て笑窪となり、羽織の桁は衣にあらず、眞田の紐は素麵の瀧を欺き、胸高の細き帯は、おはゞの背より餘程廣く、尻の先きに引かゝつて小便に行ば肌をぬかんと疑はれ、太身のお太身のお太刀のはげたるは、鬢ざしもどきの鮫鞘と變り、銀流しに毛彫の煙管は鐵と銀の張り分けに光り、金毛織の煙草入は古渡の金更沙と古び、薙刀形の藁草履はふすべ緒の五枚裏附と變じ、丈高からず低からず、色白過ぎず、ほんのりと、いき過ぎずに下卑でなく、女郎に買はれず、引かれもせず是大通のおほよそなり。

大通散による變身は不通散によつてもとにかへることが出來る。歸橋は洒落本作者の常套手段である通と野暮の對比をこの藥一服の功能によつて盡した。さういふ工夫の數々が、傑作の名を成させたのであらう。通と野暮と、その間に半可通をおくのが洒落本が通と滑稽を交錯する型であつたが、粹に囚へられた浮世草紙のやうに、洒落本もまた通の中に潜り込んで小聲にものいひがちの或期間があつた。たとへば京傳の「通言總籬」の如く、「古契三娼」の如きがそれである。また「傾城觿」もそれである。これ等は吉原の一娼家、深川品川のある特殊の事柄に就いてのうがちである。通の描寫なり敍述なりが微細に入る時は、自らさうならねばならぬ。しかも、作者は滑稽を忘れてはゐない。たゞ通の外に滑稽を求めないで通の內に滑稽を得たとする。うがちといふものゝ性質はもとよりそれである。けれどそれには通の中に蠢く苦しさがある。苦しさは通の手を緩めて貰つて通と樂しく遊びたいと考へさせる。洒落本の世界がその岡場所からあの岡場所へと轉ずるのも、その考を實現するための焦慮とも見られる。しかし、それは甲斐のないことである。そこには直ぐにその岡場所あの岡場所のうがちが出來てしまふのであつた。

四

「田舍芝居」の出現はさういふ傾向を一轉させた洒落本であつた。これはまた洒落本の滑稽を考へるために重要な資料でもある。江戸の洒落本を江戸の遊里を中心とした世界の記述と限定しなくても、田舍芝居はとうに洒落本の埒の處にあるべきである。現に天明板のその書が享和に再刻せられた時には、洒落本特有の小本形を棄てゝ中本形となつた。中本といひ、小本といひ、皆本の大さからの稱呼である。滑稽本とは多くの場合中本を內容からよぶことであつた。

「田舍芝居」が田舍言葉をそのまゝに田舍の芝居を寫し出したのは、洒落本が扱ふ野暮型の一つである田舍客を延長したものと見られる。しかし、それよりも作者萬象亭自ら風來山人の門生と肩書へつけるその人が、傳へられた師匠の皮肉を洒落本の行過ぎに對して爆發させたものと見るべきであらう。その頃の洒落本が妙に苦みを混ぜての微笑を喜ぶのを、以前の高笑に復れ、洒落本の初めに復れの諷刺であつたらう。作者は序跋に於てその態度を明に示してゐる。序に今の洒落本のうがちの弊をあげていふ。

底の底を穿んと欲して八萬奈落の汚泥を掘出し、陋の陋を探さんと欲して、六萬坪の塵芥を搔出し、見ぬ事淸しの影穿鑿、くら闇の事をあかるみへ持出されて、娼妓の身の上には迷惑に及ぶ事少なからず、是見るに興なく、見らるゝに害あり。實に笑を取るに失して苦笑を惹出すに至らしむ。是をや過たるはなほ及ばざるが如しとやいはん。

序はまた通の寫實の弊を擧げて滑稽の要素を多く加へねばならぬことをいふ。

凡稗官を編に一つの書法あり、よく近く譬をとらば立役眞劒を拔いて實に敵役の頭を刎ね、やつし女形をとつて前をまくり肌を現はしてえならぬ事を仕出し、道外褌を弛して睾丸を振廻さば、日を竊し片腹を抱ゆべけれど、正の物を正で御目に懸けずして、しかも正の物の如く見するを上手の藝と云つべし、戲作も亦然り、實を以て實を記すは實錄なり、虛を以て實の如く書きなすは戲作なり。洒落本の洒落を見て洒落る洒落は、洒落た所が洒落にもならねば只をかしきを專とすべし。

「江戸作者部類」には、この序が因をなして京傳は終に萬象亭と絕交したとある。京傳の洒落本は「通言總籬」「古契三笑」とのみいはず、どれもうがちを生命としてゐる。京傳が萬象亭の皮肉を眞向にうけて、かつとばかりに怒つたことは、さもこそと頷れる。しかし、さすがは京傳である。萬象亭の言を過ぎたり、なめげなりとは憤つたものゝ、「田舍芝居」の存在を惜むものではなかつた。それは弟子竹塚東子の「田舍談義」に序を書き、跋を寄せてゐることから明に推せられる。「田舍談義」は談義と芝居の違ひこそあれ、全く萬象亭の作を模倣したものであつた。京傳の跋の一節にいふ、

閲をはつて獨笑やまず、懷にして茅屋にかへり、頓に四方の君子の笑をまねかば翁が本意なるべしと云々。

京傳と萬象亭との相異は、洒落本の二つの要素の孰れを重く見るかにある。萬象亭は滑稽を重く見よといつたけれど、通を棄てよといはなかつた。通の片はしもない「田舍芝居」を書いて洒落本斯くの如しとはいはなかつた。序に「洒落本にあらずして野夫本なり」というてゐる。言は決して皮肉から出たのでなくして、洒落本の解釋から

出たのであつた。
何はあれ、滑稽と通との二要素があつてはじめて洒落本は成立する。洒落本の歴史は殆ど二要素の消長の狀態を叙すればよいことであつた。しかし通と滑稽が對立してゐる間は、未だ洒落本の華とはいはれない。二つの要素が融合した狀態嫖客と遊女が顧みて自らををかしと思ひ乍ら弄する手練手管、この通の戲の描寫こそ、最精彩を發するところである。たゞ洒落本作者の多くは筆をその手前でとゞめる。これが單なるうがちであつた。或は用なき筆を戲の後にまで屈せる。さうなれば通でも洒落でもなく、野暮に墮する。その野暮本がわづかに題材によつて滑稽本と區別せられたのが人情本であつた。

（昭和二年四月「國語と國文學」）

洒落本展望

一

中には美濃紙を四つ折にしたのもあるが大體の大きさからいへば半紙四つ折、紙數からいへば精々五十枚どまり、少しの例外を除けば讀み切りの一冊物、それに土器色の表紙をつけた、いはゞ唐本仕立といふ體裁なのが、書籍としての洒落本の型である。かういふ小冊子が、内容に一つの型を有ちながら、寶曆頃から文化頃まで年々相踵いで、かれこれ五百近いほど出版された。一つの群とし、集團として江戸時代の小說の中で相應の勢力を占めてゐた。

最も傑出した典型的な洒落本の作者は、山東京傳にとどめを刺さねばならない。彼こそは實に洒落本を作るために此の世に生を享けたといつてもよい。その恰好は素質と閲歷とによつて、作り成した洒落本はとりどりに持て囃されたのであるが、わけて京傳らしさ、洒落本らしさを最も多く見せてゐるのは「通言總籬」である。天明七年の出版である。

二

その書の荒筋。

江戸は日本橋の伊勢町の新道、喜之介の住居、女房おちせが小女相手にたたきの流しで狆に水を遣はせてゐるところへ、出入の太鼓醫者惡井志庵を同伴した若旦那艶二郎が門口の管簾をおしわけて入つて來る。艶二郎は入る匆匆「ここのうちの流しは松葉屋の湯殿といふもんだの」といふ、松葉屋は有名な吉原の遊女屋である。もうここにさつと吉原の匂ひをきかせたのである。主人の喜之介は昨夜深川の茶番があつたので遲くなつたと、今起きたばかりの寢むたさうな顏で、忍び駒で三味線を引いてゐた。それを志庵が、「客を逃した新造といふ顏だぜ、丁字屋だと帳場でしかられたといふ顏だ」といふ。丁字屋もまた吉原で聞えた遊女屋である。吉原の匂ひはいよいよ濃くなる。一座の話は吉原、深川、品川へと飛んだ擧句は、結局吉原に落ちついて、中でも重きをなす遊女屋の店々の特徴の吟味やら、店々特有の流行言葉の穿鑿やら、遊女の品さだめやら、三人の吉原通は、もと吉原で遊女勤をしてゐた女房をも交へて細かい穿ちをいひ立てる。二階に小便所の二ところ有るのと、階子を庭からあがるやうに付てあるのは、丁字屋ばかりだとか、丸海老屋には階子が二ケ所あるとか、扇屋の小便所ほど遠いのは無い、寒い時分などは大儀だとか、吉原の知識が詳細に並べられる。その間に艶二郎は京町の女郎が色仕掛けで呼ばうとする誘ひの手紙をうぬぼれ心からさうとも知らず得意氣に見せかけた、その女郎のためには馴染女郎の松田屋のおす川と切れてもよいなどと喜之介に話しかける。萬事を承知な喜之介はよい加減な返事をして、おだて上げる。

さうかうする中に時刻はよいと二人は喜之介を拉れ出して吉原へ出かける。喜之介の內心の喜び、此頃あちらに深い仲が出來たからである、それをさすが通り者の女房は氣どりながら素知らぬ顏でおくり出す。

喜之介宅の場ともいふべきこのところはをはり、これに續く吉原通ひ船の場ともいふべき幕は開けずに、ただ、
　此間、柳橋より大棧橋まで、船中の酒落、吉原揚子のふさならで、あまり長々しければここにもらす
の繋ぎをつけたなりで、吉原土手の場ともいふべき短い一場をつける。仕出しめいた生通共の穿ち宜しくあつて、あの三人が登場する。すぐに茶屋駿河屋の場となる。三人が茶屋の座敷から前を通る見知り越しの藝人や遊女や禿などを呼びかけて挨拶などしてゐるうちに、松田屋のおす川が新造、禿どもひきつれて來る。盃事しばらくあつて、皆々は松田屋に行く。店先からすぐにおす川の座敷。
　そこへ表座敷のおいらんとめ山が艶二郎に挨拶して廊下を通る。座敷へは女藝者幇間など來ての大騒ぎ、その光景をわざと略して、三人がおのおの座敷へ收つたあとを、新造どもが寄り集うて客の蔭口、志庇もさんざ貶される。その中に夜も更けわたり、あたりの靜まつたただ中を、新造が合圖においらんのうしろ姿、喜之助が屏風の内へはひる。作者はここをわざと地の文で輕く書いて、
　此所の妙意作者しばらくあづかるなり、此本をみる人、大體御推察あれかし
と附け添へる。どうやら、その遊女はとめ山であらうと前のおす川座敷の場の記憶から見當をつけさせただけで、その向う座敷の場、死ね死なうといふ仲の痴話の描寫となる。また轉じて、散々に女郎が厭な客をきめつける隣座敷の場の描寫となる。わざと對立させた場面である。
　それにしても老獪なのは京傳の筆であつた。他所の座敷の様子はこまごまと傳へながら、喜之介ととめ山の出合ひは逃げてしまつた。それが讀者の想像にまかせて却つて效果をあらしめる。さてまた主人公艶二郎とおす川の肝

心の床の中のいきさつをも同じやうに逃げて、地の文にのみものを言はせてゐる。
艶二郎は宵より京町のわけにておす川と大口説、それをおす川生得艶二郎をすかぬ故、いささか事を手にして寢るつもりの、皆狂言にてうちの前の松飾りを見るやうに、うしろ合せの白川よふね。
さうして夜はさらりと明けて茶屋の男の迎、新造どもの見送り、下卑た遊びぶりを面白く語り行く二人の安物買の客のあとから、三人は大門を出で駕籠でかへる。

三

かういふ筋を京傳はすべて會話を主として書いてゐる。その言葉の調子や癖でその人となりを見せることに力を凝らして書いてゐる。人物の風俗は、その着物の柄から持物の細かいものまでを註のやうに附け添へる。人物の行爲は一々會話を承けて、トいうてとか、トしてとか、いふところのト書きで書いてゐる。かういふ文章の體裁はすべて脚本風である。といへば人物の名を框で圍ふこと、ト書などはむしろ臺辭といふべき會話と區別して、二行に細く小さく書いてゐることなど、脚本の書式そつくりである。これが內容としての洒落本の一つの型である。かういふ型は描寫の便利から來てをる事はいふまでもないが、外に作者の遊び心が上演を豫期すべくもない紙上脚本を書かせたのである。その遊び心の出所は何などの問題は草双紙の紙上演劇發生の問題と合はせて考へると面白い。しかしここにはその吟味を避けて、京傳の遊び心が「通言總籬」のをはりに淨瑠璃の一くさりを添へさせてゐるだけをいふことにする。「通言總籬」で扱つたのは深川、品川、吉原と土地は一つでないが、結局は遊里の遊びであ

り、描くのはその遊びぶりである。これがまた內容としての洒落本の型である。洒落本の舞臺は何も江戸に限られたわけではないが、その吉原やら深川を筆頭としての岡場所さては大阪なら新町、島の內、ずつと樣子をかへて中仙道は輕井澤などと土地は違ふがいづれは遊里に關せざるものは無い。時に江戸といふ土地が有つてゐる文化そのものに關して言說をする型破りもあるが、それも結局遊びの規準である通の發生素地を說き、通の社會的意義を論ずるに過ぎない。型を破つたやうなものの、實質は依然として型の中に在る。

四

洒落本がかういふ型を決定するまでには、それ相應の順序があつた。

洒落本が體裁を唐本仕立にしてゐることも、發生が支那の艷史、情史の類に關係があることを暗示してゐる。すでに延享四年の「百花評林」になると、題簽までが緋唐紙といふ凝りやう。內容はといへば花に比喩した遊女の品目を主として漢文で書き、それに評のやうに註のやうに和文を書き添へてゐる。いづれは漢學書生のさかしらであらうが、何故かういふ書を作るか、その動機は極めて見易い。支那の文人が匿名で艷史の類を書くのと同じだ。思ひ切つた淫猥の事柄を美辭麗句で朧化しながら、聖賢の思想に附會させるそれ等の艷史は、彼等がどこまでも聖賢の教を尊重してをりながら、その固苦しさをちよんの間ではあるが逃げて、やれやれといつてゐる心の姿だ。聖賢の思想に附會するのは、之を冒瀆するのでなくて、その威を藉りて滑稽感を深めるための技巧に過ぎない。我が邦の漢學先生のある者、また漢學書生の多くはすぐにその點に共鳴することが出來た筈だ。殊に漢文といへば固苦し

い感を與へる異國日本の書生どもには、さういふ書の面白味は本場の人々の受けいれる二倍三倍になる。その本場の人々が感ずる程度のものなら、われにはわれの古典がある。初期の洒落本は彼の情史を模倣して漢文で書くと共に、またわが擬古の文體の戲文をもとりまじへた。この餘風が洒落本には、本文に似ても似つかぬ堅くるしい漢文、また雅びやかな和文の序文をつけることを一つの型としてゐる。現に「通言總籬」の二つの序文の中の一つには、妙に「源氏物語」あたりの古典語をひねくりまはしてゐる。

これも初期の作品「異素六帖」は作者名こそ匿名であるが、漢學者澤田東江の筆であることが今では明になつてゐる。「異素六帖」がすでに支那の書「義楚六帖」のもぢりである。佛者、儒者、歌學者が色道を論じ、吉原を說く本文の外に「唐詩選」の詩句と百人一首の下句とを組み合はせて、吉原の事相に牽强附會させてゐる。まだ固苦しい洒落であつた。

そこへゆくと大阪の「聖遊廓」となるとずつと碎けてゐる。それには孔子、老子、釋迦の三聖が廓に遊びて、孔子は大道太夫、老子は大空太夫、釋迦は假世太夫を合方とする趣向がある。三聖とその敎義を面白く配したばかりか、亭主を酒好みの李白とし、幇間を白樂天とするのも面白い。どうしても漢學先生の戲れのあとが歷々と見えて面白い。卷末に「くるは唐韻」と題して、訛澤山ながらも廓中の用語を支那音で書いてあるのも注意しなければならない。

とりわけて會話體で書き、また脚本風に扱つたことも、注意しなければならない。その體裁をとつた最も早いものの一つである。或はこれがその體裁のはじめだといはれてゐる。洒落本の歷史の上に於いて、洒落本の型を治定

する段取りに於いて特に留意すべき一書である。出版されたのは寶暦の七年。

孔子とか老子とかの名を利用することに於いて、滑稽感を誘ひ出さうとする要がなくなるほど、やがて洒落本は洒落本自體の歩みを進めた。もう情史、艶史の模倣を脱却し得たのである。忠實な寫實の態度で眼前の遊里風俗に對したのである。折々は淨瑠璃で馴染な人の名を利用することがあれば、それから聯想される情痴の氣分を易々と書中に開展させようためである。

五

寶暦頃の社會には二つの力が動いてゐた。その社會組織をそのままに持續させて生活を安定にしようとする方に動くものと、それに慊らないで、機會これを許すならば、うち破るまでにはゆかずともせめて、搖がして見たいと思ふ方に動くものとか、或る對立をなしてゐた。勿論、力としては後者は前者と比べものにならない。結局安定したのであるが、そのしばらくの間の、少しの動搖が、當時の文學たとへば、平賀源内の戯作などにも反映してゐる。あの白眼以て世間を睨めつけ、皮肉以て讀者につめ寄る彼が、戯作の筆を棄てゝ、あの頃に割合に多い或る種の者と腕を組んだならば、何等かの陰謀を劃したならば、勿論事の成功は思はれないが、より大きいより強い源内を出現させるきつかけ位はなしたかも知れない。そして彼と腕を組む仲間には、隨分匿名で初期の洒落本を書いた手合もあつた筈だ。その頃の洒落本の戯れの中にも出様次第ではかなりの反抗に醸成される要素も無いわけではなかつた。しかし、それも洒落本の型が決定するまでの事である。型がさういふ氣分をおひ退けたのでない。さういふ反

抗氣分の喪失が型を決定させたのである。年々相踵いで出板させる洒落本が原因となり結果となつてます〳〵世間を落ちつかせてしまつたのである。隨分、洒落本を產み出す氣運が江戸時代の命脈を寶曆明和で斷ち切らずに慶應まで持ち越させたのであるともいへる。洒落本の典型的なものは一時危かつた病後の保養の遊山旅の記念品だともいへる。

洒落本作者山東京傳の出現した頃には、すでに洒落本の型は決定してゐた。その型をひたすらに守る彼に、何の危險思想があらう。尤も彼もその筋から處分を受けた事はあつた。それは秩序破壞に關する罪でなく、風俗破壞に關する罪である。洒落本を風俗上不埒な本であるとして出板をさし止めたに拘はらず、之を著作したためである。この種の彈壓は一度搖がされさうになつた幕府の社會組織を、もう一度堅めようとする方針から出てゐる。一堅め堅めたあとは、またもとの洒落本御免となつた。けれど洒落本はあの寬政の禁以前ほど榮えない。それは内からの崩壞である。讀者が飽き、作者も目先きをかへて方向を轉換したためである。

六

山東京傳が洒落本を書くために生れたといふのは、日夜入りびたりの吉原遊び、しかも出來るだけに金をつかはずに濟まさうとする工夫が、一面には廓の事情に精通させながら、一面には決して溺れることなく、一種の批評家の態度をとらせることである。その事が洒落本の上に天晴な穿ちとなつて現はれる。それがまた惡どくなくあつさりと扱はせる。京傳が洒落本作者の隨一として推された點はそこであつた。

「通言總籬」に對する當時の批評は、喜之介と遊女の濡事を影にして奇麗事に仕立てた趣向、持てる客、持てぬ客の遊びぶりの書きわけなどを目立つてよい點として指摘してゐる。洒落本の批評家の態度がかうであり、讀者もこれであらうし、作者はもとより之に應ずべく筆をとるとすれば、一作出づる毎に、その趣向立はいよ〳〵小さく、穿ちはます〳〵細かくなる筈だ。作者だちは型を破らうなどとは、もとより考へない。飽くまで型の守りを堅くして、その中に籠らうとする。故に作者は狹い型の中にゐて、心を廣く動かさなければならない。その用意が遊女と遊客とを組み合はせ變化となり、それ等がとりかはす手練手管、戀の掛引の表裏の描寫となる。しかし描寫にいふ所の心理的分析を期待されない。そこに江戸の戯作の戯作たる所以がある。どこまでも安易な態度で始終するのが、江戸の戯作家である。わけて洒落本の洒落には通の意義があると共に、合せて滑稽の意義が存してゐた。その滑稽の心理的描寫に入る前に、輕く笑ひに轉じさせる。これが洒落本の洒落本たる所以である。

七

「通言總籬」の主人公艶次郎の本性は大野暮である。故に馴染女郎のおす川にも振りつけられてゐる。しかし、うぬぼれの强さはその大野暮を忘れて、ひとりで通人を氣取り、色男がつてゐる、そこを附け込んで腹黑い女郎が誘ひの手を出して蕩し込まうとする。惡井志庵は本來野暮でない。しかしまだ通とはいはれない。その野暮と通とがとかく互ひ違ひになるところから、通が嫌味となつて、よく遊女だちに厭がられる。半可通といふのがこれらしい。喜之介は通人といふのでもなく、通の道を體得してゐるわけでもないが、聰明が通の術を覺え込ませて、うま

く人目をぬいておいらんと忍び合ひの藝當をやつて退ける。他の二人に比べればまづ通人型に近い。この野暮と半可通と通との配合から滑稽と通とを交錯させるのが、亦洒落本の一つの型であつた。これは「遊子方言」あたりから出來てゐるといはれてゐる。それには一人の半可通が最も多く活躍してゐる。それが活躍すればするほど、通と滑稽がその後を追うて動き廻る。半可通はたゞ知識としてのみの通をふりまはして、やがては通となるべき無垢の若者を指導する。その言葉が多ければ多いほど、遊びの教科書として洒落本を扱ふ讀者も、若者と一緒に教をうけ、また鑑賞者としての讀者は、そのうがちの細かさを喜ぶ。けれど半可通は畢竟半可通で、側からその面皮が剝がれる。そこに滑稽が起る。この趣向が大いに受けて、後々まで踏襲されて、つひに一つの型をなし遂げたのである。

三人といへばすぐに聯想されるのは三聖が廓に遊ぶ趣向の「聖遊廓」であるが、あの滑稽は聖と廓遊びとの不思議な組み合はせで、はじめから滑稽を看板にしてゐるだけに、通そのものゝ働きは少い。それと比べれば「遊子方言」のはすべて通がみづから分岐させる滑稽である。他の輔を借りずとも事が濟むまでに洒落本の自給自足は成就した。

けれど、「遊子方言」と「通言總籬」を比べれば、その進歩のあとは一段と著しい。「通言總籬」にはさまで志庵の半可通、艶二郎の野暮をさう振りまはさずに、滑稽を恣にする。またその滑稽が哄笑を猥りにするものとは違ふ。靜に聞いてしめやかに笑ふといふ程度である。野暮の笑ひでなく、通人の笑ひである。通の眼でする穿ちがせる業である。されば當時の批評家も、喜之介宅の會談のうがちに、少なからず讚辭を與へたのである。京傳とても

大の得意から、そこの趣向を獨立させて、存分に吉原、深川、品川のうがちを精細に傳へるとて古契三娼を作り成したのである。

かういふ作柄は並々の作者の腕で出來るものでは無い。また作者によつては、洒落本はうがちの細かさよりも、高い笑ひを誘ふやうな滑稽を必要とするとの見解を持つ者も多い。かた〳〵以て半可通と野暮を活躍させる型がしきりに用ひられた。中には野暮の資格を田舍者に與へて、その言葉癖からも滑稽を添へようとしたものがある。その滑稽が江戸の遊里を世界として起る時、江戸の人々は限りもなく江戸に生れ江戸の文化に浴してゐる身の誇を感ずる。

洒落本の發生は京と大阪と江戸と殆ど時を同じうしてゐるが、數の上から見れば殆ど江戸に壟斷されてゐる。地方に洒落本があれば、それはいづれも江戸の洒落本の型を模倣するものであつた。江戸の人々がそれを讀めば、江戸を學ぶ態度を殊勝であるとするにつけても、なほ更に江戸の誇りを思ふのであらう。また江戸の洒落本作者で田舍の遊里を寫し出すものがある。これは江戸の通を標準として、そこの變通を評價し、その報告を江戸の人々に讀ませもし、また江戸の誇りを一段と大きくさせるためであつた。ところが、江戸にもその田舍風の遊里があつた。數多くの岡場所である。その一々を描く洒落本が少くない。これは何のために書かれるのであらうか。吉原の格を高め、吉原の誇りを大きくさせるためであらうか。さうでは無い。岡場所の發生は吉原の型を破つて清新を得るためである。岡場所の洒落本の流行は、洒落本の型を、せめて少しく破らうためである。いな、その型の中でいくらかの變化を求めるためである。江戸の中で旅して、田舍の變通を樂しむをかしさを傳へるためである。けれど、洒

落本の讀者はそれならいつそ江戸を離れて田舍の旅へ出て旅でをかしい變通遊びをするやうな、面白いものを與へよ。洒落本の洒落を滑稽にのみ獨占させる田舍世界の本、いはゞ野暮本ともいふべき者を與へよと作者に要求する。早くもその註文に應ずる作者が、たとへば一九の如きが、洒落本の型を捨てゝ、たとへば「膝栗毛」のやうな滑稽本を出して大喝采を博したのである。洒落本の型はまた他の作者からも破られた。戀の手練手管もさる事ながら、その裏に誠を添へる男女の心の動きを主題にした讀み物もあつてよい。浮川竹の流れの身の果さうなるまでの素性を細やかに書いた本も無いといふ筈は無い。

斯ういふ讀者の所望から、いち早く春水は「梅暦」のやうな人情本を創り出したのである。このやうに洒落本は滑稽本と人情本におのれの位置を讓つて、文學史的使命を終つたのである。

(昭和七年七月「婦人公論」)

讀本の發生

――庭鐘と秋成との關係――

一

讀本（よみほん）の名は繪を主とする草雙紙と對をなしてゐる。讀本はまた讀む事を旨とするものゝうちにありては浮世草紙とも區別せられる。さういふ小說の一體、たとへば「八犬傳」の如しといふ方が解り易いこれ等は、寶曆明和の奇談異聞の書を先蹤とする。しかも寛延二年の「古今奇談英草紙」を以てそのうちの嚆矢とする。

「英草紙」の作者都賀庭鐘は、その續編として「繁野話」「莠句冊」「垣根草」の三部の奇談集を作つた。後の讀本に影響する事が少くなかつた。こゝに「讀本の發生」の題目は廣汎に亘つていふべき事を要める。しかし、わたしはこれ等の書と、上田秋成の「雨月物語」とを對比することによつてのみ、二家の作風の相違と、その相違の由つて來る譯合を說かうとする。また事例を示すにおのおのから二三章を抽くにとゞめようとする。

庭鐘の四著は多く支那の小說の飜案といふべきである。時に飜譯といふべきものをも加へてある。秋成の「雨月物語」亦主として支那の小說に據り、時に逐語の譯といふべきものをも交へてある。即ち二家の作風の相違とは、支那小說に對してとれる二家の態度の相違といひなほされる。わたしは「讀本の發生」の題下にわづかにこの一點

を說かうとする。初期の讀本に關する重き問題の一つと考へるからである。

しかし、庭鐘と秋成が何を粉本とし、何を骨子としてゐるかの材料の調べは今日にはもう陳套に屬する、溯原すでに盡して、その當を得てゐる事であらう。わたしは語を發すれば則ち遼豕の誚を得る事をおそれる。何となれば庭鐘自身にしても、早く「繁野話」の據るところを說いてゐる。「繁野話」の序は十千閣主人と署名するも、それはもとより千里浪子と共に、庭鐘の別號近路行者の傀儡である。故に序に見えるのは直に庭鐘の言葉として聽かれる。いふ、「手束弓の故事に任氏の傳奇を繋ぎ」と。またいふ、「白菊の卷は白猿梅嶺の舊趣を假り」と。またいふ、「江口の始終は杜十娘を飜して」と。して見れば「紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話」は唐代の小說、沈旣濟の「任氏傳」に據り、「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は作者未詳の唐代の小說「白猿傳」に據り、「江口の遊女薄情を恨みて珠玉を沈むる話」は明代の小說「警世通言」、また「今古奇觀」の「杜娘怒沉百寶箱」に據る事が明である。

庭鐘、秋成の作が後の代に影響する事の多いにつけて、その典據調べは早くからなされてゐた。寬政三年の「拍掌奇談古加良志草紙」の序にいふ。

剪燈新話同じく續話の二部を國字に譯して御伽婢子とし、古今小說、今古奇觀、警世通言、拍案驚奇の四部より拔萃して英繁の二書とは爲りぬ。此の三編の書は御伽冊子の父母にして、作意の奇、作文の妙、見る每に新なる如く、讀む人手にして飽く事を知らず云々

これはたゞ大體を示したに過ぎない。更に集中の一話一話に就いて說くものがあつた。天明三年の「近古奇談諸越の吉

野」である。諢詞平話で書いてある題辭の一節にいふ。

諸冊子(英草紙、繁野話、垣根草、雨月物語)都是向稗官家之書譯將出來的、把那一兩个說了、英草紙之紀任重斷滯獄的話、是古今小說中那鬧陰司司馬貌斷獄的、也英草紙之黑川源太主得道的話、是今古奇觀中那莊子鼓盆大道的、也繁野話之江口遊女恨薄情的話、是今古奇觀中那杜十娘怒沈寶箱的、也垣根草之山村氏受用箇忍字的話、是今古奇觀中那襲私怨狠僕告主的、也雨月物語之夢應鯉魚的話、是向醒世恒言中譯得來的

示されたのは四五の例に過ぎない。それだけでもなほ飜譯と創作とを混同した無用の論議に地下の二人を苦笑させずに濟む事であらう。

たゞ引用の文中に一つの訂正すべき事がある。「醒世恒言」中から譯出したといふのは「薛錄事魚服證仙」をさすのであらう。三井寺の畫僧興義と涇州靑城縣の主簿薛偉とは所と人との違ひはあるものゝ、話の筋は大方似て居るところからさう見る事も出來よう。しかし、秋成の原據としたのは「醒世恒言」でなく、古今說海に收載せられた「魚服記」である。「魚服記」と「醒世恒言」とを讀み比べると直にその事が領かれる。「醒世恒言」は「魚服記」をもととして、文辭を多くすると共に、神仙の一條を添へる。證仙の題が一篇の題目となつてゐる。薛偉の前世は鯉の背に乘る琴高仙人であつた、夫人顧氏は西王母の御前に玉璈を彈ずる田四妃であつた。薛偉は今鯉となつて龍門にくさぐさの苦しみを嘗める、その報によつて靑城山廟の老君から因緣を明に示されたのである。斯ういふ筋は雨月物語にはけぶらひだに見えない、「魚服記」亦何事をも語らない。

「諸越の吉野」の作者の誤謬はあまりに諢詞小說に重きをおいた爲であらう。その誤謬は畢竟類推を恣にした爲で

ある。庭鐘、秋成の五部の書は多く諢詞小說に據り、中にも「今古奇觀」に據るのが過半である。今こそ手にする易さから漫に「今古奇觀」といふもの丶、精しくいへば、五部の書は多く「古今小說」「警世通言」「醒世恒言」また「拍案驚奇」に據るといふのが至當であらう。「今古奇觀」は實にこれ等の群話の中から拔萃したものである。「諸越の吉野」の作者はかの五部の書の中に「恒言」から出てゐる事を知つた、類推はおのづから「辟錄事魚服證仙」にまで及んだ。但、さういふ誤膠は、「夢應の鯉魚」を秋成の創作とするのに比べれば、殆どいふに足らざる事であらう。

一事の辯がやゝ煩しきに過ぎた。こゝにわたしは、「古加良志草紙」「諸越の吉野」のやうな記載を漁つたなら、かの五部の書の據所を一つ一つ明にされはせぬかといはうとする。それよりも、すでに教へられた「古今小說」「警世通言」「醒世恒言」「今古奇觀」「拍案驚奇」を讀下するのが捷徑であるといはうとする。さうした場合には「古今小說」に就いて一語を寄せる要がある。これは「喩世明言」といふ方が聞えが早からう。「通言」「恒言」と共に三言の名に呼ばれてゐる。但、寶暦明和に於ては、「明言」よりも多く「古今小說」の名を寓目する。天明の秋水園の「小說字彙」の援引書目にも「古今小說」としるされてある。

庭鐘、秋成を考へるには五つの明代小說を缺してはならぬ筈。しかもなほ足らぬのは「白猿傳」「任氏傳」から採れてゐる、これは庭鐘みづからが明に語るところであつた。して見れば唐代の傳奇をも參照しなければならないのであらう。それでもなほ足りないといふのは、「西湖佳話」がいはれて居ない爲である。この書は明代の一奇書として推稱せられる。

「雨月物語」の「蛇性の淫」は、しばしば諸書傳ふるところの蛇妖の譚に配するに明代の小說「剪燈新話」の「渭塘奇遇記」を以てし、また室町末期の物語「雨やどり」を以てするとやうに說れる。蛇妖の譚はしばらく措く。蛇性の婬を「渭塘奇遇記」に似かよふ節があるとすれば、うら若き王生が渭塘の酒肆に美しい娘をほの見た事と、豐雄が海郎が屋に美しい眞女兒に邂逅する事だけであらう。「雨やどり」またの名「時雨の緣」が問題にされるのは、時雨の折から傘貸したのが緣となつて、契をこめる中將されあきらと中納言きんかねの姬君との中らひを、同じく傘がとり持つ豐雄と眞女兒の上におもひ合はせての事であらう。これ等の考察は空しく秋成から嗤はれるに過ぎなからう。秋成は「蛇性の婬」のために、「西湖佳話」の第十五卷「雷墳怪蹟」を原據としてゐる。

わたしはこれをみづからの發見などとは夢さらいはうとせぬ。まさしく遂豕の誚を甘受せねばならぬからである。馬琴は天保四年に明にさう說いてゐる。

水戶の町人に美しい娘がゐた、いつも暗いところにばかり籠つて居る。水戶の藩侯は其の奇病を憐れんで城中に召される。娘はどうしても行かうとしないのを、皆々が無理からに連れ出す、城間近くなつた時、娘は突然堀の中に身を投げた。その後程隔て大暴風雨の日城壍の水中から蟠龍が登天した。馬琴はこれを筆錄した、また斯ういふ添へ書をした。

按ずるに右の怪談は西湖佳話に載せたる蛇怪の事と聊相類す。西湖佳話なる蛇怪の事は雨月物語に飜案して蛇精の婬と題したる是也。

斯うはいふものゝ、馬琴の言もまた遽に信ずべきでない。秋成が筆執る机の前に置いたのは、果して西湖佳話で

あつたらうか、それともまた「警世通言」であらうか。慌しく斷ずることが出來ない。「警世通言」また同じ筋の「白娘子永鎭雷峰塔」を收載する爲である。

庭鐘、秋成の溯原に就いては、斯ういふ事が多からう。或は陳套の言をなし、或は新なる岐路に迷ひ入る事を危む。故にこの稿はすべてに亘る溯原を旨とせずして、知られてゐる幾章によつて二家の飜案ぶりの異同を考査するにとゞめる。

二

「御伽婢子」の原本である「剪燈新話」と庭鐘、秋成等が主として據つた原本との間には大なる逕庭が存する。その書が違ふといふのでなくして、兩原本の文體の相違に就いていふのである。「新話」の傳奇體とその他の諢詞體とは支那小説史上に於ておのおの異つた領域を有する。それはまた我國に於て重要なるけぢめをなしてゐる。傳奇體の文は、駢儷の絢爛こそ加はれ、われ人の見慣れ、讀み慣れたるものである。從つて「新話」が天文の頃に渡來する直に飜案せられたことを奇とするに及ばぬ。まして「御伽婢子」が寛文の頃に出づるのは當然の事といはうか。しかし、寶暦明和に於ける三言その他の飜案に就いては、やゝ異とせねばならぬ。諢詞體は即ち平語俗言を以て書かれたので、本邦人の讀むに熟せざるものである。庭鐘、秋成はどうしてこれが讀めるやうになつたらう。

蜀山人の「一語一言」に庭鐘を傳していふ、「都賀氏、名は庭鐘、字は公聲、大江漁夫と號す、又辛夷館とも通稱六藏、大阪の人、儒を業とす。上田餘齋翁は此人に學べりと云。」餘齋翁とは即ち秋成である。秋成は几圭に

俳諧を學び、宇萬伎に國學を學ぶと共に、庭鐘の儒を學んだのである。また儒を學ぶの餘、小說稗史の講說を聞いた事であらう。しかし、學んでどれほどの力量を得たかを詳にしない。

庭鐘の師の誰であるかは、つひに聞くに及ばぬ。とにかくに彼は早き日に於てこれを學んだであらう。「通俗耆婆傳」、くはしくいへば「國字演義醫王耆婆傳」は「耆婆演義」の譯本である。譯者の名は巢居主人である。序文の署名の六藏道人、印章の公聲、これを大江流芳の「煎茶仕用集」の序の署名と合はせて巢居の庭鐘の齋號であることが知られる。六藏道人はこの書の序に於て諢詞小說の流行を述べてゐる。

但爲其言也常言俚語、所以易於彼而難於此、雖有一二入肆者、猶未洽能見賞翫、今也文化漸靡、反以彼爲易、遂至有家論戶傳、亦壯哉時也焉。

この書は寶曆九年に出板せられた しかも序の成るのは二十年の以前にある。庭鐘をして今更にかへりみて壯哉時也焉の歎を發せしめた諢詞小說賞翫の盛行の理由をあなぐるのは今の問題でない。わたしはたゞ何人がこの機運を促成したかを說かうとする。說くに當つて、まづ「唐錦」の著者椿園の言を引く。庭鐘のいふところを裏打して、更にその人を教へるためである。

近頃岡嶋、陶山、岡の諸名士小說を深く好み、俚言俗語に博く通じ譯解のあきらかにして殘りなきは 往昔より未なき所なり。是によつて海內靡然として中華の小說をもてあそび、且まれに本邦の小說をあらはせども云々

「唐錦」は安永十年に出板せられたる書、椿園は庭鐘の後塵を拜する人である。「唐錦」以外「怪異談叢」「深山草」

の作あり、また「水滸傳」を飜案して「女水滸傳」を著はした。その人のいふ岡嶋は冠山、陶山は尙善、岡は白駒の稱を以つて世に知られたる人々である。

冠山はもと長崎の通事、その賤職を慙ぢ退いて京坂にまた江戶に遊び諸學者と交はる。彼が支那音に通曉して居た事は、其の著「唐話纂要」の序跋に於ける諸家の推稱の辭に於て察せられる。嘗在崎陽與諸唐人、相聚譚論、其調戲謾罵與彼絲髮不差、旁觀者、惟辨衣服、知其玉成、其技之妙、大率如此ともいはれた。玉成はその字である。鳩巢の「駿臺隨筆」には斯ういうてゐる。『長崎の譯司岡嶋喜兵衛、名は援之、別號冠山、近頃東都に寓して時々余を訪ふ。其人放達にして學を好み最も唐話をよくす、是を淸人某に受くと云ふ。小說の書を讀むこと六百部に過ぐと、勤めたりといふべし。その最も解し難き書は「水滸傳」「金瓶梅」の二書なりと。又よく律令の書を讀む、近時荻生惣右衛門が「明律考」を著はせしもその傳を冠山に受けたりと。本邦人什麽、怎生、了、的などいへる俗語に通ずるも實に此の人の力なり。』荻生惣右衛門はいふまでもなく徂徠、その徂徠が諸門生と共に譯社を結んで支那語を冠山から學んだのはかくれなき事である。

冠山が江戶から京に移つた時、いかなる門下生があつたらうか。木下蘭臯は其の名の明白なる一人である。その他は知られずとも、必ず相應の數にのぼつたらう。「唐話纂要」「唐譯便覽」「唐語便用」を通じての間接の門下生は廣く世間に布く事であらう。「通俗元明軍談」また歿後の出板ながら「通俗忠義水滸傳」は新奇を要めてゐる當時の讀書界に寄與する事は大方ならぬ者であつたらう。それにしてもわたしは彼の著「小說讀法」の名をのみ聞いて未

手にせざるを憾とする。讀本發生の問題は、この書によつて幾多の解を得るやうに豫想せられる。

岡白駒は冠山の風を望んで起てる一人である。譚詞小說を布及させた功績は冠山に亞ぐ。「喩世明言」「醒世恒言」「警世通言」の中から數章を拔萃して、これに訓點を施して「小說精言」「小說奇言」を著はした。「精言」の如き、また釋義を加へて譚詞を丁寧に說明する。「小說粹言」またその著と推せられる。

陶山尙善は陶冕の稱を以て知られてゐる。東涯門下のこの人と冠山との間に何かの關係があらうと考へられる。時を同じうして京都に住つてゐたからである。「忠義水滸傳解」の著がある。「水滸傳中」の語句を摘讀し、また唐音を假名で示してゐる。

陶冕が支那語を習ひ、稗史小說の講讀に努めてゐる時、同志先輩互に手を携へて進む、「傳解」の附言はその情を傳へて簡要を得てゐる。

往年余友嘗有松峽秦處臣、玖珂冕德濟者、夙服華學、深通聲音、且好讀野史小說、其平生之柬帖應酬、輙於是坐談諧謔輙於是、非敢衒奇淫僻者、要之習慣薰陶也。時冕弱冠、兄事二子、乃亦誘掖冕、於事於斯、始覺有資於讀書、爾後又就田文瑟、得究水滸一百二十回、文瑟爲其人、穎敏高邁、才識絕倫、亦能操華音、最稀象胥家之言

文中の人々は、邦人にあるまじとも思はれる。しかし秦處臣は松室式部、冕德齋は朝枝善次郎、田文瑟は田中璞である。亦唐風を模して高じとする一つのあらはれである。

秋水園の「小說字彙」はやゝ後れて出でた。援目の書實に百五十九部、中に戲曲の目をも數へられるが、とにか

くに諢詞小說はよく讀まれたものであつた。

「小說奇言」「小說精言」の書は京都の書肆風月堂から出板せられた。風月堂はまた此種のものを出板した。發行嗣刻として擧ぐるところに、「小說奇觀」「小說選言」「小說恒言」「照世盃」「連城璧」「水滸傳」がある。「小說字彙」は大坂三書肆の合刻、當時、京坂に於ていかに諢詞小說が悅ばれてゐたか知られる。庭鐘この間にあつて、四部の書を出した。迎へられた有樣が髣髴せられる。但、當時の京坂にどうして斯ういふ流行が存在したかの理由をたづねるには、考察、自ら別途に出づべきであらう。

三

宋の紹興年間、臨安の地に乞食の群がある、群を統べるのを團頭といふ。團頭こゝに代を重ねて七代目。主の金大はすでに富めるに拘はらず、なほ人交らひのかなはぬ事を歎いて、族人金癩子にあとを讓つて他に移り、乞食の賤しさから離れた。しかし、なほ前の團頭といふ名でよばれてゐる。一人の娘玉奴がある、賢しくして美しい。金大はどうがなして然るべき人にそはせようと思ふ。折から才學金けれど、父母にも別れた貧書生の莫稽といふ者がある。金大は家の事情を告げて婿たらん事を求める。莫生は家が富み、女が美しきに悅んで應ずる。金大は盛宴を張つて莫生の友を招いた。そこへ婚姻の知らせをうけない今の團頭があまたの乞食をつれて暴れ込む。金大は銀を與へて辛うじて散じさせる。

玉奴はおのが門風のよからぬ事をかなしみ、夫を勵して勉學させ、講學の資を惜むことがなかつた。莫生二十三

歲にして連科及第する。烏紗官袍馬上にして歸る。岳父の家に近づく時心なき兒等は指して「金團頭家女壻做了官了」といふ、莫生は今更によしなき家に婿入したことを悔いる。玉奴はその譯を知らで、たゞ夫の樂しまぬ色をいぶかしむ。やがて莫生は無爲軍の司戶となる。玉奴を連れて任に赴く。舟の旅である。采石江邊に舟がゝりする夜、月は晝の如く明皎々と照る。莫生の胸にふと惡心が萠した。玉奴を殺して他に一人を娶らうと。月見よと誘ひながら、隙を見て水に投じた。

その時、許德厚も赴任の途采石に月を愛でゝ居たが、はしなくも玉奴を救ふ。この人は莫司戶の上司であつた。それから數月の後、莫司戶は許公の女を娶る事となつた。その女といふのは實は玉奴である。結婚の夜許公の夫人は皆を含めて事を行はせる。莫司戶は九霄に登る思ひして房門に入らうとする。數人の老嫗丫鬟が手に手に竹や棒を執つて、頭といはず、肩といはず、めたうちに打つ。房の中に聲がする。「休打殺這薄情郎」と。腰元共は手どり足どり司戶を要して、新人の面前に引き据ゑる。司戶は玉奴を見る。驚いて「有鬼、有鬼」と叫ぶ。許公そこへ出でゝ大に諭す。司戶は悔いて罪を謝する。こゝに二人は前緣を全うする。

これは「金玉奴棒打薄情郎」の一話。本來「古今小說」中のもの、また「今古奇觀」に收められて居る。その紹興を天文に、臨安を近江觀音寺に、金大を淨應に、族人金癩子を大六に、玉奴を幸に、莫稽を馬場求馬に、無爲軍を若狹に、采石江を琵琶湖に、許德厚を樋口三郎左衛門に代へる。おのづから「英草紙」の第二話「馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話」が出來上る。

たゞし、庭鐘は玉奴が許公に救はれた事を前にいはないで、薄情郎を撻せた後に說く事とする。また金大が玉奴

を愛するくだりの文辭、

金老大愛此女如同珍寶、從小教他讀書識字、到十五六歳時詩賦俱通一寫一作信手而成、更兼女工精巧亦能調箏弄管、事々伶悧

を改めて、原本に見えぬ事共を書きそへる。

淨應寵愛する事掌中の珠の如く、裁ち縫ふことのいとま、和歌の道に心を寄せさせ、其の頃はいまだ下ざまにもてはやさゞる得難き草紙ども讀み習ひ、勢語は諸家の說を窺ひ、其の趣を極め、源語は孟津を問ひ、河海に至り、其の外諸家の集、勅撰の類、しかるべき歌書に渡らざるはなし。

その原作を改めた一つは、讀者に意外の感を抱かせて、采女と共に幽靈と叫ばせようの工夫であらう。一つは和風を加へ得て國譯の實を擧げようとする工夫であらう。その工夫以外は殆ど逐字譯といふてもよい。

この逐字譯が往々にして漢臭ありといはれ、支那小說の口吻なりといはれる。いふ者は「英草紙」を庭鐘の創作と見たのである。藤岡博士の「近代小說史」に第三話、「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」の中の兼秋と時陰の會見を叙する一節、「兼秋官卑しと雖も、身宣旨の使なり。樵夫に對して禮を施さば恐くは官服を汚すべしと思へども、已に船に請ひ下したれば如何ともすべき樣なく唯手を擧げて會釋す」を例として「全く支那小說直譯の風を脫せざる所少からず」と評せられた。その評言は當つてゐる。しかし、その次に「總て漢文趣味を加ふること夥しきを見るべし」といふは當らない。加へる加へぬが問題でない。問題は脫する、脫しきれぬが問題であるから。

ここに原文、「通言」また「奇觀」の「俞伯牙摔琴謝知音」の中から抄する。

兪伯牙是晉國大臣眼界中那有雨接的布衣下來還禮、恐夫了官體、既請下船、又不好叱他回去、伯牙沒奈何微微擧手。庭鐘は豐秋を太夫將監に作る。故に官卑しとする。これは細心の注意である。擧手は支那の禮風、或は邦人に通ぜぬ事もやと會釋すの辭を添へる。譯者の深切である。

「英草紙」の第四話、「黑川源太主山に入つて道を得たる話」は「諸越の吉野」の作者に敎へられたやうに、「莊子休鼓盆成大道」に出づる。莊子と源太主、妻田氏と深谷、南華山と金華山の所と人の名の相違の外は事の運びはほゞ同一である。たゞ異るところがある、夫の歿後再緣を急ぐ女が、「如要改嫁須待坟土乾了方可」の遺言を守つて頻りに塚を搧ぐ事の一節を「われ死して後異人に見ゆるとも三年を過ぐるまでは待てよかし、實生の桃を家の前に植ゑて花著きなば何方へか嫁すべし」の遺言とし、女が一心不亂に桃を培ふ事と書き改める。これも異邦の俗をわが國の諺の聞きやすきに移す爲であらう。

夫妻本是同林鳥、巴到天明各自飛

是を和げて聞く時は「をつと妻は同じ林にやどる鳥明くればおのがさまざまに飛ぶ」といふ一節がある。同じやうな譯歌は他の箇所にも見えてゐる。源太主の歌として

虎の畫をゑかけど骨はゑがかれず面は知れど心知られぬ

といふのがある。原詩は斯うである。

生前個個說恩深、死後人人欲搧墳、
畫虎畫能難畫骨、知人知面不知心。

抄するのは譯歌の巧拙を示す爲でなく、國譯のために相應に工夫してゐる事を說くが爲である。

「英草紙」の第九話、「高武藏守婢を出して媒をなす話」を「古今小說」「今古奇觀」の「裴晋公義還原配」と比較する。趣向はまづ同じというてよい。裴晋公は知らずして婚約ある女を婢としてゐる。晋公は時々微行して下情を視察するが、偶然途にその夫たるべき者に遇うて怨言を聞いた。男はもとより晋公たる事を知らない。その翌日自邸に召して事情を告げ、自ら媒して婢を嫁がせ、また男を官に任ずる。裴晋公は即ち唐の宰相裴度である。庭鐘はどうして師直を以てこれに擬したのであらう。師直の名は屢繰に歌舞伎に敵役として用ゐられてゐる。庭鐘が義を守り情を解する者にとり扱ふのは、史實によつたのであらうか。それとも異を樹てるためであらうか。或は原書を移す時に、漫に師直を當てたのであらうか。これはこの一話ばかりでなしに、他の三著の上にも考ふべき事であらう。また秋成の上にも考ふべき事であらう。

わたしはも一つの話を考察する事によつて、庭鐘の肚裏に入る手段とする。

四

まづ「英草紙」の第一話「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」とその原話「王荆公三難蘇學士」を讀み合はせる。原話は「警世通言」にある。寶曆八年の「小說粹言」にも採られてゐる爲に多く讀まれて居る。庭鐘の飜案ぶりは最もよくこの一篇の上に現はれる。わたしは煩しさをいとはずその大要を摘みとる。

蘇學士は蘇東坡である。この一篇は東坡が宰相荊公安石に才を重ぜられる事、東坡が自ら聰明を恃んで口數多

く、漸く輕薄を惡まれる事がしるされる。荊公「字説」を作つて一字一義を解作する時、偶東坡の坡字を論ずる。坡は土に從ひ、皮に從ふ、即ち土の皮と、東坡笑つて、仰せの通りであるならば、滑の字は水の骨と。この類の巧舌が屢繰りかへされたのである。

東坡は左遷せられて湖州の刺史となり、三年の後また相公の府に到つた。府には訪客が多い。次を以て待つに堪へない。東坡は相知れる書房係の青年によつて東書房に通される。主のゐない机の上に素箋があつた。西風昨夜過園林。吹落黄花滿地金。二句の詩が書かれてある。東坡は荊公が韻を終へざるを見て、老いて才盡きたとした。また菊花は落ち散るものでない、第二句は錯誤のみと考へた。その時興に驅られて筆を執つてさらさらと二句をつゞける。

秋花不比春花落。説與詩人仔細吟。

東坡は書き終へてはじめて、貴人に禮を缺くを知つて狼狽した、しかしどうにもならないので、荊公にあひもせずに匇々と辭し去つた。荊公は詩稿を見て、東坡の輕薄がまだ改らぬことをおもつた。また黄州の菊花の落瓣を知らぬ爲にこの過をなすとおもつた。即ち萬州團練副使に遷する。

東坡が任に赴くに際して荊公は便を以て瞿塘中峽の水一甕を寄與することに囑した。荊公は痰火之症に罹つて居た、醫の勸によつて、陽羨の菊を瞿塘中峽の水を用ゐて煮ることを要した。

黄州に赴任後、早くも一載を經た、時は重九の後、連日大風のあくる日、後園に菊を看る。と見る滿地金を鋪いて、枝上全く一朶をとどめぬ。東坡は目瞪し口呆して、ものもいはれずにゐる。平生、この花を以て焦乾枯爛竝に

落瓣せずとのみ思つて居た妄を知つた。王荊公の二句の詩が胸裏に浮んだ、はじめてその人がわれを黃州に配した眞意を解した。これ實に荊公一度蘇學士を難じたるもの。

黃州の例、冬至の節には賀表を京に進める。東坡は選ばれて使節となつた。囑付せられた瞿塘中峽の水を想起した。瞿塘三峽は西陵峽を上峽とし、巫峽を中峽として、歸峽を下峽とする、兩岸山に連り、重巒疊嶂、天を隱し、日を蔽ひ、風に南北無く、たゞ上下有りといはれる。今しも秋後冬前、水勢はやく、一瀉千里の槪がある。

東坡看見那峭壁千尋、沸波一線、想要做一篇三峽賦、結構不就、因連日鞍馬困倦、憑几構思、不覺睡去、不曾分付得水手打水、乃至醒來問時、已是下峽、過了中峽了、東坡分付我要取中峽之水、快與我撥轉船頭、水手禀道、老爺三峽相連、水如瀑布、船如箭發、若回船便是逆水、日行數里、用力甚難。

東坡がわづかの油斷は下峽に至つてはじめて中峽を過ぎたことを知つた。しかも、水に逆ふ術がない。つひに下峽の水を汲んで、なほ囑命を全うする理を得た。東坡は一居民を喚んで「要問儞一句話、那瞿塘三峽、那一峽的水好。」とたづねる。「三峽相連、竝無阻隔、上峽流於中峽、中峽流於下峽、晝夜不斷、一般樣水、難分好歹、」がその答である。東坡は暗に想ふ、「荊公膠柱鼓瑟、三峽相連、一般樣水、何必定要中峽」と。下峽の水を滿々と汲んだ。

東坡は水を荊公に獻ずる。荊公水を烹る、白定碗一隻を取り、陽羨茶一撮を內に投ずる、湯の蟹眼の如きを候つて急にうつし入れる。茶の色が程經て見れる。荊公が問ふ、これは何處の水。答へる、巫峽の水。問ふ、中峽か。答ふ、いかにもと。荊公笑うていふ、又來欺老夫了、此乃下峽之水、如何假名中峽。さて東峽に對して讀書人は輕擧すべきでない事を諭し、なほ言葉を添へる。

這瞿塘水性、出於水經補註、上峽水性太急、下峽太緩、惟中峽緩急相半、大醫院官乃明醫、知老夫乃中脘變症、故用中峽水引經、此水烹陽羨茶、上峽味濃、下峽味淡、中峽濃淡之間、今見茶色半晌方見、故知是下坡。

東坡は席を離れて罪を謝する、荊公は重ねて、聰明に過ぎて疎略を致すことを諭した。これ即ち王荊公が二度蘇學士を難ずるものである。

荊公は東坡をして左右二十四橱の書籍を亂抽し、その一句をいはせる。みづからその下句をいひ添へよう、もし當らなかつたら、われらを無學となせといひ出した。東坡問ふ、「如意君安樂」と。荊公口に接して「竊已啖之矣」さうでなからうか。東坡いふ、その通りでございます。今度は荊公から東坡にその意義を訊ねる。東坡は誤つて則天武后が薛敖曹を如意君と稱した事とし、啖之の二字が文理にかなはずといふ。荊公敎へていふ、こは漢末靈帝の時、長沙郡武岡山後の一狐穴にゐた九尾の狐狸二頭が美婦人に化して劉璽を誘ふの話。二狐璽と姪けてよしとし、彼を如意君と稱する。數月のうちに璽は精力衰へる。或時大狐が食を索めて出かけた留守に小狐が雲雨を求める、しかし如意君は如意でなかつた、小狐は怒つて之を啖つた。是に於て歸つて來つて大狐と小狐との間に、如意君安樂。竊已啖之矣の問答があつた。

東坡は斯う話されて、「老太師學問淵深、非晩輩淺學可及」と荊公に謝する。荊公は「這也算考過老夫了」と微笑する。また東坡に對を求める。

一歳二春雙八月。人間兩度春秋。

句は今年は八月に閏がある事、正月に立春、十二月にまた立春を意味する。東荊はその對を得ないで、空しく羞

顏可掬面皮通紅了の狀をなした。謝公また二對を出す。また得ず、つひに罪を謝して出づる。これ、王荊公三度蘇學士を難じたるもの。

五

庭鐘はこの原話の輪郭を取り、その第一難を飜し、更に別樣の二難を加へて「英草紙」の第一話を作つた。王荊公を後醍醐帝にし、蘇東坡を藤原藤房とした。藤房果して東坡と性格を同じうし、帝果して荊公と器量をひとしくするか。庭鐘が構想はこれによらずして、たゞ藤房に千里の駿馬の諫あるに憑つたのであらう。後醍醐帝の藤房を難ずる第一は武藏野の逃水にある。帝は元弘の變に沒落し、逃亡してゐた速水某に一箇莊を宛て行はれ、また一首の古歌、「あづま路にありといふなる逃水の逃げかくれても世を過すかな」を賜はつた。藤房はその古歌なるを知らず、また逃水の義を知らぬために帝を難ずる、帝は藤房に東の旅枕を見て來よと命ぜられる。武藏野に來つた藤房は幻影の川を見る、それが武藏野の逃水である事を知つた。一農夫はそれを教へただけでなく、御製と思つた歌が古歌である事をも教へる。藤房はおのが麁忽を恥ぢながら都に歸る。父の宣房から「扶桑集」中の歌なることを敎へられる。即ち闕下に伏して罪を謝する。

斯る事實は史上につひに聞くところがない。庭鐘は原話の骨たる黃菊落瓣の詩を飜案するために「扶桑集」、これ庭鐘の誤で實は「夫木抄」中にある古歌を採つたであらう。この場合の藤房は東坡の影身に過ぎない。庭鐘はそれを藤房の事實とおもはせる爲に第二難を加へる。帝が佛敎信心を諫め、却つて僧のみを責めるが理にかなはぬ旨

もて難ぜられる。これは或は藤房にあり得る事であつたらう。また第三難を加へる。これこそ世に知られた千里の馬の諫である。讀者はこの一事によつて第一難をも藤房にその事ありとするであらう。しかし、庭鐘は第三難をも史上の話のみにとゞめなかつた。そこには帝と藤房との間に、天馬また沈魚落雁の出典の論爭がある、藤房はすべて帝の博識に壓せられる。即ち第三難はやゝ形を原話の第三難にとるものであつた。

庭鐘はたゞ飜案の便利のために史上の人物を意に任せて傀儡とする。決して史に隱れたところを闡明せんとするのでなかつた。前の師直の如きもそれである。いはゞ淨瑠璃歌舞伎が史上の人物を勝手に改作すると同一の手段であらう。たゞ讀む者をしてそれ等と異る感を懷かせるのは、支那の外傳また逸史の體を以て範とするためであらう。紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話に至つては、殊にさうである。

「王荊公三難蘇學士」の第二難、瞿塘中峽の水の話は興深いものであるが、庭鐘はそれを切り棄てゝ惜しまなかつたらうか。其の疑は「笋句册」の第八話「猥瑣道人水品を辨じ五官の音を知る話」によつて一掃せられる。こゝでは荊公は猥瑣道人、東坡は親長である。瞿塘中峽は宇治河の中峽である。「彼流は鹿飛ところを上峽とし、湖水を引て漸く峽に入ればなり。志津河を中峽とし、宇治橋の汲臺を下峽とす。此三峽の內に世の人下峽を善とす。恵が欲するは是中峽なり。志津川と合て水勢盛なるをとる」とて猥瑣道人は親長に一壺の溪水を誂へる。親長は囑をうけて舟を下げて流にしたがふ。

此水路は舟にふりし文苑なれば景物に奪はれて所を失へり。誰も思ふに湖水は懷廣くし、眼の及ばざる景地多く遠望して識るのみ。此宇治の景は望を受る所せまく、一小閣に流を引くが如く、其皇都に近ければ王孫公子

遊賞絶えず。吟咏古來多く、麓に霧こめて雲ゐに見ゆる朝日山は誰も臨て眺望すべく、御位を譲り遂たる宇治の弱郎子の山陵こそ尊けれ。網代禁制の石浮圖、巍然と變らで砂洲に立つ。時しも山吹の花の比平等院の前より川邊に沿て橘の小嶋の崎へ咲つゞけたるが、落日に影を落されて、川瀬の金色をなす。親長見て棣棠の名空しく傳はらずと、侍に硯を備へしめ酌で盡れば又盪す。遲しおそしと、史三方が不禪流水急、唯恨盞遲來を吟じて興に入り、金風の山吹の瀬と咏ぜし人は、花に心はなかりしか。是こそ瓦礫のよりどころかなと

　秋草山吹名有則有焉黄金不換今日此時

此あひだに急流しばしもたゆたはず、速に橋を過てければ、舟子をさけびて、今一度舟を引上げよと催せど、此急流いかで心にまかせん。槇の島に至る——手づから一壺の水を汲み擧げて、思へば上峽の水中峽に至り、中峽の水下峽に流る、いづれか三の差別あらんやと瑠璃に傾け入れ重々封を加へ名水調ひぬ云々。

親長は之れを道人に致した。道人はそれを釜に入れるとて、滴る聲をきいて中峽の水にあらぬ事を斷じた。原話との間に幾分の出入はあるもの丶、大體は彼を活した。さきに原話のくだりに引用した文と、かの引用のところを對照すれば、飜案者の用意の那邊にあるかゞ知られる。これと同じ用意は「雨月物語」の「夢應の鯉魚」にも見られる。興義が鯉となつたくだりは「魚服記」には

　於是放身而遊意性斯到波上潭底莫不徒容、三江五湖騰躍將遍、然配東潭毎暮必復。

とのみあるのに、「雨月物語」には琵琶湖邊の景をうつして詳に道行振の一節をなしてゐる。

それはさておいて、當時煎茶の流行は京大阪の水質に緻密なる注意を拂はせた。宇治川の橋三の間の水を秤目の

合の杓取つて、淀川が十九匁四分、黄金水が二十匁八分と量るほどであつた。荊公の言はまたある面白さを以て迎へられよう。庭鐘いかでかこれを逸しよう。

黄州の菊花の落瓣また奇とするに足る。庭鐘はさながらにそれを用ゐる。「莠句冊」第四話「玉林道人雜談して回頭を屈する話」の中に見える。荊公と東坡は玉林道人と回頭和尙である。道人實の名は少輔細川持春である。二人は言葉敵である。少輔回頭を訪ふ。床の掛幅は東坡の書、語は西風昨夜過園林、吹落黄花滿地金とある。二人は此句を題として國風せんと互に先を讓る。回頭の歌、

けさ見れば垣根に敷ける黄群濃は昨日の風に散りやそめつる。

腰や離ぬばかりと云。少輔吟じて高調明白なり。但己は理窟なり。

霜のうちに咲て拱く秋はあれど嵐の庭にちる花はなし。

回頭云、菊は散らぬ物か。秋菊の落英を餐ずとは楚辭なり。園史に花瓣結密なれば落ちず。扶疏なるは風に遇へば散て地に落つとしるす。花こそ散らめ、根さへ枯めやとよまれ、散ぞしぬべきあたら其香をとつゞけ給へり。少輔答へて楚辭の落英は花にあらず菊の葉は食ふべきものなり。其散らめ、ちりぞしぬべき、倶に逆へ計るの言葉、直に散りたるをよまず。但し、開くと落るとは花の初終なり。菊には直に散といはぬが安かるべし、此二句は楊州の菊花こそ散て地に落る。王荊公が作を歐陽が知らで難ぜしか、知りても難ぜしか。已に其說あり。

庭鐘はまたこの話に於て、如意君の說を譯してゐる。また二人の對句を錄する。狂體の詩を書してゐる。これ原

話でなくして、庭鐘自らの作であらう。わたしは庭鐘に「狂詩選」の著のあるのを知る。その書は狂體の詩を蒐錄して自ら樂む餘に成るといふ。わたしは此の章を讀んでその書を想起せざるを得ない。

一原話を剪裁して三話を作る。庭鐘よく勤めたといはう。どうして斯うまでせねばならないのであらうか。しかも飜案の體、われに移すの用意をなしながら、なほ必ずしも漢意を避けざるは何であらう、或は好んで漢の色調を殘すのは何であらう。

元祿の西鶴がうつした遊興三昧も、八文字屋本のもの惜しみをさへ加へては、漸く倦怠の氣のみいやます。大阪の遊蕩兒があれこれの遊びぶりにゆき詰つた果に、珍しい砂糖水振舞の趣向を案じ出す。名水の聞え高い秋田屋前の井戸端に藝子ども連れて行く。小さい器に砂糖入れて飮むは面白からずと、砂糖澤山に井戸の中に投げ込んでまづ棹でよく攪拌させる。さうして甘い水を鱈腹に馳走せうとする。けれどその名案も物笑ひに終る。よく攪拌すればする程、さしもの名水も濁つてしまつたからである。八文字屋本の享樂が新なる趣向をめぐらせばめぐらす程、斯うといふあはれさに終らうとする。氣質氣質と剔刮度を加へてゆけばたゞ人心の濁を示すだけ。漸く人々は現實穴中の土龍に飽きて空想の飛鳥たらんを欲する。異聞奇談はこの傾向に乘ずる。「御伽婢子」以來の怪談物はその機を得た。庭鐘はさういふ物を求めるとならば支那によりよき數々があるものをと、讀書から三十話を選んで譯した。後十年にして其の九話を刊行する。寬延二年である。後二十年にして續編を刊行する。明和二年である。續編は即ち「繁野話」その序にいふ、「近路行者三十年前、國字小說數十種を戲作して茶話に代ゆ。千里浪子其の中に就て、英草紙九種を摘みて書林に授たるは二十年に早なりぬ。」

「英草紙」と「繁野話」との間に二十年の距離があるのは、「英草紙」未十分に世に行はれぬ爲であつたらう。後二十年にして、續編を出し、やがてその次を以て「莠句册」「垣根草」を出すのは、時勢漸く來つた爲であらう。はじめは漢意が累をなし、後には漢意を全く脫せぬ爲に迎へられたのであらう。すべては支那流行の世の中であつた。庭鐘は斯くして儒家よりも小說家として知られる樣になつたらう。明和五年の「三ヶ津學者評判記」にいふ。

［本ヤ組］小說家の學者さうな。［頭取］左樣でござります。あれこれ小說が板にござります。作は御功者に見えます。

六

わたしは庭鐘が支那をわれに移して、なほ幾分の支那を殘す事が世に迎へられたといつた。いひかへれば創作とよりは、飜案と標榜するのが迎へられるとのことである。庭鐘は「繁野話」序に於て書中の作が飜案であることを明に語つた、之れも證左の一つとして見るべきであらう。飜案としての上乘、創作とまがへられる物のみがそれと指示せられる。庭鐘がもとの姿をあと形もなく失ふ事を惜しむが爲とは、僻目に過ぎるであらうか。さういふ作の一つ、第三話「紀の闘守が靈弓一旦白鳥に化する話」はいはれるやうに「任氏傳」を粉本とする。「任氏傳」は狐怪の談である。狐女と化して鄭六と契る。任氏はその女妖の姓である。鄭六はじめより狐と知りながらその美を悅んでゐる。鄭六は家貧しいので親戚崟九が衣食の資を供してゐた。崟は任氏の美しさに迷うて時に挑む。任氏は理を說いて斥けると共に、彼のために他の美しいのを媒する。崟が欲する女は、必ず任氏のはからひによつて得られる。靈驗不思議といふべきである。任氏また鄭の爲に案を授ける、鄭六はそれを行つて富を得る。後鄭六は官を得

た、赴任するに臨んで同行を肯はぬ任氏を强ひて連れて行く。途上獵犬に襲はれ、任氏は本形を現はして死ぬ。

任氏は「繁野話」にあつては小蝶である。鄭六は雪名、崟九は庄司である。庄司は雄の山の關守である。小蝶が庄司の媚言を斥けるのも原話のまゝ、庄司のために媒をするも原の筋さながらである。たゞ求婚の談のうちに原話にないたつか弓の一條を挿む。庄司の家は代々射て中らぬはなき靈弓、たつか弓と稱するのを寶藏とする。庄司また狩獵を好むがため未室を得なかつたのである。庄司は狩獵を禁ずる條件として婚を全うする。小蝶は狐の眷族のためにかういふ事の運びをなしたのであつた。しかも小蝶は名匠の畫虎に驚いてその本體を現はした。

小蝶が本體を現はす前に、原話になき一條がとり入れられる。たつか弓の話の續きである。和泉の舊族登美夏人は殺生を戒めて、他人にも說きさとしてゐる。永くつれ添うた妻が夢に別を告げて去る。記念とし弓を殘した。ある時その弓が白鳥となつて飛び行くので、あと追うて紀の境にまで行く。鳥はもとの弓となる、手に執り持つて佇んでゐると雄の關の侍に咎められる。その弓こそたつか弓であつた。久しい前に紛失して、關守庄司はしきりに捜り求めてゐた。弓はどうして夏人のもとにあつたか。これも小蝶狐が計らひであつた。夏人の妻たる者もまた狐であつた。

庭鐘は原話以外のこの一條を何から齎して來たらうか。據るところは支那のものでなく、「今昔物語」の「人妻化成弓後成鳥飛失話」である。この話は「詞林采葉抄」などにも見える。「たつか弓」の名によつて知られてゐる。庭鐘はそれ等をも參照したやうに思はれる。

庭鐘のこの作は、支那のものと支那ならぬものとのいづれが核心をなしてゐるのであらうか。題名は「任氏傳」

以外のものに傾いてゐる。庭鐘みづからも序に於て「手束弓の故事に任氏の傳奇を繋ぎ」といふ。是に於てか一つの疑惑に會する。わたしは支那小說を念とするに過ぎなかつたか、隻眼わづかに支那の原據を看て足れりとしなかつたか。

「繁野話」の第二話、「守屋の臣殘生を草莽に引く話」の如き、「莠句冊」の第三話、「求冢俗說の異同、冢神の靈問答」の如き、「垣根草」の「在原業平文海に託して寃を訴ふる事」の如き、果して支那の傳奇を踏まへてのみゝのいふべきであらうか。「莠句冊」の序に、「求塚の後の後の卷には三つの跡を倶に男となすを經とし、神代の事のしらべに黏して緯をとり、蘇小狡娘の巧令を潤色となす」とさへいふ。こゝにも作者は支那小說を從とする事を言明したのである。

是に於てか、庭鐘の飜案の態度を見るためには、支那の小說をどうとり扱ふかを知ると共に、わが古典をどうとり扱つたかを知るを要する。それはまた讀本の發生に、わが古典の研究がいかなる關係を有するかといふ問題にさへ到達する。

この問題は江戸小說の歷史に於て、重要なる事項に屬する。しかし、今のわたしは之れをこの稿の外に置くの自由を有する。わたしははじめにみづからを制限して雙眼以て庭鐘の作中に動く支那小說の影を見守ることゝした。影と形の關係を考へれば足れりとした。

たゞ庭鐘の飜案ぶりを、村田春海、石川雅望の飜案ぶりと比較する時、おのづからわたしが問題外とする問題にまでいひ觸れるであらう。またわたしはこれ等の比較を以て庭鐘と秋成の飜案を比較するに先だつて當然なすべき

事とも考へる。

春海と雅望は共に江戸國學者の雄であつて、また漢學に長ずる。春海の擬古の文は平安のものいひさながらであるが、風骨は漢文心解の果によつて成るといはれる。雅望は「醒世恒言」を譯し、「桃問錄」を譯して、精確であるといはれる。斯る人々が彼の傳奇小說を飜案したならばどうであらう。よく我に移し得て、その人々の創案とのみおもはせる。否、中古の遺書新に發見せられたとなすであらう。二人ながらに擬古の文をよくして、筆は自在に中古の語を驅使してゐる。

春海の未完の作、「つくし船物語」は往々にして創作と見あやまれる。もと「醒世恒言」の「蔡瑞虹忍辱報讐」の飜案である。原話また「今古奇觀」にあつて見やすきにも拘はらず、それと思ひ及ばせぬ程の飜案ぶりは、高田與淸の解說をこのまゝに、「このつくし船の物語は、すゞろなる筆のすさびに、竹取、源氏のすがたにより、かの演義小說のさまにものせられし」とのみ信ずるであらう。雅望の「近江縣物語」は李笠翁の「巧團圓傳奇」の飜案、わづかのぬきさしこそあれ、事の筋はそのまゝに運ばれてゐる。これさへもたゞ近江の遺話とのみ思ひ寄せて、讀む人は、「萬葉集」の「靑みづらよさみの原に人もあはぬかも石走る近江縣の物語せむ」をのみおもはせるであらう。また「飛彈匠物語」を讀む人は雅望が露にしるす「今昔物語」と「更科日記」とをのみ原據と見て、つひに作者の腔子裏なる「拍案驚奇」を指すことなくてをはるであらう。

庭鐘がわが上代中世に取材するも讀む者は彼土の傳奇小說より拉し來ると斷ずる。春海、雅望が彼の傳奇小說より齎し來るも、讀む者はわが物語册子の中からあさり出したとする。讀者をしてこの感を懷かしめるものは、何で

あらう。わたしはその何なるものを索めずして、秋成が二つの態度のいづれに屬するかを考へる。

秋成が加藤宇萬伎について國學を修めたのは明和三年「雨月物語」を書いたのはその五年、その後八年を經て刊行した。宇萬伎から學習した力を注いで成つたその昔は、その力の進むと共に幾度か推敲したものと推測せられる。推敲に推敲を重ねるのが秋成の癖である。

さういふ「雨月物語」を取つて、どのやうな飜案ぶりであるかを檢する。それには飜譯ともいふほどに原文に近きを採るを便なりとする。即ち西湖雷峰の原話と蛇性の婬とを比較せんとする。

杭州西湖の舞臺は紀の國三輪崎にかへられた。三つ山を背景にして怪異を點ずるにふさはしい所であらう。原話には許宣が保叔塔寺に詣でゝの歸るさ、四聖觀に到つて雨に逢ふとある。これには豐雄が新宮の師の君のもとから歸る途中に、飛鳥の神秀倉見られる邊より强き雨に逢ふとする。末までもそのまゝに移さうとする用意が見られる。許宣は知人の舟に雨を避けて、白娘子に邂逅する。豐雄はしるべのもとに雨やどりして眞女兒と相見る。西湖の地は、舟中の邂逅に興あり、三輪崎には、舟なづまぬに工夫がある。

許宣が白娘子から贈られたのは五十兩一個元貨である。これは邵太尉庫内に紛失した五十錠大銀の一である。秋成は之れを熊野の寶藏の太刀とした。白娘子の居に四十九錠を見出すくだりを、狛錦、呉の綾、倭文、鎌、楯、槍、靫、鍬の類とした。銀を熊野の神寶に改めていつた終始である。

かういふ注意の下に原話の筋が運ばれてゆく。しかしある意圖によつて筆墨の私があへてせられる。白娘子の盜める物を貰つた爲に許宣が罪に陷らうとした事が二度くりかへされる。秋成はそれを煩しとして、一度に改めた。

豐雄が采女富子を妻とする、蛇がそれに憑るの一條は秋成の加筆である。これあるが爲に蛇妖の恐しさは遙に原作の上に出づる。

原作の結は白蛇の封塔を雷峰寺塔に附會する。「雨月」はそれを道成寺の蛇塚に藉りる。世に知られたそれを利して、異傳と聞せるのであらう。眞女兒は即ち淸姫の家の名でもある。

原作の出來事は皆西湖の佳景を背景とする、秋成がその意を話す工夫は隨所に見られる。吉野の三船の山、菜摘川、瀧あるところなど、さては泊瀨の寺もその一つである。

しかも文辭には古き歌どもが限りなく引れてある。

千とせをかけて契るには葛城や高間の山によひ〳〵毎に立つ雲も初瀨の寺の鐘の曉に雨收りて、只あふ事の遲きをなを恨みける。

これには新古今の歌二つが引れてゐる。かやうなものいひぶりは庭鐘もまた時に試みる。たとへば、古今の一なく涙雨と降らなんわたり川水まさりなばかへりくるがに」によつて

淺ましと足ずりして落つる涙の水かさとなり、空魂ならばかへりくるがに、是はたゞ火をうち消したる如くにて云々。といふが如きものがある。語氣の熟さぬを見ると共に歌の言葉の誤用が注意せられる。秋成が辭を措くや、いかばかりに苦心したらう。

薄き酒一つきすゝめ奉らむとて、高杯平杯の淸らなるに、海の物、山の物もとりならべて、瓶子土器擎げてまろや酌まゐる。

まろやは侍女の名である。瓶子土器擎げてまろや酌まゐるの語調は、ふとしも「源氏物語」の「若紫卷」の「岩がくれの苔の上に並み居てかはらけまゐる」を想ひ出させる。たゞ酌の一語や、妥當ならぬをおぼえる。これは春海、雅望のなさゞるところであらう。

春海、雅望の距離はその人の相違であると共に、また時の經過が然らしめたのであらう。國學の進みの到り深さが、支那稗官の學と並行して、程よく練り合はされたのがその人々の讀本であらう。讀本の隆盛と國學の發達とが、新なる問題として考へられる。

然らばこの間に建部綾足を介在せしめるを要する。彼ははじめて「水滸傳」を飜案して「本朝水滸傳」を作り、江戸の讀本の陳呉をなしたもの、しかもその文は全く擬古の體で爲つた。しかし、今はその人に就いて說くことなく、たゞ秋成と庭鐘とを比較するにとゞめる。秋成が飜案は相應支那から蟬脫するに力を注ぐ、庭鐘のは日本に移しおほせる事に心を盡しながら、なほ支那に二分三分の執を殘す。庭鐘の飜案は支那の小說情趣に悅び溺つたあまりに出づる、秋成のは支那なるがために支那小說に繫がれるのでなく、其の中のある一筋と斷ち難き緣を結ぶためである。もとより秋成はわが古典をかへりみるにしても、綾足の衒學と轍を同じうするものでない。

秋成が支那に心醉するの愚を嗤ふのは、すでに「諸道聽耳世間猿」に見える。唐土太夫を拉し來つての冷しぶりは暗に當時のある種の人々に對するものであらう、無跡散人の「世間學者氣質」には唐音好みの一青年の狂態をうつしてゐる。相照して讀むべきであらう。徒に古ぶりを擔ぎまはるものを罵る秋成の言葉は、晩年のものではあるが、「膽大小心錄」に聞かれる。同じほどの言葉は若き日の秋成からも聞かれたものと考へられる。

七

わたしは秋成が支那小說を採り用ゐるは、支那そのものを仰ぶのではなく、その中におのれを見出すためであるといはうとする。かゝる言は果してゆるされるであらうか。わたしは「雨月物語」の第二話、「菊花の約」を讀み直さざるを得ない。

この話は丈部左門と赤穴宗右衛門との交情を中心とする。赤穴は富田の城主鹽冶掃部介の客臣、出でゝ近江に使しての歸るさ、播磨の加古に病み、そこの鄕士左門の看護をうけて、交情を篤うし、兄弟の義をさへ結ぶ、赤穴長じたれば左門はこれに對して兄の禮を執る、赤穴は左門の母をわが母としてうやまひ仕へる。

この時雲州の風雲はたゞならずして、鹽冶掃部介は戰死し、富田城は尼子經久に奪はれた。赤穴は彼の地の動靜を見るために下向せんとする。いつの時にか歸り給ふ。此の秋は過さじ。秋はいつの日。重陽の佳節、斯うして二人の間に堅い約束がとりかはされる。

九日の日左門は早起して兄の歸るを待つ。晝を暮して待てど來らず、夜に入つても來らず、更ふけてはじめて來る。來る者は現身の赤穴でなくして、靈のかりに姿を現したのである。雲州に於ける赤穴は尼子經久のために監禁同樣の身となつた。從弟のさかしらが累をなしたのである。赤穴は菊花の約を果さぬことを悲しんで刄に伏した。人一日に千里をゆくこと能はず、魂よく一日に千里をもゆくの理をおもうての業である。左門は赤穴が死して菊花の約を守る義に感ずる。即ちおのれも赤穴のために信を全うするとて出雲に下り、その從弟を討つて兄の讎に報じ

る。

「雨月物語」中のものゝ梗概を叙するのは最愚しいことであらう。しかし、わたしは秋成と庭鐘と相違を明にするためにあへてこの愚さをなした。わたしは更にまた愚を重ねて西鶴の「武家義理物語」の一話の要をいはうとする。

小栗某は石川丈山と約束する。小栗はいふ、我は備前の岡山に行くことありと。いつの頃か京に歸ると丈山はいふ。命あらば霜月の末に。然らば二十七日はわが志の日なれば、これにて一飯必ずと約束する。その後備前のたよりは杳としてない。「十一月二十六日の夜降りし大雪に筧汲むべき道もなければ、人貌の見えぬ曙に、丈山竹箒を手づからに心はありて心なくも、白雪に跡を付けて踏石のみゆるまでと思ふ折ふし、外面の笹戸を音信れし、嵐の松風など聞き耳立つるに正しく人聲すれば、明けわたる今、小栗何がし」たづねたる。石川はいふ、此の度は寒空に何としてのぼり給ふぞと。小栗はいふ、霜月二十七日の一飯たべにと。そよそよと木葉焚きつけ、柚味噌ばかりの膳を出す。喰ひ仕舞うて箸を置きあへず、又春までは備前にゐるとて急ぎ下る。

この話をこゝに引くは、屢「雨月物語」と交渉を有するといはれてゐるからである。「菊花の約」「約束は雪の朝食」の題の類似も一目瞭然たるものがある。丈山は約を忘れる。左門は忘れずにゐる。忘れた丈山が雪かくふるまひと、忘れぬ左門のその日のふるまひとは一つの對照をなす。「菊花の約」には「あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもならぬ、九日の日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席をはらひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設をす」とある。異曲にして同工といふべきであら

う。秋成の換骨脱胎のあとがあざやかに知られる。

「菊花の約」はまた「花草紙」の「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」の飜案といはれる。もとより動かぬ論であらう。その「英草紙」の一話は「兪伯牙捽琴謝知音」の飜案といはれる。蓋、定說であらう。原話は「警世通言」に見え、また「今古奇觀」にも見える。

秋成と庭鐘との間に密接の關係があることは當然である。「英草紙」中のものと「雨月物語」中のものとが本文の關係をなすことも當然にすぎる。たゞ秋成と西鶴との關係は一應怪まれもする、しかし、再應、秋成が和譯太郎の名で、八文字屋本を爲つて居ることを思ひ出せば、その疑問は直に消え失せる。「諸道聽耳世間猿」「世間妾形氣」には西鶴さながらの筆致をさへ見出される。西鶴ばかりでない、「雨月物語」の中には、當時流行の作品の中からくさぐさを採りいれてそ知らぬ顏してもゐる。また時の噂話をも巧みにとりいれる。これは庭鐘に於てはつひに見ざるところである。

庭鐘と秋成の作風の異同を檢せんとするわたしには「菊花の約」はいかばかり、豐なる資料を與へることであらう。作とその飜案と、いふことは之れに盡きる。しかし、庭鐘と秋成と支那小說飜案の態度の異同を檢する資料としてはどうであらう。それには秋成が支那の原作を前にしたか、しないかをまづ考へねばならぬ。わたしは秋成がとにかくに原作を手にしたといふ。わたしにさういはせる一つは「菊花の約」の書き出しである。知らるゝ如くそれには、

青々たる春の柳、家園に種うることなかれ、交は輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風

の吹くに耐へめや。輕薄の人は交やすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども輕薄の人は絶えて訪ふことなし。

の一節がある。この種のものは「草紙」の第三話に見ざるところである。しかも原作には百五十言を盡して知音の義を說いてゐる。少くとも秋成は原作の體を學んでゐるといはれよう。

秋成は執筆に際して飜案を直接の範としたか、支那の原作を參考としたか。いづれにもせよ、原作と「英草紙」と「雨月物語」の鼎立が考へられる。從つて、庭鐘と秋成の飜案の異同をやすく指摘することが出來る。

「列子」「呂氏春秋」に見える鐘子期伯牙知音の遺事が敷衍せられて原作をなしてゐる。わたしは三度梗槪を說かざるを得ない。

兪伯牙は楚人であるが、官星却つて晉國に落ちて上大夫となり、命を承つて楚國に使する。その歸るさ漢陽江口に舟がかりする。折から八月仲秋の夜、雨風急に襲ひ來たが、やがて雲開いて照り出づる雨後の月のさやかさ、伯牙は興に乘じて琴をかいならす。一曲未終らぬほどに指下刮刺的と響して絃が斷える。變聲斷琴の異はわが曲を盜み聽く者あるか、さもなくば刺客か、盜賊かと衆に命じて岸の柳陰を探らせようとする。一人の樵夫みづから姿を現はして、一時雨を避けてゆくりなく琴を聽いてゐたといふ。伯牙はその謂なき言なることを詰る。山中折柴の人、いかでか琴を聽き得ようかと。樵夫はいふ、山中またその人がある。大人の彈かれたのは仲尼歎顏回譜八琴聲、その詞は、「可惜顏回命早亡、教人思想鬢如霜、只因陋巷簞瓢樂。」この句に至つて琴絃が斷れた。第四句は「留得賢名萬古揚」と記憶すると。兪牙は驚いて舟に招ずる。そこに琴の故實に關する問答がある。樵夫滔滔の辯は說

き得て深遠なるものがある。伯牙は更に琴を彈して樵夫果してよく聽いて當れるか、否かを檢せんとする。伯牙は彈いて高山の意を寄する。聽いて美哉洋々乎大人之意在高山と贊ずる。意を流水に寄する。美哉湯湯乎志在流水と贊ずる。伯牙はじめて賓主の禮を以て樵夫に對し、その姓名を問ふ。鍾子期と答へる、馬安山集賢村に住むと答へる。伯牙はしきりに官仕を勸める、子期は父母いますが故にかなはぬと述べる。伯牙は一入その才德に服し、つひに頂禮八拜して兄弟の義を結ぶ。伯牙は兄、子期は弟となる。秋の一夜を語りかはして、そのあくる朝飽かぬ別をなさうとする。兄はまたも同行を促さうとする。弟は父母の故もて拒む。兄弟はつひに來年の再會を約束する。子期は「仁兄明歲何時到此、小弟好伺候尊駕」といふ。伯牙指をりかぞへて、「昨夜是中秋節今日天明是八月十六日了賢弟我來仍在中秋中五六日奉訪者過了中旬遲到季秋月分就是爽信不爲君子」といふ。子期は「既如此小弟來年仲秋中五六日准在江侍立拱候不敢有誤」を契る。

あくる年の仲秋、伯牙約を守つて漢陽江口に船を寄せる。月は明にして去年の良夜に似る。しかも岸上に其の人の影も形も見えない。泊船の多いので、弟はたづね惑うてゐはせぬかと琴を彈ずる。伯牙ははたと手をやめる。音にあやしき響のまじるためである。「呀商絃哀聖凄切吾弟必遭愛在家」と思ふ。或は父母の身に何事かあつたかとも考へる。

伯牙はその夜を寢ねがてに、朝とく集賢村へと急ぐ。途に一老夫に遇ふ。問うて子期の父であることを知つた。いふ子期すでに死んだ、馬安山江邊に葬つて晉の大夫との約を果させ給へと遺言して死んだと。伯牙はその墓を拜し、弔の一曲を奏で、口を銜いて出づる歌一つをうたふ、歌の詞にいふ、

憶昔去春。江上曾會君。今日重來訪。不見知音人。但見一抔土。殷然傷我心。傷心復傷心。不覺淚紛紛。來歡去何否。江畔起愁雲。子期子期兮。儞我千金義。歷盡天涯無足語。此曲終兮不復彈。三尺瑤琴爲君死。

歌終つて、絃を斷ち、琴を祭石に當てゝ摔く。摔得玉軫抛殘、金徽零亂。子期の父はあやしんで問ふ。伯牙いふ、摔碎瑤琴鳳尾寒。子期不在向誰彈。春風滿面皆朋友。欲覓知音難上難。

伯牙はまたやがて官を辭してこゝに歸り、子期の父母と共に住ひせんと語る。語をそへていふ、「吾即子期、子期即吾」「兪伯牙摔琴謝知音」、その筋をしるし來つて、わたしは愈わたしの愚さをおもふ。「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」と同一趣であるから。わたしはみづから飜案とよりはむしろ飜譯であるといつたのを忘れたのである。

わたしはなほ勞を惜しむ、この梗概を利して、原作との間に於けるいささかの相違を索めようとする。

八

豐原兼秋は兪伯牙に當る。此の人は家の傳あつて音樂に通曉する。元弘の亂後鳳管をとり還城樂を籟き、その音によつて主上の都かへりを豫知する。また樂の音によつて、天下再び亂るゝことを豫知し、琴を碎いてまた朝に出でざる意を示した。題名すでに明であるが如く、原作の知音の交情に專なるものなく、國の盛衰を底の流とする。また知音の義を音樂の神祕に繫ぐ。これが原作と相違する一つである。

庭鐘の飜案は多く事を南北朝の時代に取る。また好んで耳の聰きを說く。おのづから理由の存することが知られ

る。今はそれに觸れずして第二の相違を擧げる。

第二の相違は子期の樂論に關する。それは子期に當る横尾時陰の言としてさながらに譯されてゐる外に、和琴三絃琴の傳が加へられてゐる。さばかり長く加へるを要するならば、どうして彼論に代へなかつたらう、どうして二つながら併せ記すのであらう。庭鐘はもとより二つを必要とする。庭鐘の好みもあらう。庭鐘の友たる人々の好みもあらう。當時大阪に於ける好事の徒の群が、いか樣に和漢の故事の考證に心を苦しめてゐたかを考ふべきである。伯牙が子期の墓前にうたふ歌は斯う譯出される。

此の秋をむかしになして人もがな。はかり知られぬ雲がくれ。新つかのかげこゑもなし。

たよりも知らぬ此の山中に。我ふりすてゝ一聲ばかり。それかとぞ聞くよぶことり。

譯者は辭をそへる。「今彈ぜしはそれがし心にうかみて手に應ずる一曲、大和言葉に演べて大内家の箏の組にも略似たり。」譯者の意のあるところがこの一事からも推測せられる。子期がはじめに琴を聽いていひ當てた詩は時陰の場合には違つてゐる。しかし、依然として漢詩である、艶體の詩である。そこにも飜案者の態度が考へられる。

「英草紙」の作者は原作の交情を外にして音樂の神祕ともいふべきものに心惹かれ、音樂の故實に深き興をおぼえる。その點に於て秋成は原作に忠實である。原作の交誼の熱情を中心として飜案の筆を執つた。義理を重んずる二人の上に特に興を促したのであらう。斯くして「武家義理物語」が參照せられたのであらう。「菊花の約」の末句、「次に輕薄の人と交は結ぶべからずとなん」は直に原作末尾の一詩、「勢利交懷勢利心、斯人誰復念知音、伯牙

不作鍾徽死、千古令人說破琴」をおもひ出させると共に、「約束の雪の朝食」の結句。「むかしは武士の實有る心底感ぜられし」をおもひ浮べさせられる。

しかし、すべてに亙つて原作に忠實であるか否かを考へれば秋成はもとより庭鐘とひとしなみに說くべきでない。庭鐘はたゞ少し添へ加へたといふに過ぎない。秋成は省きもする、更へもする、また添へもする。添へたものが音樂の故實でなくつて、幽靈の出現である。これは西鶴になく、庭鐘にもなく、秋成獨自のものである。

秋成は信を守るの筋を徹せさせるために幽靈を出現させた。これは筋の運びがおのづからさうさせたものとも考へられる。しかし、まだ考慮の餘地はあらう。

庭鐘が原作を飜案して原作になき幽靈を加へたものに、「英草紙」の「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」がある。原作は「醒世恒言」の「三孝廉讓產立高名」であらう。「今古奇觀」にも收められてゐる。庭鐘は原話の輪郭を假り、その孝廉を三妓女にかへたのであらう、またわが「七人比丘尼」の趣をも加味したのであらう。原話が一貫してゐるのにこれが三の別話が集つてゐる感を起させるのは一方の範をあの假名草紙にとつたためであらう。「後都の北山かげに七人の比丘尼共に庵を結びけるが、其うち一尼此のさて三人の遊女の始終をよく知りてかたる尼あり」の一句は、庭鐘が問ふにおちずして、語るにおちたものであらう。さて三遊女の一人都菊は死して愛郎廣瀨のもとに姿を現はす。

成日廣瀨我家の西面の柱によりかゝりて立たるに。向ふの屛風の間より半面を出すと見れば正しく都菊なり。こはいかにぞやと立ち寄る間早くも見えず。

庭鐘のこれを秋成が幽靈出現を叙するくだりと比較すると、別段の相違を發見する。しかも秋成が努めて幽靈を叙して凄慘幽玄を盡したのはこゝだけではない。何故にしかるかを考ふべきであらう。

それに先つて、秋成が原作になき幽靈を添へ來る他の場合をも一顧すべきであらう。例の一つとして「淺茅の原」を原作「剪燈新話」の「愛卿傳」と比較せんとする。「愛卿傳」はまた淺井了意の「御伽婢子」に譯載せられて、「藤井清六遊女宮城野を娶る事」の題下にある。こゝにも秋成と、了意と原作者瞿佑の關係が知られる。了意の譯は殆ど譯文の語句を逐うてゐる。「剪燈新話」の例として詩詞を挿むことが多いが、それさへ和歌になほされてゐる。たゞ愛々の靈が趙六と歡會する一條を省いてゐる。

遂與趙子入室歡會、款若平生、鷄鳴而起、下隨數步復回復拭淚云、趙郎珍重、從此永別矣。

しかし、回生して他家の兒となる記事はそのまゝに譯してゐる。「御伽婢子」がそれを省くのは其の序に、「たゞ兒女の聞を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補とせん」とことわる態度によるのであらう。「剪燈新話」がそれを避けなかつたのが、李昌祺をして「剪燈餘話」を繼がせる所以である。張光啓の言に「暇中因覽錢塘瞿氏所述剪燈新話、公惜共措辭美而風教少關、於是搜尋古今神異之事、人倫節義之實、著爲詩文、纂集成卷名曰剪燈餘話」と見える。この言はやゝ強きに失する。もとより「御伽草子」の全部に就いていふのでなく、此の一話に關していふのである。

昌禎が避けんとし、了意が避けたるものを、却つて重く用ゐるのは秋成である。秋成はいろ〳〵の點に於て原文と離れ了意の文と異なつてゐる。彼は名唱とし、遊女とする、娼婦なほ節を全うすることを話の中心とするからで

ある。秋成はそこを截り棄てゝ、はじめより勝四郎の妻とする。他に力を集中するためである。力は幽靈の出現にあり、幽靈との交歡にある。故に原文よりも遥に委曲を盡して叙する。秋成は幽靈出現の順序を變更して宮木の靈と語らうて後、はじめて夫勝四郎はその死を知ることゝする。一段のあやしさはこゝに加はるのであらう。原作は靈をして沁園春一闋を歌はせる。秋成はこれを譯出しない、彼の稗史の約束を守るの要なく、また守ることによつて幽怪不思議の感を薄くするのをおそれるためであらう。秋成はたゞ幽怪の色を濃にすることに力を致した。

趙六を勝四郎とし、眞間の鄉の人とし、宮木のあはれさから手兒奈の物語にうつるのは秋成の別意に出づる。これについては前言すでに述べてゐる。とにかくに秋成は幽靈のあやしさ凄さに精進する。これが庭鐘と大なる相違である。「淺茅が宿」を通じて見たる三つの關係は「吉備津の釜」に於てもくりかへされる。これは「剪燈新話」の「牡丹燈記」の譯である。「御伽婢子」の「牡丹燈籠」と同一肢體である。三者の比較はいよ〳〵秋成の筆の凄さを明にする。秋成の凄さは、正太郎の髻が軒の端にかゝつてゐる最後のをさしていふのでない。磯良の靈が病床にあつて正太郎を見るくだりをいふ。

> 主の女屏風すこし引きあけてめづらしくもあひ見奉るかな。つらき報の程知らせまゐらせんと云ふに、驚きて見れば古鄉に殘しゝ磯良なり、顏の色いと靑ざめてたかき眼すさまじく、我を指したる手の靑く細りたる恐しさにあなやと叫んで倒れ死す。

我を指したる手の靑く細りたる恐しさ、いみじくもいひ得たるもの、しかも原文たえてこの種の記事を見ない。たゞ直抵室中、女宛然在坐、數之とのみある。女麗卿は數々怨んだ後、喬生を柩中に連れ込む。

即握生手、至柩前、柩忽自開、擁之同入、隨即閉矣、生遂死於柩中。

奇はすなはち奇、しかし、秋成はその奇を慘に深めるために正太郎をそこに殺さないで、なほ趣向して幽靈につきまとはれる恐しさをうつし出す。これは了意から何等の寄與をうけなかつた。了意は殆ど逐語の譯を試みてゐるに過ぎないからである。秋成の幽靈は秋成のどこから起り來るかゞ考へさせられる。

九

秋成の幽靈は時の流行から來るとも解せられる。了意の「御伽婢子」以來陸續として出づる奇談異聞の集は幽靈談を中心とし、その流行は明和安永を極點とする。蕪村の「新花摘」に於ける幽靈談も、綾足の「漫遊記」の怪談も皆同じ時の流として考へられる。わたしはその流行の狀を叙述するの煩を避けて、たゞ二三の書中より片言を引く。古今辨惑實物語は寶曆二年の刊行の書、作者北瓊の辭にいふ。「君子は怪を語らず、小人は怪を好む、天下の人、其心を依るや尊き有り、卑しき有り、歎ずべきの甚しきなり。今此の一編は予にひとしき小人をして是よりいたらしめて是を語らざるの高きに至らしめて一助ともならんと梓に盛す。」作者がかゝる意を以て怪を語るのは、必ずしも世の流行を趁ふにあらざることを斷るためであらう。實は怪談の流行に乘じながら、是を語らざるの高きに至らしめん云々は作者のさかしらをあらはに示してゐる。

明和元年の「愧懸話錄」は一に「梨園群會」と題する。流行の俳優の實見した怪談の記錄であることを見せるためである。作者泥嫩が書肆麟戯窩主人に寄せた書簡を附載する。

一簡致啓上、彌御平安珍重奉存候。然ば劇場梨園の話錄無虚言事を書留遣し、其上怪談御疑も候得ば、御存知の役者へ御尋御吟味の上、愧懸話錄と御名付早々梓に御鏤可被下已上。

作者は序跋に於て、しきりに記錄せられたもの丶虚を交へざることを繰りかへして說く。怪談物の流行は斯うせねば人の目を惹くに至らなかつたらう。

安永九年の「怪談見聞實記」は如環子の作、其の序は理を說いては「實物話」の態度をとり。實行を案じては「愧懸話錄」の態度に倣うてゐる。長きをいとはずして引用する。

誰かいふ、世間に下戸と妖物なしとは、當代下戸あり、妖物あり。往昔とても亦然り。古人も妖は德に勝ずといふはこれ化物の事にあらずや。然りといへどもその性質の强實なるは邪魅も妖をなすこと能はず。適怪異に逢ふといへども亦曾て言なきのみ、柔弱虛臆に生れし人は、邪魅の爲に侵さる丶事亦鮮からざるなり。至若不怪をして實怪とし、神魂忽惱亂して精神殆ど傷損す、豈これを愼ざらんや。是所謂妖は人によつて發するものなり。卽熟惟に深山幽谷の間に在つて山魅魍魎の諸妖は知らず、大抵村里の間に在るもの、狐狸の所業に過ぎざるのみ。是皆人の虛に乘じて妖怪をなすものにして譬へば門戶を建てずして盜賊を導くが如きなり。爰に六十年來見聞せし怪談の趣あるを見れば筆し、聞けば記して旅に數印に及びしを此頃文庫の底より見出し怪談見聞實記と名づけ兒女の耳を驚して、春の夜の目覺しにもと櫻木に摟侍る。稍虛說を雜へず、文華によらず、只管俚諺を採用ゐて其の實情を述る而已。

この三つの者は怪談の流行を裏から脇から說明する。しかも怪を標榜しながら、未みづから怪を信ぜざることを

暴露する。秋成の見るところはそれ等と全く異つてゐる。「雨月物語」は決してこれ等の流行によつて說くべきではない。

秋成は怪を信じた。「膽大小心錄」に中井履軒を痛罵するのは、怪を否定し、怪を信ずる秋成を惡しざまにいうたためである。「老が幽靈のはなしをしたら、跡でそなたはさつても文盲なわろじや、幽靈の、狐つきといふは皆狾症やみじやと大に恥しめられた。」秋成はこれを駁するために、「膽大小心錄」に狐の人を魅する實例を擧げさて履軒を嗤笑する。「學校のふところ親父、たま〳〵にも門戶を出ずして、狐人を魅せずと定む、笑ふべし、笑ふべし。」かゝる例のいくつはなほ數へることが出來る。「雨月物語」の神祕幽言はこの信念によつて成つた。

秋成はどうして幽靈を信じ、狐狸の怪を信じたのであらう。秋成の虛弱の體質がまづ考へられる。自像の筥にしるした自傳に、性多病、時々發驚癇、後母依慈愛成長と記した。秋成の性癖は强き執拗を有する。同じ筥に、「無父不知其故四歲母亦捨、有倖上田氏所養」とみづから記した彼の生立がその性癖を釀成する。秋成は常におのが境遇を顧みて堪へがたき腹立しさをも感じたのであらう。常の腹立ちはわけ知らぬ苛々しさとなる。五歲の折に痘瘡をわづらうて指の不具となつたのも、筆執る度にまた苛々しさを添へもしたらう。あらゆるものが秋成の心を安らかに、のどやかにさせない。その心は生ける幽靈の心である。「白峯」の上皇の執ねき心は即ち秋成の心であらう。

わたしは秋成の執拗をたゞ一事を以て示さうとする。秋成の文を讀めば若き頃に用ゐた比喩の類が遙の後の年にもくりかへしてゐることが注意せられる。

「諸道聽耳世間猿」は秋成三十三歲の刊行に係る。「膽大小心錄」は七十五歲の起稿である。「世間猿」にある頑固爺

をさして「朝鮮人を三度見たよりは咄のない男ぞかし」といふ。「小心錄」にはそれの註釋めけるものが見える。「唐人を二度見た事をとし忘れ、といふ俳句があつた。翁は二度見たが三度は見ることのならぬ事じやさうな。」「日月は燈、江海は油、風雷は鼓板、天地人は一大の劇場、堯舜は旦、湯武は末、操莽は丑淨、古今來許多の脚色とは大淸康熙帝の殿上の柱に書いて置かれたげな」とは前者に見えたところ、「さて君が聯句に」と前の句をひいて、「といはれた也、何等かもよく心得たまへど先百餘年の治世なるべし」とは後者の文である。

「世間妾形氣」は秋成三十三歳の作。その中に、「敵討御未刻の太鼓といふ淨瑠璃に、なんぼ廣い大坂でも男のとりあげ婆と女の髮ゆひはないと書きしは四十年そこらの昔なるに、何事もさかしく移りゆくは色里のすがた」と見える。同じ事が「小心錄」にも見える。「敵討御未刻の太鼓」の句を引いていふ、「というた事じやが、女の髮ゆひは翁若い時にお久米というたが元祖じやあつた。」なほ男のとりあげ婆が出來たこと、女の山上參の先達のある事を述べて、「まだない者が千石船の船頭のみじや、女相撲はまだないものであつた」と移りゆくすがたに就いていうてゐる。しかも「妾形氣」は秋成の晩年にこの戲著のあつたことを愧ぢ、問はるとは知らぬふりをし、問を重ねられると怒つて絶交にも及んだ書であつた。

「雨月物語」の「佛法僧」には、高野の玉川の歌に關する論がある。「膽大小心錄」にも同じ事がくりかへされてゐる。

「佛法僧」の題は鳥の名をかりておふせたものであるが、その鳥の事が「小心錄」の玉川のくだりの直前にある。

「嵯峨は丹波へつゞいて奥深しとぞ。松の尾の山のあなたに友もがな佛法僧の聲をたづねて。佛法僧は高野山で

聞いたが、ヅツパンニツ、パンニとないた、形は見なんだ。」

わたしは秋成が佛法僧をきいたのがいつの年であるかを知らぬ。從つて「雨月」の佛法佛法と鳴く鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆとなるのと直に交渉があるか、どうかを知らない。たゞそれとその他の例が秋成の執の强さを示すに足ることを知る。秋成が若き日に用ゐた比譬例證を惜しむのは、なほ死せる童兒を愛撫する「靑頭巾」の僧の如きものがあらう。

更に秋成と宣長との論爭難詰のあとを見る、いかに秋成の自說を持するの性癖をあらはにするを見る。

大佛の柱はやけてなくなりぬせゝる蟻どもたんとわいたり

この歌を以て秋成が宣長一派を高きに下瞰すと解するはどうであらう。わたしは「嗔火熾にして盡きざるまゝに終に大魔王となりて三百餘類の巨魁」となつた上皇の苛立ち、腹立ちと相似るものがあらうと考へる。

蜀山人と秋成と相見てよし、山人は秋成の文を奇とし、人を奇とした。後秋成が南禪山中の西福寺の紅梅の下に墓を下し、またあらかじめ棺を作つて寺に託して置くと聞いて「長夜室記」を贈つた。載せて『藤簍册子』にある。その一節にいふ。

今歲聞、翁作長夜室以蓄焉、一棺未蓋、萬事旣休、予亦瓜期将還江戸、便道過京與翁訣矣、噫翁無用於天壤間、天壤間亦無用於翁、無用之用知者幾希矣、、白日昭昭、長夜冥冥、昭昭之中冥冥如比、冥冥之中亦有昭昭者否。是我獨奇翁、而人所以不奇翁也

蜀山人のこの解は果して當を得てゐるであらうか。秋成に歌がある、「棺をつくらせてその蓋にかいつけける」と

はし書して

長き夜の室としきけば世の中を秋の翁がすむべかりける

世の中を秋の翁の語句、果してそのまゝにとり入るべきであらうか。わたしは却つて秋成の生の執着を見、蜀山人を以てわづかに皮相を解し得たりといはうとする。わたしはこの一事をも藉りて秋成の幽靈心の證左とする。

秋成が幽靈の存在を信じるは、おのが心に幽靈たり得るものを多く具備するためであらう。その心を狐狸の上にも及せば、もとより狐狸の怪を堅く信ずることゝならう。「山霧記」にはかぎりなき執拗を見せた狐の復讐談がしるされてゐる。

秋成の飜案は原作をうつすに當つて、おのれを核心とする。これが庭鐘の作風と大なる相違をなしてゐる。庭鐘はあまりに原作に拘泥する、原作の思想を墨守する。それが我が邦の俗と異なるものがあつても避けようとせぬ。むしろ異なるを興深しとして採り用ゐる。要するに支那を尙ぶにある。秋成は支那を高しとするものでない。支那よりも更におのれを高しとする。木村蒹葭堂は庭鐘の友、また秋成とも交情が篤かつた。その人は支那に憧憬して支那の物のくさぐさを集めてよろこぶ。當時そのやうな徒輩は多かつた。秋成はその間にあつて白眼を以て對する。「痼癖談」に「むかし鳥獸草木の類の、世に見知らぬをばあまねく能く見わかつ師ありけり、こは唐土にては何といふを、此國にてはしか呼ぶものなりなど、いともくはしかりけり。されど、まれまれには辨へ難きものもあるにや。此は何の類なりとも答へらるゝを、或人これを聞きて、何の類の類の字は祇園町の娘分の分の字にひとしく、いとまぎらはしとなむ言ひける」といふが如き、諷言骨を刺してゐる。

庭鐘の飜案は時に支那の知識を離れる、しかしそれに代へるものは我が國の古典籍中のもの、扱ひぶりに至つては依然として知識を主とする。秋成はさうでない、心魂のすべてをうち込んでかゝる。

わたしの此の稿に於ける意圖ははじめからかゝる平凡なる結論に到達すればよしとした。しかし、結論にさきだつてその結論を誘導する一原因を考へる。事は秋成の漢文の知識に關する。

わたしは秋成のそれがどの程度であるかを詳にせぬ。その書れたものとして殘つてゐる漢文の必ずしも巧みでないことを知る、從つて漢文の力がはるかに庭鐘の下にあることが推測せられる。この推測は次の推測を誘いて來る秋成の原作を達讀しないことがその飜案の自由を得させたのでなからうか。庭鐘の達讀が却つてその飜案の筆を拘束するのを反對でなからうか。わたしはこゝにも『膽大小心錄』を引く。

「陶淵明がおつしやるは書を讀んでその書の六旨を心得たら跡はくだくだしくすますは愚ぢやといはれた。

またわたしは醫術の拙きをみづから知る秋成が「醫は意ぢや」とて病家に足しげく通つたことをおもひ出す。支那小說に對するまたこれがなかつたらうか。

斯くして結論に達する。またわたしはなほ一つの輕からぬ問題の殘つてゐることを知る。たとへば「紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話」に見えるが如き、一種の史論に關する飜案、とりわけて「垣根草」「莠句冊」に多く見られるものを原作と比較するをしなかつた。これは秋成と庭鐘とを合せ考へる上に於て重きをなすものとおもはれる。飽くまで原作を重んずる庭鐘は、彼邦の人に代へるにいかなる邦人を以てするか、それにいはせる言說が果してよくわが歷史の正しきに合することに注意したか、此の稿に於ては藤房と師直とがわづかに一端に觸れてゐた。多く

おのれを語る秋成の飜案に於てはこれはどうであらう。「雨月物語」の「貧福論」の如き、「春雨物語」の「海賊」の如きは、新なる問題となるであらう。別稿あり、即ち今の言これに及ぶ事なし。

（大正十五年十一月「文學思想研究」）

種彥研究

一

外の戲作者もしば〳〵してゐるやうに、柳亭種彥も其の戲作の凡例にまた序文に、或は眞面目の體で、或は諧謔の筆で、其の作の意圖を說き、作の原據を示し、手法を明にすることが多いが、未だ「二箇裂手細之紫」の序文ほどに傳へて精しいものはない。

形は少し似かよひても、虎の卷にはおよびなき、猫の皮にて歌三味線を張替へ、まだ引ならひのよい女郎衆と、世にうたはれし千瀬川が一代記を著しゝが、思ひのほかに流行れしと、書房が話の調子に乘て、友三味線の替手を作り、跡追としてひけらかすは、物見車の世に轟き、卯月の艶の秋のこぬ、趣向にあやかる意なれど、是もまた先にいふ猫の皮の類にて、花形は蜂に似たれども、さしたる事なき蘭蝶の夢の浮世の浮世草紙、此いとぐちをとくにこそ、

種彥は之に頭註を附けてゐる。外題の手細には「手細ハ昔婦人及少年ノカブリシ物也」といひ、歌三味線には「歌三味線、自笑其磧作」といひ、友三味線には「友三味線、同作」といひ、跡追・物見車・卯月の艶に註しては「鋒好

法師物見車、跡追、碁盤太平記、卯月桙、跡追卯月色上ヶ以上四部、近松門左衛門作」といつてゐる。

いふところの「千瀨川一代記」は文政二年刊行、國貞貞繁畫くところの合卷である。

鎌倉化粧坂伏見屋の大夫の千瀨川はもと武家に腰元奉公してゐたが、父の獵師柴作が殺した武藏野の雌雄の白鹿の怨念によつて、同じ邸の小姓花澤鳳次郎と戀に墮ち、つひに出奔する。途上、賊紫髭の巾子藏に襲はれて鳳次郎と別れ〳〵となる。一旦危難を父に救はれたが、父の病氣のために身賣して遊女となつたのである。しかし鳳次郎の死を信じてをり、また父の病死に遭つたので、父と夫との菩提のために、座敷のみを勤めてゐたが、たま〳〵遊客五曉から其の態度が遊女としてあるまじい事、また夫の菩提にならない事を諭されて、つひに二人は深い仲となる。これも亦鹿の怨念のなすところであつた。

五曉とは鎌倉の絹商人五大屋寶右衛門の一子曉之助の替名であるが、廓の遊びの嵩じたはては勘當の身となり、借金のため、また桐自滿軍次と名乘つて、千瀨川のもとにふられながら、通ひ詰めてゐるもとの賊、巾子藏の妬みのために桶伏の刑に處せられる。五曉には許嫁がある。浪人澤瀨丹太夫の娘小梅である。親と親との約束のみで、五曉はまだ小梅の顏を知らない。丹太夫は義理のために娘を大磯の孌子に賣つて五曉の借金を償ふ。しかも事のよしを誰にも告げない。故に五曉の如きは、おのが手代丁助が武家姿の賊に金を奪はれたことから、其の金の出所に疑惑をさへかけてゐる。

丹太夫が斯うまで苦勞するのに拘はらず、五曉の父の寶右衛門が頑として子を顧みないのは、もと自分は前代に仕へた手代であつたが、前代が一子貫太郎の放蕩を怒つて勘當してあとを自分に讓つてくれた義理を思ひ、家のた

めに子の愛を強ひて抑へるのである。しかも其の苦衷を他に漏さうともしない。そこに丹太夫の義憤が起つたのである。

千瀨川もまた五曉のために大磯に住みかへて今の虎御前と呼ばれてゐる。そこへまた五曉が忍び通ひ、また桐自滿のために難儀する。それを虎の馴染客で、つひぞそちらから床の勤を求めない夢野屋蝶兵衛、替名して夢蝶といふのが助ける。それが貫太郎であつた。貫太郎の計らひで五曉の勘當は赦される。折から鳳次郎も來つて桐自滿に縄をかける。丁助の金を奪つたのも此の者の所業であつた。實右衛門もはじめて本心を人々に告け、こゝに一切の誤解は解ける。虎は剃髪する、鹿の怨念は全く離れ去る、靜に念佛三昧に日を暮らすこととなる。

斯ういふ一篇の梗概から、誰しも想ひ起すものは、田螺金魚の作、安永七年刊の洒落本「契情買虎之卷」であらう。この洒落本は刊行以來ずつと讀者を有ち續けて今に至つてゐた。從つてその洒落本が「千瀨川一代記」の種本であることにすぐに氣づいた事であらう。人情本がかつたことが讀者の興味を繋いでゐたのである。文政年度に再刻されたのもそれがためであつた。

千瀨川は其の瀨川であり、花澤鳳次郎は生駒幸次郎であり、五曉は五郷であり、桐自滿は桐山大盡と其の惡家來軍次とを一つに合はせたものであり、鹿の怨念は軍次に殺された瀨川の幽靈であることは一目瞭然たるものがある。

種彥は「千瀨川一代記」の序文に於いて、

さて當時(そのころ)の御見記に鎌倉山の山形の下にならびし星月夜、千瀨川といふ全盛あり、それが事跡はまうさずと、何(いづ)れもさまの御存知の、かの虎の巻の威をかりて、きよろつく眼玉の狐作者、勸善に硯をならひ懲惡に筆をと

つて書ながす事かくのごとしと、あの洒落本との關係を斷つてゐる。しかし、其の斷りはほんの一剝きを剝いたまでで、實のところを告げ知らしたのではなかつた。

はじめて其の實を明にしたのが「手細之紫」の序文である。それで「傾城歌三味線」の飜案であると明記した。五曉は玉屋新兵衛、千瀬川は小女郎、五曉の許嫁小梅と其父親丹太夫はお吟と其父蠹蜑右衛門、桐自滿は新兵衛の色敵錢太といふ大盡客、千瀬川が化粧坂から大磯の住みかへは三國から京、京から江戸、江戸から浪華への住かへであつた。其の他、一々の關係交渉が指摘される。

瀬川が五郷の胤を宿し、死胎から生れた其の子に執着して、之を五郷に託することとは、「虎之卷」の大事な一事件であるが、種彥は「千瀬川一代記」に於いては觸れることがなかつた。しかし、小女郎が新兵衛の子を生み、その子の恩愛のために親二人が苦勞することは、「歌三味線」をつなぐ一つの筋でもある。種彥はこれをも契機の一つとして、あの洒落本とこの八文字屋本とを撮合(もえあは)したのであらう。種彥の例の細心の注意である。

「歌三味線」の着想は義理と人情とにからまる歌舞伎淨瑠璃やうの筋を、三國・島原・吉原・新町の廓廓の特相の上に浮び出させたものであるが、その事は直ちに文政の草双紙の興味とはならない。「虎之卷」また洒落本としては珍しい筋立のものではあるが、其の構想そのまゝでは、人情本にこそなれ、草双紙にはなれさうもない。種彥は其の二つを溶して新しい草双紙の鑄型に入れ直し、新しい趣向として今の草双紙讀者の前に提供しなければならなかつた。

鹿の怨念ばなしも其の新しさの一つ。丹太夫をして「歌三味線」の軍右衛門よりも一段と義理堅く、つひに娘の身を賣るのも其の一つ。更にまた丹太夫が工面の金の出所を讀者をして疑はせるのも其の一つであるが、殊にこれに重きをおいてゐた。前編を丹太夫が必ず金を才覺して、聟の難儀を救つて見せるといふくだりで結び、そこの挿繪には、「とゝ樣のお便りがもふ有りさふなものぢや」と待ちうけてゐる小梅を描き出してゐる。其の小梅の言葉から、讀者をして丹太夫が小梅を身賣りして金を作るのでないかと豫想させる。しかし、之をうける後編の第一葉には、一人の武家が手代丁助の金を奪ふ繪を示し、「この繪のわけのちにあり」と斷つてわざとその事に觸れず、他の筋をのみ語つて、讀者をして其の武家が丹太夫でないかを疑はせる。此の疑は其の金が小梅今の藝者かほるの身代であることが明になるまで續けられる。

このやうなのが當時の草双紙讀者の大に興味を寄せて最も喝采するところであつた。種彦が焦點をそこにおく所以である。

種彦はまた「虎之卷」に其の原型人物たえてなく、「歌三味線」の粹客三木大盡に片影を認められる夢蝶といふ人物を設けてゐる。夢蝶の名、其の本名夢野屋蝶兵衛と共に、其の義すでに明なる如く、本筋ではわづかに觸れた架空人物、すなはち一切の事件の捌役として特に設けたものである。これも種彦の慣用の手段で、また讀者の種彦に期待する作風であつた。

こゝに見逃してならないのは、此の夢蝶の因つて來るところである。もとより「莊子」に基づくことは明である。種彦みづからも卷末に於いて左の言をなしてゐる。

かく書けるも皆一時の戯にて、僞りを以て善き方に人を導く草紙なれば、かのもろこしの莊子が胡蝶ゆめ〳〵
有りし事にはあらず

しかし、此の趣向を直に「莊子」から來たと解するのは當らない。其の中間に、寛政四年刊行の黄表紙、黒山人作、「女莊子胡蝶夢魂」をおいて考へねばならない。勿論作意に於て殆んど交渉は有たないまでも、少くとも二つの書の卷末の畫には鮮かな聯絡が認められる。（挿入圖版參照）

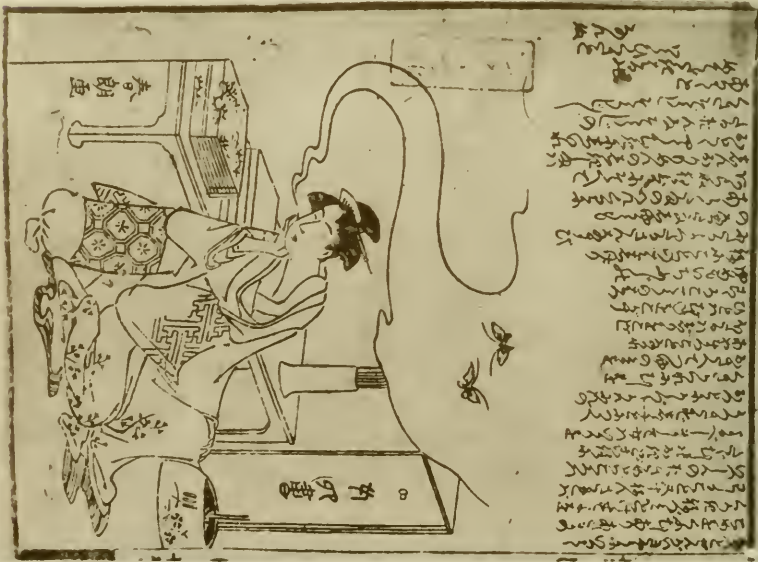
この事に就いて種彥は一言もいはないが、彼が古い浮世草子などに作の據りどころを求めると共に、たえず草双紙の傳統を念頭においた態度から、から推定してもよいやうである。

二

「二箇裂手細之紫」は此の「千瀨川一代記」の續編として書かれたものであることはいふまでもない。しかし、其の序文に於いて、種彥が「友三味線」の飜案であるといつてゐるのを果して信じてよいのであらうか。いな、むしろ之を種彥の洒落と解すべきであらう。

洒落は「友三味線」の友に懸つてゐる。「歌三味線」の飜案物の續編なり、友なるが故に「友三味線」の名をおいて、其の飜案といふことを示したに過ぎなからう。內容に於いては彼此の間に殆んど交渉がないといつてよい。むしろ種彥が別に掲げた近松の四部の淨瑠璃「兼好法師物見車」「碁盤太平記」「卯月艳」「卯月色上ケ」の趣向を新內物の蘭蝶此糸につきまぜたものである。

種彦作「千瀬川一代記」

黒木作「女悲子胡蝶夢魂」

何故にこれ等の作を據りどころとしたかといへば、「千瀨川一代記」の續編としてこれを書くがために、跡追すなはち續編を有する「物見車」また「卯月艷」と、それ等の續編を選擇したまでであらう。こゝにも種彥らしい好みがあつた。

それならば何故に「蘭蝶」を選擇したかといへば、これもまた前の夢蝶の名をうけたためであらう。こゝにも洒落が見られる。たゞ其の洒落は少しく重くるしい。それもまた種彥らしい。

此の合卷の刊行されたのは文政三年であつたが、其の頃、江戶の一般の讀者には近松門左衞門の名こそ記憶されてゐるにしても、其の作品は「歌三味線」なんどの八文字屋本と共に殆んど鑑賞の埒外にあつた。それを種彥がわざ〳〵序文に於いて據りどころとして示したのは、或は自家の好尙に淫し過ぎたのではなかつたか。それともその頃の讀者は何かの據りどころがあり、由緖めくものゝあることを喜んだのであらうか。時の好みか、作者の好みか、いろ〳〵と考へさせられる問題である。

それにしても「手細之紫」と近松の四部の淨瑠璃の關係を檢討すべきであるが、煩を嫌うてしばらく之を避けて、一目の下に明かにされる二圖を選んで其の要を示すことにする。

次頁の圖版、上のは此の作の發端に對するさし繪であるが、其の圖柄をわざと古風に八文字屋本のさし繪の體裁に擬したのである。これはまだ輕い趣向であるが、下のになると、どうしても原作「卯月色上ケ」なしに趣向の筋の思ひ起されない代物である。

圖中、駕籠に乘る者は蘭蝶に當る蘭蝶三(らんてふぎ)である。駕籠に從ふ者は强ひて之を廓に誘ひ出す幇間と仲居である。之

を見送る者は蝶三の廓遊びが賓詮議のための遊蕩である眞意を解さず、苦諫して聽かれなかつた家來の珍内と草履取の段藏である。二人はたゞ呆れに呆れて風のやうに馳せ去る駕籠の行方を見詰めてゐる。雲のやうなものは駕籠の早さを示すための畫工の工夫、いな種彥の案じである。

其の案じにはどうやら無理がある。しかし作者は無理を承知で其の下繪を描いたのである。作者は讀者のあるものに其の無理を氣づかせ、從つて其の無理の蔭にかくしたものゝ存在を見つけて貰はうとしたのである。

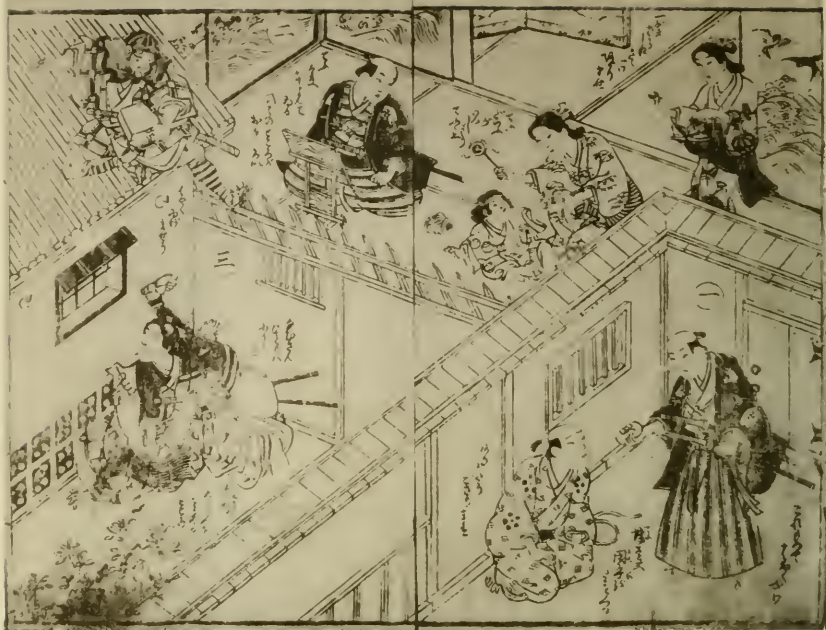
「卯月の色上ゲ」の中の卷、心中相手のお龜は死んで、與兵衞はありて甲斐なき身を、僧形にかへて庵室に籠つてゐる。そこへ女駕籠が夢のやうに出現する。

風輕々と駕籠舁が昨日の旦那今朝のまぼろし、夢の浮橋一つ橋蹄げぢや合點ぢや手にも取られぬ朧駕籠、姿の山に眉かゆる、賤が袂もかすかなる

與兵衞をたづねる女の姿に、夢心地にこゝぢやこゝぢやと扇をあげてうち招く、駕籠の中からお龜がたち出づる。いふところのおぼろ駕籠のくだり、作中の絕唱と稱せられる。種彥が蔭に隱したものはまさしくこれである。其の縹渺たる夢幻をしばらく現實の筋にとりいれたのが第六圖であつた。

圖中の珍内は、此の場合に於いては與兵衞に擬したものであるが、手に破れ扇を持つてゐる。扇は諫言立てを怒つた蝶三が打ち据えたために破れたもの、これも與兵衞がお龜を招く扇を藉り用ゐたものである。どこまでも細かい種彥の好みか、一寸驚かされる。

賓詮議のために遊女此糸と契りをこめた蝶三は、いつか其の情にほだされる。其處へまた道具屋の娘お龜があど

種彦作「二箇裂手細之紫」

けない戀をしかける、其の戀から寶は手に戻る。其の落着として、此糸は尼となつて蝶三とお龜との緣を全うさせる。

さて種彥は此糸尼を千瀨川の尼となつてゐる庵室に至らせる。第二の續編を作るための趣向立からである。種彥は卷二に二人の尼の姿繪を見せ、また「蘭蝶三夢蝶平今樣二人びくに」といふ外題を見せて之に附記して、

千瀨川一代記の人物と此冊子の人物を合し、正三翁二人びくにの名をかりて今樣二人びくにといふさうしを次て著さんとおもひしが、腹稿いまだ調ず、まづ其標題と發端の畫をこゝにあげて、來春發兌を告奉るになん

といつてゐる。其の作はつひに作られなかつたやうである。しかし、前の二つの作からどんな構想であるかは推測されなくもない。

それよりも、此の作られた二つと、作られずにをはつた一つと、都合三つのものを通じて、種彥の日ごろの著作の手續を明にすることが出來る。

三

種彥によつて教へられた作の手續を規準として、彼の全創作を吟味すれば、一つとしてこれに當て欲らないものはない。最後の作「僞紫（にせむらさき）田舍源氏」はいふまでもない。最初の作、「千瀨川一代記」にさき立つ十一年、文化四年刊の「阿波の鳴門」「江戸紫三人兄弟」「奴の小萬物語」がそれであつた。中にも「奴の小萬物語」に於いて、其の傾向が著しく認められる。

此の作は他の二つの作と共に讀本であつた。種彦もまた他の作家の如く、文壇への第一歩を當時の本格小說たる讀本を目ざしたのである。

文永年間のこと、鎌倉の秋田宗景の側室唐衣が琴を彈じた。老狐女の童となつて之を聞く、唐衣が早くもこれを看破したので、宗景は近臣入江安濃次郎に命じて狐を殺させる。狐の怨念が唐衣の身に宿つて戀情を起させ、安濃次郎に不義をいひ寄らせる。安濃次郎は之に應じなかつた。しかし事は宗景の耳に入つた。宗景は、姙娠中の故もて唐衣を赦して、安濃次郎に添はせる。かくして生れたのが宗景の胤で安濃次郎の養ひ子である娘小萬である。しかし狐の怨念はなほ唐衣に附き纒うて、つひに入江家の家來東吾と密通させる。密通を知つた安濃次郎は東吾に金を與へて一まづは立退かせ、其の立退く所を金盜人として斬り殺す。かくも唐衣の不義の名を庇ふのは、君から下された妻なるが故に、醜名を蔽ふのであつた。

唐衣と心離れた安濃次郎は、若い腰元横雲を寵愛する。横雲の身ごもれることを聞いて、唐衣は色仕掛けで醫師久庵を手なづけ、之を毒害させようとする。横雲は侍女の注意によつてわづかに免れる。横雲やがて男子を生む、けれど唐衣の難を虞れて女子と披露し、之を雲井と名づける。

その後、宗景は讒に墮ちて兵を擧げて敗れ、安濃次郎また之に坐して戰死する。小萬と逃れ去つた唐衣は盜賊の首領となる。小萬しばしば諫めても聞き入れない。はては小萬を疎じて、手下の庄兵衛と謀り、小萬を若衆に仕立て、少年と僞つて淨觀寺の僧果圓に賣る。

ここにまた庄兵衛は僧と身を變へて武藏六浦の小波屋に入り込み、さきに唐衣が殺した旅人高市數右衛門の父の

白骨と鉦鼓を土中に埋めておいて、其の祟を言ひ立てて祈禱の金をせしめる。たまたま數右衛門は其の家に宿つたが、鉦鼓によつて父の死を知り、また父の靈の導きによつて唐衣が父の敵なることを知り、唐衣を討ちてとる。其の時、狐が數右衛門を救助することがあつた。

淨觀寺に若衆としてゐる小萬は、これも戰亂を避けて横雲と共に逃れた雲井に邂逅する。しかも絕えて二人は相識らない。これまでもついぞ顏を合はしたことがなかつたからである。雲井はなほ女裝して信夫と名乘つて、果圓にもの學びに通ふのである。二人はいつか眞の男たり女たることを語らひ合うて契を結んだ。

しかし、いつか女としての小萬に對して執着を寄せてゐた果圓は、二人の仲を知ると共に嫉妬に燃えて小萬を監禁する。其の頃、横雲も侍女櫻木も病み臥し、信夫は袖乞となつて二人を養つてゐたが、女と思ひ込んだ庄兵衛に挑まれ、さまざまに苦められ、はては横雲も櫻木も其の手にかかつて死ぬ。小萬は櫻木の靈の告によつて信夫の危難を知つて來り救ふ。その寺を逃れ出づる時、誤つて果圓を傷ける。

時に安濃次郎に舊緣ある大阪の俠客黑船忠右衛門も信夫のもとに來り會したので、三人共々に大阪に行く。信夫は男にかへて名を五良八と改めたが、依然としてか弱い。それにひきかへて、膂力ある小萬は奴の小萬と名乘り女達となつて、これも大阪に入り込んでゐる庄兵衛の行方を尋ねる。漸く之にめぐり會ひ、つひに五良八を助けて仇討の本望を遂げさせる。

さて二人は夫婦となつたが、たまたま五良八の素性を知つた小萬は、さては異腹の弟ぞと思ひ込み、畜生道に墮ちたことを歎きの餘り死なうとする。五良八もさうと知つて同じく死なうとする。やがて小萬は安濃次郎の胤でな

いことを知る。かくて五良八は鎌倉屋といふ米商人となり、小萬よく之に仕へてゐたが、其の後尼となる。其の師の僧はもとの數右衛門であつたが、其の人から果圓の小萬に執着の餘り幽鬼となつたのを成佛させたといふこと、また果圓が父宗景等を讒言して戰死させた者であることを聞いて、今更に因果の深いのに驚く。

此の梗概を擁して種彥の趣向の因つて來るところを考へるのは、さほどの困難がないやうである。すでに奴小萬・五良八・黑船忠右衛門・庄兵衛などいふ人物の存在から、また其の筋から當然考へられるのは、並木大輔・淺田一鳥等の合作の淨瑠璃「容競出入湊」である。種彥は之を藉りて大體の筋立をしたのである。また古い代の物語「とりかへばや物語」にもとり合はせたのである。しかし、狐の怨念のことや、安濃次郎が他の事情に託して姦夫を殺し、家の醜聲の漏れるのを防いだことは、別に據る所があつた。西鶴の「新可笑記」卷三「女敵に身替り狐」これである。

河内の國の武士某、妻の不義を知り、わざと人集めをした夜、姦夫妻のもとに忍び來たのを仕止めたと稱して、かねて準備しておいた狐を斬り、これまでの事も狐のなす業と沙汰させて、家の醜聲をうち消しておき、其の後、機を見合はせて密夫を殺した思慮ある話によつて想を構へたのである。

庄兵衛の小波屋に於ける姦計また西鶴の作による。「本朝櫻陰比事」の卷二の「佛の夢は五十日」佛像を隣家の椽下に埋めおき、夢の告げにかこつけて之を掘り出し、賣僧と馴合つて賽錢を取り込まうとした仕掛けの話これである。

淨觀寺の僧果圓が男裝せる女と知らないで小萬の若衆姿に惚れ、後女と知つて思ひやますことは、これもまた

小萬の名をかせにして、西鶴の「好色五人女」卷五、おまん源五兵衛の物語を附會したことはいふまでもなく、その果圓が死して幽鬼となつてなほ小萬に執着することの、上田秋成の作「雨月物語」卷四の「青頭巾」に出づることも勿論である。種彥はまた此の「青頭巾」の筋に「秋の夜長物語」の歌をもとり添へてゐる。これは稚兒物語の緣によるためであらう。

小萬と五良八が異腹の兄弟なることを知つて畜生道に墮ちたと死を決するのは、「今源氏六十帖」の脈をひく近松の「津國女夫池」に據るものであらう。「奴の小萬物語」の主なる據りどころはほぼ盡きる。小さい細かい點に至つては餘りに煩はしい。しばらく省略する。

「奴の小萬物語」の刊行された文化四年は、種彥わづかに二十五歲、稿はその前年か、前々年に於いて成つたことを思へば、若い種彥が殆んど世に讀まれない西鶴を讀み、また之を相應にこなし得たことは、當時としては驚異に價する。

「邯鄲諸國物語」に於いて、また「田舍源氏」に於いて、其の他の合卷に於いて、材を西鶴に仰ぐ作風は、すでに拓かれてゐたのである。

それを知つた今は、種彥と「奴の小萬物語」との關係を別の觀點から考へる必要がある。

四

奴の小萬の奴とは、なほ西鶴の「好色一代男」の中の奴三笠の奴の如く俠氣あるものの謂である。

小萬の場合に於いては、其の俠骨一段と外に現はれて女達ともなつたのである。種彥は此の讀本刊行の後十二年にして、合卷「繪操二面鏡」を刊行した。これが大體に於いて「容競出入湊」に據ることは、其の合卷の角書「趣向は淨瑠璃、世界は歌舞伎」と其の淨瑠璃の角書「昔奴の男作、今操の女作」との比較からも明である。

此の作に於いて、種彥は小萬の前身を傾城吹川とした。「出入湊」の瀧川の名を少しく變へたのである。種彥は其の小萬に紺の看板を着せて奴姿とさせ、それによつて奴の小萬と呼ばせることとする。斯くして、普通にいはれる奴の意義として之を用ゐたのである。

近江の侍、立田岸次郎は深くいひかはした傾城吹川をそそのかして、おのが母から金を騙り取らうとする。吹川を武家邸の腰元に仕立て、親の貧しさを救ふために、朋輩の衣裳を盜んで着てゐるのを、仲間どもにとつて抑へられ、身ぐるみに剝ぎ取られるかなしい狂言をさせる。母はすべてを承知で之に金を與へる。岸次郎は母の眞意を知つて改心し、吹川また仲間の看板を掛けてゐる身を顧みて、一生絹物を身に附けまいと神佛に誓ふ。斯くしていつも奴姿で通して、煙草商ひをするのであつた。其の煙草商ひも「出入湊」の中のほんのつまの筋を藉りて用ゐたのである。

「繪操二面鏡」の後十三年、天保四年に、種彥は、「出世奴小萬傳」を刊行した。此の作は五良八は「出入湊」の五良八のやうな、女にも劣る弱い者ではなかつた。種彥の「奴の小萬物語」はその五良八の弱さと、小萬の强さを其のままにうけ入れて筋立したればこそ、男裝女裝と互にいれ違ひにしたのである。從つて「新とりかへばや物語」などとの別外題をも附したのである。

「繪操二面鏡」に於ける五良八は、決してさういふか弱い者ではなかつたが、また別に取り立てていふ程の腕前でもない。それを種彥は此の作に於いて、まさしくとりかへてしまつたのである。鎌倉の俠妓奴の小萬は、此の强い若者の助太刀を得て、父の仇を討つことが出來たのである。

種彥が「奴の小萬物語」を修正することとは、斯くの如く永い年月に亙つてゐる。類型類想の作の之をめぐるものも多い。これはひとり小萬五良八に關する題材だけでない。種彥の作のすべてに於いて見られる現象である。飜案といひ、改作といふ、これ江戶時代の作家の常套手段であるが、種彥は自家以外の作品に據りどころを求めるとともに、自家の作品をも改作し飜案するのであつた。さういふ點からいへば、種彥は江戶時代の作者の特相を最もよく代表する作家といへる。

ここに忘れてならないのは、種彥が舊作を修正し改作するに當つて、自家の趣向を恃みとせず、依然として他の據りどころを探し出して、前のものとおきかへることである。「繪操二面鏡」の如きは、「出入湊」に「五十年忌歌念佛」と「極彩色娘扇」を絡ませて、筋を複雜にし、「出世奴小萬傳」は八文字屋本の「名題紙子」また西鶴の「新可笑記」の一章を綯ひまぜることに於いて、一篇の探偵小說を作りなしたのである。

更にまた注意すべきことは、斯うして出來上つた「繪操二面鏡」が著しく種彥の草双紙の處女作「鱸庖丁靑砥切味」の筋立と類似することである。

五

種彥の讀本は決して成功しなかつた。馬琴の如きは趣向の淺薄と文辭の拙劣との故をもつて之を貶してゐた。其の批評はまさしく當つてゐる。彼は讀本作者として具備すべき條件の幾つかを缺いてゐた。其のうちの一つが「奴の小萬物語」に於いて見るところの篏め込みの手法である。讀本の趣向は、變化を尊ぶと共に、全體の統一を要する。然るに種彥の篏め込みは、多く部分の妙味に活きて全體を通貫する興味となり得ない。殊に種彥が讀本に於いて計畫したやうな、歌舞伎淨瑠璃の小說化は、種彥のやうな部分的興味に重きをおく作家には斷じて恰好のものでない。

これ、馬琴が種彥の「綟手摺昔木偶」を評して、雜劇的なるが故に、餘りに歌舞伎がかるが故に、讀本をしての價値乏しといふ所以である。もとより馬琴の讀本にも、歌舞伎の要素は少くない。ただ馬琴にあつては、其の要素はすべて讀本の構成に役立つものであるが、種彥のものは讀本の組織を破壞するものであつた。されば、「昔木偶」と同年刊、文化十一年の「勢田橋龍女本地」の如きは、淨瑠璃風に書いた讀本として、作者得意のものであつたらうが、散々の不評にをはつて、豫告された後編も闇から闇に葬られてしまつたのである。斯くして種彥は讀本を斷念して草双紙に專らになつたのである。

讀本と草双紙との內容の上の區別は、草双紙は讀本の梗概である、といふのが種彥の見解であつた。「浮世一休郭問答」の序にいふ。

此册子は讀本に綴らんとて、大むね趣向をまうけおきしが、障ることありて草稿を綛す、然ればとて反古にせんも口惜しく、其繁きをはぶき、唯要を摘で例の繪草紙とはなしぬ。原素丁數かぎりあれば、嗚呼詞の足らざ

るを如何せん。

丁數に限あつて、詞の足らない繪草紙には、詞の不足を補うて餘りある繪といふ武器があつた。毎丁にある繪は毎丁に變化あることを必要な條件とする。其の變化はともすれば部分的の活躍を要求する。種彦のやうな作家は其の要求に應ずることに最も適してゐる。殊に下繪にも相應巧妙な筆を有つてゐた彼である。或は種彦を以て生れながらの草双紙作者といつてもよい。しかも其の人にして讀本に斷念した後七年、なほ意を讀本の制作に用ゐようとしたのである。讀本の位置がはるかに草双紙の上にあつたからである。

漫然と草双紙といふが、種彦の才筆が恰好だといふのは、文化初年の合卷に就いていふのである。種彦にして安永天明の黄表紙の洒落を書かせたならば、彼は必ず文壇の外に放逐されたのであらう。

なほ彼の洒落本「山嵐」が京傳の作を眞似しながら、其の氣分を出し得ず、笑話でゆかうとして「醒睡笑」の古風を覘つて、つひに不評をはつたと同じやうに、あの頃の輕妙な微笑のたゞ中にとり濟した重苦しい理詰の洒落に、空しく讀者の苦笑を贏ち得たに過ぎなかつたらう。

草双紙作者としての種彦の出現は、時機の宜しきを得たものである。草双紙すなはち狹義にいふ合卷が、洒落から眞面目になつた敵討物の黄表紙の後を承けて、合卷と讀本との區別が、繪の多少と、筋の細かいと粗いとに過ぎない文化年度に於いて、其の大分を縱横にすることが出來たからである。

すでに趣向が複雜であることを要求される上に、繪組の關係から、やゝ目まぐるしい變化をさへ所望される草双紙が、歌舞伎がかることは當然である。歌舞伎好きの作者種彦が歌舞伎好きの江戸の草双紙讀者の心理を把握する

ことは早い。彼は早くも草双紙を以て紙上の舞臺に擬した。彼の作で共の心をもつて書かれない何ものがあつたらうか。

前に不評判の淨瑠璃讀本「勢田橋龍女本地」も草双紙の「邯鄲諸國物語」初編に仕立て直されると多大の喝采を博し得たのもこれがためである。

殊に彼をして草双紙一方の雄と認めさせた「正本製」は一切を芝居がかりにし、作を正本にし、序文を口上といひ、口繪には舞臺やら樂屋やら俳優の日常生活やらを見せ、さし繪もすべて舞臺また舞臺裏の心で描き、人物をば俳優の似顔で描き、讀者をして身劇場にあり、しかも日ごろなかなかに望みかなはぬ樂屋内までものぞけるやうに畫いて見せた。故に「正本製」は初編を文化十二年に出版した後、天保二年刊の十二編まで續刊したのである。

種彦は此の成功に氣をよくして、自家の好みをも割り込ませた。たとへば近松の古狂言本「曾我多遊染」を原本そのままに、言葉のみを當世風に直した「曾我昔狂言」を出し、また同じ近松の狂言本「夕霧七年忌」また「水木辰之助餞振舞」を飜案して、「昔々歌舞伎物語」を作つた。いへば古風正本製とも題すべきものであつた。尤も、これはさまでの高評を得なかつたやうである。それはともかくも「田舍源氏」の作にもなほ、歌舞伎あやつり物語、三つが一つになる繪草紙と銘うつてかゝつたことを知らねばならない。

六

蘊蓄を傾け、心骨を碎いて書いた讀本が、つひに酬いられないことを知つた種彦が、草双紙の作に轉じようとす

る時には、どうしたら成功するか、世間の當りを取らうかと相應苦勞したやうである。事は草双紙の處女作、文化八年刊の「鱸庖丁青砥切味」によつて其の一端を推測される。

種彦の序言に從へば、此の作の發端は近松の作とおぼしき「東山しんによ堂のむね上」に據つたとのことである。また「近松竹田が院本を夫彼と飜案し」といつてゐるが、大方「心中宵庚申」「今川了俊」「玉藻前曦袂」などをさすやうである。これ等の趣向立は皆彼のいつもの好みによる。

これ等のとりまぜられた趣向は、さし繪の變化の興を助けて、必ずしも支離滅裂に陷らない。其の分裂に近いものが事件を複雜にし、それがまた慌しい進行を見せて、自ら探偵小說的興味を成立させる。讀本でさへ煩しい種彦の趣向立てであるが、これはまた一段と煩しい、おそらく意識的に草双紙趣味を發揮しようとしたためであらう。それだけで當時としては相應の評判をとつたやうである。

筑紫の鬮屋の里の櫻戸綾太郎が、はつ花といふ小女を妻とする。はつ花は太宰府の鶯替の折、見染めた綾太郎の弟雪次郎に緣づくものと思つて嫁いで來たのであつた。其のうち、雪次郎は出奔する。やがてはつ花は男子桂之丞を產む、綾太郎は何故か拾ひ上げた棄子の落葉之介に家を繼がせる。其後綾太郎も初花も病死する。

落葉之介と桂之丞とは北條家に仕へてゐたが北條家に害心を有つ八劔軍藤太に計られて、保管の二つの重寶を奪はれる。これは軍藤太が賊鬼惣次に奪はせたのであつた。賊の鬼惣次なるを知つた落葉之助は、弟の責を負うて切腹を覺悟すると共に、わざと妻更汲を離別して鬼惣次の娘小雪、實は桂之丞と深い仲なのを自分と譯あるやうにいひ拵へて妻に貰はうとする。鬼惣次が娘の愛にひかされて寶をかへす事もやと考へたためである。果して鬼惣次は

自殺して、寳劍を返し、寳鏡が賊東權六の手にある事を敎へる。しかも落葉之介は鬼惣次が棄てた子であることが知れる、切腹した落葉之介が臨終の折に父の首級に對する、悲しい親子の對面である。

當時鎌倉の忠臣青砥輝綱の指示に從ひ、桂之丞は更汲、小雪また僕八平と共に寳詮議のため上方に旅立つ。途中軍藤太に襲はれ、小雪は權六に奪はれ、更汲は投身する。折から漕ぎ來つた舟に更汲は救はれて去る。舟の主は誰なるかは知られない。

京に來つた桂之丞は道具屋老松屋の喜太作に救はれて養女となつてゐる小雪に邂逅する。桂之丞は喜太作の計らひで小雪の聟となる。老松屋の女房茨木は桂之丞に戀慕して小雪を虐げ、またわが戀をうけいれぬ桂之丞にもつらく當る、そのはてに、茨木は軍藤太の叔母なる故に桂之丞を殺さうとする。桂之丞と小雪は喜太作の注意で家出する。

其の夜東權六が老松屋に忍び入つて茨木を殺した。同時に賊筑紫の權六も來つて喜太作の望のまゝに拉れ歸る。喜太作は軍藤太の難を避けるためであつた。二人の賊、名を齊しうして一は兇惡、一は義俠、おのづから對をなしてゐる。

老松屋を逃げ出した桂之丞は病氣に罹つて貧に苦しむ。小雪は夫のために江口の太夫となり、座敷のみを勤める。床を外にする覆面の遊客がこれを身請して去る。客の名はつひに知られない。

近江土山の絹屋の女主人高根は强慾者であつた。筑紫權六は其の家に入つて金を奪つた。權六が其の金を主桂之丞に忠を盡す八平に惠んだことから、八平は賊名をうけて高根から訴へられる。桂之丞はまた東權六に出逢ひ寳を

取り戻さうとして、寳鏡を持つてゐる權六の手下の腕を切り落す。川にゐた鱸が鏡もろとも其の腕を呑み込む。折から靑砥輝綱及軍藤太は京の勤番の歸途土山にをつたが、軍藤太は桂之丞と八平を高根の訴によつて處分しようとする。筑紫權六來つてそれ等に罪のない事を告げまた自分が雪次郎であることを語り、さきに更汲を救つたことを語る。

輝綱また小雪を身請しておいたことを告げ、更に縛しておいた東權六を責めて軍藤太等の罪を明にする。雪次郎は、桂之丞は實はわが胤で、兄綾太郎が世間體のために子としたものであることを告白する。高根また死んだと世を僞つて實は出奔した初花であり、綾太郎と自分とは名のみの夫婦關係であつたことをいうて自害する。ここに悲しい夫婦親子の對面、また桂之丞・小雪・更汲の不思議な邂逅があつた。これ等の血の穢れで鱸の腹中から寳鏡及び更汲が投身の折に失つた持佛の彌陀の尊像が出現する。

此の筋立を心得ておいて、此の作の刊行された前年、文化七年刊行の式亭三馬の當り作、殊に歌川豐國・歌川豐廣の不和を調停した記念の草双紙「一對男時花歌川」を見ると、驚くべき類似がある。此の類似は、「鱸庖丁靑砥切味」と「繪操二面鏡」の夫婦の哀しい邂逅ぐらゐのはなしではない。しかも決して偶然の暗合と見るべきものではなかつた。

「一對男時花歌川」の梗概はここに記さないが、種彥が「今川了俊」から拉致して一箇の捌役とした靑砥輝綱は、これには淺香十内であり、棄子をした賊が寳を盜むこと彼此相同じく、其の賊が恩愛に感じて寳取戻しに加擔することまた同じ。小雪と桂之丞との京での邂逅は、此ではお小夜宗太郎の博多の廓の邂逅であり、ここにも小雪の身

賣に當るお小夜の身賣がある。また彼の哀しい夫婦親子の對面は、此には毛剃の父と子と孫と、また妻のいたましい對面となつてゐる。綾太郎と初花の名のみの夫婦仲は、これには毛剃があとに殘した女房と今の聟との間柄さながらである。老松屋の惡女房茨木が、遊女どもを虐待する茨木屋幸齋に脈をひくことは明であつて、彼の更汲と此の宗太郎の母のしらぬひと命名に於いても相通ずるものがある。とりわけて彼の東權六・筑紫權六の對は、おのづから一對男としての見立をする。其の筑紫の名乘りも、此の賊首玄海灘右衛門に基づくことはいふまでもない。

「一對男時花歌川」と「鱸庖丁青砥切味」とは、全く違ふ筋立であるが、表面の筋を離れた事件の核心は全く相合してゐる。いな核心を殘して筋のおもて、事件の上を換へたものといつてよい。

「時花歌川」は近松の作「淀鯉出世瀧德」と「博多小女郎浪枕」とを撮合せたものであるが、種彥はその輪廓を藉り、事件の骨子を引き享けると共に、題材を近松の他の作また其の外の作者の作にとりかへて、彼の草双紙の處女作を捏ち上げたと見られる。

種彥が何故にさういふ工夫をしたかといへば、畢竟は三馬の作の當りにあやかるためである。其の年、文化七年の當り作は多い。その中で特に之を選んだのは、近松の二つの作に取材したこと、また芝居がかつて前編後編といふべきところを、初日後日と稱するやうな趣向が、種彥の好みに合したためであらう。種彥は「青砥切味」の口繪に、據るところの古狂言本「東山しんによ堂のむね上」のさし繪の一部を模刻して、之に附記して、「その繪樣を摸して古しへを知らしむるも近代戲作の名家にその事あれば、糟粕をねぶりて高名にあやからんと冀ふなん」といふのは、たまたまおのが意圖の一端を示したのである。

さて近代戯作の名家といふ中に、三馬のあることはいふまでもない。三馬の草双紙中、往々種彦のいふが如きものがあるからである。しかし種彦が共の名家の中に京傳を數へてゐることも推測される。京傳の讀本にすでに共のことあり、草双紙にまたそれをくりかへしてゐるからである。殊に「青砥切味」の中に、趣向の明に京傳の「本朝醉菩提」に據るものも見えてゐる。いづれにしても、種彦がいかにして草双紙界に一旗を上げようか、また當りをとらうかと焦慮した事は、處女作制作の事情から知ることが出來る。

七

「青砥切味」は種彦二十九歲、文化八年の刊行京傳の死に先だつ五年である。

戯作者京傳すでに老大家を以て推され、三馬頻りに草双紙に活躍してゐる。當時、種彦が範をこれ等に採つたのは當然である。種彦の讀本は讀下直ちに指摘されることが出來るやうに、京傳の讀本に法を取るものが多い。京傳と三馬と種彦と傾向を同じうするものがある。歌舞伎淨瑠璃好きであること、古書を愛玩すること、近世風俗の考證に興味を有つこと、これを戯作の中にとり入れることである。尤も種彦がそれ等の點に於いて他の二家を凌駕してゐることは言を俟たない。ただ三家の作風に於いては、おの〳〵の個性の異なるやうに、全く違ふ。どちらかといへば種彦の作風は京傳に近い。京傳の細心な趣向立は種彦の緻密な工夫と似通ふふしが多い。それから見れば三馬のは放膽な着想に於いて二家を壓迫する。三馬の草双紙の筋また繪組が飛躍的なのを、かりに映畫的といふならば、京傳のは演劇的であり、種彦に於いては同じ演劇でも京傳のやうな賑やかな舞臺よりも、しんみりとし

た靜さを要求するものであつた。

此の三家の草双紙の比較をなすことに於いて、はじめて種彦の特殊の作風を闡明することが出來るわけであるが、多くの言葉を要するが故に、結論だけを擧げて別の一例を以て之に換へる。

種彦の讀本「勢田橋龍女本地」が淨瑠璃風の讀本であることはすでに述べたが、その刊行に先だつこと三年、三馬は淨瑠璃と讀本と草双紙とを混淆した新樣式の戲作、「大鵬舞鄽始」を作つた。種彦がこれを面白いと考へたことは、其の後年の草双紙に此の樣式を學ぶことの多いのでも知られるが、「勢田橋龍女本地」を書く段になると、直に三馬の據りどころとなつた京傳の「捷徑太平記」の體をとつたやうである。三馬は京傳の作に據ると共にむしろ其の作の原據、萬象亭の黄表紙「萬象亭戲作濫觴」にかへらうともしたが、種彦は京傳の作を承けて之を純然たる淨瑠璃に修正し、更に近松あたりに迫らうとしたのである、此の三つの作の關係は、移して三家の草双紙の關係に當て欽めることが出來る。

種彦の痼性も與つて力あることか、種彦の作には形式の純一を要める度が強い。その純一の形式はまた品よき内容を伴はせる。其の品よさは種々の形に於いて、彼の作品に現はれる。事例もとより多くを存してゐるが、ここには最も世に聞えてゐる作、歐譯さへ二三ならずある「浮世形六枚屛風」が、據りどころの近松の作「心中刄は氷の朔日」をどのやうに品よく飜案したかを示さうと思ふ。

「六枚屛風」の佐吉は原作の平兵衛、小松は小かんに當る。小かんは國にかへつて許嫁との結婚を强要されることを恐れる。其の恐れはいよいよ平兵衛との別れを惜しませて、つひに心中するのであつたが、種彦の作では、小松

と佐吉とはもともと許嫁の仲、ただ年少の折に別れたので、顔も素性も知らなかつたが、さうと知れば何の苦勞もない二人になつてゐる。尤も佐吉は養母から貰ひうけた小松の身請の金を失つたので、二人は心中しようとすることはある。しかし其の金がまた偶然手に入つたので事無く濟むやうになつてゐる。斯くして後佐吉はもとの武士にかへり、小松と相携へて歸國するやうに改作されてゐる。すなはち原作の心中を片寄せてめでたい落着に更めたのである。作者はその序文に於いていふ。

此書に無物に、先第一に敵役、異人妖術怪談、狐、狼、ひきがへる、家の系圖や寶物、紛失すべき物も無い。親子兄弟名乘りあふ、印籠かんざし割髮搔、神や佛の夢知らせ、腹切身替ぬき刀、血を見る事が少しもない

作者の意圖は心中はおろか、一切の悲慘事を忌避して和やかな氣分の横溢する草双紙とすることにあつた。種彥が序中に無いもの盡しのやうに擧げたかずは、當時の草双紙に殆ど必需條件たるもので、それあるがために草双紙は獵奇的煽情的興味を得たものであつた。勿論、種彥はこれ等をこのごとく嫌忌するものではない。彼の作中また之を用ゐてゐることは少くないが、彼は努めて最少限度に於いてこれ等を用ゐてゐた。この點が京傳とも違ひ、特に三馬と違ふところであつた。

種彥が品よき草双紙の代表作として「六枚屛風」を書くために、特に意を配つたことはそれと同じ年に、同じ原作を飜案した草双紙「床飾錦額無垢」を弟子萍亭柳䎡と合作して刊行したことからも明である。原作を題簽に示して「表具屋平兵衛、平野屋小かん」の角書を附けてゐる此の作は、努めて「六枚屛風」に於いて忌避した條件を用ゐてゐる。すなはち此の作は彼の作の對照のためになしたものである。對照する理由は、彼の作の品のよさ加減を

如實に示すにある。

「六枚屏風」の品のよさが、種彦の作の特相を考へる上に於いて、かなり役立つことであるが、其の細部に亙る趣向、また繪組から、また別の特相を明確に認めることが出來る。「浮世形六枚屏風」は、屏風は曲るが故に立つのであるが、作中の人物は直きが故に立つ浮世形なり、すなはち當世形なり、新形なりと、意を例の勸懲に寓した題號の附け方であるが、種彦の凝り性は、なほ屏風の趣向を離すまいと、一册目、二册目と數へて六册目に至るべき册數の呼び方を、一枚目二枚目さて六枚目とさせ、また口繪三丁に收めた六人の主要人物を、六枚屏風の繪に見立てて描きなしてゐる。

なほ種彦が大凝りに凝つた趣向は、佐吉と小松とが心中の決心をするくだりに、六枚屏風をかせに、最も巧みな道行の心持を出したことである。二人はいよいよ心中するとて、身支度よろしく家を忍び出ようとするところに邪魔がはいる。ふと立てまはした六枚屏風の中に隱れる。屏風は「曾根崎心中」の操芝居の看板畫を仕立てたもの、梅田橋あたりから數多の橋を見渡す景色の圖である。それに圍まれて二人が身の上を歎きかはすの折から、壁越しに稽古の淨瑠璃「曾根崎心中」の道行が合方のやうに聞えて來る。屏風繪を背景にする二人はそのままに道行の舞臺姿となる。細かい工夫もここに至つて極まるといつてよい。しかも種彦は此のお初德兵衛の心中の片影をほのめかす事に於いて、原作の小かん平兵衛の心中を全く蔭に隱しおほせたのである。顧みて他をいふ格であるとも、他をいふことによつて正しき原作を暗示する往き方であるともいへる。いづれにしても慣れ切つた腕であり、老巧な筆であるといはねばならない。

八

斯くの如き、種彦が「六枚屛風」の細微な趣向に驚くよりは、むしろ此のやうな巧妙は熟練の結果であること、心ゆくまで趣向を練りに練りなほした結果であることは驚くべきである。

「心中刄は氷の朔日」の飜案は、さきに一度讀本「怪談霜夜星」で試み、もう一度「綟手摺昔木偶」でも手がけたものであつた。斯くしてはじめて得た妙趣向であると共に、同じ題材を場合場合に應じて用ゐこなす用意周到な態度は、また種彦獨特のものとして注意する必要がある。

饗庭篁村かつて之を所藏し、後、市島春城之を轉藏し、更に某氏の手に移つたのが、大正の震火に焚かれたためにつひに死灰と歸したが、幸に「列傳體小說史」中に分載ながら、ほぼ全幅を載せてゐる種彦より弟子仙果あての書狀の中に、どうしてもここに引用しなければならない一節があつた。

> おなじ種でもつかひやうにてかはるもの京傳が美人傳、東西庵南北がつなぎ車、同年に出板かた栗島よめり雛形とかいふおなじ種なれど黑白のたがひなり、いろいろつかひ候ぬけがらの本どもあり、おひおひ御目にかけ可申他人が見候ても少しもかまひ不申候、門左衞門だにいくらもはめ物あり、作者の常の事、ただそれをおもしろくするが上手なり

此の仙果に教へる戲作の態度は、もとより種彦が身を以て範を垂れるものであつた。種彦の全創作、いづれか此の態度によつて書かれてゐないものがあらうか。其の全創作は、素材題材によつて分類すれば極めて少ない數に還

元されて、各作品はおのづから系統をなし、各系統は相互に交渉を保つて、いふところの綯ひまぜの作風を形づくつてゐることが見られる。今、其のおのおのの分類に就いて説くにしては、豫定されてゐる紙數は餘りに少い。故に局部的趣向をあげて特例の一つに擬する。

人あつて他を陷れるがために、ひそかに其の者の所持し、また保管する物を盜んで之を隱匿したのが、偶然に發見され、或ははじめから窺ひ知られて、ものしたものをものされるをかしさ、または作謀の面皮を剝がれる小氣味よさは、ひそかにものを隱しておいて人に恩惠を與へようとする計らひと共に、早い頃から歌舞伎操芝居などの一趣向として、ほぼ型をなしてゐる。「六枚屏風」のうちにも其の事があつた。

藝者小松がまだ姉聟の家にかかり人となつてゐた頃、そこの貧苦を見るに忍びず、ひそかに身賣をする。その身代金を折から桃の節句とて飾つてある犬張子の中に隱し入れ、幼な兒にその所在を敎へておくとて、花咲爺の赤本ばなしをして聞かせて去る。家人が小松の行方を幼な兒に尋ねる時、まはらぬ舌で花咲爺のはなしをする。犬が小判を掘り出すと語るのをきつかけに、犬張子の中の小判と書置が見出される。

この犬張子と赤本の組み合はせを作者はやゝ得意としたのであらう。その犬張子の趣向は十一年後に持ち越されて「田舍源氏」の十編、紫の雛の道具犬張子の中に、調太夫が祕めておくつた內應の密書が光氏の手に入ることに利用されてゐる。紫が遊び相手の犬吉が雛の家を壞したことを怨み、此の張子の犬も犬吉の犬とおもへば憎らしいと、八つ當りに取つて投げると、蓋と實と破れた中から密書が現はれる段取りは、「源氏物語」の本文の雛の家をそつくり利用したことと共に、これも作者の會心のものであつたらうか。

斯ういふやうに、隱匿物を同じにすれば發見の事情を違はせるのであるが、隱匿物の變化に至つてはもつと苦勞を重ねてゐる。

盜んだ刀を深川の藝者の三味線筥の中に隱せば、其の刀詮議に身を窶した船頭が知らぬ顏して其の筥を抱へて去る「桔梗辻千種之衫」の如き、盜んだ一軸を布袋の像の口の中に入れる、軸は像の腹中に落ちる。その事を布袋が詮議する者に善哉善哉と呼びかけて告げ知らせる「春霞布袋本地」の如き、盜んだ短刀をしめ繩の中に綯ひ込んでおいた惡者をそれを知らず其のしめ繩で縛れば詮議の短刀が自然と現はれる「正本製」の第九編の如き、惡者の手に渡すまいと持佛を飯の中に入れておいたが、穿鑿される段になつて慌しく食つて腹中にかくし、後切腹して之を取り出す「燈籠踊秋花園」の如き、とりどりの面白さを見せたものである。

殊に「秋花園」と「布袋本地」とは案の骨子を同じくして、表の變化を覘つたことが明瞭である。

種彥がこれ等の趣向に苦勞するのは、畢竟讀者の意を迎へるためである。其の頃の讀者はどちらかといへば、型の存在を承認し、其の型の外の變化より型の內の變化を氣易い心で鑑賞するのが常であつた。殊に草双紙の讀者に於いてその傾向が著しい。種彥の作は都合よく自家の好みと讀者の要求が一つになつたのである。故に、ものをどこに隱すか、どうして發見されるかは、作者にとつても讀者にとつても、今日からは殆んど想像出來ないほどの興味の焦點であつた。種彥の作中に明にそれを示すべき幾多の例がある。

「繪操一面鏡」のお夏は戀文の隱し所に迷つた。「チヲそれそれ、あの懸硯の抽斗へ、いやいや金や寶のかくし所、是は古い、それよりはあの鴨居のうへ、いやいやこれも古い、何ぞから新しい人の心の注かぬところが」とたづね

廻つたはてに、

チヲ幸ひ此の米刺とぐるぐる巻いたる文おし込み、門に積んだる俵に刺込み、これはちつと新らしさうな、ほんにいつも芝居では、手代がたきがする役を娘のわたしに當てたのが、これが一番新らしい、モシ此本を讀むお方、誰へも仰しやつて下さいますな

作者は斯も新趣向で讀者に念をおしておいて、なほ足れりとしない。さし繪にもことごとしく描いて讀者に注意を促すのであつた。しかも其の米刺は、お夏と其の戀人清十郎とが家出する折、之を咎める戀敵五良八目めがけて手裏劍にしたことから、彼の手に渡ることとなる。これもまた前の新趣向に始終する新趣向であつた。

新趣向を凝して得ず、舊い歌舞伎狂言の型をそのまゝに用ゐる時には、作者は其の舊さを轉じて新味を裝はせようとする。

「忠孝兩岸一覽」の惡手代が金を盜み出し、「さてこれからはまた金のかくし所が肝心かなめ、まづ鴨居のうへ、もはつとも古し、神棚もお祓ひくじで見露はれ、たかくもあり、商賣物の犬張子六枚屏風でつかうてしまふ、凝つて思案に能はず」と思案のあげくに裸小粒を酒飲み干した德利の中に入れたのである。そこへ若旦那が歸つて來て、在り合はせの德利の酒を飲まうとして金を見つける。これが若旦那の身の上の大事となる。近松の作「心中二枚繪草紙」をそのままの古い趣向も「六枚屏風」云云の一語のいひわけに、當時の讀者はこれをも新趣向と見るのであつた。

種彥はまた讀者のために、かくす所と見つかる所を一丁のさし繪に收めて、興味をそこに集めてもゐる。

「兩岸一覽」の惡手代もいふやうに、祓の中に金をかくすことは趣向としては最も古い。その古いものを新しく仕立て直したのが「唐人髷今國姓爺」の萬度祓の中に茶入を隱す趣向である、見出される趣向である、いな、見出された後の見立である。惡手代虎呂久が祓の中に隱したのを、和作屋藤兵衛が見つけておいて、わざと詮議立てにことよせて祓の萬度を牛王がはりに戴かせようとする。虎呂久はこれに手を觸れられるを恐れて、頻に故障をいひ立てる。とやかくする間に茶入が轉り出づる。飛びかかる虎呂久を藤兵衛が足下に踏へ、お祓を手にもつての見得、即ち千里が竹の和藤內の姿である。此の作が「國姓爺合戰」の飜案であるだけに、あの古いかくし所の趣向もすつかり新しくなつたのである。此の新しさの蔭にかくれて、古さを隱しおほせたのが「蛙歌春土手節」の一節である。

惡手代が小判を盜んでかくし所を探しあぐんだはてに、山吹の根元に埋める。作者からいへば小判と山吹、これにも細かい工夫を見せたのであらうが、やはり趣向としては拙い。そこで手代をしていひわけをいはせる。「何處ぞかうおし隱しておく所が、アア、かうと石燈籠の中でもあるまい、チチ幸ひ何處にをさめお祓、いやいや去年出た今國姓爺の繪草紙で見たれば、これも油斷がならぬ、いつその事に山吹の根元へさうして手代をして金を埋めさせたのである。しかし作者また其の平凡をすぐにとりかへさうとしたが、之の隱し所を見つけた者が放し龜を代りに埋めておいて、手代が「人が見たなら蛙になれ」といつた言葉の裏をかかせて「小判の代りに錢龜とは、こいつ釣にも足りまい」と口合いはせもしてゐる。すべてこれ種彥の讀者に見せる愛嬌である。

此の愛嬌があればこそ、やや押つける作者自身の興味も、喝采を以て迎へられたのである。

九

種彦の草双紙はとりどりに讀者に迎へられ熱心な種彦ファンが多かつたが、その中で殆んど狂氣沙汰で年々の刊行を期待されたのが「諺紫田舎源氏」である。「田舎源氏」の成功は種彦其の人の作家としての條件、また其の作と時尚とに亙る條件のすべてが、最も都合よく一致したためである。もし種彦を生れながらの草双紙作者といふならば、更に一歩を進めて「田舎源氏」を書くがために生れた種彦であるといつてよい。

種彦の全創作は殆ど「田舎源氏」のための試作であつたとも見られる。いな、近世風俗史家としての彼、また元祿文學研究家としての彼は、皆「田舎源氏」の作者の彼に合流される。彼の研究も道樂も一切を擧げて「田舎源氏」の制作に集中したともいへる。また武士としての彼の品格が「田舎源氏」に多大の成果を與へたことを考へねばならない。

武士としての種彦は、通稱高屋彦四郎、姓は源、名は知久、小普請組の旗本、祿二百俵を食んだ。性質は至つて几帳面で、日常の生活は一事をもなほざりにしなかつた。其の頃の敎養ある靑年が然る如く、彼も早くから狂歌を學び、川柳を學び、また國學を學んだ。其の妻加藤氏は實に國學者加藤宇萬伎の孫であつた。妻また多少の文字あつて、種彦の著者の校合にも努めたのである。

種彦は狂歌の號を心の種俊といつた。其の社中に本名彦四郎を名乘る二人があつたので、人々は他の一人と區別するために、種の彦と呼びなした。種彦の號はこれに基づく。また柳亭といふのは、其の父が、若い種彦のあまり

に痼癖の強いのを戒めて、「風に天窓はられて睡る柳かな」といふ句を示したのを心に銘記するためだといふ。

其の種彦が元祿文學の愛好から、つい筆を戲作にとり出したものの、その好む歌舞伎狂言も、淨瑠璃も浮世草子も、讀本の模範としては不適當なるがために、其の方面ではつひに名を成すことが出來ず、草双紙に轉換したのであつたが、惠まれた諸條件が、彼をしておしもおされもせぬ草双紙作者にしてしまつたのである。

しかしそれ等はもとより短篇小説ともいふべき讀切合卷であつた。「正本製」も續きものではあるが、これは短篇を一つの體裁の下に集めたものに過ぎない。

長篇物、續物としては「田舍源氏」がはじめてであつた。細心な種彦にあつては、それに着手するに當り、處女作「鱸庖丁青砥切味」刊行當時の記憶がまざまざと蘇るほどの焦慮があつたらう。

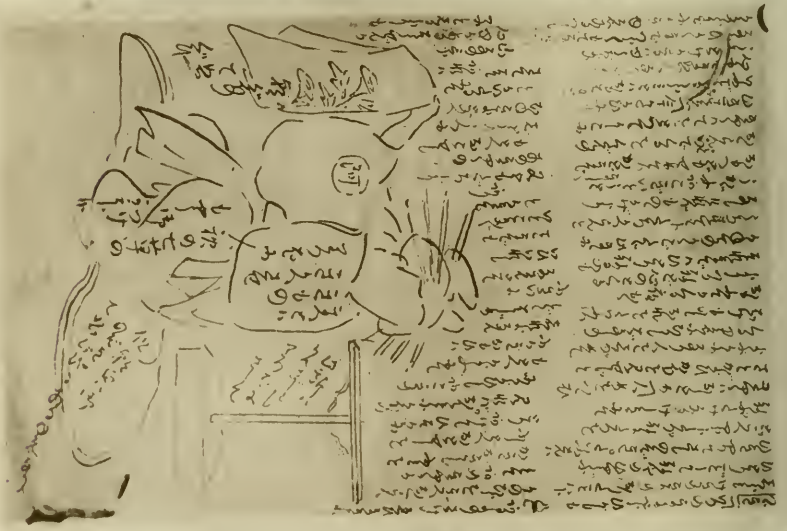
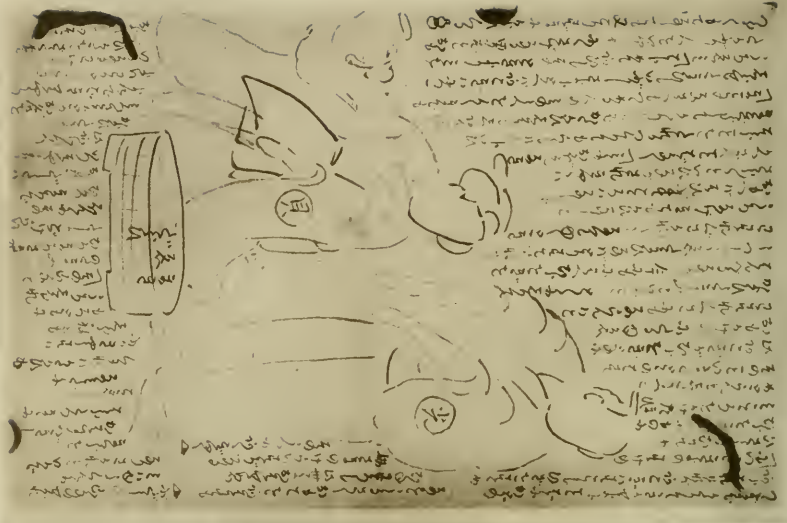
「田舍源氏」初編刊行の文政十二年の文壇の情勢は、「青砥切味」刊行の文化八年とのこれとは非常な相異があつた。京傳三馬はすでに故人である、草双紙に於ける種彦の好敵手としては馬琴があるばかりであつた。讀本の馬琴が、また草双紙の世界を二分して一を保つものは草双紙と讀本との交渉の密接を加へた結果であつた。それがまた長篇草双紙の發生する原因でもあつた。わけて馬琴の構想文辭は、讀切合卷の短篇物よりも長篇物に便宜があつた。

これ馬琴が「金毘羅船利生纜」「傾城水滸傳」を出す所以である。「利生纜」の女氣の少さは、女が多くを占めた草双紙の讀者層には勿論不向であつた。其の不評判が「傾城水滸傳」を書かせたのであるが、種が支那の「水滸傳」だけにどうしても堅苦しくなる。馬琴の苦勞は大方ではなかつた。種彦の「田舍源氏」はその虚に乘ずるものである。もう時の大家の作に隨從して當りを僥倖する處女作時代の種彦ではなかつたのである。作中の人物として女の

數からいへば他に類のない程多く、堅さといへば殆ど無いといつてもよい「田舍源氏」の出現に會して、馬琴がやや狼狽の色を見せたのも無理はない。殊に「源氏物語」の草双紙化は、種彦にあつては甚だ都合がよい。常に心掛ける品のよさも最も多く期待されるし、原作の單調が脚色の複雜を加へさせる餘地は多いし、わけて元祿期の歌舞伎に淨瑠璃に、また浮世草子に其の飜案の範を示すのも少くないことは、いやが上に彼に便宜を與へるものであつた。

その時代を東山時代の武家物に移したことが、時の大奥の華やかさをも髣髴せしめて、讀者をして勝手な想像を懷かせるやうな意外の儲けものもあつた。さし繪としての大奥の世界には珍器奇物をあしらはせるだけに、彼の近世風俗の研究は少なからず役立つた。そのはじめ、せめては紅葉賀の卷までと小心翼々の態度で書いたことはいつか空しい夢となつた。須磨の卷の源氏の君の佗住ひ、古い狂言の敵を僞るための都落ちの趣向をうけ入れて書きかへた後には、もうこれまでの試作ともいふべき舊作の趣向を嵌め込む必要もなくなつた。今はたゞ本文を忠實に飜譯してゆけばよいまでになつたのである。驚くべき「田舍源氏」の成功である。馬琴が機會ある每にそれに難癖をつけようとするのも、彼の嫉妬としてさもあるべきであつた。

しかし、いかに本文に忠實であつても、近世風俗の考證の結果をとり入れることに熱しても、依然として讀者に飽かるるやうな失策をあへてする種彦ではない。勿論、天保度は驚くほどの學問的要求はあつたにしても、それを力に自家の興味を讀者に無理强ひに强ひようとはしない。彼は飽くまで戲作の大道を心得てゐる。戲作の大道とは何ぞ。其の說きあかしは、前に引用した仙果あての手紙の中にある。

「偐紫田舎源氏」四編の草稿

しよせんが唐本を見たる人が繪ざうしは讀ます、よし讀みたりとも、千人に一人なり、唐本はこんなものかとだましておけばそれでよし、落しばなしでも繪草紙でも。

九人にほめられ、一人に笑はれるは、實は下手なれど利は得るなり。九人に笑はれ一人にほめられるは、實は上手なれど錢にはならず。

これは「水滸傳」の翻譯に就いて仙果に示したものであるが、種彦は此のことを「源氏物語」の翻案者自己に對していはうとしたのである。錢になる。ならぬは讀者の多くを繋ぎとめる繋ぎとめないとも換言される筈である。種彦は自家の興味に忠なると共に、讀者の多くを失ふやうな愚直はしない。いふところの下手と上手との間を巧みに縫ひ進むことが出來る。それもその細心がさせる筆であつた。

果して「田舍源氏」は讀者の多くを惹きつけて之を熱狂させた。草双紙界未曾有の壯觀であつた。しかしこれあるがために、天保改革の犧牲ともならなければならなかつた。

「田舍源氏」の述作のために武家としての高屋彦四郎も叱責を蒙ることになつた。これ殊に小心なる彼にあつては堪へ難き苦惱である。時これ、天保十三年、齡まさに六十歳、戯作者生活に入りて以來三十五年、其の永き日を顧みて彼は長歎せざるを得なかつた。「田舍源氏」の初編刊行後十四年ひたぶるに暗い行燈の火をも掻き立てながら、どうかすると夜をさへ徹して、遲筆を呵しては推敲に推敲を加へ、初稿を書きをへては、下繪をさへ描き、それに本文を書き込み（挿繪參照）それを板元に渡し、板元から廻つて來た繪にまた註文をつけ直し、漸く刷り上つたものをまた校合をし、手數に手數を重ねて、さて世に新裝の美しい繪草紙を出版して、編を重ねることを一途の樂し

みとし、漸く三十八編に達し得た今、「藤袴」の巻の飜案を世に出したままで、もう後をつゞけることが出來ないことを戯作者種彦は如何に口惜しく思つたことであらう。

「眞木柱」の巻を飜案した三十九編、四十編も下繪はともあれ。本文だけは出來上つたのに（口繪參照）〔三十九編初稿草稿〕これも世に出すことがかなはぬか、と思へば思ふほど痛恨の至りに堪へなかつたらう。武家と戯作者の二つの悩みに、前年以來健康を害した種彦は、つひに病の床に倒れた。病中早くも辭世を作つた。

散るものにさだまる秋の柳かな

また、

我も秋六十帖のなごりかな

これにははし書がある。

「源氏の人々の失せたまひしも大かた秋なり」

といふ。果して其の秋につひに世を去つたのである。いへば種彦は「田舎源氏」に殉じたともいへる。時の種彦贔屓の悲嘆は非常なものであつた。

天保改革の凄じさも漸く下火になつた頃に一筆庵可候が未刊の三十八編、三十九編を切りこまざいた形式で「其由縁鄙廼俤」を出版し、ついで其の後を續けて高評を博し、其他の類作續出したことも、死せる種彦が生ける群小草双紙作家を走らす格といつてもよい。

十

「田舍源氏」が「源氏物語」の輪廓を藉りると共に、かつての日の作品の殆どすべてを篏め込むことに於いて、草双紙の複雜性を加味してゐること、殊に「繪操二面鏡」「二箇裂手細之紫」「蛙歌春土手節」「關東小六昔舞臺」の趣向が重きをなしてゐること、それが何故に然るかを吟味するのは、種彦の作風を決定するの必要條件の一つである。しかし、また一度「田舍源氏」に綜合されたものがまた分岐して、別樣の草双紙を成立させる過程を考へることは、更に缺くべからざる條件であらう。すなはち、「田舍源氏」と「邯鄲諸國物語」との關係が一つの問題となる。

種彦の「田舍源氏」を書き出したはじめには、三十八編までを書きつづけようとは思ひも寄らなかつた。そこで原作の「源氏物語」の筋をいくつにも區切つて、第一次、第二次、それがをはつてから第三次といふやうに、實は前編と後編また續編續續編をかくやうな態度をとつた。後から考へれば要なき用意にせよ、當時の事情殊に出版の事情がさうさせたのである。しかし、此の手法は種彦にあつては、ひた押しに押してゆく長篇物よりも得意であつた。「田舍源氏」に於いては、此の手法は強ひられた形でしただけに、彼は進んで心ゆくばかりに其の技倆を發揮したいと冀つた。「諸國物語」は大方斯ういふ意圖の下に書きはじめられたのであらう。

「諸國物語」は無論事件發生の國どころを異にした獨立の物語であるが、多少の連鎖がまた各編を繋いでゐる。いへば種彦の好きな俳諧の即かず離れぬ形で出來てゐる。これ實に種彦の覘ひどころであつたらう。

「諸國物語」の初編刊行の天保五年には「田舍源氏」は十一編を刊行してゐた。翌六年二編刊行。十二年に七編八

編を出してをはつた。「田舎源氏」三十五、六、七編刊行の年である。初編以後の「田舎源氏」と殆ど雁行して世に出づる「諸國物語」とは、題材に於いて共通のものが多い。しかもその多くは「田舎源氏」の二番煎じであつた。一度目を通せばそれと知られる「田舎源氏」の須磨明石のあたりと、「諸國物語」の播磨の卷の如きこれである。光氏の須磨に移り住んで敵を謀ることと、淺香逸之進が室の遊廓に隱れて策謀することと全く相同じい。しかもここに注意しなければならないのは、此の播磨の卷が、近松の「鑓權三重帷子」を丁寧に飜案してゐることである。種彥はしばしばに其の淨瑠璃を「田舎源氏」に利用してゐるが、未だ播磨の卷のやうにその筋立を精しく扱つたものを見ない。先に「源氏物語」のために輕く扱ひ、今度は近松の淨瑠璃のために重く扱ひ直したのだと考へられる。ひとり播磨の卷ばかりでなく「諸國物語」に於ける近松の戲曲の扱ひには大體さういふ傾向がある。

「邯鄲諸國物語」のはじめの名は、「種彥諸國物語」といつた。基づくところは、「西鶴諸國ばなし」また「共積諸國物語」にある。題號すでに然る如く、取材の西鶴共積、殊に西鶴の作品に據るものが多い。その多くは依然として「田舎源氏」の二番煎じか、でなければそれに出所を同じうするものの飜案であつた。しかもその扱ひはなほ近松に於けるが如く西鶴の骨法を示すに專らであつた。着眼おのづから「田舎源氏」に於ける場合と違ふ。また若い種彥の「奴の小萬物語」「淺間嶽面影草紙」などの扱ひぶりとも違ふ。そこに種彥の西鶴に於ける理解の成長と利用の進步とが認められる。

かくの如くして、晩年の種彥が「源氏物語」に即くことの度を加へるを知ると共に、また西鶴と近松とにも共の度を加へることが知られる。「源氏物語」の尊重はまた更に新に近松と西鶴との尊重を伴つたのである。「田舎源氏」

と「諸國物語」の雁行を考へる事の面白さは、かかつて一にここにある。「大和の卷」と近松の「心中宵庚申」また、西鶴の「新可笑記」の「市にまぎるゝ武士」などを對讀することは、けだしそれ等相互の關係を最も容易に認めさせるものであらう。勿論細かい部分の對比を問題とすることになると、西鶴近松の作品のあれこれを隨所に參照することを要し、しかも其の藉り用ゐられたものの數の意外に多いのに驚歎するであらう。（了）

（昭和六年十一月「日本文學講座」）

爲永春水研究

一

自分は世の文人と勝手が違ふ、といふのが春水の口癖であつた。忙しい本屋稼業のほんの片手間に、女子供の讀み物を書くといふのも、所詮はかせぎのたしにしたいだけの話、士君子の鑒をどうするなどの野心はゆめさら持つてゐない、從つて、筋が立たぬの假名遣が違ふのといふ非難などは、お門違ひである、と機會のある度に著作の中に述べてゐる。友人等も春水作品の序跋に於いてこれを記してゐる。このことが春水にとつて大事な保護色であつた。彼は二世楚滿人時代から、文名すでに定つた「梅曆」以後の時代まで、この保護色で身を守つてゐた。

春水はまた別の保護色を持つてゐた。門人の代筆、代作の利用である。彼の友文狂亭綾丸が「寢覺之繰言」の序の中で、「殊に年々數十部を述ぶるが中には、門人に委ね置きしも多なりき」といつてゐる言葉は、どの程度まで割引してよいか知らないが、眞實の代作と共に、代作の保護色を假りて、作の不手際を掩はうとする場合も少くなかつたらう。「春色辰巳園」にいふ、

以前楚滿人と呼ばれし時は、多く門人に筆をとらして自作の草紙稀なれば、巧拙ともに本意にあらず、梅曆よ

り以來は、賓に予が手に綴りしものなり云々。

また「春曉八幡佳年」の序にもいふ、

予この故に街談巷説の淺々しきを題として鄙俚俗言のたはひもなき草紙を綴る事廿年來、楚滿人たりし山住より、三歳兒の敎に淺瀨を渡り覺て、四澤に滿る春水と改名し、「東の春雨」を著して以來、更に門人友人の筆を借ず、拙しといへども自作を愛翫せられて、書賈も閉ぢたる草廬を問ふ事舊日に倍す云々、

「梅曆」とも「春色東の春雨」ともいつて、傳へるところは一つでないが、いづれにしても、これ等の作を出板する頃は、春水の得意時代であつた。おしもおされもせぬ江戸人情本の作者になりおほせてゐた。相應の自信が眞作を看板にさせた。今日の眞作を保證するのは、昨日の代筆を保證することである。今から顧みてみづから拙劣なりとするものを、代筆であつたからの一語に託することが出來る。彼は依然として、あの保護色を利用したのである。

名聞のために、架空の人物を門人として、著作の上に陳ねるのが當時の戲作者の常であつた。春水の楚滿人時代にどれほどの門人があつたか、また彼の名を署してゐる作品のどれが門人の代筆であるかは、眞相を索るに困難である。しかし門人の代筆とともに、先達の代筆の存在もたしかである。先達の代筆、これは言葉としてふさはしくない。卒直に春水が先達の作を剽竊したといつた方が早い。補綴といひ、校訂と名乘るのはまだしもほらしい。未刊の稿本をどこからか手に入れて、殆どそのまゝに自分のものとして公にしたのも少くなかつたらう。

馬琴の舊作を、斷りなしに增補しては新板らしく見せかけた書肆がかなりにあつた。馬琴は例の口やかましく罵つてゐる。しかも、彼はこれを以て春水の餘毒に歸してゐる。「畢竟爲永春水が恣に予が舊作のよみ本を、或は書

名を改め綉像を新にして、人の爲に再板再刷を揣りて遂に此毒を流せし也」、かうもいつてゐる。春水にしても昨の非なることは辨へてゐたらう。「梅暦」「春色東の春雨」以前の作の多くを代筆代作といふ中には、かういふ舊惡をも轉嫁する意がないとは、遽に斷じ難い。

越前屋長次郎といふよりも、本長とか、眼長とかの諢名の方が通つてゐた彼、貸本の大風呂敷包を背負込んでお得意廻りをしてゐた彼が、江戸の人氣作者にをさまるまでの苦勞は並大體ではなかつたらう。暇さへあれば商賣物の貸本を耽讀する、得意廻りの途中も、歩きながら讀んでゐたといふ熱心ぶりが、後日の成功を將來したことを思へば、彼もまた立志傳中の人物といへないことはない。文溪堂舊板の兩面摺一枚物の外題鑑を、ともかくも一部の書に增訂することが出來たのも、以前からの渉獵があつたればこそである。分類もおぼつかなく、批判もあやしい「增補稗史外題鑑」ではあるが、馬琴ほどに罵倒せずともと思はれる。よくも彼の男がかういふものを編纂するやうになつたと、少しは同情の眼を以て見てやつてもよくはないかと思はれる。

一わたりは小說類にも目を通した彼は、その知識を糧にして講談師伊藤燕晋の門に入つて、爲永正輔と名乘つたが、これは全然失敗にをはつた。戲作者を志して、式亭三馬の弟子となつて、三鷲と號して、草雙紙は作つてみたものゝ兄弟子の馬笑、三友、三孝等の目白おしには、一寸お鉢は廻つて來さうもなかつた。振鷺亭の名を繼いで、二世振鷺亭といつてみたが、これも思はしくない。そこで二代目南仙笑楚滿人を名乘つた。丁度渡仲間（わたりちうげん）のやうなはかない道を歩いてゐるところに、幾分かの當りをとつたのが「明烏後正夢」であつた。瀧亭鯉丈との合作である。鯉丈は文政四年に初編だけを刊行した。その七年に春水は鯉丈と共に五編までを完成した。世間の歡迎は、春水を

してその發端に當る「教訓郭里の東雲」を作らせた。楚満人の名が漸く世間に認められたのである。

こゝまでに達したのでさへ、彼としては、せめてもの成功であつた。金も欲しい、名も賣りたいに、焦り拔いた彼は、この間に馬琴等が指彈するやうな不徳を冒してゐたのである。これも彼にいはすれば、世のいはゆる文人ならぬ身の、境遇やむなきに出づと辯解することであらう。その辯解にも、一分の理が存してゐるやうである。

二

「梅暦」または「東の春雨」以後には門人の代作がないとの斷りは、その言葉をそのまゝに信じてはならない。一部分の代筆は許容するといふ條件を附けておくことが必要である。天保九年、十年の作である「梅の春」には、尼が危難に遭ふところがある。第十二回である。春水は、第十三回に於いて、次のやうな言葉を添へてゐる。

作者曰く、此の書二篇目下の卷半册十二回の段は、尼の夢と心得給へかし。彼の十二回の末に、夢といふ事を看官に告げ奉らず、文段にも夢らしき體を綴らざりしは、腹稿と執筆し門人の行違、校合の誤りにて、數十種の新板故、全く春水の麁漏によつてなり、御贔屓の諸君、宜しく見ゆるし給へと願ふものなり。

春水は腹稿を門人に告げる。門人はその意をうけて筆を執る。代作でないといふものゝ、少くともある回、ある段、ある齣には、春水の筆でないものも、混つてゐることは考へられる。この關係を更に明瞭に語るものは、天保九年の「祝井風呂時雨傘」である。大坂の注文に應じて三日の間に書き上げたといふことであるが、一部九卷とはよく間に合つたものと驚かされる、作者自身が斷つてゐるやうに、言葉書を江戸風で通し、二組の狂言を一つに組

合はせたといふだけの便宜では骨が折れさうである。この急作を全うしたものは、門人の代筆、また加筆である。柳水の補、春鶯、春友の校合といふのがそれである、この場合は、「梅の春」の校合よりずつと徹底してゐることが考へられる。春水は校合をてつだひと訓ませてゐる。手傳ひの範圍、程度はどこまでのことか分りかねるが、今の校正ぐらゐの仕事でないことだけは明である。あの「八幡佳年」でさへ、巻によつては某の校合、某の補と名を明にしるしてゐる。

春水が自作といふのは、代作でないといふのは、まづ大綱を腹案し、その大部分を書きさへすればよいと考へてゐたらしい。その細部は門人に委ねてもさし支へないものとしてゐたやうである。彼と門人の關係は、いはゞ歌舞伎狂言の立作者と助の作者の關係であつた。彼は少くとも一部の人情本を書くことを、通しの狂言を書くつもりでゐた。剽竊、補綴で練つた腕で、今度は門人等に自己の舊作のあるところどころを、點綴して、新作に仕立直させるやうに指圖をしてもゐたらう。焼直し、仕立直しは當時に於ける戲作の常格であつた。その對象には自他の區別をおかなかつた。翻案と書いて、かんがへると訓ませてゐるのが春水である。彼と此と、事を同じうしても氣分が違へばよい、氣分が同じでも筋が異なればよい、そこの變化が呑み込めない者は、歌舞伎の見好者といふことが出來ないやうに、人情本の眞の讀者でない。同想同案などを、かれこれいふのは、まだ人情本道の何たるを解せざる者と、息まきかねない彼であつた。「辰巳園」の中に、通客の言葉として書いたものは、直に翻案に對する春水の意見として聞くことが出來る。

しかし、何家業(しやうばい)もむづかしいもんだ、此間文亭といふ友達が來てはなしたつけが、女八賢志といふ繪本を狂訓(さく)

亭は丹誠して八犬傳といふよみ本にならつて、その始末に似ないやうに、そのおもむきの似るやうにと、大ぼねをおつてこしらへたら八犬傳に似せて書いたと言てわるく評判をする看官があるといふが、作者はおなじ事にならねへよふに、おもむきの似ろ様に〱とこしらへる苦心をおもはねへで、似せてこしらへたといふ看官はどういふ見識で本をよむものかしらん、そんならばと言つて何水滸傳と名を付て、水滸傳に似せるやら、唐土の男を本朝の女に書なをしたのは無理があつてもわからねへとはおつなものだ。

「貞操婦女八賢誌」第一輯六卷は「辰巳園」出板の前年、天保五年の作であつた。文中に何水滸傳といふのは「傾城水滸傳」いふまでもなく馬琴の合卷で、當時の當り作であつた。

三

丹念の調査が、一つの脚本を立作者の書いたところ、スケの書いたところと區別することが出來るやうに、相應の注意は、「梅暦」以後の作品の中で春水と門人の筆ぐせの相異を考へさせられなくもない。爲永春水の研究もそこにまで達すればもう堂に入つたものであらう、しかし考察の多くの場合は、むしろこれ等を通じて春水の作風を看るといふことに滿足すべきでなからうか。彼も門人も、世間も、皆一樣に唱へてゐた爲永流のどんなものであるかを、彼の人情本によつて知ることを先としなければならない。

「寒梅應喜名久舍」は春水の序によれば、書肆連玉堂の囑をうけて、ある稿本を校合補綴したことになつてゐる。春水補綴、國直模寫といふ署名である。天保三年の刊行である。この刊行の年が明でなかつたら、自分は勝手な推測

を下して、種彦が天保十年に出板した人情本「縁結月下菊」の模倣であり、翻案であるといひかねなかつた、補綴といふのは例の欺瞞であるとも斷じたかつた。それほどに二の作品は似てゐる。畫組までも似てゐるところが多い。そこから當然起る問題は、どうして種彦が春水を模倣したかといふことである。春水が種彦の影響を受けてゐることは少くない。春水が當時の作家の中で、最も多く尊敬を拂つてゐたのが種彦である事實は、彼の著作の中からでも讀むことが出來る。勿論模倣したり、翻案した作も少くない、一々明に指定することが出來る。それなのに、「月下菊」の場合は事柄が逆に運ばれてゐる。種彦にも似合はないことをしたものである。

應喜名久舍は翁草である、菊である、春水が連玉堂主人の囑をうけた日が、丁度菊の節句に當つたので、この題を附けた、尤も瀬川如皐作、富本豐前の正本「名酒盛色中汲」を下に踏へての外題であると春水はいつてゐる。「縁結月下菊」の外題を附けた種彦は、みづから「月下の菊と題せしは、菊の異名を翁草と呼べば、月下老人の縁語によりてなり」といつてゐる。こゝにも明瞭な關係があつた。二書の出板書肆が共に連玉堂であることも注意をひく。

春水の「光奇新話多滿宇佐喜」は刊行年代が不明であるが、ほゞ晩年の作と推定される。中に子供等が縁結びの遊をすることが、輕いながら趣向の一つとなつてゐる。それと「月下菊」の縁結びがどうやら關係を保つてゐるやうである。縁結びの畫までが、一つは國貞の筆、一つは國直の筆であるが、それもどうやら似てゐる。

「月下菊」の目錄は、たとへば「駕籠で送る娵名」といふやうに、收月莟翁時代の前句附である字響によると、種彦は自註してゐる、「應喜名久舍」の目錄は、たとへば、「おもふより いつしかぬるゝ袂かな 心を知るは 涙なりけり」などと和歌をとつてゐる。これまでもまた考へさせられる類似である。

作の先後の關係、本支の關係はともあれ、類似してゐる二つの作は、これを藉りて、種彥と春水の好みを比較するに都合がよい。春水のが補綴であることは、必ずしも妨げでない。何故かなれば爲永流が依然として、その間に存してゐるからである。

鎌倉の寶屋に姉弟の子があつた。姉お菊は前妻の子、弟豐次郎は後添の子であつた。お菊に添はせるために、上方から半七を貰ひうけてゐた。半七の放蕩をよい事にしてゐるのが、後添のお猿である。支配人僞助と謀つて、半七を追ひ出し、お菊を別家させて、豐次郎を家督に据ゑようと企んでゐる。謀は熟して、半七は勘當となる。第一の支配人信兵衛が引取る。詫言をと思つてゐる中に、寶屋の主人は病死する。あとはお猿と僞助が勝手の振舞、かねて武家奉公してゐるお菊がたまの宿下りにも快からぬ事のみを見聞する。一生奉公と覺悟の折から、意地惡のお局に責めさいなまれて、つひにお暇を貰ふ。家に歸つたあと、病氣で寢こむ、これもお猿僞助が惡修驗者に調伏させたためである。

信兵衛が上方から親もない子をつれて來て育てたのが、今の寶屋の手代幸助である。幸助は舊主人の義をおもつてお菊を庇つてゐる。その丹誠で調伏の禍を除く、病氣も輕うなる。お猿は幸助の美しいのを愛でて挑む、幸助はわざと柳の風とあしらふ。お菊はそれを知るにつけても、幸助を慕ふ心が深くなる。しかし、幸助はどうがなしてかねての約束通りにお菊を半七の妻にさせようと努めてゐる。

信兵衛の孫娘にお花といふのがある。お菊といふ許婚があるのを知りながら、つひに半七と契る。お花はまたとうからお菊の心の中を知つてゐる。粹をきかせて、お菊と幸助の仲をとり持つ。

お猿の腹立は一通りでない、お菊と幸助を追ひ出さうとしてゐるところに、上方の總本家の主人が下つた。いろ〳〵と問ひ訊したはてに、お猿等の姦計が露顯する。また幸助が自分の子であることも分る。主人はお菊幸助を夫婦として本家に納め、お花半七を別家させて本店の後見とする。

これが「應喜名久舍」の梗概である。「緣結月下菊」の梗概はなほ短く書きしるすことが出來る。もつと簡單な筋で書いてあるからである。

鎌倉近くの金澤に加賀屋といふ酒屋があつた。一人娘お夏は手代の幸助と契りをこめる、もう身重になつた。父の砂兵衛はさうとは知らなかつたが、二人を夫婦にするつもりでゐる。

お夏を慕ふ手代の鯛藏は、巫女に賴んで、聟とりが家の不運になることをいはせる。巫女の言葉を信じた砂兵衛は鎌倉の米屋但馬屋の息子清十郎のもとにお夏をやり、清十郎の胤がはりの妹お菊を幸助のために迎へることにする。いづれにしても幸助に跡目を嗣がせるのが、かねてからの腹であつた。

清十郎の母親は、但馬屋に嫁く時に、先夫の子お菊を里において來た。お菊は早くから武家奉公をしてゐた。從つて、これまで義理の妹を見る機がない清十郎は、一目見ての戀となつた。幸助と僞つて、お菊を誘ひ出した。一方加賀屋では、お夏にせがまれて幸助が駈落した。二組の駈落が偶然におち合つた。互の話が通じて、お夏幸助、お菊清十郎の二組の夫婦が出來上る。

「緣結月下菊」のどんな動機から作られたかは、種彥の自記によつて知られる。娘が繪草紙の人名を書き拔いて緣結びの遊びをした。現在の人の名を玩びにするのよりはよいと見てゐる中に、累と光氏、紫と與右衛門、お夏と幸

助、お菊と清十郎などの組合はせが出來た。これは面白いと、お夏、お菊の夫たがひをとつて趣向を成したといつてゐる。お夏清十郎、お菊幸助は口にも耳にも慣れきつてゐる。それをわざと逸したのが趣向である。種彥の求めるのは新奇である。お花半七はお夏清十郎より一層耳に親しい。それとお菊幸助を組合はせて、この二組がどうなるかを案ぜさせながら、おちつくところに落ちつかせたのが春水の趣向である。春水は飽くまで世間の持つてゐるものを尊重してゐる。

種彥はまた「緣結月下菊」の中には、「心得違の人はあれども罪すべき惡人なし、繼母繼子の中睦しく、唯言ひ約束せしのみなれば、余くの人の妻に心を懸けし者もなし、お夏が嫁菜の歎ち言は娘心のいぶりにて、死なんと思ひし人も無く、氣分のわるいは妊病(つはり)にて、病人の事更になし」と自記してゐる。自記の筆は、またこれが今の人情本の流行でないとも書いてゐる。

「應喜名久舍」の趣向は姦通、呪咀、繼母の憎み、病氣などによつてゐる。種彥の言葉は、それ等を避けて別に趣向を立てたといふ事にもとれる。「應喜名久舍」を模倣したのではないが、訂正して見た、それが「月下菊」であるとも、とれないことはない。それはそれとして、種彥が何故にそれ等の要素を避けたか、品のよさを欲した、と斷言してもよい。

品のよし惡しは春水の闕はるところでない。欲するのは面白をかしくといふこと、たゞこれだけである。「娘御方の看ものなれば、入組すじは好ましからず、たゞやすらかに讀やすく、重言もかた言も愚痴(ぐだい)が根本の繪草紙なれば恥とはならぬ君子へは見せぬ覺悟の新題もの」と「應喜名久舍」の序にいふのは、そのまゝ彼の人情本觀であつ

た。

お夏もお菊も約束の夫を變がへせねばならぬ羽目に陷つた時、武家の作法の空弔に倣つて、名前紙を入れた乘物だけを送つたり、お菊とお夏が名前をとりかへて、表向の緣談のみを調へたなどの趣向は、品のよい限りではあらうが、春水などは理に墮ちすぎると思つて、決して合點はしなからう。

駈落の二組が落合つて、互の女をとりかへたのは、目じるしの笠が似たためであるなどの趣向は、「笠がよう似た菅笠が」の唄を活した譯ではあるが、誰も彼も種彥のやうな元祿狂ではない。浮れるものなら、富本の名酒盛色中汲さといふやうな人々を、はじめから相手にするのが春水であつた。

お菊お夏が落合つた後、二人は睦しい。「風呂も一緒に、髮も對と、更に苦勞のなき樣なり」とのみ書く種彥の品よさとひきかへて、お菊を幸助にとり持つ痴態はどうであらう。しかし、半七にいひよるお花の艷情と共に、「應喜名久舍」の讀者の最も喜ぶところであつたらう。

「應喜名久舍」は決して作のすぐれたものでない。また春水の筆とのみは思はれない。門人の一人の稿本を、春水みづからがいふやうに補綴したかも知れぬ。それだけに春水張であり、爲永流である。作の巧拙は別として、爲永流を知る上には便宜であらう。特に「緣結月下菊」との比較はなほ一段の便宜を加へてゐるやうである。

四

春水のいつも考へてゐるのは、自分の好みになづまずに、世間の好みに順ふ事である。御贔屓の御意のまゝとは、

腹でも思ひ、あらはにも口にする言の葉である。

考へ出されるのは、「辰巳園」の中で幇間の一人にいはせた春水の評である。

イエしかし何ごとも運次第なものでござへます、今被仰(おつしやる)本の作者がかゐた梅ごよみなんぞといふものは、中本始まつて以來の大あたりださうでございますが、狂訓亭爲永春水といふ名は梅暦といふ外題ほどは看官(よみて)がしらずにしまふから、大略(おほかた)夢中でよむとおもやア、すこし悪い所があると、ヘン楚滿人改狂訓亭か、この作者はおらア嫌らひだなんぞといはれるから、なんでも愛敬がなくッてはいけません。

この愛敬が春水の號をも、四澤に滿る御贔屓を願ふがためと披露させたのである、作中の人物、わけて遊女、藝者、幇間などに常に同情の筆を吝まなかつたのも、この愛敬である。

「八幡佳年」の第九回、彌三郎と藝者秀八の口說のあと、後刻を約して歸らうとする秀八に、彌三郎は金を與へる。後に會つた時何かの咄しを仕様が、マァこれを先へもつて往て何かの都合をよくして置てくんなと男がいふ。なぜエをかしいねエと女がいふ。ナニサ金でどうかう言ふでもないが、マア一時も早く座敷をにげて來るやうにするにも、何をどうするにもそれで幕があくやうにならうかと思つてサと男がいふ。ぬけ目ない男のはからひに秀八はなほ惚れまさる。春水はかういふ場合を書いておいた後に次のやうな言葉を添へてゐる。

そも〳〵彌三郎が秀八の氣を休めんとして金を遣はす事いかゞなり、秀八もこれをあづかり歸るは甚しき野卑ならずやと、この稿本を見て難ずる者あり。予答へて云、これ人情に疎き批判なり。凡そ中以下の人の實意をはやく知るは金銀なり、別て川竹の瀨に立身のうへを哀れむは金をもてすくふを第一とすべし、されば とて人

の誠は金銀にて知るといふにも限らず、たがひに誠を盡すにいたりては不自由をいとはず、貧苦をしのび、末の松山波こさじと契るが眞の實情なるべし。されどもそれは男女ともたがひに誠を盡し合、殊に男は身分相應に女の力となつて悦ばせ、紋日もの日も他並にして遣して安堵させ、さてその後は善惡に付て丹心もしるべきのみ、嗚呼人情のさもしき事今もむかしもおなじけれども、凡そ君傾城の身のうへを何と推量りて客人は通ふやらん、それ唄女も妓女の身もその時其日の勤料は殘らず親方のものにして、半錢も妓女の身には付ず、たとへ其始め身代をとりて勤るも今日の雜費をいかにせん。それを知らざる人もあるまじ、知りつゝこれを哀はれまず、女に立引せるなどとはかる所の若人は、誠に憎むべき白徒なり。それ契情に誠はあれども客人には丹誠なし、また誠があれば阿房らしく馬鹿にされて情人男の仕送りをする事もあらんか、よく用心して後情をふかく女をくるしましむるなきを眞の情人男といふべきか。

自分は至つての野暮なれば青樓の事を知らず、洒落本のうがちは柄でないといひながら、どうかすると、「この作者は藝者や女郎の穴はよく知つてゐる」などと、作中の人物にいはせてゐる作者が、その方面の筆を控へがちにするが上に、このやうな辯をなが〱といひ立てるのも、畢竟は大事な御贔屓に對する愛敬である。

幇間などの場合はまだうがちを弄する自由がゆるされる。春水からいへば友達附合でもあつた。同じ「八幡佳年」の茶番の場所で、幇間壽樂はまづ江島の兒白菊の話をする。そして兒と沙門の戀中はこれと同じことでございますといひながら、櫻川由次郎と榮次を押並べ、鉢肴にありし附合の牛房の切小口を見せる。由次郎はいま〱しい事だ、茶番にまで遺恨をふくんで、する事もねえと呟く、と書いてゐる。

春水はこのうがちを、も一度「籬の梅」に於いてくりかへしてゐる。壽樂が梅里の供をして由次郎と一緒に旅に出るといふを聞いた、梅里の妻おくまはオヤ左様かえ、其中へ名見崎の榮さんを入てお前と由さんと嫉妬をしながらお出でならばいゝといふ。壽樂はあまりお客になぶられますから止めに致して、よし町へでも參るつもりでございますと答へる。その眞面目ぶりに梅里もおくまも吹出して笑ふと、書いてゐる。

こんなうがちをする一方で、春水は幇間のために辯ずることが多い。「町人は元來武家にても愛し置るゝは、此輩常に滑稽をかしみのみを所爲とする様なれども、この事ばかりにあらず、萬事に決斷早く旦那方の用を足すことすみやかにして思ひの外老實なる奴を勤め、如在なければ大家の旦那も大事の用を賴み遣ふ事珍しからずと察したまへ」などともいつてゐる。また幇間が旦那の供する道中の様子を、さまで面白からず寫し出しては、座敷の幇間と常の幇間の相異を說き座持の苦勞を示してゐる。

今の由次郎、榮次、壽樂などはいふまでもない、たとへば通客津藤などのやうに、春水の作中には實在の人物が少くない。それ等は當り觸りがない場合か、または面をおこすやうな場合に活躍する。しかし、春水のおそれることは、仇役なり、三枚目役である架空の人物の名が、實在する場合である。意識して用ゐた場合はともかくに、無意識の間に、幾人かの感情を害することがあつたならと氣づかはれる。されば彼は「春告鳥」の中に一應の挨拶をなしてゐる。

巻中の人物其の名前のはからず現在の人に的中して、もしやその人の事を作りしかと思はるゝ憎しみ毎度ありと噂を聞たり、かならずしも予が作の中本に似寄の御名があればとて、それならんかとの御評判はくれ〴〵ゆ

るし給へと願ふになん

春水の愛敬ぶりの最もよく發揮されるのは、作中に託する商賣の弘めである。仙女香はあまりにうるさい。その他のものもいろ〳〵の趣向を凝してゐるが中に、面白いのは「玉都場伎」の中の銘酒小倉山弘めの趣向である。小倉山の評判一しきりの後に、弘めの團扇の面白いことがまた一しきり。それが挿繪にまでなつてゐる。紅葉に御所車の繪模様、小倉山と大く書いて、脇に小く「今一度之御幸待南」とある。作中の人物の一人である女房は團扇の地紙を集めて喜んでゐる。小倉山のも丁寧に保存してゐる。そこの主人がその女房や預りの娘などと一緒に茶屋にゆく。そこでまた持參した團扇の地紙の品評をする。風がぱつと吹き散らす。その中に一枚小倉山のが別座敷へ飛び込む。拾つた若旦那が、娘を見染める。いつも今一度の御幸待なんと願つてゐる。いろいろの事あつた後に願ひはかなつて、二人は夫婦となる。

若旦那定之助と孝女おますの間に、小倉山の團扇はかなりに働いてゐる。それが働くかぎりは銘酒の廣告はたえず有効に提示されてゐる筈である。これほどの例はなほ二三にとゞまらない。

彼の人情本が他からは誨淫の書と題せられながら、自分で教訓を標榜してゐることは、種々の點から解釋が出來るが、これも愛敬ぶりなどといふ言葉でも説明されないことはない。

かういふ春水が、讀者に對してどんな態度をとつてゐるか。讀者の中のある階級、藝者遊女などにはあゝいふ風であるが、一般の讀者にはどんなであつたらうか。種彦との比較で、大體の見當はつくにしても、も少し立ち入る必要があらう。

春水が人情本を作る場合に、いつも考へてゐたのは、讀本らしくなくといふことであつた。讀本らしくなくの意は必ずしも勸懲を避けることでない。勸懲は手段としても彼の標榜するところである。實は春本になり切るほんの一足といふところで、巧みに踏みとゞまる場合もあるのが、彼の人情本であるが、さう看破されることは彼には辛かつた。殊にひそかに春本を作つてゐる手前、表向の本だけは好色淫猥の書といはれたくなかつた。艶言情談の書に相違はないが、どこに淫亂多淫の事件がある、たま〳〵そんな婦女を書いても、因果の道理を現はして戒とするほどの用意はしてゐる。不都合なのはむしろ勸懲を一手專賣顏の讀本の方にある「一帙五卷の其中に、一婦二夫一夜がはりの枕を寄ることを二組までつゞる類ゑせ文章の讀本も、心をつけずよむ人はかへつて、予をそしるなるべし」と「梅暦」の中にいつて、馬琴に反噬するのが彼であつた。

讀本らしくなく、といふ彼の心覺えの一つは布置結構の整然として、一絲紊れずといふ讀本の型を破壞することであつた。彼の人情本は縱斷のやうであつた。どこから切れても生きてゐられる。されば途中から書きはじめて、途中で止め、筋の縺れを拾遺、續編と逃げるといふやうな非難も多かつた。春水の辯解はからであつた。

端本を讀みても、それ程の樂しみある樣に綴り、一回讀んで後章を讀まずとも濟む樣に書きて、無理無體にも滿尾をなす事、これ爲永の一流なり。されば春告鳥の端本、梅暦の端本を集めて、人物の名に張紙をすれば、一部の新作ともなり、端本が全本ともなるべし。此の故に予が作の古本端本を取り集めて、樂しむ人もありと

聞きぬ。

辯は「湊の花」の本傳ならぬ梅吉芳五郎の情事を書きかけて、あとを拾遺に讓る時のものである。この言葉は彼の作の全部に通じて用ゐられる。

「貞操婦女八賢誌」が馬琴の「八犬傳」の飜案であることはいふまでもない。しかし、彼は「八犬傳」の發端には觸れなかつた、たゞ元木木餘六阿彌陀の緣起、八佛感應の利益によりて、八賢女子の出現等の發端は近きに出市すの豫告のみにをはつてゐる。首尾の一貫することは、彼のさまでに要求するところでない。面白いところからはじめて、面白い所々を綴ぢ合はせる、それでよかつた。彼の要求はそれだけで終る。

「秋色艷麗處女七種」の書きはじめには、七草見立の處女七人の傳を詳にする案が彼の胸にあつた。しかし、どう趣向がなり行くかゞ計られねばといつて、英泉の見立七人の圖だけを口繪に揭げた。果して書いてゐる中に、七人を書き分けることが出來かねるやうになつた。春水は例のやうに白をきつてゐる。「素人に速く推量をせられぬ樣に眼先を變へ、新奇辛苦の意味あれば、最初取り立て御覽に入れむと、工夫し案じを忽地と、題が變りし機關の、模樣に似たる其の次々、例へば大序に說き初めし、主意に異るも一家の筆意」

讀本らしくなくといふ一家の筆意は、もとより讀者の倦怠をおそれるためであつた。同じ理由を以て、讀本らしくなくの心覺えとして、全部に行き亙つた詳細の敍述を避けてゐる。

春水には數部の讀本の作がある。中でやゝ知られてゐるのが「芳薫功話好文士傳」である。「八犬傳」の飜案である。原本が全部に亙つて細密な敍述なのに似ず、たゞある所、ある場の敍述に精くして、あとの筆はほんの繫ぎをなす

に過ぎない。これが讀本の型でないことは作者もとうに知つてゐる。一言の辯を添へてゐる。其編纂の杜撰なる、最酷しと言ふべきか、迚も逃れぬ作者の疑難、非を飾らんとて編を長くし、一場長ければ看ざめもし、唯婦幼に倦厭れ、あくびの種となりもやせん、遂に讀者無ければ、其愆ちは編者に躄び、詰所は懐金算用、恕唐山の小説を摹倣し、倭國の事に書換、過て及ぬ換骨奪胎、法則の差別に縛られては頑に似て看官の困じ給ふを、自ら杏云々作者みづからがいふ讀本としてのこの缺陥は、人精本の特長であつた。作者の一家の風としていさゝか誇る技巧であつた。

　春水の欲するものは、一部の理でない、また事の複雜でもない。要めるものは人情である。人情といふ言葉に籠る趣であり、氣分である。

　新作の小唄二つの心意氣をうれしがる女だちの口から、このやうな作者に人情本を作らせたら、さぞよいものが出來るだらうといはせた春水が、人情本に於いて、何を覘つてゐたか、それだけでもあら方の見當はつく。情の最も極まるところを寫す時には、いつも合方めかして音曲をあひしらふ技巧は、歌舞伎の舞臺から、またそれの影響をうけた洒落本の世界から、借りて來たのであらうが、春水の人情本觀からいへば、どうしても自分のものにしてしまはねばならぬ工夫であつた。

　全體の統一よりも部分の煽情を重くする作風といふことから、聯想されるのは近松半二等の淨瑠璃の合作である。爲永流の校合補綴も實は合作でないかとは前にもいつた。それが公然と明にされたのが、「六女競今様六佳撰」である。豫告にとゞまつたか、計畫だけでをはつたか、くはしくは知らず、つひに自分は寓目する機がないこの書が、

どんな風の合作であるか、もとよりいふことが出來ないが、「英對暖語」四編上の末には、爲永春水校合、一の卷春蝶、二の卷春曉、三の卷兼八、四の卷津賀女、五の卷柳水、六の卷春江と作者の名を陳ねてゐる。

六

人情を殆どそのまゝに戀情と解する春水は、一夫兩夫また三婦の關係に於いて、戀情の至れる相を示さうとした。「梅暦」が代表作とされてゐる。しかし、「梅暦」の成功は半ばを舞臺に歸すべきである。深川の遊里が讀者の興味を繋いでゐる。そこを心得てゐる春水が、「梅暦」の戀情をもつと複雜にし、更にはじめから深川を表看板にしたのが「春曉八幡佳年」であつた。

「八幡佳年」の彌三郎と秀八、彌三郎とおきみの戀の成立を、同じ一夜のことにしたのは、「梅暦」よりももつと戀情の葛藤を期待したためであらう。

秀八とおきみの初の邂逅、階子段の上と下の睨め合ひ、彌三郎の迷惑を書く、なんだまた鰻屋の米八お蝶の段かと一應は讀者に思はせておいて、さつと轉ずる別趣向に作者の腕を見せてゐる。そこに春雅の言葉として書きそへてある文句、

門人春雅曰、予師狂訓亭例の走筆をもつて此段を綴り、一冊の稿成て後門人等左右にむかひ、予弟此次の条をなすべし、秀八お君彌三郎三人の落着いかにとするや、予答ていふ彼梅ごよみなるお蝶米八に困給はずや、先生こゝに笑つて筆を置れたり。

特にかういふ注意を前にしない限りは、皆が同案と思はれるほど、類似してゐる趣向である。もつとも、いがみ合つたはては、どれも和解する。二婦も三婦も仲睦しく一夫に事へるといふのが落着である。

かういふ落着は嫉妬を愼むといふのが表面の理由になつてゐるが、實はあれにもこれにも同情の筆を寄せる結果である。悲劇に終せたくないといふ讀者の要求もある。讀者の多く涙もろい婦女であると作者は考へてゐた。

同案同趣向ほど讀者を倦ませるものはない。といつて、いつも一夫對兩婦三婦の戀情が題材である。どうしても倦怠を誘ひがちである。狹い檻の中の自由の働、これが作者の苦しい工夫であつた。

二人の婦女を「春色英對暖語」のおくめ、おふさのやうに姉妹にするのも一工夫なれば、「處女七種」のおはな、おろくのやうに、京の女、江戸の女と書き分けたのも、せめてもの變化であつた。

「春色梅美婦禰」の米八がおのが經歷を語つて、おくめ、おふさに、二人共々峯次郎に事へたがよいと勸めるのも、和解の同案を逃げる一工夫である。「八幡佳年」の秀八梅吉が因緣を知つて、お君、お直と和解するのも落着の新工夫であつた。

それほどの工夫さへあれば新しい趣向と思ふのが、人情本の讀者である、作者の暗示にかゝり易い神經の持主である。そこの呼吸を貸本屋時代から呑込んでゐるのが春水であつた。

七

讀者をして倦せない新工夫の大いなるものは筋の綯ひまぜである。「梅暦」の中にもお蝶米八丹次郎の戀の外に、

およし藤兵衛、此絲半次郎の戀がある。歌舞伎にも、小說にも最もあり來りの工夫であるだけに、春水は早くからこの手法に馴れてゐた。楚滿人時代の作品の多くは、二つの古い狂言、古い淨瑠璃の綯ひまぜが多い。春水時代には古いのを棄てゝ新しいのを考へながら、依然としてこの手法を利用してゐたのである。

「處女七種」の如きは、楚滿人時代の「戀情穿語三人孃兒」の成長とも見られる。「好文士傳」の五士、「十杉傳」の十士、その各傳が綯ひまぜの形をとるが故に、春水は樂々と筆を運んだのである。

綯ひまぜは趣向の變化としては都合がよい、しかし解決が困難になる。たゞ春水の場合には、考へなくてもよい困難であつた。彼はどの事件も偶然で處置してゐる。「處女七種」のお花は箕吉との戀をゆるされないのを苦にして死ぬ。死によつて同情を贏ち得たところへ、神醫が偶然來合はせる。お花は蘇生する。戀がゆるされる。これが解決の一例である。

偶然を偶然でをはらせないのが奇遇である。遇ふべくして遇ひ得ない親子兄弟の再會である。「梅曆」にもそれがあつた。「春色傳家の花」にもある、「東の春雨」にもある。大半はこれで解決してゐる。「春雨日記」には珍しく俠客の裁役があるが、それも結局は親子再會といふことに落着する。外題の角書「田家奇遇」はそれを表に見せたのである。

偶然を偶然でをはらせない工夫の一つが宿緣である。その頃の讀本作者、草雙紙作者の常套手段とするそれを、春水もまた利用されるだけ利用してゐる、しかし、現實を趣向とする彼は、決してそれを本筋に扱はない。解決がつきかねる、辻褄があひかねるといふやうな場合の準備として、宿緣を利用したといつてもよい位である、「八幡佳

年」には地獄で因果の相を見ることが書いてある。その地獄に對してまた繪ぐみのおもしろさと、女兒の戒めのためにすると言葉をそへてゐる。因果、宿緣の扱ひはほゞこれと似てゐる。

夢もまた偶然のために必要な手段であつた。春水はどの作に於いても、殆ど夢を用ゐないことはなかつた。作者自身の說明を「春色春告鳥」の中から引く。

そも〱予が著はす草紙はいづれも人情の他をしるさず。こゝにおいて其段取相同じ。故に狂言の如く、今の世態にあたらぬ場は、こと〲く夢となす、夢にして夢ならず、かくも在りけんとおもはるゝこともあるべし。こは繪組と目前の同じきを變化する所爲（わざ）とゆるしたまへかし。

この言葉はまた直に宿緣についてもいはれさうである。

八

春水の夢と宿緣に就いて考へる時、引合ひに出したいのは「逢たさ見たさに（とびたつばかり）其小唄戀情紫」である。夢と宿緣が重い要素となつてゐるからである。

平井屋の息子權三と亡兄の妻お花との戀には因緣があつた。因緣は早く二人の夢に現はれた。

牛込の逢坂に操塚がある。奈良の帝の昔の戀物語、奈良と武藏に別れくらして焦れ死したので名高いみさご、さねかつらの墳である。男女和合に利益があるといはれてゐる。そのほとりの小野屋佐五郎はお藤といふ女に懸想して塚に祈る。滿願の日にお藤の危難を救つた。お藤はある武家の妾であつたが、これもかねて佐五郎に戀着してゐ

たのである。佐五郎とお藤はその武家のために打擲される。これが夢である。また戀が窪の傾城花紫と名乘つてゐたお花と、權三とは同じ時刻にこの夢を見た。お花は佐五さんとよび、權三はお藤さんと叫びながら目が覺めた。二人は互に前世を知つた。

お花と權三の戀は一家親戚がゆるさなかつた。お花は追はれて神奈川の藝者となり、後に深川の藝者となつた。その間に權三は女房お袖を迎へねばならなかつた。お袖は權三のためにお花と仲よくする。いつもの趣向である。

權三はある武家の妻お粂の難を救つた。武家は却つて權三を不義の名によつて脅迫する。夢に見た前世の因緣がなほつき纏ふためである。

權三は家を追はれて、上總の平井に退身する。そこには末の珠名の墳がある。男女和合の願を果す姫神といはれてゐる。權三の祈願はかなつてふと戀情を覺えそめたお粂の姿を見た。覺(さむ)ればこれも夢であつた。その頃のお粂は危難を救はれたのがもとで、人知れず權三を思つてゐた。これも宿緣のさせる業である。

お花もお袖も權三を慕つて平井へ行く。行く途中に起つたお花の難も珠名の靈によつて救はれる。いろ／＼の曲折のはてに、お粂は平井屋の本家の娘であることが知れる。事件は落着する。お袖お粂お花は仲睦しく權三に事へる。

かういふ因緣ばなしを春水は楚滿人時代にも作つてゐる。その一つが「松月露譚玉川日記」である。これは宿緣を中心とした作であるが、今度のそれを輪郭におくといふ程度である。逢ひたさ見たさの小唄でも知られるやうに小紫權八の趣の掠められてゐるのも山の一つであつた。

「其小唄」に於いて注意すべき一つは、逢坂のみさごさねかつら傳說、また萬葉に見える末の珠名を假り用ゐることである。「江戶名所圖繪」などの影響も考へられる。現に珠名墳のためには附近の地圖までを添へてある。

しかし、春水には名所圖繪の影響などよりは、それ等の古事の知識を何とかいつて貰ひたくはなかつたらうか。「玉川日記」に「剪燈新話」の「金鳳釵記」を翻案したり、「三日月お專」に「本朝好逑傳」の別稱を附けたりして、やゝ得意がつた昔の癖が拔けきれなかつたのであらうか。人情本の元祖などといひながら、つひにその世界にのみ安住しきれなかつたのであらうか。

「遊仙奇遇錦之里」も夢と因緣に重きを置いた作であるが、その初篇の序に

張文成が故事を爰に假寢の夢物語、楊貴妃櫻の精靈とは、さても古風な翻案に似たれど、野暮なる事を種として、自然に當時の意氣となす、嗚呼がましけれど、一流の筆のはこびの片言を、自慢で一家の口調とこつけ、引書もなければ、すぢもなく

といつてゐるが、實はその言葉の前後と本末を顚倒したかつたらう。おそらく當時の意氣にわざと野暮な典故などを持ち込むのが、彼の自慢でなかつたらうか。

「錦の里」ばかりでなく、たとへば常の艷情のはなしの中に、水に油をさしたやうな支那の物語などを引あひに出して、こゝの趣相似たりなどいふのも、原據を示して翻案ぶりを見せるとよりは、似寄つた筋を利用して自家の博識をにほはせたのでなかつたらうか。江戶の末期はあまりに多く群小博識家がゐた。春水を繞るそれ等と群小風流

家が彼の人情本の後援をしてゐたのである。その消息は彼の人情本のおもてを見たゞけでもうけとられる。
このもの知りぶりが人情本流行のたゞ中にも拘はらず、空しい努力を讀本の製作に致してゐたのであつた。そこに時代の影と、迷へる春水の姿が見られる。

（昭和六年七月「日本文學講座」）

江戸小說史上の一事象

一

「南總里見八犬傳」は曲亭馬琴の大著、二十八年の永きに亘れる述作は、九輯百六卷の多きに至る。嘉吉の役に起筆し、その役に忠死せる里見季基の遺孤義實の房總經略に叙述を專にし、餘筆その子義成の富彊に及ぶ、しかもその間に八犬士の行蹟を起伏してうつす事甚詳細である。その八犬士なるものは「水滸傳」の三十六員の天罡星、七十二座の地煞星の影身である。「八犬傳」が「水滸傳」より化し來るものはこれだけでなく、全篇の構想がすでに彼の換骨脫胎である。「八犬傳」の人口に膾炙せると共に、その飜案の事實もまた遍く知られてゐる、今こゝに一々對比していふを要しない。

ただ馬琴の飜案が時と所を擇び定めてその宜しきを得たといふ一事は注意すべきであらう。時を戰國の世にとり所を關東地方にとつた事は彼の趣向を活し、また我の興趣を新に添へる事にもなる。斯くするために馬琴は多く房總に關する典籍を涉獵した。舞臺は房總にのみとどまらず、古の江戸の地を包容する。今の太平に鼓樂する江戸の讀者は馬琴の筆を通じて、往年の江戸の戰亂を見る、丸山狸穴の舊態を髣髴する、讀者は本筋以外別樣の面白さを

以てこの書を悦んだであらう。

事件を江戸に運ぶ馬琴の趣向はしばらく措く。戰國時代と房總地方に彼の脚色を移し來るのは、必ずしも馬琴の獨創ではなかつた。先蹤すでに存してゐる。今、その一例を「日本水滸傳」にとる。書は仇鼎散人、佐々木天元の作、安永六年に成り、享和元年に發兌する、京都書肆松坂屋の發行に係る。

平井城主上杉顯定、川越城主上杉定正の對峙に筆を起し、期せずして足利家の再興を計畫する七英雄の邂逅義擧、ついで事の破滅に筆を結ぶ。舞臺の地は武藏野を主とする。七英雄は百八星より化出する事いふまでもない。散人が「水滸傳」を飜案してこの時所にうつしたのは、想を托するに便よきためであらう。しかし、當面には決してその睦裏を示す事がなかつた。その序辭にいふ。

本邦自應仁至天正、海內如沸湯、矢石轡乾綱、鯨波碎坤軸也。今載靑史者十而半存焉。此書者總州隱士某從高祖傳口牌之踪跡、足利之庶流總州沈落之始末、舉記而藏故篋焉。某京師游學之序訪予矮屋、說話交而偶摸旅袱裡、示予一稿、予素有好事之僻、凾把閱雖若亡據、事跡爾可換春雨閑秋夜睡耳、竟請得而壽梓、續日本水滸傳者、髣髴羅子之水滸。

この言の如くば、書成つて偶々「水滸傳」に髣髴すといふのである。斯様なものいひぶりは稗官者流の常になすところ、馬琴また「八犬傳」に於て同樣な辭をなして讀者を欺かうとする。散人が序に於てまた書中に於て諸記錄燒亡し人知る者稀なりとやうな言を重ねるは、「水滸傳」をたよりながら、自家の空想を恣にするに便ならしむるためである。その空想をなほ史實めかしてうけ取らせうの手段である。故に卷尾また一語を寄せて、その策を助けて

ゐる。「異本、龍丸難を逃れ、安房里見義弘に投托、里見下總に一城を築き、龍丸を守りて威名あり、元龜天正年中、久吉公大度の活達足利を犯さす、龍丸の子孫姓を喜瀨河と革めて今にその系滔々たり。」といふところの龍丸とは、篇中に於て七英雄が擁する足利庶流の公子である。その安房里見の投托の一事は「日本水滸傳」と「八犬傳」との間に直接の關係がありはせぬかとの疑問を起させる。

これはまた馬琴の「傾城水滸傳」と椿園主人の「女水滸傳」との間に直接の交渉があるかどうかの疑問を伴うて來る。しかし、之れ等の疑問をおいて、こゝにいはんとするは、散人が空想のまゝにする作意を、馬琴は一々史實に照し、史實の上に立てる事である。馬琴はもとより稗史の特質如何を知る、故に史實になづまざるは勿論である。ただ虚を演ずるにさきだつて實に因り、奇を出すの前に眞を假らうとする用意が深い。「八犬傳」を以て「日本水滸傳」と同じやうに語り得ない原因の一つであらう。飜案の筆また易からざる事がおもはれる。

二

「水滸傳」の飜案は「日本水滸傳」以前に建部綾足によつてなされてゐる。「本朝水滸傳」これである。安永二年の刊行に係る。一に「芳野物語」といふ。二題名何故に存すとならば、仇鼎散人の序に於けると同じ意圖に出づる。「水滸傳」に據らぬ創案とやうに思はせると共に、「水滸傳」流行の時好による旨を明にせんとする。その序に「又是を水滸傳と號し事は作れる趣のよく其のふみに似かよへばとて、よしのゝ川邊の事によせて、書屋がわざにしつるとなむ」と見える。

綾足は時代を上代に假りて、孝謙帝時代の事とする、梁山泊を近江の伊吹山とする。梁山泊を伊吹山とするのは、椿園によつて「女水滸傳」に踏襲せられてゐる。綾足は倘俅に擬するに道鏡、宋江に擬するに惠美押勝を以てする。「水滸傳」の脚色を我が史實に當てはめる點に於て相應苦心したあとが見られる。

この書は本來「本朝水滸傳」なるべく、その「芳野物語」といふは綾足の私である事は前に說いた。然らば「芳野物語」の名は何によつて附けられたか。事件の端を芳野の仙媛に發いたためである。「水滸傳」を飜案する者は、洪大尉誤走妖魔の一條に大に工夫を凝すべきである。原書に驅使せられるか、驅使するか、その飜案の歸趨は何であるかは、一篇の開手たる之れによりて決する。まして飜案ならぬ樣する場合に於て、一段と工風を凝すべきであらう。故に馬琴は原形をあるかなきかに片寄せ、またわざと槃瓠の故事に據る旨を明に示してゐる、即ち顧みて他をいふものである。

「日本水滸傳」に於ては此の點未だ至らざるものがある。太田道灌武州の城に居て池中に白氣の登るを見、搜つて一石篋を得た。之を開く。天地震動一團の白晃篋の中より飛び出で碎けて七片となり東北に飛去ると書く。原季の臭鼻を衝くものがある。椿園の「女水滸傳」ははじめより飜案である事を標榜する。而してこの一條を避けて何もいはなかつた。むしろ賢とすべきであらう。「本朝水滸傳」に對して馬琴の細評を下した天保四年の筆錄、「本朝水滸傳を讀む、並批評」がそれである。共にこれ「水滸傳」の飜案者である。共の一人が一人の飜案を品隲する、もとより多く聽くべきであらう。

綾足が「水滸傳」の發端を飜して吉野の仙媛に托したといふのは斯うである。天武帝の頃、吉野の里に味稻（うましいね）の翁

といふ者がゐた。吉野川に簗をたて、鮎をとり鰕鮓にして世のわたらひとする。ある時柘の枝の簗にかゝるをとり棄てようとする。簗の枝人の如くものいうて翁な流し給ひそ、家に持てかへり給へといふ。持て歸れば柘の本つ枝から一寸程の美しき兒の這ひ出づると見る美しく貴きをとめの姿となり、翁の妻とならんといふ。なほ柘の枝を翁に與へて百段に折らせる。これわれ等が生める百人の子といふ。太き本つ枝は貴人と生れ出で、すこし細きは次々の官人、末の枝の細きは蒼生と生れ出でんと翁に說ききかせて川に流す。さて仙媛は翁を伴うて山の深きに紛れうせる。

馬琴はこれに對してこの一條が竹取物語に據る事を說く。しかも、柘の枝の百人の子となる事のいはれなきを說く。柘を石榴に作つたならばなほ幾分のよりどころがあらう、少くとも李に作るべきであらう、李また多子の義があると說く。或は桃に作るべき事をいふ、柘け桑、即ち抑勝等の柘の枝より化り出づるのは、道鏡等の魔君を退治する桑の弓の縁を以てしたものであらうが、それならば邪鬼を驅る桃となすべきである、作者の思ひこゝに至らざるを惜しむとも評した。

この評は作の趣向に照して當つてゐると考へられる。しかし、未作者の胸裏に入つて推せざるものとも考へられる。綾足は柘の枝の奇を以て、「水滸傳」の石碣の怪を如實に飜案し得るものとしたらう。或は百八星をうつして柘枝の百段とするの無理なる事をおもひながら、なほ柘枝を棄てかねもしたらう。こゝに綾足と馬琴との見解の相違がある。

三

綾足が柘の枝に執を感ずるは、「萬葉集」卷三に仙柘枝歌三首が載せられてあるためであらう。今歌あつて傳なく、その詳細を知るよしがない。わづかに旁書によつて、吉野人味稲ゝ柘枝仙媛との事件を推し得る。また歌の一つ、

古に梁打つ人のなかりせばここにもあらまし柘の枝はも

を「懷風藻」の詩中に散見するものと合せ考へて、原の象をかすかに見る事が出來る。吉野川に梁うつて鮎を漁る味稲が梁にかゝれる柘の枝を拾ふ、枝は美しき女に化り出づる。味稲と夫婦の契をなしたが、つひに常世に去る。輪廓大方斯くの如くであらう。綾足はこれに「竹取物語」を配して味稲を翁としたのであらう。その柘の本つ枝より一寸ばかりなる美しき兒の這ひ出づると見しが云々といふが如き、明に竹取の色合を見る。馬琴たまたま「竹取物語」を想起して、柘枝歌に及ばなかつた。つひに綾足と意相離れざるを得ない。

馬琴と綾足との意見の相違はこれだけにとどまらない。綾足が文を行るに古語を以てしたのは、その最も誇尙するところで、馬琴の最も嫌忌するところである。

馬琴はいふ、稗史野乘の人情を寫すには、すべて俗語に憑らざれば得し難きもの、故に唐土に於ては「水滸傳」「西遊記」をはじめとして宋末元明の作者は皆俗語もて綴る。わが「源氏物語」また當時の俗語のみ、ただ作者が貴人であるが爲に、俗語とはいひながら、雲上搢紳の俗語にて雅語もそこにまじれるだけの事。綾足はその理を知らずして、後の世に生れながら古雅の詞のみで物語を綴らうとする愚やおよぶ可らざるものと。またいふ、

これ等は要なき贅言に似たれども、今の世に生れて草紙物語を作らんに、雅語正文もて綴りては、勞して功なく、且情を寫し、趣を盡すことは得ならぬものなりといふことわりを述るになん。綾足をして尙世にあらしめば、まのあたりにこの理をしかしかと解示して蒙霧を啓せまほしく思ふかし。見るべし、此よし野物語は趣向のうちは聊たくみなりと見ゆるもあれど、よろづ手づかみに近くて、趣を盡したる處なし、山水の景致などは書きあらはしたる處あれども、こゝぞと見とむる妙文なし。

馬琴のこの評言は一々正鵠を得て居る。しかしながらこの言は大なる疑問を今のわれ等の前に提供する。馬琴が讀本に於て、少くとも「八犬傳」に於て試みた文體は、なほ當時の俗言俚語であらうか。俗言俚語を以てするとならばもとより、洒落本、滑稽本に見る如き文體であるべき筈。馬琴の評はなほ天に唾するが如きものでなからうか。しかも、江戸の小說史はなほさる文體の讀本を俚耳に親しきものとする。讀本の文體はまさに斯くあるべしとあやしむ事がなく、「本朝水滸傳」の類を以て變態の讀本として、「八犬傳」の類との間に强き一線を劃すのみである。但し、この解釋は江戸小說史上の問題とよりは江戸文化史上の問題として考ふべき事に屬する。

馬琴が避けんとする古雅の辭をば、綾足は却つて好んで用ゐる。綾足みづからの言は聽く事能はねど、友と名のる藤原かねよしの辭。綾足の意を傳へてゐるとおぼしき意見は「本朝水滸傳」の序に於て見る事が出來る。序中にいふ、

こはげに作れる物語にて事は漕ぐ舟の跡なき事どもなり。しかはあれど、詞はいそのかみ古き事どもゆ考へ合せて、かの世にたらはし聞えむものとしつるに、讀み得て其の古言をとらむとする人には蓋や此の書もよしあ

るべけれ。

かくの如き意見は、綾足の前著、明和五年の作「西山物語」の序に於て明瞭に見る事が出來る。これまた綾足の一友のしるすところである。序はまづ言語に古今雅俗の別についていふ。

今何古者人情也、古異今者語言也、語言何以異也、蓋世有汚隆、人分雅俗、是以學者通古語也、戞々乎難哉、雖稱能通者　大率如隔靴爬痒、豈愉快哉、倘能以古御今、即俗爲雅者、業之成也。

序言は綾足を以て古を以て今に御し、俗に即りて雅をなす人とする。「西山物語」を以て古雅に入る術書とする。

欲俾從學士、曉以古御今、即俗爲雅之術、乃記時事、以爲三卷、題曰西山物語、苟志國風及片歌者、能朝習夕積之、則置身於莊嶽間之術矣。

もしこの言をそのまゝに信ずべくば、「西山物語」は古學に志ある者の教科の書である。つひに一般の讀者を對象とする者でなかつた。

故に「八犬傳」と同じ標準を以て見るべきでない。しかし、「本朝水滸傳」はいかに。その一般の讀者を待つにある事は、「芳野物語」の題名の外に「水滸傳」流行に乘ずる題を附したので明である。こゝに於て依然として綾足は馬琴の苦評を甘受しなければならない。しかし此の種の古雅文體の小説は綾足の頃他にも少くなかつた。また一の流行をなすともいひ得る。而してまた支那小説の飜案は他にも多く存してゐた。これ實に滔々風をなすものであつた。然らば「本朝水滸傳」の如きは、綾足一箇の好尙以外に、この二流行の契合とも見る事が出來る。是に於て、その二の流行が契合するに至る經過如何の問題が提示される。江戸小説史上に於いて重要なる問題の一つであらう。

即ち國學と支那稗史の學との提携が江戸の小說にいかに影響するかの問題である。

四

綾足が「本朝水滸傳」を古雅の辭を用ゐるのは、畢竟國學に心を專にするためである。事の一端は「西山物語」の序に於て明に見られる。その古語雅言をいかやうに、すらすらと誤りなく、巧みに用ゐこなしたか、どうかは馬琴と共に後に吟味せんとする。こゝにはいかにして「水滸傳」を翻案するまでに讀みこなしたかに就いて一考を寄せようとする。

今日にして「水滸傳」を讀むのは、必ずしも難しとしない。ただ明和の頃に綾足が讀み得たとすれば驚歎に價する。何となれば「水滸傳」は彼土の平語俗言を以て書かれてあるからである。我國の士は彼の雅文を讀むに熟してゐる。左國史漢の書を暗んずる者もとよりその人に乏しくない。ただ平俗の語をもて書れたる演義の書に至つては容易に讀下し得ない。一體綾足はどうしてこれに慣れたのであらう。綾足はかつて繪を學ぶために長崎に客居したといふ、彼はその際に支那語學を修めたのであらうか。或はそれもあつたらう。

しかし、綾足は支那語學に通曉せずとも、なほ「水滸傳」を翻案する可能性を有する。當時すでに岡島冠山に「通俗忠義水滸傳」の譯本が存在し、また「水滸傳」百回本に訓點を附したものの一部を刊行されてゐた。綾足の翻案なるもの、おそらくこれに據つて成されたのであらう。

「本朝水滸傳」は江戸の小說に於て讀本のために一新途を拓けるもの、一々其の非を擧げる馬琴もなほ其の功績を

讃するに吝でなかつた。

寶曆明和の間に當りて、斯くながながしき草紙物語を作りたる此の綾足はさるものにして、吾ともがらの嚆矢也。はかなき作り物語だにも。いと精細になりける今の世の人の、肥たる眼もてこれを見れば、いと淺くもあるかなと思ふ節々なきにあらねど、當時は上に師とすべきものなく、下に等類稀なるに百回に及ぶ長物語を誰かよく綴るべき、これを等閑に見すぐすもの、或は無益の業として、その荒唐を嘲る人の爲には、このことわりを述るも要なし。俱に甘苦を嘗めわかつ同好看書の諸君子は必ず吾言に從はん。

綾足は小說史上に於いて斯る地位を占める、しからば綾足をして其の功をなさせた冠山の功績に就いてはまた小說史上の功績として推擧すべきである。或は知らず、當時冠山の出づるなくばもとより「本朝水滸傳」なく、また後の馬琴なかりけんとさへ思はれる。馬琴に「新編水滸畫傳」初篇十卷の譯本があるが、冠山の譯あつて、はじめてその譯の存する事は歷々指摘される。

冠山は長崎の通事、最も支那音に通じて和中の華客の稱がある。後職を退いて江戸に來り、京阪に來る。到るところ支那語學を弘布させた。江戸に於ては徂徠一門に敎へるところがあつた。徂徠が唐音直譯主義を唱へるも冠山が唐音を傳へた結果である。徂徠門中第一の君子春臺にしてなほ鎌倉に遊ぶや、唐書もて一寺僧を嘲り、その知らずして去るを笑ふ事さへあつた。勿論唐音は冠山によつてはじめて紹介せられたのでない、これに通ずる人はすでに存してゐる、ただ冠山の如く一般化させるに及ばなかつた。此の間の事情は江村北海の「授業編」の一節が箇にしてよく要を得て居る。

抑唐音の吾邦に行はるゝ事、元和より以前は姑く置く、正保の頃朱之瑜、陳元贇など歸化の後共の人々に親しかりし人は、やゝ唐書に通じたる人ありけれども、未汎く世間に流布せず、余幼穉の頃までは長崎の譯官、黄檗の僧徒ならでは知らぬ事のやうに人々おぼえて、京師など是を主張する人稀なり。岡島援之長崎より京大阪へのぼり、江戸へも赴きて共業次第にひろまり、唐話纂要、雅俗語言などといふ類の書共多く梓にちりばめて世に行はる。

斯うして世に行はれた唐音は當時支那流行と相俟つて一代をして支那氣分に陶醉させる。「學者氣質」に於ける一笑話の如き必ずしも火なくして立つ煙ではない。「忠義水滸傳解」の著者陶冕の如きは、いかに心肝を碎いて「水滸傳」を學習したか。いかに耳を傾けて田文瑟から「水滸傳」の講義を聽いたか。同學の徒、秦熈載、冕世美と談ずるに、一和語を用ゐざる程、唐音の學習に熱狂したか。唐音の單身を竊するのはげしさ驚くべきものがある。綾足の作はこの餘風をうける、從つて飜案の書「芳野物語」の出づるに不思議がなく、書肆が「本朝水滸傳」の顯名を欲するも不思議がない。皆一時の流行の然らしむるところである。

しかし、これを以て寶暦明和安永に於ける支那小說の流行を說き、またわが小說の關係を說き盡すとするは非、綾足の書ひとり「本朝水滸傳」のみならず、影響を與へる書、ただ「水滸傳」のみでないからである。しかもこれにも冠山の功績を外にして考ふべきでない。

五

冠山出でゝ唐音の學京坂に弘り、また江戸に及ぶ。その江戸に於けるは慧星の去來するが如きものであつたが、京坂には光芒燦としてしばし絕えざるものがある。冠山に刺戟せられて起つ者が相踵いで出づるがためであつた。岡白駒は其の一人である。冠山が「水滸傳」に訓點を附し、またこれを譯した事が、江戸の小說上に影響するの甚しきはすでに述べた。白駒の功また稱すべきものがある。一體「水滸傳」は所謂回章小說に屬する。回章小說とは回また回を重ねて長きに至る、今の稱して長篇小說といふに當る。京傳、馬琴皆彼の例に倣ひて全篇を回を以て分ち、また時に條の名を以て代へる。綾足の「本朝水滸傳」の如きもまた條を以て數へてゐる。支那の小說また長篇小說に對する短篇を有する。白駒は冠山が長篇に於てせるものを、短篇に於てした。蓋し、白駒と冠山との唐音の知識の相違はその趨ふところを、異ならしめたのであらう。

白駒は明代の小說から拔萃して、これに訓點を附し、また時に註釋をも加へた。據るところは「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」「西湖佳話」である、中に「醒世恒言」が最多く用ゐられてゐる。「小說精言」「小說奇言」は其の撰書である。

白駒は「小說精言」の序に於て、まづ小說の何であるかを說いた。「小說者、史之裂也、馬貴與列諸子家。蓋以其爲一家已」。次に小說の起原變遷を說き、その効用に及んでゐる。また小說の文辭に古今の變ある事を說き、さて、此の撰ある所以を述べる。

獨至乎平常俚言、不啻耳之侏離、即載之筆、亦謂之鴃舌、惟攻諸象胥、學者不講、夫國音自嗇用、實必華音、而至讀不能句、實學人之大闕也、雖然、斯民也三代之所以直道而行也、文辭源於典漠、流而入俗、雖俚言鄙語也、豈出於字故固、亦弗深思已、屬者有梓小說者、餘譯以付之、又別爲之譯義、因叙小說所繇、讀者求諸字故、以此爲一隅、思則過半矣。

白駒のこの言はまた一見識を具する。支那小說を讀む必ずしも華音によるの要なき事をいひ、訓點の可能を說くは、支那小說の繼續を弘くする所以である。陶冕は寶曆七年に「忠義水滸傳解」を著はした。「水滸傳」の第一回より第十六回までの語句を摘書して註釋を加へ、また唐音を附したるもの。唐音流行の時期に出づる、おのづからその形をとらざるを得なかつたらう。その後天明四年、鳥山石丈はその著を繼いで第十七回より第三十六回までの語句を註した。但し、これには唐音を附してゐない。その意、唐音は到底假名を以て示しおほせられるものでない、寧ろとり去るをよしとするにあつた。時まさに唐音熱の冷め來つて、人々は唐音の煩しさを外に、たゞ「水滸傳」のおもしろさをのみ味はうとする、即ち陶冕の「傳解」と石丈の「抄譯」の異點のある所以である。しかも、石丈の見と白駒の意と相通ずる事を記すべきであらう。

白駒の考は、當時の唐音に熟せずして、なほ支那の小說の奇趣妙案を樂しまんとする人々の思はくであつた。その人々はすでに漢文に通曉してゐる。經學考究の餘、早くから六朝隋唐の文人作るところの小說たとへば白駒が「精言」の序中にあげたる神異記、洞冥記、博物志、搜神記、述異記、洪武內傳、飛燕外傳、亂髯傳、紅線傳、隱孃傳、白猿傳の如きは翫賞せられてゐた。

すでに、元祿十一年に「怪談全書」あつて世に行はれた。卷首に林道春の名を署し、卷尾に右怪談全部羅山子作之とある。これが果してその人の手に成つたか、僞作であるか、當時往々かゝる事のあるがために、遽に言ひ難きも、「說淵」「古事說海」「剪燈新話」中の奇談異聞が抄譯せられてゐる事は、明に知られる。椿園の「怪異談叢」の序にいふ、「方慶元之時、羅山林先生以博洽名高於一世、講習餘間、著怪談全書五卷、自是其後好事者傳翫廣行于海內」椿園の書は、遂にその後を襲はんとしたるもの、「太平廣記」「冥宝志」「瀟湘錄」「續齊諧記」などに取材してゐる。安永十年の刊行である。

事情すでにかゝるところへ、白駒によつて、また新しきものを敎へられた。人々はいかに喜んでこれを迎へたであらう。

六

「奇異雜談」五卷は、天文年間、江州佐々木屋形の幕下中村豐前守の子某の撰である。書中「金鳳釵記」「牡丹灯記」「申陽洞記」の三篇を譯してゐる。皆「剪燈新話」中のものに屬する。撰者いはく、「新渡に剪燈新話といふ書あり、奇異なる物語を集めたる書なり。今二三ケ條を取て、こゝに載するなり。」「剪燈新話」の飜譯はこゝにはじまる。耳の奇と文の巧と相俟つて然るか。「剪燈新話」を稱する者の數多い事は、慶長の活字板、慶安の整板の刊行がこれを證する。ただに原作を讀むにとどまらず、原文の抄譯にとゞまらずして、その趣向を我に移して飜案を試みる者も出づる。寬文六年の淺井了意の「伽婢子」これである。しかも、同類の書のこのあとを追うて出づるもの

が多い。「前燈餘話」は明の李禎の撰、即ち瞿佑の「剪燈新話」を繼げるものであるが、元祿五年には、我に於て飜刻された。訓點を附する事勿論である。これまた「剪燈新話」の類のいかにもてはやされたかを知るの一證左である。「剪燈新話」の流行は、寶曆明和に於ては「三言」の流行に移つた。三言とは「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」をさしていふ。「西湖佳話」「拍案驚奇」の類またこれの流行に加はる。これ等皆諢詞の體を以てするもの、「新話」「餘話」の綺麗濃艷の體唐代傳奇を倣ふものと全然軌を異にしてゐる。

「前燈新話」の流行は「伽婢子」をはじめ幾多の飜案を出した。「三言」其他の諢詞小說の流行はまた多くの飜案を出すべきである。即ち長篇小說の「水滸傳」の「本朝水滸傳」に於ける如きものを短篇小說に於ても見らるべき筈である。まこと、その類は甚多く存する。中にも最も知られてゐるのが、都賀庭鐘の「英草紙」「繁野話」「垣根草」「莠句冊」上田秋成の「雨月物語」である。

これ等を通じて見れば、庭鐘と秋成とが支那の原作に對してとる態度に大なる差異の存するを見る。二人の考ふるところに逕庭が存するためである。これに就いては今しばらくいはず、こゝには二家に共通する一點をのみ考へようとする。即ち二家が飜案の筆を執るに當つて、我古典に意を用ゐるの輕からざるを見る。

庭鐘と秋成の飜案は、時代の多くを鎌倉室町とする。その間の史實は時に空漠としてその事件と人物を假り用ゐるに便よきためであらう。たとへば諸作家が「水滸傳」を移すに、戰國時代を以てするを便とするが如きものであらう、庭鐘と秋成が。我が古典をかへりみる事の多きは、これ等のうへにも見る事が出來る。しかし、事を上代に托するものに於て、なほ一段と瞭にする事が出來る。ここにわづかに一例を引く。「莠句冊」の第三篇「求家俗說の

異同、冢神の靈問答の話」は「醒世恒言」の「蘇小妹三難新郎」の飜案である。

蘇老泉の女、名は小妹、絶世聰明、資性人に過ぐろ十倍、また詩詞歌賦に長じてゐる。王安石これを聞いて、その子王雱のために親事をなさうとする。よつて雱が作れる文を老泉に與へて點定を乞ふ。老泉は安石の人物を悪んで、その親事を好まない。たゞその文を看て、篇々の錦繡、字々の珠璣に驚き、おぼえず才を愛するの念を動した。なほ小妹をしてその文を批閲させた。看て嘆じていふ、これ必ず聰明才子の作るところ、但秀氣泄盡して、華にして實ならず、恐くは長久の氣にあらずと。後果して王雱は夭した、小妹の人を知るの明斯くの如きものがある。

世上小妹の賢を聞いて來り求める者が甚だ多い。老泉は小妹と共にその文を閲した。小妹一文を看て四句を以て批する。「今日聰明秀才、他年風流學士、可惜二蘇同時、不然横行一世。」老泉は小妹がその人を選ぶの意あるを知る。これ秦少游であつた。少游やがて禮部の大試を應じて、一擧名を成した。その夜老泉の勸によつて姻をなした。宴畢つてまさに房に進まうとする。房門緊く閉じてある。靑衣の丫鬟あつていふ、小姐の命を奉じて、こゝに三の題目をまゐらせる。三試倶に中つてはじめて房に入る事がゆるさる。兩試中つて、一つ中らずば、明日また再試し、一試中つて、兩試中らずば、外廂に在つて讀書三月たるべき事と。少游幸に三題目の詩を解し得て香房に入つた。

庭鐘はこれを飜案するに當つて、その筋を拉し來ると共に求冢の故事を鹽梅した。求冢の故事とは「萬葉集」に於て、また「大和物語」に於て見るところの盧屋處女の傳説である。庭鐘は菟原男と茅淳男とに才すぐれた美女を配する。これが蘇小妹に當る。また茅淳男の陋を憎んで逐ひ斥ける荒法師を現出する、また小妹に當る。庭鐘は彼と此との二つを合せて趣向をなしたばかりでなく、求冢は世に傳ふる如く、蘆屋處女、菟原男、茅淳男の二つの冢

でないといふ說きあかしの一條を加へてゐる、即ち飜案者の興味がいかに蘆屋處女の傳說に動いてゐるかゞ知られる。

「繁野話」の第二話、「守屋の臣殘生を草莽に引く話」は必ずしも原話を支那にとれるものでなからう。たゞ此の種の體は彼の外傳に於てしばしば見るところである。庭鐘その方行を學んで、「聖德太子傳」を本據として、此の話を成したのであらう。これまた庭鐘の支那にのみ趁かなかつた事を明にする。

「繁野話」の第三話「紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話」は、「任氏傳」を骨子とする。これは唐代の傳奇である。庭鐘はそれをそのまゝに飜案すると共に、たつか弓の傳說をとり入れた。それは「今昔物語」その他に見えてゐる事であるが、これを加味する庭鐘の用意は極めて微に入るものがあつた。篇中の數首の歌に就いても、或は「今昔物語より、或は萬葉集より引用しつつ、なほ少しく改竄して、飜案の實を全うせんとしてゐる。「垣根草」の第四話「在原業平文海に託して寃を訴ふる事」の如きは、殆ど支那の香を聞く事なき醇乎たる「伊勢物語」の論である。

庭鐘の諸作は、支那の小說の飜譯、飜案としてのみ知られてゐる。しかし、斯くの如きものも少からず混じてゐる。まして秋成の如く、はじめから支那の小說をうつすに專ならずして、おのれの好みと合したもののみを選ぶ者に於ては、また古典の研究に於て遙に庭鐘の上に出づる者に於てはこの種のものゝ愈多きは理の然るべき事であらう。

七

斯くの如くして、再び綾足に就いて考へざるを得ない。庭鐘秋成が諸作に於てなせる用意は、綾足がすでに「本朝水滸傳」に於てなしたものでなかつたか。その「水滸傳」を我にうつすに當つて、古史を參照し、古文學に取材した事であらう。綾足の筆はともすれば「水滸傳」の眞の作意に扞りがちである。これもとより綾足が事を「水滸傳」に似せて、「水滸傳」の筋によらざるを本意としたのである。即ち、「水滸傳」を假りて、わが上代の情趣を描き出さんとするにある。その古語を以て文を行るもたゞそれがためであつた。然らば綾足の企圖は果して意の如くなり得たらうか。再び馬琴の評言を引いて、これを檢するが便であらう。

馬琴は「本朝水滸傳」の用語が古雅に醇なるものでない事を指摘する。直にと書いてたゞと傍訓してゐるのは、たゞちにのちを省いて古言めかしたもの、即ち古雅の語ならばやがてなるべき筈であるといふ。大にのおほいに於て、「い」を省いておほにとする。また今の語をとつて、わづかに古語めかしたるものといふ。馬琴はまた、風俗に關するものに至つては、古今の別を失つてゐる事が殊に甚しく、わざをぎの場に引幕を垂れるとか、帷幕を引くとかいふが如き、また座本の語を用ゐるが如き、あまりの用意なさである事を難ずる。舞臺に引幕を用ゐるは極めて近世の事に屬し、座本は座がしらなどの稱呼を襲ふもの、文體と名目との齟齬の甚しき苦笑を禁じ難しとまでいうてゐる。

さしも古言を旨とせし作者には、似げなき疎鹵なり。座本引幕の事あるをもて思ふに、この作者は文をのみ古雅にならはんと欲りして、器材稱呼のうへなどには及ばざりしか。さてはかの頭は猿、尾は蛇とかいふ怪鳥に似たるもゆゑあり。

馬琴の評言はまさしく當つてゐる。綾足は古學を修めて未達せず、古文をものして未熟せず、支那の稗史を翻案して未至らざるものであつた。

我古典の學に精しき者が、研究の餘暇を以て、古雅の語を用ゐて、いにしへの物語に擬せんとする著作が、往々にして存する。荷田在滿の「白猿物語」「落合物語」が最よく知られてゐる。作者未詳の「由良物語」はまた色々の意味に於て注意せられる。

「由良物語」は三莊太夫の傳説を古事記・萬葉集の語を用ゐて書きなしてゐる。またそれに一一の出演を明にしてゐる、なほ「西山物語」に於けるが如きものがある。更にまたこれには、長歌、連歌、旋頭歌、短歌、片歌、俳句、さては宮人振、夷歌、天田振などの歌謠古體の目を擬人して、之れ等の消長のあとを三莊太夫傳説と結合はせる趣向がある。蓋、作者の古典の知識に對する衒耀を見るべくして、未一の小説として稱すべきに至らない。その點は「本朝水滸傳」わけて「西山物語」に類する。しかもこれ等の作と、かの物語の述作の前後の如きは、遽に決する事が出來ない。

とにかくに綾足の作は、これ等の先蹤を追うて、直に古事記、萬葉の古體に入らうとして、却つて古語古文に飜弄せられるものであつた。要は力量足らざるに、なほ才名を賣るに急なるためであつた。「西山物語」の趣向はさすがに棄てがたきふしがある。しかも、衒耀の弊が累する事は少くない。これ秋成がその晩年に於て筆を起して同一事件をとり扱つた理由である。

おもふに綾足の企圖は、その實が伴ふに至らなかつたといへ、後の讀み本の傾向をしかと把持してゐる。然らば

綾足の後に出でゝ、彼のなし能はざるものを、よく成しゐた人々は誰々であらうか。その述作は何何であらうか。

八

まづその一人である村田春海に就いて考へる。春海の文は古雅の辭を縱横に驅使して暢達また絢爛をきはめてゐる。もと漢文の風格を根柢とする。「琴後集」の一瞥がよくこれを明にするであらう。「竺志船物語」の序跋に高田與淸、また正木千幹が聲を高めていふのはこの點である。與淸はいふ、文はすべて漢文の體を學ぶべきである。即ち姿を漢國にかり、心を今にまうけ、詞を古に採るべきである。しかもこの旨を得たるものは春海あるのみと。千幹はいふ、漢學をなすものは和學を知らず、和學を知る者は漢學を解せず、この二つを兼ぬる者は春海あるのみと。「竺志船物語」を讀みまた作の依るところを考へれば之れ等の言の謬なき事が知られる。

「竺志船物語」は時代を平安朝にとる。氏は藤原にて、大井の三位といふが、酒を嗜むに過ぎて、官職に離れ、あぢきなき日を暮してゐたが、こゝに機を得て大宰の帥となつて赴任する。船路して筑紫にまゐられる。姫君は若くして美しく、また賢しい。船長これをかい間見て奪ひとらうとする。船長はもと海賊藤原純友の徒の、漸くまめやかに船人の業をつとめてゐる者であつたが、殿の酒に醉ひ臥して正體なきを見て、この暴擧を企つるに至つた。船長はその手下と共に殿また北方を殺し、姫をとらへる。姫は一度は死なんとしたが、寧ろ一時を屈しても、つひに親の讎を報ゆるの正しきをおもうて、强ひてこの意に從つた。けれど部下は船長を諫めて、枝を斷ち葉を斷ち、後の禍根なからしめようとする。船長もせん方なくて姫を絞殺しおいて、逃れ去る。船はたゞ姫の骸を載せて、他に

人とてはなく、空しく波に漂ひゆく。「かくてこの浮ふねの行方いかがありけん、そはつぎの卷にこそ。」春海は斯くして筆を結んでゐる。それより後事件はいかに展開するか、作者はつひにいふ事なく、與清、千幹またいひ及ばなかつた。しかしその船の行方、姫の行末はほゞ推するに難くない。

姫は蘇生する、折から漕ぎ寄せ來つた船に救はる。船に商人がある。一片の假情を用ゐて姫を手に入れる。商人姫を郷につれかへるも家に入れる事が出來ない。何となればその妻の嫉妬にたへざるためである。妻は姫を欺いて烟花巷に賣る。姫の意はただ復讎にある。ために幾度か假情に欺かれ、幾度か慘害にあふ。後一官人と相結びその力によつてさきの船長はじめ一味の者を捕へて、仇をかへす。さて節を失ふは生を貪るためでない事を書きのこして自殺する。一篇大方斯の如きものであらう。

春海の心のうちに秘めてもらさぬ節をあて推量するのは何故であるか。畢竟「竺志船物語」は支那の小說の飜案である事によつてさういひ得る。春海の筆はわづかにそのはじめの方を移しなすに過ぎなかつた。原作は「醒世恒言」の「蔡瑞虹忍辱報讎」である。即ち「今古奇觀」の「蔡小姐忍辱報讎」である。「今古奇觀」は「恒言」等の「三言」及び「拍案驚奇」より拔萃選刻したものである。

春海はその筋の大方を、作原をさながらにとると共に幾つかの加へるものがあつた。それによつて純然たる我國のもの、平安朝のものたらしむるためである。綾足が馬琴から非難うけたくさぐさは遂に見る事が出來ない。春海は原作を味讀した、それと共に我平安の文の格調に熟した。二者相よりてこれを成し得たのである。浪華の浦に月見るくだりは原作になき一節である。春海がこれをそへ加へた事によつて、讀者をして平安朝のかくれたる書に接

し得たかと思はせる。こゝに春海がよく彼を我に活して移した例として最短いものを擧げる。「笠志船」の船長の名は千引である。勇力よく千引の石を運し得るためである。これは原作の陳小四に當る。陳小四に從ふ七個の水手おのおの渾名をもて呼ぶ。白滿、李鬍子、沈鐵甕、秦小元、何蠻子、余蛤蚆、凌歪嘴これである。春海の飜案の筆はこれ等をも空しく見なかつた。

つぎに出で來るは痩細りて貌ささやかなり。こはただ小やかなるのみにはあらず、身の骨いと柔にて、いささかなる物の間よりも出で入る事心のままなれば、鼬鼠麿といへり。酸漿目は眼赤く、烏脛は脛黒し。胸のさしいでたれば、鳩胸といひ、頭の尖りたるを鋒頭といふ。

鼬鼠麿、酸漿目、烏脛、鳩胸、鋒頭皆彼の水手に應ずると共に、一々平安の書に據るところがある。かゝる細緻な注意は全篇に亘つて見る事が出來る。

九

春海と相並んで此の種の飜案をなした一人に石川雅望がある。その書に「近江縣物語」「飛彈匠物語」「天羽衣」がある。馬琴は「本朝水滸傳」を評するの餘、言の「飛彈匠物語」に及ぶものがある。「近ごろ六樹園が著したる「飛彈匠物語」は「笠翁傳奇の十種曲」の中より向趣を取出て、文は「宇治拾遺」にならひて作りたれど、文のうへをいふものなく、趣向の出處を知るもの稀なるべし」

六樹園は雅望の別號である。「飛彈匠物語」は讀む者をして飜案とおもえ起さしめぬほどに、こなされたものであ

る。人はただ雅望が指示するところに從つて、「更科日記」の竹芝寺の傳說と、「今昔物語」飛彈匠の談によつて趣向を立てたとのみ見て、陰にある支那の原作を知らなからう。馬琴が趣向の出處を知る者稀といふ言にはやや貶意があるが、これを一段の善意に解して出處を氣づかせぬほど巧妙に飜案してゐるともいはれる。

但、馬琴がその出處を笠翁の「十種曲」とするのは誤謬である。これは「拍案驚奇」の第一話に出づる。「十種曲」から出でたるものは「近江縣物語」である。

「近江縣物語」の題名は、「萬葉集」の歌の一つ、靑みづらよさみの原に人もあはぬかもいははしる近江縣の物語せむに據る。題に命ずる、すでにさうである、篇中の語句また各出典を有する、しかも「本朝水滸傳」「西山物語」の生硬を見ない。

「十種曲」の一つである「巧團圓傳奇」は三十三齣より成る。傳奇の常として第一齣に全篇の略が謠はれる。

恤老婦的偏得嬌妻、姚克承善能致福。
防失節的果得全貞、曹小姐才堪免辱。
避亂兵的翻失愛女、姚東山智也實愚。
求假嗣的却遇眞兒、尹小樓斷而忽續。

これを更におし展げれば斯うである。小樓の子が幼にして勾引され、轉賣されて布客の子となる。これが姚克承である。少うして養父に死なれ、貧苦の間に書を讀んでゐる。その隣家の姚東山はもと高官の人であつたが、世を避けて曹玉宇と改名して醫を業とする。克承の賢を知つて、その女いふところの曹小姐に配せんの意がある。しかも

若き二人は互に意中をほのめかす事があつた。

克承は用あつて松江に旅する。途中一老夫を購つて父とする。これ尹小樓である。小樓はさきに子を喪つて繼嗣を得んとするも、然るべきものを得ない、故にわざと策を用ゐて、完成なる人を選ばうとした。招牌に、「年老無兒、出賣與人作父、止取身價十兩、願即日成交」と書いたのを負ふて途上に立つてゐたのである。二人は斯くして父と子の緣を結びながら、實の父子たる事を知らなかつた。克承は小姐と婚を全うして後、小樓のもとに行く事を約して相別れる。此時小樓は未實の名と所を告げるに及ばなかつた。それに氣が附いた時は、もう遲かつた。小樓は蕭然として家に歸つた。歸れば家に殘した妻はゐない。流賊のために掠め去られた。

克承も鄉に歸つた。そこも流賊の厄にかかつて、姚東山もゐない。小姐又賊に拉し去られた。克承は賊が掠めた女を布袋に入れて賣る人市に行き、小姐を購はうとする。一布袋を買ふと、中から老嫗を得た。克承はわれに母なしとて遇するに母を以てする。この老嫗こそ尹小樓の妻、克承の實の母、しかも母と子はもとより知るところがない。

老嫗は克承の誠に感じ、賊營中に一佳人ある事を說いて、購うて妻とせよと勸める。それが曹小姐らしく聞える。克承は母の言に從つて袋をさぐつて購ひ來れば、果して小姐を得た。小姐は賊手に落つるや巴豆を身に塗つてその貞操を全うしたのである。

克承は父との約束を守つて、その所を尋ねて逢はず、路纏また盡きようとする。老嫗は夫の家に行かうとする、克承また送り屆けようとする。そこに三人は邂逅する。互に語りゆくほどに、實の親子である事も知れる。小姐の

父は今は流賊鎭壓のために兵部侍郎となつてゐる。勿論女を以て克承に配するだけでなく、家嗣たらしめんと欲する。即ち克承の後を追ひ來つて、小樓と共に克承を奪はうとする。しかも互に相和して、克承のために富貴を齎す事を努める。

雅望は克承を坂上梅丸とする。姚東山を橘安世とする。小娟を菌生とし、尹小樓を藤原季光とする。流賊李自成を袴垂とする。これを外にしてはその筋立は殆ど同一である。ただ彼土のならはしで、我にそぐはぬ者はうち切つてゐる。克承試に應じて及第するくだりの如きはそれである。時代を平安朝にとれるが爲に、それにふさはしき物を鹽梅する、梅丸をして田樂の藝に熟れしめた如きは、それである。全體の調子を害ふものは避けた、尹小樓が父として買ふ人を求めるが如きがそれである。かかる注意は一篇の「近江縣物語」をして些の漢臭なからしめた。

同じ行方は「天羽衣」に於ても見る事が出來る。讀む者は、謠曲「羽衣」に於ける傳說に加へるに「今昔物語」の舞茸の話を以てした趣向とするであらう。篇中の黑良といふ者は「羽衣」の白良に對して作り設けた者とのみ思ふ事であらう。さう思はせるほどに雅望の飜案は手に入つたものである。その原據は「醒世恒言」の「兩縣令競婚孤女」中の冒頭の一話である。雅望は話中の潘の華の美と蕭雅の醜を逆用して、白良黑良とし、原作になき神女の怪異を「羽衣」によつてつけ加へたのである。

雅望には他に支那小說の飜譯がある。「通俗醒世恒言」「通俗排悶錄」がそれである。また現在市井の見聞を古雅の文を以て行れるものがある。「都のてぶり」「吉原十二時」これである。また淨瑠璃「平假名盛衰記」の「梅が枝無間の段」を平安ぶりに譯したる「梅が枝物語」がある。これ等和と漢との二途の熟練が前述の三飜案をなし得た

のであつた。「笑府」「笑林廣記」中の笑話幾條を拔いて飜案して「しみのすみか物語」となすが如きは、彼にあつては易易たるものであつたらう。此の類は彼の弟子六有園にしても、なほ「白痴物語」を著はして、この後を繼ぐ事を得た。

一〇

支那の小説を飜案する、すでに文墨の戲である。わが中古の文體を以て書いしるす、亦戲に出づる。その二つのもの相重りて成れる以上の數著は、もとより世上に賣る事を期するものでなかつた。例の馬琴は「都の手ぶり」「吉原十二時」等の高評を傳へると共に「さればとて世に行はるるにあらず、畢竟樂屋の評判のみ、賣物にはなし難かり」といふてゐる。

さりとて賣物にする讀み本も、その文體の時代をわづかに若くするに過ぎない。平安に代へるに鎌倉さては室町を以てするだけである。態度に於ては所詮五十歩と百歩との差であらう。

もし江戸の讀み本の流行を考へるとならば、まづこれ等數著の成立を考ふるをさいさきとすべきであらう。それ等の中に支那稗史の學と、我古典の學が提携した跡を考ふべきであらう。斯くしてかの讀み本の多くが、馬琴の如きを外にしては、讀みもせぬ支那小説に據る眞似し、またよく辨へもせぬわが中古ぶみを引くに急しき理由を會得する事が出來よう。

讀み本は江戸小説に於て本格のものとして重視せられた。賣物としては到底中本黄表紙に及ばざるも、數段の高

さを以てとり扱はれた。これ江戸の社會の實狀おのづから然らしむるところ、今この重要なる問題に就いては姑くふれずしてやめる。（完）

（大正十五年十二月「學苑」）

膝栗毛の事ども

そのむかし、伊勢の俳人なにがしがぶらりと庵を出た、草履ばきの氣輕く花を尋ねた。咲きもおくれず、散りもはじめぬ櫻の盛りに、すつかり浮かれて、あの里、この里の花を慕ひ歩く。日は暮れても庵に歸らうともしない。つい京の花にあこがれて、そのままに京にも上つた。京の花を見めぐつたはては、須磨の櫻がなつかしくなる。早速そこに出かける。なほ、人の噂に、どこの櫻がよい、どの花が盛だと聞いては、矢も楯もたまらない。段々の西國筋の春を追つて、とゞのつまりは心にもない長崎までの長旅をしてしまつた。かういふ話が傳へられてゐる。眞僞のほどはさだかでない。

同じ筋合の話が、十返舍一九の上にも傳へられてゐる。一寸のそゞろ歩きといふ氣分で、彼は江戸の寓を出かけた。空には月が冴えてゐた。この月を高輪あたりで見たならばさぞと思つた時は、もう其方ざまに道を急いでゐた。案の定、そこの波間にきらめく月の姿はおもしろかつた。品川の月は、鮫洲の月は、それからそれへと其處の月の幻影が彼を誘惑する。魅せられたやうに、幻影を追うて歩く。歩き歩いて、疲勞をおぼえた時に、彼ははじめて自分にかへつた。江戸をずんと離れた東海道の宿驛を、早出の旅人とあとになり先になつて歩いてゐたのである。一

九は馬鹿馬鹿しくなつた、といつて、家に歸るのも馬鹿馬鹿しい、折角此處まで來たものだ、いつそ一思ひに上方へ行かうと、それなりきりに東海道を上つた。さて、歸宅の後、途中の見聞をしるしたのが、「東海道中膝栗毛」だとのことである。

いかにも、話としては面白い。しかし、この話は嘘らしい。その嘘は「膝栗毛」の主人公の彌次郎兵衛と喜多八の行動と、作者一九の行動を一つにしたことから出たらしい。そんな混淆の起るのも、つまりは「膝栗毛」の勢力の偉大なためであらう。

どうも、一九の性格は、彼みづからの作品、殊に「膝栗毛」によつて、世間に誤解されてゐた。今はさうでもなからうが、「膝栗毛」發行當時に於いては、實にひどかつた。あの割合に神經質な一九を極のんき者扱ひをし、日常の生活がどつちかといへば眞面目に近い一九を、いつもふざけて、彌次喜多を實地にやつてゐると考へられてゐた。いはゞ、民間に浸潤してゐる弘法大師の信仰が、有難い勿體ない僧侶の事蹟とさへいへば何でもかでも弘法様扱ひにするやうなものであつた。「膝栗毛」を滑稽本の隨一と崇める讀者の信仰が、一九をば滑稽の權化にたてまつつてしまつたのである。

一九の葬式の折、いよいよ茶毘に附する段になると、中に仕掛けた花火がドンと音なして、數道の星がひらめきわたつた、會衆は、この人は死んだ後まで、ふざけ散らしてゐる、と愈信をなしたといふ話は、極めて有名なことであるが、實は林家正藏の事實を一九と混同したものであつた。面白をかしく傳へられてゐる一九の生活を、眞實

といふたはしでゴシゴシやつたら、思つたより、殊によると人一倍むづかしい生眞面目の正體が露はれるであらう。ある金持が一人旅はいや、といつて、氣心の合はぬ路づれはなほいや、どうかなして、「膝栗毛」の作者と一緒に歩いて、かぎりなき飄逸の旅をして見たいとの大野心を懷いた。人橋を渡して、やうやう費用こつち持の約束で、その心願を果すことになつた。ところが、その人は、二三日で、一九に對して、約束の破棄を申し出した。その理由として、その人が語つたのはかうであつた。一九は一緒に歩いても、別に口をきくでもない、勿論洒落をいふのでもない、たゞたゞ途中で見聞きするものに觀察の視聽を凝めるだけである。宿につけば、一心に旅日記の筆を執つてゐる。あれでは豫想が裏切られるどころか、とても窮屈でたまらない、さうさう同伴を願ひ下げにしたといふのであつた。

この話は、他の事實と參照して信用が出來る。一九の人となりを知る上に於いて、かなり役立つものであらう。

一九の「膝栗毛」といふが、知られてゐるやうに、決して一口でない。東海道、金毘羅、宮島、木曾街道と外に未完の一口があつた。これ等を享和二年から書き出して、天保二年にまで至つたのである。その間二十餘年を經過してゐる。よくも讀者を繋ぎおほせたものである、一九の筆の魅力のおそろしさに驚かされる。しかし、一九にしても、そのはじめには、斯ういふ成功を期待してゐなかつた。それどころか、東海道中の初篇を出すまでには、並々ならぬ苦勞があつた。

一九は彌次喜多二人を主人公として、東海道を舞臺とする道化物の趣向を立て見たものゝ、筆は相應にこなし得

た と思ふものゝこれが果して、今の讀者の氣に入るか、どうか、さまでの自信がなかつた。相談を持ち込まれた板元にしても確とした見當がつかなかつた。當時に於いては、類のない趣向であつたからである。永い間の馴染であるよりは、むしろパトロンであつた板元蔦重から拒絶されて、やゝ悄氣かへつた時に、板元村田屋が、のるかそるかだと引請けることになつた。多分、一九が、板下も、さし繪も自分で書くので、出板費が大してかゝらないといふことが、事を運ばせたものらしい。何といつても、その頃の一九は、まだ文壇のほんの驅け出しといふところであつた。

今からいへば、「膝栗毛」の趣向は別に彼の獨創とは見られない。旅の二人を主人公として、洒落をいひ合つたり、狂歌を詠み合つたりして、氣散じな遊山氣分を發揮させる作物は、すでに江戸時代の初期から存在してゐた。「竹齋物語」とか「新竹齋」とか「東海道名所記」などの大立物があつた。一九の趣向は、この系統をうけてゐるいな、それを師範にした痕跡もありありと見られる。尤も、これ等の著者は、狂言のシテアドの問答を先蹤したのであらう。一九みづからも其處にまで遡つて、狂言の幾つかをそつくりそのまゝ「膝栗毛」の中に翻案してゐる。狂言と「膝栗毛」の相違はしばらく措いて、「竹齋物語」などと、「膝栗毛」の相違を考へると、第一の條件として、それ等を文章體の中に少しく會話體を加味したのに過ぎないのに、これは會話が主體となつてゐる。そこに一九の新案があつた筈である。

けれど、また一方から見ると、さういふたぐひの文體の書は、その頃すでに立派な一類を成してゐた。洒落本が

それである。洒落本と「膝栗毛」とは、何といふ違ひであらう。これは道中の滑稽沙汰、あれは遊里の通三昧、今、一九はその通書の型を假りて、全然うつてかはつた內容を盛らうとした。新しさはたしかにある。しかし、この新しさが果して人々に迎へられるか、どうか、そこに一九の不安があつた。

尤も、嚴密な意味からいへば、この一九の新案も實は創案とはいふことは出來ない。何故かといふに、洒落本の中に、いづれは江戸の遊里と舞臺を限定してゐる中に、いつの頃からか、そろ〳〵と變態な作品が現はれてゐた。田舍の遊里が舞臺となり、田舍言葉が滑稽の對象となる作品も二三ではなかつた。たゞ、何處までも、これ等は別格扱ひされてゐた。その別格物、變態物を洒落本の世界から解放して、別箇の世界に、滑稽を發揮させよう、別格、變態を却て正統とする境地をそこに拓かう、これが一九の野心であつた。すべてが、その頃の旅行の流行に當て込んだ、また洒落本の行詰りを考へた結果である。新しいといふよりは、むしろ賢いと評すべき一九の企圖であつた。

品川から箱根までの初編が享和二年に世に出ると、相應な好評が湧いた。けれど、また東海道全部を續刊し得るまでの見込みは立たなかつた。翌三年に後編、その翌年文化元年に三編、翌二年に四編とつゞけるにつけて、讀者の好評が京大阪にまで附いて來る確信を得た。もう先を急ぐこともなく、緩々と彌次喜多二人にのんきな旅をさせるやうにした。文化六年の八編に二人の大阪見物を書くことによつて「東海道中膝栗毛」は完備したのである。板元の喜びはいふまでもない、作者一九は一躍して、滑稽本の雄となつたのである。その頃には幾多の模倣の作が世に出はじめた。「膝栗毛」物の大流行となつたのである。一九は、それ等を別に咎め立てはしなかつた。どれも立派な

結構な作を持ち上げて、結句、自分の作の廣告になつてくれるから有難いと宏量を見せてゐる。人柄の問題でなくつて、その時の得意の程度が問題であらう。

さうなると、板元は勿論續稿を頼む、彌次喜多贔屓は、二人がこれから何處へ行くのか、いつ江戸へ歸つて來るかを氣に病む。もとより作者の筆に油がのつてゐる。矢つぎばやに、「金比羅詣膝栗毛」を出し、「宮島參詣膝栗毛」を出した。さてこの二年の間において、いよいよ「木曾街道膝栗毛」にとりかゝつた。文化九年のことである。それから毎年一編づゝ續刊して、文政の五年に至つた。十二編で完備をとげたのである。そこで彌次喜多二人は無事に江戸に歸着した譯である。享和二年の旅立から、丁度二十一年目、思へば隨分の長旅であつた。いや、それよりも、讀者だちがよくも二人をその永い間飽くことなしに、旅させたものであつた。一九の筆の力もあらう。それと共に時代の悠長さ加減が、今とあまりに違ひすぎることに驚かされる。

「木曾街道」完備の頃は、もう村田屋でなかつた。時の板元英盛堂はいさゝか顧客の好意に酬いようとした。國貞筆の美人畫を十二編の景物とした。口上書を添へてあつた。それは次の如くであつた。

○栗毛初編出版せしより、當年迄二十一年めにて全く備尾し、めでたく東都歸着となりぬ、長旅の滑稽御退屈もかへり見ず、下手の長談義も、既に趣向の路費盡果、御土產も何をがなと其工夫さへむつかしく、京の島原浪花の新町、伊勢の古市、讃岐の金比羅、尾張宮のうつくしき妓の生うつしを、五渡亭ぬしの筆にまかせ、諸先生の狂詠を加へて、彌次喜多八が心ばかりの呈上

江戸の小說の歷史のおもてで、多分その以前を籠めて、このぐらゐ讀者の興味を引づりつゞけたものはなかつたらう。讀者は、一編二冊の小本を來る春毎に待ち構へてゐた。彼等にとつては、彌次喜多は一九の腹から生れた雙つ子ではなかつた、自分等を同じく、一九と同じくこの日の下に息づいてゐる實在の人物としか思はなかつた。さうなると、「竹齋物語」やら、狂言やらの二人うけ答への型などは、もとより考へようともしない。そんな生立よりも、この世の中の何處で生れて、どんな風に育つたか、旅だつ以前の生活ぶりがどうあつたかゞ氣になつて堪らなかつた。その氣がゝりは、「膝栗毛」熱が段々と嵩じ出した「木曾街道」の中程、文政十年頃に於いて、殊に甚しかつたらう。前にも、そんな計畫はあつたやうであるが、いよいよ十一年には、「東海道中膝栗毛發端」を出板して、讀者の要求に應じた。これ等の讀者の要求は、一々投書の格で、版元やら作者の手元へ持ち込まれてゐたらしい。二人の費用はどうしたの、二人がまだ髮結店に行かないのはどういふ譯だのとの質問も隨分あつたやうである。作者はそれ等を利用し得るだけ利用して、趣向に持ち込んだ。質問また要求の讀者は、作者を動かし得たことですつかり得意になる。彌次喜多贔屓は更に作者贔屓、一九贔屓として、いやましに熱を加へることであつた。とにかくに、一九はいろいろに苦心して、彼の成功を遂げたのである。

「木曾街道」ももとより作者が力を盡した作であるが、どうも「東海道」のよりは評判が惡い。おそらく、前に東海道物がなかつたから、斯うでもあるまい、といふ譯は、前のものと類想同案のものが多いからである。成程、土

地は違ふ、舞臺はかはる、けれど役者に變りはない、道化のしぐさに違ひはない、從つて、さういふ結果に陷らねばならなかつたらう。「木曾街道」を書く折の作者の苦心も察せられるが、また「木曾街道」はかなり損な立場にもあつた。

尤も、「木曾街道」の强みは少くとも江戸の人々が東海道ほどに熟してゐないことである。そこに、目新しさはあらう。また、東海道よりも幾分開けてゐないところが、作者の滑稽を持ち込みよい點もあつたらう。異樣な風俗を寫し出さうとしたり、案內記筆めかすをとることの多いのも、これが爲であつたらう。それだけに、作者は、絕えず實地踏査によることを讀者に斷る。それが相應な魅力になる。この事は「東海道」ではさまで見られないものであつた。更にまた、作者は、自分の實地踏査の間に出會つた事件を、一々斷りながら趣向を立てた。それが、讀者の信用を贏ち得ることになつたのである。作中の彌次喜多を一九とは讀者に於いては同一者になつてしまふからである。たとへば七編の例言で

太田原の驛より道づれになりたる人は、丁字屋何某といへるにてありしが、宿につきてみづからの下帶をあらはんとて、下女に湯をはこばせ、叮嚀に洗ひそゝぎてほしたるを見れば、その人の下帶にはあらずして、予が褌なり、これはと一座手をうつて笑ひたるが、これにておもひよりたる趣向あれどもこと繁多なれば次の八編にもあらはすべし

といふのを讀んで、八編を讀むとする、もう彌次喜多の面影は見えないで、丁字屋と一九の姿のみが眼前にあらう。さういふことが、つひに一九をして彌次喜多式の人物に見立てさせたのであらう。その事はまた一九のみづか

ら好んで求めてゐたことでもあらう。それを愛嬌として、「膝栗毛」の引立を願ふ腹は、はつきりと作中に讀むことが出來る。

（昭和四年九月「歌舞伎」）

「助六」の成立とその變形

一

安永六年の頃、中車の吉原通ひの噂がちらほらと聞えた。この中車は蓬萊屋中車の八百藏、する事當らぬはなき中にも助六を演じての大當には、江戸の婦女からあが佛と拜まれ、彼が入つた舞臺の天水桶の水は德利に汲まれ、藥代りに飮まれたといふ人氣役者である。それが四十三歳の若さを惜まれながら死んだあとにはまた一しきり中車幽靈の吉原通ひの噂さが高かつた。洒落本「十八大通百手枕」はその事實として斯うしるして居る。

調布の桝形山麓の鄕士山口の屬家に十藏といふ天性大通の美少年がある、その風俗が俠者に類するとて異名を助六と呼ばれた。父の勘氣に逢つて江戸を出で、難波町の叔父のもとに寄寓した。ある時ひど工面をして吉原へ出かけて花狄にあつた。男振が中車そつくりなので八百藏が來たと二階中が囁きかはす、花狄もさうと思つてあひしらふ。十藏も勘違ひされた事を知つたものゝ、何分にも懷寒い折柄とて、それをよい事にして八百藏氣取でゆく。役者であれば女郎も忍び逢ふ事であるから、物日の、妓者の新造揚のと晴がましい事がなくて濟むとの胸算用からである。さうかうして居る中に十藏は花狄に實を語つた。花狄は事情を合點したけれど、なほ八百藏めかして通はせ

る。するとほんの中車が死ぬ、けれど十藏は通ふ。中車幽靈吉原通ひの噂の種はこれである。十藏は毎夜叔父の寢つくのをうかがつて忍び出る事とて、吉原へ行きつく時はいつもひけ過ぎか八ッ時分、朝は朝とて叔父の目ざめぬ程に歸らねばならぬので夜深に出かける、それも噂を産む一つであつた。

「大通秘密論」は「なんと八百藏でなしとも八百藏の氣で心やすく」といふ十藏と「さういひなんすがほんの事なら、たとへお前が中車でも中車でないにしてあひいしやう」と遊女との互の達引のいきさつをやゝ精細にうつし出す。但、こゝの遊女は花狄でなくして揚卷である。「大通秘密論」には二人の助六が見える。一人は中車をする助六實は十藏である。他の一人は今助六である。作者は今助六に就いて斯う説明する。近來今助六といふ俠者あり、この本名は言ひ難し、歲は廿五六ばかり、げに生れつき類なく、心も形も雅にして、ちつとも卑しき事のなき氣象由々しき俊傑なるが暫くかみに上り居て漸々去年下りしゆゑ、未知人まれなれど自然と目花風俗云々と。

この今助六は十藏が八百藏に似て居るとておのが助六の名を冐す事を聞いて心やゝ平ならぬ折柄、手の者五郎が喧嘩して負けたので堪へかねて十藏を切り殺す。助六は群集にとり圍まれたのを、遊女菅原が助ける。さうして二人は深い中となる。揚卷は髭の久左といふ侍の助力を得て十藏のために仇討をしようとする。

揚卷が助六の爲に仇を討つの一事は古く傳へられて居た、これはその復活であらうか。作者はその序に於ていふ、往昔播州高砂に揚卷助六といふ者あり、此揚卷は姓にして傾城の名にあらず。今戲場にする助六は彼高砂の助六が其名をかりて藏前の曉烏が以久と買論せし遊女總角が事を造ると。この「助六」の由來はもとより從ふ事が出來ない。作者はそれよりも「總角と菅原が事に寄せ、今助六が説を述べて、俠者の氣象に遊女の情をあらはす」を本意

とする。

こゝに斯くいふのは、洒落本にもなほ「助六」に取材するものゝある事を說かうとするためである。更にその中の一節を籍りて「助六」に言及せんとするためである。

さきに「大通秘密論」の作者は今助六を自然と目花風俗と說明した。その目花風俗とは今も狂言「助六」に於て見る舞臺姿である。作者はこの姿に就いて、助六と手のもの五郎との間に問答をさせる。

五郎「おまへは又羽織を着ねいで。助六「今脫いで來た。五「見とうもねい。助「おらア羽織はびらしやらしく嫌ひだ。五「お前の下駄で步かしやるを人柄にも似合はねいと誰か云やした。助「人柄のなんのと嫌らしい事をいやるな、下駄で步くと先踏みこんでもよし、手前達も夜は下駄にしや、犬が吠えねえでいゝぞえ。

作者こゝに割註して是助六が下駄のいはれといふ。

五郎もいつか助六の意見に贊同して、當時の通人共を罵倒する。

五「惣體此頃は本田に結て長い羽織さへ着れば雅だと思つて似た山の大ぞうめ等が八幡黑とやらの草履などで無情にはだかつて步くを見ると虫唾が來る。助「面白くねい。

この洒落本は安永七年の板である。即ち助六五郎に罵らるゝ通客等は安永の人々である。然らば安永度の通客がよろこぶ風俗とはいかなるものであつたらう。こゝにまた「十八大通百手枕」を繙かねばならぬ。

「百手枕」は親から勘當をうけた男が、傾城買指南所の看板をかけて通の服裝やら、所謂やら手管やらの傳授をするの意匠のもとに當時の通客の服裝と心理とを叙述する。

指南所の主は年の頃三十程の侍に對しては斯ういふ注文をつける。額は恰好よくかづかせて三分程抜あげ、中剃も大く、其大髻油べつたりと刷毛先細く出ず入らずの本田くづし、水髪にさつと結はせ、月代は剃立を避けさせる。羽織は丈をずつと長くさせて紐の好みもやかましくする。小袖も無垢の類、郡内縞を斷然斥ける。紋輪も細輪にして小うさせる。

また十八九の息子には斯ういふ注文をつける。上着は黑と指定する。それは常着には雅な縞や小紋などがよいがどうも黑程には人が見えぬからである。下着は白綸交の黑で八丈、中著は新形の小紋の類、羽織は黑か、黑鳶か、また羽二重のいきな小紋と傳授する。

黑仕合、それはまだ助六の服裝との間にいさゝか通ふふしもある、しかし、全體としては感じて似ても似つかぬものがある。この相違はつまるところ安永と寛延との年代の距離から來る。助六も寛延の通客の隨一者であつた。して見れば「大通秘密論」は、偶、中車幽靈吉原通の巷話によつて筋を立てゝ、安永の觀客の眼に映じた寛延の助六の服裝を、しばらく逆にとつて助六をして安永の通客を批評せしめたのである。助六の服裝は舞臺の上の約束としてはともあれ、安永の實際の世界にその人が歩いて居たら餘程のをかしさがあらう。京傳は天明度の黄表紙に於て助六の服裝を「花川戸に皆様御存じの助六なる色男、そのなりは太神樂てふ者の夕立にあひし如く」とも評して居る。

二

助六の打扮は寛延二年に至つて治定したといはれる。黒羽二重の小袖、紅裏をつけ、杏葉牡丹、友染の五所紋、下に淺黄無垢の一つ前、綾織の帶、パッパ鮫鞘、一つ印籠、尺八をさし、紫縮緬の鉢卷を左に結び、蛇の目の傘をさし、桐柾のくり抜の下駄を穿く。これが今日の舞臺に於ても見られるものである。しかし、それまでに二度の變化があつた。

初度の正德三年の舞臺には黑紬へ三升と牡丹の模樣の臺附のふせ縫、幅廣の帶に樺色木綿の鉢卷、紺足袋をはき、長刀の一本指であつたといふ。二度目の享保元年の舞臺には黑小袖に小さ刀、黑絹の鉢卷であつたといふ。

この服裝の三變は內は脚本の變化に應じ、外は世相の推移に伴ふ、さうして皆二代目團十郎の方寸から出でた。

初度の「助六」は知られて居る通り、山村座の「花館愛護櫻」の二番目。大道寺田畑之助後に花川戶の助六が主役である。

白酒賣が仕出しの男達に白酒を賣つて居るところへ、兩肌をぬぎ尺八を振り揚げた助六が中役者の男達を追ひかけて、喧嘩喧嘩と聲を立てながら花道から舞臺へかゝる。上手から髭の意久が二人の男達をつれて出て來て、助六と睨み合うての長せりふ、そこへ暖簾の內から傾城揚卷と喜世川が出て制める。白酒賣新兵衛實は荒木左衛門に見露されて意久が屋根に上る。助六と新兵衛とが跡追ひかけて同じく屋根に上る。下には揚卷と喜世川とがはらはらしながら見上げる。屋根仕合がしばらく續く。助六はつひに意久を討ちとる。

正德三年の「助六」に就いてたしかに知り得る事はこの位であらう。それにまた「近世奇跡考」に載せてある一枚の近藤淸春の舞臺繪を參照する事が出來る。京傳に從へば、その當時の繪本をすきうつしにしたものだといふ。

これによれば、助六、また意久の打扮がさきの記載の文で考へるより一段と豪放である事を知る。圖は三浦屋の店先、「男立助六」がぞめきの者の胸倉をとりながら拳をふりあげて打たうとする。「ぞめきの物めいわく」と説明の文字が加へられてある。これに對して「ひげのいきう」「かんぺら門兵衛」が助六目がけて飛びかゝらうとする。三人の間に靜に「あげまき」と「けいせいきせ川」が立つて居る。他には見物の者二人、また「酒うり新兵衛」が居る。「かんぺら門兵衛」がはじめは「かんぺら門兵衛」であつた事はすでに知られて居る。

「男立助六」の打扮では、まづ非常に長い刀のまた大い三升の鍔が目を惹く、着附の裾の三升の模樣の大いのに驚かされる。紋所は助六が肌脫ぎになつて居るので明瞭でないが、もしそれが牡丹であるとすれば、隨分思ひきつた大さであらう。鉢卷はいふところの樺色木綿であらう。いかにもそれにふさはしく結びきりの捻鉢卷と見られる。それにしても助六の上半の裸形姿の天晴な、その節瘤だつた腕、便々たる腹、これが二代目團十郎その人を寫生したものであるか、畫工の誇張であるか、それはどちらにしても、助六の舞臺上のすべての動作の荒々しさが暗示せられる。

意久の打扮には太い羽織の紐や、着附の模樣となつて居る大い荒い紋所が目に立つ。描かれた髭の虎髭のやうなのが撫附の總髮、太い眉、怒つた眼と共に今見る意久より數段の强さをおもはせられる、この助六とこの意久との屋根仕合はいかに激しいものであるかは、まづこの一葉の繪の上からも想像せられる。

屋根の仕合は大門口の喧嘩の折の夢の市兵衛の面影をうつしたものともいはれる。さういはせる一つは市兵衛の鉢卷姿である、この者はいつも紫の鉢卷をして居た爲だといふ。それならば何故團十郎は屋上に市兵衛を模しなが

ら、その紫縮緬を樺色木綿に代へたのであらうか。

正德にはもう初代團十郎が親しくして居たやうな大男立は居なかつたらう、しかし、江戸市中を濶歩横行し、吉原で「ぞめきの物迷惑」の行動をする者が少くなかつたらう。淸春の繪に描かれた喜世川、あげ卷の姿はそのまゝに當時の遊女の風俗としてうけとられる。その寫實氣味は舞臺の氣分の統一の上から考へると、當然助六意久の服裝の上にも及んで居る筈である。よし今日から見て舞臺上の誇張といひたい服裝も、當時としてはさまでゞなかつたらう。まして俠者の服裝そのものが地體芝居がゝつて居る。舞臺の上と、外との距離はさうまでもなかつたらう。けれどそれ等はさまでの穿鑿をせずともよからう。「助六」にはあまりに多く誰々の面影がいひ傳へられて、そのいづれに從ふべきかに迷はされる。市兵衛がどうであらうと、大捌助八がどうであらうと、花川戸の助六がつまらぬ男であらうが、それもこれもをよいとして置いて、廣く男立の面影と見る方がよい樣に思はれる。

屋根仕合の趣向は三人をして激しい立廻をさせ、珍しいたてをさせるためであつたらう。勿論おもひきつた演出、誇張せられた動作があつたらう。「助六」の中に籠られた荒事はこゝに至つてその實を現はした事であらう。二代目團十郎は荒事と和事とをかね、「助六」はその二つを調和した代表のものといはれて居る。しかし、「助六」は三變する。その三變は荒事と和事の相互關係に於てなされたらう。荒事の程度が漸く減じて、和事の分子が段々と加はる、そこに「助六」の成長があつたらう。して見ると、正德の「助六」は最も多く荒事を有する譯である。その荒事は屋根仕合に於て發揮せられたと相像せられる。

その荒事を以て、初代團十郎が演ずるところの荒事と比較すれば大なる相違があつたらう。正德三年、二代目の

「暫」の服裝は角鬘に力紙柿色の素袍、大太刀、筋隈であつたといふ、之れを元祿十年の初代の服裝、野郎頭に鎌髭の赤顏、小具足、小手、脛當、素足、大太刀に三升の角鍔、大童、苧繩の鉢卷、顏も手も紅塗と比較するとどうであらう。その服裝の相違はおのづから演出の相違を暗示する。荒事の程度が考へられる。

「助六」ははじめから荒事を目標として成されたものでなかつた、從つてその荒事を以て初代所演の荒事とひとしなみにしていふべきでない。ただ想像されるその荒事も、後の「助六」と比較すると驚くべきものがある。その屋根仕合は後の「助六」では助六が屋根に立てかけてある梯子を半ば上る科にその面影をとゞめて居る。何といふ相違であらう。

その相違はすべて時代の好尙に伴つて起る、屋根仕合は其事を讃美してやまぬ當時の江戸市井の要求に應ずる。二代目團十郎は呼ばれぬうちに答へるだけの用意を不斷に有つ。その用意はおのが創案の「助六」をして三度變化させたのである。

三

二度目の「助六」は中村座の春狂言「式例和曾我」の二番目であつた。あげまきの助六實は五郎時宗として今日見る如き曾我狂言と組み合はされて居る。

享保元年は正德六年改元である、初度の「助六」からわづかに三年を隔てたゞけである。それでも樺色木綿の鉢卷は黑絹となり、三升鍔の長刀は小さ刀となり、黑紬は黑小袖となつた。尺八を片手に持つての出とのみ傳へられ

た、兩肌ぬきとはいはれない、また屋根仕合もいはれてない。そこに舞臺の變化が想像せられ、從つて和事の分子が加へらるゝ事が推察せられる。

三度目の寛延二年の「助六」は二度目から三十四年を隔つ、この永い年月の間江戸の世相には甚しい變化がある。江戸の好尙と並行して進む「助六」は當然舊態を改めねばならなかつた。その變更はすべて當時の流行を參酌する。羽二重の小袖、淺黄無垢の一つまへ、また一つ印籠、紫縮緬の鉢卷、それにパツパ鮫鞘は從來の助六に見る事なくして、爾後の助六に離れ難き服裝である。京傳は「近世奇跡考」に「江戸鹿子」を引いて助六の打扮、パツパの鮫鞘、一つ印籠皆其頃の流行の爲なりといひ、明曆寛文の頃の歌舞伎狂言の古圖を見るに、若衆形の惣踊などに、すべて紫の鉢卷をす。江戸鹿子に云、むかしは美童に綾羅を身にまとはせ、紫のきれを鉢卷にしていろいろの藝をなす云々、助六が鉢卷も其遺風なるべしといつて居る。

二代目團十郎は美童の紫鉢卷を俠者の黑絹に代へて、その剛柔矛盾の間にある種の味を現さうとする。その工夫は當時の流行の黑羽二重の小袖をそのまゝに用ゐながら、舞臺の上には紅裏をつけた。黑に對する紅、そこから却つて一種の强みが出る事を狙つたのであらう。

「紙屑籠」は團十郎の工夫に就いて斯ういうて居る。

二代目團十郎柏筵、男達のやつしにも下に紅絹のむくを着る事、男達の襦袢はもみのえりなし故に荒事師のもみむくより出たるものか、立派にして强みあるを好むといふ

寛延の「助六」は前二度のものに比すれば和事の分子の愈增加して、荒事はその痕跡をのみとゞむるものゝ多い

事が注意せられる。黑小袖の紅裏の如きもその一つとして數へてよからう。

友染の五所紋、これもかつて見ざるものであるがその欲する舞臺上の效果は紫の鉢卷と同樣であらう。「助六」の興味はすべて斯る剛壯と優美とが錯綜するところにあつたらう。柏筵の藝風はそれを巧みに調和せしめると共に、柏筵が所演の對象として居た當時の觀客の生活も亦何等かの形式に於て、元祿剛壯の面影を殘しながらその粗野をさめ、化政度の纖細をとり入れながら、その頽廢を知らなかつたのであらう。三度目の「助六」が大當を得たのも偶然でない。

往々にして寛延の助六大口屋曉雨うつしであるといはれる。「大道秘密論」の序の事は已にいうた。また三升屋二三治劇場書留は精しくこれを傳へる。

江戸狂言へ書入れし明和安永の頃に御藏前札差大口屋治兵衛曉雨といふ、之を助六に見立たるゆゑ、其頃の穢多久米八といふあり、よし原に通ふを意休とするなり

助六の打扮もまた曉雨等によつて代表せられた藏前者、または小田原町者の風俗のうつしであるといはれる。同じ劇場書留に斯う見える。

助六の拵は男達に仕立たる事故、其頃の流行は藏前小田原町しんば神田杯何某といふ人、さめざやの脇差黑羽二重の小袖にて着流し下駄はいて吉原へ通ふ事、此見立によつていでたつなり。

助六が曉雨を粉本にしたとは考へる事が出來ない。初度の助六をそのまゝに時代の露霜に晒すと當然、寛延の助六となるからである。もし一の曉雨、二の曉雨、三の曉雨、この曉雨、かの曉雨、さらに當時の通人原を一つに合

はせていふのならばさもあらう。なほ助六の打扮が一人を粉本にしたのでなくして、一代の流行に據るが如しというてよからう。一つ印籠は京傳もいふ如く當時の流行であつた、更にまた一つ前もまた同じ流行姿である。ともすれば舞臺外に多くの助六のあるを忘れて、舞臺の助六を大く見る。一般が所有する「一つ印籠一つ前」をも舞臺の助六にのみ與へようとするわたくし心が起る。「助六」の蠱惑の力も亦偉大である。

兎に角、「助六」は和事の度を加へながら變化する。たゞ打扮に於ては落ちつくところに落ちついて、大方動く事がない、これがさきに「大道秘密論」の五郎助六の言葉がある所以、また後の京傳の評言のある所以である。

しかし演出に於てはゆるされた範圍に於て種々の變更があつたらう。それが皆和事をめざして進行する。こゝにわづかに一例を擧げる。三度目の「助六」が中村座の「男文字曾我物語」の二番目として演ぜられた後、十三年、寶暦十一年に市村座の春狂言「江戸紫根元曾我」の二番目の「助六」が龜藏の助六、菊之丞の揚卷で演ぜられた。出端の河東節は「助六所縁の江戸櫻」である。作者は金井三笑、櫻田治助の合作である。「春霞立てるは」の詞章はすでに知られて居る通りである。それを今更らしくいはうとせぬ。いはんとするはその間々に挿まれたせりふに就いてである。

「雨の簑輪の冴えかへる」のあとに助六と遊女達の會話がとりかはされる。

誓文誓文、淺茅がはらがたつわえ、女郎衆のまことに煙草の始末はないものと知りながらからならふはしばかか、わしらが樣な若い者の心はお前方にのぼせられて、上をした谷にかへすによつて、これでは戀がかな杉のくたれをつてくれてもない。口惜しいわえ、口惜しいわえ。頭の上へ雷門がおちかゝつてもびつくりともする男じ

やアなけれど、女郎衆にはかたれぬ、くら前から牛をひき出す様にべらべらとしやへらせんすによつてお前方にかまけては節句前も困つたとこそいへ、こまかたとこそいへ、わしが心が竹町ならば、二つに分つてお目にかけたいわい。あゝ氣の毒の山の宿じやなア。「何と、しやうでん町かえ。「笑止、助六さんは何故鉢卷じやえ。「助六の鉢卷がお前方のお目にとまつたかへ。「あいナア。

これが「此の鉢卷は」につゞく。「松の刷毛先透き額。」そのあとに斯ういふせりふがいはれる。

さあ、助六さん、早うござんせ、誰やらが待ちかねてゞあらうぞえ。「何なア、おらづれかひよつとお邪魔になれば惡うごんす。「またすねた事をいはずとお顏見せてやらんせいな。「何をおつしやるやら、わし等は隨分見つからぬ樣に顏を包みまするは、「そりや何でえ。「風呂敷で。――「堤八町風誘ふ

かゝる和事師らしい助六は正德のそれに享保のそれに見出されたであらうか。さてこれを上方の「助六心中」の發展のあとゝ比べあはすればどうであらう。

四

二代目團十郎をして「助六」を創案せしめたのは一中の「助六心中」を聞いた爲であるといはれる。一中は正德二年江戸に下り、招かれて得意の一曲を語つたのである。偶吉原に名妓三浦屋揚卷があり、また花川戸には俠客助六が居た、すなはちあれとこれとを一つにして一篇の狂言を作爲したといはれる。

或は團十郎が寬保元年大阪に上つた時、助六心中の狂言を見て歸つて、その趣向を「助六」のうちにうつしたと

もいはれる。但、「柏筵一代記」にありといふ記事、正徳三年山村座の助六興行についていふ一節、
是は津打半右衛門が作る狂言也、此以前京都に萬屋助六傾城総角二代紙子と云ふ淨瑠璃あり、正徳の頃三浦屋総角名妓のきこえ高かりしゆゑに、かの淨瑠璃に基きて作れるなり、狂言中に紙子のことあるは二代紙子といふをほのめかす也

これには少しく訂正すべき事がある。「二代紙子」は享保二十年の作であるから、正徳の作にその面影をほのめかす事は出來よう筈はない。しかし、今の「助六」の紙子はその前齣を截斷して見るだけに何の意あるかを知るに苦しまされる。もしそれに用ありとすれば意休との喧嘩の相に一變化を見せるだけであらう。誰が「二代紙子」を聯想するものがあらう。おもふに寛延の昔にしても、「助六」の一齣だけで誰が助六揚卷の心中を聯想するであらう。よし、江戸にも上方の心中狂言が迎へられて相應の喝采を博し、柏筵また半七、徳兵衛、治兵衛なんどを演じて當りをとつたにせよ、一々彼の心中物とおもひ合はせて悦ぶ者があつたらうか。たとへば一中の「助六心中」が流行して居た當時でも、人々は柏筵がそれにすがつてゆくところを悦ぶより、それから離れてゆく點をよしと見たらう。正徳の「助六」が「助六心中」の上に立つたにしても、それはたゞその名をかり、形をかりただけで內容を全く異にする換骨脱胎の妙が稱讃せられたであらう。

さうして之れが二度三度和事へと向ひながらなほもとの心中物に近づく事なしに、全くあらぬ方に遠ざかつて行く事を注意すべきであらう。斯くして到達したものを、上方に於て、「助六心中」から序を追つて發展した淨瑠璃物、「千日寺心中」「萬屋助六二代紙子」「紙子仕立兩面鏡」の到達したものと比較したらどうであらう。直に「助

六」が江戸の地に於て現はれねばならぬ因縁の深い事が認められるであらう。

「二代紙子」をほのめかすといふ紙子のくだりを今の舞臺に見ると、動もすれば近松の作「壽門松」を想ひ起させる。但、華やかな廓の中に影さびしい老婆を點出するの一事、その老婆が時めく名妓に逢はうとて辷り來るの情景が相似て居るといふに過ぎない。これはあまりに緣薄き聯想であらう。しかし、しばらく聯想の動くに任せて思ひのほどのゆくがまゝにする。

新町に太夫吾妻を尋ねるのは難波屋與平の母である、與平は吾妻を見そめて戀病みに煩ふ、母の慈悲はそれを見るに忍びずして、吾妻に逢うてせめて一度は悴にあつてやつて下されと頼まうために廓に來た。吾妻はその母の情にひかれてその願ひをきゝ屆ける。

助六の母は、助六の廓での喧嘩を氣づかうて、揚卷に頼んで寄せてくれるなと頼みにゆく。しかし、結局は揚卷の誠に感じて今まで通り逢うてやる樣にと話し合ふ。

この二つのものはどうやら相似て居るとはいへ、その間にもとより直接の關係のあらう筈はない。

「壽門松」の吾妻が難與平の惱みを聞いてあはれがつて逢ひ見るの一事は、またはしなくも「好色一代男」の吉野が鍛冶屋の小僧が吉野戀しさのあまりに、五十三本の小刀作つて五三の價を貯へた者をいとしがつて首尾してやつたくだりを聯想させる。「一代男」の記事はまさしく事實として存在する。後の灰屋紹益の妻、二代目德子吉野の出來事で、種々の記錄に於てこの事實のあつたことが證せられる。しかも近松が難與平なる架空の人物またその母を作爲するは、有名なこの事件に基くといはれる。こゝに太夫の情深さを主として傳へんとする西鶴と、人情を纒綿

せんとする近松との相違を考へさせられる。

さうして「助六」の母満江は子ゆゑの情によつて見も知らぬ廓にまでたづね來る母であると共にまた粹をきかす母でもある。その母のさらさらと運ばれるところに「助六」といふものがあらう。

助六の母は編笠姿して歸り行く、それをめがけて喧嘩をしかけ母と知つて恐縮するくだりは、「萬屋助六二代紙子」の一節と同じ手法である。萬屋助六は酒色に耽るのら息子である、父の助右衛門は助六が預りの皷と笛とを盜み出したを氣づかうて、行方を尋ねて來る。編笠かづき風呂敷さげた父を助六は醉うたまぎれに例の惡友と見違うて胸ぐらとつての毒口たらたら、さて顏うちながめて恐縮する場合と大方ならず似て居る。しかし、助右衛門が風呂敷の中から破れ紙子取り出して助六に着せる段になると、滿江が助六に紙子着せるのと事の趣は似て居りながら、作の心はもとより違つて居る事であらう。助右衛門が助六に着せる紙子は、その昔貧しうて駕籠まで舁いて居た頃のものである。それを懲しめのために着せて勘當する。さてさきに盜み出して質に入れた二色の預物を取戻せよと嚴命する。

助六が友切丸ならぬ二品を取戻すための苦心の働きはこゝにはじまる。それには女房やら、揚卷やらの苦衷が伴ふ。くさぐさの義理と人情との幾筋を縺れさせる。最後に助六と揚卷は心中しようとしたが、惡漢が捕はれたためにわづかに免る事を得る。

「紙子仕立兩面鑑」に至つては、この趣向を追うて更に一段の複雜を加へる。これを一中の「助六心中」の單純なる趣向に比べれば、驚くべき相違である。

その「助六心中」にやゝ複雜の筋を與へ、更に人情の深きを加へれば近松の「夕霧阿波鳴戸」とならう。要するに皆義理と人情とを叙して精細ならんを欲する。

「助六」には、よしんばこれ等上方の作をおもひ出さするはづれはづれがありとするものゝ、どこにさまでの義理があらう、人情があらう。一木なほ江の南北にあるによつてその質を異にする。助六その名は一つであるが江戸と上方に於てその質を異にする。即ち江戸の「助六」はその人情義理から解放された境域の反映として價値を認められる。そこには俠があり、通がある。さてもその俠また通とは何の謂であるか。

（大正十五年七月「歌舞伎研究」）

五

「十八大通百手枕」の傾城買指南所の主人は通人の資格として、服裝をはじめ數々の條件を數へる。座敷の坐り所も上らぬやう、下らぬ樣にする事、傾城との盃事の間も色氣どらず、といつてあまり忠附などいうて幇間めかぬ樣にする事、また床の段に於ける諸作法、諸技巧を擧げ、更に詩歌連俳琴碁書畫にも通ずべき事などをいひ立てる。もしこれ等を以て助六の上に擬したならば、彼は到底通人の名を擅にする事は出來なからう。しかし、安永の通人と寛延の通人とは義おのづから異なるものがある。なほ寛延の通人のうつしなる助六の服裝が安永の通人の眼には異樣に映るが如きものであらう。

十八大通の名目の世の人口に熟したのは安永天明頃であらう。富豪の嫖客にして遊里の事情に通曉したる者、も

とよりとくに傾城買指南所の業を卒へたる十八人、その人は年と共に離合すれど、名目はつひに變る事なくして、はるか後の世に及ぶ。更にこれを安永以前にも溯つて數へる。明和三年には亡き人の數に入れる曉雨の大口屋治兵衞の如きもその中の最聞えたる一人であつた。

天明度に於ける十八大通の遊興ぶりには人の意外に出づるものがある。世の常軌を履む者はその稚氣を笑ひ、後のとりすました通を目當にする者はその變風に驚く。その極つひに馬鹿を以て稱するに至る。まして若き日の曉雨の行動には往々馬鹿の骨頂と見るべきものがあつた。「御藏前馬鹿物語」に左の一話がある。

曉翁伊達を好み、吉原通ひに助六姿に出立ち一腰をさし、毎夜廓へ這入る、さればその後曉翁廓通ひせし時、頃は卯月の雨上り、蛇の目傘かたげて土手節を謠ひながら、土手の上り口、道哲庵のあたりより、ゆらりゆらりとさし掛れば、此土手に道心坊主鉦をならして居るのを見て、つくづく思うて立ちかゝり、これ修行者、見れば雨にそぼぬれて、さぞさぞ難儀であらうと問へば、道心坊がいふには、いえいえ何にも難儀な事は御座りませぬが、私は早く死たう御座りまするといふ故、しかし此樣に死たくば早く死がよからう。今はの望があるなら、聞いてやらうが、何ぞわれが喰たいものがあらう。好な物喰はせてやらうから望めといふ。左樣なら申ますが、私は至つて饅頭が好物でございますから、思ひ入喰べまして死たう御座りますといふ故、其饅頭早速喰はせてやらう、待て居やれと、曉翁は別れて仲の町の松屋の見世へ行き、女房に此事を言付て、若者に蒸籠一荷持せて、道心坊に喰せんと、土手へ立歸り、今われが望の饅頭持參した、思ふまゝ喰へよとさしつくれば、道心坊は悅んで誠に久しぶりにて、私が好物の品難有御座りますと、二三十も喰ければ、曉翁がいふには今汝

饅頭を思ふまゝ喰へば死たいといふ、とても此世に長く生ても好の饅頭を思ふ儘には喰事かなはず、死たければわが命おれが貰うた。それは難有御座ります。此世に生きながらへて益なき私、サア命を取つて下さりませと首さし延れば、曉翁は一腰すらりと拔て、觀念せよと振り上る刀の下に手を合はすれば水もたまらず、衣の上より袈裟掛に切殺せし故、此一腰の名作を後に濡衣と名づけしといふ。

その濡衣の一腰はパッパ鮫鞘であつた。これが往々にして寬延の助六の打扮と因緣づけられるものである。蓋、曉雨と二代目團十郎との間には交つて親しきものがあつた。曉雨扮本說の據つて來る一つである。しかしパッパ鮫鞘はまた當時の流行の物である。故に直にその說を聽く事は出來なからう。

豪夫曉雨狂客曉雨の稱もまた諸書に散見する。その稱は如上の事實が數次傳られた爲であらう。

喜六といふ穢多が武士を裝うて吉原へ入り込むを知つて曉雨は心憎く思ひ、仲の町の茶屋で恥辱を與へる。喜六は憎さの餘り、男達を頼んでその歸途を要せんとする。內通あつてこれを知れる曉雨は心得たりとばかりに、其夜吉原からの歸りに遊女の小袖を着て細帶掛け小唄うたうて土堤へ懸る。助六を喜六の者がとり圍むを事ともせず大勢を打拂つた、とは「洞房語園」にしるされてある。なほ「江戸助六の事は曉雨が替名とぞ」とも記されてある。「吉原大全」に至つては、曉雨の名こそ出さね。藏前の米商人と湯島の田中三右衞門が達引して日本堤の闇討に剛氣の程を示したとあり、また正德三年の「助六」はこれによつて作られたとある。

それ等の妄は京傳がすでに、「近世奇跡考」に辨じて居る。また前言いさゝか觸れるところがあつた。それに拘はらず、また言をなすは巷說に上る曉雨と「助六」の助六との間にいかに相通ずるものがあるか、また當時の通客が

いかに一面俠者ぶるものがあるかを指示する爲である。

曉雨果して强力の士であつたらうか。以上の諸説は餘りに劇化せられ、「助六」化せられたものである。「甲子夜話」には一事を傳へて却つて眞相を穿つに近きものがある。

寶暦の後かとよ。江都十八大通と云ふ狂客ありその巨魁とよばれしは杏雨（曉雨）と號せしなり、或時いづ方の町か肆店にて口論あり、相手は鳶の者の强氣なりし、男なれば、中々諸人手に合はず、人を馳せて杏雨に告ぐ。杏雨速にその處に來り見れば、鳶の男は夜叉の如き體なるを杏雨は意ともせず、おのれ憎き奴かな、早々立去るべしと云ひながら、鳶の手先をとり捻ぢつけるに、さしも强剛と見えし鳶のもの。あいたあいたと言ふまゝ地上に伏せられたり。杏雨はやがて懷中より煙草筒を出し（此頃は裂にて長き煙草筒をぬひ上を結べる習なればなり）兩手を縛り引ずりて町役人にこの野郎を町外に連れ行き縛を解き追放つべしとて還りぬ。見る者堵の如し。皆駭き入て流石杏翁かな、年既に八十に及べる老人の斯る夜叉を自在にする事よとて感嘆せぬは無りける。後竊に聞くに杏雨告げるを聞くに、即ち其口論の譯を問ふに、僅に一星金を借れども返さゞるの出入なり、因て金五片を密に持ち往き、かの手を握る時持添てねぢたる故一言に及ばず、自由にせられたりと也、是ぞ十八大通の大通する所以たるべしと人評せり。

果然、十八大通の大通たる所以は黃金を巧みに利用するにあつた。曉雨の强勇も畢竟富の力を資するが爲であつたらう。曉雨等藏前の札差を業として過分の利を得、鉅多の富を擁し、さて豪奢三昧を遊里に致し、名聞の高きを江戸の市井に誇らうとする。即ちその通は俠を兼ね備へようとする。これは曉雨一人の欲するのみではなかつた。

「御藏前馬鹿物語」には同類の事柄が傳へられる。利倉屋庄右衛門が髪結床壞しの一件もその一つである。

庄右衛門が銀の針金元結、藏前本田の髮、鮫鞘の一腰ぼつ込んで兩手をうち振つて通る異様な風俗が髪結床に居合はせた若い者共をして嘲笑させる。庄右衛門は憎い奴等何を笑ふといひざま、髪結床へ入り、上げ板を取つて微塵に床を打壞して内に上り、金子二十兩を出して、これで普請せよと親方にさし出したといふ。これ亦所謂十八大通の一人の强勇と黄金とを結び合はする名聞話である。

寛延の助六が曉雨を模したとならば、左右ならうべなう事は出來ない。また當時の通客等を色を作して、おれをどうして吳れるといふであらう。もし「助六」が曉雨一派の藏前豪奢の氣分の間に醱酵され、釀成せられたといはゞ、彼等亦然りと首肯するであらう。「助六」が有する俠と通とは、これ等の人々の俠と通である。助六の俠と通と意休の俠と通との對比は町人と武士との反目を語る。傾城あげ卷を中に置いての挑み合ひの二人の喧嘩はやがて米と金とを中心とする兩階級の爭鬪の反映であらう。あげ卷の惡態は町人の驕兒等が藉りて武士を罵倒する痛快の辭であつたらう。

六

曉雨を以て助六の扮本とする事は曉雨の在りし日から噂された。老いたる彼はわざと迷惑さうにしながら、必ずしも否定しなかつたらう。さうして若き日の姿をみづからもをかしと想ひ起したらう、その姿は「御藏前馬鹿物語」に記載せられて居る。

大黒を眞向に色ざしの加賀紋に染させたのを着流し、鮫鞘の一腰、一つ印籠、下駄穿きで大門を入る。すると仲の町の兩側の茶屋の女房が出で、そりやこそ福神樣の御出でとわやわやといひ立てる。いつしか此姿を今助六と稱したとある、「物語」にはこれに附記して「吉原通ひの小袖の紋に大黒の色ざしは助六の打扮にして二代目栢筵助六の時、杏葉牡丹を色ざしにと付けしを學びて附けし事とおもふ」といふ。

斯くの如くにして助六と曉雨とは形と影の關係にある。形影時に顚倒して巷說に上り、後人をしてそのいづれなるかを辨へるに困難ならしめる、しかも曉雨はその間にあつて、ひそかに會心の眉を開いて居たらう。

寶暦七年に栢筵は「長生殿常櫻」に大江左衛門時門、手白の猿の精を勤めた。その二番目は「助六」で、あげまきの助六に扮したのが四代目團十郎、髭の意休は澤村宗十郎であつた。藏前衆より色々の積物をし、また紫縮緬の頰冠鉢卷を數知らず送る。吉原の惣女郎からも團十郎蛇目傘に杏葉牡丹と三升の紋つけたのを數百本送る。これは毎日鬮にて見物へ出すためである。ところが藏前の札差大口屋八兵衛の金翠のみは宗十郎に贈物をした。彼は大上總屋のあげ卷の嫖客である。その理由とするところは、あげ卷の客である自分かその間夫の助六役に積物する譯合はなし、意休役者こそ助六を仇にする者、宜しく最屓にすべしといふにある。して見れば、この金翠もまた曉雨と共に「助六」を舞臺の外にまで延長して考へる者であつた。しかも、この事や奇とするに足らぬ自體、「助六」そのものに舞臺の內と外との隔を撤せんとする工夫が見えて居る。

三度目の寛延二年の「助六」上演の舞臺は花道まで一面に造花にて櫻の盛を見せた。これはこの年の三月、吉原仲町で櫻を植えて喝采を博したのを、作者藤本斗文の趣向によつてしたものといはれる。助六の蛇目傘は花の雨と

見立てるためである。出端の淨瑠璃は即ち河東の「助六廓の家櫻」である。助六の出場がもう舞臺と客席の隔をとり去るのに、なほ花道の「ほめ詞」があつて、客も亦劇中の人となる。かやうな心意氣は更に劇場の外にまで擴がる。堺町の料理茶屋は、軒口へ青簾を懸け、前に造花の櫻を植ゑる。舞臺の吉原のつゞきが、現實の吉原のうつしか。影の吉原、形の吉原、眞假渺として錯綜するところ、夢心地して藏前の嫖客がざんざめくも當然、また曉雨對金翠の贔屓爭ひの起るも當然であらう。

吉原の形影の關係は「助六」の興行毎に親和を加へる。中にも文化八年二月、三代目の團十郎の三十七回忌、五代目六代目の七回忌追善として、七代目が初役の助六の折には、吉原の連中は男女三百人、柿と白との手拭を冠つて三桝の形で見物したといふ。その風流なほ今日に及んで絕えざるものがある。

例の團十郎贔屓から自號をも談洲樓とこぢつける程の烏亭焉馬はかつて五代目のためにせる「團十郎贔屓」「御江戸節鰕」なんどの體裁を追うて、こゝに七代目のために「江戸紫贔屓鉢卷」を編輯した。當時江戸の生れ、江戸に住む者にして、多少ながら焉馬と感を同じうせざるものがあらうか。それ等は市川氏の家の藝として「助六」を見ると共に、江戸歌舞伎の古典として「助六」を見る。

「助六」の權威はこゝに於てか生ずる。七代目の文化八年上演の助六の打扮はもとより、寬延の定式を守ると雖、衣裳の美々しさを加へたのは、一方時代の驕奢に伴ふものとはいひながら、また一方は家の藝をして愈光輝あらしめようとしたさかしらであらう。助六の帶は三升に牡丹を金絲色絲にて繡をしたのが、一尺の價が銀五十八匁。印籠は梶川の蒔繪、鯉の瀧のぼりの圖案、その價は三十兩、根附の枝珊瑚珠は或者が十五兩にて質入しておいたのを、

團十郎が受出したもの、それに贔屓から贈られた九分珠の珊瑚珠をも用ゐたといふ。衣裳の立派さはたゞ助六の一人の上だけでなかつた。從來の意休隱從の男達二人を四人に增し、その衣裳も團十郎から提供したといふ。

「助六」の舞臺はかくして完全に舞臺の外にまで延長せられた。堺町の茶屋の飾から、延いて藏前に及び、また吉原に續き、つひに江戸の全市にまで達した。種々の意味から吉原は江戸の光である。芝居町もまた光である。藏前小田原町の富はその光を增させる油である。「助六」はその油の量を多く需めて、二つの光を兼ね合はせる。「助六」の光はかくして江戸市民生活の正體を如實に照し出さうとする。

「助六」には袖の梅といふ藥が臺辭のうちにある。正德年中伏見町に住める天溪といへる隱者が酒客のために製したものといはれる。また「福山」といふ蕎麥屋の名が見える。これは「福山はどつち贔屓もならぬなり」の川柳にも知られる通り、中村座市村座の間にあつて聞えたものであつた。しかし、その役名は文化八年にはじまる。その以前には寬延の例を以て「うどんや擔市川屋」の名で呼ばれる。これは堺町で繁昌した饂飩屋市川屋彌助の名を假りた。「朝顏仙平」の名が見える。もとより臺辭に於ても明な樣に朝顏煎餅である。北八丁堀藤屋淸右衛門の家の煎餅が名物として知られて居たものであつた。その名は、「江戸名物鹿子」にも見えて居た。「傾城白玉」の名が見える。古くは「喜世川」である。それが安永八年の中村座興行から今の名となる。當時吉原の火焔玉屋の白玉が評判あつたので、玉屋の主人山三郎が瀨川菊之丞贔屓を利用して、中村座の興行に菊之丞の弟子吉次に白玉の役名をつけさせたといふ。

これ等の商賈に屬するものは「助六」によつてその名を弘め、「助六」またそれ等によつて、舞臺の內と外との隔

を除く。相互利用し、利用されたる事、なほ曉雨その他の通行人の場合に於ける如きものであらう。年代記の上に現はれた「助六」の上演と、その當時の世相とを比較しつゝ行つたならば、いかに興深い事であらう。歸するところは、江戸の生活の推移の闡明である。こゝに細說すべき資料の多くを所有せざる事をかなしむ。

七

文化八年の「助六」はその往く可きところにまで往き盡したといひながら、畢竟は寛延の定型の外に出づる事がない。ましてその他の上演の如き、變動があつたにしても。ほんのさゝやかなるものに過ぎなかつた。「助六」に達するまでの劇の仕組みは、例の曾我物ではありながら、努めて新趣向を構へようとする。しかし、「助六」に至つては固定して動く事がない。

江戸の小說の中には知られたる歌舞伎を讀本に趣向立して、時好に投ずるものが少くない。たとへば京傳馬琴の作に見る十數種の如きものである。こゝに「江戸の水仙若衆の助六」と題する合卷がある。作者は東里山人、文化十一年の作。書振は芝居の大帳、趣向は曾我狂言の貳番目、狂言作者東里山人、畫面振附歌川國直、座元榮林堂と說明する。讀本風の像影數葉を前に置いて、中は曾我狂言第二番目、幕なし大仕掛、振袖上卷若衆大帳、六册續としてすべて「助六」の臺帳そのまゝ、それに少しばかりの加筆があるに過ぎない。作者は一篇を叙し終つていふやう、

右助六大帳の義、作者の思ひ入には讀本の積に下書致し置き候ところ、板元の好み、今まで類なき合卷の趣向

によからんと勸められてゐいやらやつと全部六册に縮め、たゞ大筋のみしるし畢んぬ。

これは「助六」を小說に移す場合に於て最賢い方法であらう。似顏繪の合卷は役者繪芝居繪の連續として、書き込みはさながらの臺辭として、六册の草雙紙は直に、「助六」劇を現じ來る。「助六」の興味は、助六實は何某が刀を詮議する事件にあらず、また意休實は何某を討ちとるの事件でない。細に分つたならば幾齣とならう場合は、いはば連絡なくして、各齣に江戶子が勝手な事をいひ立てるものであらう。故に歌舞伎が持つ「助六」の興味をさながらに紙上にうつすとならば、舞臺の上の變化を一々繪解する事を要するであらう。合卷、また黃表紙の體裁はおのづからこれに適する。事件の表になづんで、兎角に理を說かうとする讀本は、「助六」の心持から遠ざかつて、人はまた手にするを欲しなからう。讀本には歌舞伎の持つ興趣から離れたところに、却つて面白いのがある、しかし、「助六」の如く歌舞伎として多くの親しみを持てるものに對してはつひに益なきに終るであらう。

黃表紙に「助六利生嘶」といふ、北尾政美の自畫作がある。拙劣笑ふべきものである。東里山人にして讀本の趣向立をしたならば結句斯ういふところに落ちはしなかつたらうか。板元はよく賢にして策を得たりといはう。

「助六利生嘶」は花川戶の緣を以て淺草觀音の利生に結びつけ、一家の傳說に附會する。賴朝は重忠に命じて觀音堂を建立させる。梶原が妬んで之を斥けようとし、岩永と番場の忠太に囑して重忠保管の三つ面を盜ませる。二人が盜み去る時、あやしと咎めた漁師太郎八を殺す。もと太郎八には子がないので觀音へ願をかけた、三社權現夢枕に立つて天地人三才を授くと告げられたと見て、妻は懷妊して居る。その妻のなげき、敵の手がゝりとては岩永の脇差手柄があるばかり。一つの家の惡婆はその妻を欺して家につれ歸り、子を產ましたあとで女郞に賣らうと企む。

本田の次郎は重忠の命をうけて町人に身を窶して三つ面詮議、雨に困じて一つ家に宿る。そこの娘小絲か次郎に戀して、母が預りおける三つ面を次郎に渡して共に逃げ去る。折柄忠太は梶原のために病の靈藥を得ようとて、胎兒の血を索めに一つ家に來る。惡婆は次郎の去つたのを知らずに誤つて石の枕に忠太を殺す、なほそれと知らずして、小春を殺して胎兒をとり出さうとする。雉子飛び來つて胎兒を啣へて去る。惡婆は鬼女となつて宮戸川を泳ぎ越して次郎小絲を追ふ。偶鐘建立のため來た文覺に遮られる。怒つて鐘もろともに淵に沈む。こゝが後の鐘が淵である。雉子は赤兒を重忠のところへ運び來る。重忠は次郎に命じて養育させる。これが後の揚場の助六となる。淺草の水茶屋の出合ひに、つひに助六は敵岩永を擊つてとる。次郎は白酒賣となつて來て助太刀をする。親夫婦の靈、惡婆の靈現はる、これ皆觀音の利生によつて成佛したものであると。

かゝるものを京傳の作、「鐘は上野哉」に比較したならばどうであらうか。これは政美京傳の筆の相違の問題でなくして、その狙所の適不適の問題であらう。

「鐘は上野哉」の助六は粗忽者である。仲の町に鉢卷を落して行つたのを、夜廻の番人が見つけて、手飼の猫の首玉にする。助六はまた極の妬手である。揚卷が意休を大事にするを憤り、仲の町の眞中で意休の頭の上に下駄を載せてやると口癖にするので、揚卷はもし喧嘩にでもなつたら外聞が惡いと、意休にわたし可愛が定ならば下駄を載せられても、ぢつとして居て呉れとの賴み。意休は髯額百兵衛と相談して飴賣のかんてら門兵衛を雇つて身代をする。門兵衛は白酒で黑髯を塗つて意休の打扮をし、下駄を載せられても無言で居る。助六は大にてれる。揚卷は意休に無心して髯を剃らせ揚屋町の林藏の黑油で染めて、みづからの髪と稱して持たせてやる。折柄助六は向島の中

田屋に居たか、主太郎に髯を洗はせる。助六は揚卷の僞を知つて、大に怒り、意休諸共眞二つと氣込んで來る途中、百兵衛が意休の編笠を冠つて來るを例のそゝかしく見違つて切りつける。二人しばらく立廻り。百兵衛助六を追ひかける。夜廻りの飼猫助六に化けて百兵衛をたぶらかす。助六は揚卷のもとに躍り込み、意休目がけて斬りつけると、意休宙へ飛び上ると見えたが、白髮の神と變ずる。即ち白鬚大明神である。助六に對して戀の疑惑の深い事を戒める。

助六を妬手と見るのは母の紙衣を着たあとの揚卷との口說に於ていふのであらう、粗忽者と見るのは母の編笠姿の見違ひその他に就ていふ事が出來よう。京傳の作の勝味はこの穿ちにある。白鬚大明神を拉し來るが如き、たゞその名に呼ぶ遊びに附會したに過ぎない。作者自らも「あまり名をなさぬ神故名弘めの爲方々作者を賴み此草雙紙へ現はれたり」と洒落のめす。

「助六」の荒事が俠氣を殘して和事へと推移する時、輕妙の諧謔はその纖細と共に躍動する。寬延二年すでにそれは著しかつたらう。寶曆の演出、寬政の演出はなほ滑稽洒落の分子を加へ來つたであらう。けれど劇の輪廓は略定つて居る、その充し得るものにも自ら限りがあらう。こゝに限りなく作意を縱にする事の出來る黃表紙の「助六」の滑稽化が生ずる。「鐘は上野哉」の穿ちの如きも其の一つである。まして權威あるものに冒瀆めく態度もて臨むは黃表紙の常である。劇界に於ける忠臣藏、また曾我物は古典として權威あるもの、即ち黃表紙作者の藥籠中のものとなる。「助六」すでに古典を以て擬せらるゝ、その黃表紙作者の厄にあふも亦やむなきに屬する。

獄にもつてゆき、更に三升艾と路考艾の功能に結びつけたのが、「江戸花俳優虜敖」である。鶉告の名を署した京傳の作。

意休は若い者を賴んで助六をうたせる。この助六は弱い男でうんとばかりに氣絶する。揚卷はその樣を見て驚いて二階から飛び降りる拍手にうんと氣絶する。大勢がわやわやと二人の名を呼び立てる騷ぎに、二人の魂が入れかはる。さらでも勝氣な揚卷は金平揚卷となつて浮氣の風に誘はれて來るぞめきの衆と喧嘩三昧、助六はいつもの打扮ながらに揚卷の部屋に化粧三昧、一人がうんざいめら、きりきり通りあがりなんしと强面でゆく時に、一人はけふは二十五日だの、嬉しい、明日は髮洗ひだのとやさしくも女の氣取で居る。助六は三浦屋の籬へあげ卷を呼び出しては身あがりをさせて上り、祝儀萬端をすべてまかなはせて平氣で居る。とも知らずに助六の家では、あまりに金を遣ふ事もと番頭新兵衛が揚卷を身請して、家に入れる。家は米屋であるが、揚卷は商賣に身を入れ、助六は針仕事にうき身を窶す。番頭は當時日本橋袂の伊丹くん齋といふ灸療治に二人の治療を賴む。くん齋は男には三升艾、女には路考艾をすゑる。あつといふをきつ掛に二人の魂は入れかはる。

この作意は三升艾と路考艾とを主として、「助六」は寧つまになつて居る。もし、「助六」をそのまゝに茶化したものといはゞ自名自詮、まづ全交の「茶歌舞伎茶日傘」をとるべきであらうか。これは黃表紙の上で往々見られる通

りに髯の意休を千利休に附會したるもの、年々春毎に意休と助六の達引は芝居でもする處なれども、今は通の世の中、喧嘩などするは大の野暮助六な事と、二人は茶の湯の宗匠でゆく。待合草履でなしに客の頭へ日和下駄を片々載せる。手水鉢の出るところへ、山屋の饂飩一杯宛を頭に浴せる。にじり上りと覺しきところに助六が立はだかつて、股を潜れといふ。助六の鉢卷がすぐに紫袱紗となる。道具は蛇の目形付袋杏葉牡丹いんらんなどの附會物である。

これには先蹤がある。全交すでに予は喜三二が秀作を茶工服して云々といつて居る。「太平記萬八講釋」がその秀作である。喜三二には同樣の趣向の作「珍獻立曾我」もある。今一々擧げ來るの煩にたへない。

全交にはまた「年寄之冷水曾我」がある。曾我兄弟の仇討は建久四年、今寛政四年まで六百年に當ると數へて兄弟はじめ皆六百いくつの老體、仇討の忘れた耄けぶりを書きなす。中に「助六」をも挿む。助六は意休に喧嘩を仕かけたなりの六百年、何故の喧嘩であるかを忘れる。意休と助六とは斯う話しあふ。

助六何故おれは頭へ下駄をあげて斯うして居るだらう、どうも思ひ出されねえ。「さればなぜだか。

趣向すべて「茶歌舞妓茶日傘」に優つて居る。しかし、「助六」の舞臺をそのまゝに活す點からいへば、はるかに京傳の「新板替道中助六」に劣る。蓋、京傳の此作はこの類中に於て傑出したものであらう。

これも意休と助六との中直に端を發する。二人の喧嘩を幾度かの舞臺の上に見馴れた爲の趣向立であらう。意休と助六、今は助六の女房となつて居る揚卷、朝顏、かんぺら、白酒賣、それに二人の禿が東海道の旅をする。助六は上方の雁金組なんどの男達を挫いて、愈三ケの津黑極上男達の座頭と仰がれる。その記念に携へゆきし蛇目傘を地本院の軒端にさしこんで歸る、これが地本院の忘傘とのおちとなる。着想他奇なれど、妙は「助六」の各場を東

海道の宿のいくつかに當てはめた手際にある。淸長の繪がまた巧みにこれを描き出して居る。

助六等一行は品川に來た。助六がいふ、日頃おれが惡態に刷毛の間だから房上總が見えるとは申せど、定めて滅らず口とも覺されん、よき序なれば試しのためにこんな時見ておきやれと。そして尺八を遠眼鏡の氣取にて刷毛の間に挿み皆々に見せる。

「助六」の興味の一つは洒落の臺辭が箭の樣に飛び違ふ點にある。その洒落はある飽和點にまで到達する誇張によつて成立する。「助六」の觀客はこの誇張の止るところに止るをうれしと見、をかしと見る。わづかに一線を越える、もう眉を顰め、席を蹴つて去らうとする程洒落に對して敏感な人々である。今、京傳はわざとその誇張を誇張とせずして正面より受けて滑稽とする。曲解するに非ずして、正解して素直に滑稽化する。しばらく「助六」の何たるを解せざる眞似をする。川柳よくこの手法を用ゐる。

助六は頭痛持かとせなア聞き

これは紫鉢卷の謂を知らぬ田舍者の正面からの間に擬する。

此の鉢卷の御不審は安松魚

これは知つて、現實の事象をとり來るものである。もし斯る滑稽の資料を索むとならば「助六」はその科に於て、白に於て無盡藏といふべきであらう。助六は金川に於て鼻の穴へ館船を蹴つ込むといふ日頃の惡態を實行する。大森で買つて來た麥藁細工の館船をそこにある富士の人穴へ蹴込むのであつた。附會の跡歷々、作者みづから註して「惡態に擬へたは聞えたが、何故折角買つて來た物を蹴込んでしまつたか、そこは今に解せ不申候」といふ。

程ケ谷の宿では助六は天水桶で湯をつかふ。「これが肥溜だと狐に化されたとほきやみえぬ」といふ。戸塚では旅人を促へて名物の大擧丸の股をくゞらせ、藤澤では大山參りの木太刀の寸尺を計り、鞠子ロでは門兵衛にとろゝ汁を浴せかける。

大井川にかゝつて、揚卷は蓮臺で越す。京傳興じていふ、「揚卷が大井川を越すとはれんだい未聞のはや瀬のたねだ。」意休は川越の賃を惜しんでひとりで越すのを助六悴がつてそつと頭に下駄をのせる。意休は知らず、人々はげたげたと笑ふ。裸身の意休と肩車の助六とを蓮臺の上で見下しての揚卷の惡態はいかにもよく響く。「意休殿淺瀬のところで一服上れ。手が屆かぬから足で進上致す御免」は舞臺と違つて慇懃な挨拶である。「冷物で御座い」もこの方が理屈であらう。

吉田には二階から招く女郎衆の煙管の雨が降る。「こゝではつかり傘が役に立つた、火の用心が惡うごんせうぞえ」と助六はいふ。助六の傘の見立は黄表紙作者のまづ頭痛の種であつたらう。馬琴の「東發明皐月落際」には人々の血の涙の雨のための傘とする。それは六代目團十郎が「助六」の興行後間もなく死んだためである。それには紫鉢卷を「この鉢卷は過ぎし頃風邪の心地とうち臥せし頭痛のあとの紫にゆかりの色の形見なり」とする。六代目の死因は風邪であつたからである。三者共に窮せりといはう、煙管の雨は流石に趣向として優つて居る。しかし、その見立は誰もおもひつくものであらうか。川柳にも

助六の傘は煙管の雨にさし

とある。或は京傳の趣向を襲ふものであらうか。川柳と黄表紙とに同案のものが少くない。たとへば

助六の肌にぼうふりなども附き

は「道中助六」の程ケ谷の條の助六の言葉として、「おれも天水桶から顔を出した所はぼうふりの怨靈といふものだ」と同じ事に落ちるであらう。

さて意休の香をきく件は桑名の燒蛤の燒加減に、揚卷が棒の圍の件は鬪の雲助の酒手ねだりに附會する。助六の階子の件を、旅費を遣ひ果した助六を蟹坂から逃してやる事に附會するに至つては綯組の趣向の巧さを賞すべきであらう。

九

少しく「助六」とその周圍とに就てものいはうとした果に、はしなくも黄表紙なんどをとり出して冗慢の言をなした。その迂笑ふべきものがある。もし變形せられた「助六」をいふならば他類にまた多くの存するものを見る、しかも黄表紙にのみに限つたのは何故であらうか。「助六」と黄表紙との間に相通の心意氣のいくつかゞ存するためである。以上おのづから言及するところがあつた。今わづかに一つを擧げる。黄表紙の興味は、作者と讀者とがその坐を撤して、互に手をとり合つて樂しみ語る點にある。京傳が館船の附會に就いて讀者に何をいつたかは前にしるした。それはまだ輕いものである。彼の「金々先生造花夢」に、「傳へ聞く近松門左衛門淨瑠璃作者の名人なれども寢言の文句には困りしとかや、われ等も寢言の文句には大困り、たゞ鼾の音、コウコウコウ、口背めづり、ムニヤムニヤ、此外にもし寢言の文句御存じ御座候はゞ御知らせ下さるべく候早速書き入申候」とある。一九の「鼈蔵

夜居鷹」には「此敵討書肆榮邑堂の注文に任せ書き綴り御覽に入れ申候故、惡いところは皆榮邑堂の業にて私の知つた事にては御座無く候。そのため御ことわり左樣」とある。時代はこれ等の書き込みを悅ぶ事大方でなかつた。遊戲逸樂の氣風の活躍する時代おのづから然らざるを得ない。江戶の歌舞伎はもとり此精神によつて活くる。中にも「助六」は舞臺の內外の區別を撤する事に於て殊に甚しきものがある。故にまづ「助六」を以て舞臺の上の活黃表紙と見立てた。

（大正十五年八月「歌舞伎研究」）

附錄篇　源氏物語研究

源氏物語研究

夕顏の卷に現はれたる「ものゝけ」に就いて

序

「源氏物語」を繙いて、「夕顏の卷」を讀む者は、八月十五日の月明きひと夜さ、源氏の君が、夕顏の家に宿れるくだりの精密なる筆路をよろこぶ。敍するところは、見いれのほどなき、はかなき家のたゞずまひにして、他の卷の豪華の狀と興趣を異にす。「あはれ、いと寒しや、今年こそなりはひにも賴む所少く、田舍の通ひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。北殿こそきゝ給へや。」これ等生活辛苦の言葉をば、やんごとなきあたりの女房紫式部が、いつの程、いづこにか聽きおぼえて、述作の資料とした事であらう。かのくだりを妙と稱する者は、所詮宮廷貴紳の生活と、陋巷野人の生活とを對照させた趣向の妙、またこれを敍する寫實の精技をさしていふ。更に「夕顏の卷」を讀みゆく者は、源氏が夕顏及びその侍女右近を誘ひて、なにがしの院に宿れる夜、幽怪の變にあひて、夕顏ために死する一段に及んで、これを讃して、絕妙の趣向、絕妙の敍述といふ。讀者はまづ事件の異常なるを見る。けれどその異常なるに驚かずして、却て彼をして、この怪事の自然に現はれ來るべく思はする敍述の妙に驚き、かの超

自然の事變と現實の事象とを渾一融合する作者の靈腕に驚く。

源氏が夢に幻にあやしきを見る事は、もとより異とするに足らず、たゞその夢幻につゞく夕顏の死に至つては、つひに尋常を以て目すべきものにあらず。讀者は、こゝに事件の異常を見る。されど、讀者は、かゝる事件が現實界に存するか否かを考へずして、たゞかゝる事が、斯様にして起り得る事を考へる。故に彼は事件の異常に驚かずして、しか起り得る様に思はする敍述の巧妙に驚く。はじめ、彼は、をかしげなる女の姿に驚く。ついで心中ひそかに、ものゝけとなつて出現すべく期し居たる女のある事を思うて、自ら解し得たりとする。蓋、作者の作意に於ける、その敍述に於ける、最よく意を驚異と可能との限度に注ぐ。しかも讀者は、よく作者の限度を解し得て、妙となすであらうか。かゝる可能の限度は、時代と共に推移する。故に平安時代の作品たる「源氏物語」を讀む者は、平安時代の眞實たり、又眞實たり得べしとする見解に立脚した作者の限度を解し得て、妙となすのであらうか、更におもふ、作者が、時代の見解を離れ可能の限度を離れて、ものいうたのが、偶、今日の見解と合し、可能の限度と合したためであらうか。またおもふ、作者かゝる諸條件を超越して、より高く、より深きものゝ象徴として、この異常の事變を作中に寓したのであらうか、しかも讀者よくその意を會し得て妙とするであらうか。この小論はわづかに、それを闡明せんを期する。

一

萩原廣道は、變化のくだりを讀んでよしといひ、いみじというて、推讃の辭を吝まなかつた。彼は、何故にこの

くだりの傑出して居るかを考へて、その理由を得た。一、平淡に敍して、しかも鬼氣を楮表に漲らせ得たる、二、おどろおどろしい物象をかり來らず、また落想に觀音なんどの佛力を說く事なくして、夢の中にをかしき女の現はれたる事のみを記したる、三、これ等のよつて來るものを討ね行けば、皆源氏みづからの心理の產出なる事を明にしたるといふ三事を擧げた。彼またいはく、「大かた今の世にも出くる怪しき物語どもも、その本のすぢをせめていひもてゆけば、皆かゝる樣の事なるぞ多かる。」またいはく、「抑この變化の一段は、はかなく作り出る物がたりなれば、如何樣にも珍しく、おどろおどろしく書きなさるべきを、さはあらずして、皆源氏の君の御心よりまねき迎へ給へる樣に書かれたるは、彼のもろこしに所謂妖は人によりて起るなどいへる類の理を深くしたに思はれたる物とおぼしく、此處彼處に打かすめて、いかなる故とも知れぬ樣に書きまぎらはされたる筆づかひ、かへすがへすもめでたくして、作りぬしの才のいたり深きを見るに足れり」と。

　廣道彼何者ぞ。彼は別に師承なくして、「源氏物語」を研究する事多年、つひに「源氏物語評釋」の著をなした。その文章を評するに、一家の說を創めて、縱橫にこれを批判した。「評釋」はわづかに「花の宴」までを解くに過ぎなかつたが、源氏註釋書中、空前の良著である。彼はまた稗史の筆をも執つた。馬琴が讀本、「開卷驚奇俠客傳」を作つて、第四輯に筆を絕つた時、書肆の需に應じて第五輯を著はした蒜園主人は、實は廣道その人である。彼が「源氏物語」を讀んで諸抄の釋に慊らずして、更に一作品として、一小說として之を鑑賞し、つひに「評釋」を著はすに至つた一面には、この作家的經驗あることを記憶するを要する。「源氏物語」を藝術として見、小說として見て、その藝術說を闡明したものに、さきに本居宣長がある。廣道、とく其卓見に服した。これ彼が師承なくして、しか

も宣長を先師と稱する理由である。即ち「玉の小櫛」は「源氏物語」闡明の總論であつて、「評釋」はその各論である。作家としての彼は、また當時の群小々說に興味を寄せて讀破し、學徒としての彼は、「源氏物語」の思想と技巧とを檢討した。時にこれを對比して、內容の相違の甚しいのに驚いた。蓋し江戸末期の小說は、その節の複雜味と夢幻味に於てまさる。荒唐無稽の脚色といはうか、奔放不羈の趣向といはうか、事每に人の意表に出づるを尙ぶ。妖怪變化の篇中に出沒するは、靈界の玄祕を拓くためでなく、世人信仰心の投射でなくして、たゞ脚色趣向のために敢てした。廣道これ等に熟して、一度「夕顏の卷」に對す。その趣向脚色に荒誕無稽と見るべきものなくして、この異常の事件に遭遇すべき心得を敍述して自然なるに驚く。これ彼に前の評言ある所以である。

この評言をきいて、今日あらためて「夕顏の卷」を繙いたならば如何であらうか。源氏が幽怪の事にあふくだりにいふ。

宵すぐるほど、すこし寢いり給へるに、御枕がみに、いとをかしげなる女ゐて、おのがいとめでたしと見奉るをば、たづねもおもほさで、かくことなる事なき人をゐておはして、ときめかし給ふこそ、いとめざましくつらけれとて、御傍の人をかき起さんとすと見給ふ。ものに魘はるゝこゝちして、おどろき給へれば、火もきえにけり。

これによれば源氏が、をかしげなる女の姿を見たのは、明に夢中の事である。源氏が、右近にわた殿なる宿直人おこして、紙燭さしてまゐれと命ずるや、彼女答へていふ、「いかでかまからん、暗うて」と。彼女の恐怖は怪を見た爲でなくて、燈なき闇の爲である。この一語また、怪の源氏にのみ見えた事を語り、同時に、その夢なる事を語る。

しかし、夕顔の恐怖は何によつて、さうまで甚しいのであらうか。「この女君いみじくわなゝきまどひて、如何樣にせんと思へり、汗もしとゞになりて、「われかのけしきなり」といひ、「ひき動し給へど、なよなよとして、我にもあらぬ樣なり」といふのを、右近がいふがまゝに、夕顏の怯懦の性情に歸し、右近と共に闇に臆おぢて、しかも恐怖の極、死に至つたものと解さうか。その解釋は、徒に誇張の筆の誇を與へるに過ぎなからう。さらば、之を二人同夢を見たものと解さうか。二人同夢を見るのは、もと希有の事實である。けれど平安時代の俗、これを傳へたものがないではない。たとへば、「今昔物語」卷三十一、常澄安永於不破關夢見在京妻語の如きがそれである。彼等は京と不破關とを隔てゝ同時に同樣なるものを夢みた。「今昔物語」の編者これを怪んで、「互に同樣に不審しと思へば、此く見るにや有らむ、亦精の見えけるにや有らむ、心得ぬ事也」といふ。しかし、夕顏と源氏とはすでに同一室に在る。同夢を見るの因緣、また必ずしもなきにあらずといふべきであらう。

夢は心理變體の一現象、近時科學の發達を以てして、大方これが理を說明し得るにちかしといふ。今、本文に就いて源氏の夢なるものを檢すれば、その夢は「少しねいり給へる」後に現はれた。夢を說明する者は、其現象の睡眠狀態に入つてなほ淺きほどに起る事の多きをいふ。この場合はまさしくそれである。斯る合理的見地に即して、夕顏と源氏との同夢の因を討ねたならばどうであらう。二人が、院の荒廢の狀を見て、けうとくおもふところ同じく、その思ひしのぶ事の異なつて、情緒を同じくしたためであらうか。潛在する精神活動の同一であるためであらうか。源氏はをかしげなる女の傍なる夕顏をかい起すと見、夕顏は怖しき女のわれをさいなむと見たか。二人の見るところの女の果して同じ人であつたらうか。おなじ貌の人であつたらうか。

斯る推測は、更につぎのくだりを讀むに及んで、勞して効なき事を知る。怪異は夢のみではなかつた。院のあづかりの子は、源氏の命を奉じて紙燭をともして來た。その燈の闇を照し出す時、源氏は歴然と、さきのあやしきものを見た。

たゞこの枕がみに夢に見えつるかたちしたる女、おもかげに見えてふときえうせぬ。昔物語にこそ、かゝる事はきけと、いとめづらかにむくつけゝれど――

いふ所、すでに夢中のものにあらずして、半夢半醒の間に見たものにあらず、覺醒時に於て、さやかに見得た事を明にする。即ち幻覺である。故に右近は依然としてその女の姿を見なかつた。さらば、夕顔にもこの幻覺はあつたか。この問に答ふべき夕顔は、その時すでにひえにひえいりて息はとく絶えはてた。その幻覺つひに彼女を恐死せしめたか。

夕顔死して源氏に悔恨あり、悲痛あり、身も世もあらぬ思ひに惱んでは、つひに病をなすに至つた。源氏は密に葬つて、禮を厚くして回向した。四十九日の法事の終つたそのまたの日、源氏は再怪夢を見た。

君は夢にだに見ばやとおぼしわたるにこの法事し給ひて、またの夜、ほのかに、ありし院ながら、そひたりし女の樣も、同じやうにて見えければ、荒れたりしところに棲みけんものゝ、われに見いれけんたよりに、かくなりぬる事とおぼし出づるにもゆゝしくなん。

これはまさしく夢である。たゞこの夢の四十九日の法事のまたの夜に、かの夜の樣と同じ相であつた故に怪しといはねばならない。「夕顔の卷」を以て、心理的に解して自然なりとする廣道は、この夢に對していかなる解釋をなす

であらう。
源氏は幽怪に襲はれたそのはじめに於て、これを狐の所業となした。「荒れたる所は狐など様の物の人脅かさんとて、け怖しう思はするならん」と思つた。「今昔物語」は平安時代に於ける民間信仰を如實に知る事の出來る好參考書、おのづから源氏物語の註疏をなす。書中狐の怪を語るもの四五にとゞまらず。源氏のしか思ふは當時に於ては理由ある事である。しかも、作者は、狐の所業として事を叙さなかつた。その理は、「手習の卷」を見るに於て自ら釋然たるものがあらう。僧はゆくりなく森陰に臥せる浮舟を見て狐の變化したものと思つた。即ち宿守を呼んで之をたゞした。作者は僧と宿守の問答をしるす事詳である。「狐のつかふまつるなり、この木の下になむ時々怪しき業し侍る。一昨年の秋も、ここに侍る人の子の二つばかりに侍りしを、とりてまうで來りしかども、見驚かず侍りきと、さてその兒は死にやしにしと言へば、生きて侍りき、狐はさこそは人を脅かせど、ことにもあらぬ奴といふ様いと馴れたり。」宿守の「ことにもあらぬ奴」これ作者が狐の怪を信じつゝも、なほ「夕顔の卷」の異變の根柢をこれにおかざる所以である。更にこの「ことにもあらぬ奴」を具して、「今昔物語」に歸る。そこには美女と變じ、人妻と變じながらも、つひに見顯はされて、臭き尿をさとはせかくる事によつてのみ、身を全うした鳥滸の狐の物語の二三を見出す。

源氏は法事後の夢を見るに及んで、荒れたる所にすみけんものゝ襲うた事と解した。ものとは妖怪の義。更に萬葉集を檢して、ものに鬼の字を當てたる事を知り(註一)、また和名類聚抄の鬼の解を見て、人死魂神なるを知つて(註二)、直に、なにがし院のものゝけを死魂神の所業となすは、輕率事をあやまる解釋であらう。何となれば、ものとは、一切の

超自然的靈威を意味する。死魂神の如きは、わづかにその一部をなすに過ぎない。本居宣長は、神とものとは、超自然的靈威なる點に於て同一なるべき旨を說く。またものゝけと、神氣とは同一なるべき旨を說く。其の說にいはく、「さて神氣物氣といへる神氣は神の祟なり。物氣とは死人また生人にまれ、祟をなすをいひて、中古の書に常多く見ゆ。かくてこれは二つともに古言にて、古は物氣といひし事、神氣と同じなりけむ云々」(古事記傳)こゝに於てか、惑はざるを得ない。源氏が、荒れたる所に棲けんものといふ、そのものといふのは死靈を意味するか。死靈と解して、然るべき理は、當時の民間信仰に對照して、信ずる事が出來る。或は、すだまと解すべきであらうか。これは樹神、樹魂、また「和名抄」には老物之精といふ、即ちつくも神と同じものである。源氏のいふところはそのいづれを意味する。敍述たゞ漠然として、後人をして多樣の解釋に彷徨せしむる。

「夕顏の卷」のなにがし院は、畢竟なにがし院であつて、その名を詳にせず、たゞ五條に近きを知るのみ。しかし、諸註家は、その五條に近き故もて、川原院に擬する。しかも、川原院には、舊主融大臣の死靈がすまつて居るの傳說、また宇多法皇を脅せ申せし傳說が、この準據に對して有力なる根據をなす。この傳說は「今昔物語」に載せられ、また「江談抄」に載せられてある。更に「今昔物語」には、宇多法皇を離れて東人宿川原院被取吸妻語の怪を載せてある。なにがしの院の怪が、この川原院の死靈を根據として作られたか、否かの疑問は、遽に斷じ難しとするも、荒れたる所には、何等解し難き妖怪の潛み居るとは、當時の信仰である。「伊勢物語」の芥川の鬼の話は、また「今昔物語」には、在原業平中將女被噉鬼語として載せられてあるが、編者のその末章に附記して「然れば案內不知らん所には努々不立寄まじき也、況や宿せむ事は不可思懸ずとなん語り傳へたると也」といへるを參照すべ

きである。

「源氏物語」の諸註家は、もとより、この信仰を知る。されど、なにがし院の怪については、つひに源氏と見解を異にして、そこにすむものとは見ずして、六條御息所のもの丶けとする。これ源氏の斷じて思ひ寄らざるところで、讀者のひそかに期する所である。

諸家のこの解に背きて、源氏と見を同じうするものは、廣道である。彼は、「君は夢にだに云々」の段を評していふ。

此段の詞をもて、諸抄に御息所の靈といへる說の妄なるを知るべし。さて夕顏を夢に見んとおもほしたるに、變化の女をさへ見給へりと書れたる、いとめでたし。かの段にも夢のうちに見給ひたるを、こゝにもまた夢に見給ひて、その妖物のしかりし故を、さとり給へる樣に書れたる所、つゆのあやまちなくして、いとめでたし。

廣道が諸抄を排するは、たゞ「葵の卷」のもの丶け出現の類推によりて、六條御息所と斷ずるを不當なりとするためである、その證蹟の薄弱從ふ可らずとするためである。彼その從ひ難き條々を舉ぐ。一、御息所夕顏を知らず、夕顏と源氏との戀を知らず、從つて怨念あるべき理なし。二、假に舊註の如く解すにせよ、作者が六條わたりの御有樣なる女と書かぬ理由を知るに苦しむ。三、江談抄傳說を準據として見るべくば、なほそこに棲める妖怪の所爲と解すべくして、御息所の怨靈と解すべき理由なしと。こゝに於て彼は妖怪說をとる。されど彼はをかしげなる女なるものを、いかに解釋すべきかを知らなかつた。つひに解していふ、妖怪は源氏が念々御息所をおもふその心を利して出現した。妖怪は夕顏の怯懦と、源氏の憂慮との心理に乘じて、御息所の風貌に扮して出現したと。怪の變身

變現の自在は、「今昔物語」をはじめとして、當時の諸書に散見して居る。必ずしも當らずといはず、けれども、この場合に於て、かゝる解釋は正鵠を得て居るであらうか。

彼は妖怪の御息所に變顯した事をいふ。もしさうであつたなら、彼がさきに、六條わたりの御有樣の女と書かなかつた理由如何と、諸舊註につめ寄つた反問は、飜然として逆に彼に迫るであらう。斯る一小事はともあれ、彼の説の缺陷は、外物の妖を認めて、人心の怪を認めざるにある、人の心靈に科學を超越した靈妙不思議なる作用の存在を認めざる點にある。あらず、彼が「夕顏の卷」のすべてを心理的敍述と見、その怪異も心理上の現象と見ながら、その容易に解し難きものに遭遇すれば、直ちに人間以外の妖怪の所爲と斷定する點にある。かゝるものゝ存在するか否かを考究する事なくて、直にさう斷定した點にある。

江戸末期の小説は、はじめから荒唐無稽を標榜した。その非現實性は、日常現實の世界と直接交渉なきものとして、作者も讀者も承認した。その非現實性の奔放不羈は、平淡凡俗なる現實世界に倦怠を感じた痴人の夢とのみ見た。彼等は神祕玄妙なる者を、その世界の一角に封藏して、それ以外をば、すべて現實の光を以て照す。彼等の生活は常識に終始して、靈界との諸緣を厭離する。彼等はその草雙紙に夢の不思議を描く、しかもその世諺には、ただ五藏の疲れとのみいひ棄てる。斯る時代の心を以て、平安時代の史籍に、物語に頻に見る「ものゝけ」の意義を解すとせば、彼等いかなる言をなすであらうか。

ものゝけが、多く病者産婦の上に現はれ、僧侶修驗者の加持祈禱によつて調伏せられるのは、僧侶輩が、ひそかに邪法を傳へ、狐をつかつて、病者産婦に憑けおき、後に加持祈禱してその狐をはなすものと解す。當時貴賤皆佛

教を溺信したために、その姦計を看破する事が出來なかつたと解す。解する者は「榮華物語」うたがひの卷、道長病に臥すの一節――よろづにいみじき御祈ども、樣々なり。されどたゞ今はしるし見えず、いと苦しうせさせ給ふ。樣々のものゝけ數知らず、のゝしる中に、げにさもやと聞ゆるもあり、又ことの外にさるまじき事の物おぼえぬ名のりをしあやしき事どもを申すめる――によつて、僧の姦計を證明しようとする。さもとおぼせる、また物覺えぬ名のりをするとは僧侶等が、樣々に狐を憑けたためと解する。（安齋隨筆三）現實の理を以て、非現實の事象を說く、おのづから斯くならざるを得なかつた。狐何ほどの靈獸ぞ、狐をつかふもの何ほどの靈者ぞ、狐をつかふ法何ほどの妖術ぞ。これ等の靈たり、妖たる內容本質に觸れずして、漫に妖靈の目の下に解し難き一切を封じ去らうとする。廣道また斯る時代にあつてかく事を解す。故に「夕顏の卷」のものゝけを釋して、源氏の心理の自然を說き、その表現せられたる情緖の自然を說いて詳細をつくすと共に、平安時代の人々が、いきすだまに對する、信仰、心靈玄妙の作用の信仰を疎外するに至つた。

諸註家のかのものゝけを以て六條御息所となすのは、もとより「葵の卷」から溯つて類推するのである。けれど、その多くは、亦源氏の心理に關つていふ。六條御息所の靈の交通は、源氏の胸裏にすでに迎ふるものが存する爲と解する。

御息所の御事を思召出たるをたよりに、如此靈とも成給ふ也、いさゝかのたよりをもとむる物と也。（萬水一露）

此夕顏の餘におほとけたると、御息所のうちとけざりしをゆつろへたきと源の思ひくらべ給也。かく思給ふたよりを得て靈も通ずるにや。（細流抄）

諸註家が、かく解釋するは、物語の敍述が自ら、然させたのであらうか。いきすだまの概念が、自ら然させたのであらうか。その如何は、今しばらくおく。たゞ源氏の心理に重きをおく一事は「評釋」の說と共に注意すべきである。

「葵の卷」に現はれたる六條御息所のものゝけ、そのいきすだま出現の顚末を、こゝに說くべくして、しかも說くを煩はしとする今は、まづ葵の御うちの産の氣近づいて、懊惱甚しく、病漸く危篤に瀕して世の中惜み聞ゆる事、御息所の葵祭の車爭ひより葵の上に對する嫉妬の念やみ難き事、御息所が、夢にして葵の上のもとにゆきて、履引きまさぐり、打擲する事、御息所がさめて、唯あやしく、ぼけぼけとして苦悶の中に惱み臥す事を知るを要する。これ等を知つて、しかる後、樣々の祈に、執ねき御息所のものゝけが調ぜられて、葵の口を藉りて說き出す恨みの數々と、その光景とを讀むを要する。

いであらずや、身の上の、いと苦しきを、暫休めたまへと聞えむとてなむ、斯く參り來むとは、更に思はぬを、物思ふ人の魂は、實にあくがるゝものになむありけるとなつかしげにいひて

歎きわび空にみだるゝわが魂を結びとゞめよしたがひのつま

と宣ふ聲、けはひ、その人にあらずかはり給へり。いと怪しく思しめぐらすに、たゞ彼の御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どものいひ出づる事と聞きにくゝ思し宣ひ消つを、目に見す見す、世にはかかる事こそはありけれと踈ましうなりぬ。

これもまた源氏の幻覺であらうか。物語はすでに御息所の魂の遊離して葵の上のもとに行きかよふ事を語る。更

に葵の上の漸くに產の紐を解き、御息所の妬みいよいよ加はる事を語る。御息所の靈なほ此處に交通する事を語る。これ御息所の夢か、幻覺か。されどさめての後意識のわれにかへれる後のあやしき事實はいかに。

あやしう我にもあらぬ御心地を思しつゞくるに、御衣などもたゞ芥子の香にしみかへりたり。怪しさに御ゆするまゐり御衣着かへなどし給ひて試み給へど、なほ同じ樣にのみあれば、我身ながらだに疎ましう思さるゝに、まして人のいひ思はむ事など、人に宣ふべき事ならねば、心ひとつに思し歎くに、いとゞ御心がはりもまさりゆく。

これもまた幻覺であらうか。本文の中に「芥子の香にしみかへり」といふは、「細流抄」の「邪氣の護摩に芥子を焚くなり、其香御息所の衣にとまりけるなり」といふ解に從ふべきこと勿論。即ち、御息所が病室に出入した歷然たる證である。斯る事も幻覺妄覺として往々存在する、亦幻覺妄覺として見るべきであらうか。かゝる考察は、源氏物語の中から變態心理の資料を索むる時には重要なる問題であらう。しかし、こゝには自ら他の點から、物語の作意から推すべきである。たゞ、作者がかゝる事を叙し來つたその意の那邊にあるかを知らんと欲するのみである。延いて、かの「夕顏の卷」に、さばかりの解釋をなした廣道が、この段に於て、いかなる說明の言をなすかを知らんと欲する。けれど廣道の中風の病は永久に、この段に評釋の筆をそめさせなかつた。さるにても、作者はかゝる事件を、靈界の祕を闡くために作中に寓したか。希有の事とはいひながら、當時の社會たまたま見る事象として、漫に寫實の筆を揮つたか。また江戶末期の作家と意を同じくして、脚色の奇を逐ひ、趣向の新を競ふの餘に出でたか。その闡明は、「夕顏の卷」のものゝけと、「葵の卷」のものゝけとを對比して、然る後に得るものであらう。

二

諸註家が、「夕顏の卷」のものゝけを以て六條御息所となす事の是非はしばらく措く。生靈の人を蠱惑するは、人の心理に、乘ぜらるべき間隙の存するためといふ、いきすだまの特質に關する說明の可不可はしばらく措く。註家がしか考へざるを得なかつた理由、廣道が、妖怪をもて御息所に變形したものと解さざるを得なかつた理由を、まづ物語の敍述の中に討ねる。

「夕顏の卷」は、突爾として、「六條わたりの御しのびありきの頃」といふに筆を起す。六條といふ語、これまでたえてなくして、今はじめて聞くを得たものである。「細流抄」に、「六條の御息所の事はじめて書きいでたり。箒木の卷にしのびしのびの御方たがへ所はあまたありぬべけれどと有、此語より出でたり」といふもの、まさにこれである。しかも、物語の敍述の筆は突爾として又一轉して、夕顏との新しき戀の經緯に入つて、漸く精細をきはめ、かの六條わたりの御方に即して、省筆わづかにほのめかしいふに過ぎぬ。その御方の前坊の北の方なる事は、讀んで「葵の卷」に至つて、はじめて知る。けれど、讀者はほのかにいひ掠められた筆のあとを辿つて、その御方のやんごとなき君である事を知る。またうちとけぬ御有樣などのけしき異なる性質の持主である事を知る、このうちとけぬといふ語は、「細流抄」の如く、「用意ふかくけ高き人」と解すべきであらうか。「湖月抄師說」の如く、「此詞夕顏にて歌詠みかけ、ざれ過ぎめざましかりしを、御覽じたるめうつしに、御息所の有樣けしき、異におもひ給ふなり」と解すべきではあらうか。兩說共に非、まさに「評釋」のいふが如く解して、はじめて、「源氏物語」の原意

にかなふ事であらう。この御方にさる執ねく、ねじけがましき性質がある、故に新しき女に好奇の念の燃ゆるものあれど、源氏はこの君と對坐するかぎり、これをおも向くべく、戀の技巧を盡さなければならなかつた。「ありつる垣根おもほし出らるべくもあらずかし」といふもの即ちこれ。源氏終宵之に努力す、故に「つとめて寢すごし給ひて、日さし出づるほどに出で給」はざるを得ない。そこを出でゝはじめて源氏は、心の安易を覺える。その道すがらにありし垣根を見る。その心おのづからこれに繫がれざるを得ない。加之、あやにくなるは源氏の心である。その心は女の背顏に熱して、好顏に冷める。御息所はそのはじめおのが身のほどを考へ、齡の遙にまされる事を考へて、容易に源氏にゆるさなかつた。されど彼女の一度源氏にゆるすや、源氏の態度の前に反して冷然たるものがある。御息所は、さきに虞れたものに直面した。彼女は、その戀の餘りにはかなきを考へて、世に對するすべを知らなかつた。羞恥と怨恨と、執着と嫉妬と、相纏綿して來る。しかも源氏の多情は、いやがうへに、その嫉妬を助長し、怨恨を深大ならしめる。作者の筆、何等の巧妙ぞ、叙述の中に、多くものをいふなくして、よくその間の消息を明にする。

　源氏は六條あたりに、思ひ多き一夜をすごした。漸くそゝのかされてまかる曉、女房中將の君が御見送り申す。源氏はその美しさにたへずして、角の間の勾欄にひきすゑ、さく花のと詠みてその手をとらへる。中將なれてとく、朝ぎりのと詠みておほやけ事に聞えなす。この一段、前栽の露深き花の姿と相配して、一幅の繪を展げなす。作者のこの一段を挿むもの、蓋、源氏のしかく多情なる、また御息所しかく妬み深きをいふのであらうか。中將の君の私の懸想を巧みに、その主の君のうへに轉じなすものは、一に主の君の嫉妬を憚るにあつた。作者、この一段に附

記していふ、「まして、さりぬべきついでの御言の葉も　なつかしき御けしきを見奉る人の、すこし物の心をおもひ知るはいかゞは、おろそかに思ひ聞えん、明暮うちとけてしもおはせぬを心もとなき事に思ふべかんめり」と。これ、中將も、しか思ふ旨をほのめかしたものであらう。「玉の小櫛」に、「これは中將などが、しか思ふべきものぞと册子地よりいふなり」といふは、まさしく解し得たもの。中將が、源氏の心ばへを喜んで、しかもなほおほやけ事にきこえなすといふのは、いよいよ主の君の妬みを恐るゝ事を明にする。

源氏すでに夕顏のもとに通ひはじめた。夕顏の家は見いれの程なく、物はかなき宿、御息所の邸は木だち前栽など、いとのどやかに心にくゝ住みなし給ふ所。この對照は、やがて二人の主の本性に於ても見る。御息所はうちとけ難き君、夕顏は源氏をして、心ばみたる方を少し添へたらばと思はする女。源氏が夕顏の柔順をよろこぶ時、心の一方に御息所の嫉妬をおそる。源氏の心の中に御息所と夕顏と潜み居て、互にその一隅を領する。故になにがし院に、源氏の夕顏と歡會する時、一切を忘れてその甘きに陶醉するも醒むるやがて、御息所をおもふ。源氏未意識する事なくとも、その潜在し、潜行するもの、突として現はれて、夢となり、幻覺となるべきである。「夕顏の卷」に於ける心理的敍述の自然をいふものはその敍述の層々として、かゝる正しき順序をなす事をさしていふのである。

かくして出現した「をかしげなる女」である。諸抄解して六條御息所となし、また「評釋」解して、妖怪が六條御息所に扮すとなすも、失當でなからう。作者心あつてか、心なくてか、讀む者をしてしか思はする敍述の順序をなした。源氏の寢るその直前におもふ所は斯うであつた。

かつはあやしの心や、六條わたりにも、いかに思ひ亂れ給ふらん、うらみられんも苦しう理なりと、いとほし

きすぢは、まづ思ひ聞え給ふ。何心もなきさしむかひをあはれとおぼすまゝに、餘り心ふかく見る人も苦しき御有様をすこしとりすてばやと思ひくらべ給ひける。

この一節、やがて、宵すぐるほど云々につゞく。かくおもひ寢に寢たるやがてのをかしげなる女である。讀者の意、おのづから六條御息所を聯想して、あやしまないであらう。

かゝる心理的敍述の類例を、「源氏物語」の中に索れば、「宇治十帖」の中に一層作意の明なるものを見る。浮舟はすでに死を決した、薫大將にゆるし、匂宮にゆるして、しかも、なほおもひ惑ふ時、死するより外、その苦惱を救ふ道を知らなかつた。ただ親を殘して死すの罪障深きをおもふ一念のみに、遂行することが出來なかつた。外の壓迫はいよ〳〵加はる。浮舟の心はいよ〳〵決した。川の方を見やりつゝ、羊の歩みよりもほど近き心地するにつけて親も戀しく、醜き兄弟も戀しく、わけて薫大將も戀しく、まして匂宮も戀しく思ひわづらふ夜、夢見心地にさすらひ出でゝ道のべに倒れた。この昏睡の狀は、漸く加持祈禱によつて囘復した。囘復して、その當時を追想すれば、斯樣であつた。

いといみじと物を思ひ歎きて、皆人の寢たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈しく川波も荒く聞えしを、一人物恐ろしかりしかば、來し方行末も覺えで、簀子の端に足をさし下しながら、行くべき方も惑はれて、歸り入らむも中空にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを、烏滸がましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよといひつゝ、つくづくと居たりしを、いと淸げなる男の寄り來て、いざ給へ、おのが許へ、と言ひて抱く心地のせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えし程より、心地惑ひにけるなめり。知らぬ所に

する閒きて、この男は消え失せぬと見しを、遂にかく本意の如くせずなりぬると、思ひつゝ、いみじう泣くと思ひし程に、その後の事はたえて如何にも如何にも覺えず、人のいふを聞けば、多くの日頃も經にけり。

浮舟は、はじめ漫然と淸げなる男を見る、つぎにその男を匂宮と見る。これ彼女の胸裏にたえず徂徠するものであつた。すべて理を以て解し得るものである。「夕顏の卷」のものゝけは、これと相迎へて、闡明の度漸く加はる事を覺える。しかし「手習の卷」には他の不可解の一面が存する。僧都などが浮舟の爲に加持し祈禱するや、ものゝけは調ぜられて、浮舟を誘ふの始終を語る。昔行ぜし法師のいさゝか世に恨を留めて漂ひありきしほどに、よき女のあまた住める所に住み着きて、大姫を執り殺し、なほ浮舟が自ら世を恨みて死をおもふに便を得て、暗き夜道を一人行く彼女を執り殺さうとしたと。斯くの如くば、前の淸げなる男は、浮舟の幻覺であつて、後の假死の狀に陷るのみが、このものゝけの所業である。然らば、「夕顏の卷」に於て、源氏のをかしげなる女を見たのは、彼の幻覺であり、その夕顏をとり殺したものは、別のものゝけであらうか。さるにしても、この法師なる者、畢竟何者ぞ、たゞし、この疑問は「宇治十帖」に於てはつひに說明されなかつた。作者老猾、巧みにその因緣を避けた、書中僧都の斯くいふは何ぞの問に對してものゝけの答なきをいふ、「たゞ憑きたる人、ものはかなきけにや、はかばかしう言はず」とのみ敍す。讀者はつひにその人を知らず、知らずして、たゞ浮舟、大姫に纏綿する死靈の祟なる事を知つて滿足す。この死靈の現はるゝは、偶然であつて、其浮舟を惱すも偶然である。いはゞこれ運命そのものゝ象徵であらうか。しかし、「宇治十帖」に於て、讀者の興味は、一に大姫また浮舟の薄倖の身にかゝはる。しかも、作者はかの悲愁がその性格より出づるを語る。故に讀者またその二人の運命の描きをはじめより期して、その天より然らしむる

か、もの〻けの然らしむるかを意中に置かず。作者聰明、輕く之をいひ棄て〻、ただ浮舟の假死に陷る因をのみ明にす。夕顏の死も或は運命これを然らしめたものと解するの可能を見る。されど讀者はかのをかしげなる女を運命の象徵とのみ見て滿足するものではない。まして、一方その女と源氏との間に交渉のありげなるを如何にしよう。「手習の卷」のもの〻けと、「夕顏の卷」のもの〻けとの相違は、解者がしかおもふにあらずして、作者が、しかおもはするのである。この一事を以て參照し來れば、「夕顏の卷」のもの〻けなるもの更に闡明の度の加はり來るをおぼゆる。

浮舟が一時身を潛めて居た三條の宿はその陋巷に伍してさ〻やかたる事、宛として五條の夕顏の宿である。薰大將がそこに宿つたその曉、物賣りの聲をきくも亦相似て居る。車して、浮舟を宇治に誘ひゆくも、源氏のなにがし院にゆくと相似て居る。八月十五夜と九月十三夜と時もまた相似たる、薰、廣道の所謂對照から出でたものであらうか。源氏が御息所をおもふのは、なほ薰が大姬をおもふが如きものである。薰大將はもと大姬を戀して、そのなき今も念々忘れ得ざるもの、大姬の異腹妹浮舟との戀の如きも、中姬のいふがま〻に、大姬を忘れるためのすさびである。故にひとつ車にして見る浮舟も憎からねど、なつかしき宇治に近づくに從つて、來し方の戀しさに堪へず。宇治の宿に至るや、大姬をしのぶ念更に深く、あはれ亡き魂や、宿りて見給ふらむ、誰によつてかく漫に惑ひありくものにもあらなくにと思ひ續ける。事情かくの如くして、しかも、その宇治の一夜さ、大姬は薰の夢に見えなかつた。まして、もの〻けとしての姿の如きはつひに見るよしもなかつた。「京屋」と「夕顏」と景情しかく相似て、かの幽怪の事、しかく相背くは何故であらうか。大姬は薰に對して、何の嫉妬がある、怨恨がある、もの〻けとな

つて、浮舟を恐死せしむべき何の因緣がある。薰の大姫を夢に見、幻覺に見る愛戀の情、もとよりあるべきの理、しかも作者のこれを避けたるは何故であらうか。作者、みづから遙に夕顏のもの丶けの爲に解を寄せんとするがためといふはあまりに牽强の言であらうか。

作者に心あるか、あらぬかは知らねど、「夕顏」を讀む者は自ら「東屋」を對照する。彼、それとこれとの趣向脚色を讀み比べて、ひそかに夕顏のもの丶けを解し得たりとなすであらう。曰く、かのもの丶けは、もとより源氏の心理より出づ、されどまた、因緣あつて、外より源氏に迫る。この內よりするものと、外よりするものと、相合して、ここになにがし院の怪事は起ると。而して、その因緣の何たるを考ふるとき、かのもの丶けを、妬深き六條御息所のいきすだまと解する事の正しきをおもふ。されど、またおもふ、斯くの如くば、作者何故に六條御息所といはずして、をかしげなる女とのみいふか。また何故に、四十九日のまたの夜の夢を敍して、源氏をして院に棲める妖怪とおもはせたか。また、何故に後の註家をして、源氏と見解を同じうすべきか否におもひまどはするか。これ平安時代に於けるもの丶けの解釋に關する疑問であると共に、また作者の作意に關する疑問である。

三

夕顏幽怪の一段をば、諸註家「江談抄」に收載の川原院源融の靈の話說に準據すといふ事は前に述べた。宇多法皇京極御息所と車を同じうして川原院に渡御せられた。夜に入つて月明である。法皇御車の疊を取りおろして、御座となし、御息所と房內の事を行はせられた。殿中の塗籠に人あつて、戶を開いて出で丶來る。法皇の問に答へて、

融候ふ、御息所を下され候へといふ。法皇のたまふ、汝存生の時、われ主上であつた、何の恨あつて此言をなす、退き歸るべしと。靈物法皇の御腰を抱く。御息所半死して顏色を失ふ。法皇扶け乘せて還御の後、淨藏大法師を召して加持させられた、御息所わづかに蘇生し給ふ事を得た。「江談抄」の要大方斯くの如し。源氏物語の作者は、當時人口に膾炙したこの說話をとり來つて、直に利用して、その景情を髣髴せしめた。源氏が「むかし物語などにこそ、かゝる事は聞け」といふは、この傳說をさしていふか。「法師などをこそは、かゝる方の賴しきものにはおぼすべけれ」とは、淨藏大法師の加持を聯想せしむる言であらうか。もし、この準據說にして正しいものとすれば、その素材と彫琢のあとを比較して今更に作者がその荒唐を棄却して、その奇趣を把持する妙術に驚く。源氏物語を伊勢、うつぼ、おちくぼと比較する時、それ等の事件を模し、それ等の脚色に倣ひながら、いつも、それ等の無稽を脫して、これを合理に聯ねる着想の妙に驚く。もし、今日散佚し亡滅した數十の小說をとり、またその資料となつた口碑傳說の一々を探し出でゝ、その一々を比較する時は、それ等の唐突の事件が、必然の事件に飜案せられ、暗模糊の世界が現實の燭光に照され出づる事を知るのであらう。たゞ、斯樣な結果を今にして見る事を得ざるにせよ、篇中、いふ所の昔物語なるものを考へれば、大方「江談抄」のそれの如く、妖怪の突として出現する類であつたらう。例せば「手習の卷」に「顏を見せんとするに、昔有りけん眼も鼻もなかりける女鬼にやあらん」といふは、諸抄にいふ、文珠樓の目なし鬼の事か、さすれば、「朱の盤の繪物語」のいか樣なるものであるかを推する事が出來よう。作者これを利用して、直に僧侶の恐怖のほどをうつし出す。しかも、その荒誕なるものは、作中に別に交渉する事なくてやむ。この類なほ一々指摘する事が出來よう。故に、當時不可思議の事件、超自然の事象をのみ小說に見來

た讀者は、「源氏物語」を見るに及んで、すべて平淡の取材、寫實の態度、篇中皆讀者の實世界と相背く人物なく、事件なしと考へた事であらう。故に「源氏物語」に奇怪解し難き事件があるとすれば、それは今日から見て奇怪とすべき事であつて、當時に於ては、現實茶飯の事件と見た事であらう。よし、假に、當時に於ても、それを奇怪と見るものであつたならば、その奇怪と尋常と、その超自然と自然と、その不可思議と可思議とを截然として劃する事なく、不知不識の間に、渾然融合して一とする作者の靈腕に驚いた事であらう。

源氏は、なにがし院の夜、幽怪にあうてむくつけきたゞ中、愴然として夕顏の骸を抱く。けだし、作者筆をつくして、凄愴の趣を現じ、讀者聲をはげまして絶妙の讃を呈する所、作者また一點火を照して凄愴の裏、更に暗澹きはまりなきものをうつし出す。「風やゝ荒々しう吹きたるは、まして松のひゞき木深く聞えて、けしきある鳥のから聲になきたるも、梟はこれにやとおぼゆ。」諸抄これを見て、白氏文集中の詩句、「梟鳴松桂枝」を引用したものとする。また、源氏は梟の聲を知らず、わづかに、この句を諳ずるためにのみ、梟を聯想するものと解し、作者よく貴人の狀をうつし得たりと稱す。かゝる解釋は、もとより正當であらう。而してこの句の出所を考ふれば、いふまでもなく、文集第一卷凶宅の詩である。詩はまづ、長安市街の中に大宅の荒廢したあり樣をうつし出す。前の一句につゞいて、「狐藏蘭菊叢、蒼苔黄葉地、日暮多旋風」といふ。次に何が故に廢居となつて居るかを語る。前主後主相つゞいて、こゝに數代。皆殃禍にかゝる、故に人これを嫌つて住まずといふ。源氏すでにこの詩を諳んず。故に荒れすたれたなにがし院にある時、まづこの詩を憶ふ、やがて松間になく鳥のから聲を聞く、即ちこの詩中より梟をおもひ來る。事は極めて自然である。「あれたる所は、狐などやうの物の人おびやかさむ云々」もまたこの詩句と緣なき

ものではなかつた。

作者は賢し、かく貴人の様を、この一事によつて髣髴せしむると共に これによつて、かの幽怪は源氏の胸裏に潜在するものゝ投射なる事をほのめかす。何を以てこれをいふ、詩の末節にいふ、「嗟嗟俗人心、甚矣其愚蒙、但恐災將至、不思禍所從、我今題此詩、欲悟迷者胸」と。これ實に白居易が荒廢の居宅を藉りていはんと欲した所で、すなはち詩の正意である。作者この詩を示して、源氏の幽怪を語るは、畢竟、我よりし、我より迎ふるものと語るのであらうか。而して作意の底を割つて、これを讀者に示したのであらうか。

薫大將が浮舟を宇治に伴ひゆく日、興に乘じて琴を彈く。興盡きて朗詠をうたふ、「楚王臺上夜琴聲」と。人々いとめでたく思ふやうなりときく。作者、きく人々の教養に淺くして、うたふ詩句の何を意味するかを解し得ざるかを指摘す。「さるは扇の色も、心おきつべき閨の古をば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ後れたるなめりかし」といふ。閨の古とはいふまでもなく班婕妤の故事、即ち朗詠の楚王臺上の前句、「班女閨中秋扇色」といふがそれ。薫はもとより、この前句を知り後句を知る。故に、無意識に後句を誦し出でゝ、ふと前句をおもひ、折も折、時も時、こはゆゝしき事と、心ひそかにをのゝいた事であつたらう。作者は薫大將の意中を斯うしるす。「事こそあれ、怪しくいひつるかなとおぼす」と。薫と浮舟の戀のつひに完きを得なかつた豫兆は、こゝに見る事が出來る。「浮舟の卷」と「手習の卷」とは、所詮その豫兆のあまらざるを實證するに過ぎなかつた。作者が、作意を割るとは、大方斯くの如きをいふ。

六條御息所と解し得べきものゝけの出現を、斯うまで、靜に、ゆるやかに、序を以て叙し來つた作者は、また夕

顔の死に對して、事變の必ずしも唐突ならぬを說く事に於て、極めて鄭重である。作者は右近をして、夕顔の物おぢをわりなくする本性なる事を二度もくりかへしていはせた。これ、彼女の怯懦を極言して、その恐死の唐突なるを緩和するためであらうか。また源氏をして、「いとかよわくて晝も空をのみ見つるものを」と思ひおこさする。その意、「河海抄」のいふが如く、病者の空を見るは、死相の一つなりと解する事の當らざるは勿論なれど、なほ夕顔の中に贊するものゝある事を示したのであらう。五條の宿に隣翁の當來の導師と祈るをきいて、來世までの契をこむるのは、表にその戀の深きを示して、裏にやがてこの世には、ともにあり得ぬはかなさを示すものであらう。戀人死別のかなしみを厭うて、長生殿の舊きためしを忌々しと見、はねを交さんとはひきかへて、彌勒の世をぞかね給ふとは、まこと、作者人を欺くの巧妙を語るものであらう。斯くの如きは、すべて夕顔の死の前兆である。夕顔の「さきのよの」の詠は正意に、その閲歷の悲慘と、將來の不安を語つて、反意に、過去世と未來世の因果を語る。ましてや、なにがしの院の荒凉たる光景は、ものおぢの夕顔をして、屛息せしめた。かの「山の端の」の詠の如き、わづかに源氏のざれ言に答へて、眞に恐怖の苦しきを語る。されど、作者は、夕顔のこの恐怖を正面より說く事の誇張に失するをおそる。故に、一句を點綴していふ、「かのさしつどへる住ひの心ならひならんと、をかしうおぼす」と。これ夕顔に未だ死兆あるを知らざる源氏の所見である。讀者は源氏のしか思ふを聞いて、まことさる事であらうと考へ、夕顔の恐怖の誇張を咎めずして、ますますその死兆のゆらめきを凝視する。すでにこの死兆があり、また恐怖がある、松のひゞきにも脅えよう、梟の聲にも魂を消さう、夢にも幻にも息のたえよう。斯うおもひ來つて、その變死を變死として考へないであらう。作者かくまでに、事の自然を以て、筆を驅りながら、なほ自然を以

て解し難きものを留むるは、何であらうか。もの〻けの出現、これをも自然を以て解し得るであらうか。讀む者は、しか解してあやしまねど、作者の意は果していづこにあつたらう。作者は驚異と可能との限界を嚴守する。その限界は時代の見解の上に立つ。こゝに於て、平安時代のもの〻けなるものに就いて、考察するを要する。

四

もの〻けは、物氣であり、神氣である。一切の超自然的靈性の人に對して惡作用をなすものをいふとは、宣長の說明である。從つて、もの〻けの種類の多い事は、いふ迄もなけれど、「夕顏」のもの〻けを六條御息所とする假定の前には、しばらく樹神、または獸怪の類よりひき離して、人を中心としたる怪異について考ふるを便とする。その人の生身にして怪をなす者がある、いきすだまが即ちこれ。「葵の卷」の六條御息所のもの〻けの如きがそれである。人死して怪をなすものがある、「和名鈔」の死魂神は即ちこれ、かの「手習の卷」の大姫、浮舟にあだする僧のもののけの如きがそれである。更に「若菜の卷」に見る六條御息所のもの〻けは、すでに死して怪をなす死魂神である。御息所は紫の上を惱した、されど源氏の悲歎限りなきを見て、人間にありし時の心に歸つて、紫の上の死をゆるすといふ樣、さながら、「葵の卷」の生靈の折のけはひである。六條御息所の死靈はまた女三の宮を惱した。先に源氏が御息所のもの〻けを調伏し得て、紫の上をよみがへらせたのを恨むためである。「いとかしこう取りかへしつと、人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなむ、日頃さぶらひつる、今はかへりなむとてうち笑ふ。」この笑ひ、いかばかりの凄さぞ。作者多くいはずして明に傳ふ。例の妙筆人を驚殺するものである。

斯るもの丶けの信仰は、靈魂が肉體を遊離して獨立することの可能を認め、さらに種々の靈妙なる作用をなす事を認め且信ずる事にはじまる。その魂が他の體を借り、或はその影像がさながら人の如くに動き且働く事を信ずるにはじまる。これ實に民族心理學者の所謂原始民族の靈魂信仰といふものであらうか。しからば、このもの丶けの信仰を有する平安時代は、その點に於てなほ原始生活の狀態を離れ得なかつたか。この信仰は文化の進める社會にも迷信として殘存するは、公知の事實であるとはいへ、その迷信の殊に平安時代に甚しい理由は如何。これを考ふる者は、まづ時代の相をかへりみるを要する。

「源氏物語」は屢、魂の遊離をいひ、又その遊離を防止する呪についていふ。例へば「葵の卷」の「歎きわび空にみだる丶わが魂を結びとゞめよしたがへのつま」の歌に見るが如きがそれである。「河海抄」は「玉はみつぬしは誰とも知らねどもむすびとゞめつしたがひのつま」を引用して、吉備大臣の誦文の歌とし「玉の出ぬるを結びとむる事なれば也、むすびとどめよとは、うかる丶心を本心にかへしたまへとかこつ心也といふ。說いて、いまだ詳ならねど、その意は、「玉はみつの歌、三返誦之、男左、女右の褄を結びて三をへて解之」と「袋册子」にいふが如きものであらうか。この事、「伊勢」にも「狹衣」にも、また歌集にも類例類歌の多きを見る。か丶る呪が一層形式化した時、そこに玉むすびの緒は成り、玉しづめの祭は成立する。玉むすびの緒は魂を結ぶ呪の緒である。かの貞觀二年、盜あつて(註一)偷める主上の結御魂緒とはこれをさしていふ。玉しづめの祭とは、「公事根源」に(註十)遊離の運魂をまねぎて身體の中府にしづむる功能ありといふ祭式である。この說もとより支那の思想に出づ。支那に於て、靈を陰陽二氣にわかつ事は、すでに「禮記」に於て見る。

魂氣歸於天、形魂歸於地、故祭求諸陰陽之義也、

これはもとより、靈魂信仰の原始狀態にあらずして、幾多の哲學的思索を經て來つたもの、しかも、これ等は自ら我靈魂信仰、これも亦然るべき哲學的思索を經て、宗教的階段にまで達した我靈魂信仰、かの柔剛、生熟によつて分たれたる和魂荒魂の存在と作用とに關する信仰と、いちはやく融合すべき理由と歷史とを有する。その神道と一致するところに、方技の諸道が流行する。魂しづめの祭、また陰陽道に於て見るものはそれである。佛教も亦、その本來の敎義を離れて、たとへば大貳の乳母の尼となつて、病を癒すほどの祈禱教となるや、自ら前の二つのものと提携する。これ奈良時代以來の風潮にして、平安時代に入つて、一段の激甚を加へた。社會的條件おのづから然らしめたものである。

民族心理を研究する者は、靈魂信仰の發生原因を原始民族の智識の缺乏に歸し、その夢と現實と、また幻覺と現實との別を知らずして、直に夢また幻覺を現實となす事にありとする。かゝる說の是非は、わが與り知らざるところ。されど、靈魂信仰を多く具有して居た平安時代の人士に、勿論科學的知識なきを知る、また夢みる事の多く、その夢と現實とのけぢめを忘れて、直に現實と信ずる事の多きを知る。幻覺に於て、また然るを知る。平安時代に科學の發達なきは、今更いふも、烏滸の沙汰であらう。されど、ゆるされた範圍に於て、當時の人士は知識の討究に力を盡した。たとへば源順が「和名類聚抄」二十卷を編む時には、群書の引據甚努めた。彼はその鬼魅類第十七に窮鬼を釋く。

遊仙窟云窮鬼、師說伊岐須太萬。遊仙窟第十三葉。夢中疑是實、覺後忽非眞、誠知腸欲斷、窮鬼故調之。

引用の詩は「遊仙窟」によれば、張文成が、十娘を夢みて賦したもの。「少時坐睡、則夢見十娘、驚覺攪之、忽然空手、心中悵快復何可論、余因乃詠曰云云」と。その註に曰く、「人夢魂與鬼道、言我心中正憶此十娘、忽即夢見惛忽此鬼作夢誑我故罵之曰、窮鬼也」と。註は何人の作であるかを知らない。或は我國人の手に成つたものであらうか、もし然りとすれば、直に當時に於ける夢の解説として見るべきであらう。もし彼の國の人の手になつたとしたならば、當時「遊仙窟」を愛讀するほどの人は、彼の文化を以て遙にわれにまさると見る、故に必ず夢の眞性を說き得たものとしたらう。

物おもへば澤の螢もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

この歌、「後拾遺集」神祇部に載せる和泉式部の詠、はしがきして、「男に忘られて侍りける頃、貴船にまゐりて、みたらし河に螢のとび侍りけるをみてよめる」といふ。これを讀む者は、直に大己貴神がおのが奇魂、幸魂を見るの書紀の一節(註5)を聯想するであらう。

この歌もとより詩的空想から出でゝ居るとはいへ、亦現實の懊惱と靈魂の遊離と相關係すといふ信仰の下行を見る。「伊勢物語」にいふ、女のもとよりたよりして夢に男を見たと。その男、歌をおくつていふ、「思ひあまり出でにし魂のあるならん夜ふかく見えばたま結びせよ」と。これは、現實の懊惱と、靈魂の遊離とに加へるに夢の怪異を以てした。かゝる事は、亦「源氏物語」にも數々見る事が出來る。かの右近が浮舟に告げさとす言葉は、まさしくそれである。「かくのみ物を思はせば、物思ふ人の魂はあくがるゝものなれば夢も騷しきならん」と。夢と魂と現實懊惱の關係をかく信ずる物語に於て、源氏が夢にをかしげなる女を見た事實をいかに解すべきか。窮鬼が然させたか。そ

の女の影像魂が然させたか。六條御息所の生魂が然させたか、前後照合すれば、必ずしも斷じ得ぬ事でもなからう。

されど、こゝにさう斷定するのは、やゝ早きに失する。何となれば、平安時代の夢についてなほ考ふべき多くを殘すがためである。源氏がよく夢みる如く、平安時代の人よく夢みた。故に、夢卜、夢合、夢解の類は頻に行はれた。たとへば、女三の宮の夢にから猫を見た事によつてその懷胎を判ずるが如き類である。右大將道綱の母は、思ひ多き人、ある夜、男の足の裏に門といふ文字を書きつくると見て、いとし子道綱の將來について、おもひ惱む事が多かつた。(蜻蛉日記)

もしそれ人に代りて夢を見るのをかしさ、しかもその夢を聞いて、直におのれが未來の兆として疑はぬあやしさは、「幅一尺の鏡を鑄させて、えゐて參らせぬかはりにとて、僧をいだしたてゝ初瀨に詣でさすめり、三日さぶらひて、この人のあべからむ樣、夢に見せたまへなどいひて詣でさするなめり云々」(更科日記)まさにこれである。彼等は、夢を以て、未來の豫兆と考へると共に、また現實の反射表象とも考へる。故に、空蟬が中川の宿にして、ゆくりなく源氏と逢ひ見たるその曉、いかに恐怖の眼もて伊豫の空を望んだらう。「伊豫のかたのみ思ひやられて、夢にや見ゆらんと、そら怖しくつゝまし」と作者は語る。もし、それ、「更科日記」の著者がその姉と共に、その飼猫が藤原行成の女たる事を信じて疑はぬ夢の一節の如き、(註6)更に、轉生思想の纏綿するを示して、平安時代の夢、いよいよ出でゝいよいよ事多きを見る。

彼等またよく幻影を見た。源氏、須磨に遷るにさきだちて、北山なる父の陵に詣づる。「月も雲がくれて森の木立こ深く心すごし、歸り出でむ方もなき心地して、拜み給ふに、ありし御面影さやかに見え給へる、そゞろ寒きほど

なり。

なきかけやいかで見るらむよそへつゝ眺むる月も雲がくれぬる。」

こゝにこれを引用するは月を見る源氏と、闇に立つ源氏と、さやかに父の幻影を見る源氏とを聯關して、いかに動きゆくかの心理的過程を證するためである。右大臣師輔が百鬼夜行を見るの記事は「大鏡」にあつて、敍述詳細を極む、これもまた考ふべき事である。「大鏡」は當時の口傳をさながらに書き載せたもの、「源氏物語」の注脚に當つべきが多い。しかも皆平安時代の生活を語つて、その夢の根柢の深きを示す。

「源氏物語」にうつし出されたものは、戀愛の悲喜、權勢の消長である、即ちこれ平安貴族生活の縮圖。葵のうへの父と弘徽殿の父と、弘徽殿の生みまゐらせた帝と、藤壺の生みまゐらせた帝と、その間に介在する源氏の君と、それ等をめぐりて渦なすものは、皆權勢の問題である。おもへ、源氏何故に須磨に移らざるを得なかつたかを。權勢動搖のはては、たゞ宿命と觀るべきか。おもへ、源氏何故に、進んで須磨に赴けるかを。それをしも宿命と信じたからである。彼等は大に宿命を恐れる、またさし當つては、政敵を恐れ、その陷擠を恐れ、讒構を恐れ、呪咀を恐る。更にその嫉妬怨恨の情の怪をなして、死靈となりいきすだまとなつて、われに迫るを恐る。祈禱加持はわづかに、この恐怖から脫するの道である、方技の諸道はかくして盛であつた。宿命の恐怖はたゞ諦悟を得て忘れられる。佛教は、その任を擔ふと共に、また方技の諸道と、一つになつてものゝけ鎭護の職を掌る。すべての宗教は、健かなる靈に遠かつて、まづ惱める靈のための迷信として榮える。斯る不安の社會には、たゞ揣摩憶測を逞うして、相互を敵とし讐として見る。杞憂また杞憂を產み、邪推また邪推を生む。夢も多いであらう。幻覺も多からざるを

得ない。夢も幻覺もすべて惡化せられて、夢に幻に見るところは、悉く仇敵の姿のみ。仇敵われに迫る姿のみ。彼等もとより潜在意識の何たるを知らず、精神分析說の何たるを知らず、直に魂の遊離を信じ、敵人の魂の來りて或は夢に或は現に我を苦しむる事を感じ、しかも支那の群籍と照して、愈その眞なるをおもふ。この樣にしてものゝけの出現の記事は、「源氏物語」の中に多からざるを得ない。此點より彼等は竟に原始人と擇ぶ所なかつた。なにがしの院の幽怪の事、今日より見れば、心靈を信じ、心靈の交通を信ずる者の外は、六條御息所の生靈說を不合理として咎めるであらう。しかし、平安時代の當時にあつては、希有の事なるが故にあやしとこそいへ、誰かこの事實を否定するものがあらうぞ。

戀は人をして、つねに恍惚の間に居らしむ。われかのけしきといひ、現心あらずといひ、ほけほけしうといふのは即ちこれ。戀人をおもふ情緒切にして、その心像明に、夢に幻覺に見るところさやかにして直に現實に逢ひ、語ると信ずる。たとへば桐壺の帝のなき世の更衣をおもふが如きはそれである。帝、月おもしろければ、更衣のかいならすものゝ音を思ひ、そのきこえ出づるの言の葉をおもふ、故に、「そのかたちの面影につとそひておさぼるとしる」してある。作者、この幻影の狀をうつして、さて帝の情懷をしるす、「やみのうつゝにはなほ劣りけり」と。卽ち「うば玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」の歌による。夢とうつゝの優劣、そはいづれにありとも、意識の朦朧たる狀態を示す事實に斯くの如きものがある。この狀態を長き期間に亙つて持續するとすれば、純然たる精神病態といはうか。もし、精神病なる觀念のゆくりなく、頭に浮び來るとき、平安貴族の生活を顧みて、直にそれを彼等のうへに擬するのは果して失當であらうか。かの運命を恐れ、敵を怖れ、呪咀を恐れ、生靈

を恐れ、死靈を恐れ、はては恐れずともよき事を恐るゝもの、所謂無根恐怖の病態でなからうか。夕顔の恐怖性は何ぞ。また六條御息所の嫉妬は何ぞ。そのとげ難きもの、源氏のもの困ずるものは、ヒステリー性の疾患によるか。されど御息所をのみ云々するは當らぬ。たゞ彼女は、その疾患の重きを見るのみ。平安時代の貴族にしてこの傾向なき一人があらうか。彼等は權勢の暗鬪に疲れ、戀愛の葛藤に疲れ、官能の享樂に疲れ、感覺の鋭敏に疲る。その疲勞の極に齎し來るものは意氣の銷沈である、活力の減退である。懷疑の思想はこゝに生じ、神祕の思想もこゝに萠す。世をあげて、精神病者、變質者、かの文化病的特徵なるもの歴々として指摘すべきである。

源氏の君わづかに、十七歲、享樂に狂ふ蝶であつて、また悲觀に巢くふ欝の蟲である。彼のはじめて夕顔の宿を見るや、「あはれにいづこかさしてとおもほしなせば、玉の臺もおなじ事なり」と思ふ。夕顔の死をかなしむ右近に諭しては「さなん世の中はある、とあるもかゝるも同じ命の限りあるものになんある」といふ。彼すでに然り。御息所は二十四、しかも寡婦の身、その境遇、その地位、またおもふところ多からざるを得ない、彼女の嫉妬、一はその人より來り、一は時代より來る。その人より來るは、彼女みづからも知る、源氏も知る。その時代の病より來るは、同じ病に惱む源氏は知らず、その當時の人も知らず、たゞ今の讀者のみ知る。源氏かつて御息所の嫉妬を評す。「人見え憎く苦しかりし心ざまになむありし、怨むべきふしぞ、けに理と覺ゆるふしを、やがて長く思ひつめて、深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。」この嫉妬はもとより源氏に對する愛着から來る。その執着の一面はまた體面を重んずるの過大から來る。源氏また評していふ。「心ゆるびなく恥しくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦をかはさむ事には、いとつゞましき所のありしかば、うちとけては見おとさるゝ事など餘りつくろひし程に、や

かて隔たりし中ぞかし」と。この御息所の體面をおもふの甚しきは、即ち精神病的徵候と見るべきであらうか。そはともあれ御息所の嫉妬は、つひに尋常のものでなかつた、果然その靈生きては、葵の上を惱し、死しては紫の上を惱す。彼女もとより源氏が生前の罪を悔いて、彼女の娘秋好中宮のために好意を致すを知る。されど、嫉妬は彼女にとつては、遙に母子恩愛の上に出づる、彼女の嫉妬は源氏が、紫の上におのが惡評をいひきかすを恨み、おのが體面を毀損するを怨む。「生きての世に、人より貶して思し捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに心よからず、憎かりし有樣を宣ひ出でたりしなむいと恨めしく、今はたゞ亡きに思し許して、こと人のいひ貶しめむをだに省き隱し給へとこそ思へ。」この怨恨つひに一度紫の上を危篤に陷れた。

御息所の死靈斯くの如くして、その出現の理斯くの如し。もし、この嫉妬を認むる以上、嫉妬から、ものゝけとなるを認むる以上、「夕顏」のものゝけまた斯くして出現したと解するは失當であらうか。これを失當とするものは、魂の自在を知らざるものである。御息所が夕顏を知ると知らざるとは、魂の與るところでない。夢は夢みる人の意識せずして、しかも意識下に熱望するところを遂行すと、フロイドはいふ。平安時代が信ずる夢と魂とは更に常智を以て測り知る可らざるものがある。魂は、現身の知らざる事を知り、現身のなし得ざる事を敢てする。御息所いまだ夕顏を知らず、されど源氏が他に心をうつしはせぬかのあだ妬み、法界悋氣、源氏がおのれにうとくなりて我が體面を毀らざるかの焦慮、疑惑は、彼女の魂をば遊離せしめて、源氏のゆく所に伴はしめなかつたか。今人これを信ぜずとも、平安時代の人深く信じて疑はなかつたらう。

御息所は必ずしも、紫の上を憎まず、たゞ源氏には神佛の守深くして近づき難き故にのみ、紫の上を惱ますと語

る。然らば、御息所の魂は必ずしも夕顔を憎まず、されど、神佛の守ある源氏は、なほ太刀をぬいて傍に置いた。これもの丶けに對する呪である。故に、御息所の遊魂は、源氏に迫る事を得ずして、たゞに夕顔をさいなむのみ。しかも、夕顔は怯懦の性情、つひにその恐しさにたへずして死に至つた。もの丶けを信じ、呪の術を信ずる事深き當時の人々は、か丶る物語の筆を信じて、夕顔を以て、源氏の緣によつて死んだと思ひ、源氏と共に、その薄命を悲しむであらう。

さらば四十九日のまたの夜の怪夢は如何、御息所のもののけが女三の宮に憑きて惱す折は、宮が尼の姿となつたを見て、冷に笑つて去つた。四十九日の法事は、夕顔をして成佛せしめた。そのまたの夜、源氏の夢に見えたのは、なほ女三の宮を去ると同じ心の御息所でなかつたらうか。

平安時代の讀者は、「夕顔」を讀んで御息所のいきすだまの出現を、眞實とし、尠くとも眞實たり得ると信じたであらう。しかし、こ丶に重要なる疑問の殘るを見る。作者はこれを信じたるか、信ぜざるか、いづれぞと。彼女は信じて、かくものしたか。信ぜずして信ずる讀者のためにかくものしたか。その如何によつて「源氏物語」考察の條件は二途にわかれる。蓋、最考ふべき問題であらう。一語輕くこれを斷ずる。彼女の日記を見よと。「紫式部日記」は、まづ中宮彰子が父道長の家、土御門殿に於て皇子を產むの前後を叙した、すべてその見聞するところである。これによれば、彼女はもの丶けの出現を見た、もの丶けの聲を聞いた。日記の叙述はその狀を詳にする。「今とせさせ給ふほど、御物怪の妬みののしる聲などのむくつけさよ。源藏人には心譽阿闍梨、兵衛藏人には、そうそといふ人、右近藏人には法住寺の律師、宮內侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物怪にひきたふされて、いと

いとほしかりければ、ねんかく阿闍梨を召し加へてぞのゝしる。阿闍梨の験のうすきにはあらず、御物怪のいみじう強きなりけり。宰相君、をき人にゑいかうを添へたるに、夜ひと夜のゝしりあかして聲もかれにけり、御物怪うつれと召し出でたる人々も皆うつらで騒がれけり」。これを讀んで、誰か「葵」のものゝけのくだりを思ひ浮べざる者があらうか。いふところのをき人は、またつき人といひ、よりましともいふ即ち靈媒である。かく見聞する彼女にして、いかでか靈の交通を信ぜざるの理があらう。故にいふ、作者これを信じて、なにがし院のものゝけを叙したと。

日記にはまた皇子の誕生に喜びうかれる道長の狂體をしるす。(註7)皇子誕生して、はじめて外戚の重きを確實にし、權勢の強きを把持するを得。皇子誕生より來る榮華を夢みつゝ、しかもその實を得ざる悲慘はいかばかりぞ。「素腹の后は、いづくにかおはする」の進の內侍の冷罵はいかに公任の骨を刺したであらう。(註8)斯くの如くば、その產室を繞る羨み、憎み、妬み、さてはに呪ひはいかに激しかつたらう。ものゝけの罵る聲のいかに高らかであつたらう。產婦の心理は、自ら常態を逸する。病的の時代にして、體も心も病的なる產婦の幻覺や、果していかに。これを圍みて、もの案ずる人々の幻覺や錯覺や果して如何。さても、產時に現はるゝものゝけは、或は戀より來り、或は權勢より來る。「葵」は、御息所の父大臣の御靈出現をいふ。「祕說」解して、「御息所の思ひにひかれて、父左大臣の靈もより來る歟」といふは當つて居よう。けれど葵のうへの家では、その靈の出現を子ゆゑの愛のみと解したらうか。「源氏物語」に於ける權勢爭奪の色濃さは、この一事を以ても知り得よう。紫式部日記を引くがために、一語これに及ばざるを得なかつた。

斯くいひ來つて、なほ疑問の存するを見る。作者、靈の交通を信じて御息所の生靈を叙し、しかも、たゞをかしげなる女とのみしろす理如何。この疑問こそ「夕顔」を讀む者の、大に考ふべきところ。「夕顔」一巻の興味、實にこの一筋に繋がるといはふか。

五

「夕顔」の怪味は、探偵小說、また妖怪小說のそれである。その妖怪にして、神秘性を薄め、現實性を濃くすれば、そのけうとさは除かれ、おそろしさは棄てられて、たゞ出現の由來と變化とに心を惹く探偵小說を成すであらう。生靈死靈は稀にあつて、漫に信ずる時、その誰なるかの推測に興を感ずる。「葵の卷」のもの丶けの驗者に隨はなかつた時、おほい殿の人々は思ひわづらうた。「大將の君の御かよひ所、こゝかしこと思ひあつるに、この御息所、二條の君などばかりこそは、おしなべての樣には思したらざめば、恨の心も深からめ。」と。その推測は彼等にこそ不安を釀せ、第三者の興は却てそこにあらう。「夕顔」のをかしげなる女に對するもの、なほ斯くの如しとせば、二重の探偵小說をなすものといはうか。まづこれを一巻の敍述の上に見よう。

源氏の君は、品さだめの夜、すでに、床夏の名によつて、夕顔といふ女の存在する事を知つた。されど、その五條の宿を知り得たのは、實に偶然である。維光が門の鑰をおきまどはすといふ偶然事がなかつたら、源氏はいかでさるはかなき家に寓目しよう。彼は門の開くを待つ。しかも、しのび姿の氣安さ、やつし車の心やすさは、車のうちにして、右顧左眄する。彼は奇怪のもの影を見た。簾の透影である。その家は床を高く作つて、前に檜垣を置く。

故に彼は床踏む足のあり所を見ずして、簾の影のたけ高きを見た。そしてあやしと思つた。「たちさまよふらん下つ方あながちにたけ高き心地ぞする、いかなるもののつどへるならん、とやう變りておぼさる」とは即ちこれ。「夕顔」一巻奇怪の氣これを貫く。作者まづこれによつて全篇に應ずる情緒を與へて妖氛を髣髴せしめた。よろぼひたる門、人めいたる花の名、皆そのけはひを示す所以である。加之、作者、巧みにあやしの語を利用して、この効果を助成する。あやし語は本來神變の意義を有し、漸く轉じて多岐にわかれる。今「雄略紀」を繙いて、あやしといふ辭に、いかなる漢字を當てたるかを見よう。神。靈。異。文。非常これ等を一括して、異常の義とし、驚異の義とする。更にまた平安時代に入つて一意義を加へた。「うつぼ物語」のあやしきにとゞまるのあやしの用法である。これ當時の諺にして、女を物色して、選擇に惑ひ、そのはては卑賤なる者に治定するの義。おもふに貴人にして貧賤の者の風慣所作を見れば、見るにつけ、聞くにつけて、異常の感を起さぬものはない。即ちあやしを以て直にまづしいやしに擬するのである。平安貴族の狀を敍するもの、勿論貴族を本位とする、この用例多かるべき筈。「源氏物語」もとよりその範疇の中にある。作者、今「夕顔」に於て、この二義あるを利用して、正意に貧賤をおもはせ、反意に奇怪をおもはせ、兩者相交錯して、讀者をば、奇怪の雰圍氣中に誘ひ入る。「夕顔」を通じてあやしの語を用ふる事すべて二十六、皆作者の企圖のまゝに動いて居る。

源氏はまだ夕顔の花を知らなかつた、今はじめて、その美しきものが、あやしの軒に咲くを見て、「くちをしの花の契や」といふ。彼、もし、貧しき家に美しき女を見ばいかに。その薄倖をあはれんで、これを愛撫するのであらうか。然らば「一ふさ折りてまゐれ」の一語、またその意を二にして、後の夕顔との戀を暗示するのであらうか。

そはともあれ、隨身が仰をかしこみて花を折る時、女の童のあやしの家より出づるがあつて、扇を贈る。これ、簾の透影の女のなすところ。こゝに於て、讀者は、頻りにその誰なるか、また何の意に出づるかを知らんの念を起す。しかも、作者は輕くいなして、直に答へなかつた。隨身扇を手にする時、門あけて維光の出で來たるして、源氏に奉らする。叙述に些の停滯を見ず、一髮の間隙をとゞめぬ。然るに源氏が病室に入つて、乳母を慰むるくだりの、筆やゝ長きは何故であらうか。讀者の好奇心に一弛緩を與へて、後の緊張を期するためである。

源氏は室を出でゝ扇を見、そのゆかしき筆のあとを見、かの家にしてなほこの人あるかをあやしんだ。おもふに、今日の源氏は往日の源氏ではない、彼は一度雨ふる夜を、馬頭のもの語にきゝ耽つてより、おのが戀の領域のあまりに狹小なるを知つて、他の未知の世界にわけ入らうの志を起した。そのまたの夜、空蟬にあひ得て、中の品の何なるかを知つた。かくてその好奇の念は下の品に向ふ。源氏未これを意識せず、作者また叙するところがなかつた。故に、源氏の意の扇のぬしに動きそめた事をば、その性格につらねて「さして聞えかゝれる心の憎からず過し難きぞ、例の此かたには重からぬ御心」とのみいふ。維光は、源氏のこの心を背はなかつた。源氏はいち早くその色を解して、「この扇のたづぬべき故ありと見ゆるを」というて扇に假託する。即ち維光を欺瞞する言である。されど讀者は、作者の敍述を見て、さうのみ解するであらうか。讀者はすでに雨夜の品さだめを知る。故に頭中將の多情にして、なほ忘られぬ床夏の女のあるを知る、その女の、中將の妻から脅迫せられて出奔した事を知る、中將が、彼女また世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむと歎いた事を知る。更にまた、五條の家に簾がくれに物見する女の群あるを知る。かく知る讀者が源氏と共に、扇のうた

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそひたる花の夕がほ

を見るとすれば、まづ心あてにといふ語が何を意味するかに惑ふ。それを直に源氏と解さうか。もし然うとすれば、誰とも知らぬ程の車のやつしを如何する。もし源氏以外の人とすれば、誰を心當に見た事と解さうか。或は頭中將か。かの花の夕顔なるものは、頭中將か。頭中將といふもの、電の如く腦裏を掠むる時、かの扇のぬしは、床夏の女ぞと思ひ寄する。頭中將のこゝを過ぐる事もやと物見する彼女ぞと解さうとする。況んや、はかなき家のさまが中將の推測に合するのでないか。しかも、作者はいふ、源氏は未、これを思はず、たゞ好色のまゝに心を動かすと。讀者はまた惑ふ。作者は說かねど、源氏すでにこれを思ひ寄するものとし、扇のたづぬべきゆゑとは、維光を欺くためにあらずして、床夏の女たらざるかの疑問を抱くがためとする。かくて讀者は、切に事件の展開を待ちて、疑念の氷解を期待する。何ぞ知らん、これ皆作者の方針から出でゝ居ることを。源氏は、隨身して、返歌を贈らする。隨身は、もと、これ等の事情を解せざるもの、即ちおもふやう、「まだ見ぬ御有樣なりけれど、いとしるく思ひあてられ給へる御そばめ」と。作者、何等の狡猾ぞ。讀者をして隨身のこの單純なる解釋を笑はせて、却ておのが解釋を複雜にさせ、歸趨に當惑させて、みづから喜ばしむるとは。源氏と讀者とは、斯くの如くして、ともにあせつて維光の報告を待つのであつた。

維光は、その探偵の任に當るにたよりよかつた。家は、かの女の住居に隣し、しかも東に隣する。夕日のなごりなくさし入るとき、彼はよくその室内をうかゞひ知る。かく維光と夕顔との家を配置した作者の用意は、周到といふべきであらう。維光即ち、かしこに主とかしづく女のある事、その女のかたちよき事、また人々相倚りて泣く事

など、見るところを報告した。維光は、源氏の若く美しきを見て、その好色を肯定し、自らまた其の家の女のひとりと消息をかはした。公私相よりて、彼を探偵の職に熱せしむる。しかも、源氏は漸く、おのが心が下の品の女に繫るゝを意識する。故に、更に維光に囑していふ、「なほ言ひ寄れ、尋ね知らではさうざうしかりなむ」と。作者はその事由を明にしていふ。「かやうのなみなみまでは思ほしかゝらざりつるを、ありし雨夜の品定の後、いぶかしくおもほしなる品々のあるに、いとゞ隈なくなりぬる御心なめりかし」と。そのかやうのなみなみのうちに、中の品をこめていふ事は勿論である。作者、筆を夕顔に專らにして、なほ空蟬を棄てず。縱橫敍述の妙をつくす。

やがて、維光は再度の報告をした。車の音すれば、若き者どもの覗く事、また頭中將の車の過ぐる時、かの女ども見知つて、ざんざめいた事などを語る。源氏こゝにはじめて、もしかの哀に忘れざりし人にやと思ひ寄せた。讀者その言をきゝ、源氏のこの狀を見て、おのづから會心の笑をもらす。探偵小說の讀者は、そのあやしき事件に對して、ある豫想をもつ。その豫想の、はかなく裏切られたとき、彼その趣向の奇に驚き、豫想まさしく合したとき、彼、おのれに優越を感ず。その優越とは、篇中の人物のとかうに惑ふ時、すでに一步を解決に先んずるためである。源氏の今にして、おもひ當るものは、讀者のとく豫想したところである。讀者、おのが豫想の適中を喜んで更に最後の解決をいそぐ。

源氏すでに、維光に導かれて、五條の宿に通ふ。車にも乘らず、覆面して顏も示さず、夜晚く來て曉に早く歸る。女に疑惑の念があつて、昔物語のたぐひと思ふ。作者、冒頭の妖霧をこゝに結んで、疑惑の中に漸く奇怪の脈を通はせた。源氏また、女の床夏の女である事を思ふにつけ、何故に素性を隱すかを疑ふ。更に、みづからを省みて、

何故にさばかりの人ともおもはぬものに熱する心ぞと訝る。されど源氏の夕顏に對する愛は、疑惑を疑惑として、深く穿鑿しようとしない。夕顏また、奇異を奇異として、たゞ源氏を信頼する。故に源氏は「げにいづれか狐ならんなたゞはかられ給へかし」といふ。女も「さもありぬべう」思ふ。作者はかく、二人の戀の陶醉を語つて、なほ、かの妖怪の脈をなほざりにしなかつた。狐の一語、下し得て妙といはう。

斯くして、八月十五日の五條の宿の叙述となる。賤しきところのさまは、源氏にこそ、あやしの念を醸さすると共に讀者に戀の陶醉を傳へる。戀の陶醉の叙述は、讀者にとつては、疑問解決の停滯である。何ぞ知らん、作者の巧妙は、後の緊張に備ふると共にこの間よく後の幽怪の素を成した。御獄精進の禱、雲がくるゝ月のすがた、やがて來る妖怪不思議の徵である。しかも源氏知らず、夕顏知らず、讀者未だ知るに至らず、たゞ作者のみ與り知る。

なにがし院の叙述に至つては、妖怪の緒と、戀愛の緒と、ときわかつすべなく縺れ合ふ。院の荒凉たるけはひは、もとより妖寮の色を濃くす。しかもその恐怖は、夕顏をして源氏によりそはす。かくて戀の甘さはいやましに加はる。故に源氏は覆面の紐をといて、「露の光やいかに」と揶揄する。夕顏の源氏に對する疑とけて、かすかに「たそがれ時のそらめなりけり」と戲れざまに答へる。夕顏の戀のよろこび知るべきである。源氏は、また夕顏に對するおのが疑を解かうとして、「今だに名のりし給へ」といふ。夕顏はわづかに「海士の子なれば」と答へる。作者は、夕顏の媚態を說いていふ、「さすがに打解けぬ樣、いとあいだれたり」と。源氏これを怨みながら、「よし、これも我からなめり」と答へるのみ。彼はその怨みをも甘きに翻ずる。戀の歡喜知るべきである。

たそがれ漸く迫つて、奥の方はくらし。夕顏の恐怖は源氏をして端の簾を上げて、添ひ臥させる。折からの夕ば

えに、二人の顔は紅する。互に見かはすとき、二人のよろこびはいかに。作者は、夕顔の側にあつて說く、「夕ばえを見かはして女もかゝる有樣を、思ひの外に怪しき心地はしながら、萬のなげき忘れて、少しうちとけゆく心地、いとらうたし。つと御傍に添ひくらして、物をいと恐ろしと思ひたる樣わかう心ぐるし」と。

かくて、をかしげなる女は出現した。序を以て潛に迫り來れるものは、急に露に顯はれた。讀者は、直に六條あたりの御方、かのうちとけ難く妬み深き君を以て擬する。しか擬する事は、讀者の輕卒にあらで、作者の企圖である事はさきに縷說した。また、くりかへすの要はなからう。夕顔すでに葬られて、右近は二條院に、源氏の傍近う召しつかはれる。源氏と、讀者と共に豫想して、未だ詳にすることの出來なかつた疑問は、右近の言によつて氷解した。夕顔は果して、床夏の女であつた、そのあやしき住居したのは方違のためであつた、その名のらざるは、おのが筋なきを恥づるためであつた。讀者は、かくして、「帚木」以來の懸案を解き得た。更に五條の宿の、檜垣の新しく簾の新しき理をも解し得た、これ夕顔の移り住むためのしつらひであつた、また移り住んで、まだ程經ざる故であつた。しかも、新なる疑問は源氏にも讀者にも起る、「なでしこ」の行方やいかにと。この疑問は、遠く「玉葛の卷」にまでつゞく。

四十九日のまたの夜、源氏は怪夢を見た。そしてなにがし院のをかしげなる女の何物なるかを解し得たりとする。即ち院にすむ妖怪であるといふ。讀者はまた、新なる疑問に會した。何となれば、讀者は、源氏の心の動搖を知り、その潛在するものの何であるかを知る。また、靈の交通の可能なるを知る。知つて、しかる後に、六條あたりの君となした。故に、今源氏の解し得たりとなすものを聞いて、果して然うであらうかと惑ふ。何となれば、源氏いか

でか、おのが心に潜在するものを知らう、動揺の狀を詳に知らう。彼知らずして夢を解す、故に、かの言がある、しかも當らざるの甚しきものと。斯くの如くして、讀んで「葵」に至る。讀者はじめて、六條の君の六條御息所なるを知り、また、その生すだまを知る。またいきすだまといふものゝ、何の狀なるかを知る。斯くて、また「夕顔」に返つて、おのが豫想の誤まらざるをおもふ。讀者をして、かくおもひ來り、おもひ寄さするものは、皆作者の方寸より出でた。彼紫式部そも何者ぞ、いかにしてか、かくばかりに讀者を擒縦するの術を得た事であらう。

源氏は、院の妖怪が、われを見いれけんたよりに夕顔に祟りて、死に至らしめたと解して、「ゆゝしく」おもふところがあつた。源氏即ち、彼女をさる所に誘ひゆいた輕擧を悔い、夕顔を殺すものは、畢竟われぞと自を責め、夕顔の薄命を悲しみて、愛着いよいよ加はるものがあつた。まして右近によつて、その性情と閱歴とを知る今はなほ更である。この樣にしてはじめて「末摘花」に「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれし程の心地を年月經れどおぼし忘れず」と敍するを得よう。作者一筆双叙して、一夢に讀者を惑はし、また源氏のなき夕顔に對する愛を示した。

われは、「夕顔」のものゝけを斯樣に解釋する。されど、人あつて、そは畢竟、爾の幻覺のみ、作者もとよりさる心なし、源氏の言大に信すべしといはゞ、たゞ一事を舉げて反證としよう。

源氏の須磨にありしほど、三月上巳、海に禊した。その日、海の面、衾を張りたる樣に光滿ち神なりひらめき、雨はげしく降つた。その曉、彼は夢を見た。彼がその夢をいかやうに解いたかは、「須磨」に見えて居る。「その樣とも見えぬ人來てなど宮より召しあるには參り給はぬとて、たどり步くと見るに驚きて、さは海の中の龍王の、い

といたう物めでするものにて、見いれたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住居堪へがたう思しなりぬ。」この夢に對する源氏の解釋は、正しきものであつたらうか。「源氏物語祕說抄」にいふ、「この夢に宮より召あるといふは、都へ歸り給ふべき瑞相あるを、源氏の心には、龍宮の事と思ておそれ給ふ也。」と。この解釋は正しきものであらうか。「明石の卷」の敍述は、おのづから、「祕說」をよしとして源氏の解を悪しとする。源氏の意、必ずしも據るべきでなかつた。

また一事の以て證すべきがある。種彥の「源氏物語」を翻案して、「諺紫田舍源氏」を作るや、力めて事件を複雜にし、趣向を錯綜せしめた。かの野寺のくだりの如き、脚色最奇抜にして、劇的效果に富み、最よく草雙紙趣味を發揮したものといはる。されど、彼の念とするところは、外的變化である。かの探偵小說として、これを見れば、探るものは、一に外的の物件であつて、何等心的の問題でなかつた。故に、怪しき女の如き、葵にあたる二葉の君の一念となせど、輕輕として、夢に見るものとのみ敍し去るに過ぎない。從つて、御息所に當る阿古木の如き、もとより與り知るものでなかつた。種彥もまた生靈を出した。たゞしそれは人の假りに扮して、源氏に刄を加へんとするものである。しかも、そのものは阿古木に扮せずして、二葉に扮した。單に事件の變化に心をこむる時、おのづから斯くならざるを得ない。「源氏物語」の如きは、自ら然らず、それは心理の變化に重きをおくからである。をかしげなる女が讀者の興を繫ぐ事は、實にさばかりであつた。彼此對照して、かのもの丶けの斯く解すべきをおもふ。

「夕顔の巻」のものゝけは、畢竟、六條御息所のいきすだまである。されど、また源氏心内に潜在するものゝ具體化とも解し得よう。作者、この二つの關係を交錯して、深くあなぐらず、却つて、院内に棲める妖怪と解すべき餘地を殘した。これ、作者がわざと計つて、讀者をして、信疑の間に彷徨せしむるためであつた。蓋、妖怪趣味と、探偵の趣味とは共に、みづからを智識の迷宮の中において、無聊を消散するに適する。まして、ものゝけの如き、平安時代に於ては特殊の意義を有して居る。「源氏物語」の長篇にして、當代貴族の玩弄たるべきもの、時にこの種の要素を挿むを要した。されば、「夕顔」の怪の如き、これをうつして、夢の如く、幻の如く、現の如く、六條御息所の如く、源氏心内の影像の如く、院内の妖怪の如くおもはしむる所、作者の最苦心した所であらう。しかも、事を構へる、一々當時の人々の信ずる所にしたがふ。才筆測り難きものがある。廣道の解の如きは、その才を狹くし、作意を拘するものといはうか。

まして、「夕顔」一卷必ずしも、この終始にのみ集中せずして、自ら前に連り、後に續く。その他の筋合を說くもの、讀者の好奇心の活躍の間に介在して、却つて弛緩と緊張との宜しきを得て、更に事件の發展を熱望させる。何等の妙案ぞ。「源氏物語」五十餘卷、よく人を倦ませざる理は實にこゝにある。かゝる妙案のすべてに亘れるためである。「夕顔」を以て探偵小說として見るが如きは、所詮、この傾向の最顯著なるに從つて、言をなすに過ぎぬ。

かのものゝけの何たるかは、これを「夕顔」に即していへば、大方かくの如きものであらう。されど「源氏物語」

全體についていへば、その意義の何たるかを闡明して来しきものがある。何となれば、これを、他の精神の超自然的狀態、たとへば、夢、幻覺の如きもの、或は、偶然の事變の作中に於ける意義の闡明とつらねて考察して後に決すべきである。「須磨」のさとしと、「明石」の帝の靈夢との關係の如きに至りては、おのづから神秘の色濃きものとして、これを彼等の有する宿命思想につらねて、考ふるを要する。これを決して、然るのちにかのもの丶けの眞の意義を知るべきである。これ、實に、「源氏物語」の本質の問題に關する。「源氏物語」の本質の論は、わが今日に於て輕々しく斷ずる事をゆるされない。これを斷ぜんとする者は、まづ、之をとりめぐる鱗々を除く事を要する。この狹く、小さき問題について、いふところあるは、わづかに、その片鱗を去らんとするためである。

(註1)萬葉集卷四。天雲之外從見吾妹兒爾心毛身副緣西鬼尾(モノ)。

(註2)鬼。四聲字苑云。鬼居偉反、和名於爾、或說云、隱字、音於爾訛也。鬼物隱而不欲顯形、故俗呼曰隱、人死魂神也。

(註3)三代實錄。貞觀二年八月二十七日、倫兒開崇祇官西院齋戶神殿、盜取主上結御魂緒等。

(註4)公事根源。それ人には魂魄の二の玉あり、魂は陽氣、魄は陰氣也。この祭は離遊の運魂をまねきて、身體の中府にしづむる功能あり。宇摩志麻治の時より事おこるよし、舊事本紀などに見えたり。此祭を如法におこなはるれば、殊勝の御祈と成るべきにや。されば白川院は御脫履の後も、院中にて猶行はれ侍りき。東宮中宮にても、年々ある事也。

(註5)于時神光照海、忽然有浮來者、曰如吾不在者、汝何能平此國乎、由我在故、汝得建其大造之績矣。是時大巳貴神問曰、然則汝是誰耶。對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大巳貴神曰、唯然、廼知汝是吾之幸魂奇魂、何欲何處住耶。(日本書紀神代卷)

（註6）孝標の女、亡き人、侍從大納言の女の書を見て悲しむをり、どこからか猫が來た。姉妹これをとゞめおきて、いたく寵愛する。姉病む、しばらく猫を遠けた。姉ふと夢からさめて語る。「夢にこの猫の假に來て、おのれは侍從大納言の御女のかくなりたるなり、さるべき緣のいさゝかありて、この中の君の、すゞろに哀とおもひ出で給へば、たゞ暫こゝにあるを、この頃下衆の中にありて、いみじうわびしき事といひて、いみじく泣くさまは、あてにをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫の聲にてありつるがいみじく哀なり」と。これよりまた寵愛一段を加へた。妹が或時、「侍從大納言の姫君のおはするな、大納言殿に知らせ奉らばや」といひかけた時に、猫もきゝ知顏であつた。

（註7）ある時はわりなき業しかけ奉り給へるを、御紐引き解きて、御几帳の後にてあぶらせ給ふ、あはれ此の宮の御尿に濡るゝは、うれしきわざかな、この濡れたるあぶるこそ思ふやうなる心地すれ。

（註8）「大鏡」、太政大臣賴忠の條。

（大正十四年五月「文學思想研究第一卷」）

ものゝまぎれに就いて

一

源氏の君の榮華は四十の賀に窮つて、その後の日は、傷心のみ續く。若うして播いた數々をみづから刈るべき時期の到來したのである。今懊惱のたゞ中にある源氏はまた朧月夜出家のうき事に會する。これも自ら刈るべき罪のくさはひであつた。彼は悄然として紫上の枕頭に昔の夢を語る。源氏物語の作者が想を構へて、一度重疊層々のうちに放つた事件を統べ來つて、一篇の首尾を全うし起結を明にする大方この類である。この首尾起結の趨くところは、因果應報の理法に合する。作者は佛家と共にこの理法を明にするために、この構想をなしたか。またそれを信ずる事篤き當代の人心を直寫するの餘、筆おのづからこれに觸れたか。觸れんと欲して觸れたるか、おのづから觸れたるか、觸れ樣のいづれが重く、いづれが輕き、これを度合として源氏物語の作意を考ふべきであらうか。その輕重の論は、こゝにはどうもあれ、源氏と藤壼とのものゝまぎれと柏木と女三宮のものゝまぎれとは事の起結をなし、その起結は、おのづから、因をなし、果をなす事は、極めて明に見られる。これを應報であるとは、もとより源氏もおもつた。「さても怪しや、わが世と共におそろしと思ひし事の報なめり。」彼は今日柏木のものゝまぎれの次第を知つて、さきの日の罪深きわれの姿をさながらに見る。あさましき事は、われにはじまつてわれに終る。こゝ

にわが胤ならぬ罪の子薫があり、かしこにわが胤なる罪の子冷泉院がある。因は現在に起つて、果を現在に結ぶ。順現應報はかうも速にめぐり來たるか、彼は炳乎として明なる事實に直面して、たゞにおぢ恐れる。しかし、半の恐怖の中に半の心安さをおもふ。罪多くは現在の果に熄んで、未來の因のなる事を少しと考へるためである。「この世にてかく思ひかけぬ事にむかはり來ぬれば、後の世の罪も少し輕みなむや。」源氏が父の帝の寵に背いて、その寵妃を烝する罪は斯うも輕いのであらうか。作者はさう考へる源氏を嗚呼のしれ者として斥ける事がなかつた。作者は源氏に對して何故斯くも宏量であるか。

柏木は源氏の恩顧にもとつて、その正配女三の宮と私した。彼はみづからを省みてその罪を輕からずとする、しかし、これを帝のおんめをも取り過ちて事の聞えある罪と比ぶれば輕しとする。即ち自ら斷じて、われはさして重き罪に當るべきでないと考へる。まして、柏木は女三の宮が源氏に嫁して必ずしも幸福でない事情を聞く、故にこれを愛する者われの手に奪ふは愛する人を救ふ所以であるとも思つた。けれども、作者は彼をして空しく悶々のうちに死なせた。作者は何故に源氏に、寛に柏木に嚴であるか。

柏木はたゞ源氏に因果の恐るべきを示すためにのみ生れ來つたといはうか。作者は彼のものゝまぎれと此のもののまぎれとを對比すべく、柏木を捉し來つたか。それならば作者の構想は過てりといはねばならぬ。何となれば夕霧こそその役目を果すにふさはしき人ではないか。源氏の桐壺帝に於ける、なほ夕霧の源氏に於けると同じく、源氏の藤壺に於ける、夕霧の紫上に於けると位置を均しうする。夕霧は野分の風のすさびに、はじめて紫上を見た。彼は氣高く淸く、さとうち匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺櫻の咲き亂れたるを見る心地したと

いふ。その美しき面影は彼の眼のあるところに消えなかつた。紫上は死して後も、彼の胸の中にはあえかなる姿して生きてゐた。作者にして、夕霧に一歩を進ませる意があつたならば何も柏木を要さぬ。然るに作者は夕霧を斷崖の巖頭に救つて、却つて柏木を壑谷の底に導く。赤き紐をひく唐猫の戯れは、簾をあらはにひき揚げる。ほのかなる夕影が見られた。それを見入る柏木は知らず識らず、作者の穽に陷つたのである。作者は何故に夕霧に情篤くして柏木に苛酷であるか。

かのもの丶まぎれと此のもの丶まぎれを因果の關係におく作者は、二者の間に多くの類似の事件を設ける。柏木の乳母の辨が薫に罪の顚末を語るのと、夜居の僧が冷泉院に世のみそか事を語るのとは、趣向を同じうする。これを聽く二人のおもふところも大分同じやうである。薫は年頃覺束なくゆかしく思ひ來つた惑を明にした。けれど、父の罪をおもふ事なくして、みづからの罪を解き得た事をよろこぶ。みづからの罪とは何ぞ、わが實の父の存在を知らざる事である。彼は辨に謝していふ、「か丶る對面なくば罪重き身にて過ぎぬべかりけること。」と。冷泉院が夜居の僧の奏をきいていふところもまさしくこれである。「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎あるべかりける事を、今まで忍びこめられたりけるをなん、かへりて後めたき心なりと思ひぬる。」冷泉院は天子の位にある。故に知らずしてやむ罪は薫に比して一段の重さを加へる。當時天變頻りに起り世の中靜でないのは、天が冷泉院の知らざるを罪したのである。その幼き程に事なくして、長じてこれあるは何がためであるか。夜居の僧は解していふ、「幼く物の心知ろしめすまじかりつる程こそ侍りつれ、やうやう御齡足りおはしまして何事も辨へさせ給ふべき時に至りて咎をも示すなり。よろづの事親の御世より始まるにこそ侍るなれ。」斯く、子の咎を訊すに急なる

は父の罪を責むるに緩なる事である。冷泉院をして天の咎を享けさせるものゝまぎれは、源氏を太上天皇の高きに登らせた。子はこれによつて悩み、父はこれによつて榮華をきはめる。天と作者と何故に源氏に私するか。

二

作者は源氏に私するのでなかつた。源氏は當代がものゝまぎれの罪を許容する條件を多く具備する。柏木はその條件を少く保有する、從つて源氏より苦しむ事多からざるを得なかつた。源氏なると、柏木なるとを問はず、當代がすべてに瓦つてものゝまぎれを許容する最大條件は、宿命觀である。現在の果を前世の因に歸する點にある。更にまた源氏にものゝまぎれの辨がある。皇妃にして帝の寵薄き時は、私の志深きに靡いておのがじゝのあはれを盡すを許容する。彼はこの條件を以て女三の宮をゆるさんとした。けれど宮は源氏によつておもひ深き紫上よりも重きをおかれた。宮はつひに咎めを受くべきである。彼は藤壺とみづからとを省る。これ共に殊寵を蒙るものまたゆるしを得べきでなかつた。即ち心の鬼の責める所以である。彼はまた宮仕とて我も人も同じ君に馴れ仕うまつる程に心かよはしても、おぼろけの定かなる過見えぬ程はその罪を許容せんとする。彼が柏木に對して咎深きは、この條件に合せざるためである。源氏は容貌風采をもつてしては女三の宮に配するもよしと見る。たゞその戀する態度のあらはなる一點をゆるさなかつた。「たゞ事の樣の誰も誰もいと思ひやりなきこそ罪ゆるしがたけれ。」

源氏ははしなくも、女三宮が秘し忘れた柏木の書を手にした。これによつて罪の次第を知つた。書は情懷を叙して事精細を盡して居た。源氏は讀んで見どころあつてあはれとおもつた。しかし、かく意を陽にして人目を憚らぬ

態度を陋とした。「いと斯くさやかには書くべしや。あたら人の文をこそ思ひやりなく書きけれ。落ち散ることもこそと思ひしかば、昔かやうのこまやかなるべき折節にも、事そぎつゝこそ書きまぎらせしか。しか人の深き用意は難きわざなりけり。」源氏は柏木を斯うやうに咎めて、また溯つておのれがさきの日の態度を肯定する。源氏がものゝまぎれの罪に對する見解大方知るべきであらう。

柏木は戀の露顯をきいて、豫期した事とはいひながら狼狽を禁じ得なかつた。彼は今更にその罪を考査して必ずしも重からずとする。しかも、悶々の情にたへざるは源氏の白眼を恐るゝためである。一度源氏の白眼にあへば今の權勢を保つべきでない。平安の貴紳は權勢を外にして生くべき道があつたらうか。彼等はもとより戀を欲する。柏木も亦戀と權勢とを兼ね備へるを欲したのである。柏木は死に臨んでもなほ源氏の青眼の蘇來を願つた。源氏の恩賚を待つに馴れた情勢である。「なめしと心おい給ふらむあたりにも、さりともおぼし許いて、昔萬の事、今はのとぢめには皆消ゆべきわざなり、又こと樣の過しなければ、年頃物の折節毎に纒はしならひ給ひし方のあはれも出で來なん。」源氏物語に於けるものゝまぎれの罪なるもの大方知るべきであらう。

源氏が女三宮を咎めるのは、戀をする身の用意なさである。かゝるおそろしき書をとり散らしおく心なさを責める。かゝるものを散らし給ひてわれならぬ人も見つけたらましかばと難じて、その心をいはけなと評する。この女三宮を以て藤壺に比する何といふ相違であらう。藤壺はものゝまぎれの後の生涯は、懺悔祈念と秘密漏洩の防止におくられた。その秘密は源氏にも嚴守せしめた。ある雪の日、源氏は紫上と對坐して、談偶藤壺の人となりに及んで、ふとしもかの事件に觸れんとした。言は茫漠として誰かそれと知り得よう。しかも、その夜の夢に、源氏は藤

壺を見た。「もらさじと宣ひしかど、うき名の隱なければ恥かしう、苦しきめを見るにつけてもつらくなむ」と語る。藤壺は死して後も罪を隱すにいとまなかつた。

女三宮が藤壺の用意を缺くは、畢竟その人となりに基く。柏木も事の露顯を聞いて、その心なさを咎める。その咎めはやがて、事のはじめに溯つて、その人となりを貶する。彼はいでや靜やかに心にくきけはひ見え給はぬわたりぞや、まづかのみ簾のはざまもさるべき事かはとその折を追懷する。さて、夕霧に、女三宮を輕々しと見なしたる氣色あつた事をおもひ浮べた。

宮の婢小侍從に至つては、咎めて更に甚しきものがある。柏木の書の源氏の手に渡つた事を知れる彼女は宮に對しておほけなくもいふ。「すべていはけなき御有樣にて人にも見えさせ給ひければ、年頃さばかり忘れ難く、怨みいひ渡り給ひしかど、かくまで思ひ給へし御事かは。誰が御爲にもいとほしく侍るべき事」と。言は事件に對する一切の罪を女三宮に歸する。その當否はともあれ、たゞ主に對して穩ならぬ言である。故に作者は、心やすく若くおはすれば狎れきこえためりの一句をそへて、事の妥當を保つ。

み簾の間の夕影あつて、事は起り、柏木のはじめてしのびあへる夜の宮の態度によつてわづらはしさは加はつた。その夜宮にして氣高く恥かしげにあつたなら、柏木はたゞにしてやめたであらう。彼は宮をなつかしく、らうたげにやはやはとのみ見たために最初の一歩を過まつた。小侍從の評よく穿ち得たりといはうか、しかし、これは小侍從の言ではない。作者が作意を洩して偶その口を藉りたに過ぎなからう。

夕霧がさきに女三の宮を評して輕々しといつた言葉は柏木もつひには服した。思慮深き女をこそ當代の男は求め

る。かゝる女を得てはじめておのが戀に安んずる事が出來る。夕霧は、み簾のはざまに女三宮を見る以前に、いとも思慮深き女を同じ樣なるはざまに見た。源氏物語が女性の第一に推す紫上その人である。源氏はその思慮深き人をもなほ夕霧に近づかせなかつた。ものゝまぎれの生ずる事をおそるゝがためである。たゞ風こそげに巖をも吹き上げつべきものなりけれ。野分の風に紫上を見た夕霧はよく父の意を解し得た。即ちかく見る人たゞにはえ思ふまじき御有樣をいたり深き御心にて若しかゝる事もやと思すなりけりと知り得た。しかもなほ彼はその夜髣髴として迫り來る晝の姿を拂ふにいそがしかつた。こはいかに覺ゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へと思ひ消す事に焦慮する。されどまたかゝる人を見て明し暮したならば、壽のほども必ずや延びようとの考が胸のいづこにか擡頭するをいかに。この危機も夕霧のまめやかなる心構ひによつてたゞに過ぎた。よし、夕霧にして少しくおもひ迷ふとも紫上の思慮の深さはまた事なくして、その機會を逸するのであらう。ものゝまぎれは大方女の心弱さに起る、源氏は女三宮の事あつて後、朧月夜に對してその心弱さに貶みをおぼえた。夕霧は女三宮を輕々しと評する時、心ひそかに紫上と比較した。いでや此方の御有樣のさはあるまじかめるものをと思つた。

野分の卷を讀む者は、紫上を夕霧の眼から遠のかしむる心づくしを見るであらう。また紫上を見た後の夕霧の樣子から、推して彼必ずやほの見たりと警戒の眼を追ふ事を見るであらう。紫上と夕霧の性格態度をさるものとして、また加ふるに源氏の嚴戒を以てする、どうしてものゝまぎれが起り得よう。作者は漫に夕霧に篤くして柏木に薄いのではなかつた。否、作者は柏木と夕霧とを合せ考へるならば寧ろ紫上と女二宮とを讀みくらべる事を求めるであらう。女三宮は柏木によつて露に見られた事を知つた時、見られたその事を恥づるよりも、日頃の訓戒の怠り

を源氏から叱責せられるとて恐れた。女三宮は斯ばかり心幼き人であつた。

斯くして作者は徒に形の上の對稱を專にしなかつた。因果の絲を卽かず離れぬ間に伸べ縮めして一篇の趣向を立てた。これはこの一事にのみついていふべきでなくして、構想の全體に亙つての言である。

三

源氏はみづからも藤壺とのものゝまぎれの罪の輕からぬ事を知る。しかも、その罪の現在に緩められて未來の果を結ぶ所緣の少くなりゆくを考へる。女三宮のものゝまぎれはその罪を緩める一つである。冷泉院に後なきをもまたその一つと考へる。「思ひ惱ましきおんことなくて過ぐし給へるばかりに、罪は隱れて、末の世まではえ傳ふまじかりける御宿世」と罪のわが子に就いておもふのである。この佛家說くところの因果以外源氏の罪を現世に綏うするものがある。祈禱勤行をもてしても術なきことは、或は源氏にとりて他にまさる苦惱であつたらう。源氏が女三宮のものゝまぎれをあらはに知り得た時、彼は何を考へたか。因果の恐るべき事、わが罪業の淺からぬ事なんどに就ておもひ惱むと共に、この處置をいかにすべきかに苦しんだ。何となれば源氏が變つて許容せんとする條件のすべてに合せぬ彼等に對して、この後どういふ態度をとらうか。彼は彼等に對して平靜であり得る自信を有せぬ、さりとて欲するがまゝに憎惡怨恨を逆らすは身の恥、人の恥、世間へのきこえ到底なし得る事ではなかつた。平安の世は事理を檢して徹するをもとめずして、まづどこで止まるかを考へる。止まるところを知る。卽ち見る目のやすきがある。我なるもののおし凌れて、しかも猥りに我を以て抗する事を憚る、抗して力を盡す時、我の姿の搖ぐ

を恥づるためである。平安貴族の生活は、かくして矯飾である。彼等の努力はまづ矯飾に出でゝこれを實情に轉ずるにある。矯飾にたへずしてなほ矯飾を維持するがその苦惱である。心内の空虚の如き、深く顧る事なくして、身外の見る目を事とする。今源氏が柏木等に對してとるべき方法はたゞ二。これを因果として諦むるが一つ、またその過を知つて知らざるを裝ふが一つ。現在の因果はなほ彼の心に未來苦に對する餘裕を與へよう。知つて知らざるを裝ふくるしみは、彼にとつては墮地獄のくるしみである。源氏が彼等の過を知つてまづ父なる故桐壺帝をおもふのはそれである。「故院の上もかく御心には知ろしめしてや知らず顔をつくらせ給ひけむ。」彼は犯せる罪を父に告白する機のなかつた事を悲まないで、却つて知らず顔する父の苦しみを思ひやる、さてはじめて「思へばその世の事こそは、いと怖ろしくあるまじき過なりけれ」と省るところがあつた。

　源氏はいかに知らず顔をつくるに苦しんだであらう。源氏は女三宮を見る事を欲せぬ。故に多く病める紫上の枕頭にあつた。紫上は源氏と朱雀院との關係を思つて、こゝを去つてかしこにゆく事を勸める。源氏は言を左右にして、知らず顔をせざるを得なかつた。源氏は時にあやしき愛着を以て女三宮を訪ねる。しかも近く坐して、更に心の遠のくを覺える。けれど人目をおもふが故に、病の看護などは在りし日よりも鄭重を極めざるを得なかつた。源氏は柏木に會ふを慊しとしなかつた、彼がわれを以て事の秘密を知らざる者となして、惡しく見る事やあるとおもふからである。けれどいつも側近く召した者を遠のけたならば人があやしみはせぬかとおもひ惱む。柏木また罪を知られて知らず顔するに苦しむ。彼もとより源氏を憚る、されど參らぬ日の續いたならば人目いかにと焦慮する。源氏は柏木に對してつひに知らず顔を作り得た。たゞ一日空醉してわづかに諷するところがあつた。その一諷刺は

つひに彼の病を篤からしめた。しかもその時柏木はすでに事の露顯を知つて居たのである。即ち知つて知らず顏する者に對しては知られて知らず顏するが禮である。何となれば、彼此相俟ちて人目のやすさを得るからである。故に源氏はこの禮を守らざる女三宮を心幼しとする。それはあやしき禮である。たゞ平安の世がおのづからなせる生活軌範なる事を記する事によつてわづかに、諾れる。「さる事見きともあらはし聞え給はぬに自らいと理なく思したる樣もいと心をさなし。」柏木は女三宮に比すれば心長けたる者であつた。彼は辛うじてその禮を守つたからである。

源氏がかくも知らず顏に苦しむは、今日の心をもてみればもとより唾棄すべきであらう。但、この苦しみは、平安の世にありては、もの丶まぎれに在つて未だ知られざる者が秘密を嚴守する苦しみと共に多とせられた。その秘密を嚴守して、愛する者を奪はれた人の名を聞えさせないのが、おのづからあやしき禮にかなふためである。藤壺何故に源氏と共に桐壺の帝の御前に跪いて罪を請はざる。何故にみ佛にのみすがつて未來のゆるしをねがふ事ぞ、しかも藤壺の出家は、その罪の贖ひとよりは寧ろ冷泉院に對する子としての愛のためである。冷泉院は東宮である。もし罪の子なる事が露顯したならばいとし子はつひにみ位に上る事が出來なからう。藤壺の秘密を守るはこの事あつて更に一層の嚴を加へる。それにも拘はらず、源氏はなほ藤壺を慕うて、またもの丶まぎれを重ねようとする。藤壺は東宮のために遽に姿をかへたのである。これよりさき、源氏に須磨のわび住みがある。源氏と藤壺と共にこれを以て、もの丶まぎれの應報と考へる。故に藤壺は東宮の身にも事の起るを氣遣つてみ佛に加護を祈る。堅く守れる秘密も夜居の僧には洩らさゞるを得なかつた。冷泉院はその僧によつて源氏の子であることを知つたので

ある。作者の作意かくの如くして、われ等はこゝに藤壺の罪の自覺なるものゝいかなる程度にあるかを明に知る。

母は子の問のために生みの父をそれと答へん事を欲する。子は父の誰なるを知らん事を欲する。これは亂婚の社會を貞操の社會に進ましめた力の一つである。ものゝまぎれの多き時、世は亂婚の昔にかへらう。しかも、平安の人の心はその昔の人の心と異なる。故に子はいやましに父の誰なるかを知らん事を求める。母もまた知らせんとするけれど、ものゝまぎれは多くの罪を伴ふ。故に母は實の父を秘さねばならなかつた。そこに母の懊惱がある。また實の父を知らで過す子に悩みがある。これを子の罪といふべくば、冷泉院と薫とは辛うじてその罪を免れ得た事である。男性は女性の愛を固く把持せんとする。故に女性の生むものがわが胤なる事を要求する。ものゝまぎれの多き世に於て、殊にこの要求は强からう。たゞものゝまぎれのその人がわが胤なるを知る時、その罪は外にはじめて露なるものとして現はれる。作者意あり、源氏をしてものゝまぎれの後、夢の告によつて罪の子を得たる事を知らせ、柏木をして、ものゝまぎれの夜の夢に、猫を宮に奉ると見させた。當時の俗夢に獸を見るを懷胎の兆とする。源氏と柏木とおもふところ多きを叙するためである。

この子の出生は、子の父に似たる場合に於てまた露顯の緣である。藤壺はいかばかり冷泉院の源氏に似た事によつておもひ悩みたることであらうか。「いと珍らかなるまで寫し取り給へるさま違ふべくもあらず、宮の御心の鬼にいと苦しう人の見奉るもあやしかりつる程のあやまちをまさに人の思ひ咎めじやは。」源氏はまた異なるおもひで薫の柏木に似るをおそれた。罪の子の男なるを聞いて、いかに狼狽したる。「男君と聞き給ふに、かく忍びたる事のあやにくにいちじるき顔つきにてさし出で給へらむこそ苦しかるべけれ、女こそ何となく紛れ數多の人の見るも

のならねば安けれ。」二者共に子の相似たるによつて事の露顯を恐るゝは一である。さても五十日の祝の日、思ひなしにや柏木といと覺えたる貌の薫を膝の上に抱く源氏の心はいかに。彼は柏木の死と女三宮の出家とによりてすべてを許したる今も、事の樣を知れる女房はわれを嗚呼なりと見はせぬかをわづらふ。またわれを嗚呼なりと見るそれは念じこらへよう、女をしか思はする事をつらしとする、即ち知らず顔を作らう、その胸の中はいかに。作者は、罪の子を父に似させて、あはれなる筆の數を多くす。冷泉院が源氏を實の父と知つて後相對坐する狀を叙していふ。「常よりも黑き御よそほひに窶し給へる御容貌違ふ所なし、うへも年頃お鏡にも思しよる事なれど、聞し召しゝ事の後は又、細に見奉りて給ひつゝ、まことにいとゞ哀に思しめさる。」かくて冷泉院は源氏に位を讓らんとする。子にして父の上にあるにしのびざるためである。源氏はその至情に泣くべくして、しかも誰が事を告げたるかを探るに急である。」ものゝまぎれの罪これをゆるす事多きもその咎おのづから隨所に現ずる。

さるにても、冷泉院が源氏に似る事斯ばかりであつて、人の疑ふもののなきはいかに。弘徽殿女御あたりがそれを看破し得ざる理いかに。作意やゝ失するところあるか。作者は、藤壺の帝をして、二人の相似たる事に心づかせた。しかし帝はもとより疑ふ事がなかつた。「またならびなきどちは實にかよひ給へるにこそはと思ほしけり。」即ち源氏の容貌の美なるが故にこの危きめを脫し得たのである。當時の風美を以て人生最高の條件とする。その前には罪も咎も輕う許される。源氏が柏木よりも、罪のゆるさるゝ事多き理由の一つはこれであつた。

源氏物語一篇の趣向はまづ事件の首を源氏と藤壺のものゝまぎれに起し、尾をその因果に結ぶ。紫上はおのづから女性の中心をなすも、これは藤壺のゆかりのためである。源氏明暮藤壺とあり得ずして偶その緣者を得た。緣者

の容貌いかに藤壺に似たる。源氏これを得てわづかに心を慰める。源氏の藤壺に戀するはじめは、藤壺の容貌の母桐壺更衣に酷似するためである。作者はいかに細心にその戀の成長を寫したであらう。父の帝の桐壺更衣を熱愛するも、更衣のはかなき死も、弘徽殿女御の藤壺にもつ反感も、源氏が亡き母を慕ふかなしさも、漸く長じて藤壺から遠けらるゝ事も、葵上との結婚も、一つとして源氏の戀を讀者に承認させぬものがあらうか。更に源氏の戀を助長せしめる者は、源氏と藤壺との美しさを讃してやまざる徒である。「世に類なしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御かたちにも猶にほはしさは比へむ方なく美しげなるを世の人光の君と聞ゆ。藤壺ならび給ひて御おぼえもとりどりなれば、かゞやく日の宮と聞ゆ。」人々はかく美しさの故をもて二人を並べ稱する。人々は美に對してはたゞ恍惚とする。その人々は戀に對して、深く咎むる事が出來ようか。彼等こそ美を尊んで、美しき二人に手を握る事を求めたのでないか。源氏のものゝまぎれを許すものまた一を加へ得た。即ち源氏の罪の自覺の淺きを咎むるも、柏木に對する處置の不當を責むるも、それは今の心を以てするものである。作者は決して源氏にのみ私したのでない。その源氏に篤きが如く寬なるが如きは、皆理由があつた。その理由は今日に於て存せず當時に於てのみ多くゆるされた事を記するを要する。

はじめ源氏薰を抱けば惱みがちであつた。しかし、わが子ならぬみどり兒をわが子としてかい抱く度の重る程に漸くいとしさを覺える。作者がよく人の心の機微を穿つ事大方これである。また作者は、薰を以て柏木にまさる美しき者とした。薰の美しきを寫していふ。「頭は月草して殊更に色どりたらむ心地して口つき美しう匂ひ、眉のびらかに、恥かしうかをりたるなどは、猶いとよく思ひ出でらるれど、彼はいとかやうに際離れたる淸らはなかりし

ものを、いかで斯からむ、宮にも似奉らず今より氣高くものものしう樣異に見え給ふけしき」と。その美しさは漸く長じて漸くまさる。源氏その美によつて、さきの惱みを忘れ、その美を成すためにのみかのものゝまぎれを認める。「この人のいでものし給ふべき契にてさる思ひの外の事もあるにこそはありけめ、遁れがたかなるわざぞかしと少しは思しなほさる。」

源氏が斯く薫を美しと見てかのものゝまぎれを許す心の中には、おのが美の自覺の存する事を知るを要する。作者は薫の美を傳へる筆の後につゞけていふ。「わが御鏡の影にも似げなからず見なされ給ふ。」この美に對する自負の心は、さきに幼き冷泉院を見る折にもしるされた。「物語などしてうち笑み給へるがいとゆゝしう美しきに、わが身ながらこれに似たらむはいみじういたはしう覺え給ふぞあながちなるや。」美は罪を輕うす。しからば、おのれの美を自覺する事多き源氏が、自らの罪を緩う見るも理であらうか。即ち源氏のものゝまぎれをゆるすべきものゝ一を加へ得た。

（大正十四年十月「國語と國文學」）

山口剛君のこと

學問は廣く、趣味は豊かに、雄辯で、能文で、早稻田の若い學生たちから無類の尊敬を受けた山口剛君が、急に亡くなられたのは、惜みてもあまりあることで、ことに私は一番古くからの友達として感慨に堪へない。

山口君は、私と一緒に、明治三十五年の四月、早稻田大學の前身、東京專門學校の高等豫科に入學された。それから私は大學部に進み、山口君は豫科の一期から高等師範部へ進まれ、三十八年七月その國漢文科を首席で卒業された。後での話では、私と同じクラスで一學期だけ莽らしたと云はれるが、申譯無いことには、私の方に其の記憶が無い。とにかく三十五年の春に入學したもの丶大部分は、後に三十九年の七月に卒業して、此中からいろ〳〵特色のある人物が出たが、山口君がやはり其中に數へらるべき一人であつたのは面白いことである。

で、私の意識に登つた最初の山口君は、吾々二人とも暫らく田舍の中學敎師をして、また再び東

京へ舞ひ戻つて來てからのことである。私は四十三年の秋に早稲田中學の教員になつた。翌年山口君が同じ學校へ來られ、それと前後して、もう亡くなられたが、あの横山有策君がアメリカから歸つて、やはり同じ學校へ來られ、この三人がその當時は一番若い新參者で、自然親しく交際することになつた。アメリカのハヴァードから歸りたての横山君は、ひとかどのシェークスピリアンを以て任じて居られたし、山口君は其頃から既に江戸文學について餘程深い造詣があつたやうである。そして吾々三人は、折々落ち合つて、めい〳〵が新らしく手に入れた書物の自慢をしたり、讀んだものゝ紹介をしたり、のどかに語り暮らしたものである。或る時は一緒に芝居を見たり、また名物を食べ歩いたりもした。そして私と山口君とは、其頃までに流行りかけて居た鄉土玩具の蒐集で張り合つたことなどもあつた。

その頃の山口君は、晩年よりは、もつとずつと寡默な、地味な研究家で、毎日たゞこつ〳〵勉强された。吾々のは決して發表のための勉强でないと、口癖のやうに云ひながら、底の知れない谷底へ小石でも投げ込むやうに、限りもなく本を讀んだものである。ある時、自分の研究の一部分だと云つて見せられたものが、德川期の讀み本の書拔きで、フールスキャップで厚さ三四寸もあるのに驚いたことがある。

さうかうするうちに、先づ山口君は高等師範部へ、そして私は文學部へ、中學と兼任で講義に出ることになつた。其所では『つれ〴〵草』の評釋が山口君の仕事であつた。何かもつとほかの題目で、文學部の學生にも山口君の講義を聞かせたい。それが學生のためであり、したがつてまた文學部のためである。とかう思つて、蔭ながら私はいろ〳〵運動をして見た。また横山君のためにも同じ役目を勤めた。しかし其の當時は、所謂自然主義の全盛で、ことに早稻田は、その運動の有力な中心であつたためか、横山君のシェークスピアとか、山口君の江戸文學などが、容易に迎へ入れられる氣色が見えなかつた。私なども和歌や俳句が好きだといふので嗤はれ、雅號を持つといつては嗤はれ、毛筆で字を書いて朱肉の印を捺すのでも嗤はれた。つまり西洋仕込みの自然主義でなければ文學でも美術でも無かつたのである。偶然にも、シェークスピア沒後三百年といふ年に、早稻田でも年來の關係から、一寸とした催が行はれることになり、それを機として横山君は、やう〳〵のことで英文科に因緣が附いて、坪内先生引退以來一時中絶して居た沙翁學を再興されることになつたが、山口君のために路が開けたのは、尙ほその後に、たしか國文科新設の時からであつた。それまで、山口君は毎年同じ『つれ〴〵草』を、くりかへし〳〵隨分長いこと高等師範部で講義して居られた。そのしよざい無さに、毎年いくらかづゝ說明の順序や、比譬の採り方などを變へて見たり、

まあそんな所に氣持の轉換を求めて、せめてもの心遣りにして居る。といふやうな不平を、いつも私はひそかに聞かされて居た。つまり山口君の時代はまだ來なかつたのである。しかし、さういふ云はば不遇の時代にも、斷えず倦むこともなく研究は着々續けられ、晩年に見るやうな大成の素地を作られた。そのうちに文壇の風潮もだん〳〵變り、早稻田の空氣も變つて來た。そして最後に、多くの若い學生の前に、耀くばかりに活躍される山口君の時代が來た。

私と初めて知り合つた頃の山口君は、淺草の松葉町に住んで居られた。そして後に駒形の叔母さんの近所へ越された。私はいつも、あの隅田川の水の上へ作り出したやうな叔母さん所の小意氣な裏座敷へ通されて、川風の吹き入れる夕方まで、いろ〳〵の物語に歸へるのを忘れたものである。其所の生活は隨分長かつた。人の羨やむほどな結婚生活に入られたのも其所であつた。そしてあの大震災のために、全財産とも、全資源とも、全生命とも云ふべき夥しい書物や草稿を燒いて、殆ど身を以て免かれられたのも其所であつた。それからほんのしばらく本鄉の親戚に居られ、それから雜司谷に越して來て、窪田空穗君の隣に住まれることになつた。辨天町は其の後のことである。私はいつも思ふのであるが、二十幾年もひたすら蘊蓄に沒頭した山口君が、急に教壇や著述であの目醒ましい大活躍を始められることになつたについて、原因が三つ四つあるのではないか。第一には、

もはや自國の古い文學を一概につまらぬものにして了ふやうな、馬鹿氣た人が少くなつて、時勢がだいぶよくなつて來たこと。第二には、家庭の主人となられたこと。第三には、これまで大切にして座右に飾り立てゝおかれた數千册の書物が、一夜のうちに無くなつて、それが端的に心機の一轉を促がしたこと。第四には、私のやうな引込み思案の無精者とばかり往き來をして居た人が、文壇の裏も表も知り拔いた窪田君のやうな長老の隣へ、勝手口を並べて住み着くことになり、世間の風が始めて急に身に泌みて來たこと。こんなことであらう。それについて思ひ當ることは、ある時私は、『早稻田中學講義錄』の記者にせがまれて、「人間の修養は一生の仕事だなどと云ふ人もあるが、それは少し云ひ過ぎらしい。修養の後には發表の時がある。鉢植の草花などにしても、細い根がすつかり鉢の中へ廻つて、もうそろ〳〵蕾が見え出して居るのに、まだ肥料をやるやうなことをして居ると、かへつて蕾は黃ばんで遂には落ちてしまふ。せつかくの蕾をだいなしにして了ふやうな肥料のやり方は面白くない。一生の修養もいゝが、こんなことになるとまことにつまらない。」とこんな話を筆記させたことがある。あとでそれを山口君が讀まれたといふことで、大變いゝことを敎へて貰らつたと、いつになく改つた口調で、丁寧に挨拶をされたことがある。これは丁度其頃のことであつた。その頃はそんな平凡な話でも、深く應へる所があつたものと見える。

いよ〳〵發表時代に入られた山口君は、まことに梅櫻桃李一時に發して、應接に遑無からしめる趣があつた。支那の古文學、たとへば詩經や楚辭の類から、唐宋の詩文、元明の小說戲曲、日本では萬葉、源氏から現代に至るまで、山口君の手の及ぶところ、たとへば魔法使の棒の先きが、何物をも花にして、爛漫と咲き出させずにはおかないと云ふ風であつた。昔は默々としてひたすら硏鑽にいそしんで居た「不言齋主人」は、忽ち驚くべき雄辯となり、暢達でしかも濃厚な文體の持主となられた。それ故、最近數年の間に、我が早稻田の學園で、至高の聲望を收められたのも、全く當然であるが、その由つて來るところは、實はかうしたものであつた。しかるに近來の崇拜家を見るに、さうした事には一切おかまひなしに、たゞ目の前に咲き亂れたやうな全盛振りに、氣を奪られて立ちつくす人が多かつた。從つて山口君の一言一行は、其のまゝ復唱され、摸倣される傾向さへ生じた。しかし山口君の晚年の積極的な圓熟振りは、あくまでも青年時代から培養の收穫であるし、由來山口君の思索や論理には、他人の襲用を容さないものがあるから、それだけ切り離して、口眞似をして見たところで、何の意味を成すもので無い。ことに晚年には、折々好んで人目につくやうな服裝をしたり、興に乘じると隨分華やか過ぎるほどの物の言ひ方をされることもあつた。なるほど魔法使ひの棒は、松にも杉にも櫻の花を咲かせるものだと、私などは餘所ながら聊か呆れて居た

こともある。ところがさういふ離れ業ほど、近頃の崇拜者の魂を奪ふのであつた。さういふ種類の崇拜者や追隨者は、決して山口君の素志に副ふもので無いことは云ふまでもない。山口君の閲歷と趣味と學力とを知り拔いて居る私は、かたく之を保證する。實は吾々が初めて交を結んだ頃から屢々言ひ交はしたことは、何うも早稻田出身の文學者は、一つの型にはまつて了ふが、吾々は努めて、もつと異ふ行き方をして見ようといふのであつた。ことによると、こんなことで山口時代の到來が餘計に遲れたのかも知れないが、とにかく此所に山口君の學風の根柢があるのだから、師匠の型や癖を脫ぎ捨てゝかゝるだけの人で無いと、ほんとの御弟子とは云はれない。自分に輪をかけたほどの勉强をして、自分の業績に手入れでもして行くだけの意氣込の無い、いはゞたゞの追隨者や取り卷き連を、山口君も弟子とは呼びたく無いであらう。

おもへば私も、隨分長いおつきあひをしたものであつた。その間のことは、まるで夢のやうであるが、つく〴〵と感じられるものは山口君の溫和な人格である。ことに私に對する終生の友情と好意は、にはかに述べつくすことが出來ない。とかく我がまゝを押し通して、御世話になりつぱなしで、少しも酬いることを知らなかつた私は、ことに思ふところが多い。私が一時とかく患らひがちであつた頃、ひそかに私のために葬儀委員長をつとめる覺悟をして居られたといふことを、あべこ

べに私の方でそれをつとめることになつたその晩に、棺のわきで窪田君から聞かされた。
私は半折に書かれた山口君の筆蹟を一幅持つて居た。私がまだ小石川の豊川町に住んで居る頃、ある日遊びに來て、よもやまの話の末に、忽ち赤い毛氈を布いて私が字を書き出したのを、暫らく見てから、おれにも一つ書かせてくれと、私の大きな筆を持つて、例の『梁塵秘抄』の中の

佛は常に在せど現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉にほのかに夢に見え給ふ

といふ一首を、心ゆくばかりに書かれたもので、恐らく同君一生の傑作であらう。私としては無二の寶物であるが、今度遺族の方々へそのまゝ贈ることにした。その歌の文句のやうに、山口君の姿も、そして横山君の姿も、人のけはひのしない曉にでも、思ひ浮べるよりほかしやうも無いことになつて了つたのは、私にとつて淋しいことである。

昭和七年十二月六日夜

會津八一

本書刊行に就いて

山口剛氏の思ひ懸けない俄なる死去の後、われわれ、友として故人と交つた者、學生として故人の教を受け、引續きその家に出入してゐた者の間に、第一に問題となつた事は、故人の遺稿の整理とその刊行といふ事である。卽ち故人の業績にして、後に留め得られる物は、義務として留めたいといふ事であつた。

蘊蓄するところ極めて深かつた故人ではあるが、その發表は殆ど全部教壇における學生に對してであつて、その他はたまたま講演に臨む程度であつた。文字を通しての發表は、もとより念願としてゐたところであるが、これは後を期して、つとめて避けて、止むを得ない場合のほかは殆どしなかつたかのやうに見えた。故人も後があると思ひ、われわれもひたすらその日を待つてゐたのであつた。その後が、俄にも無いものとなつてしまつたのである。

さうはいふものゝ故人は、その研究の文字としてあるものが相當に多い。これは「年譜」に載せ

てあるかやうに、多方面に亙つてのもので、その悉くを集めると、本書の何倍ともなるものである。

故人は生前その研究を分類し、單行本として刊行したものが數種ある。本書は既に單行本に收めてあるものを、編纂の體系上止むなく一二篇を取つた外、研究團體の發表機關、諸種の雜誌などに發表したのみで、まだ體系の附けられた事のないものを收錄したものである。われわれは編纂するに當つて、第一篇を元祿期の西鶴近松に關するものとし、添ふるに怪異小說の研究をもつてした。第二篇は化政度の草雙紙を中心とした研究を收める事とした。この草雙紙の研究は、故人が他の何よりも先に取纏めて發表したい意志を持つてゐたものであつた。猶、附錄篇として源氏物語に關する研究の二篇を加へたが、これは故人としては捨て難い感を持つてゐたものだらうと思ふが故である　書名を江戸文學研究としたのは、もとよりわれわれの撰んだものである。

故人の先輩五十嵐力氏は、本書に序を下さつた。故人の親友會津八一氏は、故人の人となりをつぶさに傳へ、又題簽をも書かれた。原稿の蒐集に、編輯に、校正に、詳目製作に、又年譜にと、故人の敎を受けた多くの人が、それぞれを分擔して最善を盡した。その人は、後藤興善、中村俊定、暉峻康隆、旭壽雄、北村泰助、村上清文の諸氏である。

本書が刊行されれば、われわれは第一次の義務は終つた事となる。その頃は、故人の一週忌を營

む前後の日となららう。われわれは本書の第一冊を故人の靈前に供へようと思つてゐる。その時は、故人は莞爾としてくれようかと思つて、それを悲しい中の樂しみとしてゐる。
編纂に從つた者に代つて、その次第の大略を書き添へる事とした。

昭和八年九月

窪田空穗

山口剛年譜

明治十七年　三月一日、茨城縣新治郡土浦町十五番屋敷に生る。父常太郎、代言人、母なか、江戸下谷出生。

明治三十年（十四歳）　縣立土浦中學校に第一回生として入學。

明治三十五年（十九歳）　一月二日、父常太郎死去。

九月、早稲田大學高等師範部國漢科に入學。

明治三十八年（二十二歳）　高等師範部卒業後、北海道旭川聯隊に入營、在營三ケ月にして肺尖中耳炎を病み、除隊し、郷里土浦にて病を養ふ。後年耳聾せしは、是の時の中耳炎その因を成す。

明治四十年（二十四歳）　群馬縣立高崎中學校安中分校教諭となる。

明治四十四年（二十八歳）　六月一日、早稲田中學校教諭となる。

大正元年（二十九歳）　九月十日、早稲田大學講師となる。

大正四年（三十二歳）　九月、女子英學塾に就任。

大正七年（三十五歳）　三月三十一日、早稲田中學教諭を辭す。

大正九年（三十七歳）　四月、早稲田高等學院教授となる。

七月、女子英學塾退職。

大正十二年（四十歳）　七月十一日、渡邊暢五女可壽と結婚。

九月一日、淺草區駒形町四の新居にて關東大震災に遭ひ、藏書二萬冊自拓の拓本ノート等凡てを燒失す。

大正十三年（四十一歳）　一月、「江戸文學と都市生活」（早稲田文學パンフレット）上梓。

四月二十日、寄寓先靑山南町より、小石川區雜司ヶ谷町八八に移る。

八月、近代劇大系、支那篇に「桃花扇」を譯出。

十月三日、長女かよ生る。

十一月二十七日、早稲田大學高等師範部教授となり、日本文學史、支那文學史を擔當す。

十二月二十五日、同大學文學部教授となり、江戸文學一般、及び支那文學を講ず。

大正十五年（四十三歳）
（昭和元年）　七月、近代劇大系所載の「桃花扇」に加筆し、「桃花扇傳奇」と改題して春陽堂より上梓。

九月、世界短篇小說大系の「支那篇」に、解說として「支那小說の輪廓」及び漢武內傳以下數篇を譯出す。

同月、日本名著全集の校訂、解說の一部を受持つ。叢書刊行に關係せし初めなり。

昭和二年（四十四歳）アルス文化講座に「日本文學講座」を受持ち、「文學史概說」を執筆す。

昭和三年（四十五歳）一月、「大思想エンサイクロペディア」に、「支那文藝思潮」を執筆。

八月二十八日、長男守出生。

十月十六日、土浦より母を迎へ、同居の爲牛込區辨天町九六に轉居す。

昭和五年（四十七歳）十二月、單行本「斷碑斷章」武藏野書院より上梓。

昭和六年（四十八歳）一月十七日、母なか發病。

七月、世界大思想全集の「支那思想篇」に、解説及び四書、諸子數篇を譯出。

八月五日、次男亙出生。

同月十四日、母死去す。

九月、單行本「西鶴・成美・一茶」武藏野書院より上梓さる。「槻の木」十一月號より「譯西廂記」を執筆、翌年十月號まで引續き掲載さる。

十二月、改造社より「雨月物語」の校訂本を上梓。

昭和七年（四十九歳）四月、漢籍國字解全書中の「春秋左氏傳」第一卷上梓。引續き第二卷脱稿、絶筆となる。

五月、單行本「紙魚文學」三省堂より上梓。

九月二十四日、長女かよを伴ひ、上州磯部に遊び、二十五日歸途發病。

同月二十七日、膽石症と診斷さる。

十月八日午前六時十分、心臟痲痺にて死去。鄕里土浦淨眞寺に葬る。

なほ、號として聾阿彌、聾不言、不言、不言齋などを好んで用ゐたり。

江戸文學研究詳目

第一篇

好色一代男の成立

好色二代男考(その二)

國性爺合戰の紅流しに就いて………………………………………………三三五

虚實皮膜の間

怪異小說研究

第二篇

黄表紙の一特質

黄表紙繪趣向推移の一樣式……三七三

山東京傳と黄表紙……三六九

洒落本の本質……四五一

洒落本展望……四六〇

爲永春水の研究……五五八

江戸小說史上の一事家……五八三

助六の成立と其の變形……六一九

昭和八年十月一日印刷
昭和八年十月八日發行

江戸文學研究

定價金四圓八拾錢

著者　山口剛

發行者　大野孫平
東京市麹町區九段一丁目七番地
（株式會社東京堂代表者）

印刷者　高瀬末吉
東京市牛込區山吹町一九八番地

發行所　株式會社　東京堂
東京市麹町區九段一丁目七番地
振替東京二七〇番
電話九段（代表番號）四一一一番

〔仲村製本〕

文學博士 坪内逍遙著

歌舞伎畫證史話

菊版函入絹布裝
挿圖八十餘面
定價金參圓五拾錢
送料二十二錢

歌舞伎はわが國體に次ぐ世界に於ける**ユーニーク**な存在である。こんな尨雑な、不思議な**舞臺藝術**は世界の他のどこの國にも、どんな時代にもなかつた。歌舞伎は野生のまゝの純然たる**民衆藝術**として、連綿三百年の間些かの中斷もなしに同じ系統を追つて進化し、而も縱横に發展した。で西洋諸國が前後千何百年もかゝつて、めい／＼で分擔して、意識的努力の結果、やつと獲得した劇的要素の有る限りが歌舞伎には自然に、半無意識的に備はつてゐる。それだけに、其本質も、其歴史も複雜で、やゝこしくて、到底、**言語や文章**だけで之を釋明することは容易でない。況んや**簡單に具體的**に敍說する事をやである。著者博士夙に此點に留意せられ、幸ひにも傳存してゐる種々の**古畫を利用し、一瞥下に三百年の進化**を歌舞伎劇場の内外に亙つて、備さに看取せしむべく工夫された。畫證史話と題された所以である。而して其畫證は外國劇場のそれと比較にさへも及んでゐる。劇に關する研究書は内外とも近來頓に增加しつゝあるが、本著の如きは前例が無い。**插畫八十餘圖。**